

Takizawa, Bakin
Kinsesetsu bishonen roku



近世説美少年録

下巻

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

近世説美少年録 下巻 目録

新局玉石童子訓（近世説美少年録續編）

卷之三十

近世說美少年錄續編（新局玉石童子訓）

東都　曲亭主人口授編次

卷之三上册

第三十五回

陰德陽報如如來柩を導く
積善天感落葉其實を賜ふ

再說、十三屋九四郎は、當日杜四郎成勝に、絕て久しき治比の信、弘元風濕病臥の事、且教訓の言の顚末、叉贈れし金子の事、音就基綱の上さへに、言詳に傳示して、弘元の授たる、一書を取出て遞與しょかば、杜四郎は今始て知る、父の疾病嫡母の逝去、大兄興元親子の早逝、聞事每に胸潰れて、漫に涙の進むを覺ず、其書を屢承戴きて、歎息しつゝ且いふやう、思ひきや治比にも、不幸かくの如くならんとは。斯いはゞ女々しくて、啣言には似たれども、俺薄命の致す所歟。髫歳にして實母刀自を、喪ひしより幾程もなく、外祖父母さへ世を去て、今は安藝なる親弟兄に、會まくほしとのみ思ひしに、大兄も命長からず。況や大人は疾病に、

臥給ひぬと聞くからに、翅なき身を怨るのみ。縱去向は幾百里、雲と水とに隔るとも、一葉の舟に便り求めて、瞬間に彼御許へ、參りて拜見せずもあらば、後に悔しく思ふとも、何をもて及んや。然は然ながらいかにせん、御教訓の重かるに、今一介の功なくて、那里へは參りがたかり、悲しきかな。と聲立て、泣ぬは泣くに彌增たる、孝子の心思ひ汲、九四郎さこそと慰めて、其御歎きは理りながら、大人の欠安の大病ならねば、療藥必經驗ありて、竟には瘥り給はなん。路費の金さへ賜りたるに、其義は權且思ひ復して、柴六を將て東の方に、武者修行し給はゞ、大人の教に悖る事なく、後の見參安かるべし。といふに乙女も云云と、詞を添て諫れば、四郎は僅に點頭て、現に愆ぬ。行も從も、親の教に從ふを、孝子の道といはれんのみ。這一通は、俺兄の代筆にて、大人の賜書と承れば、今見參の心地ぞする。いで〳〵。といひつゝも、又其一書を戴きて、封皮を拆まくしぬる折から、跫然として外面より、這方を投て來ぬる者あり。と見れば、一個の老女の、年齡は六十に近くて、手袋脛衣巳の時なる、夏衣ながら行裝は、貧しからざる打扮にて、繻子の前帶甚短なる、副帶さへに精悍しく、後方に吊せし行轎子の、轎夫兩名從ふて、十三屋の店前へ、來つゝ暖簾を瞻仰見て、這里なりけり、と單領く。老女は莞爾に揖讓して、率爾ながら問侍らん、九四郎主は宿所に在すや。といふを四郎

は見かへりて、折丂かり、と父の書を、开が儘に懷へ、夾めて急に身を起しつゝ、避て奥へぞ退りける。當下乙藝は端近く、件の老女を立迎へて、那里より歟知らず侍れど、訪せ給ふ九四郎は、西へ旅宿の日數歷て、今日かへり來て宿所に在り。櫛の御用や候。と問復されて、嬉しやな、饒給へ。と徐やかに、草履を其里に脫措て、黍登れば九四郎も、訝りながら膝を找めて、訪せ給ふ屋主人、十三屋九四郎は、咱等にこそ候なれ。什麼那里より來ましたる。と訝り問へば點頭て、まだ面善にも侍らぬに、恁地狎々しげなるを、こゝろ得がたく思れん。奴家は、曩に這御宿所に、在りと聞えし大和の旅客、末朱之介に由緣ある、上市なる落葉に侍り。と名告に驚く九四郎乙藝、思ひがけなや、开はよくこそ。其里はあまりに端近にて、御話說を听侍るに宜しからず。且這方へと右ひだりより、上坐へ請居しつゝ、二枚折なる小屛風を、建て片象る客儲に、乙藝は店舖の火盤なる、眞鍮藥罐捕試て、溫茶汲拿る第茶碗、茶托尋てうち載て、卒とばかりに薦れば、受戴きつゝ傍に置て、原來御身は、九四郎主の御對偶、乙藝刀自におはする歟。といはれて乙藝はこゝろを得ず、乙藝は卽奴家に侍り。幾の程にか知られけん、故こそあらめ。と訝れば、九四郎も倶にいふやう、洒家は今朝旅より還りて、人傳に聞し御身の事、彼朱刀禰を幾番歟、救ひ給ひし慈愛良善、及びがたし、と思ひしのみ。今日俺家に來まさん

とは、神ならぬ身の知らざりき。といへば落葉は又點頭て、开は其該で侍るかし。奴家なりとて這頭まで、出て來べうは思はざりしに、近曾御身の宿し給ひたる、朱之介は俺女壻ながら、いふかひもなき浮薄の本性、そを知らざるにあらねども、已がたき情由ありて、當春東西を買せんとて、京師のかたに遣しゝに、夏闌るまでかへり來ず、遊興の癖又起りて、那金子をしもなごりなく、喪ひやしつらん、と猜しゝのみにて大和なる、家にも慨しきこと多く、うち歎きてのみ在りける程に、いぬる日浪速の陣館より、御使を下されて、猛可に奴家を召せ給ひぬ。思ひがけなきことなれば、うち驚きつゝ承るに、朱之介の一義なり。國守にも告られけん、守よりも亦御下知あれば、等一等ある時誼には侍らず。留守には故老隣人の、老實なるに憑在らせて、其次の日の早旦に、村長刀禰に倶せられて、上市の家を立出しより、一日二日と旅宿をしつゝ、炎暑に堪ぬ今日午の時候、倶に浪速に來にければ、軈て陣館へ參上りしを、局の内へ召よせられて、頭の殿いふ職善なる御出坐在り、有司に讀せて聞せ給ふ、朱之介が越度の條々、其顛末を創て知りぬ。朱之介は這十三屋を、宿にして在りし日に、今樣と喚做たる、娼妓の自殺に事起りて、那身はさらなり、宿の内室乙藝刀自さへ乾兒達、兩三名繫累せられて、久しく獄舍に繫れしに、九四郎主の舍弟なる、勇少年の挣きにて、鐵屑と賊いふ騙賊の、手下の夜盗を

兩名まで、搦捕給ひしかば、其強盗等の招了にて、今様が自殺も知られ、又朱之介も九四郎主も、鐵屑が支黨ならぬ、證も其里に達しかば、頭の御疑稍解て、刀自と兩個の乾兒達は、今朝共侶に赦にあふて、宿所に還り給ひし事、幵が中に朱之介は、舊惡多かる事までも、這時既に聞えしかば、更に罪を被りて、大和へは返されず、背を一百鞭せて、東へ追放せられし事まで、其條々に備なりき。有司達讀果る時、頭の殿宣ふやう、落葉儞が慈善なる、俺間諜兒をもて、豫具に聞知りたれば、儞を召よせし事別義にあらず。曩に朱之介が盤纒なりとて、九四郎に預けしといふ、百九十五金は、聞くに朱之介が有財ならず。儞が沙金と唐布を買せんとて。朱之介に遞與たる、金子なる故に沒官せず、儞に返し取するなり。但し其金は、故二百兩なりけるを、五兩は朱之介が路次の行旅に、使減したりといひにき。這義をもよく存ぜよ。とみづから仰渡させて、件の金子を賜りしかば、感まつるも畏さに、一霎時退りて長刀爾の、加印の承書をまるらせしかば、事立地に着落して、身の暇を賜りにき。於是初て聞知りける、刀自達三名の寃屈の罪は、俺女壻朱之介所以なりしに、俺身料らず這地に來ながら、宿所を訪ふて勸解もせず、朱之介が房錢の、債もあらんを償はで、大和へ還りいなれんや、と思ふ心を村長刀爾に、告て浪速に宿投て、一霎時這身の暇を請ふて、吊せし行轎にうち乘りつ、方僅這頭へ來て

聞けば、九四郎主は今朝安藝より、かへり來ませしといふ人の誨に、いよ〳〵便歹からねば、さてこそ推參し侍りにき。と告る詞の淀なきに、流るゝ汗も納れつべき、夕風よりも憑しく、思ふ乙藝は應をしつゝ、僅に聞知る御身の誠心、違ざりしも不思議の對面、俺們三人は罪饒されて、世間廣くなりけるに、那人ばかり追放されて、往方も知らずなり給ひしを、心苦しく思ひしのみ。救ふべくもあらざりき。といふを九四郎推禁めて、落葉が實義を謝していふやう、初俺、朱刀禰を、家に留めしは故ある事にて、那人は俺隣なる、岸松屋を宿にせんとて、左界より來にけるに、其岸松屋は他鄕へ徙りて、這地にあらず做しかば、左界の人と約束したる、宿違ひては便なし、といはるゝにうちも置れず、其隣なる故をもて、只得俺家に留めしなり。剩又那百九十五金は、酒家安藝へ赴く折、朱刀禰より預しを、乙藝に藏置せしに、幾程もなく禍事起りて、件の金子を陣館へ、召されて出處を鞫問あり。故の主なればとて、御身に返し賜りしは、是切てものことながら、俺豈今さら那人の、房錢を欲せんや。皆是時の不幸にて、乙藝と六市四摠等を、一旦連累せられたりとて、怨むべきことにはあらず。那人の心術は、好もあれ歹もあれ、俺は俺誠心をもて、權且家に留めしに、無慙や、那人追放せられて、鐚一文の盤纏もなきを、救ずば俠者にあらず、と思ひにければ俺弟、柰六をもて金五兩を、贈らせん

とて赶せたり。なれども時の移しかば、及べきや否を知らず。又那二賊を生拘しより、遂に疑獄を解きし挊きは、弟柒六の功のみならず、別に一個の勇少年あり。开は杜四郎成勝と喚做て、柒六と共侶に、小松の孟林寺に寓居しつ、嚮に訪來て奥に在り。といひつゝ外面瞻仰見て、日ははや沒て黄昏たり、乙藝行燈を出さずや。喃大和の娩御、いふべき事も聞べき事も、迭に猶多かるに、今宵は這里に留らせ給へ。といふに乙藝も共侶に、留守の程なる禍事にて、櫛工等も炊妾さへ、一個もあらず倣りしかば、然せる欵待は得ならねども、先夕饌をまゐらせん。陝くはあれど納戸にて、夜と共に語り給ひねかし。といひつゝ立を掖歇て、否、剛才來ぬる路にて、物喫たれば欲からず。然らでもうち續く憂事にて、痞はいまに治らず。自由には侍れども、夕風のよく吹入るゝ、這里にこの儘置れんこそ、こよなき管待なるべけれ。といふに九四郎諾ひて、爾らば兩個の轎夫は、背門に召容て酒飲せんず。といふを落葉は聞あへず、否、他等は浪速の宿所へ返して、今宵の情由を村長刀禰に、告ずば不便に侍るべし。といひつゝやをら身を起しつゝ、店頭へ立出て、こや〳〵と喚よすれば、店舗の傍に行轎を、舁居て主を俟、件の兩個の轎奴は、應と答て來にけるを、落葉は猶も近づけて、奴家は這里に所要あり、一夜明して明日いなん。和郎達は浪速の宿へ、退りて由を長刀禰に、告て明日又朝夙く、奴家を迎に來よ

かし。と詞急迫しく吩咐れば、九四郎も勞ひて、和郎達大義にあらんずらん。酒菜はなけれど酒はあり。背門より入りて喫ずや。といふを轎奴等は聞あへず、否沙量なれば欲からず、飯も剛才賜りぬ。卒然らば阿懐さま、明日又迎にまゐりてん。と告別して行轎を、抬起して浪速なる、歇店を投て退りける。當下九四郎は外に出て、暖簾卸しつ推疊て、箱招牌にうち乘て、幷が盡店舗の片隅へ、遽しく拿入れて、戸を繰下す兩三枚、都ては閉ぬ夏の夜の、風も馳走の一蒸熱。乙藝は行燈引提來て、碟子に裝做す葛の粉餅に、掛し砂糖は夏の霜、心も解けし欵待態に、煎茶の出飥汲更て、何はなけれど是なりとも、御口取に、と薦るを、落葉は受て戴きて、こはうち措せ給はずて、御阨會に做り侍り。這葛餅子を賜るだに、吉野に近き俺家の、事をし思ひ出られて、常言にいふ憂者は、逆旅にこそ。と涙嚈む、庖湢の蚊遣煙り來て、人を泣する袖の露、夜の席の蕭然に、閑談時を移すめり。姑且して九四郎は、坐して落葉にうち向ひて、前にもいひし事ながら、杜四郎と柒六が、御身の上を聞知りしは、いかで上市へ赴きて、那百九十五兩の、金子の出處來歷を、問も質して自他一件の、疑獄を解ん爲なりき。爾程に、孟林寺に新參なる、柹八と喚做す奴隸の、故鄉は上市なりと聞えしかば、他に就て朱刀瓣の、出處の虛實を問しより、那人の放蕩無頼、御身の慈善德義まで、具に聞知ることを得て、倶に大和へ

起行せんとて、准備をしける其夜艾、疑獄を解くべき照据を得たれば、大和へゆかず做りけるに、反て御身に訪るゝは、縁ある所以歟、こも奇なり。といふに落葉は胆向ふ、心の裏に思ふ事、うち出て爾いへばえに、噐越す波濤歟、摑歇難し、涙に答口籠りけり。有恁る折から竊歩しつゝ、這店頭へ來る者あり。是則別人ならず、末朱之介晴賢なり。他は舊惡の故をもて、嚮に陣館の雜兵二三名に、追立られ將て去られて、則浪速の串明亭にて、开が儘に追放されて、雜兵等はかへり去りけり。爾程に朱之介は、罪解屍人を免れたれども、既に追放の身と做りて、僅に錢一緡の、盤纏だにあることなければ、進退其里に谷りて、ゆきも得やらず路傍なる、樹下に立よりて、跪居て肚裏に思ふやう、曩には俺冤屈の罪にて、宿の老婆乾兒等さへ、一旦獄舍に繋れたれども、俺做せる孽にあらず。况や他等は饒されて、異なく家に返されたれば、俺を憐愍思はずとも、怨むべき事にはあらず。九四郎は安藝よりして、いまだかへり來ずもあれ、老婆乙藝に悲み請ふて、錢まれ金まれ借らばや、と尋思をしつゝ路を易て、執て返しつ浪速を過りて、住吉の里に來ぬる程に、既にして日は暮けり。當下朱之介は、甲夜闇に紛れつゝ、十三屋の店頭に潛來て、閉遺したる戸の間より、家内の光景を覘ふに、思はざりける九四郎は、何の程にかかへり來にけん、乙藝と倶に店舖に在り。奇きは又只是のみならで、大和なる落葉


憂に下りて
禪師杣木の
家に光臨さす
さとおや


さと人
さと人
さと人
さと人
さと人

さへ、主人夫婦にうち對ひて、打譚ふてありしかば、吐嗟、とばかり胆潰れて、夢ならずや、と思ふのみ。内に入るべき便宜ならねば、悄と退きて呼門せず、猶も容子を知まく欲さに、這店舗の傍なる、拾簀子を悄地に下して、柱に身を倚せ尻うち掛て、覆面しつ耳を澄して、主客うち相譚を、竊聞してぞ居たりける。裏面には是を知るよしもなく、落葉は屢嗟嘆して、九四郎に答るやう、人にして人ならぬ、朱之介の禍事故に、尚年少き刀禰達の、近くもあらぬ俺家を、訪んとまで准備ありけん、心操こそ憑しけれ。斯いはば暗き恥を、明々地に做すに似たれど、朱之介の事はしも、柿八とやらが話説にて、知られたらば隠も要なし。他は俺姪斧柄の必死を、拯ひて妖怪を、對治したる者なりき。且奴家が伊勢の阿濃の津に、遣嫁して、商賈の妻なりし時、其家痛く衰果て、夫婦離別しける折、其年僅に五歳なる、獨女兒に泣別して、舊里なれば大和なる、兄杣木斧七の、家に歇りて在りし程、斧七夫婦は時疫にて、共倶に身故りつ、遺るは姪の斧柄のみ。其比は倘稚かりしを、稍守育長と成して、好女壻欲得と徼る折から、朱之介が斧柄を拯ひし、恩義あるのみならず、他は俺故の良人の、後妻に生たる、獨子なりき、と聞えしかば、新恩舊緣兩ながら、深くも感じ思ふの故に、漫に斧柄を妻せしより、斧柄は遂に有身て、五月に做し今茲の春、朱之介に東西買せんとて、京へ遣したりけるに、久しくなるま

でかへり來ず、信だにもあることなければ、斧柄はそれを苦に病故にや、いまだ臨月には做らざるに、猛可に産の紐解きて、八月子を生たりき。其生しは男兒にて、然しも恙はなけれども、只痛しきは斧柄の薄命、其夜急癥にて身故りにき。年來守も育たる、姪にはあれど實子に、異ならず思ふ老が身の、頼む樹下に雨漏りて、袖のみ濡す憂事の、憂に堪ねば共侶に、死ばやとうち歎きつゝ、一日二日と辨よしもなく、安葬もせでありける程に、思ひがけなき如々來樣の、六田の菴を出まして、這頭を劵縁し給ふとて、人多く俺門に、立集ふと聞えしかば、慌惑ひつ走り出て、禪師樣の御法衣の、袖に携りつ斧柄が爲に、廻向を願ひまつりしかば、姑且錫を駐めつゝ、俺家にのみ立より給ひて、斧柄が柩に廻向あり。且奴家に諭給ふやう、約莫生とし活る物、那生あれば這死あり、喪ざれば得ることなし。何をか哀み何をか歎ん。俺今無量の法語あり、善女謹で聽聞せよ。汝はさらなり死しける女兒も、其心貞實にて、惡心惡行なしといへども、不幸かくの如くなるは、倶に前世の業報のみ。今この惡報あらざれば、死して清果を得べき事かたかり。又汝の女壻、末朱之介の如きは、原是邪物の後の身なり。縁に觸事に感じて、斧柄が必死を拯ひしは、是孽の寓る所。其拯ひしは拯ふにあらで、反て是を殺すなり。然るを汝が疎忽なる、初對面より婿做の、約束して悔もせず、夙く斧柄を妻せて、他が邪淫に

喪ひたる、主君の財貨を喪はせじとて、償得させしは惑ひのみ。慾に義に仗まく欲して、邪物の悪を肥しゝかば、其益なきを今こそ知らめ。然ば朱之介に齎したる、二百金も空花にて、生れし小兒も孫ならぬを、後に悟るよしあらん。然ばとて世を果敢なみて、女僧に做らまく欲するとも、這家いよ〳〵禍に做りて、今は本意を遂がたかり。好も歹きも自然に任して、哀むべからず歎くべからず。只愛惜の念を斷て、斧柄がことを忘れよ、と教化一入叮嚀にて、いまだ告ざるに俺家に、ありにし事を見る如く、知せ給ひし善智識の、法語に驚き、且畏みて、合掌しつゝ稟すやう、罪深かりし迷の雲も、御教化によりて霽侍り。然るにても朱之介に、齎したる金二裹は、斧柄が厄を救れたりし、報恩の其一種なれば、他又遊興淫樂に、使失ひたればとて、惜むに足らず侍れども、他が東の主君より、仰を承てもて來にける、唐布百反と、沙金五百兩なりと聞しのみ、开は禪師に乞まつる、造佛の爲なりしを、他淫樂に使捨て、殘るは沙金二十一包、留めて俺家に在り。他は倘那儘に、這地へかへらず做りもせば、件の沙金を遣かたなし。其折には禪師樣、いかで受させ給ひね。と願へば頭をうち掉て、造佛は是有漏の縁、扇谷の情願を、許さざりしは這故なり。なれども汝が深信切義、賞すべきよしあれば、其沙金は柩に乘て、斧柄が亡骸と倶に瘞めよ。其金後に世に見れて、爲に佛像を作る者あらん。然ば扇

谷朝興の、夙願を果すに足るべし。必な疑ひそ。と諭しつ料紙硯を求めて、則斧柄が法名を、梅雪信女と命じ給ひつ。件の沙金を出させて、財嚢の隨に柩の上へ、紐もて結付させて、又教給ふやう、俺思ふ旨あれば、這亡骸は六田川の、邊へ抬げ出させて、俺庵近く葬るべし。是も緣あることなりかし、といひつゝ四下を見かへり給ふに、里の老弱百十數名、禪師を渇仰しぬる者、倶に這坐席へ稠入りて、圍繞して在りしかば、禪師列々看亘て、衆人目今俺爲に、這柩を抬げ出して、六田川の邊に葬れ。疾々せよ。といそがし給へば、里人歡び承ざる者なく、惴雄の壯佼五六名、合肩入れて抬げ出せる、柩に從ふ里の老弱、皆後れじとて外に立ば、禪師は錫杖衝鳴して、是を導き給ひけり。憶りなかりし野邊送に、奴家はさらなり一家兒なる、炊婦も鍼妾も、且呆れ且畏みて門方に立て目送る程に、數珠もて拜むも多かりけり。誠に不測の佛緣なる哉。如々來樣を信ずる者も、腹黑き毎は、十遍百遍詣るとも、拜面を饒し給はず、と豫聞たる事しもあるに、斧柄が不幸、死亡の折、招ざるに出まして、聚合し里の衆人に、柩を舁せて將て去りて、六田川の上なる、御庵の傍に、安葬せ給へるは、過世ありける洪福にて、歎きの中の歡びなり。最淡々しき女子の淺智に、量知べきよしもなき、活菩薩の教化に任せて、形貌は有髮の優婆姨なりとも、寧煩惱の絆を斷て、心を安養極樂淨土に、置ば何ぞ措ざらん、

と思ひ復しつ歎きを禁て、今は斧柄が像見なる、赤子の爲に乳を討るに、片山里は產の所用に、孀母を徵め易からず。折から新町なる敗鉄經紀、釘六の老婆も、二十日已前に子を生たるに、其赤子は亡なりて、懷寂しきのみならず、乳房盈て堪がたきに、雛鵑を索むると聞えしかば、先當分の凌の爲に、斧柄が赤子の乳名を、玉五郎と命けてぞ、釘六許遣して、其老婆に乳育すれば、聊心は安堵たり。是よりの後、梅雪信女の、爲に香を燒花を賻けて、看經に日を送る程に、まだ三七日にはならざりける、當日浪速の陣館より、召るゝと聞えしかば、うち驚きつゝ喪服を脫て、這地に來つる事の顚末、長々しくて飽れやすらん。要なき身上話說にこそ。といひ果て歎息す。九四郎乙藝は共侶に、聞くに哀しき人の家の、難を今さら慰難て、屢嗟嘆したりける。當下落葉は、項に掛たる、紐を延しつ財嚢を出して、主人夫婦に示していふやう、前にも告たる事ながら、這箇金二百兩は、朱之介の爲に調達して、他に遞與しゝ其が內中を、五兩歟他は使ひしのみ。殘る一百九十五金は、這財嚢の中にあり。今日陣館より賜りて、故へ復し金子ながら、嬉しくも思はぬに、もてかへらんは心似ず。いはでも知るき事ながら、朱之介が釀したる、禍鬼に拘つらひて、乙藝刀自さへ乾兒達さへ、疑獄に繫れ給ひしかば、御活業さへ禁められたる、東西の沒匁の多かりけん。然るを朱之介を憎みもせで、他に盤纏を取せん

とて、賢弟をもて赶せ給ひし、九四郎主の任俠の、有がたきまで忝きに、些の報をせずもあらば、這地へ來つる甲斐はなし。願ふは御夫婦這金子を、受納て是までの、費に充させ給へかし。といひつゝ財囊を拿抗て、遞與まく欲するを、九四郎は手にだに觸ず、推戻して且いふやう、开は思ひがけもなき、其金受て何にせん。御身こそ朱刀禰に、幾層の鈔を沒れながら、那人都て事を得遂ず。开が上に令愛の、不幸の沒匁もさぞあらん。其は其儘もてかへりて、佛事に用ひ給ひね。と推辭めば乙藝も倶にいふやう、如々來樣の事はしも、這里にも人のいふ者あり。其活佛の引接を、承給ひしは御息女樣の、孝順貞義と御身の慈善の、故にこそあらんずらめ。其に及ぶべくはあらねども、九四郎が任俠なる、人に東西を施しはすれ、然もなき故に人さまより、東西を受る事は侍らず。开を云云と強給ふは、悍りながら人を知り給はぬ、故にこそ侍らめ。と辭ふを落葉は推復して、そは其該で侍れども、目今いひし情由なれば、枉て受させ給ひね。と又薦るを毫も聞かぬ、夫婦齊一固辭のみ、遣りつ返しつ果しなければ、落葉は只得件の財囊を、开が儘側に閣きて、憶ず落る感涙を、袖に搵めて又いふやう、思ふに增て誠ある、御夫婦の方正さに、負て本意なく侍るかし。斯いはば心裏恥しき、不問語に侍れども、這金子なりとて有餘、游財にはあらずかし。朱之介を世に出さまく、思ふばかりに内百兩は、他借して他に遞

與しゝに、そも亦空に做りしかば、切て御身御夫婦と、舍弟達二柱の、恩義に報ひまつらん、と思ふばかりの寸志に侍れど、其も叶れぬを爭何はせん。知せ給はぬことながら、奴家が伊勢の津に在りし時、故之良人木偶介は、家をも子をも忘るゝまでに、色に惑ひて錢財を、湯水の如く使捨たる、其後妻に生せしといふ、朱之介も父に似て、いふかひなきこそ悲しけれ。是に就ても思ひ出る、奴家が實の單女兒、乙柚は僅に五歲の時、生別して二十稔有餘、絕て信なかりしに、近曾朱之介が話說にて、創めて聞知る他が薄命、名を小夏と喚更られて、繼母の手に養れ、華の洛陽も身は杪枯の、果敢なき世渡りして在りしに、親は京師に住托けん、乙柚が九歲なりし秋、男女兩個の子を携て、夫婦鎌倉へ赴く道中、摺鉢嶺を踰る折、山賊に瞥見て、木偶介主は命を喪ひ、乙柚の小夏は谷底へ、投棄られて、陽炎の、命危しく做りけん、と聞にし折は胸潰れて、哀さ涯りなかりける。遮莫其折朱之介は、年三の秋なれば、事の光景を覺ねども、年闌て母親阿夏の、夜話に聞しとて、告られたれば實なるべし。其哀悼に袖濡て、まだ乾かぬに斧柄すら、命短く子をのみ遺して、先だちたれば千萬の、金ありとても何にせん。寄處なき這老の身を、慰めはせで、御夫婦達、情強や。とばかりに、憶ず財嚢を投捨て、よゝと泣つゝ伏沈めば、九四郎は手を叉きて、默然たる其が程に、乙鐵は淚雨の如く、同じ浮世の笠

宿り、夕立ッ天にあらねども、曇や胸に思ふ事、いはまくすれど悲しさと、歡ばしさに濡る袖を、絞もあへず身を倚せて、落葉が背を拊下し、又拊下して、喃御懐樣、今宣せし絆の趣、俺身に思ひ合するよしあり。御身の故の對偶は、伊勢の阿濃なる町人にて、木偶介主と宣ひし、其屋號は末松にて、乙柚の小夏は奴家に侍り。と名告るに落葉は驚きながら、頭を抬げて左見右見て、原來其方は俺女兒、乙柚なりし歟。しかれども、他は九歳なりし時、冤家の爲に千仭の谷へ、投落されしと聞たるに、世に存命てあるべしや。こゝろ得がたし。と訝れば、九四郎然こそ、と膝を找めて、其疑ひは理りなり。俺身總角なりし比、二親に聞しことあり。言多くとも詳に、告て御身の惑ひを解ん。抑俺父なりける、峯張九四藏中原通世は、原是信濃の一諸侯、木曾氏の家臣なりしに、壯年の時故ありて、致仕して宅眷を携て、浪速に移來て卜居しつ、兵法武藝を人に教て、左も右もしてありける程に、永正九年八月の時候、舊里に要事ありて、一僕を將て峯張の、岐岨路に赴たりけるに、其比揚鍼嶺には、折々山賊の禍ありと聞えしかば、素より武藝に事足る兀自、謹愼其身を愛する故に、敢危きに近づかず、其往く折にも還るさにも、件の高嶺を上下せず、案内知つたる上なれば、樵夫のみ通ふといふ、山脚路に分入りて、荆棘を踏啓、溪水を涉しつゝ、辛くしてかへり來ぬる程に、日は既に傾きし比、前面より來ぬ

る一個の旅僧ありけり。頭には檜笠を戴きて、背に駝做す網代の笈、手に錫杖を携たる、其形容飄々然として、面色も亦凡ならず。蔦の細路相讓んとて、行過るを俟程に、件の行僧步を停めて、俺父に向ひていふやう、這里より西なる溪松の邊に、賊難危窮の童女あり。他は和殿親子に過世ありて、必娘に做るべき者ぞ。今勉て那死を救はば、後に幸多からん。是を用ひて死を起しね。と說示しつゝ懷より、拿出す一貼の、藥を與て答を俟ず、飄然として行過けり。思ひがけなきこととなれば、俺父は奇異の思ひを做すのみ。然ばとて疑はず、行こと一町有餘にして、と見れば老たる跂松の、溪水の上に指出たる、木扠に夾れて、死したる如き一個の童女あり。是なるべし、と思ふにぞ、作當と共侶に、脛の濡るゝを厭ず、やうやくに近づきて、見れば那身に痍はなし。やをら推揚て抱拿つゝ、舊の處へ退きて、草を折布き臥しめて、先四下を見かへるに、其頭に冤家のあることとなし。又其童女をよく見るに、年は八か九にぞあるべからん。敗たる楮の夾衣を壺折て、藍染なる仁田山紬の帶の、巾時ばかりなるを、端短に結做して、手には肱被足には脚絆、小形の草鞋を穿たれば、旅ゆく賤女なるべしと猜せらる。形貌こそ斯窶れたれ、容顏醜からざれば、痛ましさも一入にて、其脈を診に、絕たる如く有に似たり。軈て件の散藥を、口中に挿入れて、溪水を掬て抹下しつ。主僕力を勠せて勦る程に、

件の童女は稍息出て、死ざることを得たれども、ものいふまでに至ねば、只得作當に搭駝せて、其夜歇店に就てこそ、創て聞知る他が素生と、名を小夏と喚れたる、事云々なりといへるのみ。父も亦繼母も、稚き弟も山豪に、屠られて命をや殞しけん、恙あらずや知らねども、外に親族とてもなき、憂身を憐愍給ひね。と泣口說れて俺父は、いよ〳〵捨がたき思ひあり。尙見る由あらん歟とて、他が護身嚢を撿するに、臍帶あれども父母の名を寫さず、この餘は皇大神宮の雛太麻と、除厄弘法大師の御影あり。こゝに至て俺父は、蹴然として思ふやう、原來那行僧は、必大師の化現にて、伊勢の御神の擁護もあるべし。そを疑はば不仁に似たり、と深念をしつゝ丌が儘に、童女を浪速へ將てかへりて、俺母に告しかば、母も慈善の本性なれば、相憐て乙藝と名づけて、手習縫刺何くれとなく、教導き愛慈む、恩愛は俺女兒なりし、億祿にしも異ならず。恁而二親世を去て後、遺言なればそが儘に、乙藝を妻にしつるにこそ。と一五一十を說示せば、乙藝は僅に淚を歇めつ、肌膚護の嚢を開きて、拿出す臍帶の、包紙を拊伸して、やよ喃奶々、這紙に、永正元年、甲子の冬、十一月三日の誕生、乙柚が臍帶とある幾文字は、御身の手迹で侍るべし。相別しは五歳の春にて、生平には奶さまと喚しのみ、實の御名も顏色も、いかにありけん得も覺ず。況御身の親里は、伊勢歟大和歟知ざれば、年七八に做し比、丌

を爹々に問しかど、忌よしありけん實を告ず。汝が實の母親は、相別し比身故りにき。歼を問ふこと歟。と叱られて、哀しかりしに思ひきや、父は身を刺掏鍼の、嶺を死天の山家に、亡れ給ひしを、知らで過せし十九年、環會日のあらん歟とて、空憑して薪樵る、鎌倉へゆく人あれば、言傳遣し甲斐なさよ。其存亡は反覆にて、世になき人と思ひぬる、奶々は今も恙なく、過世吉野に程遠からぬ、上市の里を出まして、料らず名告會給ふ。這歡びに就て亦、最淺ましきはいぬる比、這里に宿せし朱之介は、異母なる俺弟、珠之介なりけるを、迭に知らず知よしもなく、倶に獄舍に繫れし、身は免れてかへり來つ、他のみ單追放の、往方も知らずなりけるは、現に善惡の報にこそ、と思へど不便に侍るかし。といふに落葉は泉儆す、涙に聲は口籠りて、現に理りなり俺も亦、久後憑しく思ひたる、斧柄は反て短命にて、死せりと聞し其方は異なく、環會ける歡びは、現か夢か幻歟、量知られぬ生死の、海と山迹に老樹の櫻、枯たる枝に開く花の、一重は疎八重九歲の、秋より受し屋主の、再生の恩を忘給ふな。と慰めつ慰られて、迭に手を拿拿れつゝ、向上直下す兩對の、背たるを今ぞ心惡く、目鼻貌さへ黑子まで、現に爭れぬ親子の照据、鬼神不測の再會を、倶に歡ぶ九四郎も、只管感嘆したりける。

續編 巻之三下册

第三十六回

善悪少年月下に雌雄を爭ふ
多財を復して楽六郎多財を喪ふ

前回十三屋九四郎が店舗の段、落葉乙藝が會話に、いまだ言を罄さねば、重てこゝに文を續て、却說、登時末朱之介は、野干玉の夜に紛れて、久しく外面に在り。店の柱に身を倚て、旣に竊聞したりける、落葉乙藝親子の再會、其過去來の話說に、胆を潰しつ且呆れて、肚裏に思ふやう、誰か知るべき那乙藝は、俺も亦豫より、那名ばかりを聞知りたる、異母にて女兒品なる、小夏なりしは最奇なり。然では大和の阿懐も、實の女兒に心引れて、主張始に同じからずば、俺今阿容々々と恥を忍びて、裏面に入りて哀乞とも、那金一百九十五兩を、遺なく俺には返すべからず。僅に五兩十兩の、仂財を貰んとて、慭に面出して、脂取らるゝ長談義を、うち聞んは鈍ましくて、そは智惠なき者に似たり。又前には九四郎が、金五兩を楽六に齎して、俺を赶せたりといひしかど、俺這里へ來ぬる途にて、遭ざりければ开も益なし。非如今楽六が、

折よくかへり來ぬるとも、多寡の知れたる五兩金、往方定めぬ俺逆旅の、路費に足べくもあらず。所詮窘き人を頼みて、其懐を當にせんより、几自那財囊を搔攫ひて、走らば西まれ東まれ、世を渡るに本錢あり。噫嘻爾なり、と歹人の、恩を思はぬ非義の本性、計較既に定りて、悄地に四下を見かへるに、這時十八日の月出て、外面は稍明かるに、と見れば揚簀子の邊に、朝夕暖簾を上下する、鈎竿の長きあり、是究竟と拿揚て、閉遺したる戶の間より、裏面の光景を覘ふに、落葉乙藝は泣つ笑ひつ、過去來の物語に、外を見かへる暇なく、九四郎も亦愀然と眼を閉手を叉きて、其會話を、うち聞て在りかしば、朱之介は便を得たり、とうち含笑つゝ鈎竿を、徐々と刺伸して、落葉が投捨たる那財囊の、登框の頭に在りしを、闇き方より引掛て、悄地に奪拿らまくす。爾程に、峯張桀六郎通能は、嚮に朱之介を赶んとて、六市四摠を從へて、連りに路を走りつゝ、是日下晡の時候、浪速の申明亭に造りて、悄地に其頭の人に問ふに、既に朱之介は追放せられて、那地ゆきけん知る者なし。且其時刻を尋るに、兩三晌已前なりき。といはるゝに力及ばず、只得其首より思ひ捨て、亦復路をいそぎつゝ、住吉の里へかへり來ぬる程に、六市四摠も壯佼なれども、囚牢疲勞ある故に、還さは路を走り得ず、世話介許立よりて、將息をすべけれとて、途にて桀六に相別れしかば、桀六は身單にて、いよ〳〵いそぎて立

も憩はず、既に日は暮たれども、いまだ月の出ざる時候、十三屋の店前近くかへり來ぬるに、夏夜なれば戸を閉果さず、裏面には老女客ありて、九四郎乙藝と額を合して、うち譚ふ聲聞えしかば、訝りて左右なく入らず。又只那客のみならで、抬簀子の邊に人ありて、竊聞しぬる者に似たり。甲夜闇なれば見えわかねど、老女客の伴當歟、と思ふものから他も亦、蚊に螫るゝを厭ずして、潛びて在るは疑ふべし。是尷尬兒にあらずや、と猜しつ敢て驚さず、开が儘庇間に身を潛して、内外の容子を覘ふ程に、身に寄る長脚蚊を拂ひつゝ、猶覘ふこと一晌許、料らず聞知る落葉乙藝の、親子の再會長談の、奇しく妙なる幾條に、感嘆しつゝありける程に、夜は既に初更に過て、月出て影涼しく、椙端近く飛螢は、風に撲れて墜るもありけり。涙六は今這月の、光に就て、悄やかに頭を出して、件の尷尬兒を熟々視時、他が覃面せし手拭の、風に吹れて落しかば、疑ふべくもあらざりける。昨日も今も陣館にて、既に面を見知りたる、末朱之介なりければ、心悄地に訝りて、原來他は要ある故に、潛びて來つるにぞあらむずらん。何どてや内に入らざりける。と思ひつゝ聲をば被ず、猶も闚窺る程に、朱之介は是を知らず、悄地に鈎竿を刺伸して、件の財嚢を引掛て、竿を手繰つ引よするに、框の邊は燈火の、光屆かで暗かりけるに、落葉乙藝九四郎さへ、心其里にあらざれば、盜兒あるを毫も知らず。只峯張

楽六のみ、見ること既に分明なれば、且驚且怒に堪ず、性起るを推鎮めて思ふやう、噫無慙やな。朱之介奴が賊心なる、後闇き事をせずとも、明々地に哀乞はば、落葉の刀自の慈善なる、俺舍兄の義侠なる、財嚢の金子は左まれ右まれ、盤纏の爲に幾十金、百金なりとも惜むことなく、取せざることやある。拜を恥て盗を恥とせず、愚物の本性惜むべし。推捕らへ撻懲して、日今金子をとり復さずば、俺かへり來たる甲斐はなし、と尋思をしつゝ又よく思へば、這里にて那奴を撻懲して、二包一財嚢なる、金子をとり復すは易けれども、然しては那刀自の、慈善にしも悖るべく、且俺兄の爲にも恥なり。一霎時遣過し、這頭を離れて、せん術あり、と深念をしつゝ、猶身を潜めて在りける程に、朱之介は財嚢の金子を、既に盗拿りしかば、うち戴きつゝ懐へ、楚と夾めて退く時、落たる手拭拿揚て、覃面して緩歩しつゝ、浪速の方に逃去を、楽六は吐嗟とばかりに、疾く庇間より立出て、相距こと十間許、月を便に跟てゆく、善少悪少道異なれども、走るは同じ夏の夜に、吹風涼しく更初て、人定近くなりにける。然れば這時十三屋の店内には、落葉乙藝が、今昔の話説稍果しかば、九四郎は惆然たる、頭を抬げ膝を找めて、更に落葉に向ひていふやう、離合時あり、禍福齊く至らず。抑乙藝が不幸なる、妳々に相別しより、今十あまり九の、春秋を歴て憶りなく、再會の本意を遂しは、俺二親の素懐に稱ふ

て、己も深く歡びおもへり。是併慈悲積善を宗とし給ふ、御身の老後を神佛の、憐ませ給ひぬる、感應利益にこそあらめ。然ばにや、御身年來苦勞して、守育給ひたる、姪女斧柄刀禰とやらんの、孝順にして短命なりける、其代に年五より、棄て生死だも知るよしなかりし、實の女兒を得給ひにき。斧柄刀禰には及ずとも、他も孝順の心なからんや。斯いふ俺九四郎も、今よりして御身の女壻なり。大和津國同鄕ならねど、一臂の力を盡すべし。心つよく思ひ給ひねかし。と詞徐に慰むれば、乙藝も亦俱にいふやう、瓢形の天、鑛金の、地に等しき生の恩、返すよしなき玉鉾の、身の薄命とはいひながら、二十の上を七まで、歲長て今料らずも、環會まつりしは、過世ありける幸ながら、开も九歲の秋よりぞ、養ひの恩淺からぬ、這里なる故の家主人、御夫婦の慈悲徹りせば、今この歡びあるべしや。是に就ても痛しき、家尊の大人木偶介を云ふのみ東路に、ゆきて還らぬ人の數に、入りにし山の恨しさよ。といひつゝよゝと泣沈めば、落葉も涕をうちかみて、現に其事なり。親子兄弟、うちも揃ひし仁義の家に、養れぬる汝の果報、過世あるべき事ながら、皆九四藏主御夫婦の、慈恩といふもあまりあり。俺身なンどが及んや。緣に觸ぬる身の幸に、猶願しき事侍り。といひつゝ九四郎にうち向ひて、嗬女壻の刀禰、斯いはば卒爾に似たれど、知らるゝ如く大和なる、杣木の家は續ぐ者なし。朱之介をば義絕しつ、斧

柄が遺しゝ孤なる、玉五郎ありといへども、他は生れて五十日にも至ぬ、赤子なれば憑しからず。譬ば水の上なる泡に似たり。非如成長しぬるとも、久後短き老が身の、よく後見をすべくもあらず。願ふは御身乙藝と倶に、上市なる家に移り來て、杣木の跡を嗣ねかし。豪農名家ならねども、二十町八反の田園あり。又年毎に伐出す、山の林も少なからねば、衣食に物を缺べくも侍らず。然らば奴家は隱居して、佛に仕まつりてん。この義を憑み侍るのみ。といはれて九四郎沈吟じて、そも亦要ある事ながら、必や輕諾は、信寡し、と古語にもいへり。いかにして今卽坐に、決定の答に及ん。勿論俺家は幸に弟柒六あり。他は武士にて武藝さへ、親の後を嗣に足れり。其頭は後安けれども、己が隨意世を渡る、九四郎が分際にて、熟れぬ農家の一世帶を、よく承嗣ぐべくもあらず。俺身は左まれ右もあれ、便寡き御身の爲に、異日乙藝をまゐらすべし。幾までも留在らせて、商量敵にしたまへかし。便宜は只この事のみならず、御身は又遠からずして、一個の孫を得給ふべし。那は乙藝に問給ひね。といはれて乙藝も倶にいふやう、俺身良人に仕しより、十稔近くなりぬれど、子といふ者は得がたかりしに、今玆は春より身重く做りて、三月四月になりける程に、折から思ひがけもなき、禍鬼起りて稍久しく、獄舍に繫れたりければ、必傷產するならん、と思ひつゝ胸安からざりしに、肌膚に掛たる護身囊に、藏

めて深信怠らざりける、長谷清水の兩觀世音、及除厄弘法大師の、御影の利益にやありけん、俺身はさらなり胎内なる、赤子さへ恙あらずかし。と告るに落葉は歡びて、吁めでた。爾らんには、俺身にも亦子孫あり。喃九四郎主、諄きは老の癖ながら、御身耕し耘る技に、得熟れずとてもけしうはあらず。老女の咱すらこの年來、傭作して人並に、秋の登を得たるなり。いかで乙藝共侶に、杣木の家を嗣給はゞ、其子寶を大和へ移して、久後いよ〳〵安かるべし。丌を乙藝のみ召拏りて、御身獨宿し給はゞ、俺心何ぞ安かるべき。いかで〳〵。と請談ずれば、九四郎頭を傾けて、這櫛店は俺親より、讓られたるにあらざれば、六市四摠に任用せて、俺身大和に移住とも、丌は左も右もの事ながら、明日又朶六、四郎腋子に、告て商量して後に、是非を定め候はん。と答る折から杜四郎は、咳きしつゝ奥より出て、九四郎乙藝を呼ていふやう、夜は深て候に、店の戸鎖て客人を、納戸へ伴ひ給はずや。朶六哥々が今までも、かへり來ざるは心許なし。猶戸鎖さずして竢給ふや。と問ふを九四郎聞あへず、否朶六は遲くとも、六市四摠を倶したれば、他が上は後安かり。且這方へ。と傍に召きて、更に落葉に向ひていふやう、嚮にも既にいひけらし、この少年は、俺故女兄の腹なりける、大江大人の蔭子にて、杜四郎成勝是なり。這回朶六と共侶に、朱之介乙藝等の、疑獄を解きたる一人なりき。と告れば落葉は

席を讓りて、开はよき折に拜面し侍り。奴家は乙藝の實の母、大和の落葉で侍るかし。と名告を四郎はうち聞て、咱等も甲夜より奥の間にて、御話語の條々を、遺もなく洩聞たれば、感心の外候はず。俺も亦九四郎柒六の、外侄に候へども、柒六とは弟兄の、思ひをさへ做す者なれば、介意せらるべくもあらず。やよ嫂々、更闌たるに、奶々はさぞな冷やかならん。納戶へ伴ひ給へかし。といへば乙藝は點頭て、然なり、奥へ臥簟を儲けて、母を休せ侍りてん。喃奶々、甲夜には不如意に焦燥給ひけん、投捨られし那財嚢は、其頭にこそあらんずらめ。牟納め給はずや。といはれて落葉は心つきて、寔に然なり、爾なりき。平生には鐚一文でも、棄べうは思はざりしに、主人夫婦の方正さに、強雖て性起りにけん、一百九十五兩ある、財嚢を漫に投捨しは、歳に似げなき短慮にて、傍痛く思れけん。俺後方にあるべきに、乙藝否一否牟りてよ。といふに乙藝は行燈の、灯口を其方へ引向けて、身を起しつ左右と、件の財嚢を索るに、あるべくもあらざれば、杜四郎も指燭して、店の四隅脫履場、箱招牌の蔭までも、漏す隈なく求獵れども、那地ゆきけんあることなければ、落葉が後悔いへばさらなり、九四郎眉をうち顰めて、原來外面に盜兒ありて、事に紛れて掻攫ひけん。甲夜には殊に熱かりければ、漫に風を貪りて、店の戶を三が一、閉遺したる、油斷は大敵、脫落にけり。と悔恨めば、落葉は連に嗟嘆して、金銀

は上無き御寶、聊なりとも受戴きて、等閑にすべき物ならぬを、誰も知りたる事なるに、薄情婦女子の胸陝く、悲泣に心狂しくてや、苟且ながら二包の、金子を疎忽にしたりしは、是まで覺えぬ俺身の失誤。左ても右ても那金は、無益に喪ふ時節ならめ。やよ乙藝、四郎朖子も、うち捨て措給へかしと制められても疑ひ解ねば、乙藝杜四郎は慰めて、世の常言に、七たび索ねて、後に人を疑へ、といふこともあればとて、迭に手燭を續更て、同處を幾番も、索るかひぞなかりける。話分兩頭。爾程に、峯張柒六郎通能は、未朱之介が後を跟て、ゆくこと約十町許、既に住吉の里を離れて、右に川あり、左に小隄防あり、逃べき岐路あることなければ、こゝ究竟と去向を揣りて、脚を疵めて聲高やかに、盜兒等。と喚禁れば、朱之介は驚きながら、後方を見かへる程しもあらせず、柒六疵く跳蒐りて、項髪捉て動せず。怒れる聲を震立て、刑餘の尷尬兒朱之介、陣館にて面善なる、峯張柒六を忘れはせじ。剛才十三屋の店前にて、儞が竊みて走りぬる、財嚢の金子をとり復さんとて、跟て來ぬるを知らざるや。夙く返せ。と懷へ、手を刺入れて掖出す、財嚢を煞と拿禁て、唶きたり。前髪猴子。この金一百九十五兩は、俺大和よりもて來たる、俺物なれば俺物するを、儞に干る事やある。盜兒喚り外聞牙し、こゝ放さずや。と挑拿りて、逃んとするを柒六は、毫も透さず肩尖抓みて、掖戻しつゝ件の財嚢を、


柒六に逐れて
朱之介夜
財嚢を擲つ
朱之介
柒六



捉を放さぬ朱之介、自得の白丁術を盡して、挑爭ふ一生懸命、財嚢を後方へ投退れば、柴六いよいよ怒に堪ず、身に兩刀を帶たる甲斐に、擊果すは易けれども、然しては亦落葉の刀自の、歎きやすらんと思ふ可に、敢其本事を盡さず。一霎時他を疲勞して、捉んと思ひしかば、柔受柔受挑む程に、天ゆく雲の雨催ひ、今まで明かる夏の夜の、月を隱して朦朧と、忽地暗くなりにける。浩處に一個の行客、年齡は四十有餘、身には單衣を裙折て、上に重綀の麻の雨衣の、身半なるをうち披り、腰に短き兩刀を跨たれば、是則武士なるべし。頭に戴く竹皮笠、脚には脚絆草鞋の、打扮さへに精悍しく、故ありぬべき夜の行に、伴をも倶せず只一人、住吉の方よりして、歩を趲めて來にける程に、今柴六と朱之介が、挑角ふを遙に見て、うち驚きつゝ近づき來て、相距こと一丈許、勝負什麼と覘ふ程に、月は忽地雲隱れして、四下小暗くなりしかば、又只件の行客は、慾に心や動きけん、竊歩しつゝ找み出て、今朱之介が投たりける、財嚢を左右と搔撈りて、拿揚試に重ければ、憶ず莞爾と微笑て、手ばやく紐を解開きつゝ、那二包百九十五兩の、金子をのみ懷へ、楚と夾めて又搔撈に、恰好小石兩箇あり、是究竟と搔拿りて、悄地に財嚢へ入替て、故の如くに紐さへ結びて、ありける處へ閣きて、遽く那身を躱してぞ、往方は知らずなりにける。兩虎食を爭ふ時、狐其虛に乘といふ、古語は現に以ある哉。然

ば這方の兩敵は、迭に是を見ず知らず、猶も爭ふ幵が程に、天には月の雲霽て、影復鮮明なりければ、柒六是に便宜を得て、既に疲勞し朱之介を、耶と聲かけて投しかば、朱之介は筋斗りつ、蜘子の像くに平張て、頭には起も得ざりしを、柒六透さず登し蒐りて、背を踏締て動せず、勇る聲高やかに、やをれ朱之介思ひ知るや。那金百九十五兩は、儞が大和より、もて來ぬるといへども、原是落葉の刀自の慈善にて、沙金と唐布を買せんとて、儞に遞與しゝ出處あれば、今朝浪速なる陣館にて、落葉に返し給ひしよしを、儞も甲夜より竊聞して、必や聞知りつらん。然りとても那折に、儞刀自に對面して、明々地に哀乞はゞ、素より刀自は慈善の人なり、時宜によりて那金子を、儞が盤纏の爲にとて、取らする事もあるべきに、何どて竊みて走りたる。其賊情を懲さんとて、俺這里まで跟て來つ、今那金子を拿復して、落葉の刀自に返さまくす。俺身の慾に做す事ならんや。憎むに勝たる儞が賊心、有恁るべしとは思はざりける、俺兄九四郎の義俠なる、儞は舊惡ある故なれども、單追放せられしを、殊に不便に思ふの故に、金五兩を齎して、俺に課せて追せしに、時後れて及ねば、日暮て徒にかへり來にける、十三屋の門傍にて、儞が甲夜闇に立紛れて、裏面の容子を張居たるを、見出したれども、訝しさに、聲をも被ず裏面にも入らず。況や件の金五兩を、遞與すべき時宜ならねば、事の玆に及ぶもの

から、俺兄の好意を、空に做さんはさすがにて、落葉の金子を拿復すは、則是公道なり。俺兄の貺を、傳へ取するは人情なり。公道と人情と、兩ながら闕べからず。儞道義を辨知りて、今よりみづから新にせよ。落葉の刀自には義絶の壻なり。この故に讞斷せられて、大和へは返されず。俺嫂乙藝には、義絶の弟なり。十三屋へ立入るべからず。この義を後まで忘るゝな。と思ひの隨に罵懲して、却懷を搔撈て、紙に包し金五兩を、幷が儘に拿出して、卒とばかりに朱之介の、頭へ托地と投付與へて、そが儘些し退きて、月を燭に四下を見るに、朱之介が投退けたる、財嚢は故の儘にして、後方八九尺の間に在り。柒六是を拿上て、沙うち拂ひて懷へ、夾めていそぐ夜の路、十三屋を投てかへりゆく程に、十八日の月影も、眞夜半時候になりにけり。爾程に朱之介は、頭を鶴し身を縮めて、應四下を見かへるに、柒六は故の路へ、かへりゆきけんあらずなりしかば、やうやくに身を起して、柒六が投與へたる、金五兩を搔拿りて、包を開き數へ見て、嘆口氣して其金子を、包て先犢鼻褌へ、結着ても東西足らぬ、身の往方さへ定め難て、只諄々と呟くやう、折角物せし金二包を、柒六奴に拿復されて、其損料には五兩金、是を落葉と乙藝等が、斷緣金には廉けれども、斧柄は產後に身故りて、生れし赤子は恙なし、と落葉が口說きし愁歎話を、竊聞したる事もあれば、この金子の竭たる比に、竊地に大和

へ赴きて、又物にする時宜もあらん。只是星煞にて、好も歹きも七轉、八起に起ねば男子にあらず。先京師まで退きて、せん術あらんと獨言つ、胸湿しき虎狼の本性、臂と膝とに塗れたる、壤を拂ひつ拊摩りて、身を起しつゝ悠々と、東を投て立去ける。迹には聚鳴虫の聲、土旺中央に立秋風に、戰ぐや隄防の細芒も、招ざるべき歹人の、一進一退出没不測の、久後も猶怕るべし。案下某生再說。當晩十三屋の店内には、乙藝杜四郎は財嚢の金子を、索難つゝ精疲勞らして、竊れけんとやうやくに、思ひ絕て店の戸を、鎖んとて手を掛る折から、外面より來ぬる者あり、是則柒六なり。近づく隨に聲を被て、嫂々日今かへり侍りぬ。其里開て給ひね。といふに乙藝も杜四郎も、噫遲りし待不樂たり、疾這方へ。と閉かけたる、戸を又一枚推開けば、柒六は衝と找み入りて、坐して九四郎に向ひていふやう、嚮に小弟、六市四摠と共侶に、走りて申明亭に造りしに、朱之介は亭午の時候、追放されたりと聞えしのみ。時も後れ往方も知れねば、只得かへり來ぬる程に、六市四摠は疲勞に堪ず、世話介許止宿して、明日參らめとて別れたり。是よりして俺身單、日暮て這店鋪頭まで、既にかへり來にけるに、又不慮の事ありて、見過しがたくて裏面には入らず、其義は後に稟さめ。と告るを九四郎うち聞て、幵は何事か知らねども、這里にも甲夜に賊難あり。そは今急に告るとも益なし。這客人は和郎も聞知

る、那上市なる落葉の刀自なり。乙藝の實の奶々なりしを、今宵不測に知り得たり。といふに柔六恭く、落葉に向ひて口誼を舒れば、落葉もやをら膝を找めて、初對面の欵びを、叙す詞の露の間に、乙藝は店舖を戸鎖果て、杜四郎と共倶に、柔六にうち向ひて、甲夜に落葉が喪ひたる、那財囊の金百九十五兩の、事云々といひ出るを、柔六は聞もあへず、其義は吾等よく知りたり。今詳に說示さん。刀自も長兄も聞給へ。其故は箇樣々々、と甲夜に來朱之介が、這店頭に潛び來て、主客の話說を竊聞しつゝ、財囊の金子を竊拿る時、柔六はそを闚窺居り、推捉へ撻懲して、金子を拿復さまく思ひしかども、然しては又落葉の刀自の、爲に妙ならざれば、朱之介が竊み得て、浪速の方へ立去折、十町許跟ゆきて、如此々々の地方にて、喚禁め厮鬪ふて、思ひの隨に投伏て、件の財囊をとり復しつ、九四郎が拿せぬる、金五兩を投與へて、かへり來にける顚末を、今見る如く說誇りつ、懷より其財囊を、拿出て落葉に返すにぞ、九四郎落葉を首にて、杜四郎も乙藝さへ、膝の找むを覺ぬまでに、倶に感嘆したりける。當下落葉は羞たる色あり、九四郎乙藝に向ひていふやう、這金子の失たるは、朱之介が所爲ならば、然ばかり惜むべくも侍らず。一旦他に取せたる、金子なる者を明々地に、乞はで後闇き事をしたれば、冥罰覿面柔六主に、とり復されける鈍ましさよ。といひつゝ財囊を拿拾れば、九四郎急に推禁

めて、親き中にも念の爲なり、内を閲して受拿給へ。と心屬れば、然なり。と答て、財嚢の紐を解開きて、拿出すは二包の、金子にはあらで小石なり。是は什麼、とばかりに、呆れてやをら投出せば、九四郎乙藝杜四郎も、倶に訝る幵が中に、柒六は驚き見て、且恥且悔ていふやう、原來夙くも朱之介奴が、財嚢に小石を容易て、俺を欺きたるならん。然とは知らで疎忽の態僻、いひ解くだにも面目なし。那里までも赶蒐て、金子拿復さでやは已ん。いで〳〵。といひつゝも、刀を拿て身を起すを、九四郎はやく喚禁めて、柒六そは勞して功なし。和郎幾里赶ふとても、逃る者は路を擇まず、他虛々と和郎を俟んや。敦圉くとても今は要なし。惴ずに仔細を告よかし。といはれて、柒六嗟嘆に堪ず、姑且して答るやう、現に愆ぬ、今さらに、身の非を飾るに似たれども、朱之介が那金子を、竊拿し首より、俺闞窺て油斷せず、幵が儘迹を跟ゆきて、投伏て這財嚢を、とり復しゝ終まで、他いかにして這小石を、容易る暇あらんや。但挑み角へる折、他財嚢を投退しに、照る月猛可に雲隱れして、一霎時暗く做しかど、それ將久しきことにはあらず。雌雄を爭ふ折なるに、三面六臂ならざりせば、他何等の暇ありて、然る科玉を要せんや。是に由て是を思へば、這小石は朱之介が、竊拿ざる以前より、財嚢の内にありける歟、其事なしといふ時は、いよ〳〵奇しくます〳〵怪し。斯と知らば這店頭にて、朱之介を推

捉へて、財嚢をとり復すべかりしに、落葉の刀自の心を汲て、地方を易たる故にして、照据人ある事なければ、俺分說も闇きに似たり。悔しき事をしてけり。と喞言がましく陳ずれば、乙藝杜四郎も慰難て、左あらん右やあらん、といふのみ、俱に疑解ざりけり。この段文猶多ければ、いまだ說も盡すべからず。又卷を更て下回に、解分るを聽ねかし。

續編 卷之四上册

第三十七回

成勝通能遊歷して東路に赴く
晴賢松下に睡りて蟒蛇に呑る

登時九四郎は、柒六が陳じぬる、財嚢の事をうち聞て、沈吟じて且いふやう、聞が如きは朱之介が、汝と挑爭ふ折、財嚢の金を遞與さじとて、後方遙に投遣けるに、照月猛可に雲隱れして、四下暗くなりしといへば、その折朱之介の支黨の、躱居ける者ありて、金子に小石を入易たる歟、是も亦知るべからず。とは思へども倘果して、支黨の所爲ならば、徑に財嚢を掻攫ひて、逃も躱もすべかるに、人を欺く便直もて、金子に小石を入易たるは、何等の意ぞ解しがたかり。と詞急迫しく論ずれば、落葉も聞つ推禁めて、九四郎刀禰閣給へ。开は左まれ右もあれ、素より那金三百兩は、朱之介の爲にとて、調へて遞與しゝに、非如所要を果さずとも、又他が手に入りたらば、斷縁金と思んのみ、惜けくもあらずかし。故何とならば、他が主君より與り來ぬる、沙金は二十一包、殘りて俺家にありしを、如々來樣の示教によりて、梅雪信女の柩と

共に、六田の河邊に瘞めさせしは、那作佛の志願に因る。そも朱之介の爲なれども、其沙金と那圓金を、交易にしたりと思へば、いよ〳〵後安かりき。と諭せば九四郎うち笑ひて、开は只是婦人の仁のみ、佛意は然もあるべし。なれども朶六が憖に、那金子をとり復さんとて、反て金子を失ふて、其財嚢をのみもて來にければ、鄙語にいふ璧を返して、櫃を留むる者に似たり。倘他人をもて是をいはゞ、朶六にも疑ひなきにあらず。然ば件の百九十五金は、咱等必贖ふべし。といふを落葉は聞あへず、そは又要なき理論なり。俺世帶をしも讓らん、と思ふ御身等に那金子を、贖はせて何にせん。他人がましき事いはるゝは、似げなく聞え侍るかし。と諭すを九四郎推復して、猶云云と論ずるを、杜四郎諫ていふやう、其義は今宵に限るべからず、短夜なれば酷く深たり。明日又商量し給へかし。といふに乙藝も共侶に、良人を勸る言果て、落葉を納戸へ案内をすれば、朶六は兄の意見の、理りなるに感服して、重て復す詞もなく、咱等は店に寢宿んとて、帚をもて來て掃などす。乙藝はいとゞ勤しげに、臥簟儲も三所へ、配る三張の幮垂て、各枕に就にけり。恁而其詰朝、十三屋の炊婆櫛工等は、乙藝が敎にあひし事、九四郎も恙なく、歸鄕のよしを聞知りて、早旦にかへり來にければ、薪水の事に其人あり。早飯既に果しかば、九四郎は落葉乙藝、杜四郎朶六等を、皆納戸へ招聚へて、又只昨日の金子の事を、

悄やかに談ずるやう、上市の奶々聞給へ、那一百九十五金は、其盜兒を知りながら、とり復し得ざりしは、柒六が愆なるに、御身は慈善の心もて、朱之介に返し遣ぬ、と思へば惜からず。と宣ひしを、俺歹く聞にはあらねど、錢財の事はしも、親しき中にも言品出來て、迭に疎く做る者あり。況任俠を磨く者は、授受明白ならざれば、乾兒假子も從はず、何をもてよく人を制せん。この故に、柒六が失ふたる、一百九十五金の内中、俺百金を贖ふて、且今御身に返すべし。といふを落葉は推禁めて、开は又御身の一徹ならずや。昨宵もいひし事ぞかし、杣木の家を嗣せんと、思ふ御身に損被て、其百金を受られんや。況那金子の亡たるは、柒六刀禰の愆歟、愆ならぬ歟、俺手親、俺渡しゝ財囊ならねば、那子を咎るは無理なるべし。人の得ぬると失ふとは、皆是時運に由ると歟聞ぬ。只うち捨て措給ひね。と言叮嚀に諭せども、九四郎听ず頭を掉て、开は辱き御心ながら、人の養嗣たる者は、其家に益あらせて、減す事なき挊きあらずば、其養嗣たる甲斐はなし。然るを今俺們夫婦は、小弟の所以といひながら、いまだ養家に贅らずして、養母に一百九十五金の、損をしも被たらんには、誰か益ある者といふべき。然るを𠜇那金子の内中、御身百兩は他借して、朱之介に遞與し給ひしならずや。其金子だにも今返さずば、守の御善政を空にしまつる、單御身のみならず、俺も亦百金の、債ある者に似た

り。必な推辭給ひそ。と義を見て勇む俠氣に、落葉は竟に爭難て、又いふよしもなかりけり。
當下九四郎は、懷なる長財嚢より、金二包を拿出して、四郎柒六等に向ひていふやう、昨日も既に告し如く、這金二百兩は、治比の大人弘元の賜にて、内中五十金は、四郎腋子へ、五十金は柒六へ、こは武者修行の路費にせよとて、取せ給ふ所なり。又五十金は、孟林寺へ布施すべく、五十金は俺九四郎へ、賜ふ物即是なり。是をもて俺五十金と、柒六の五十金と、合して百金は、目今乙藝が奶々に返して、那債を償ふべし。猶九十五金足らねども、其は奶々の慈善なる、那沙金と交易に、朱之介に取せにき、と思はれなば恨はあらじ。勿論柒六が路費は、俺別に調へて、起行折に遞與すべし。四郎腋子の五十金は、目今渡し參らせてん。といふを杜四郎推禁めて、否其金子をいそぐは要なし。啓行の日にても好、勿論俺們二人が修行の路費は、五十金にて足りぬべし。逆旅に財貨多かるは、是禍を招くに庶幾。と辭へば柒六も倶にいふやう、昨宵咱等がとり復したる、財嚢は反て仇と做りて、斯まで劬勞を被まつるは、心苦しき涯りなるに、何でふ路費を欲すべき。術よく計ひ給ひね。と勸解れば九四郎點頭て、然では商量整ふたり。いで〳〵。といひつゝも、先一包の金子を拿て、故の如く長財嚢に、斂めて殘る一包を、傍にありける團扇に載て、卒とて落葉に遞與すにぞ、落葉は左右なく受難て、

猶云云と辭へども、九四郎敢承引ず。柒六も亦杜四郎も、倶に薦めて已ざれば、乙藝は孰を孰とも、分るよしなく慰難て、心苦しく思ふのみ、默然として在りし程、落葉はやうやく件の金子を、受戴きつゝ涙唔て、非如何といはるゝとも、今這金子の情由さへ聞ては、受べうは思はねども、受ねば人の志に、悖るとあるを爭何はせん。受ての後に左も右も、又せんかたのありぬべし。好意を戴き侍り、乙藝宜しく憑ぞや。と謝して財嚢へ件の金子を、納めて項に掛る折から、炊婢が來て告るを聞に、上市なる村長は、今朝夙より、落葉を酷く俟托て、伴當二名を從へて、且兩個の轎夫に、落葉が行轎子を吊せつゝ、索て十三屋へ來にければ、落葉は九四郎乙藝と倶に、遽しく出迎へて、奥なる坐席に請登しつ、先茶を薦め果子を薦むる、主人夫婦が初對面の、口誼も稍果し時、落葉は村長に向ひていふやう、奴家は今朝夙より、歇店へ還るべかりしに、迎の箯轎はいまだ來ず。且奇事のありしかば、憶ず時を移しにき。其故は箇樣箇樣、と乙藝は實の女兒なりしを、迭に知らず知られずして、環會ける崖畧を、呫き告て又いふやう、是等の内縁あるなれば、這夫婦を上市へ、喚とりて杣木の家を、嗣せまく欲しぬる、商量もし侍りにき。この義を歡び給へかし。と說れて村長掌を拍鳴らして、吁芽出たやな。那は料らざる洪福なり。御身が老實慈善なるも、是まで善報はあらで、朱刀禰の無賴、いへばさ

らなり。斧柄少女の夭折を、最悼しく思ひしに、幼稚時に生別しゝ、令愛夫婦に、環會給ひしは、是則陰德陽報、御身の慈善と薄命を、神佛の憐み給ふ、利益にこそあらんずらめ。寔に賀すべし、賀すべし。と祝して九四郎乙藝等に、其歡びを舒にけり。當下落葉は、又村長に談ずるやう、御身も知らせ給ふ如く、昨日陣館より返賜りたる、其金百九十五兩を、單奴家が腰に纒ひて、大和へ還らば重荷にて、不便にこそあらんずらめ。這春御身に借用したる百金を返しまつるべし。御身も重擔なるべけれど、這里にて受拿給ひねかし。といひつゝ財嚢を解開きて、金一包を拿出して、开が儘村長に返して、又いふやう、利金は何ばかりか知らず侍れど、こは本金のみに侍り。といふに村長含笑て、件の金を受戴きつゝ、懷より眼鏡を拿出て、掛て圓金の包を開きて、兩三番數へ見つ、眼鏡外して懷なる、財嚢へ件の百金を、慥と納めて行嚢帖より、證書二三通を拿出して、甲乙と開き見つ、其一通を落葉に返して、殘るを又懷へ、夾めて落葉に向ひていふやう、有斯るべしとは知らねども、陣館にて那金子の、事をし問せ給はん歟、と思ふばかりに證書を、懷にして來にければ、授受都て事濟たり。原那金子は山蔵貢の、積金をもて用達たれば、利銀は決て欲からず。夙く銷印し給へかし。といはれて落葉は感謝に堪ず、受戴きつゝ開き見て、开が儘九四郎に渡しゝかば、九四郎も亦是を讀見て、隨即乙藝に

吩咐て、鏁硯を拿よせて、筆を染つゝ印信を、抹て落葉に返しけり。當下村長は、又落葉にうち向ひて、御身は這回思ひがけなく、絕て久しき令愛に、環會給ひしかば、猶所要多かるべし。復來まさんは易からぬに、姑且止宿し給ひね。咱等は暇を稟すなり。といひつゝ軈て身を起すを、落葉は急に推禁めて、奴家とても人さまに、留守を憑て來にけるに、幾までか逗留すべき。乙柚の乙藝も九四郎も、大和へ訪來る該なれば、又逢がたき別にあらず。奴家は御身と共侶に、今日晝起にして退るべし。といふ間に九四郎は、乙藝等に吩咐たる、銚子盃酒菜さへ、甲乙となく安排て、村長と落葉に薦ける。迭の口誼獻酬も、沙量なりければ時を移さず。更に準備の晝饌は、只這席のみならず、村長の伴當轎夫等にも、欵待屆ざる所なく、各飽て辭ふ時、住吉の神社にて、吹鳴らす午の貝の、遠音遙に聞えけり。當下落葉は九四郎と、乙藝を召て別を告れば、九四郎乙藝は留めあへず、倶に異日を契りていふやう、切て猶兩三日も、留めまつらまく思へども、御一路人のあるなるに、人に任する留守の宿の、心許なし、と宣はすれば、今さらに力及ばず。四郎柒六が起行を、目送果し候はゞ、乙藝を大和へ參らすべし。時宜によりて九四郎も、共侶にと思ふなる、一霎時の御別に候へば、通路酷暑を凌ぎて、後の便を俟給ひね。と言語齊一慰めて、九四郎が家裹なる、安藝半紙幾十帖と、手製の木櫛十枚有餘を、

土産にとて轎夫に、渡して轎子に容措しつ、又村長には土産料に、一裹の人情あり。この餘作當轎夫にも、遺なく取する裹錢、行届きたる饗應に、皆歡ざる者もなく、告別さへ散動めきて、草鞋を更て立程に、落葉は今さら思ふ事、いはまくすれど嬉しさと、又悲しさに胸塞りて、詞寡く村長に、うち續きつゝ立出れば、杜四郎と柒六は、孟林寺へかへるさに、途まで是を送らんとて、身裝して出て來つ、落葉村長に別を告て、轎子の後方に立程に、九四郎乙藝を首にて、炊婢も櫛工等も、皆店頭へ立出て、目送る榮は故郷へ、飾るや秋の錦ならで、冬樹の黄楊の櫛店舗に、惜別は峯張の、岐岨に異なる大和路も、同じ山路を想像る、乙藝の小夏暑日に、出しやる親の轎子の、見えずなるまで慕れて、立盡してぞ奥に入りにける。恁而是日九四郎は、六市四摠が來ぬるに及びて、昨宵よりありし奇事を、遺もなく說示すに、六市四摠は駭嘆じて、朱之介を憎む事、日屬に倍て甚しく、更に落葉の誠心を、感じて慕しく思ひけり。左右する程に、未過時候に做しかば、九四郎は孟林寺へ詣んとて、這回安藝よりもて來ぬる、土産物一裹を、作當四摠にもたせなどして、倶して件の寺に赴きて、住持木玄に見參す。杜四郎と柒六も、其席にぞ侍りける。當下九四郎は、木玄に拜面して、治比にておりしこと、大江弘元の病臥の事、且其口狀を傳達して、寄進の金五十兩を、傘出て木玄に遞與しけり。是

より先に木玄は、杜四郎柰六がかへり來て、言詳に告たりける、落葉乙藝親子の再會、當晩朱之介が潛來て、落葉の金百九十五兩を、竊拿て走りし折、柰六が赶蒐て、拿復しょは小石にて、財嚢に金子のなかりしかば、九四郎は已ことを得ず、曩に弘元の、那身と柰六に賜りたる、金子一百兩をもて、那失を贖ふて、落葉に返しょ事までも、既に聞知りたりければ、又其事をいひ出て、意見を九四郎に示すやう、弘元主の病臥は、胸安からず思へども、まだ老朽たる那身ならぬに、霜露の輕症なるべければ、久しからずして瘥り給はん。就て那主の、和殿と柰六に、賜りたる百金を、義俠の所以とはいひながら、那贖に喪ひしは、惜むべき事ならずや。事の不便は是のみならで、柰六の武者修行にも、和殿夫婦の大和へゆくにも、盤纒多からずはあるべからず。この故に、俺今這五十金を、和殿弟兄の、餞別に拿せんず。といふを九四郎聞あへず、そは忝く候へども、治比の大人の布施し給ふ、金子を賜りて俗事に充なば、佛の箔を剝すに似たり。小可も然ばかりの、貯祿のなきにあらず、其義は許させ給ひね。と辭めば柰六も倶にいふやう、豫知せ給ふなる、兄が氣質に候へば、受奉るべくもあらず。うち措せ給ひねかし。と執合すれば木玄は、頭を左右にうち掉て、然にあらず、〳〵。這金子は弘元主の、布施にはあれど兩少年の、年來當寺に同宿の、謝物にこそあらんずらめ。然ば今兩

少年の、往方定めぬ武者修行に、出るを視して慿ばかりの、餞別をせざらんや。約莫出家人たる者の、錢を欲するは佛の教に、叛きて塵俗にも劣る事あり。况今當寺には、破損修復の費用なし。徒にこの金子を、藏めて賊難を怕んより、今弟兄の路費に做さば、弘元主の素意にも稱ふて、其利益莫大ならん。然とも徒法師の手より、受るを猒思れなば、發跡て後年毎に三兩まれ五兩まれ、徐に返さば貰ふにあらず。非如俺なき後なりとも、後住の爲に反て益あり、柾て這意に任してよ。と諭しつ件の五十金を、丌が儘柒六に遞與しゝかば、柒六は受戴きて、感謝に堪ず、杜四郎と、倶に其歡びを陳て、九四郎を諫るにぞ、九四郎僅に頭を抬げて、師父の淸談理の當然、然では脱るゝ路あらず。權且借用仕らん。柒六手實を寫ずや。といふを木玄推禁めて、いかでかは手實に及ん。貸は俺心なり、借るは人の心なり。縱數通の手實ありとも、借て返さずば爭何はせん。又一行の手實なくとも、返す人は必返さん。况法師の物を貸に、其人を疑んや。已ね〱。と手を掉ば、九四郎いよ〱感服して、師父の大量、今の世の、出家人には多く得がたし。以取べし、取れば廉を破る。以取事なかるべし、取らざれば惠を破る、と孟子にあるを總角の時、讀しを思ひ出ながら、俺は反て及ざりける。師父も亦義士なる哉。御意承り候ひぬ、と稱て拜謝したりける。姑且して杜四郎は、九四郎に談るやう、咱等家尊の

大人の病臥を、傳聞し其日より、千里の路も一時に、走り行まく思へども、大人の消息こゝに在り。いまだ一功もあらで、治比へ入ることを許されず。然ば今番の武者修行は、故郷へ還る首途なり。一日も亟く起まく欲す、這義を計ひ給ひね。といふを九四郎うち聞て、开は理りに候へども、一月半稔の逆路ならば、啓行をいそぎもせめ。幾を涯りと量知られぬ、宿旅に去向をいそぐは要なし。三伏果て盂蘭盆まで、俟ば必歊熱醒て、朝夕は涼しからん。其折までに起行の、准備をこそ仕らめ。といひつゝ先懐より、圓金五十兩を拿出して、是を杜四郎に遞與していふやう、桀六も聞候へ、主僕の盤纏を合すれば、正に是百兩あり。馬轎に乘ず、粗飯を厭はず、旅宿に倹約を旨とせば、五六稔は拄ゆべし。四郎腋子は才子なり、俺言を俟ずして、萬事にこゝろ得あるべけれども、桀六はいよ／＼愼め。孰の郷に造るとも、皆敵地の思ひを做て、賊難を防ぐべし。色に惑はず慾に導れず、才あるにも欺れず、愚なるをも侮らず、主僕心を一緒にして、世の英雄と交りて、功なくば還るべからず。この義をこゝろ得給ひね。と諭せば四郎も桀六も、共侶に感佩して、教訓道理至極せり。胆に銘じて忘るべからず。遮莫百金は路費に多かり、半分は留めて大和へ赴く、所用に倣給へかし。といひつゝ返す桀六の、五十金を九四郎は、手にだも觸ず、推戻して、否其金子は治比の大人と、當寺の師父の和郎

達へ、餞別に做さるゝに、俺私に用ひんや。益なきことを。と窘めて、猶も餘談に及ぶ程に、木玄も其義を感じて、急に掌うち鳴して、木訥を召よせて、茶を肴よ果子を薦よとて、欵待す程に沒日刺、風も涼しく做しかば。九四郎は木玄に、歡びを舒、別を告て、四摠を將て遽しく、家路を投て退りけり。然ば乙藝は是等のよしを、傳聞しこの日より、四郎朱六が起行と、自親も大和へ赴く、准備に衣の解洗して、襤褸刺せてふ鳴虫は、まだ鳴ねども縫刺に、暇はあらず夏過て、七月中旬に做し時候、又聞一の奇事ありけり。其故を原るに、曩に浮世袋屋皎簾次は、鍛冶郎と今樣の、惡事によりて罪を免れず、久しく獄舍に繋れて、駝鳥太吹五郎と共侶に、拷問緊しかりけれども、駝鳥太吹五郎は死を究めて、詭詐をもて人を誣ず、皎簾次が爲に直言して、他は鍛冶郎が、騙賊なりしを知らず、又今樣が鍛冶郎の惡を幇助たるを曉らず、只目前の利に惑ふて、今樣を貸たるのみ、其惡意あらざる事は、俺們素より是を知りぬ。と陳じて數回の拷問に、毫も言を變ざりければ、木工頭職善は、竟に其疑解て、七月の初旬に、皎簾次を獄舍より、饒し出して、家に屏居在せけり。左右する程に、駝鳥太と吹五郎は、那身に刀瘡ある上に、數日の呵責に其痍破れて、遂に破傷風に做しかば、倶に獄舍に身故りけり。この故に、梟首せられず、職善下知して、件の兩個の亡骸を、倶に市に棄させて、則皎簾次と、乳

守の里長等を召よせて、みづから件の趣を、云々と言示して且いふやう、暖簾次は鍛治郎の、悪事には與せざれども、今樣を貸たる罪あり。這故に贖銅百貫文を獻りて、もて軍用に充べし。又小槌の今樣に使れたる、兩個の小三板、打出の早歌、丁兒の調子は、始より事の仔細を辨知らず、且年三五未滿の僮女なれば、倶に罪を饒すべし。と掟らる。賞罰是にて果にけり。爾程に、十三屋九四郎は、人の噂に件の一義を、聞知りて感じて已ず、悄地に旃陀羅に相謂ふて、駝鳥太吹五兩個の屍骸を、柩に斂め是を舁せて、當晩孟林寺へ送り來て、住持木玄と、杜四郎柒六木訥等に、この義を告知らして、又いふやう、俺意ふに低杭駝鳥太、狸毛吹五郎は、鐵屑鍛冶郎に、等しかるべき強人なれども、倶に義俠の心ありけん、最期の正念殊勝にて、其招了に、敢善人を誣ず。こゝをもて、朱之介を首にて、乙藝六市四揔、暖簾次に至るまで、皆疑獄を免れたり。我に功なしとせず。この故に俺憐思へり。いかで件の亡骸を、當寺の境内に葬らまく欲す。この義を饒させ給へかし。と憑めば木玄點頭て、俺も亦始より、那二賊の譎らざるを粗知れり。悪緣なれども其亡骸を、葬る事は厭しからず。但墓所には憚りあり。門外なる藪蔭に、埋むべしとて饒しゝかば、九四郎隨卽旃陀羅に、課せて其地を深く穿せて、兩箇の柩を埋葬るに、沙彌木訥等承りて、安葬の讀經あり。木玄も立出て、是を引導

したりける。其次の日より、大江杜四郎、峯張柒六等、爲に施主に做て、寺の門前なる石工に課て、無銘の五輪石塔婆を造立て、駝鳥太吹五郎の墓表にしけり。又住持木玄は、那時より藏置たる、今樣が頭髻の杪を、他が生前の願ひの隨意、高野山なる骨堂に斂んとて、柿八に吩咐て、寄進の黃白さへ齎して、紀伊國へぞ遣しける。左右する程に、盂蘭盆會になりしかば、木玄は又近村なる、僧徒を多く招會せて、駝鳥太吹五郎今樣等が爲に、施餓鬼の法會を修行しけり。是日も杜四郎九四郎柒六等、又施主に做りて、衆徒に齋を薦めなどす。結緣の爲に參詣しぬる、老弱男女極めて多かり。既にして、法會果ける其夜分、住持木玄の夢に、今樣駝鳥太吹五郎等が、在りし世の姿にて、倶に枕上に來て稟すやう、俺們三人は、前世の惡業によりて、竟に其死然を得ず、身を白刃に串れて、死しては地獄に墮べかりしに、禪師大慈悲の引接によりて、解脫淸果の洪福あり。極樂淨土に到ることを得たり。疑しくば是見給へ。といふ與と思へば、倶に身を轉して、忽地三莖の蓮花に變て、西に靡きて失にけり。當下木玄驚き覺て、單其事を思ふに、有にも似たり無にも似たり。折から轉る土圭の音を、聞つゝ徐に數れば、正に丑の時にぞありける。其詰朝木玄は、四郎柒六木訥等に、這奇夢を說示せば、駭歎ぜざるはなく、倶に佛法不可思議の、妙要をぞ感じける。この比又住吉の里に、今樣をよく知りたる

者ありて、九四郎に語道、那今様は容止美しく、心操も風流て、平生に歌を好みて詠けり。何なる折にやありけん、河竹の浮節繁くて、夜毎に替る枕の數の、定めなき世を果敢なみて、
今宵誰が來てやぬるらん敷たへの枕は知らめ吾またなくに
有悳る風流女なれども、其心の惑ひにて、染所宜しからず。惜むべし、其生涯を謬しは、彼に愚にして、此に賢なりとやいはまし。是に就て又一話あり。近會東に、隱沼と喚做して、才闌たる名妓の、老て女僧に做りたるありけり。書讀事を好みしかば、ある人當春世に見れし、細人の瑣言せる、隨筆やうの刻本をもて來て、是見給へとて貸たりければ、受て是を讀見る程に、其人又訪來て、那書の好歹を問しかば、隱沼の女僧答ていふやう、己を知らざる曲學者は、忌憚所なく、人を人とも思はざりけん。熟是册子をよみ見るに、只一書一說を信容れて、古より人のいひもて傳て、證文多かる、故事を誣たるもあり。或はまた方位を論ずるに、今の暦日にも載させ給ふ、金神八將神などを、取るに足らずといひしは、過當の浪言なり。抑方位の事は、近會唐舶の載來ぬる通書多かり。術者の世俗を恐嚇しぬる者、豈只金神のみならんや。倘方位の用捨を論ぜまく欲さば、唐山なる通書を、遺なく看破りて後にいふべし。意ふに這編者は、唐本などを讀うべくもあらず、其學の淺薄は、聊なる文を見ても知らる。況卷

を成たるをや。其考證ある條は、竊に人の説を取て、己が説に做せるなるべし。又近曾高名家の戯墨に、粗地名の辨あるを酷く譏りて、道灌の歌を證にしたれど、廻國雜記にも證歌あるを引ず。开を引ば己が説の窮する故なり。又東鑑にも證據あるを知らずして、おろかなり、うるさしなど、いひ罵るは怨ある故歟。譬ば陳壽が、諸葛武侯に舊怨ある故に、蜀志の列傳に、軍旅の事は拙しとて、譏りし心術に同じ、といはんは猶過たり。或は又孔子の言を引て、論語を中庸とす。何ぞ疎忽なる。人の非をいはまく欲さば、先己を正しく詳にすべし。這他珍説なりと思ひけん話も、遼東の豚に似たる事多かり。其文の杜撰なる、假字づかひの孟浪なる、けりけるけれの、天爾遠波だも知らず。是等をこそおろかなりとも、うるさしともいふべけれとて、四卷ありけるを、僅に二卷見て、其似而非册子を返すとて、戯笑歌をよみて遣しける其歌、

假字づかひ天爾遠波だにも叨なる生ものしりの生著述哉

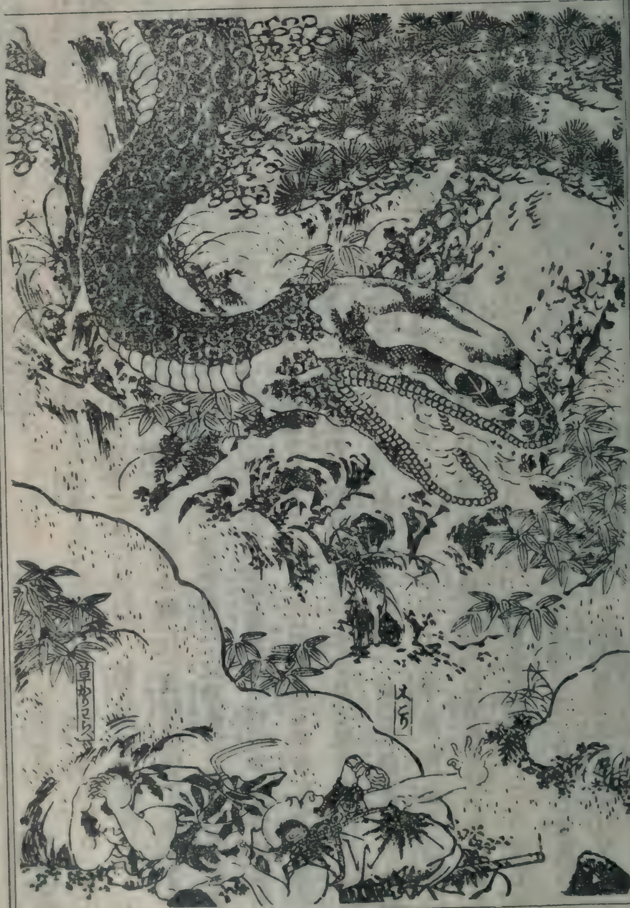
又

淺つきなわけぎも知らで人の非をいはつきねぶか口の臭さよ

世にはかくの如き才女あれども、其香臭に心つきなく、只其形狀の似たるを見て、蕙蘭も葱韮も、一草なりと思ふも多かるべし。もて辨ぜずばあるべからず、とぞいひける。こは是後の話

說なり。爾程に、殘る暑の稍退きて、七月二十日あまりに做りしかば、大江杜四郎成勝、峯張柰六郎通能は、武者修行の首途に、心只管いそがれて、倶に吉日を擇みつゝ、住持木玄に別れを告て、身の暇を乞しかば、木玄則其義を許して、柹八をもて送らするに、柹八は高野山より、既にかへりて寺に在り。四郎柰六が爲に、所要の袱包を、駝もしつ引提もして、十三屋まで從ひゆくめり。然ば木訥を首にて、同宿の沙彌等別を惜みて、出て是を目送りけり。是日亭午の比及に、杜四郎柰六は、倶に十三屋に來にければ、九四郎乙藝は豫より、准備して待て在り。柹八を勞ふて晝飯を喫せなどして、折乾には錢二緡を、取せて寺へ還し遣し、却四郎と柰六には、奥坐席にて酒飯の儲あり。萬里の首途を壽きて、去向の小心を敎誨し、且この秋は、九四郎も乙藝と倶に、大和へゆくべきよしを、說示しなどす。只這席のみならず、日暮ても其言辭ず、迭に別を惜むのみ。然とていそぐ逆旅ならねど、杜四郎と柰六は、其曉に喚覺されて、早飯果て、倶に旅裝す。路費の金子は、各勒肚に斂め、或は肌衣の襟に縫入たるもあり。杜四郎が兩刀は、那身幼りし時、父弘元の賜りたる、大江家傳の名刀なり。又柰六が兩刀は、父通世が遺刀にて、關の孫六にぞありける。行裏重かるは、路の煩ひなれば、とて、倶に身輕に打扮て、油衣管笠の外に、所要ある袱包を、背にしたるのみ。恁而其詰朝、杜四郎柰六


近江の山路に朱之介蛇腹に葬らる
朱之介


草かりこら

は、先京師まで造んとて、乙藝に年來愛顧淺からざりし、歡びを舒、且別を告て、草鞋穿締て立出れば、九四郎は六市四摠を從へて、みづから浪速まで送行て、竟に袂を分ちけり。是日杜四郎柒六は、路を走る事十三四里にして、蚤く京都に來にければ、姑且這里に旅宿して、日毎に出て洛内洛外なる、名所古跡を遊覽しつゝ、憶ず秋を送る程に、當時近江なる觀音寺の城は、佐々木近江判官高賴在住して、六角殿と稱せらる。其家累世、武功多かる、大諸侯なりければ、繁昌西の都なる、大内家の鸛峯にこそ及ばね、威勢室町殿をも憚らず、既に獨立の思ひありしかば、武藝に勝れたる浮浪人等、那城下に集合來て、仕官を求る者少からず。況城内なる諸臣には、兵法陣列、弓馬擊劍、槍棒白打に捷れたる者、多かりと聞えしかば、杜四郎柒六は、卒や是より先觀音寺の城下に赴きて、權且修行做すならば、世の英雄豪傑に、値遇する事もあるべしとて、遂に京師を立去て、近江へゆかまく思ひけり。話分兩頭。爾程に末朱之介晴賢は、落葉が財嚢の金を竊みて、走りける其夜分、峰張柒六に追蒐られ、件の財嚢を拿復されて、僅に九四郎が取せぬる、圓金五兩を得てければ、只得是を盤纏にして、投て往方は定めずも、こも亦京師に來ぬれども、洛内は憚りあれば、東山の邊にて、托たる歇店に止宿しつ、憶ず三伏の夏の日を徒に送る程に、單熟思ひ惟るに、大和なる上市は塞りなり。然ば

とて這様にて、今は故郷にありと聞えし、叔輿房に便求めて、周防の山口へはゆきがたかり。只近江國坂田郡、福富村なる、福富氏は舊縁あり。那家衰果たれども、黄金の母親阿鍵刀禰は、賽武則で村盡處に、小店を開きて在りとしいへば、先や那里へ尋行て、身の隱處に做さばや、とやうやくに尋思しつ。是より、折々市閭して、解洗たる夏秋の敗衣と、一尺五寸ばかりなる、短中刀を買拿て、聊身の皮を繕ひつ。又阿鍵へ贈る、些の土産物を准備しょかば、數日の宿錢と共に、盤纏に憑む五枚の圓金は、殘り纔に做りしかど、近江は隣國なるをもて、事足べし、と思ひつゝ、其六月下旬に、東山なる歇店を立去りて、單近江路に分入るに、坂田郡は殊さらに、山又山に連りて、去向に嶮岨多ければ、朱之介は一日にして、いまだ福富村に造り得ず。次の日も殘る暑に疲果て、山蔭なる松の下に、憩て憶ず睡し程に、忽地一箇の蟒蛇あり、太さは十圍にあまるべく、長さはいまだ量知られず、近き沼より現れ出て、松に掛りて朱之介を、只一口に呑にけり。畢竟這惡少年が大蛇の腹に、葬れて後甚麽ぞや、其は下回にこそ。

續編 卷之四下册

第三十八回

罪過を覈して晴賢阿鍵を訪ふ
小忠二怒て朱之介を逐ふ

復說、末朱之介晴賢は、近江の山路を辿りも果ず、亭午の炎暑堪がたければ、樹蔭求めて路傍なる、老たる松の下涼み、一霎時とて立よりしより、拭はで汗を納つべき、風は極樂上品淨土と、程よき石に尻うち掛て、憶ず睡りて在りし時、但見一箇の蟒蛇あり。眼は百煉の鏡の如く、舌は燃る柴薪に似て、松の幹より太かるべき、身を樹の杈より下し來つ、口を張舌を吐て、黑白も知らぬ朱之介を、只一呑にぞ呑にける。爾程に朱之介は、既に大蛇に腹せられて、蚤く咽喉を下る時、愕然と驚覺て、こはいかにと訝るのみ、いまだ其故を知らず、悄地に其頭を撈試るに、黏ること粘瓶に陷たる如く、熱きこと沸湯を沃ぐに似たり。原來俺身は蟒蛇に呑れにけん、とやうやくに、心つきても今さらに、謀の出る所を知らず。苦き隨に又よく思ふに、今手を空しく做すならば、竟に這身は消化せられて、蛇糞と做りて肛門より、出て知る

人あらずなるべし。克ぬまでも一方を、斫破らば呼吸の中に、免れ出ることなからずや、と思ふ心を勵して、腰を捜るに幸に、短刀は落も失せず。我物得たりと引拔て、腹なるべしと思ふ邊を、力に儘せて嵒煞と刺す。刺れて大蛇は苦痛に得堪ず、二十尋有餘の身を縮め、叉身を伸す七轉八倒。腹内なる朱之介も、倶に其身を拮据せられて、輾轉反側しぬれども、持たる刀の柄を緩めず、拳を定めて斫破るに、其短刀はいぬる比、骨董店にて買拿ける、價僅の賤物と、思ふにも似ず、世話にいふ、掘出物歟、鋭味精妙、刄は拳に從ふて、厚く固かる大蛇の腹を、裂こと布に異ならず。手も亦利たる危窮の剿捷、思ひの隨に斫開けば、潑と潰る鮮血の勢ひ、朱之介さへ推出されて、地上に礑と輾ぶと思へば、是なん南柯の夢なりける。登時晴賢愕然と、驚覺ても安からぬ、心神いまだ定らず、恍惚として病しげなる、頭を擡げて東西を、見かへりつ大息咽て、世とて時とて這容に、做り果しより夢にすら、虚驚きせし鈍ましさよ。吉凶いまだ知らずといへども、俺奶々の生來は、巳の年なりと聞し事あり。十二生肖巳も亦蛇なり。其腹内より生出たる、俺生來を思ふにも、相別しより八九年、音信絶てなつかしき、母親の事今も猶、忘れたるにあらねども、薄情や虐し夫の爲に、子は棄られし藪の下の、別を思へば恩でもなし。それよりも猶忘れがたきは、獨那君の事なりき。世に子寶といふめれど、

俺は黄金に優者なし。曩には悄々地なる、那洞房の細々密言に、又逢ふまでの紀念にとて、五色の玉を三個分ちて、贈れしより今も猶、護身嚢に斂めてあり。なつかしく思ふ折々は、拿出てみづから慰めよ、といはれしことも野干玉の、夜の衣の餘香も、耳に住り袂に残て、別果敢なき短宵の、彼も夢なり是も亦、地方替れば品降る、鄙を去向の山中に、草を褥の草枕、逆旅の疲勞思はずも、結びし夢こそ怪しけれ。と獨語つゝ項に掛たる、護身嚢の紐解緩めて、やをら拿出す三色の玉を、掌にうち載て、左見右見つゝ含笑て、素この玉は五色にして、其數則五あり、初福富太夫次が、蛇甑を撈りしより、獲たりといひし無類の瑞玉、宮殿人物禽獸花草、自然と見ゆる开が中なる、黄と白黑なる三色の玉は、曩に黄金に別るゝ折、俺分ち拿てこゝにあり。此は是陰玉なり。又青赤二色の陽玉は、留めて黄金が懐に在り。過にし事を云云と、思ひ出つゝ見る玉は、今も初に變らねど、替るは人の有爲轉變。俺身京師に在りし時、香西元盛主に仕し日も、後又扇谷朝興主に仕て、武藏の河踰に在りし日も、寵愛朋輩を傾けて、出頭せざる事なかりしに、皆禍鬼に損れて、得遂ざりしのみならず、果は大和の上市なる、杣木の女壻に倣降りても、其里にすら猶落着で、恩愛寃家と倣るまでに、斧柄は産後に身故りつ。分娩しゝは男兒にて、玉五郎と命名けしといふ、落葉の媼の、世迷言さへいぬる比、竊聞しても親

甲斐に、見る事克はぬ身の往方、定難たる逆旅の天に、物を思ふは愚癡なりき。と獨言つゝ餘念なく、件の玉を撮拿て、うち返し見つ左へ移し、右へ移して又見る程に、松の梢に集鳥あり、突然と降し來つ、疾こと宛投石の像く、朱之介が掌に、載て他事なく弄ぶ、三彩の玉の开が中に、黃なる一玉を抓攫ふて、虛空遙に飛去ける。勢禁むべくもあらざりし、朱之介は吁嗟とばかりに、驚慌て、向上るのみ。鳥の形も認得ず、翅なき身はいかにして、及べくもあらざれば、後悔臍を噬までに、蹉跎しつゝ恨めども、其甲斐なければ思ひ捨て、歎口氣して殘れる玉を、護身囊へ斂めつゝ、項に掛て呟くやう、俺憖に過去來を、思ひ出ずば這頭にて、黃金が紀の奇玉を、拿出て單玩んや。那畜生面が卵ぞ、と見違て銜み去にけん。こも亦意外の禍事なる哉。夫黃は中央に土象る。今其黃玉を喪ひしは、俺身住にし土地に離れて、流浪しつべき兆なる歟。或は又那玉を、喪ふべかりし前兆にて、大蛇に吞るゝ夢を見たる歟。开は左まれ右もあれ、黃金に再會しぬる折、件の玉はいかにしつる、と問れなば何と答ふべき。遮莫浮寶屋は窒なり、生涯黃金に、逢がたくば、售て許多の錢にしつべき、奇貨なるを畜生面に、もて攫れしは誰が愆ぞ。鈍きも涯りあるものを、星煞の耗ければ、心も鈍くなりけるよ。と不問語に身を擿て、腹より出す思ふ事。由なや憩過したり。卒や去向をいそがんとて、玉に

恨の玉櫛笥、二裏なる行袱を、开が儘肩にうち掛れば、中細くして首尾圓く、蟢子にも似たり蜘蛛の園の、編手の菅笠戴きて、窘くも脚曳の、山路を只管いそぎつゝ、ゆくこと二三里許にして、日影傾く夏の日の、暮るに近き久禮畑の、三池郡に辿り來にけり。這頭は大槩熟、路にて、年十二三なりし比まで、遊耽りし地方なれども、今の福富の家を知らねば、又通路人に諮て、福富村の稍盡處なる、那店鋪に來て見れば、是歟とまでに驚かるゝ、在りし昔の俤はなく、間口僅に二間に過ず、澁染暖簾酒帘、杉葉建たる又六が、門ならなくに極樂と、人はいへども世渡りは、苦しき海と山里に、憂こと繁き夏草の、しのぶにあまる萱の檐、半分は朽し板庇、哀は日々に舛賣の、地酒をや鬻ぐらん、店の傍に水埒あり、又半切の沙桶あり。裏面には左右に酒樽あり。皆吸子を附られたる。片隅に燈油樽あり。棚には大小の紙嚢に、積たる晩茶と線香あり。中折の鼻紙返魂紙あり。草履草鞋は吊されて、地天泰の象あり。年十四五許なる、一個の小厮が酒沽ふ客を、待侘しげに発兒に尻を、掛て外面を長視て居り。又店の上屋なる、錢埒の頭には、年二十八九なる一個の女房の、京染の栲の單衣の、中の時可なるに、兩麻の襷して、徒然なる歟、苧を績て在り。當下朱之介は、這店鋪の光景を、熟々とうち見入れて、脱拿る菅笠引提て、找み入らまくしぬる時、小厮は甦く聲を被て、入らせ給へく。好酒

の候ぞ。上酒は一斤京銀六分。酒の御用に候歟。と問ふを朱之介聞あへず、否、咱等は物買ふ客にあらず。大和より來ぬる旅客にて、末朱之介晴賢卽是なり。初俺姓名を、末松珠之介と喚れし時、當家に寓居の舊緣あり。阿鍵刀自は恙まさずや。このよし稟し給ひね。といはれて小厮は頭を搔て、然るむつかしく長々しき、口狀は得稟されず。先よく習ふて後にこそ。と推辭を女房吒禁めて、やよ丁太郎閣ねく〳〵。奴家が執接稟さんとて、浮桶搔遣身を起して、开が儘奥に退りける。姑且して屋主人、阿鍵は奥より出て來つ、出居に垂たる長暖簾を、推開きつゝ朱之介を、見つゝ遽しく立出て、現に珠刀禰にてありけるよ。やよ丁太郎よ、盥をもて來て、脚を濯せまゐらせずや。といふを朱之介推禁めて、否、今來ぬる路の程、一町許那方にて、底脫草鞋を解棄て、草履を買ふて穿し時、脚をば濯ぎ候ひき。饒給へと裳を下して、兩掛にせし行裹を、引提て膝衝登りつゝ、恭しく阿鍵に向ひて、三拜して且いふやう　別まつりしより八九年、御居宅こそ變りたれ、恙もまさで最愛たし。小可親子が薄命なる、義には遙けき周防なる、山口へゆきしかひもなく、叔父には得逢ず母にも別れて、身はこの年來大和に在り。這回京へ上りしかば、人傳に聞し當家の災害、胸の潰るゝ事のみなれば、いかで安否を訪まつらん、と思ふばかりの寸志にこそ。といひつゝ一箇の行包を、遽しく解開きて、出す兩箇の嚢

物を、准備の盆にうち載て、是を阿鍵に贈りていふやう、こは聊に候へども、大和綿なり吉野葛なり。土産の識と稟さんは、恥しくこそ候なれ。といひつゝ猶も指寄すれば、阿鍵は受て傍に閣て、こは御土産に預り侍り。既に人傳に聞れたらば、又いふべくもあらねども、思ひがけなき當家の滅亡、大人大夫次ないふは果敢なく世を去り給ひて、俺良人大夫五主は、いかに倣りけん今までも、信絕て知るよしもなき、景市爪作いへばさらなり、年來家に仕たる、奴婢們は泣て己が自恣、散ばひゆきし开が中に、おん身も豫面善なる、老僕小忠二のみ憑しき、忠心ある者なれば、僅に他に後見せられて、這店舖を執達侍り。身さへ心も細本錢なる、是を昔の餘波ぞ、といはれんは最恥しけれど、世なり時なり爭何はせん。然ば是等の小經紀して、明し暮しぬる事も、又年來になる隨に、小忠二には措名といふ、妻を娶らせて今はしも、夫婦に世帶を任しょより、人見ばかりの樂隱居、朝夕安きにあらねども、昔御身と中好なりし、黃金は單幸歹からず。曩に左界の親族なる、船積荷三太翁の息子の新婦に、乞れて遣したりしより、猶富榮て那里に侍り。といひつゝ外面見かへりて、やよ丁太郎奥へいて、茶を汲もて來てまゐらせずや。噫俺ながら鈍ましかりき。御身の上を問はせで、いひたき隨の身の贅訖を、傍痛く思れけん。相別しより十稔に近き、浮世は通て夢なるかな。大人備給ひし御身の面影、儴れば

年既に、二十歟二十一なるべし。遮莫優質なる所以に、倘少年の心地ぞする。奶々は今も恙まさずや。御身は又何等の故に、年來大和にいましたる。這回京師に出給ひしは、賣買の爲なる歟。夏の最中に炎暑も厭はで、よくこそ訪せ給ひたれ。有繋に昔偲るゝ、熟客に何か優者あらん。寛裕に相謂給ひね。と女主人の老婆心に、慰らるゝ朱之介は、其言毎に應をしつゝ、聞果て答るやう、然なり。母は周防なる、旅宿甲斐なく流浪の折、憶ずも相識人に、依處求めて陸奥へ、伴れたりしより、今に至りて八九年、音耗絕て候へども、恙なくこそ在べけれ。又小可は大和なる、親族許身を寓て、左も右もして在りしかど、鄙語にいふ、一舛瓢簞の、身の一生を量り思へば、憑しからず住不樂て、京に上りて賣買せん歟、然らずば良賈の、家の小廝にならばや、と尋思をしつゝ來にけるに、京師も戰馬の跡に荒て、膝を容るゝに所を得ず。賣買せんにも仕んにも、便宜なければいかにせまし、と思難つゝありける程に、人傳に聞し當家の大變、昔承たる洪恩を、復しまつらんは是時なり。御身の安否を訪まつるべく、時宜によらば生活の、帮助にこそ做るべけれ、と尋思をしつゝ來ぬるなり。給銀なンどは欲からず、然せる所用に達ずとも、心隈なく使れなば、素より願所なり。這義を饒させ給へかし。と言眞實しげに說瞞めつゝ、己が惡事を塗祕す、舌も輪るや燕脂刷毛の、色には出さぬ辯佞利口に、阿鍵は

淺く説惑はされて、承歡びつゝ點頭て、思ふに勝たる御身の誠心、最辱く侍れども、見らるる如く恁ばかりなる、寒店なるにいかにして、人がましき副管などゝを、使ふ力はあらずかし。然りとても面も難く、出ていねといふにはあらず。小忠二は京浪速に、先代の賒多くあり、非如ゆきて債るとも、今は人代り代も異なれば、誰歟よく舊算用を、果さるべくは思はねども、然ばとて那儘に、うち棄んは可惜事なり、取らるゝ涯り債りもしつべく、且左界へも立よりて、那里の安否も訪んとて、猛可に逆旅の准備をしつゝ、身單出てゆきけるは、大昨日の事なりき。非如其賒如意ならで、淹留久しくなるとても、盂蘭盆前には必還ん。其折にこそ御身の上を、告て言よく商量して、成ると成らぬは他が隨意、奴家が自由に做がたかり。其折までは店番して、留守の帮助に做給はゞ、小忠二も歹くは思はじ。先奥へ赴きて、措名にも相識に、做りて休ひ給へかし。やよ這方へ。と他事もなく、心隔ぬ長暖簾、抗て徐に誘へば、朱之介は應をするのみ、幵が儘亟には立難る、計較折けて安からぬ、肚裏に思ふやう、小忠二が京浪速を、走り遶れる賒乞は、首尾好もあれ歹くもあれ、俺に干渉る事ならねども、他果して左界に造りて、船積許止宿せば、俺と黄金が情由ある事も、又浪速の陣館にて、俺身追放せられし事も、他必聞知りて、この盆前にかへり來ば、阿鍵が商量空と做て、必俺を追出さ

ん。然る時は盤纏もなし。阿容々々と出てゆかば、智計なき者に似たれども、爿は其折に主張せん。苦に病事歟、と大胆無敵の、色には毫も見さず、猶然氣なき面色しつゝ、引れて奥にぞ入りにける。恁而措名も朱之介に、初對面の口誼果て、夕膳を薦め浴させぬる、欵待殊に淺からねば、朱之介は其甲夜間に、故にし事さへいひ出て、詞巧に慰れば、阿鍵はさらなり措名等も、詞敵を得たりとて、倶に憑しく思ひけり。爾程に朱之介は、店に敗たる蝸垂て、丁太郎と共侶に、軈て枕に就しより、長途の暑熱に疲果て、熟睡二時許にして、忽然と睡覺て、心地猛可に例ならず、全身太く發熱して、且癬き事堪がたければ、姑且も手を放し得ず、現心に抓く程に、其曉天に又睡て、起出る比は熱氣醒て、心地生平に異なることなし。只怪きは一夜の間に、朱之介が全身に、粟の如き瘡出きて、毫も絶間あらざりしを、みづからはいまだ知らず、丁太郎は夙く見出して、こは什麼と訝れば、阿鍵措名も是を見て、告るに朱之介は驚きて、袖を褰げて其手を見つ、裳を反して脚を見つ、鏡を借て照し見る、面部總身果して瘡あり。何の故なるを知よしなければ、且驚き且訝りて、肚裏に思ふやう、大蛇に呑れて死なざる者も、蛇毒によりて、宍爛れ毛髮脫て、目鼻も一緒に做る者あり、と物の本には寫しもすめり。俺大蛇に呑れしは、是假寢の夢なりければ、蛇毒に中るべくもあらず。こは浪速の陣館

にて、久しく禁獄せられたる、牢瘡なるべし、と思ふものからうち明て、人に告べきことならねば、敢又憂とせず、日を歴ば自然に愈べし、と思ひつゝありける程に、是よりの後漸々に、其瘡都て大くなりて、全身腫ざる處なければ、阿鍵措名も是を厭ふて、あらずもがな、と思へども、出ていねとはいひかねて、山歸來忍冬などを、連りに煎じて薦るのみ。然ばかりの湯液にて、瘥るべくもあらざれば、果は膿水流れ蝨生て、其臭氣に堪ざりける、人僉鼻を掩ふのみ。今は店にも在せがたくて、臥箪儲も間數なき、奥にはいよ〳〵歎しく、人に傳染んことを怕れて、僅に席二枚布たる、空小室に在せて、三度の飯を與るのみ、よく看病者なかりけり。左右する程に、二十日有餘の日數歷て、七月十一日の曛昏に、小忠二は恙もなく。京浪速の賒を果して、左界よりかへり來にければ、阿鍵措名等の歡びいふべうもあらず。軈て浴させ飯を薦めて、留守の損益を告れども、朱之介の事をのみ、阿鍵すらいひ難て、猶默してありしかば、小忠二はいまだ是を知らず。恁而其詰朝、阿鍵は竟に已ことを得ず、小忠二に叫くに、いぬる比、朱之介に訪れたる首より、他は悪瘡出來て、難義に及びし尾まで、事遺もなく告しかば、小忠二は驚きながら、聞果て答るやう、那珠之介の朱某は、人に忌るゝ破落戸にて、剰罪人に做りしかば、身を措處なき故に、這頭へ流寓來ぬるならん。其故は箇樣々々、如此々々

の情由ありとて、當春朱之介が、大和より左界へ來て、船積許止宿せしは、物買ん爲なるに、悄地に黃金と狎親みて、臭聞や聞えけん、又其事を見たりけん、荷三太翁は周防より、還ると軈て斷いふて、朱之介を追出しゝ事、其後又朱之介は乳守の娼妓今様が、自殺の事に拘づらひて、久しく禁獄せられしに、幸にして解屍人の罪を免れたりけれども、他は大和に在りし時、舊惡も亦多かりければ、三好職善主の制度として、那身を追放せられし事まで、聞たる隨に咡き告れば、阿鍵はさらなり、措名さへ、呆れて口を鉗て居り。當下小忠二又いふやう、左界にては浮寶屋の御一家兒、孰も恙ましまさず。勿論大爺荷三太主は、所以ありて棧太郎刀禰と、黃金刀禰を携て、又周防なる枝店へとて、船出做されし留守なれば、咱等は御目に懸り得ず。朱之介の事はしも、城藏主の噂にて、創めて聞知り候ひき。爾るに那破落戸を、這頭に留在らする事の、異日左界へ聞えなば、御身も亦在下も、疼からぬ腹を捞られて、歹く思はれんのみならず、第一黃金刀禰の爲に宜しからず。倘離緣などせられなば、後悔臍を噬んのみ。矧又京浪速なる舊き賖は、債りても悲乞ふても、誰も皆沙汰に及ばず。可惜盤纏を費して、浪速三界京左界まで、炎暑も厭はで西東と、走邊りて徒に、還りて聞けは無要の客あり。寃家に等しき歹人を、知らぬ事とはいひながら、留め給ひしはいかにぞや。疾追出し給へかし。

世の常言に、人增ば水增といふなるに、要なき人を一日も、養ふて何にせん。無益にこそ。と呟けば、措名も倶に慰難て、そは理りに侍れども、奶々なりとて故よしを、豫より知り給はゞ、一宿も留め給はんや。昔馴染をいひ立て、訪れし人を开が儘に、出し遣んはさすがにて、御身のかへり來まするを、俟給ひし故にこそ。といへば阿鍵も嗟嘆して、今は千萬悔ても甲斐なし。和殿術よく誘へて、出し遣なば安かりなん。といふに小忠二沈吟じて、身を起しつゝ外面へ、遽しく出てゆきぬ。約莫半晌許にして、那里にて駄買拿けん、小忠二は最故たる、座行車を牽もて來つ。却朱之介の臥簟に造りて、別後の口誼を述ていふやう、和殿舊緣ある故に、訪れしは然る事ながら、俺左界にて聞たる事あり、开はいはずとも覺あるべし。知らるゝ如く俺家は、船積氏の親族にて、且黃金が姻家なり、庇に依ざることを得ず。這故に他に對して、和殿を這里に留めがたかり。又和殿は罪ありて、浪速にて追放せられしならずや。且當國は、京浪速に遠からず、是も亦憚りあるべし。袷と云恰と云、身に瘡ある病人を、出し遣は無慈悲に似たれど、實に已ことを得ざるのみ。速に立去て、他所へ歇店を移してよ。と言苦々しく宣示せば、朱之介うち聞て、豫期したる事なれば、敢噪ぐ氣色なく、稍身を起して答るよう、开はいはるゝ事ながら、左界にて俺上を、云云と叨くいひしは、只是人の媢嫉なるを、よ

くも査し給はぬなるべし。又浪速の陣館にて、俺身追放せられしは、素より究屈の罪なるを、誰とて知らぬ者はなし。なれども出てゆけといはるゝ、宿に幾までかくであるべき。身は野曝になるまでも、俺も亦男子なり、立去る事は厭しからねど、今俺腰に盤纏なし。昔俺母の、福富翁より受拿るべき、算帳の殘りあり。其金日今遞與しねかし。と豪ごるを小忠二聞あへず、歼は何をいはるゝやらん。昔和殿親子の別に、故翁大夫次の取せ給ひし、金子は則十兩なるを、俺もよく知る所なり。其外に算帳の、遺りあるべきことかは。といはせも果ず朱之介は、呵々と冷笑ひて、小父よみづから思惟よ。俺母當家に在りし程、四稔五稔扱使れしに、給銀なンどは夢にも見ず。況世に類なき五色の玉を、返したれども其報に、何取せたる事やある。剣又黄金少女に、飽まで琴を敎へさせたる、中免許奥免許は、謝物の定あるものを、其頭も都て無賽にて、別に臨て十兩金の、餞別を恩がましく、物せられしに腹は立ども、俺母は人ゞからねば、何ともいはで受たりし。是等の殘金なしといはんや。今この折に其算帳を、果されずば神輿を居て、幾までも養れん、手鉗でも動く俺にはあらず。先其金から出さずや。と執念返しに巧人の、膝うち鳴らして說誇れは、小忠二も亦勃として、聲高やかに答るやう、歼を今さらにいはるゝ事歟。昔世盛なりし日に、故翁の慈善なる、和殿親子を年許多、留め在らせ給ひたる、衣

嘗調度の費を厭はず。和殿には其師を擇みて、手習讀書を教給ひし、洪恩海山而已ならんや。
然るを又別に臨て、十兩金を賜りしは、過分の造化なるべかりしに、其折不足をいひはせで、當
家既に衰て、昔の事に預らざりける、咱等に向ひて理りならぬ、理りを理りめかして、いはる
るとても聞く耳あらんや。然りとても出てゆかじとならば、是則豪奪なり。先村長に告知らせ
て、守へ訴奉らん。卒觀音寺へゆかずや。と敦圉暴く曳立る、其手を拂ひて毫も動ず、疾
視る聲高やかに、觀音寺でも勢至院でも、この義に就ては一分一厘、闇き事なき俺なるに、
礫子に受裝る凍藻、衝出さるゝを怕るゝ者歟。と弱目を見せぬ歹人の、負じ魂火を發す、爭
ひ果しなかりしを、前より竊聞したりける。阿鍵は开が儘出て來つ、朱之介にうち向ひて、珠
刀禰そは人歹かり、初御身の來ませし時、奴家がいひしを忘れし歟。今は有恷る寒店にて、副
管などは、要なけれども、小忠二が還るまで、止宿は然ばかり厭しからず。成ると成らぬは他
が隨意、奴家が自由に做しがたかり、といひしは今の事ぞかし。然るを思ひがけもなき、昔の
事をいひ出て、錢にせまく欲するとも、承引るゝ事にはあらず。こは聊に侍れども、奴家が
間錢なるをもて、路資にまゐらせん。觀音寺までゆき給はゞ、好藥湯もありぬべし。湯治し
て瘡愈なば、左も右もして身單の、生活種は出來もせん。由なき腹を立ずとも、鄙語にいふ膝

とも商量、人の意見に就も亦、其身の爲にあらずや。と賺勸解包金は、掻集たる藻鹽草、二分歟三分歟、紅白線を、掛たる儘に取らすれば、朱之介は默然たる、肚裏に思ふやう、小忠二が言品憎さに、俺も亦いひたき隨を、角口したれども、然りとて物になるべくもあらず。今阿鍵が和解を、聽かで二分まれ三分まれ、拿らずば俺身は圓潰に、做て立端を失ふべし。聊なりとも和解料あり、俺言品の立ぬにあらねば、是を別の潮にして、觀音寺へゆきて湯治せん、と尋思をしつゝ包金を、拿上て押て見つ、阿鍵に向ひて答るやう、教諭寔に其理あり。咱等なりとて爭ひを、好むにはあらねども、忠公が言品の、癪に障れば堪難て、いふべき涯りいふたればこそ、この人情は出來たれ。實に御身の意見に任て、觀音寺へ赴きて、湯治すべう思へども俺腰立ぬを爭何はせん。徒轎を央ふて那里まで、融通で遣りね、憑むぞよ。と豪どるを小忠二推禁めて、そは又榮曜の上裝なり。觀音寺までは路の程、五六里に餘る山路なるに、其轎錢を誰歟出さん。況今莊客は、田の莠を拔最中なれば、傭轎に出る者なし。なれども準備せざらんや。咱等今朝市に閱して、車一輛買拿たり、和郎を載て遣ん爲なり、みづから推て徐にゆかば、路費を省く便宜あり。謝狀寫て疾ゆきね。と說訖て聲高やかに、やよ丁太郎措名も在らずや。夙く膳を撤て、珠刀禰に飯を薦めよ。硯と紙を先もて來よ。と叫ぶ隨意丁太郎は、應を

しつゝ箱硯を、引提て紙さへもて來にければ、小忠二は墨摺流て、謝書の文言を、朱之介に好みなどす。既に和睦の上なれば、勢推辭ことを得ず、朱之介は阿容々々と、書寫す一通に、花押を物して小忠二に、渡す折から丁太郎は、指名が指揮の膳拵して、もて來て朱之介に薦めけり。當下阿鍵は立まくしつゝ、又朱之介に向ひていふやう、珠刀禰今は餘波に做りぬ。飽まで飯を喫給ひね。嚮にもいひし事ながら、御身を留めがたかるは、左界なる浮寶屋へ、聞えを憚る故なれば迭に疎くならんのみ。願ふは早く瘡愈て、孰の里孰の浦にも、住着給へ、と祈るのみ。然らばにこそ。と告別、了得に老婆深切の、柔よく剛を征すれば、朱之介は唯々とばかりに、飯は吮に、噎ねども、答難てぞ目送りける。恁而湯淘飯果しかば、小忠二は丁太郎にも手傳せて、朱之介が坐したる蒲團を、吊もて背戸へ將てゆきて、准備の車にうち載るに、其蒲團を折累て敷物にす。この他は敗たる蓑一箇、大きなる竹笠一箇、湯飲の碗、飯箸篭の内には晝食の握飯あり。又朱之介が從來の行裹、小腋挿の行刀、手拭扇子に至るまで、漏すことなく車に載れば、指名も背戸に出て告別す。准備遺なく整ひしかば、小忠二は丁太郎に、朱之介の坐行車を、曳せて村盡處まで送りゆくめり。事懇切に似たれども、小忠二が肚は爾らず、倘當村にて事あらば、猶係合になるべし、と思へばみづから送行て、夙く境を出さんとてなり。爾


福富の村晝
処に小忠二
朱之介を出
し遣る
朱之介


是より東　福富村掃除場
小忠二
丁吉

程に、福富の村盡處なる、他郡の境に來にける時、小忠二は朱之介に、觀音寺の城下に至るべき、去向の路を具に教て、丁太郎を將て還去りける。素より惜む別にあらねど、小忠二は思ひの隨に、朱之介を出し遣て、還るに快からざる所あり、况朱之介は殘忍なる、物の哀を知者ならねど、今は脚なき蟹と做て、他鄕に呻吟ふ憂苦艱難、獼猴の枝に離れし如く、水虎の水を失ふに似たる、心細さのやる方なさに、小忠二主僕のかへりゆくを、幾番となく見かへりけり。小忠二夫妻阿鍵の事、この下に話なし。爾程に朱之介は、是より推木を左右に拿て、みづから車を遣まくすれど、素より熟ぬ技なるに、病て腕に力なければ、一推推ては息を喘き、二推推ては車上に俯す、其苦辛いふべくもあらず。只沸々と口を極めて、阿鍵と小忠二を罵るのみ。恁ては孰の日孰の時に、觀音寺へ造んや、と思へば心焦燥ども、筋力及べくもあらざれば、ゆくこと這日は十町に過ず。饑る時は一碗の、飯を買うて喫ふのみ。宿を求めまく欲するに、人皆其毒瘡を見て、怕れて一宿も留る者なし。夜は只得稻塚の陰、或は又里の空屋の檐下に便りて、車を寄て露宿するのみ。殘暑いまだ退かざれば、晝は路をゆくべくもあらず。况雨ふり風の吹日は、路の泥土に車找まで、笠は破れて凌ぐに足らず。蓑も敗たれば雨の漏ざることなし。身は濡瘡も亦痛みて、心地死ぬべく覺る事、其折々にこれあれども、命數いまだ

盡ざればにや、恁ても猶死なざりけり。抑這朱之介晴賢は、始母親阿夏と倶に、近江の賊寨に在りし時、强人の所作を見て、長と成たる者なれば、心殘忍ならざる事なし。其後福富大夫次の、家に寓居しぬる時、其氣質見れたれども、いまだ甚しきに至らざりき。恁而香西元盛に仕し日も、又扇谷朝興に仕し時も、單龍陽の寵を負みて、竟に敗を取ざることなし。矧又大和にて、義姑賢妻の帮助を得たる、恩に報ふに仇をもてせし、其惡既に極りて、冥罰の致所、この惡病を稟たるなるべし。爾れども人の果報は、善惡倶に過世あり。報ふことの速かると、遲かると同じからず。人其遲きを見て、天を怨るは、其時あるを知らざるなり。朱之介が一浮一沈、前身靈蛇の怨に由、其終を見て知るべきのみ。間話休題。是時末朱之介は、約莫五六里なる路を、ゆくこと四五日にして、枸杞村と喚做したる、片山里まで辿り來にけり。這里よりして、觀音寺の城下へは、二十町あまりなりといへども、去向は都て山路にて、車の找むべくもあらず、權且這里に車を駐めて、將息しても克ずば、人を央ふて牽せばや、と尋思をしつゝ其曛昏に、孤屋なりける莊客の、門に車を遣駐めて、呼門て請ふよしあり。何なる事をいふやらん、开は下の回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之五上册

第三十九回

非常の根妙に奇瘡を美す
刑餘の細人迭に機會に驚く

却說。末朱之介晴賢は、枸杞村なる孤屋の、門に車を遣留めて、只管に呼門ふ程に、主人とおぼしき一個の莊客、年齢は五十有餘にて、蚊拂團扇を手に持ながら、應と答て出て來つ。朱之介を左見右見て、這癩蝦蟇が何事ぞ。曛昏に物々しく、人を呼出す事やある。手の內欲くば始より、乞はで何等の所用あるや。と叱るを朱之介聞あへず、否、咱等は、乞兒非人にあらず。福富村より、觀音寺へ、湯治の爲にゆく者なれども、身に惡瘡ある故に、人敢て宿を貸さず。稍這里まで來にけるに、前程は都て山路にて、單車を遣るべくもあらず。俺腰に些の盤纏あり、願ふは御身俺爲に、今宵より人を央うて、明日は早天に車を牽せて、觀音寺へ送らせ給はゞ、俺然ばかりの報をすべし。這義を憑まるらする。と請ふを主人はうち聞て、那はかたくもあらぬ事ながら、當村は觀音寺の、御城の普請の夫役に徵れて、壯佼每は一人も居らず。偶家に在

る者は、俺に等しき老人なれば、傭ふべき者ある事なし。那は又外を頼みねかし。と辭ふを朱之介聞あへず、然らば其人々のかへり來るまで、咱等はこの地に車を留めて、姑且將息せまく欲す。見れば前面に空小屋あり、要なくは咱等に貸て、四五日起臥を饒し給はゞ、其房錢は佗とまゐらせん、いかで〳〵。と請求るを、主人は聞つゝ沈吟じて、那里は咱等が稲置小屋にて、只今は要なけれども、出處不定の孤旅客の、而も難病ある者を、留ることは做しがたかり。と固辭ば朱之介は恨しげに、其顏熟々うち向上て、思ひ出たり、珍しや、和主は是三池郞なる、宿六叟にあらずや。と問れて主人は膽を潰して、那をいかにして知られけん。抑和郞は何人なるぞ。と問復されて、然ばとよ。咱等は八九年前つ比まで、母親と共侶に福富許寓居したる、末松珠之介即是なり。和主必覺あるべし。今は姓名を改めて、末朱之介晴賢と喚做て、久しく大和にありけるに、福富には猶受拿べき、算帳の餘波ある故に、そを乞んとて來にけるに、其次の日よりこの瘡出來て身の難義に做しかば、和主の宿所を訪ざりき。然るを小忠二が貪慾なる、遞與すべき金子を渡しはせで、觀音寺へゆきて湯治せよとて、車に載て追出したり。腹は立ども身の甲斐なさに、稍這里まで來つるなり。和主は又何等の故に、三池郞に居らずして、這頭に轉宅したるぞや。と問へば宿六嗟嘆して、和郞の面影變りしかば、名告られねば

知るよしなきを、現に聲音に覺あり。原來珠刀禰にてありけるよ。人の落魄は知られぬ者にて、只痛ましく思ふのみ。這里は咱等が宿所にあらず。舍弟留守七と喚做す者、夫婦身故りたりけるに、其子盆九郎は夫役に徵れて、家を守者なき故に、只得咱等が留守するなり。阿加加は三池の宿所に在り。昔馴熟の和郎なるに、非如難病なればとて、空小屋ばかりは貸もせん。觀音寺には溫泉なし。藥湯風爐はあるなれど、然る難病の愈たりといふ、噂を聞くことあらざりき。今些し瘥らば、那里へゆきて名ある醫師に、療治を乞ふこそよかンめれ。其折までは那里にて、徐に將息し給ひね。と懇切に慰めて、軈て車を推遣りつゝ、件の空屋へ資入れて、菰莚二枚を、布儲などしつゝ、朱之介の臥簞にす。其後大きなる、握飯三四箇と、煎茶の土瓶執添て、もて來て夕餉に取らすれば、朱之介は且感じ、且歡びに堪ずして、犢鼻褌に結著たる、金一分を撈出しつ、是を宿六に贈りていふやう、こは聊に侍れども、今より後の食料に、先受收め給ひね。といふを宿六聞果ず、いかでかは其義に及ん。人竝ならぬ和郎の難病療治に多く錢は沒べし。瘥て後にこそ、謝物とならば受もせめ。今は要なし〳〵。と辭うて出てゆきしかば、朱之介は一錢を、費さずして三度の飯あり、僅に安身の所を得て、八月の時候まで這里に在り。約莫この一村は、枸杞最多かる地方にて、芟棄れども又生出て、せんかたのな

き隨に、家毎に是をもて、生牆に做さゞるはなく、或は田園の畔などに、この物多きを芟拿て、薪にすれども盡ざれば、人喚做して枸杞村といへり。枸杞は素是神藥にて、顏色を增、鬢髮を黑くし、齒を固くし、精を壯にす、皆是補益の良劑にて、脾胃を調瘀血を和げ、毒瘡を治し、雨濕を拂ふ。この他の效驗、枚擧に遑あらず。しかれどもこの地の愚民等、是を知る者あることなければ、徒に藪を做て、芟ども盡ざるを患とす。然れば秋八九月に至る每に、其實紅に染做て、有繫に長視なきにあらねど、枝に刺あれば手折者なく、況食料に做すに當らず、只春每に、其嫩葉を摘採て、蒸て煎茶に代る者あり。この故に本村の莊客は、長壽七八十に至る者あり。しかれども其經驗を知らず。世に千里の馬なきにあらねど、李伯樂にあらざれば、誰歟よく是を知るべき。そをもて畋圃に糞ふのみ、良藥も是に似たる事あり、只知らざるを怨とす。閒話休題。爾程に朱之介は、䋎九郎の窖小屋、に單起臥しぬる程に、秋も八月の中旬になりて、袷衣欲かる時候なれども、件の小屋の邊には、一叢の枸杞藪あり。又左右三面には、枸杞の生牆ありければ、長脚蚊はいまだ亡ずして、晝も身に寄るを拂ふのみ。夜は漸々枕に聚く、虫の聲より外に友なく、衣片布く霜は置ねど、折から十五夜の月隈なく霽て、茂林を匣る鴉の聲す。罪なくて配所の月を、見まく欲といひけん、昔の歌人の風流には、似るべくも

あらざりける。賢となく不肖となく、人靜なる時は、萬慮袪きて妄想なし。動くによりて慾情起る。孑しと知りつゝ做す事あるは、慾を禁め得ざればなり。譬ば朱之介の如き者も、難病既に身に逼りて、只其平愈を祈るの外なく、思慮を費す所あらず。矧又今宵は特に、天霽月明にして、睡んとするに宿も寢れず、只得淸光の下に坐して、單更闌るまで在り。浩處に、最小なる兩箇の獸、忽然と出て來て、朱之介の身邊に在り、朱之介是を見て、田鼠ならんと思ひしかば、手を拍鳴らして是を逐ふに、走りて枸杞藪の内に入りつ。姑且して又出て來ぬるを、朱之介は月を燭に、其小獸を覘見るに、鼠にはあらずして、形狀狗兒に肖たりしかば、深く心に訝りて、こは奇き獸なるかな。生拘て人に賣らば、錢に做ることなからずや、と尋思をなしつゝ傍なる、竹笠をそと引よせて、猶近づくを俟程に、又只件の、小獸は、敢人を怕るゝことなく、又朱之介の膝の邊へ、うち連立て來ぬる時、待儲たる朱之介は、手ばやく准備の竹笠もて、阿呀と叫びてうち掩へば、獸は逃るに暇なく、二頭ながら笠に布れて、透を求めて出まくす。當下朱之介思ふやう、這奴些し傷ずば、捉迯す事もあらん。要こそあれ、と車の推木を搔拿つ、笠の上より、漏す曲なく突しかば、兩箇の獸は弱りにけん、寂として音なく做りぬ。今はよき比なるべしとて、やをら笠を拾げて見るに、果して奇しき兩箇の獸は、死して

笠の下に在り。生拘まく思ひしに、突たればとても笠を隔て、身を傷るに至らざりしに、脆き奴かな。と呟きて、やをら拿抗て又よく見るに、頭より尾に至りて、長僅に四五寸に過ず。形状は狗兒に似たれども、眞の獸にあらずして、正に是木の根にて、彫るが如くおのづから、狗狀を倣せるなり。造化の精妙涯りなき、這天工に又驚く、朱之介は呆果て、左さま右さま思へども、素是何等の物なるを知らず。其形の奇きのみならず、馥郁として香氣あり。啖はゞ饑を凌べき、事もやあらんと思ふにぞ、夜は丑三の時候にして、既に物欲しく做りしかば、試に其一箇の獸の、前脚を嚙見るに、木根なれども塗れし壤なく、味甘くして固からねば、敢手を放つことなく、憶ずも其一箇を、遺なく喫盡しゝかば、立地に飽滿して、心地清爽に做りにけり。遺る一箇は人に見せて、後々までの話柄に、做さばや、と思ひしかば、开が儲飯簍篭の内に斂めて、是をもて枕にしけり。有恁りし程に、朱之介が全身の毒瘡より、猛可に水膿の流るゝこと、雨の樹杪に沃が如く、石滴の山より溜るに似たれば、朱之介は驚きて、手拭をもて是を拭ふに、單衣さへ絞る可に、身の濡るゝこと一時有餘。其曉天に水濃の、流も出ず做りしかば、身も隨て輕く覺て、且睡眠に堪ざれば、單衣の乾くを侯たず、赤裸にて車蒲團を、被て、熟睡したりける。恁而其次の日に、宿六は例の如く、炊ぎし朝飯を喫果て、野用巡

など して來ても、朱之介はいまだ覺ず、他は難治の病人なるに、倘宿沒などすることあらば、反て村の厄會にて、俺錢の沒事もあるべし。呼覺さばや、と思ひつゝ、握措たる朝飯に、團味噌煎茶を拿添て、空小屋へもてゆきつ。軋らぬ蓆戸推開て、やよ珠刀禰起給へ。日の高きこと三四丈、巳牌は既に過たり。やよ起給へ。と呼覺せば、朱之介は應と答て、被ぎし蒲團を掻遣りつ、赤裸にて起出るを、と見れば又怪むべし、他が全身透間もなく、抓亂したる毒瘡の、一夜の間に餘波なく、皆悉愈果て、瘡痂だにも遺者なく、面部總身潔白く、全身美しく做りしかば、宿六は膽を潰して、是は什麽。とばかりに、卽今見る所をもて、事云々と朱之介に、告て其故を諮れば、朱之介も亦驚きて、みづから手を見つ脚を見つ、頭と顏を拊て見て、其瘡瘥り果しを知る、歡びに堪ざれば、既に乾きし單衣を、掻拿つ是を被て、遽しく帶を結びて、謝して宿六に答るやう、小父よ、俺瘡の愈たるは、箇樣々々の事ありとて、昨宵兩箇の奇獸を、捉得たる首より、折から物欲くなる隨に、其一箇を喫しかば、猛可に瘡より水出て、拭ふに遑なかりし事、其後睡眠を催して、今まで熟睡しける尾まで、說盡して又いふやう、件の獸は最小さなる、狗兒に似て眞物にあらず。實は木根の天然と、其形狀を做せるなり。とばかりいふては人疑ふて、虛談にこそせられめ、と思ひにければ其一箇を、留めて則這里に在り。是見

給へ。と飯箸を、開きて件の奇木根を、拿出て那が儘指示せば、宿六は聞事毎に、感嘆の聲を得絶ず、件の木根を、左見右見て、且歡びて談ずるやう、此は是豫聞く、枸神と賦喚做たる、神藥にこそあらんずらめ。世に得がたき良劑なるに、和郎不用意に是を獲て、黒瘡立地に愈けるは、年來信ずる神佛の、利益にもやあるべからん。就て一條の話說あり。近曾觀音寺の城下に、五足齋延明子と喚做したる、一個の醫師あり。那はいぬる比俺們、留守七夫婦の大病の折、久しく療治を乞しかば、咱等も粗面善なり。しかるに那吾足齋に、一個の女兒あり。其名を晩稲とか喚れて、今玆は十六七歲なるべし。儔稀なる美女なれば、觀音寺の城内にて、第一の權臣なる、多賀某甲殿に戀れて、既に媒談ありけるに、無慙や件の小姐さまは、面瘡猛可に那身に出來て、花の顏忽地に、羅刹の如く做り給ひしかば、二親痛く憂歎きて、素より家業の事なれば、和漢の藥種、價を惜まず、煎藥膏藥、いへばさらなり。或は煉藥藥風呂、療治にをさ〳〵術を盡せども、竟に效驗あることなければ、吾足齋嗟嘆して、俺療治今はしも、盡たるに似たれども、猶一箇の奇藥あり。枸神を用るにあらざれば、卽效を得がたかるべし。述異記にいはずや。人參千歲なる時は、其精化して小兒に做りて、夜出て藥圃に遊ぶ事あり。枸杞も亦千年なる時は、其根化して狗兒に做りて、夜出て遊ぶこと、人參に相同じ。所云枸神は

卽是なり。この事載て本草にもあり。然りけれども古より、和漢の名醫是を得て、よく用ひし者極て稀なり。况今京浪速の、藥舖にはあるべくもあらず。但し枸杞村は昔より、枸杞最多かる地方なれば、其地の莊客是を得て、藏措者あるべき歟、是も亦知るべからず。非如然る者あらずとも、多かる枸杞の根を穿て、形狀狗兒に似たるあらば、俺百金をもて是を買ん。急々如律令、と書寫して、當村の衆人に就て、求むること急なりければ、慾深き毎は、各家の四下なる、牆ともいはず藪ともいはず、皆枸杞の根を穿啓きて、狗兒に似たるを探まくすれども、素よりあるべき物ならねば、勞して功なきのみならず、果は胡慮になりにけり。こは七月の事にして、然ばかり久しき話にあらず。然るを和郞は手も濡さで、枸神兩箇を輙く獲て、其一箇をもて身の毒瘡に、卽效ありしは十二分の、好造化といふべきに、殘る一箇を金百兩に、賣らば冥加に餘りぬる、一大奇事にあらずや。と鼻蠢めかして說諭せば、滿面笑るゝ朱之介は、听つゝ憶ず雀躍して、そは又奇なり妙なるかな。和主夙く媒妁して、這奇貨を百兩に、賣て其金子を受拿らば、俺其折に報をせん。徒にはあらず骨折給へ。と憑めば宿六點頭て、其はこゝろ得たり。しからんには、俺は枸神を携て、吾足大人許赴きて、見せて機にだに入るならば、其折和郞を將ていなん。既に身の瘡愈たるに、幾まで歟這里にあるべき。卒母屋へ

來て留守し給へ。善はいそげ、といふ事あるに、一刻なりとも早きがよけん。といふに朱之介再議に及ず、しかるべし。と應つゝ、件の枸神を飯笥笆に、容たる儘に宿六に、遞與して倶に母屋に造れば、宿六は持かへりたる、握飯と煎茶の土瓶を、地炕の邊に閣きて、遽しく葛籠より、洗晒して粘剛なる、單衣と麻の外套を、出しつ、手疾く被更つゝ、帶引結て枸神の笥笆を、懐へ犇と歛めて、又朱之介に向いていふやう、哥々握飯に倦たらば、飯櫃は這里にあり。やよ又茶を煮て手裝にし給へ。いで〳〵。といひつゝも、脚半草履引穿て、立出る時菅笠を、掻拿つ戴きて、觀音寺を投ていそぎけり。爾程に朱之介は、早飯を喫などして、單宿六のかへるを俟に、昨宵はこの曉天まで、得睡らざりければ、詞敵もなき宿に、單徒然に堪ざれば、横臥しより嗜睡くて、この日未牌過る比、稍覺て起出て、又晝飯を、喫果しなどせし程に、宿六かへり來にければ、朱之介は出向へて、小父よさぞ熱かりけん、那里の首尾は甚麼ぞや。と問へば宿六、好首尾々々、亓は緩やかに話すべし。朝夕は冷やかなれども、頃者の秋日和にて晝は暑中に異ならず、八朔の晴衣を絞るばかりに濡したり。この汗を先晒乾てこそ。といひつゝ帶を解捨て、單刺子に脫更る、手も遑しき澁團扇、扇ぎも果ず箇茶碗に、澁茶汲受り、一呼吸に、飲て亓が儘高胡座、却朱之介に向ひていふやう、哥々先听給へ。咱等嚮に觀音寺なる、

五足大人許赴きて、面談を請稟しゝに、折よく大人は在宿にて、卽出て對面あり、綷の來意を問れしかば、咱等枸神の一義を告て、こは俺家に寓居の旅客、朱之介と喚做す壯佼が、不用意にして兩箇を獲たる、其一箇にて候なり。綷の所以は箇樣々々、と和郞が毒瘡難義の事、又其枸神一箇を喫て、一夜の間に毒瘡の、餘波もあらず愈しよしを、言詳に說示して、曩に我村中へ寄させ給ひし、告文に違ふことなく、價百金を賜らば、朱之介は賣んといへり。先覽、と飯箸篋を、開きて枸神を指出せば、吾足齋は聞事每に、感悦特に淺からず、やをら枸神を拿抗て、左見右見る事半晌許、含笑れたる額を撫て、俺徵るは是なり是なり。遮莫世に稀なる者なれば、俺も見ること多からず。然れば目前這枸神の、眞僞をいまだ定めがたかり。先俺女兒に是を用ひて、面瘡に卽効あるならば、這價金百兩は明日必遞與すべし。言相違なき照据には、先や手實を取せんずとて、軈て手親筆を染て、其一通を書寫しつ、印して是を渡されしかば、咱等則受拿て、明日と契りて退る時、吾足齋又宣ふやう、明日といへども早天より、問れなば藥の效驗、いまだ詳ならざりせば、事不便にこそあらんずらめ。未牌の時候より其人と、共侶に來るならば、俺も在宿して俟べきなり。こゝろ得てよ、といはれにき。吾足大人の奧ざまには、いまだ御目に掛らねども、この義を夙く知られけん、歡びの聲聞えたり。

是好首尾にあらずや。と說誇りつゝ、件の手實を、拿出て渡せば朱之介は、受拿て開き見る
に、其書に道く、

可買取藥種の事

枸神一枚、價直金百兩也。右於即效有之者、明十七日、金子無遲滯可渡之候。爲後
照手實仍如件。

享祿三年八月十六日　　吾足齋　延　明印

旅　人　朱　之　介丈
保　人　宿　　　六丈

とありしかば、朱之介は含笑て、是だにあれば百兩は、明日未後にものいはず、受取るは知
れてあり。小父よ這前祝に、醉を盡して寢て待ん。有愆る果報を徒に、澁茶啜りて居ること
かは。といひつゝ先件の手實を、疊み斂めて懷より、金一分を搔撈出して、宿六に遞與して
いふやう、小父是をもて好酒二斤と、何まれ殽を買もて來よ、生鮭は這頭になし。源五郞鯽
魚、瀨田蜆、豆腐に初茸もよかゝなん。錢をな惜みそこゝろ得てよ。といへば宿六うち笑ひて、
まだ那金子を手に拿らで、一分郤舍は早かゝずや。俺よき程にものしてん。いで〳〵。といひ

つゝも、緒付の籠引提て、市を投てぞ出にける。爾程に朱之介は、宿六がかへり來ぬるを、俟こと約莫半晌許、下晡に做りし時候、宿六は思ひの隨に、酒と酒菜を買拏りて、左右に引提てかへり來つ。罇と籠を階框の、頭にやをら閣きつ、是を朱之介に見せていふやう、朝市ならば、自由なれども、夕市には然せる物なし。和郎の機には入るまじけれど、是でも五緡費したり。といひつゝ殘れる銀と錢を、拿出て還せば朱之介は、手にだも觸ず推戻して、然ばかりの錢何にせん。开は又明日の飲料に、小父預りて別當せよ。といひつゝ提籠引よせ見て、噫無慙やな炙鯽五串、泥鰌一笊、油のやうなる酒一升、豆腐はあれども初茸なし。是で五百は高間の原に、留まり給ふ八十萬の、神には御酒を獻せずとも、夾殺のなき代に、蟹味噌擂て汁にせん。小父先蒸を燒ずや。と我から口に使るゝ、客と主と二人して、抓料理の兩三種、迭に骨を折暦手の、茶碗酒には間沒らず、夙くも罇を盡しける。現に張樊が當喫に、物見の松と杉箸を、裂て養齒に使ふまで、强飲敵なき癖なれば、己が隨なる戲言を、譚返しぬる自負傲慢、竟には俱に醉臥て、日の暮たるも知らざりけり。恁而其次の日に朱之介は、日屬膿に塗れたる、單衣を洗などして、乾くを俟て是を著て、市に出て浴しつ、髮を結せてかへり來ぬれば、秋の日最大短くて、旣に未牌の時候に做りけり。時分はよけんと宿六を、いそがしつゝうち連立て、

吾足齋許赴くに、宿六は異議に及ばず、今日事成らば百兩の、十分一は俺物なり。いかで障る事あらで、金子受拿せて一本錢の、福分させん、と肚裏に、思へば倶に歩も找みて、疾く觀音寺へ來にければ、朱之介をば丹が儘に、那宿所の門に立せて、宿六先裏面に入りて、聲高やかに呼門ふ程に、奥の方にて應と答て、吾足齋出て來つ。宿六を見て笑しげに、こは早かりきよき折なり、先這方へ。と請登すれば、宿六は唯々とばかりに、軈て玄關にうち升りて、吾足齋と面談す。當下朱之介は、那聲をうち聞て、是必屋主人、吾足齋ならんと猜して、外面より闚窺るに、物色安定ならねども、年齢は正に是、四十餘にて總髪なり。身には仁田山紬を、縹綞に染做たる單衣を被て、聖柄なる短刀を佩たり。當下宿六は、吾足齋にうち向ひて、昨日見せまゐらせたる、枸神は卽效候ひし歟。御約束で候へば、活主を相倶して、伺ひまつり候なり。といふを吾足齋聞果ず、然ればとよ其事なれ、昨日和主がかへると軈て、咱等枸神を製劑して、拙女晩稲に服用させしに、味最宜しとて、時を移さず其一劑を、背盡したりければ、心地清爽に做りぬといへり。恁而其曛昏より、晩稲が面瘡の腫増て、膿水の流るゝこと、涌成す泉に異ならず。さてぞ拭ふに遑もなく、約莫一時許にして、膿竭て地腫減じ、病人は快げに、軈て睡に就しかば、敢又驚さず、母は枕方に是を護りて、其覺るを俟程に、今朝

しも巳の時候に至りて、覺て起出るを見れば、晩稻が面瘡瘥り果て、瘡痂だにも殘る者なく、其容止は病ざる時に、倍て美しく做りしかば、那身はさらなり俺們夫婦が、歡び何事か是に勝べき。然れば晩稻に浴させ、髮結化粧に時移りて、今身裝を果しにき。有恁れば彼媒談に憚りなく、俺情願を果さん事、誠に枸神の卽效に由れり。然れば約束に違ふ事なく、那代金を遞與すべし。活主朱之介とやらんにも、咱等目今對面せん。這意を傳へて伴ひ給へ。といふに宿六再議に及ばず、歡び承て答るやう、开は又愛たき涯りに侍り。小姐樣の面瘡御平愈と、朱之介が毒瘡の、平愈と其事相似たり。現に神藥の效驗は、爭ひがたき者にこそ候へ。金子をば他に賜りね。手實を返しまゐらすべけれ。といひつゝ聽て身を起して、走出つゝ朱之介に、件の首尾を叫き示せば、朱之介は天に歡び、地に喜びて點頭のみ、餘談に暇なき折なれば、引れて玄關に登り來つ宿六は云々と、執合すれば吾足齋は、是へ〳〵。と招くにぞ、朱之介は阿とばかりに、膝行頓首初見參の、禮を做す事大かたならず。僅に頭を擡げていふやう、昨日は宿六の媒妁にて、御用に達し奇藥の卽效、仰示させ給ひぬる、御歡びを査しまつりぬ。いかで價の百金を、目今遞與し給ひねかし。と乞ふを吾足齋うち聞て、开は勿論の事なりかし。百術盡たる俺女兒晩稻が面瘡の一夜の間に、愈て痕だにあらず做りしは、正に和殿の賜なり。和殿は大和

の人と歟聞ぬ。料らざりける對面なり。やよ先近く找み給へ。然ばかり介意することかは。といはれて朱之介は辭ふによしなく、しからば饒させ給ひね。と應つゝ膝を找めて頭を擡けて吾足齋に、うち向ふ時創て知る。心の驚き大抵ならず。憶ずも聲を被て、御身は是辛踏氏、无四郎主にあらずや。といはれて驚く吾足齋は、睛を定め、倩と見て、思ひがけなや、現に和郎は、珠之介にてありけるよ。幾の程にか大人備て、童顔の耗たれば、見忘れしこそ鈍ましけれ。汝の母は奥に在り、夙く逢して、歡ばせんず。といひつゝ聲をふり立て、やよ老婆、其里にや居る。珠之介が來つるぞよ。出て對面し給はずや。と兩三番呼はれば、阿夏は夢歟とばかりに、慌惑ひて出て來て、朱之介を見つ、宿六を、見つゝ二たび膽を潰して、現に珠之介でありけるなり。思ふに倍て大きう倣にき。主の見忘れ給ひしも、故なきにあらずかし。宿六主さへ連立て、訪來ませしは不思議の再會、誰に聞て歟珠之介を、將て來て逢し給ひぬる、御情こそ嬉しけれ。と謝すれば又宿六も、呆るゝこと半晌許。頭を搔つゝ答るやう、否、小可は這御宿所を、然る方ざまとは思ひもかけず、昨日枸神の事に就て、推參しまつりし折、故弟留守七の、噂の外に餘談なく、今日珠刀禰を將て來つるのみ。人には聞くこと候はず。といへば吾足齋點頭て、然なり、和主の事はしも、阿夏に聞たるよしあれども、今は忘れて思ひも出ず。名

を宿六と告られても、其人なりとは知らざりき。况大和の旅客なる、枸神の沽主朱之介と、いふ名は昨日より聞たれども、實は俺乾兒なる、珠之介にてありけるを、神ならずして誰歟悟らん。开は其該にあらずや。といひつゝ呵々とうち笑へば、朱之介は母親阿夏と、吾足齋にうち向ひて、別まつりしより八九稔、猶陸奥に在するならん、と思ひし者を思ひきや、幾の比に歟這郷へ、移り來まして今料らずも、再會の本意を遂んとは、世に稀なるべき幸ながら、大人の姓名俺名さへ今は昔に同じからねば、迭に知らず知るよしもなく、酷く無禮を仕りぬ。と陪話ば阿夏は恥たる色あり。朱之介にうち向ひて、名を改めしは主と汝と、又只二人のみならず、俺身も亦故ありて、近曾這里へ來ぬる時より、名を更めて老苧の刃自と、喚做され侍りにき。この餘會話は、亟に盡すべくもあらず。宿六叟も共侶に、卒這方へと請我むれば、吾足齋も倶にいふやう、多くもあらぬ若黨奴隷は、前日猛可に故ありて、身の暇を取らせしかば、折から無僕の宿にして、然せる欵待は得ならずとも、心ばかりの酒盃を、薦めて歡びを盡さゞらんや。卒先奥へ。と右ひだりより、誘ひ立て已ざれば、宿六は困じながら、應をしつゝ朱之介を、立せて倶に奥に入る。儲の席は六疊可を、布成たる小室にて、檐廊あり莎庭あり。朱之介と宿六は、相雙びて、客坐に就ぬ、无四郎の吾足齋と打讀ふてありし時、程遠からぬ酒肆の小厮が、

所用を聞に來にければ、阿夏の老苧は悄やかに、酒殽を吩咐て、いそがし立て遣しつ。女兒晩稻に茶を煮させて、手親是を宿六と、朱之介に薦などす。姑且して酒肆の小廝が、酒一罇と酒菜幾種歟、引提の沙桶に容たるを、背門口よりもて來にければ、老苧は是を受拿て、錢を還して小廝をかへしつ、晩稻に酒を盪させて、或は碗或は碟子に、酒菜を裝分などしつゝ、酒盃銚子と共侶に、次第に客座席に安排て、晩稻に酌を執する時、朱之介等に告ていふやう、こは俺家の螟蛉女兒にて、名を晩稻と喚做侍り。陸奥に在りし時、吾足齋主をいふの親族の孤にて、便著なき者なれば、年七許なる時より、養ひ取て今はしも、年來に做侍り。珠之介には義女弟なり。宿六叟も相識に、做給ひね。と正首に、女兒自慢の親心、執合すれば朱之介と、宿六も應をしつゝ、倶に目を擧て晩稻を見るに、面瘡病たる少女に似ず、世に稀なるべき美人にて、沈魚落雁、閉月羞花、といふべからん、玉顔雪膚、鄙にして鄙ならず、眉連れる蝦夷遠からぬ、陸奥の盡處にしも、這個小町もありけるよ、と思へば倶に羞慚みて、初對面の口狀も、果敢々々しくはいはざりけり。恁而吾足齋は、宿六等に揖讓して、盃を創るに、主も客も強飲家なれば、獻酬の間には、長談多辯餘念なく、倶に笑局に入りにける。當下老苧は、朱之介にうち向ひて、珠よ汝は這年來、孰地に歟身を寓たる。俺身陸奥に在りし時、京師の便に書

傳て、雁の翅に書の數、兩三番に及ぶまで、西殿へとて訪せしに、往方知れず、とのみ聞えて、術も歎きの杜ならで、神に佛に願言の、今日屆きしこそ娛しけれ。是に就ても痛ましきは、福富翁の事なりき。俺身この地に旅宿の比、人の噂に聞知りたる、那家の禍鬼は、又いふべくもあらずかし。宿六叟は何等の故に、三池郡に在らずして、何どて枸杞村に移り給ひたる。給と云恰と云、情由を聞ねばこゝろ得がたかり。具に告よ、甚麼ぞや。と問れて朱之介は嗟嘆に堪ず、受て手にある盃の、酒を一口に飮乾て、主に返して答るやう、奶々の疑寔に所以あり。俺身御身に別し後、日野西殿兼顯卿の紹介にて、香西元盛主に扈從しつ、寵遇時を得たりしに、元盛主には人の爲に、讒訴せられて撃れ給ひぬ。其折俺身は辛くして、海を涉しつ播磨路と、備前國の封疆なる、三石の城に屆りし時、料らずも叔父興房主に、環會ける歡びあり。是時より俺乳名の、珠之介を改めて、末朱之介晴賢と喚做たり。こも亦小父公の敎によれり。然れども那里に留められず、則小父公の指揮にて、武藏の河踰に赴きて、扇谷朝興主に仕しより、愛顧老黨に彌增て、出頭せずといふことなく、大和へ使を奉りつ、沙金白布を多く齎して、遙に那地に屆りし時、山賊の爲に薛せられて、那御物を喪ひしがば、進退其里に谷りて、せん術のなき折から、俺亡父の前妻と聞えたる、落葉の刀自の姪なりける、斧柄少女の大厄難


離合時あり
小人僥倖と
なり


朱之介
おまね
宿六

を、咱等料らず救ひたる、恩義によりて女壻にせられて、三稔以來那家に在り。單生活に骨を折て、よく岳母に仕しに、斧柄は曩に難産にて、身故りしより岳母の、心始の如くならず、折に觸ては燻さるゝが、最難面ければ、辭し去りつ。徑に浪速に赴きて、十三屋てふ宿店に、逗留して在りし時、人の爲に誣られて、思ひがけなく浪速なる、陣館へ召捕られて、久しく獄舍に繋れしに、そも亦冤屈の罪なれば、竟に俺身の厄解けて、世間廣く倣しかど、纍紲なければ福富なる、阿鍵に錢を借んと思ひて、單那里へ赴きける、其次の日より身に瘡出來て、打臥て在りけるに、小忠二が殘忍なる、錢をば貸さで罵るのみ。果は俺身を車に載て、遂出されて端なく、理には勝ども威勢に、克よしなければ辛くして、枸杞村まで來にける程に、宿六叟に環會て、厄會に倣しより、枸神の卽效、惡瘡平愈の、俺身安かるのみならず、創て逢見る義女弟、晩稻が面瘡瘥り果て、思ひがけなく親達に、今日再會は豫の情願、得易からざる幸なるかな。と口に信する巧言多辯、現に小人の癖なれば、舌の劍は莫邪にて、恩ある人を恩とせず、是を誣るに怨を以し、惡事を祕して身の非を飾る、其誣作も時に取ては、實事ならずと听者なければ、吾足齋晩稻いへばさらなり、宿六さへに感激して、嗟嘆に堪ぬ形が中に、阿夏の老苧は涙睜て、朱之介に向ひていふやう、思ふに増たる汝の艱難、三石とやらにて、小父公

に環會けるを、今聞だにも歡ばしく、思ふものから、久後遂ず、何どて果敢なく別にけん。それだにあるに大和にて、木偶介主の前妻の、女壻に做しは其家の、女兒の危難を救ひたる、恩義に二たび結れぬる、舊き緣しの故なれば、开は切てもの事ながら、家の女兒の身故りしとて、汝に慘刻中りけん、落葉の老婦の腹黑さよ。舊怨を思へばや、憑しからぬ岳母の、機嫌を然しも取難て、辭し去りしより浪速にて、冤屈の罪の縲絏、かゝる憂身に枉津神の、夙くも解けし夏の霜、月さへ雨の漏宿を、賴に堪ず福富へ、辛くも尋ゆきけんに、那家今は衰へて、昔の如くならずとも、小忠二が慳貪なる、舊熟兒を思ひはせで、主人良していかにぞや、恩をも知らず、義も知らず。現に塵の世の塵塚に、在とし人に人らしき、人のなきこそ怨なれ。开は左まれ右もあれ、今日より大人の資助あり。發跡るまで玆に居て、時を俟こそよかめれ。と詞雄々しく諭すのみ。只己が子の虚言を、實語と承て身勝手に、耳を貴む婦女子の愚癡を、宿六は慰難て、喃阿夏樣、开は理りに侍るかし。咱等も今は福富へ、疎ければ小忠二叟の、心術をよくも知らねど、大夫次大人のあらず做ては、憑しからぬ事もあるべし。其頭には同じからぬ、咱等が枸杞村に來て居るは、一向留守居なき弟の、孩兒の後見すればなり。阿加々は三池の宿に在り、折に觸ては御身の噂を、いひ出ける日も多かりしに、今日の團坐を聞知らば、然ぞ羨

しく思ひ侍らん。單咱等が手に乘ぬは、侄盆九郎のみなりき。錢だにあれば酒を喫ども、親の藥禮を今に果さず、大人に御無沙汰仕りぬ。と陪話るを吾足齋推禁めて、いかでかは其義に及ん。俺始より珠之介に、俺素生を告ざりしは、其比他は童年にて、いふかひなきを思へばなり。今は昔と同じからぬ、他にこの義を說示さずば、疑ひ氷解すべからず。宿六叟は老實の舊識、倶に听ともけしうはあらず。いで〳〵。といひつゝも、又酒盃を遣袱して、說出す一條の、文多ければ盡しがたかり。开は又下回にこそ。

第四十回

吾足齋盃を擧て往事を詳にす
晩稲袖を拂て獨閨門を正くす

登時辛踏无四郎の吾足齋延明は、朱之介と宿六等にうち對て、目今もいひつる如く、珠は咱乾兒なり。又宿六叟は、俺渾家阿夏の老苧が舊識ならば、今さらに何を歟隱さん。俺上は箇樣箇樣、如此々々の事ありとて、言詳に說示すを、朱之介も宿六も、耳を攲けてうち听くに、原這個辛踏无四郎寧成の父は、辛踏蕙莽と喚做して、陸奥國信夫の郡、信夫の郷なる醫生なりき。然せる方術あるにあらねど、家傳の田圃十餘町あり、是をもて其家匱しからず。彼身は半農半醫にてありける程に、本妻に生せたる、獨子无四郎が、年七八歲なりける夏の時候、妻は時疫にて身故りけり。人の家に婦人なきは、臼に離れし杵に似たり。況十歲にも足らぬ稚子を、父親の身單もて、孚養べきにあらざれば、蕙莽は已ことを得ず、後妻を娶りてぞ、一家兒を任用せける程に、无四郎が稍成長隨に、生さぬ中とて母も慈ならず、子も亦孝順ならざれば、動も

すれば口舌起りて、四隣を閙すること屢なりけれども、惡萃是を制し得ず、肚裏に思ふやう、右にも左にも无四郎を、這地方に在らせては、俺家一日も安かるべからず、姑且彼身を遠離て、又せん術もあらんとて、无四郎には然氣なく、京師へ登りて遊學せよとて、路費程よく取らせなどしつ、舊縁ありける日野西殿へ、消息をたてまつりて、其子の上を憑みまうしける。然ば无四郎寧成は、繼母の讒言を、最朽惜く思へども、威勢辭ふことを得ず、遂に京師に赴きて、日野西中納言兼顯卿に扈從しつ、雜掌の如くにてありける事の光景は、第一集二集に見えたる如し。爾後又年を歴て、无四郎が繼母、陸奥にて身故りしと聞えしに、這時父惡萃は、歳七旬の翁にあなれば、萬事に就きて不便にやありけん、手親无四郎に消息して、汝速く故郷に還りて、俺を資助よとある郵書、京師に屆き來にければ、无四郎悄地に歡びて、兼顯卿に乞稟しつ、陸奥へ退らんとしぬる程に、漫に阿夏の色に惑ふて、倘總角なる珠之介を、君家に留め在らせつゝ、事の術よく誘果して、阿夏を倶して陸奥なる、信夫の郷へ還りゆきけることの顚末は、又是第二集に說次たれば、今さらにいふべくもあらず。然程に辛踏无四郎は、當時逆旅の日數歴て、舊里信夫に近づく程に、阿夏が事こゝろに掛りて、親の允さぬ妻をしも、京師にて娶りしとて、親にも所親にも、告知らせんは今さらに、面正しくもなき所爲なり、いかにす

べきと、思難て、家に還著ぬる日に、其夜阿夏をのみ客店に、留在らせて、无四郎一箇信夫の家に還來て聞くに、是より前に父悳菴は、老病既に身に逼りて、鍼灸藥餌の驗なく、命危き折なりければ、所親はさらなり、疎からぬ、鄕黨相歡びて、有來事を云々と、告て病床へ伴ひなどす。悳菴は類中にて、ものいふことの不便なれども、今无四郎が還り來にけるを見て、喜びの淚禁め得ず、枕方に侍らせて、霜の朝に鳴く蟲よりも、衰りし聲を絞出して、後の事を云云といはまくすれど舌強りて、一言半句も安定ならねば、孰かよく聞取るべき、應のみして慰めたる。无四郎是に便宜を得て、當晩阿夏を里稍盡處なる、客店より召取りて、親にも亦所親にも詭りて、俺身京師に在りし時、兼顯卿に給事しゝ女房を、這回餞別に、妻にせよとて賜りしかば、已ことを得ず將て還りにき。と誠しやかに告知らするを、悳菴は只うち聞くのみ、其事の好歹を、訐すべくもあらざれば、所親も不の字をいふに由なく、皆面出たしとて祝しけり。是より纔に一日を經て、悳菴竟に身故りければ、送葬の事佛事追薦、都て无四郎が隨意せざる事なし。家には奴婢三四名あり、家傳の田圃十餘町あり。況貯祿の金、思ひしよりも少からぬを、无四郎都て受納しつ、是よりの後、月額を剃ず、總髮と歟いふ頭顱に做濟したる、其忌闇の日より、親の名を紹て、辛踏悳菴と自稱しつ、醫をもて家業にしぬるのみ。襲に

京師に在りし程、彼身名醫に負笈して、學得たるにあらざれば、匙は親にだも及ねども、地方に久しき醫生なれば、療治を乞ふ者絕ずして、兩三稔を歷にけるに、阿夏が腹に子の出來ねば、旡四郞の悳菴は、猶飽ぬ心地して、養子せばや、と思ふ程に、辛踏の家に舊緣ある、似我八といふ寒民あり。夫婦うち續きて世を去りたる、跡には年七八歲なる、獨女兒のみありて、憑しき親族なければ、件の女兒は、親似我八の店保人、某甲の家に欵居ども、其保人も、最貧しき者なれば、憐むべし件の女兒は、娼妓にや賣れんといふ、人の噂に聞知りたる、悳菴是を不便に思ひて、みづから其保人許行て、件の孤女を見るに、顏は垢染て、髮には膏脂なきまでに、形貌こそ窶れたれ、其眉目人に勝れたれば、成長る後々は、傾國の本色を、出すことあるべし、と思へば捨がたき心あり。軈て保人某甲に、舊緣を告げ、商量して、養女の一議整ひしかば、俗にいふ親不知の約束にて、保人某甲には、手斷金を程よく取らせて、後の爲に證書を取迸し、其日件の女兒を將て、宿所に還りて事云々、と阿夏に共に告知らするに、阿夏も歡び愛慈みて、湯浴させ結髮させて、猛可に新しき衣裳を製して被せなどす。是より其名を改て、晚稻と呼て手習させ、艷曲歌舞何くれとなく、遊藝さへに習する、其費寡きにあらず。剝又後の悳菴は、其本性親に似ず、酷く酒を嗜むの故に、客を愛して家業に怠り、專

外物を飾る故に、敗きを悪みて費を厭はず。世の常言に、似たる者は夫婦といへり。阿夏は素是歌妓なれば、浮たる事にこそ賢かるべけれ、人の妻のよく内を政ちて、薪炊の損益に、心を用る性ならねば、良人と共に酒を貪りて、食好みをせざる日もなく、有が上にも衣裳を欲して、流行を旨としぬれども、其將人に縫せて、糸針を手にだも取らず。然せる所要なき折も、良人と共に夜を深し、良人と共に朝寝して、猶暇ある隨に、女兒晩稻に教ぬ折も、筑紫琴を搔鳴し、三絃を彈て身の勤とす。この餘は只朝夕に、彼身の化粧結髮に、時の移るを知らざりける。夫婦かくの如くにして、五七年を送る程に、所帶を驕奢の爲に使減して、親の禪りし田圃さへ、質に典ざることを得ず、嵩むは借財のみなれども、悳蒼が人と成り、素より浮薄の性なれば、既に人歹くなりて、東西なる財主の債りを物とも思はず。這時件の螟蛉女、晩稻は年三五にて、鄙に稀なる美女なれば、媒妁をもて婚縁を、欲する者多けれども、悳蒼敢承引ず、我女兒は數萬貫なる、國守城主にあらざりせば、いかにして女壻にせん、要なき事を、と誇るのみ。筋歹き借財の、債りに分說術竭て、錢欲しとのみ思ふをり、又緣談を誼する者あり。抑這信夫の郷に、兩箇の豪家ありけり。西に居は西岳氏にて、東なるは東原氏なり。因て土人彼等を稱て、西の長者、東の長者と喚做たる、其西岳某甲が、妾を欲するとて、晩稻を媒妁

する者あり、悳莽は債りに困じて、術計盡たる折なれば、敢又尋思に及ばず、先他を阿兒にして、金を借らんと思ひしかば、一議に及ばず其意に任て、晩稻を飽まで粧飾せて、初見參に遣しけるに、事立地に整ひて、俗にいふ支度料にとて、金百兩を贈られけり。悳莽則是をもて、免れがたき借財の、債を僅に果す程に、東長者もこの事を、傳聞たるや、聞ざるや、昔も今も兩雄は、雙立ざる物にしあれば、西に負じとや思ひけん、俺其晩稻を妾にせんとて、又媒妁兒をもて、晩稻が衣裳調度の料に、金百五十兩を贈りしかば、悳莽是をも受納して、諸方の借財は多くも還さず、日毎に飲食の友を集合て、只酒讌遊樂に、夜をもて日に接ざることなく、其折々に阿夏に歌せ、晩稻に舞蹈せて、猶飽ぬ心地すめり。爾程に、東西の兩長者の媒妁兒等は、只管悳莽に催促して、蚤く令愛を主家へまゐらせ給へとて、其懈りを責れども、悳莽噪ぐ氣色なく、或は病着、或は月の障りありとて、約束の日を延すのみ、遣すべうもあらざれば、東西の媒妁兒等、初は疑ひ、後は皆謀られけり、とうち腹立て、云合さねど東西齊一、辛踏の宿所に來て、憶はず聲の高くなるまで、其怠慢を責罵れども、悳莽阿容たる色もなく、呵々と冷笑ひて、嗚嗟や、汝等思ひね。天に不測の風雨あり、人に不測の疾病あり。假令約束したりとも、晩稻は一向病着に、打臥たるを爭何はせん。非除一年三箇月、事漸々に及ぶと

も、我等閑にはあらざるなり。氣長く等ね。といはせも果ず、そは虚言なり已ね〱。嚮に來る時令愛の、背影を見しを知らずや。詩も語もいらず疾渡しね。と一箇がいへば、又一箇が、惴立つ訛聲振立て、咱等は既に先約なるに、女兒一人を東西へ、斫賣にする事やある。幵では濟ず里正許、牽もてゆきて思ひ知らせん。齋く立ねと曳立るを、烏滸技すな。と突仆す。その手を捉たる東の媒人、先約後約は知らねども、咱等が花主は西よりも、支度料に五十兩の增金あれば西へは遣らず、這方へ渡せ。然はさせじ。と主人を中に捕籠て、挑爭ふ慾界の、風波噪ぐ口舌の海に、玉を採得ぬ志渡の蜑戶、取次に狂ふ程しもあらせず、奥に集合し惡葊の、酒肉の惡友洩聞て、素破事ありと、共侶に、驚立たる、酒氣に乘して、襖戶蹴開き吐也々々と、跳出つゝ、理不盡に、件の兩箇の媒人を、目鼻もわかず撃仆せば、吁嗟と叫びて起んと蠢く肩腰に、登蒐りて蹂躪れば、憐むべし媒人等は、頭顱を傷られ板齒を折れて、血に塗れつゝ平張たる、事の騷劇に四下なる、里人等走來て、或は兩箇の痍負兒を、勦助け、或は惡葊を推鎮めて、事の顚末を諮問ふ程に、側杖打たる、酒客等は、序次行しと思ひけん、何の程に敗退きて、背門より出てゆきにけり。這時にしも惡葊は、忽地酒の醉醒て、後悔すれども及ばねば、身の非を飾りて陳ずるのみ、言果べくもあらざりける。然れども兩箇の媒妁兒等は、幸ひに痍深から

ず、命に恙なきものから、事私に、治るべきにあらざれば、隨即事の顛末を、里正に告知らせて、領主の廳に訴けり。爾程に當國守、大崎左少將の陣代なりける、信夫の郡司充信、件の訴訟をうち听て、雙方を召問ふに、惡莽陳ずることを得ず、其非義既に分明なれば、彼身を禁獄せられけり。爾後又充信は、西岳東原の兩長者を召よせて、事の虛實を質問ふに、彼等も亦隱ことを得ず、辛踏惡莽が女兒晚稻を、妾にせん爲に、西は百金、東は百五十金を齎して、衣裳料に遣しゝに、惡莽女兒を重賣して、金を奪ふて女兒を遞與さず、事延引に及ぶの故に、緊しく催促しぬるを怒りて、反て媒妁兒等に、打擲の拳を中て、事の玆に及びぬる、其伎倆騙兒に異ならねば、已ことを得ず憲斷を、仰ぎまつるにこそといふ。東西同病同憂にて、口狀吻合したりける。左右する程に、兩箇の媒妁兒等が、撲傷平愈したりしかば、這歲の冬の終に、信夫の郡司充信は、罪人辛踏惡莽を、獄舍より牽出させて、且東西の訴訟兒等と、信夫の里正故老を召よせて、則宣示すらく、醫生辛踏惡莽の事、云々の罪あれば、家傳の田圃居宅まで、皆悉く沒官して、宅眷も俱に追放すべき者なり。又西岳東原甲乙等は、各齡五十に及びて、色を好みて財貨を擲ち反て惡莽に謀られて、恥を恥とし思はぬは、寔に烏滸の白徒なり。今その奢侈を戒めずば、何をもて後を懲さん。この故に賄銅各五十貫文をまゐらせて、以後

を佗と愼むべし。又兩箇の媒妁兒丙丁等は、倶に利の爲に、人の女兒を媒妁して、謀られけりと悟りなば、蚤く訴稟すべきに、然はせずして鬪諍に及びしは、疎忽の至り烏滸ならずや。這回は且宥免す。この後を佗と愼むべし。と事嚴重に掟らる。有恁りし程に、阿夏等は、屏居られてありけるに、この日良人悳莽は、所帶遺なく沒官せられて、追放さるべし、と聞えしかば、いよ〳〵駭き且患ひて、事の迫らぬ先にとて、當晩悄地に腹心の人を賴みて、衣裳調度を沽却すに、其價四五十金を得たりしかば、則是を懐にして、女兒晩稻と共侶に、行裝を整へて、領主の沙汰を俟てをり。有恁而次の日、里正故老等が來て、領主の下知を傳るに及びて、阿夏は宅をも戸帳をも、皆里正等に相渡して、晩稻を倶して立去て、里盡處にて良人を俟程に、是日辛踏悳莽は、背を一百鞭うたれて、軈追放せられしかば、計らず阿夏晩稻等に、逢ことを得て歡ぶのみ。當晩は近郊なる、白屋に宿りを投めて、笞傷の瘥るを俟ず、往方孰處と定ねども、京師の方を心當に、次の日より路次を急ぐに、倘西岳東原の徒の、先度の遺恨を復さんとて、追蒐來ぬる事もや、と思ふ心の安からねば、人馬稀なる間道を、走ること兩三日。是日は都て山路にて、鳥路熊徑の幽なる、頃は歲梢の孟なれば、天寒くして雲雪を催し、風暴れて梢罹に似たり。宛屛風を建たる如き、山又山を登りゆく、親子三名背に汗する、一


晩稲甦生
琴鶴



歩は一歩の艱難あり、百歩は百歩の苦患に堪ず。幵が中に、晩稻は咽喉の渇くとて、只管水を欲すれども、這頭は人家遠くして、茶店あるべくもあらざれば、已ことを得ず岩陰に、流るる石滴を見出して、阿夏が准備の腰着碗に、溢るゝ可に汲拿りしを、卒とて晩稻に飲すれば、晩稻は最旨しとて、飲こといまだ半分に至らず、忽地に舌強り、面色變りて仆れんとす。阿夏は是に驚きて、晩稻を楚と抱き停めて、叫びて良人に告知らすれば、悳莽も驚きながら、先其脈を診ていふやう、約莫太山には瘴氣あり、又其水には、蛇毒あり。意ふに晩稻は蛇毒ある、水を飲たるにぞあらむずらん。といひつゝ、四下を見かへるに、其頭に老たる松の枝に、最大きなる蛇蛻、三四掛りてありしかば、阿夏は毛骨竦までに、丈夫の言の違ぬを、感ずるのみにて術を知らず。當下悳莽又いふやう、今這蛇毒を解んには、良藥麝香に優者なし。又白柹も的中す。俺信夫の宿所には、麝香龍腦這那となく、使用餘もありつらんに、這逆路にて爭何はせん。といふを阿夏は聞あへず、其頭に脱落は侍らずかし。往る日宿所を立去るをり、錢になるべき藥種をば、皆行嚢に拿籠て、腰に着てもて來にき。麝香も玆になからずや。といひつゝ手疾く行嚢を、解開きつゝ棗形なる、藥盒を拿出して、渡すを悳莽受拿て、奇妙々々と嘆賞しつゝ、件の麝香を思ひの隨に、撮拿て晩稻が舌に、幾回歟塗らしつ、猶も咽喉に吹入れて、うち

守りて在程に、晩稲は一聲呀と叫びて、水を吐くこと二三合、忽地に我に復りて、心地清爽になりしといへば、阿夏は然こそ。と歡びて、麝香の卽效云々、と告るを悳莽推禁めて、有恁る太山は蛇毒のみかは、豺狼も出つべく、山豪の害怕なからずや、誘ゆくべし。と急がして、辛くして山を下りて、這宵は山脚の客店に、天を明してぞ猶急ぐ、去向は都て驛路にて、二十日あまりの旅宿をしつゝ、旣に京師に近づく程に、有一日悳莽は、阿夏晩稲に譚ずらく、這より京師へ赴きて、兼顯卿に、憑稟さば、恥を知らざる者に似たり。矧京師は戰馬に暴て、王室の卑しかりしより、搢紳達も衣食足らぬは、西の都に巣を易給ふも、尠からずと聞えたり。憑しからぬ故主に身を寓せて、人の胡慮にならんより、近江の觀音寺へゆくこそよかめれ。國守近江判官佐々木高頼主は、武威隣國を威服して、室町殿を補佐し給へば、今觀音寺の城下は、繁昌京浪速に優れり。曩に俺京師に在し時、那藩中の人々に、相識られしもなきにあらず。先や那里に赴きて、便宜を徼めて生涯の、謀を倣さまく欲す。渾家の意いかにぞや。と問へば、阿夏は異議もなく、然るべし。と應しかば、悳莽隨卽宅眷を將て、觀音寺の城下に赴きつ、津問屋といふ客店に杖を駐めて、相應しき借屋を求るに、去歲は果敢なく逆路に暮て、春正月の初旬になりぬ。折から津問屋の東隣に、間口二丈あまりの借屋の、庭もあり土藏あるを借得て、

孟月上旬に移徙しつ。この時兇四郎の辛踏悪菴は、吾足齋延明と名を改め、阿夏は老浮と呼易られて、良人の醫業を資助たる、是までの諸雜費は、嚢に阿夏が陸奥を立去時、沽輛しける衣裳調度の價、四五十金あればなり。斯てぞ悪菴の吾足齋は、療治人竝に行れて、觀音寺の城内へも、折々出入する程に、晩稻が美女なるを聞知りて、病もなき少年輩の、那を見ん爲に吾足齋許、來つゝ湯液を乞ふもありけり。那が中に佐々木家の權臣なる、多賀典膳政朝の冢男、志賀介政賢と倣喚したる少佼あり。こも亦晩稻を眷戀して、親に乞ふて娶らまく欲す。父政朝是を聞て、先吾足齋と相識る者をもて、他が素生を問するに、吾足齋延明は、其事情を得て、歡びて答るやう、蓋我遠祖は、在昔奥陸郡の主なりける、安倍賴時の氏族にて、金氏より出たり。數世の後信夫郡に移住て、遂に醫生に倣りしより、國守大崎氏に從事して、侍醫の員に充られし後俺身に至りて、父祖の家業を零さず。爾るに近曾朋輩の讒言にて、罪ならぬ罪を得たりしかば、已ことを得ず身の暇を給はりて、這地の繁昌、佐々木殿の、武德を景慕しぬる故に、遠く宅眷を携て、這地に僑居しぬるなり。と實しやかに説誇れば、其人承歡びて、退りて政朝父子に告るに、政朝聞て、爾らんには、先其親を薦擧て、當家の醫官に倣して後、賄兒の媒談に及ぶべし。事速には成がたしといひけり。吾足齋阿夏の老浮は、件の首尾

を傳聞て、時至りぬと歡ぶ程に、這年の夏五月の時候より、晩稻が面部總身に、怪しき瘡多く出來て、其人としも、見えわかず、花の枝に毛虫群がり、月の前に雲裒る、毛嬙西施の嬋妍も、變じて黑暗女に做りしに彌增、晩稻を見る者唾して、他癩病ならざりせば、必楊梅瘡なるべしとて、爪彈をせざるはなし。この事頓く觀音寺の、城内に聞えしかば、多賀の政朝政賢は、俱に驚き呆れ果て、原來彼少女には、癩病の筋ありけんを、猶知らずして娶りなば、必我家を汚さん。怕べし〳〵。と舌を掉ひつ色も戀も、醒て彼議は止にけり。爾程に吾足齋老苧等は搖錢樹と負みたる、晩稻が不慮の惡瘡に、膽を潰しつ其日より、膏藥煎湯術を盡せども、徑驗あるべくもあらざれば、吾足齋は眦を尉めて、阿夏の老苧に囁くやう、俺顧ふに、這回晩稻が病着は、癩病ならず、黴毒にもあらず、去歲の冬、陸奥より來ぬるをり、他蛇毒に中られて命危ふかりけるに、幸に麝香の功あり、恙もあらず成りしかど、其餘毒猶腹内に在留りて、惡瘡に做れるならん、と思ひにければ始より、多く麝香劑をもてせしかども、今に至りて徑驗なし、只這上は、白柹を煎じ用るにしく事なし。俺陸奥に在りし時、謬て、小蛇を飲し者ありけり。其蛇死なず、腹内にあり。患者苦痛に勝ざれども、亦いかにともせん術なく、命危ふかりし時、白柹を多く切みて、煮じて五六舛を用る程に、其人酷く水瀉して、蛇の肛門より降るを見る

に、約一寸許に斷離れて、首尾續く者あることなし。是より補藥を用ること、一七日にして本復したり。と當時人傳に聞し事あり。疾白柹を求め給へ。といふに老苧は歡承て、猛可に人を央ひなどしつ、隣國美濃へ遣して、大垣加納などの、白柹を多く買拿て、煎じて晩稻に飲する事、十日あまりに及べども、是も亦勞して功なく、惡瘡彌臭氣に堪ねば、吾足齋疑惑ふて、原來晩稻の惡瘡は、蛇毒にはあらざる歟、と思ふのみにて今はしも、施すべき奇方を知らねば、夫婦齊一旦暮に、神佛に祈るのみ。酷暑に堪ぬ六月の時候、人ありて吾足齋に告るやう、攝津國住吉の下禰宜の家に、無名の惡瘡の妙藥あり、卽效百發百中なりと聞にき。醫師なりとて外の藥を、忌給ふべくもあらず。令愛の爲なるに、ゆきて討め給はずや。といひけり。吾足齋是を聞て、其趾盡たるをりなれば、敢亦疑はず、軈老苧に商量して、俺みづからゆかんとて、行裝も慌しく、往還五六日の旅宿をしつゝ、住吉に赴きて、件の禰宜の宿所を問ふて、來意を告て、惡瘡の妙藥を求るに、主の禰宜答るやう、いはるゝ義はこゝろ得たれども、开は聞錯給ひしならん。我家にて然る惡瘡の、妙藥を賣にあらず。先祖より傳來したる、奇妙の藥方是あるのみ、然ればとて祕するにあらず、約莫無名の惡瘡の、百藥徵驗なき者に、枸神一枚を、細末にして用ふれば、響の物に應ずる如く、立地に其瘡愈て、痕だにあらず做れ

るなり。只其藥種の得がたきのみ。和殿醫師ならば無禮ながら、枸神は千歳の枸杞の根の、化して狗の形に倣れる物是なり、京浪速なる薬店を、渉獵給はゞありもやせん。非如ありとも高料ならんに、百金ならば猶廉かり。勉て尋ね給へかし。と言叮寧に誨れば、吾足齋は思ひしに似ず、玆に望みを失ふものから、奇方を得たるを切てもの、幸なりけり、と思ひかへしつ、主人に謝して退きて、浪速三界蜑崎、堺は勿論、京大津まで、藥店のある限り、漏す隈なく適遶りて、枸神やあると尋るに、元是何等の物なるや。と問復すのみ其名をだも、知りたる者のあることなければ、吾足齋困果て、只得宿所にかへり來つ、阿夏の老苧晩稻等に、事云々と告知らすれば、老苧は額を病するのみ、計の出る所を知らず。當下吾足齋又いふやう、俺甞聞けることあり、這里より程遠からぬ、一村落に、枸杞村と喚做すあり。其一村は皆枸杞にて、芟れども盡きず、彌生に生茂るとぞいふなる。意ふに件の枸杞村には、枸神をもてる莊客の、やあらん。なれども俺は那村に、一箇も相識あることなし。箇樣々々に計ひて、利に誘はゞ我是なしとすべからず。縱令所藏の者なくとも、多かる枸杞の根を穿らば、枸神を得ぬることも望を、遂ることもあらんずらん。といふを老苧はうち聞て、心許なき事ながら、手を空くして在んより、左にも右にも計ひ給へ。といはれて吾足齋再議に及ばず、紙を剪牌に爲りて、枸神

を求ることの趣き、價百金をもて、買とらんといふ事まで、幾枚賦寫つけて、心利たる者を央ふて、持して枸杞村へ遣しつ、則件の紙牌を、村人の背門柱或は門前なる松柏の、幹などへ貼せたりしは、秋七月の時候なるべし。其後八月の中浣に至りて、思ひがけなき三池邨なる、宿六が汲引にて、枸神を得て晩稻の惡瘡、立地に瘥しのみならず、朱之介に再會の歡びを盡したる、无四郎の吾足齋、阿夏の老苧が來歷の、實事は恁地なれども、今朱之介と宿六等に、夫婦の身の上云々、と詳に說示すに及びて、忌べき事は推隱して、愆を飾り人を虐げ、只己のみ賢なる如く、云瞞めたる長談俗話に、朱之介宿六等は、應するのみ聞果て、倶に感嘆したりける。當下吾足齋又いふやう、俺始より枸神の價を、金百兩と定めしは、他人の物を買んとてなり。爾るに今幸に、枸神を珠之介の手より得て、他が爲には義女弟なる、晚稻の惡瘡瘥たれば、便是一家の事なり。何でう價を論ずべき。况弱き者に、金多く持せなば、無益の事に使ひ果して、反て其身の害になるべし。然とても、俺其金を惜むにあらず。珠が爲に所緣を求めて、相應しき事あらば、俺百金まれ、五十金まれ、其雜費を資ざらんや。先よく這義をこゝろ得てよ。又宿六叟は、阿夏の老苧と舊緣の義をもつて、珠を幾日賦養ふて、料らず案内をせられしかば、其歡びにこゝろばかりの、報ひをせずばあるべからず。といひつゝ老苧に

目を注すれば、老亭は早くこゝろ得て、軈納戸に退きつ、一霎時ありて金三分を、紙に裹みてもて來にければ、吾足齋受拿て、傍にありける黑漆盆に、恭しくうち載て、是を宿六に薦めていふやう、叟よこは些少ながら、憶はず骨を折せたる、俺歡びの折乾なり。いかで笑納あれかし。といはれて呆るゝ宿六より、朱之介は立腹を、壓難つゝ默然たる。おなじ思ひをいへばえに、岩が根松に集る鳥の、宿巢にあらぬ宿六は、噫思ひがけもなき、御賜よ。とばかりに、興さへ酒の醉醒て、肚裏に思ふやう、枸神とやらんを朱之介に賣せなば、其價の、一割十兩ものいはずに、押し促織と今までも、胸算盤の玉翦て、這里の主人の吝嗇なる、朱之介の乾父面して、咱等を阿夏の舊識なりとて、熟善轉しに甚ぞや、恁許の金出さるゝこと歟、と胸に恨の數々を、鎭めて只得澁々に、件の金を受戴きて、こはうち閣し給はずに、御心使に預り侍り。といひつゝ軈懷へ、楚と挾めて盃を、辭ふてかへり去らまくす。這時既に日の暮たれば、吾足齋老亭等は、敢又強て留めず、いはるゝ隨に盃を、納めて迭の辭誼口誼、料らざりける珍客なるに、不用意にして然ばかりの、欵待もせぬ鈍ましさよ、挑燈をやまるらすべき。といふを宿六聞あへず、否、那里の窓を賺せ、十七日の月出て、晝の如くに明かるに、挑燈を何にせん。珠刀禰話說もあるべきに、暇ある折來給ひね。娘さま造作になり侍り。と告別

しつ出てゆくを、阿夏の老苧と朱之介は、應をしつゝ遽しく、紙燭を秉て共侶に、玄關までぞ送りける。是よりして末朱之介は、吾足齋の宿所に歇居程に、枸神の價百金を、得遁與されずなりにける、怨を隱して色にも出さず、朝には吾足齋の教を受て、藥の調合に預り、夕には母親老苧を資けて、薪炊の事に代り、萬事精悍に舉動ひける、底意を曉らぬ吾足齋、阿夏の老苧は愛歡びて、好食客を得たりとて、最憑しく思ひけり。爾程に吾足齋延明は、嚮に多賀志賀介の、媚談の緒を曳れしに、晩稻の惡瘡の故をもて、その事聞えずなりけるを、遺憾く思ひしかば、病架の爲に招れて、觀音寺の城内へ赴く每に、人に對ひて說誇る、晩稻の惡瘡平愈の顚末、枸神の卽功云々、と其精妙をいはざることなく、拙女晩稻が病着は、原是蛇毒に中られて、無名の瘡の出來しのみ、黴癩にはあらざりしを、花に毛虫の世の醜女等が、薄情や妬みごころもて、あらぬ事さへ云云、と言徇されしは一霎時にて、雨夜の月も霽るゝ時あり、今こそ人の疑ひはおのづから、解たらめ。うるさき事にて候ひきといふ、自問自答を笑ふもあり。又奇を好む壯佼等は、語接ぎいひもて傳へて、この事隈なく聞えしかば、多賀志賀介政賢は、父政朝に如此々々、と告て晩稻を娶らまくす。然れども政朝いまだ許さず、先吾足齋に對面して、屢問試みなば、事の虛實も彼人の、心術も知らるべし。急ぐことかは。と推禁めて、次

の日病痾に假托て、吾足齋を招きしかば、吾足齋は時來にけり、と心悄地に歡びて、走りて多賀の宿所にゆきて、主劑を調進したりしより、休藥の後々まで、日每に政朝を訪ざることなく、只顧に媚諛ひて、陪堂の如くになりにけり。不題復說末朱之介は、思はずも吾足齋の、宿所に光陰を過す程に、晚稻の容色世に優れて、多く得がたしと見るまでに、舊病發りて己のみ、狂ふ猿馬を鎭め得ず、二親の目をしのび〳〵に、調戯けき言葉を吐ちらし、長き袂を曳く每に、晚稻は酷くうち腹立て、其手を拂ふて物だにいはず、顏赧やかに走退く。現に處女の趣きなきは、慝こそあらめ、と思ひ侮る、朱之介は懲ずまに、猶も便宜を窺ふ程に、有一日吾足齋は、朝より出ていまだかへらず、阿夏の老苧はいぬる頃、津問屋より物贈られし、歡びをいはんとて、背門より出てゆきしかば、朱之介は折を得て、中の間に衣縫居たる、晚稻を矢庭に掖捉へて、口說を晚稻は吐嗟と叫びて、力涯に衝仆しつ、貌を正くしていふやう、噫無慙やな、調戯も、人にこそよらめ。一度ならず二度ならず、猥がはしく見え給ふは、奴家はおん身の女弟なるを、忘れ給ふ歟烏滸なり。と罵る間に朱之介は、身を起しつゝ冷笑ひて、さないひそ。汝も烏滸なり。俺は母こそ骨肉なれ、阿爺は原是他人なり。況汝は螟蛉女にて、女弟にあらず、兄にもあらず。非除緣しに繫れて、兄と呼れ妹と喚とも、養嗣夫妻といふことは、世

間に間是あり。今さら何ぞ禁忌を繰んや。矧又汝の悪瘡、百薬験なかりしに、枸神を贈れる俺なくば、汝は生ながら蛆蛆に化りて、腐滅に死ぬべからん。恁れば俺は命の親なり。其大恩を思はずに、最強面きは甚麽にぞや。と讒るを晩稲は聞あへず、其はいはるゝことながら、養嗣夫妻も二親の、隨意ならば推辭に由なし。そを護らずに妹と伕の、約束せんは是不義なり。又枸神を贈られし、はじめは只利の爲にて、奴家を養女弟なり、と知られし故にあらざれば、恩には侍らず只利のみ。といはせも果ず朱之介は、晩稲を佶と疾視て、少女に似げなき強情多辯。俺身今こそ零落たれ、今業平と世に謡れて、思ひを被し少女子に、背見せられし例はなし。意ふに汝は、多賀政賢の、媚談を聞知りて、襟に附にぞあらんずらむ。と詰るを聞かず立まくしぬる、晩稲を遣らじと挽留るを、噫やとばかり絹尺もて、打ど拂へど女子の甲斐なさ、困じてせん術なき折から、跫然として庭門に、蹄形木履の音聞えしかば、朱之介は母親のかへりにけり、と見かへりて、身を閃めかして玄關に、出て藥を切みてをり。當下晩稲は亂れたる、髮搔揚ても雨後の水、澄ぬこゝろを然氣なく、母を迎へて小土瓶なる、茶を汲取て、廚などする程に、吾足齋は笑しげに、外面より還り來て、老孛を納戸へ招きよせて、呫くこと半晌許、其後中の間に立出て、朱之介を召ていふやう、珠よ听ね、好事あり。俺今日城内なる、多賀殿へ

參りしに、政朝主譚るらく、明日は君侯馬見所に出まして、當藩邸なる少年輩の、武藝の勝負二十番を、御覽あるべしと仰らる。是に因て兵頭、高嶋石見介好純が請稟すよしあり、其所以は好純の宿所に、武者修行の兩少年逗留して在り、共に武藝の達者にて、好純と舊緣是あり。いかで明日の擊劍に、召加えらるべうもや、と只管願ひ稟すにより、君侯隨卽御許容ありて、件の兩箇の少年等を、其數に加へらる。聞くに和老の宿所にも、乾兒末朱之介と喚做す壯佼の、逗留して在るにあらずや。年は幾に成るやらん、武藝の本事あるならば、今より君侯に聞え上て、明日の隊に召入れてん。勿論衣裳武器などは、志賀介の副衣あれば、そを貸て間に合せん。この義甚麽と問れしかば、己答稟すやう、そは忝き造化にこそ候なれ。拙郎末朱之介は、今茲二八の弱輩にて、武藝は人竝にぞ候はん。然るを明日の擊劍に、召入られ候はゞ、實にこよなき幸にて、第一の修行になるべし、宜く願ひ奉る。と當坐の應に政朝主も、共に本意ある面色にて、然らば明日未明より、和老其朱之介を、俱して俺宿所に來給へ。餘談は其折々々。と頻りにいそし立給へば、暇まうしつ退出て、走りてかへり來にけるなり。思ひがけなき幸なれども、只心許なきは、和郎が武藝いかなるべき、俺其本事を知らざれば、胸安からざる所あり。といふを朱之介聞あへず、忻然と含笑て、腕を扼りて答るやう、

爹爹其義は心易かれ。俺身十一二歳にして福富の家に在りし時、鷲津爪作、日高景市等と、謀合しつ密々に、弓馬劍法、槍法白打、自得せずといふことなし。就中射藝は、百發百中の手段あり。こゝをもて、曩に大和に在りし時、一箭に狒々を射て仆して、斧柄の必死を救ひにき。明日の敵手は孰にもあれ、何等の害怕候べき。と威勢猛く說誇れば、老孥も聞つゝ呆るゝまでに、歡涯りなかりける。當下吾足齋又いふやう、俺傍見るに、珠は今玆二十歲なる歟、二十一歟にならんを、多賀主へは實を告ず、十六歲に候、といひしは、其身少年にて、武藝拔萃ならんには、國守の賞感八入に增て、大祿をもて御家臣に、なさるべうもやと思へばなり。珠は病後の儘にして、今に其月額を、剃ざりしこそ幸なれ。今日結髮をしぬる折、額髮を剃殘して、元の大童に成るとても、優貌なれば相應しくて、見て怪む者なかるべし、疾錢湯に浴て來よ、身裝して得させんず。なれども一箇の不足あり、俺は醫師の事なれば、珠に貸すべき袴なし。老孥隣家へ適一適て、巳の時可の袴あらば、借もて來て明日の間に合せよ。噫闇しや。と榮利の爲に、我から單使るゝ、現に小人の時を得貌に、果敢なく憑む富貴の宿、筧の水にあらねども、只是僥倖を、被てぞ願ふ幵が中に、晚稻は歡ぶ氣色なく、納戶に在りて出ても來ず、只朱之介が無禮なるを、憎しとのみぞ咳きける。是より下は衆少年の擊劍の段な

れども、楮數玆に涯りあれば、作者の自由になしがたかり。又編を續ぎ卷を改めて、後板に鐫著すべし。蓋前文に既に云、彼武者修行の兩少年は是何人なるぞや、看官早く猜しけん、いはでもしるき大江杜四郎成勝、峯張泬六郎通能等が、武名を觀音城内に、揚ぬる事の光景は、綉像を爰に出すものから、猶詳に知らまく欲さば、亦是後の一卷に、編次るを俟ねかし。

新局玉石童子訓 第三版 附言

本編第三集、第三十回に、末朱之介が住吉なる岸松屋を尋てゆく折、某路傍なる尻掛酒肆にて、十三屋九四郎に邂逅する段に、他が年歳を四十あまりなるべしとあるは、當時朱之介がうち見たる推量をもていへるなり。九四郎實は是時三十歳許なるべし。何とならば、後版第三十二回に至りて、九四郎、女兒臆祿は二十五歳にて身故りぬ。是年其子大江四郎は甫の九歳なり。是より亦八稔を歷て、杜四郎十六歳になりし時、九四郎は朱之介に相逢ふて、己が宿所に留在り。この時まで臆祿猶世に在らば、正に三十二歳なるべし、九四郎は臆祿の弟なれば、三十歳許ならんを、人はうち見に、其面影の老たるあり、弱きものなきにあらねば、朱之介が謬認て、四十あまりなるべし、と思ひしなり。第三十二回以下に、九四郎の年齡を、幾歳といふ文なければ、看官思惑はん歟とて、作者みづから評注を、聊畧記しぬるなり。又只この事のみならず、本編三集の端像に、幻泡法師といふ者見えたり。其像贊に、

　ふり捨て出にし里を見かへればあしたのけぶり軒のまつ風

といふ歌あれば、看官なべてこの幻泡は、福富太夫五ならんと思ふべし。然るを今版第四十五

回に至りて、頭陀幻泡といふ法師出たり。この幻泡は太夫五入道にあらず、おのづから是別人なるを、看官心つきなくて、訝り思ふもありぬべし。是等の疑惑は猶編を重て、數十回の後に至らざれば、必了解しがたかるべし。都て長編なる物の本は、作者の意匠も深長にて、前より知らるゝ者にあらず。其前より知らるゝは、初心の短筆に多くあり。和漢の兀籍是より出たり。そをあげつらふにあらねども、いはで已んはさすがにて、彼津を問ふ人しもあらば、後竟に是をもて、廣くして且深きを知る、筏にもやなるべからん、と思ふも烏滸のすさみにぞありける。

弘化二年乙巳皐月之吉

曲亭癡老識

なり。是をもて事を故事に借て、義を勸懲に作せるのみ。この故に毛氏が琵琶記の評註に、蔡邕を評すらく、後漢の蔡邕にこの事なし、おのづから是同名異人なりと見るべし、といへるは、其言老實に過ぎたるに似たれども、蒙昧の爲に解んには、實に是致言といはまし。然るを克思はざる者、其正史に合ざると、歳月の錯へるを詰りて、論ずるもあるは笑ふべし。稗説傳奇架空の言、只情態を寫し得て、且善を勸め惡を懲すを、作者の本意と做せるなり。或は是を無用の技とし、或は是を有用の物とす。無用の中に有用あり、有用の中に無用なきにあらず。好憎をもて褒貶せば、私論にして廣からず、取捨は人々の意衷にあるべし。

和漢の稗史物の本の作者、多く古人の姓名に嫁して、一部の小説を作設るは何ぞや。蓋編中の人物世に聞えて、婦幼も耳目に克熟たる、將相勇士の類にあらざれば、其一部の世界不立、看官も亦據あらざれば、飽ぬ心地すなれば

曲亭老人重識

續編　卷六之十一

第四十一回

觀音寺の城に衆少年武藝を呈す
弓馬槍棒主僕朱之介を懲す

復說辛踏吾足齋延明は、次の日の早旦より、末朱之介を將て、觀音寺の城内なる、多賀典膳政朝の宿所に赴く程に、朱之介の身裝の、早に整ひがたかりしを、袴は昨日阿夏の老苧が、隣家より借もて來つ、時服と腰刀は、吾足齋が副衣副刀を取出て、被せもしつ佩せもして、頭顱は額髮を剃殘して十六七なる少年の、像くに作り做しけるに、朱之介は猶飽ずやありけん、悄地に母の鏡臺なる白粉を取出して、薄化粧さへしたりしかば、心術こそ奸惡なれ、うち見は世に多からぬ、美少年なりけり、と謬思ふもあるなるべし。爾程に吾足齋は、朱之介を相倶して、政朝許來にければ、政朝則客の間に召入れて、其子志賀介政賢と共侶に、出て朱之介對面す。當下吾足齋は、遽しく額を衝て、昨日御内意を承まつりし、愚息末朱之介晴賢を、召倶してこそ候なれ。といひも果ぬに朱之介は、膝行頓首したりける。こゝに迨りて政朝は、朱

之介を熟々相るに、最優形なる少年なれば、憶はず眉をうち顰て、朱之介に向ひていふやう、和殿も豫聞れにけん、今日の試撃は晴技にて、國守高賴みづから御覽ぜらる。こゝをもて當藩中なる、武勇の少年、四十人を擇出して、弓馬撃劍槍棒白打、各得たる所をもて、勝負を定めらる。和殿は員の外にして、件の隊にあらねども、然ばかりの本事なくば、咱等汲引を致しがたかり。實に試撃を願るゝや。と問はれて朱之介頭を擡げて、然候、武藝は好所にて、年八九の時よりして、習ひ得て候へども、性鈍ければ人並にて、今猶修行の最中に侍り。开が中に弓馬のみ、人に讓るべくも候はず。と雄々しく答る卑下傲慢、屑人ならず聞えしかば、政朝屢頷きて、それでこそ安堵たれ。是なる拙郎志賀介も、今日の撰擇に入れられたれば、試撃の準備進退は、志賀介に聞ねかし。と諭しつ又吾足齋にうち向ひて、和老は事の果るまで、終日こゝに在んは要なし。宿所に退りて吉左右を、俟こそ便宜なるべけれ。といはれて吾足齋歡び承て、いかで宜しく〱。と應をすれば朱之介も、主人父子にうち向ひて、口誼を演る开が程に、兩個の若黨茶をもて來て、這客親子に薦めつゝ、更に主にうち向ひて、准備宜く候。と告るを政朝うち聞て、しからば出仕をいそがんず。志賀介も疾立ね。といそがしつ吾足齋等に、辭して親子共侶に、そが儘奥に退りしかば、吾足齋は朱之介を、留めて立まくする程

に、一霎時呫きこゝろ得させて、宿所へとてぞ罷出ける。有恁し程に、志賀介政賢は、遽しく奥に退りて、父に向ひて呫くやう、大人はいかに思食けん、彼末朱之介が皎々しき、女子の愛べき艶治郎にて、言語應答の浮薄なる、武藝に勝れし者に似ず。然るを今慭に、他を試撃に召倶し給はゞ、我們さへに面目を、失ふ事もや候はん。この義御深念候歟。と問ば政朝沈吟じて、爾なり我も亦、そを思はぬにあらねども、人はうち見によらぬ者にて、昔の牛若御曹司、楠正行新田義治、是皆美少年にして、武藝は千騎萬卒に、敵するに足しにあらずや。他其類ならずとも、御用に達べき者ならば、薦擧て當家に留めん。若亦不覺を取事ありとも、我力の及所にあらず。其折には追退けて、當家譜第の壯佼等の、武藝を都鄙に知せんのみ。加旃他が事は、昨日既に君侯に、聞え上たりけるに、今さらに省きがたかり。然ばとて、我贔屓のこゝろもて、吹擧しぬるにあらざるを、知る人は知るべからん。然のみ陷むことかは。と諭せば志賀介再議に及ばず、仰寔に理りなり。是に就てもいぬる頃、吾足齋の女兒晩稻とやらんを、娶まく思ひしは、心恥しき惑ひなりき。晩稻が惡瘡愈たりとも、今其親と兄とを見て、思へば愛べき少女にあらず。この義は御心安かりてん。と陪話れば政朝含笑て、然ばとよ其事なれ。我始より那婚姻を、許さざりしは所以ある事にて、晩稻が惡瘡愈たり、と聞えし後に吾

足齋を、召近づけて試けるに、只是浮薄の小人なり。遮莫其子朱之介は、吾足の實子にあらず、乾兒なりと欺いふめれば、親には似ざる者ならん、と思ひしは空負にて、我も亦疎忽の失、是なしとすべからず。吾郎の惑の醒たるのみ、是我家の幸なるかな。といひつゝ外面瞻仰て、噫漫なり、時もや移らん、疾々。といそがして、親子衣裳を改めつゝ、供の若黨蒼頭に、準備の武器を多く持せて、朱之介を相倶しつ、試撃の場にぞいそぎける。然ば這多賀典膳政朝は、其妻三稔前に世を去りて、志賀介の外に兒子なし。但年三十有餘なる妾あるのみ。この故に新婦を欲して、其子志賀介の爲に、をさ〳〵婚縁を求めしなるべし。話分兩頭。斛程に、大江杜四郎成勝、峯張柒六郎通能は、京師の旅宿を立去りて、本月の下旬、近江なる觀音寺の、城下に來にけるに、佐々木家の兵頭、高嶋石見介好純は、柒六の父なりける、峯張九四藏通世が爲には、兵法七書の弟子なりしに、通世が世を去りし後は、胡越の似くなりもて行て、相訪ふこともなきものから、四郎柒六も豫より、其名ばかりは聞知りたれば、先や高嶋氏を訪ふて、彼人の意見に就かば、萬事に便宜なるべしとて、共に城内に進み入て、甲乙となく、人に問ふて、石見介の宿所に來つ、姓名を告來意を演て、對面を請しかば、好純も、亦豫より、彼子あり彼孫ありしを、知らざるにあらざれば、聽迎入て對面す。看茶の禮事畢りて、杜四

郎柒六主僕は、宿願の事武者修行の事、且當家の武功を景慕の故に、幸に舊縁ある、主人の資助を借んとて、推參しける事情を、演說叮寧なりければ、石見介歡承て、そはよくこそ訪れたれ。我身遊倅なりし時、難波津に游學して、峯張翁の教を受しを、思へば今は昔に做りぬ。其折に和殿等は、尙幼仦かりしかば、迭に面善ならねども、柒六刀禰の面影は、故翁によく肖たり。剗又大江主の尊大人には、昔我一面の好あり、爾後奶々の不幸の事、風の便に聞えしかども、其比我も憶りなく、失怙失恃の憂あり、爾後家督を承嗣ては、紈袴に暇あることなく、這里より浪華へ路の程、三宿なれば、往還自由ならで、年來疎濶にうち過しに、思ひがけなき兩才子に、訪れぬるこそ歡びなれ。外に宿りを求んより、幾までも這里に居ませよ。させる欵待はあらずとも、當藩中には忠義の士、武藝修練の壯佼の、なきにしもあらざれば、異日面會し給ふとも、損友にはあらざるべし。且はや甘ぎ給へとて、急に家の老僕を召て、乾淨たる小室へ、件の主僕を誘引せて、开里を起臥の處と定め、且湯浴させ、夕饌を薦めたる、欵待特に淺からず。爾後主人の妻も出て、この兩少年に對面しけり。聞くに石見介好純に獨子あり、高嶋硯吉郎玄純と喚做して、今玆は十四五歲なるべし、尙遊倅なりければ、當春主君に願ひ稟しつ、所緣に就きて周防なる、山口へ遣して、遊學させて彼地に在り。今は對面由なけれ

ども、好純の侄なりける、長橋倭太郎勢泰、及兵法の弟子なりける、象船算彌知量と喚做して、共に十七八歲なる、義勇の兩少年ありけり。國守の近習なりければ、勤仕の暇ある每に、朝となく夕となく、高嶋の宿所に詣來て、師說を受ざる日のなければ、大江峯張兩主僕に、一番言語を交へしより、迭に其才其智に愛て、捨がたき思ひあり。只是のみにあらずして、好純の弟子も、亦弟子ならざるも、親しきは聚ひ來て、文を談じ武を講ずるに、其才大江峯張の、右に出るはなかりける。左右する程に、國守の命あり。當城內なる壯佼等の、武藝を御覽あるべしとて、豫より下知せられしかば、其選擇に充られたる、少年等皆勇立て、稽古に暇なかりしを、四郞柴六は羨みて、石見介に請ふよしあり、好純も亦這少年等の、做す事あらん、と思ひしかば、軈て主君に聞え上て、既に免許を得たりしより、當日の准備武器身甲、衣裳兵鞋に至るまで、主僕盤纏に匱しからねば、思ひの隨に相整へて、其日を遲しと俟たりける。却說是年の秋九月十五日、當國守佐々木六角彈正大弼源高賴主〔高賴或は定賴に作るはじめ左衞門尉なりしかば時の人相稱て、近江の判官ともいふなるべし。〕軍旅の暇あるをもて、城內なる少年等の、武藝を撿覽すべしとて、本日已の比及より、儲の架屋に著坐あり。其事の然體、縱六十間橫九間なる、走馬場の中央に、五間四面の架屋あり。俗に云馬見所卽是なり。四目結の花號染做たる、花土紫の幔幕を引旋らして、處々

を括揚たる、裡面には金屏二三雙建連て、眞中に儲の発兒あり。高頼則立烏帽子を戴きて、縹紲綢の時服に、長袴を穿下しつ、小刀を腰にして、手に中啓の扇を把つ、件の発兒に凭うち懸たる、左右には文武の長臣二十餘名、多賀典膳政朝、高島石見介好純を首にて、共に朝服の袖を連ねて、齊々整々と侍坐したる。後方には近習の輩、童扈從等、或は主君の太刀を執り、或は唾壺鼻紙臺を相捧げて、謹愼仕へずといふ者なし。この他架屋の左右には、鳥羽の鎗二十條、弓矢三十張を飾立て、其隊の頭人、隊兵等と共に這里に在り。架屋の東西十四五丈にして、試撃に召るゝ少年等の、集會所二箇所あり。西の方に二十名、東の方に二十名、各介副の老兵あり。東西架屋の四方には、幕串建て幔幕を曳繞らし、裡面には細縁の薄席薦、四五十枚布做たる外面には、究竟なる良馬四十餘頭、磨立たる鞍鐙して、各兩個の鑣奴等が、絆を執りてぞ立りける。又只是等のみならで、這頭なる左右の小堤に、袖搦の竹牆を締連ねて、西の方に安土あり。警固の走卒二百名、各布袴の稜高く袪みて、藤柄の兩刀を跨へたる、手に赤樫の捍棒を、處々に衝立々々、もて非常に備らる、是日試撃の進退を、奉りぬる頭人四五名、各騎馬にて、東西に別れて立り。約莫試撃の少年等を、拺る時は大鼓を鳴し、退くには銅鑼をもてす、隊配等閑ならざりける。折から秋の季なれば、馬場の左右なる長小堤に、殘菊

這那里に咲亂れたる、白きあり、黄なるあり。況松栢の蒼然たる、獨楓の折を得貌に、眞紅なるあり、黄黑も交れり。鳥は梢躲れて、聲外に聞え、馬は嘶立て乘を俟めり。この日は朝より天よく晴て、風さへ枝をならさねば、馬蹄の黄土も多く得起ず。其方ざまの人々は、各勝を祈らぬはなく、共に東西なる集會所に在り。この他試擊の少年等の、作當奴隸夫役等まで、各其主に引添ふて、咸東西なる幕の內外に、集合て混雜したりける。有恁而この朝、辰の時候より試擊創りて、東西なる少年等、豫より定められたる、一番二番の次第を紊さず、鼍大鼓に從ふて、東西齊しく出て來つ、或は劍法槍棒白打、迭に得たる所をもて、雌雄を爭ふ者二十番記錄の祐筆、其甲乙を寫しつけて、主君に呈閱したりける。是よりして又、走馬の遲速を試られ、更に鬪射の勝負あり。开が中に、弓矢の故實に勝れたる者、共に笠掛十番を射て、君の撿覽にぞ備へける。然ば試擊の少年等、この日を晴と打扮たる、戎衣勒肚腰刀、衣裳手巾脛衣に至るまで、孰も錦の上に花を添て、疎なるはなきものから、負たる者は色を失ひ、勝たる者は意氣洋々と、式禮してぞ退きける。旣にして事果て、高賴主は、件の少年等の、武藝の甲乙を閱し給ふに、就中多賀典膳政朝の獨子なる、志賀介政賢、竝に高島石見介好純の侄なりける、長橋倭太郎勢泰、及其弟子、象船算彌知量等は、試擊の本事拔萃にて、射藝も亦人に

讓らず、後を取ること絶てなければ、高賴感悅大かたならず。軈て架屋に召よせて、譽て當坐の牽出物に、有名の刀各一口を、被けさせ給ひしかば、政賢勢泰知量等は、時の面目身にあまりて、共に君恩を拜しまつりしを、見る者聞く者、嘆賞して羨まざるはなかりけり。當下典膳石見介は、倶に席を降り主君を拜して、政賢勢泰知量等の、爲に恩賜の歡びを、稟果て又いふやう、昨日も聞えまつりし如く、浮浪武者修行の三少年の、武藝を御覽あるべうもや。既に今朝より召倶して、東西なる集會所に在り。臣政朝に因て、今日の試擊を願ふ者は、當城外なる醫師にて候、吾足齋延明の乾兒と聞えし、末朱之介晴賢、及臣好純に舊緣の兩少年、大江杜四郎成勝、峯張染六郎通能等、卽是なり。いかに計ひ候はんや。と言語齊しく請稟せば、高賴聞つゝ點頭て、現然者もありけるを、事に紛れて忘れたり。遮莫我家の少年等の、試擊は既に事果たるに、玆より敵手を出すは要なし。其少年等を相番せて弓馬槍法を一覽せん。約莫兩軍相逢ふ時、遠きは矢を射出して、敵の一陣を亂すべく、近きは必槍を入れて、突穨す事勿論なり。然ば今の戰場に、士卒の器械は弓矢と槍のみ、是に勝者何歟あらん。この意を其少年等に、得させて准備を急ぐべし。この餘の事は箇樣々々、如此々々に致すべしとて、言語急迫しく吩咐給へば、政朝好純承りて、猶も架屋に侍りたる、志賀介と倭太郎等に、御意の趣

云々、と示して准備を急がすれば、志賀介と倭太郎は、心得果て東西なる、集會所へ走去りけり。是よりの後時を移さず、准備整ひぬ。と聞えしかば進退使の老兵二騎、馬を東西に乘駐て東の少年末晴賢、西なる少年峯張通能、出て勝負を決せずや。と相呼はりつ共倶に、扇を抗て指招けば、早打鳴す蒐大鼓の、鼕々たる高音と共に、東西齊一馬を投むる、末峯張がこの日の打扮、正に是一對にて、黒革絨の身甲に、元涅腸綿袪に、玄囉紗の戰袍、元青緞の加渚袴を穿下して、頭には裏銀なる、戰笠を戴きたる、腰に兩刀を跨傲して、手甲脛衣も黒きを要とす。馬さへ純黑の逸物にて、東西倶に腰靮なる、手には各一條の、習學槍を挾みて、馬を徐々と歩めたる、一箇は是白面の美少年、臥蠶の眉丹花の脣、女子にして見まほしき、背鞍馬の御曹司も、かくやと思ふ可なるに、一箇は亦聞でもしるき、勇士の魁、威風凜然、面の色淺桃紅なる、星眼淸く鼻高く、筋骨の逞しげなる、昔筑紫の八郎主に、及ぶまでにあらずとも、必覺ある者ならん、と衆人固唾を飲ぬはなし。登下朱之介晴賢は、敵手の姓名記憶ある、彼十三屋九四郎の、弟なりしと豫聞く、峯張來六なりければ、且驚き且怪みて、心に十二分の鬼胎あり。他いかにして今日の試擊に、召入られたるやらん、と思ふものから毫も撓まず、素より無敵の豪奸なれば、肚裡に又思ふやう、往る夏の夜、彼奴の爲に、追遁られて、彼財嚢さへ、

探復されしは所以ある事にて、其折我身に寸鐵なく、且牢獄疲勞にて膂力衰へたればなり。先度の遺恨を復さんこと只この一擧にこそあれ、と尋思をしつゝいよ〳〵騒がず、桀六も亦朱之介の、姓名を今聞しより、訝りながら其面影を、見れば果して其人なり。今日の敵手は多からんに、彼奴に逢こそ幸ひなれ。思ひの隨に突伏て、時宜に依らば往る夜艾の、一百九十五金の事も、責問でやは已べき、と思へば勇氣十倍して、既に哉むる馬の脚搔に、鑣兒の音も鈴々、と臨機應變便宜を料る、智あり忠あり遠慮ある、勇士の心と表裏なる、朱之介も馬た哉めて、東西脅しく架屋に向ひて、馬上の式禮形の如く、兩拍打れて馳違はする、二馬の駿足目覺しく、駈を乘る者兩三遍、程よく兩敵相對ひて、聲を合せて衝出す、槍の梢頭は電光石火の、閃めくに異ならず。將この槍は眞物にあらで、梢頭には小毬の像き、括りたる布の圓嚢あり、嚢の内中には溢るゝまでに、蛤粉を多く籠たれば、衝るゝ者は顯然と、その迹遺らざるはなし。この故に末峯張の衣裳も馬も、東西都て、黑きを著用せられたり。閒話休題。爾程に晴賢道能は、威力を出し修鍊を盡して、挑戰ふ者半晌許、劣らず優ず見ゆる冗自、朱之介は自得の藝術、修鍊の上にも透間あり。又桀六は師傳の槍法、藍より出て藍より青き、一人當千なりければ、晴賢竟に敵し得ず、這里を突れ那里を突れて、黑き衣裳も馬さへに、只雪の日の案

山子の像く、總て眞白になりにけり。かくてぞ朱之介晴賢は、腕亂れ眼眩みて、吁嗟只今馬上より、衝落さるべう見えしかば、進退使の老兵扇を抗て、やよや兩少年手を止めよ。勝負は分明なり。と喚はる聲と共侶に、打出す銅鑼の響きに、柒六は自由を得ず、今一手にて朱之介奴を、衝落すべかりしに、と思へばさらに不樂しげに、そが儘馬を乘退れば、朱之介は是幸と、一霎時馬上に喘を止めて、進退使にうち向ひて、鄕にも多賀主に稟しゝ如く、在下槍法は人並のみ。本事は只是弓箭にて、百發百中の手段あり。いかで這次の試擊には、射藝を試給へかし。と聲振絞りて乞求れば、進退使微笑て、其は左も右もの事なるべし。且退きて休息あれ。といふに柒六も會釋しつゝ、軈て東西に別れつゝ集會所へ退く折、柒六は架屋の這方にて、下馬して笠さへ脫捨て、國守の面前を過りゆく、其爲體禮ありとて、譽ぬ者なんなかりける。是よりして架屋には、君臣件の兩少年の、武藝を云云と批評して、俱に笑局に入日刺す、景は短き秋の天、未歟申歟鎬々と、遠き山院の鯨音と、俱に亦復打鳴す、莵大鼓に從ふて進退使の老兵二騎、馬を東西に乘出して、扇を啓き指招きつゝ、東の少年末朱之介晴賢、西なる少年大江杜四郎成勝、疾々と喚れば、成勝晴賢阿と答て、東西齊しく馬を找る、打扮前と同じからず、笠と腰刀を除くの外、戎裝衣裳兩敵共に、咸淡官綠ならぬはなく、背に白羽の箭を

駝傲して左手には握太なる、重籐の弓を携へて、桃花の肥て逞しき、三歳駒馬に雲珠鞍置せて靮寛に乗傲したる、兩敵共に一對の、美少年とは見ゆるものから、大江杜四郎成勝は、骨法朱之介に立優り、其面影の花やぎて、最美しきのみならず、威風凛々たるも、凄じからず。譬ば末朱之介は、其眉目剪綵に似たり、美しけれども天然にあらず。又大江杜四郎は、容止の馨やかなる、雪中なる梅花の如く、風に春知る櫻に似たり。是なん牛若御曹司の、後身としもいふべけれとて、心ある者は評しける。間休話題。爾程に朱之介晴賢は、既に心に計りし如く、這回弓箭の勝負には、柒六奴を破滅に傳て、先度の怨を復さんず、と思ひしは虛憑にて、殊人なれば本意ならねども、往る夏十三屋の店前にて、竊聞しける夜其名を知る、杜四郎成勝にて指敵にあらねども、彼奴も冤家の半隻なり、允すものかは、と思誇りし面色なるを、四郎成勝遙に見て、毫も擬議せず馬に拍れ、驀地に馳出れば、朱之介も後れじとて、程よき地方に馳よせたり。這回は騎馬の的弓にて、兩敵三箭と定められ、纔に二寸の金的を、安土の邊に掛られたり。然ば末大江の兩少年は、箭を拔出し馬を飛して、箭程を測りて摽と射る。共に覺の手煖煉にあなれば、的の眞中貫きけり。是より二箭三箭まで、杜四郎は虛箭なくて、正に皆中の譽あり。又朱之介晴賢は、一箭二箭は的中したれど、第三箭は酷く竊て、安土の礎を射劖りけん、

鏃碎けて怪甚だり。是にて甲乙分明なれば、杜四郎も共に下馬して、安土の邊を過る時、朱之介は腹立しさに、一個の進退使にうち向ひて、聲高やかに論ずるやう、言無禮に似て烏滸なめれども、的は只是死物のみ。動靜進退自由なる、人倫禽獸と同じからず。然ば戰場に臨む時、敵豈大小の的の如く、動かずして我箭を受んや。この故に小可は、年十二三なりし時より、翔鳥を射て的を好まず。是をもて今の一失あり、この理を思召されずや。と敦圉猛き傲言を、高賴主洩聞て、理りなり、と思ふ程に、時既に秋の季なれば、創めて渡る天津雁の、一行這方へ來にけるを、高賴遙に瞻仰て、こは究竟なる物こそあれ。晴賢成勝兩少年に、那雁を射て落させよ。と仰により、近習の侍、曾根見五郎平、檐廊に走出て、末大江の兩少年、國守の御意に候ぞ。今來る雁を射て捉候へ。疾々。と急せば、末も大江も阿とばかりに、心許なく思へども、辭ふべき時宜ならざれば、共に弓箭を把抗げても、雲居迥に遠かりける、其雁約莫十隻あまり、架屋の邊を過る時、箭を搔抑みて投上れば、是にぞ驚く一行の、雁は亂れて降り來る、箭程を量りし末大江、克彎固めて嘌と射る。修錬遂はず二隻の雁、地上に翻と墜しかば、架屋に侍る老黨近習、憶はずも聲を合して、射たり〳〵。と譽にけり。登時兩個の進退使は、透さず二隻の雁を押えて、軈て架屋へもて參りて、君侯に見せ奉るに、朱之介が射たりし雁は、腹

より背へ射串れたれば、鮮血に塗れて既に死したり。又杜四郎が射たる雁は、隻翅を縫れて身を傷らねば、逃まく欲する勢あり。高頼是等を得と見て、感悦特に淺からず。且いへらく、成勝晴賢兩少年の、射藝は多く得がたけれども、生は難くして死は易かり。這回も成勝勝なるべし。先この旨を傳へよ。と仰に進退使こゝろ得て、出て件の兩少年に、御意云々と宣示せば、朱之介聞あへず、其義御諚で候とも、己等は感心しがたし。何とならば、軍陣に敵を射る者、其箭彼身を傷らずして、鎧の袖を縫ふたりとて、是を大功といはれんや。且翔鳥は殺さぬも猶易かり。兩敵東西に馳違ふ、亂軍の中にして、指す敵を射て墜すは、鴻鴈飛鳥の類にあらず。いかで目今成勝と、射騎の勝負を試み給へ。非如彼箭に身を傷られて、死するとも怨なし。いかでいかで。と乞求むれば、進退使已ことを得ず、晴賢が稟す所、箇樣々々。と聞え上れば、高頼主苦笑ひして、扨も末奴が口の強さよ。しかりとも今日の試撃は、人を殺すべき爲にあらず。然ば鏃を拔去りて、箇樣々々に計ひね、杜四郎と今一度、射騎の勝負を、決するもよかゝなん。準備をせよ。と急し給へば進退使額衝承て、かゝるべしとは知らず候へども、鏃なき箭も豫より、聊準備仕りぬ。と應て軈て出て來つ、末と大江の兩少年に、再度の御諚云々、と言語急迫しく宣示しつ、大江生も馬上の鬪射を、願はるゝ歟いかにぞや。と問れて杜四郎敢異


飄箭を飛して
杜四郎
朱之介を
射る
杜四郎



議せず、仰承り候ひぬ。左にも右にも晴賢の、隨意一箭仕らん。と言大人しき卽答に、進退使等歡感じて、准備の征箭を出し來つ、是を兩少年に示していふやう、各先この箭を見よ。鏃に代るに最小なる、瓢をもてしたる故に、射て中るとも彼身を傷らず、反て其迹分明ならん。故何とならば、瓢の底に穿る竅あり。內中に桐灰粉を籠たればなり。勿論各二箭を、准りとす、多く射出すことを許さず。但し其箭を受る者は、楯なくば不便ならん。前後は鬮に依るべしとて、長短き紙索を出して、末と大江に拔するに、朱之介は長きを拔得て、事の始に定められて、其歡び大かたならず。各彼箭二條と、小盾一枚を受取りつ、左りに弓を挾み、鞍の前輪に手を掛て、馬に閃りとうち跨れば、又打出す寬大鼓の、音も烈しき再度の晴技。朱之介晴賢は、這回こそ、四郎奴に、白泡喫せてくれんず、と思ふ威勢阿修羅の像く、馬を東西に馳錯はせて、透間を射まく欲すれども、大江は騎馬の達者にて、馬さへ駿足なりければ、秋の胡蝶の閃く如く、風に木の葉の散るよりも、奔蹄進退自由を得たれば、猛く勇める晴賢は、いまだ箭程を得ざりける。然ばこの勝負を見んとて、衆少年も作當等も、集會所を出て來つ、埒の邊に身を縮めて、いかに〳〵、と思ふも多かり。兒峯張柴六は、集會所の幕の間より、外目も揮らずうち見て在り。然ば又架屋なる、主も家隷も今日の見物は、只この一舉にあ

りけり、と思はぬもなきそが中に、高島石見、多賀典膳、長橋倭太郎、象船算彌、志賀介政賢等、曾根見五郎平に至るまで、免許を被り席を亂して、倶に架屋の檐廊の、左右に出て是を見る。折から秋の夕風に、左右なる小堤に色ぞ增す、梢は高き丹楓葉の、散蒐りぬる光景は、矢塚に狂ふ赤卒の、群飛ぶに似て最興あり、有斯りし程に朱之介は、敵手の人馬の疲勞をまたず、箭程を揣りて丁と射る。那時遲し這時速し、杜四郎は片鐙を、閃りと外す至妙の剽輕、鞍躱れをしてければ、末が射る箭は徒に、遙に飛で落にけり。朱之介は一の箭を、射損じたれば、心慌て、杜四郎が鞍局に、居置る處を丁と射る。二の箭を四郎は小盾をもて、發矢と受たる神速精妙、其箭後方に反復りて、朱之介の馬の鼻面を、下高に打しかば、馬は斷き跳狂ふて、駐るべくもあらざりしを、朱之介は辛くして、乘鎭めてもかひぞなき、始の廣言虚となりて、箭ははや既に盡しかば、且呆れ且恥て、姑且馬を駐めて在り。當下四郎成勝は、盾を戞哩と投棄て、適候晴賢主。迭に守の御意に因る、約束で候へば、己も一箭まゐらせん。よく受給へ。といはせも果ず、いふにや及ぶ。と朱之介は、弓を棄小盾を取りて、倶に馬をぞ捗めける。この段爰に盡しがたかり。又下の回に、解分るを聽ねかし。

第四十二回

家傳の刀子兩善少年を留む
百金の證書同居の母子を裂く

重說。大江杜四郎成勝は、朱之介が射る一二の箭を、拂ふ剽輕目覺しく、彼箭は既に盡しかば、主客の勢ひ地を易て、早くも射手になる隨に、小盾を投棄弓箭を刺ふて、射んとて馬を拵れば、朱之介は心慌て、悔しく思へど今さらに、已べきにあらざれば、弓を搔遣り小盾を取て、馬を東西に馳違せて、寄て組まゝ欲すれども、杜四郎は人馬一致の、奔蹄迅速自由を得たれば、他を毫も近づけず。西へ走らせ東に返して、互に駈つ駈らるゝ、鈴々たる鑣の音、丁々たる蹄の響、孰に暇なかりける。馬は汗し人は疲るゝ、末は憶はず乘後れて、間程よくなりしかば、杜四郎は背ざまに、身を反りつゝ剽と射る。弦音高き馬上の强弓、朱之介は小盾をもて、受まくするに何ぞ及ん、鈍や右の肩尖を、射られて骨に徹ふるまでに、疼痛を忍び馬を回して、避まくしぬる那時遲し、杜四郎が射出す二の箭に、朱之介は胸を射られて、一聲呀と叫びも

果ず、身を仰反して馬上より、大地に撞と墜しかば、是を見る者堪ずやありけん、齊一哄と笑ひけり。當下多賀の作當等、兩個の鑣奴と共侶に、東の集會所より、遽しく走來つ或は馬を牽駐め、或は朱之介の手を拿て、掖起さまく欲するに、朱之介は墜ける時、馬に酷く踏れしかば、速には、立も得ず、苦痛を忍び聲振絞りて、衆人さのみ俺をな笑ひそ。俺豈彼們に射られんや。避んとしつゝ謬て、鐙を外して墜たるのみ。といふを鑣奴等聞あへず、そは負惜みなり、是見給へ。おん身の衣裳は胸にも肩にも、桐灰粉多く塗れたれば、射られたる迹分明なり。卒立給へ。と窘めて、肩に掖被辛くして、集會所へ以て去りければ、猶這里に在る少年等は朱之介の口の巧きを、憎みて勸る者もなし。那が中に、多賀志賀介政賢は、憖に親の吹擧したる、朱之介が事の爲體に、且羞且腹は立ども、然而在るべきにあらざれば、伴の奴隷に吩咐て、朱之介を宿所に返すに、膂力ある奴隷每、朱之介を搭駝つゝ、多賀の宿所に將て來にければ、留守なる老僕こゝろ得て、朱之介に借て被たる、武裝衣裳を脱易させて、猛可に徭轎にうち乘て、吾足齋の宿所へとて、送遣したりければ、是を見る者いひもて傳へて、いよゝ胡慮になりにけり。是より先に高賴主は、末大江の鬪射果し時、左右に侍る多賀典膳と、高嶋石見介を見かへりて、汝等は何と思ふや。彼大江杜四郎、峯張柒六郎の槍棒弓馬は、今日の試擧の花なり、

賓なり因て這里へ召よせて、些の賞祿を取すべし。然れども又彼末朱之介も、翔鳥を射て墜したる、修錬を思へば凡庸なる、少年にはあらずかし。不幸にして他に一倍せる、成勝通能を敵手にしたればこそ、竟に後れを取つらめ、他が負たりとて然ばかりに、笑ふべき者ならねども、彼多辯にして愆を、飾りて人を誣るが如きは、實に是憎むべし。當城内なる壯佼等が、漫に、他と交らば、浮薄に成るもあるべからん。汝等よく這こゝろを得て、今よりの後朱之介を、城に出入を禁めよ。と理り切て諭さるゝ。典膳は背に汗して、仰畏うも、承り候ひぬ。臣も彼朱之介を、然る者とは思はずして、今日の試撃に召倶しゝを、後悔の外候はず。と陪話るを高頼主聞あへず、否、汝を疎忽として、咎るにはあらずかし。いはでもしるきことながら、今戰國の最中にあなれば、一藝ある者を薦擧て、君の役に立まくしぬるは、臣たる者の職分なり。然ばとて其人毎に、賢良の者のみあらんや。そを擇て用ると、用ひざるとは是も亦、君たる者の職分なり。今よりの後朱之介に、懲りずに薦擧を宗とせよ。何かは恥ることあらんや。と最鷹揚なる君命に、典膳は稍心おちゐて、畏りをぞ稟しける。當下高頼主は、又石見介を見かへりて、要なき言に時もや移らん、彼成勝と道能を、疾く召ね。といそがし給へば、石見介は阿と答て、出て杜四郎と柒六を、倶して架屋にかへり來つ、かくと聞え上しかば、高頼

席を改めて、件の兩少年に對面あり。且いへらく、憶ふに倍たる汝等の、武藝剽輕一人當千、得がたき俊傑なる哉。但し成勝は、天飛鴈を射て墜しゝ時、傷つけずして隻羽を縫しは、偶然るや然はあらで、こゝろありての技なる歟。と問れて杜四郎頭を擡げて、然ン候、漢籍の例を思ひ候に、鴈は素是信義の鳥なり。是をもて秋每に來賓す、德を諸侯に比らべたり。この故に諸侯の贄には、必鴈を執といへり。然れば今、國守の御意に從ひまつりて、射て墜す鴈なりとも、殺して捉らんはさすがにて、形の如くに仕りぬ。と言爽に陳しかば、高賴感悅大かたならず、憶ず膝を打鳴して、然也々々實に然なり。汝は武藝のみならず、文學も亦今の世に、稀なる才子といひつべし。今日よりして道能と、共俱に予に仕へよ、秩祿は乞ふに任せん。諸國を遊歷することかは。と連りに留めて已ざりしを、杜四郎は阿とばかりに、應難つゝ後方に侍る、柒六を見かへりて、俱に答稟すやう、思ひがけなき御懇命を、推辭まつるは無禮なれども、臣等は素より情願ありて、共に武者修行に出たるに、いまだ百里の路だもゆかで、なでふ仕官を求むべき。その義は免させ給へかし。と辭ふを高賴未聞あへず、其は然る故もあるべけれども、藝術未熟の者ならば、武者修行するよしもあらん。修鍊の上には要なき事歟。と諭せども四郎柒六は、從ふべくもあらざれば、多賀典膳高島石見、共俱に膝を進めて、

言語齊一說諭せども、杜四郎も柰六も、只云云と固辭のみ、言果べくもあらざれば、主君の後方に侍りたる、曾根見五郎平堪ずやありけん、突然と進み出て、杜四郎等にうち向ひて、名告をしつゝ且いふやう、和殿等さりとは情强し。いはでもしるきことながら、我君は世々當國の大國主、京都將軍家の御爲に、御後見でをはしませば、主君に取て不足はあらじ。よしもなき虚辭退して、後悔をなし給ひそ。と挑むを柰六聞あへず、勃然として答るやう、𠔥はいはる事ながら、人各情願あり、匹夫も志を奪ふべからず。己等主僕は故鄕に親あり、兄さへあるに教に悖りて、他鄕の君に仕へんや。といひも果ぬに杜四郎は、目を注せつゝ推禁めて、更に典膳石見介等に、向ひて謹て稟すやう、御諚は實に有がたきまで、辱く候へども、既に柰六が稟しゝ如く、臣等は父兄の爲に、已がたきよしも候へば、いかで只この儘に、放ち遣せ給はんことを、願ひまつるの外候はず。御緣竭ずば異日又見參に入る日もあるべし。この義宜しく御執成を。と辭ふを高頼主うち聞て、しからんには是非に及ばず、抑留の念は斷ぬ。五郎平賞祿を取せよ。と仰に五郎平阿と答て、懐にしたりける、目錄二通を拿出して、卒とて遞與せば四郎柰六、受戴きつゝ開き見るに、近江布十反、沙金五包、大江杜四郎へ、とあり。柰六が受たる目錄も、亦是に同じきを、卷收め懐にして、倶に恩を拜していふやう、小人毎は然せ

る功なし、爾るに是等の賜を、受奉るはこゝろにず。然りとて又辭ひまつらば、不敬の罪を增もやせん、殆當惑仕りぬ。と謝するを高頼主うち聞て、然ばかりの東西何賦あらん、今日の武藝を賞するのみ。尚この地に所要あらば、逗留は隨意なるべし。石見介も這意を得て、他等が他鄕へ立去をり、先だちて予に報よ。卒退らん。とて立給へば、多賀典膳、曾根見五郎平、以下の近臣相從ふて、俱して後堂へぞ赴く程に、晷いよ〳〵傾き落て、下晡になりにける。當下杜四郎來六は、高島石見介と共侶に、遽しく架屋を出て、土居て國守を目送果て、杜四郎は要ありとて、石見介の袂を曳て、請ふて集會所へ退く程に、試擊の爲に召された る、少年等は皆かへり去りて、只高島の作當と、十餘箇の夫役等のみ、殘りて幕の外面に在り。この餘は人のなくなりたれば、杜四郎は密やかに、石見介に談ずるやう、斯いはゞ何とやらん、面正しくもなき事ながら、鄕に在下憶りなく、這腋挿の刀に附たる、刀子を失ひぬ。抑〻俺這兩刀は、昔天喜の年間、鎭守府將軍源賴義朝臣の爲に、筑石の刀工が作る所、青海波の三言銘あり。其後多くの春秋を歷て、建久の年にやありけん、我遠曾大江廣元に、賴朝卿の賜りしといふ、家の口碑に傳へしを、父の遺書にて稍知りぬ。刀子も亦同作にて、小柄は則全白金なり。波濤に知鳥の高彫あれば、紛ふべくも候はず。身にも代がたき至寶なれば、今日も亦

腰を放さず、只晝飯を賜る時、解て傍に置きしのみ。折から衆少年の伴當等、夫役も多く立稠たる、混雜の中なりければ、盗れたるにぞあらむずらん。いかで我爲に、其盗兒を穿鑿て、とりかへして給ひね。と憑めば又朶六も聲を低めて、囁に小可も推竝びて、其傍に在りながら、毫も心つきなかりしは、野狐にや魅されけん、面なくこそ候なれ。と共に吅く祕密の要事を、石見介は列々と、听果て嗟嘆に堪ず、屢四下を見かへりて、現に安からぬ事なりき。頼れずともそが儘に、捨措くべき事にあらず。なれども暮るゝに程もなし、矧又この處は、長談の室にあらねば、誘給へ宿所に退りて、左にも右にも主張せん。といひつゝ更に聲振立て、伴當等を召よせて、いそしく立ば杜四郎も、朶六も相從ふて、宿所へいそぐそが程に、この日も果敢なく暮にけり。復説高島の宿所には、主人も客も終日の、疲勞なきにあらざれば、共に夕饌を果して後、蚤く臥房に入りしかど、杜四郎は今日失ひし、刀子の事こゝろに掛りて、睡らんとするにいもねられず。おなじ思ひに朶六も、小襖兒を被ぎ向在して、うち譚ふ語次に、朶六がいふやう、今日稠人の中なりとも、刀子の失しは怪しきに、猶怪しきは朱之介が、試撃の隊に入りしのみ。其來歴を知らざれば、左にも右にもこゝろ得がたかり。この折をもて推捉へて、敲かば他奴が竊拿て、石を換玉に抓せたる、一百九十五金の事はさらなり、刀子の盗兒をも、

知る所縁にもやなるべからん。といへば杜四郎點頭て、そは勿論の事ながら、我們は旅客にて、權もなく威もなきに、人を捕へて罪を正さば、毛を吹きて疵を求るに似たり。只高島生にのみ、囁き告て彼人の、意見に由るにしくはあらじ。咱憶ふに、今日の試撃に朱之介は東に在り、我們は西に在り、其間近からねば、非除朱之介を責訂すとも、百九十五金の外に、彼盜兒は知れがたからん。然は思はずや。と囁けば、柒六は有理と答て、猶も餘談に及ぶ程に、長き秋の夜更闌て、丑三時候になりしかば、倶に枕に就きにけり。然ば杜四郎と柒六は、其詰朝疾起出て、主人の身邊に人なきをり、閑室に請迎へて、杜四郎は又刀子のことをのみ、云云といひ出て、其資助を乞討れば、柒六は又朱之介の、舊惡の事の顚末、彼百九十五金の事、及財嚢に入換られたる、兩箇の小石の事はさらなり、九四郎の義俠落葉の慈善、其崖略を說示して、思ふよしさへ囁き告れば、石見介は驚きながら、聞果て答るやう、己も昨宵終夜、愚按を旋したりけるに、彼刀子の盜兒は、必是外人ならで、衆少年の作の奴隷歟、然らずば夫役等の所爲ならん、と思ふものから何人と指す、證据を得ざれば是も亦、雲を抓み風を追ふより、果敢なかるべき闇猜なり。因て又思ふに、彼刀子の盜兒は、必人に沽却して、錢に換るにぞあらむずらん、倘果してしからんには、夜々城外に立出て、或は典物舖骨董店を、渉獵もしつ問

も訂さば、見出すこともあるべからん。是より外にせん術を知らず。又末朱之介の事はしも、舊惡形の如くなりとも、其金子に識なくば、叨に捉へて責問がたかり。且他が乾兒吾足齋は、當家の權臣多賀典膳の、宿所に出入する者なり、と人傳に聞し事あり、遮莫典膳親子は、思慮ある老實家なれば、最屓の沙汰を做す者ならねど、證据もなき朱之介の、舊惡を訴がたかり。紿と云恰と云、事皆難義にあらざるはなし。猶又再思し給へといふ、最正首なる密談に、朶六はいふもさらなり、杜四郎歡承て、御示教實に其理あり。彼百九十五金の事は、當時九四郎が償ふて、其内中なる一百金を、落葉に還したりければ、しうねく祟らでもありぬべし。只等閑にしがたきは、我家傳の刀子なり。芳意に儘せて今宵より、街衢に出て渉獵てん。と答る間に老僕が來て、御客あり。と告しかば、石見介急に見かへりて、誰そと問へば、別人ならず、曾根見五郎平宗玄が、昨日守高賴主より、杜四郎朶六に賜りたる、沙金十包と白布を、吊臺に載奴隷に舁せて、みづから齎し來ぬるなり。是により石見介は、遽しく退きて、衣裳を更などする程に、杜四郎と朶六も、袴を穿て共侶に、客房に出て對面す。迭の口誼言果て、五郎平は又杜四郎と、朶六に向ひていふやう、昨日は不慮に君邊にて、論辯過言に及びしを、後悔の外候はず、必な介意し給ひそ。就て其折寡君より、兩兒に贈り給はせし、二種を齎したり。

といふ間に若黨等が、玄關より運び來ぬる、四箇の有脚の大折敷に分ち載たる、沙金十包と白布二十反を、處狭まで置竝れば、四郎柒六額衝承て、言語齊一答るやう、武藝は家業の事なるに、功あらずして恩貺を、受まつるべくもあらねども、推辭稟さば不敬といはれん。異日又好純をもて、稟上るよしもあるべし、這義宜く御承を、賴みまつるにこそと云。其語を接て石見介も、五郎平に謝していふやう、今日の一義は宰領の、走卒のみにてあるべきに、貴所の光臨當りがたかり、己も程なく出仕して、御恩を拜しまつるべし。といふに五郎平、否吶等は、大江峯張の兩才子に、送別を兼たるなり。幾比立去給ふぞや。と問れて杜四郎、然ン候、仕官を辭ひまつりし上は、疾く去まく思ひしに、爭何せん、已がたき要緊の事出來しかば、猶又時日を累るまでに、長逗留になるべき歟、料りがたく候。といふに五郎平頷きて、丌は左も右もの事ながら、其日定らば高島主、疾聞え上給へかし。暇まをす。と身を起すを、石見介推禁めて、猛可の事にて儲なけれど、薄茶一服まゐらせん。といふをば聞かで刀を曳よせ、そは忝く候へども、知らるゝ如く多務なれば、異日推參仕らめ。と推辭つゝ立出るを、四郎柒六石見介も、玄關まで是を送りて、異口同樣に勞ひけり。かくて杜四郎等は、主人と倶に退きて、悄やかに談ずるやう、豫心を知られし如く、仕へずして去まく欲する、我們がいかにし

て、這賜を受られんや。こはこの儘に藏め置て、異日この地を立去るの後、寶庫に返し給ひね。と憑めば石見介沈吟じて、亓は最難義の役ながら、志ある者は、孰もかくこそあるべけれ。こゝろ得てこそ候なれ。と應て軈老僕を召て、件の沙金白布を、長櫃に弆させ、手親封じて、舁せて土庫へ遣しつ、其身は若黨奴隷を將て、君所へ出仕したりける。是日長橋倭太郎勢泰、象船算彌知量は、大江杜四郎、峰張柒六の、試撃の勝を賀せんとて、石見介の弟子等と共侶に、高島の宿所に來にければ、件の大江峰張は、猶逗留すと聞知りて、歡ぶこと大かたならず。是よりの後間なく時なく、參來て討論しぬる程に、多賀志賀介政賢も、早晩其隊に入りて交り淺からずなりにけり。然ば杜四郎柒六は、晝こそ交遊の爲に暇なけれ、夜は訪來る人のあらねば、出て彼刀子を、索ねまく欲すれば、石見介も案内の爲に、倶に微服にて、夜毎に城外に立出て、をさ〱市に閲する程に、秋盡きて霜寒き、十月の中浣になるまで、いまだ便りを得ざりける。休題再說。末朱之介晴賢は、那日大江杜四郎に、射て落されて落馬しつ、馬に踏れて腰骨を、損ねたるのみならず、初峰張柒六に、習學槍もて衝れし時の、撲傷も一度に發りにけん、胸痛み身は氍毹て、堪べうもあらざりしを、多賀の奴隷の吩咐られて、亓が儘篗轎にうち載て、宿所に送り來にければ、母の阿夏の老荸はさらなり、无四郎の吾足齋も、こは

いかに、と驚き惑ひて、夫婦右より左より、箯輴なる朱之介を扶出しつ、軈て小子舍に臥しめて、事の顚末を問まくするに、朱之介は只嘔くのみ、言詳ならざれば、吾足齋已ことを得ず、多賀の奴隷を勞ひて、朱之介が怪我したる、事の首尾を諮れば、奴隷每は祕すによしなく、彼大江杜四郎、峰張衆六の射藝槍法、衆に秀しを、朱之介が懲ずまに、二度まで試擊を乞しかば、槍にも弓にもうち負て、果は大江の瓢箭に、射て落されて馬に踏れし、其事の光景を、聞たる儘に說示して、告別しつ外に出て、二人は空箯輴を擡起し、一人は又箱挑燈の、蠟燭を接更て、城內へかへり去しかば、吾足齋老孳等は、俱に呆れ且腹立しさに、朱之介の生兵法は、怪我の基よ。と呟くのみ。晚稻は又始より、朱之介の調戲きを、快からず思へばや、納戸に在りて出ても來ず。然りとて已べき事ならねば、吾足齋は膏藥を、拿出て朱之介の、痛處に布などする程に、老孳は方僅良人の取らせし、湯液を急に煎果して、朱之介に薦めけり。爾程に吾足齋は、次の日多賀の宿所にゆきて、昨日衆少年の試擊の折、朱之介を汲引せられし、歡びを稟すべく、事の首尾をも問んとて、些の人情を懷にして、朝疾出て觀音寺の、城に入らまくする程に、守門の城兵推禁めて、且いふやう、汝は吾足齋延明ならずや。昨宵守より御下知あり、汝の乾兒末朱之介はいふもさらなり、吾足齋をも當城內へ、出入を禁めよ、と仰付

られたりけるに、入らまくするは大膽なり。疾いなずや。と窘れば、吾足齋驚きて、开は何事歟知らねども、咱等は犯しゝ罪あらず。そは多賀大人こそ知らせ給はめ。いかで彼大人に、吾足齋が參りにき、と告給はらば厄釋て、召入れらるゝにぞあらむずらん。いかで彼大人の御宿所へ、このよしを告給ひね。と口説を城兵聞あへず、默れそは烏滸なり。禁門の一條は、多賀殿より徇られしに、吾足齋が推參して、追ども去らず、と報稟さば、搦捕れとこそいはるべけれ。然でも去らずや、かへらずや。と敦圉ながらをり立て、權威の捍棒搔拿薙く、打拂はまくしてければ、吾足齋は吐嗟とばかりに、怕慌て逃る時、甃石の稜に跌きて、忽地撻と輾びしかば、城兵等は堪難て、齊一咄と笑ひけり。既にして吾足齋は、膝頭を摺破りて、疼痛に勝ねば唾を塗て、隻脚を曳つゝ城下なる、己が宿所にかへり來つ。生平にはあらぬ聲高やかに、老苧を屢喚近づけて、嚮に城兵にいはれし事、那里の不首尾箇樣々々、と具に告て又いふやう、畢竟は朱之介が、慾なること做出しても、負じ魂懲ずまに、好らぬ口を唶きにけん、守はさらなり、多賀殿に、憎まれずばいかにして、罪もなき俺さへに、禁門の祟に逢んや。かゝるべしとは知るよしもなく、晩稻の面瘡愈果たれば、始より猶美しくなりにしよしの那里へ聞えて、又婚姻を議せられん、媒人の來よかし、と其方の天を仰ぐまで、日毎に俟しは空憑めに

て、心筑紫の琴の緒よりも、果敢なく斷れしえんのつな、結ぶよしなくなり果しは、皆是彼奴が所爲ならずや。と席薦を敲く腹立聲に、外の聞えを忘れたる、然しも良人の空憤を、老嫗は聞くだに胸苦しくて、倶に額を擁するのみ、又いふよしもなかりけり。折から晩稻は納戸に在り、親の高聲聞知りて、涙は袖によるの雨、まつにかひなき志賀介と、絶し緣は我からさきの、世にしなしたる罪障の、報なる歟、とうち歎く、壁に對いて吻く息の、出雲八重垣まだ見ぬ夫と、絶し緣しを復結ぶ、神なし月も怨めしく、思ふ小春の空櫻、脆きは風の咎なるべし。是よりの後吾足齋は、城内に病架あらずなりて、玄關寂しくなりしかど、町家には猶藥を乞ふ、得意なきにあらざれば、日毎に出て、朱之介を見かへらず、晩稻も亦枕方に、立よることだに斁ふの故に、只難面て他が安否を、知らず貌にて問ねども、母の老嫗は骨肉の、恩愛に溺されて、夜に日に看とりて粥を薦め、獨朱之介の爲に、膏藥を貼替湯藥を煎じて、暇もあらず立揮けば、いとゞ短き初冬の、日景を己が爲にのみ猶短しと思ひけり。爾程に朱之介は、病臥二三十日にして、撲傷は餘波なく瘥り果しかど、吾足齋に疾視られ、呟るゝが腹立しさに、そが儘臥て在る程に、十月望の日になりぬ。這朝吾足齋は、西東なる病架に招れて、宿所に在らねば、朱之介は折こそよけれ、と起出て、蒲團搔遣り口漱ぎて、母の身邊へ來にけるを、阿夏の

老苧は見かへりて、珠よ疼痛は甚麽ぞや。始よりして三飡は、生平に異ならざればにや、瘦だに見えず最芽出たし。といふをば聞かで高胡坐、髯搔撫て喃奶々、撲傷の愈しは今日のみかは、五日も六日も前日より、起も出まく思ひしかども、阿爺に面を見られなば、睨着られ燻されて、耳囂く堪がたからんに、晩稻すら一向は、何等の腹の立やらん、ものも得いはで皓々と、目を疢るが心惡さに、今日まで臥釋迦で在しょかども、幾までも斯てあるべき、髮を結させ湯にも浴てん、俗にいふ木葉落しにて、朝夕は最寒かるに、いまだ刺被の沙汰もあらず。この容にて何處へ出られん。錢まれ衣まれ貸給ひね。身装して暇稟さん、他人に劣る這里のみに、日の照るもの歟。と喧嘩の緒、解を老苧は聞あへず、復しても横道兒、鴉は口に惡まる、と人の謠ふを思はずや。爹々は何とも宣はねども、咱敗衣を解洗ひして、綿衣は疾に出來たり、是被て出て來よかしといひつゝ、立て竹櫃なる、陸奥太織の絮腸衣と、共に拿出す鏸百錢を、卒とて軈て取すれば、朱之介はよくも見ず、开がまゝ傍に閣きて、喃奶々、思ひ立日が吉日と、世の常言にもいふなれば、今日より他處に巢を易て、邪慳の宿を解脫せん。就て阿爺に預けたる、枸神の代金百兩を、日今出し給ひね。といふを、老苧は聞あへず、开は亦思ひがけなき事なり、始爹々の敎訓を、儞は何と听たるぞ。非如枸神の卽效にて、晩稻の面瘡愈たりと

も、爾の爲には女弟品、大人とは義理ある親子なるに、他人がましく算盤立て、貸借をいふ事かは。と詞急迫しく窘るを、朱之介は冷笑ひて、开はいはるゝ事ながら、親子間でも錢財には、言品出來て後竟に、愛を失ふも世に多かり。おん身こそ我母なれ、阿爺は素是他人にて、恩もなく義もあらず。邂逅環會ふたればこそ、乾父面して宿せらるれど、犬猫でも喫ではあらぬ、纔に三たびの乾菘飯の、外には何養たる例もなし。そを見傚ふてか晩稍まで、傲慢高上る無愛想、縹致自慢勲知らねども、いひ甲斐なければ何事も、時世と辛防したれども、今日は行蒐の駝賃なり、枸神の價を還しね。と漸々に募る高聲に、老聟も亦勃として、いはせて閣ば不敵の本性、親を親とは思はずや。昔年周防の山口にて、兄四郎殿に逢ざりせば、爾はさらなり我身すら、辛き浮世に堪難て、鹽燒く浦の煙りとも、なりなんものを彼大人の、好意によりて伴れ、爾は京師に留りて、中納言兼顯（西樣卿などいふ）に召置れ、我身は單陸奥へ、將ていなれたればこそ、富までにあらずとも、人竝に世を渡來ぬるを、恩なし義なし、といはれんや。況錢財の事はしも、大人の手づから出納して、奴家に任せ給はねば、今百兩といふ金の、有やなしやは知らねども、縱貯祿ありとても、そを朱之介に取せ給ひね、と唧口親いふよしあらんや。烏滸なる事を。と敦圉くを、朱之介呵々とうち笑ひて、そはいはるゝ事ながら、昔年周防の山口に

て、我們親子の窮阨を、救ひしは今の阿爺の、肚に計較あることにて、おん身に惑ひし以所なれば、恩にはあらず、義ではなし。おん身も亦爾ぞかし、天にも地にも只一個なる、子を棄て去れし藪の下の、別れを思へば世間に、慈悲ある親の心と異なり、骨肉ですら八九年、音信不通で過されしに、素他人なる今の阿爺が、乾父滾しに金百兩を、踏まくするとも取らで已んや。一も入らず二も入らず、萩の花餅より大きなる、印判押て渡されし、彼百兩の手實玆にあり。是見給へ。と懐なる、鼻紙の間より、彼一通を拿出して、皺を伸しつうち開きて、是聞給へ。とうち咳き、

可買取藥種の事

枸神一枚、價直金百兩也。右於卽效有之者、明十七日、金子無遲滯可渡之候。爲後照手實仍如件。

亨祿三年八月十六日　　吾足齋　延　明印

旅人　朱之介丈

保人　宿　六丈

と讀訖りて、喃奶々、阿爺は宿に居らずとも、かばかり正しき證據あれば、這一通と交易に、

おん身彼百兩を、咱等に遞與給ふとも、阿爺は言品なかるべし。這照文がものをいへばなり。おん身は知らずと宣へども、阿爺に貯祿多かることも、そを祕措るゝ處まで、咱等は先刻猜したり。是欲からずや。と賣弄する、手實を老婆は掻拿て、見つゝ煞辣哩と引裂棄れば、朱之介は吐嗟とばかりに、駭慌て、禁むれども、及べくもあらざれば、勃然として怒に堪ず、眼を瞋らし聲を苛立て、奶々は狂女歟亂心歟、苟且ならぬ百金の、手實を引裂棄られては、親子なりとて許さんや。と罵る面色凄きを、老婆は見る目に涙滔て、否狂亂もせず、件の金を、惜みて做しゝ事ならねども、始儞を珠之介と、知らで多々の渡し給ひし、這手實のある故に、親を親とし思はざる、蓬き儞の大慾心を、噀直さんとて引裂棄たり。非如今其百金を、出して儞に取するとも、有る時は有るに信せて、湯水の如くに使ひ棄ぬる、金は其身の怨家なるを、知らで欲する愚さよ。是に就きて思ひ出にき、初儞の生れし時、奇き事のみ多かりければ、賣卜翁に問試しに、其折寫ておこされし、卜書一通玆にあり。そは漢字にて讀ねども、要あるべし、と思ひしかば、軈て儞の腰吊の、護身嚢に祕置しかど、佛生山に在りし比、失れやせんと思ひかへして、移して我身の神符嚢に、藏め置たればこそ、幾旬の年を歷ぬるまで、故の隨にて今尙あり。是先讀て聞せよ。といひつゝ懐抱の嚢より、其一通を拿出して、卒とて渡せば朱

之介はやうやくに怒氣を治めて、默然と叉きたる、手を解きつゝ其卜書を、拿上て讀程に、老苧は膝を進めて听けば、其文にいへらく。

子而非子。非親是親。一窮一達。因果輪々。

とあり。朱之介は兩三番、讀復してもこゝろを得ねば、眉を顰めて、喃奶々、こは最解し易からねども、親にあらずして是親なりとは、我身には實父の外に、乾父たる者三四名あり。周防の叔々も其中なれば、其頭の事をいふにあらずや。と問ば老苧は沈吟じて、今こそ思ひ合したれ。こは周防なる叔々の事と、儞の上をいふなるべし。一窮一達云々、とあるは今こそ困窮すれ、後に望を達する日の、ありとしいへる卜定の、隱語にぞあらむずらめ。倘果してしからんには、山口まれ三石まれ、行て叔々に再會の折、其卜書を見せまゐらせなば、いよゝ愛歡びて、必資助になり給はん。然ば今枸神の價の、百金を得たらんに、倍て幸多かるべし。左ても右ても這家に、同居せじと思ひなば、そを留るにあらねども、爹々は今日或病架の、床徹の壽祝に、招れたれば小夜深なん。遲くば俟ずに寢りね、と今朝宣はせしよしもあり、日景も午は過たるに、明日立去るともけしうはあらじ。我身も今は何ばかりの、遊財はなけれども、去歳の冬陸奥なる、信夫の鄕を立去る時、今は要なき髪の飾りと、花やぎたる衣なんどを、沽却なしたる金子


手實を證ふして朱之介母ふ百金を徴む
朱之介
老苧
おしね


五足斎

四五兩あり。汝の盤纏に取せんず。卒とて軈て身を起しつゝ、納戸へ入るも影護き、晩稻に聞れじ見られじ、と思ふこゝろの安からねば、我物ながら盜むが如く、圓金五兩を出し來つ、紙に拈りて朱之介に、渡すを楚と受取て、この五枚は百兩の、一割にだも足らねども、なきには優べし、罷りてん。今より浴し、結髪して、枸杞村なる宿六許、訪ふて那里に一宿明して、翌日起行こそ便宜に侍れ。阿爺の還さを俟著て、慇に告別せば、復も口舌の起りやせん。おん身代りて左も右も、宜く稟し給へかし。といひつゝ衣を脱更て、豫準備の長財嚢に、金子はさらなり、卜書さへ、錢さへ藏めて腹に纒締、外には敗衣敗脚袢、踏皮も一緒に推圓めて、袱に包などす。菅笠までも遺なく、とり揃へても東西足らぬ、腰に短き逆旅刀、さして往方は定めなき、雲と水との別路に、老萓は餘波惜まれて、涙と共にとゞめかねし、只獨子を放遣る、憂は浮世の習ぞ、と思絕ても又あふ事の、何時と知らねば堪難し、涕うち噉て送別、聲蒙らして、やよ珠よ、周防はさらなり、那里まれ、落著地方を得ぬる日に、疾く便を聞せよかし。やよ喃喃と諄返すを、朱之介は應へのみして、袱包笠草履、兩手に引提て玄關より、いそしく出てゆきにけり。是日晩稻は巳の時候より、頭痛すとて納戸に在り、寢とはなしに横臥びて、枕に就て在りし程、母の老萓と朱之介の、密談を洩聞しかど、起出んはさすがにて、故の儘にて在

りける程に、阿夏の老莢は玄關に、朱之介を目送果ても、晩稻は起て出ても來ず、他に告ずばあしかりなん、と思ひつゝ奥に入る折から、思ひがけなく吾足齋が、かへり來て座席に在り。老莢は驚き且訝りて、おん身は今宵云々にて、深けずば還りがたかるべし、と宣はせしに誰何ぞや、生平よりも最早かりき。といはれて吾足齋、然ばとよ、今日十々綿屋の床徹の、賀席に招れながら、祝ふて些の人情を、齎せずはあるべからず、と方僅心づきしかば、そを整ん爲にのみ、背門よりかへり來にけるをり、儞と又彼珠が、長問答の顚末を、聞とはなしに听知りて、呆れもしつ腹は立ども、團座に入らば妙ならず、と思ひかへして躱れて在り、彼奴が出てゆく背影を、見つゝ顯れ出たるなり。斯いはゞ何とやらん、無慈悲には似たれども、破落戸と知りながら、珠之介を留置ば、後竟に親の首に、縄を掛ることなからずや、と思へばこゝろ安からざりしに、彼奴が猛可に辭去りしは、我と儞の厄禳にて、是より造化直るべし。就中彼枸神の、百兩の手實を引裂棄たる、雄々しき儞の揮きは、譽るにも猶あまりあり。適吾足が妻なる哉。といはれて老莢は苦笑ひして、原來言皆聞れにけん、血を分たる親子でも、彼百金の情由あれば、出ていねとはいひがたかるに、猛可に他がこゝろから、辭去りしは幸に侍り。といふ間に納戸より、晩稻は徐に出て來つ、爹さまかへらせ給ひし歟。と問つゝ母の後邊に居る

を、老萼は急に、見かへりて、晩稲頭痛は瘥りし歟。儞にはまだ告ざりき、朱之介は云々。といふを吾足齋推禁めて、彼奴は生涯來ずもあれ、養老小孃の晩稲だに、恙もなくば我們夫婦は、左團扇で百年までも、樂隱居とやいはるべからん。其頭の餘談は後にして、彼進物を何まれ彼まれ、見繕ふて出さずや、日の短きに。といそがせば、老萼は那這搔撈りて、稍弆出す堅魚脯を、三歟五歟推裹む、陸奥紙に楮線掛て、標題寫す走筆、そを褊絹袱に重裹して、卒とて渡すを吾足齋は、受取りつ得と見て、是で好、これでよし。今朝しもいひし事ながら、今宵我かへさの遲くば、前後都てよく鎖して、寢まりて皷くを俟給へ、いで〳〵。といひつゝも、刀の瑠衝立て、身を起しつゝ遽しく、背門より出てゆきにけり。爾程に朱之介は、腹に計較むよしあれば、猛可に母に別を告て、立去りてもまだ遠くはゆかず、巷頭なる錢浴室にて浴しつ、篦頭店に立よりて、結髪をさする程に、肚裡に又思ふやう、往る比城内にて、試擊の折に思ひがけなく、九四郎の弟なる、柒六奴を敵手にしたれば、彼奴が口より我舊惡を、漏さば人に知られやせん。事の破に至らぬ先に、巢を易ばや、と豫より、思はざるにあらねども、栒神の價百兩金を、取らでいなんはさすがにて、母を債揮し甲斐もなく、纔に五兩を餞別に、當養れたればとて、西國までの盤纏はさらなり、小使料にも春の雪、程なく消てあらずなりなん。商量

敵に足らずとも、先宿六許赴きて、立たる腹を横にするまで、氣を轉してこそ左も右も、去向を定るにしくことあらじ、と深念をしつゝ其前面なる、酒肆にて酒一斤を、小罇に餙せて酒菜さへ、二三種買とりしを、袱包と一荷にして、やをら肩にうち被つゝ、枸杞村を投ていそぐ程に、下晡になりにけり。既にして朱之介は、枸杞村に來にければ、まだ見も忘れぬ宿六の、門より裏面を刺窺きて、宿六叟は宿所に在歟、珠之介が來つるぞや。と兩三番呼門へば、應と答へて敗紙戸の、走難るを左右して、推開て立迎ふるを、と見れば宿六にはあらずして、年二十五六なる一箇の壯佼、面の色黒くして、澁塗の苧笥の如く、身材高くして、向院の金剛に似たるが、襀縞なる方袖の綿衣の、申の時可なるを被て、柹色の故りたる、細布を帶にしつ、破れて大指の顯るゝ、官綠の刺踏皮を穿て、背の虱兒を搔ながら、奥より出て來ぬるなり。此は是何人ぞや、幵は下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之十三

第四十三囘

深夜に盗を捕へて賢郎家寶を全す
闇刀玉を碎きて老賊創て懺悔す

登時末朱之介は、呼門ふ隨に奥より出ける、其人は宿六ならで、まだ見も知らぬ壯佼なれば、訝りながら找み入りて、和郎は是何人なるぞ。宿六叟は在さずや。と問へば壯佼、然ばとよ、小父は前月節供の比、三池郡へかへり去りぬ。何等の所用歟知らねども、今日の間にはあひがたかり。我上は豫より、小父に聞れし事もあらん、這里なる故の家あるじ、留守七の獨子なる、盆九郎卽是なり。和君の事は小父宿六の、話說にて聞知りたり。卒先這方へ找ませ給へ。といふに朱之介こゝろ得て、我も亦其名を知る、盆九哥々でありけるよ。許し給へ。と肩より下す、袱裹と酒罇を、やをら其頭に閣きて、地炕の邊に坐を占れば、盆九郎は埋火を、搔起しつゝ扠いふやう、偶來ませし珍客なるに、宿六は在らずとも、代りて些の欵待を、必すべき該なれども、いかにせん、恥をいはねば理も聞えず、と世の常言は宜なる哉、親留守七の病中よ

り、年貢の未進、村には借財、せん術のなき隨に、我身は久しく夫役に參りて、城内に在りしかど、僅に粮を賜るのみ、酒も得飮ず、寒天に、𥿻衣一領で藻鹽草、掻集めては亦略らるゝ、鬪錢境にも造化乏くて、西へも東へも身の振がたさに、一霎時暇を給はりて、かへり來ぬれば又借財に、債られて術なさに、村長刀禰に振向けて、今日這家を賣渡ししかば、我有にして我有ならぬ、這里に寢るも今宵のみ。明日は又城内へ、かへり參りて夫役部屋の、厄會にならばや、と思へば今朝より氣を腐らして、肱を枕に抱火盤、炭團と共に瘦るまで、現に苦の絕ぬ世にこそ。と喞言がましき身上話に、朱之介も嗟歎して、那は妙ならぬ事なりかし。我も亦、宿六叟の知られし如く、彼枸神の一義より、絕て久しき母刀自と、今の阿爺に環會ふて、那が儘同居したれども。といひつゝ外面見かへりて、はや日は暮なん最寒かり、有斯るべしとは知らずして、齎したる酒肴にあり。夜食代りに酌替して、夜と共に話すべし。是溫めずや。と傘抗て、出す件の酒罇酒菜を、盆九は見つゝ含笑て、こは逆なる御造作にて、反て痛み煎鍋も、燗鍋も皆售竭して、酒盃もあらずなりしかど、貧乏壜は身を離れず、輾轉て御坐す、是にて事は罇の酒、移して尻を燒てん。とうち戲れつゝ纔なる、蒼柴地炕に折燒きて、稍煖る壜酒、茶碗一箇を敗折敷に、酒菜も載る竹の皮、松にはあらぬ杉箸添て、迭に酌をとり膳に、彼一椀我一

椀、獻しつ酬えつ手袂より、はや暮にき、と柵火燭して、四下を光らす夜酒醼。盆九郎は身を起して、門の戸引て坐にかへる、主客迭に薄醉の、舌さへ廻る朱之介は、溢るゝまでに篩せたる、茶碗の酒を一口飲で、又盆九郎に向ひていふやう、多辯は要なき事ながら、嚮に開場をしたる我上を、今詳に盡さん歟。我阿懷は骨肉の、恩愛なきにあらざれば、客扱ひにはせられねど、阿爺は素是贋物にて、親類滾しに彼百金を、久しくなるまで竟に遞與さず。剰往る比、城内にて試撃の折、我愆て落馬して、腰の骨を折きしより、阿爺はそれを科にして、疾死ねかしといはぬばかりに、只難面のみもてなされたる、怨なきにあらねども、親といふ字に勝よしなければ、虱を押えて愈るを俟しに、四五日前より稍瘥りて、百里の路もゆき易ければ、先や他郷に走らんと、尋思をしつゝ阿懷に、談じて枸神の百兩金を、受取らまく欲しゝに、然しも婦人の淺はかにて、阿爺と肩を比べにけん、手實を引裂棄られたり。腹立しさは涯もなけれど、敵手は親なり婦人なり、いふ甲斐あるべき者ならねば、阿容々々と告別して、軈て那里を立去りしは、今日亭午の時候なりき。非如手實を破られても、宿六といふ證人あれば、倶に國守に訴て、百兩金を取らでや已ん、と思ひつゝ今來る途にて、又克念へばそれも亦、迂遠にて埒開がたけん、开には優て手短なる、主張なきにあらねども、初對面なる和主には、這

肝胆を吐がたかり。といはれて盆九郎眼を睜りて、そは亦聞えぬ事なりかし。我小父ながら宿六は、老邁にて役に達べくもあらず、侄は猶子の如し、錢になるべきことならば、和君の資助にならざらんや。とばかりにして照据なくば、猶も疑ひ思はれん。要こそあれ。と奥の方より、敗たる扇箱をいだし來つ、开が儘朱之介に示していふやう、我家祖傳の什物あり。是を質として和君に預けん。先見給ひね。と拿出すを、朱之介受取て、燈下にて熟視るに、小柄附たる刀子にて、青海波の三字銘あり。小柄は則全白金にて、波濤に知鳥の高彫あり。朱之介冷笑ひて、盆九然ばかり胡詐をな盡そ。こは世に稀なる名刀なるに、假令先祖傳來なりとも、貧農の和主等が、今まで藏め置べくもあらず、必別に來歴あらん。隱さで告よ甚麼ぞや。いかにぞやと詰らるゝ、盆九は困じて頭を搔て、爾か見られては脱るゝ路なし。其刀子はいぬる比、咱等がものしつるなり。开を詳に說く時は、彼城内にて試撃の折、咱等は茶番の夫役にて、西なる集會所に在り。其日大江と喚いふ少年の、中刀に附たる這小柄の、錢になるべく思ひしかば、久しく隙を窺ひしに、彼人腰に放さねば、手を下すよしなかりしに、晝餉の割籠を披れし折、ものしつる者卽是なり。なれども竊く是を傳ば、立地に人に知られて、事の破れになりもやせん、と思ふの故に祕置しを、今拿出して和君に見するは、赤き心を知らせんとてなり。

外へな漏し給ひそ。と眞術立て呟くを、朱之介は又冷笑ひて、膽魂は見どころあれども、开は只刀子細工にて、我片腕に負むに足らず。先はや是を斂めよ。といひつゝ投返す刀子を、盆九郎は本意なげに、扇箱に藏めても、治りがたき口の咎、漫なりきと呟けば、朱之介うち笑ひて、否今の言は戯れのみ。然らば我計較の、奥の院をうち開ん歟。耳をおこせ。と曳よせて、今既にいひつる如く、敵手にならぬ阿爺の吝嗇、血を分られたる阿懐すら、形の如くの造化なれば、左ても右ても商量盡では、枸神の價百兩金を、渡さるゝ事にはあらず。所詮今宵潛入りて、阿爺の金銀の有涯り、搔攫ひて走るとも、親の物は子の物なり、竊むに似て盜むにあらず、差引出入過不及なしの、算帳を消されんのみ。是等の事は我身單にて、做しがたきにあらねども、いまだ飽ず思ふよしあり。阿爺が養老種にとて、愛る一箇の螟蛉女あり。其名を晩稻と喚做して、年は二八で十二分の、縹致這頭に稀なれども、我又其奴に怨あり。兀自の腐骨序次に、宿鳥の晩稻を搔抓みて、京歟浪華へ將てゆきて、娼妓に售らば、五六十金の、身價は得易かりてん。この義を和郎に賴むなり。今宵阿爺は或病架の、床徹にとて招れて、酒を裝るゝ該なれば、かへさは必眞夜中過ん。子二刻の時候、我と和主と、那里にゆきて窺ふて、我は背門より潛入りて、阿爺が納戸に祕措ぬる、款冬花をものしてん。和主は前門の頭なる、竹牆を乘て

裡面に入りて、先脱路を啓くべし。而して玄關に潛入らば、其次は中間なり。又其次は出居の間にて、左りは庖湢、右は納戸なり。晩稻の臥簞は納戸にあり。和郎は咱等に斟酌せで、晩稻に蚤く布囊を、銜せて肩擔出しねかし。出合ふ地方は圓通河原の、材木の陰にて俟ん。和主はやくは其首にて等ね。辛苦錢は等分なり。よくせよかし。と呫々、言詳に說示せば、盆九郎は幾回となく、頷きながら含笑て、そは最妙なり、こゝろ得たり。初更を過して這里を出なば、子の時候必那里に迫らん。又喫べし。と地炕なる、壜兒をやをら掖出し見て、噫鈍や無慙やな、長談に心引れて、纔に殘る一壜を、煎酒にこそしたるなれ。といひつゝ自酌に茶碗に受て、吹きつゝ三口に喫乾して、卒とて獻せば朱之介も、興に乘して又一霎時、俱に醉をぞ盡しける。現同病相憐み、同氣相求め得たる歹人の、一面にして故舊の如く、蹺を吹ぬる盜跖の、犬自物なる身の好歹を、迭に知るや、白布の、犢鼻褌の端を顯すまでに、酒に寒苦を忘草、心の鬼の醜草も、冬枯れぬらし、長き夜の、遠寺の鐘に深初て、既に時分になりしかば、朱之介は盆九郎を、いそがし立て出まくす。當下盆九は身を起して、身整して、且いふやう、我身に寸鐵なかりせば、萬に一人に知られて、逐るゝ事のあらん時、何をもて敵に當らん。撮小なれども物したる、青海波の刀子茲にあり。是究竟。と拿抗て、折敷に殘る竹の皮を、三折に卷て鞘

にしつ、彼刀子を懷に、楚と挾めて立出れば、朱之介は旅中刀を、腰に帶つゝ袱包を、引提ていそぐ夜の路、颫し寒き望月の、影明ければ惑ひもせず、圓通河原を過る時、朱之介は菅笠と、袱包を、其頭なる、建し材木の蔭に隱すを、見かへる盆九は歩を駐めて、大哥かへさに取る爲歟。といふ間に朱之介は、走り就つゝ去向の首尾を、諜し合してゆく程に、夜は子の初刻とおぼしき時候、吾足の門に來にければ、朱之介は相別れて、背門より潛入らまくす。當下盆九郎は、籬笆を乘、内に入りて、先前門なる樞戸の鎖を外し、戸を密と開きて、脫路に便りよくしつ。又玄關の戸を外して、納戸を投てぞ潛入る。この夜吾足齋の宿所なる、阿夏の老苧は晩稻と共に、良人のかへるを俟けるに、既に亥中は過れども、門の戸敲く音もせざれば、晩稻は遂に允されて、納戸に入りて枕に就きぬ。老苧は獨細やかなる、燈下を掲げつゝ、單物被て、寢るとはなしに脚踏入れて、横臥しより程もなく、そが儘熟睡したりしかば、前後の門の本を讀見て在りしに、更ゆく隨に寒氣に堪ねば、置炬燵に大火桶なる、火を拿移しつ蒲團をより盜兒の、入るを夢にも知らざりけり。爾程に朱之介は、案内しつたる上なれば、吾足が家の裏手より、板塀を乘、松を傳ふて、庭に閃りと下立て、左右して檐廊なる、戸を一枚推開て、納戸へ潛入る程に、盆九郎も亦茲に來つ、晩稻が枕の頭なる、圓行燈の火光にて、面を對して

盆九郎も手傳ふて、力を勠して樫木戸架の鎖固ければ、頷くのみ。朱之介が今撈らまくする、晩稻は方僅睡端にて、且年少ければ、嗜睡きを、朱之介は覺ずやある、と見かへ揉斷捨るに、盆九郎はこゝろ得て、晩稻の夜被を掻犇ぐ、登し蒐れる勢ひに、晩りながら指さし示せば、吽嗟と叫ぶそが口へ、手拭銜する布嚢、挣扎く兩手を拖りて、屛風に掛稻は忽地驚き覺て、縲々纒に最緊しく、綁縮めて動かせず。廾が間に朱之介は、戸架の内なる小簞たる帶をもて、金二裹の重みあり。かくあるべしと豫より、思ひしことよ、とい笥を、撈りて奪ふ財囊には、雛猴を抓むに異ならぬ、盆九郎は音に泣く晩稻を、小腋に楚へばえに、邑に集るてふ暴鷲の、阿夏の老孛の枕方なる、火桶に撲地と跌けば、上にありける眞と抱き揚て、外面投て出る時、烟を起て散亂す。老孛は是に驚き覺て、身を起しつゝ鍮藥罐の、瓦辣哩と墜て灰さへ茶さへ、戰れても心利たれば、墜たる藥罐と鉄火箸を、兩手に盆九郎を、見つゝ吽嗟と胆を潰して、賊有々々と叫ぶ程に、合壁なる津問屋の、主人はさら拿てうち鳴しつゝ、命を涯り聲限りに、霎時もあらず咸起出で、庭口傳ひに片折戸を、推つ敲なり旅客まで、事ありけりと驚き覺て、彼病架にて強られたる、酒に醉ても本性錯はず、夜深てやうきつ入まくす。浩處に吾足齋は、小謠亭唄る生醉の、一步は高く一步は低く、只是蹌々やく辭去りて、單宿所へいそぐ程に、

蹌々と、辿り著ける己が門を、と見れば樞戸開きてあり。訝りながら找み入れば、玄關の戸も亦一枚、外されたる歟、寄掛てあれば、いよ〳〵心驚きながら、丌が隨にうち登る程に、盆九郎は縛縢げし、晩稻を小腋に搔抱きて、撞見兒に吾足齋に、礙と相値ふ迭の驚き、前後へ退く兩三步、吾足は透さず聲立て、盜兒まて。と引提たる、小挑燈を衝と刺出せば、盆九は面を見られじ、と左の拳を掙して、挑燈撲地と打落す。闇夜は善惡なき虛々實々、間もあらせず吾足齋が、拔き晃めかす刃の雷電、盆九は抱きし晩稻を盾に、兩手に擧て受留る、領舍を擊たる刃の銳味、憐むべし二八の少女は、胸の邊を深痍の一刀、叫びもあへぬ猿鑣は、只是巴蜀山峽の、腸を斷つ鮮血の絳。吾足は人や錯にけん、と思へば躊躇ふ丌が程に、盆九は晩稻を投棄て、懷なる刀子を、拔出しつゝ吾足の脇を、小柄も徹れと、丁と刺す。刺れて吾足は苦とばかりに、臀居に撻と仆るゝ程に、盆九は刃を拔取りて、跳越つゝ驀地に、外面投て逃去る折から、這頭を過る少年あり。是則別人ならず、大江杜四郎成勝なり。今宵も青海波の刀子の、在處を撈り知らまくほしさに、峰張柒六郎通能を將て、石見介好純と共侶に、甲夜より市を涉獵つゝ、更闌てかへる路程、料らずも吾足の門を、過る折から門內より、突然と出る暴漢あり。右手に刃を執たれば、賊なるべしとはやく猜して、去向に立て聲高やかに、やよ留まれ。といは

せも果ず、盆九郎は刀子を、振晃めかして走蒐るを、四郎は閙がず身を反して、利手を捉て撲地と蹴る。蹴られて盆九は刃を捨て、筋斗りつ一丈ばかり、前面へ撐と仆るゝ折しも、後れて來ぬる桀六に、杜四郎聲を被て、峰張其奴を綁ずや。といふに桀六こゝろ得て、起んと掙扎盆九郎を、捽て壓へて動かせず、腰に准備の早繩を、手繰出しつ犇々と緊しく結扯て推居けり。是時高島石見介も、挑燈の蠟燭を、途に接易て來にければ、杜四郎見かへりて、只今怪しき暴漢を、搦捕たる事の顚末、箇樣々々と告知らしつ、石見介が携たる、圓挑燈の光りを借りて、今暴漢が振捨たる、刃を索ねて拿抗見るに、こは疑ふべくもあらぬ、三十日夜索難たる、青海波の刀子なりければ、杜四郎の歡びいへばさらなり、石見介も桀六郎も、欣然として倶にいふやう、原來這奴は前月望の日、大江家寶の刀子を、竊み拿りたる賊なる事、問ずして知るべきのみ。といへば杜四郎點頭て、只其罪あるのみならず、這刀子にも其奴が衣にも、鮮血多く塗れたれば、憶に今宵竊盜の爲に、這家に潛入りて、人に傷たるにぞあらんずらん、今緊しく敲かずは、何をもて實を吐かん。亟く拷問せよかし。といふに桀六阿と應て、腰なる鐵扇拔出して、息をも養れず撻懲せば、盆九郎は苦痛に堪ず、その身の素生云々と具に告て又いふやう、御推量の如く、其刀子は、衆少年の試撃の折、己が出來心にて、竊拿りたりけれども、這

頭で售らば其主に、早く知られん事を怕れて、深く祕措き候ひしに、這里の家主人吾足齋に、いはで已がたき怨あれば、今宵詣來て彼人と、角口の怒りに乘して、其刀子をもて疵を負して、走り去らまくしつる折、刀禰原に撞見ふて、搦捕れ候ひしは、天罰にこそ候はめ。といふを石見介冷笑ひて、大江主聞給ひし歟。今這奴が招了する所、刀子の事は實なるべく、吾足齋の事は信がたかり。といへば柒六も倶にいふやう、件の吾足齋延明は、咱等相識ならねども、彼末朱之介の乾父なりといふ、人の噂に聞しのみ。今宵其門前にて、他に仇しゝ賊を捕へて、青海波の刀子を、とり復けるも最奇なり。といふに杜四郎再議に及ばず、現に這盜兒の片言を、詰りて時を移さんより、疾這家に呼門て、事實を探るにしくことあらじ。といふに石見も柒六郎もしかるべしと應つゝ、倶に盆九郎を牽立て、開きてぞある角門より、找み入りつゝ呼門へども、奧には人の聲するのみ、出迎る者なかりけり。是より先に末朱之介は、晩稻を略奪るべき事を、盆九に任して見かへらず、只彼金子をものせんとて、辛くして小簞笥なる、財嚢を撈り得て掖出すに、最重やかなりければ、憶はず滿面笑を含て、搔抓みつゝ身を起す程に、次の座席に臥たりける、母老婆が睡眠覺て、何にかあらんうち鳴しつゝ、賊有々々と叫ぶにぞ、朱之介は心慌て、面を見せじと思へども、其頭を過るにあらざれば、庭に出る脫路なければ、

只得其次の間へ、出るを老孛は驚きながら、燈火の光に看一看て、开は珠にあらずや。と喚も得果ず身を起して、推留めまくしてければ、朱之介は彌慌て、蝗の如く擲廊へ、身を跳して走り出て、庭へ閃りと飛下る、勢力劇しかりければ、憶はず柱の肱壺鐵に、持たる財嚢を掛留られて、紐は斷離れて手に殘り、財嚢は柱に吊りてあるを、立戻りて拿る暇なければ、庭の折戸を蹴破りて、逃去まくする程に、隣家なりける津問屋より、庭口傳ひに人多く、這方へ來ぬる挑燈の、火光間近く見えしかば、朱之介は度を失ひて、進退玆に窮るものから、案内知たる上なれば、庭なる涸井に身を躱して、透を得ば塀を乘て、逸去まく思ふのみ、いまだ便を得ざりけり。爾程に津問屋には、老孛が烈しき喚聲と、打鳴す物の響の、常ならざるに驚覺て、事ありけりと、主も小廝も、挑燈を引提、六尺棒を衝立て、裏手傳ひに來にける程に、當晩同宿の旅客等も、思ひ合するよしやありけん、皆共侶に起出て、主人の後に從ふて、庭門まで來にけれど、內に入らんはさすがにて、开が儘樹蔭に立集ひて、事の容子を知らまくす。老孛は是を知らねども、今津問屋等が來ぬるを見て、泣聲立て、やよ叟立、疾來給ひね。今宵我家の前後の門より、兩箇の盜兒潛入て、倶に納戸に在りし時、箇樣々々の事により、奴家が睡覺しかば、恐怖忘れて皆さまを、喚集へまくせし程に、件の一箇の盜兒は、疾く外面へ逃去りぬ。

又一箇の盜兒は、庭へ走出たれば、そも既に逃亡けん、今は影だに見えずなりにき。猶心許なきは、方僅納戸にゆきて見るに、晩稲は臥簟に在らずなりぬ。戸架は鎖を毀れて、良人の貯祿の金子なごりなく、竊み拿られたりける歟。簞笥の內はまだよく見ねども、狼籍いふべうもあらずかし。又只その事のみならで、方纔玄關の方に當りて、人の挑む如き音聞えしに、其後はいかにあるらん、ゆきて見ばやと思へども、然しも物のおそろしくて、胸のみ騷がれ侍るかし。と告るに驚く津問屋の、主人も小廝も眼を睜りて、幵は安からぬ事なりき。いで〳〵といひつつも、亦挑燈を振照して、主僕玄關にゆきて見るに、思ひがけなき吾足齋は、深痍をや負たりけん、右手に刃を持ながら、鮮血に塗れて仆れて在り。又其身邊に女兒晩稲は、帶もて手足を括られて、胸より腹に刀瘡あり。共に生べうもあらざれば、こは什麽如何。とうち騷ぎて、老苧を呼て云々、と告るに老苧は胸のみ潰れて、淚の外にわくよしもなく、丈夫と女兒の空しき骸を、抱き起しつ呼活れども、甲斐あるべうもあらざれば、津問屋の主僕手傳ふて、隨卽父女の亡骸を、幵が儘座席に舁入れて、藥よ灸と罵りて、倶に介抱しぬる折から、外面に人ありて、幾回となく呼門しを、事に紛れて誰もかも、耳には入らでありけるに、津問屋の主人が稍聞つけて、訝りながら小廝を出して、其來意を問するに、一霎時ありて三箇の武士、一箇の暴漢に、

重索掛たるを牽せつゝ、件の小廝を案内にして、主人の妻に對面せんとて、軈て奥まで來にければ、老苧はさらなり、津問屋の、主人も其人々を、知らねば心訝りながら、先上座に席を讓りて、又其來意を請問へば、一箇の武士答へていふやう、俺は當國守家の兵頭、高島石見介好純是なり。又是なる同伴の兩少年は、武者修行の爲この地に來ぬる、大江杜四郎成勝、峰張粂六郎通能是なり。と名告ば杜四郎も倶にいふやう、俺いぬる比城内にて、衆少年の試撃の折、我腋挿の刀に附たる、家寶の小柄を喪ひしかば、高島主と相謀りて、夜々市に渉獵程に、方僅這頭を過るをり、這個盜兒盆九郎が、手に最小なる刃を握持て、是の門内より走り出るを、心ともなく見てければ、遣も過さず搦捕て、其事實を責問しに、這奴は枸杞村なる、古人留守七の獨子にて、盆九郎と喚做す歹人なる事も、俺刀子を竊拿たる事も、招了によりて知られしかば、其刀子は立地に、とり復して玆に在り。と告れば粂六其語を次て、爾るに件の刀子にも、這奴が衣にも血の塗れしかば、故ありぬべく思ふをもて、猶も緊しく責問しに、這家主人吾足齋に、怨ありて口論の折、痍を負せたりといへり。其事信じがたければ、事の實を知るべき爲に、扨こそ牽もて來つるなれ。といふに老苧は涙を斂めて、件の三士に向ひていふやう、奴家は老苧と喚れたる、吾足齋の妻にて侍り。今日しも良人は病祟に招れて、更闌るまでかへり來

ず。折から兩個の盗兒あり、其一個は我夫の、貯祿のある所を、豫知りけん納戸に入りて、財嚢を引提て背戸の方へ、出るを見しのみ、往方を知らず。又一個の盗兒は、女兒晩稻を搔攫ひて、玄關の方に出去りしを、奴家は楚と認めねども、其折良人のかへり來て、廝戰ふて親も女兒も、倶に深痍に息絶たる歟、开は何なりけん知らず侍り。と告るに石見も杜四郎も、柒六も倶に點頭て、それにて事皆亮査したり。やをれ盆九郎、吾足齋と晩稻とやらんを、斫殺しける顚末を、招了せずや。と責問へば、盆九は頼ることを得ず、跪きつゝ陳ずるやう、今は何事をか慝すべき、今日しも彼末朱之介が、我枸杞村の宿所に來て、密やかに相譚ふやう、乾父吾足が、吝にて、枸神の價百金を、今に渡さぬのみならず、實母すら慳貪にて、手實を引裂捨られたれば今はしも堪がたかり。今宵家内に潛入りて、咱はある涯りの金銀をものせん、汝は晩稻に布嚢を、銜せて肩駝出しねかし。咱又彼少女にも怨あり。利得の金は等分なり、と憑れしより心惑ひて、倶に納戸に潛入りて、朱之介は那這と、撈りて財嚢を引出し、己は晩稻に布嚢を銜せて手脚を緊しく縛りて、肩にうち載て出去るをり、主人なるべしかへり來ぬる、玄關の頭にて、盗兒入りぬと思ひけん、罵咎めつゝ刀を拔きて、撃んと找むも野干玉の、闇に紛れて少女を盾に、受し刃尖、憐むべし、少女の深痍に彼人は、違ひぬる歟と思ひけん、撓むを得たり、

と懐なる、刀子をもて彼人の、脇腹愕然と刺仆して、角門より逃去る折、殿們に撞見ふて、搦捕れて今さら後悔、別に仔細は候はずといふ。招了分明なりければ、阿夏の老竽は羞たる色あり。又石見之介等にうち向ひて、聞くが如きは今宵の禍事、我子といはんも恥しき、人にして人ならぬ、朱之介の惡心より、這盆九郎さへ荷擔して、丈夫も女兒も横死の折、殿達の出來まして、地方も去らず我冤家を、搦捕せ給ひしは、歎きの中の歡びなりき。といふ間に隣家の主人も、找出つゝ倶にいふやう、小可は合壁なる、客店の主人にて、津間屋集三郎是なり。嚮に這女房が、慌忙しき喚聲に、うちも措れず小斷等を將て、走來ぬる甲斐もなく、早盜兒等は逃亡て、吾足と女兒の横死を知るのみ。相應しき御用も候はゞ、承り候はん。仰付らるべうもや。といふ間に石見之介は身を起しつゝ吾足齋と、晩稻の金瘡を得と見て、杜四郎等に示していふやう、大江峯張是見給へ、晩稻とやらんは深痍にて、胆胃の二經斷絶したれば、左ても右ても生べからず。吾足齋は刺瘡にて、こも亦必死の深痍なれども、鳩尾猶温にて、寸口の脈あるに似たり。仰我家昔より、仙傳不思議の神藥あり。約莫刀瘡にて死したる者、いまだ三日を經ずもあらば、其藥を用るに、一旦甦生せざる者なし。縱令其命長からずとも、或は後事を辨じ、或はよく遺言する者、兒孫の爲に裨益あり。只頭を撃落されし者と、五臟を破られたる者は、

其效驗あることなし。正に是軍陣必用の奇藥なれば、咱等生平に腰にして、今も猶茲にあり。是をもて吾足齋を、一霎時なりとも活さん歟。といふに四郎も柰六も、倶に感悦大かたならず、开は奇妙なる仁術なり。しかるべし。といそがせば、石見介敢遅凝せず、則老苧と集三に、事云々と宣示すに、相こゝろ得て身を起しつ、集三は一條の、布を索ねてもて來つゝ、吾足齋の痍口を、三四重楚と纒程に、老苧は茶碗に最清き、水を汲拿りてもて來にけり。當下石見介は、腰に吊たる藥籠を、啓きて出す彼仙丹を、吾足齋の口中に推入て、件の水もて灑下せば、津問屋主僕は吾足齋を、抱き起しつ老苧も倶に、聲を合して喃々、と呼活ること半晌許、其聲やうやく耳に入りけん、吾足齋は忽然と、眼を睜り左見右見て、原來俺身は死したりし歟。といふに老苧は歡しさに、携り附つゝ喃我伕、心地正可に做り給ひし歟。今宵おん身に痍を負せたる、冤家は枸杞村の盆九なりしを、這殿達に搦捕れて、牽れて今猶茲に在り。晩稻の横死は、おん身の愆、親の刃に身を果したる、事の起りは朱之介が、枸神の價百金の、空になりしを怨みけん、盆九郎さへ伴ふて、子二刻の時候潛び來て、おん身が納戸に祕置き給ひし、財嚢を奪ふて逃去りにき。晩稻の上は箇樣々々、おん身の甦生は茲にます、高嶋大人の御庇にて、仙傳奇特の神藥の、卽效にこそ侍るなれ。と告るに頷く吾足齋は、憶はずも嗟嘆しつ、形貌を改

め膝組直して、石見介等に謝していふやう、告るは面なき事ながら、又是後の誡に、做るよしあらんを、俺渾家も、人々も听給へかし。誠に善悪應報の、終に脱れぬ理りを、物の本にも寫してあれば、孰も知りたる事ながら、慾に惑へば思ひも出ざる、人我凡夫の愚さよ。蓋當夏晩稲の悪瘡、療藥術計盡し折、住吉なる神主の、家に其藥ありと聞えしかば、三伏の日の暑も厭はず、我身那里に尋ゆきしに、藥方をのみ傳授せられて、枸神一枚用ひなば、即效疑ひなきものなり。但し枸神は、和漢に稀なり、價百金ならざりせば、得がたからんといはれたり。奇方を得たるは嬉しけれども、俺に百金の貯祿なし。いかにすべき、と思難て、旅宿へかへる夕月夜、住吉の郷を距ること、十町ばかりなる畷路を過る程に、と見れば去向に兩個の少年、一箇の財嚢を爭ふて、挑戰ふ程こそあれ、月額の迹最長き、一人は竟に勝ずやありけん、持たる財嚢を捉られじとて、後方遥に投遣りたり。折から照る月雲隱れして、朦朧と做る隨に、俺竊窺ておもへらく、得がたき枸神ありとても、そを買拿るべき百金なくば、何をもて本意を遂ん、那財嚢の重やかなる、投らるゝ時大地に應て、音せしにより推量るに、東西多きを知るべきのみ。今是をしも採らずもあらば、寶の山に入ながら、手を空しくして歸るに似たり。嗚呼爾也、と身勝手に、惑初たる不義の慾、徐哩々々と近就きて、件の財嚢を拿まくする時、手

に障る小石二三隻あり。當下俺又おもへらく、財嚢を這儘掻攫ひなば、他等は必外人に、奪れたりと思ふべし。然ては今より後々まで、背安からざる所あり。要こそあれ、と尋思をしつゝ、遽しく財嚢を開きて、有ける圓金二裹を、天の與へと懐へ、楚と挾めて、件の小石の、程よきを二隻拿抗て、开が儘財嚢に入易て、手ばやく紐を結びつゝ、舊處に閣きて、竊歩しつゝ樹間に入りて、蚤くも其首を立去りつ。當晩浪華の旅宿にて、單孤燈の下にして、件の金子を數まへ見れば、一百九十五兩あり。是もて枸神を購得ても、尚八九十金の餘りあり。と思へば心つよくなりて、浪華はさらなり、京左界、大津草津の盡處までも、約莫藥店のある涯り、をさ〳〵枸神を徵めしに、竟に亦あることなければ、只得宿所にかへり來つ、俺妻阿夏の老孛にすら、件の金子の實事を告ず、這回京にて憶りなく、一舊知己に逢ひしより、多く資料を得たりとのみ、詭示して更に又、この觀音寺の、城下より、枸杞村久禮畑に至るまで、枸神を藏弆する者あらば、價百金に買取るべしといふ、其義を多く書寫して、隈もなく徇示しゝに、三池の莊客宿六の汲引にて、枸神一枚を得てければ、驀て晩稻に煎用るに、一夜の間に惡瘡愈て、疥迹だにあらずなりしかば、俺歡び知るべきのみ。然れば其次の日に、宿六の倶して來ぬる、枸神の沽主朱之介に、はじめて對面しぬるに及びて、おもひきや朱某は、俺妻老孛の


高嶋の仙丹
暫時
吾足齋を活
そ
吾足齋
おいそ


石見守
がん九郎

實子なる、末松珠之介ならんとは。面忘るゝまで年を歴たる、再會の歡びに、就て主張當初に異なる、俺肚裏に思ふやう、朱之介は俺乾兒にて、晩稻の爲に義兒なるに、他人がましく今さらに、枸神の價を取らするは要なし。俺貯祿は異日亦、晩稻の所緣を徵る折、衣裳調度に做すにはしかじ、と尋思をしつゝ朱之介を、幵が儘に留め在らせて、敢枸神の價を遞與さず。其後城内にて試擊の折、口も八調手も八挺なる、朱之介に勝利あらば、俺立身の階梯に、做るよしもあるべし、と思ひしは、空憑にて、大江峯張兩少年に、戰ひ負て、剰、落馬の撲傷に病臥たれば、出ていねとはいひ難て、只厭しく思ひしに、老等は其子を諫難て、懲さん爲歟、枸神の手實を、無心に引折棄しより、朱之介は親を怨て、告別して出てゆきて、今宵歹人盆九郎と、共に納戸に潛入りて、彼一百九十五金を、奪ふて走り去りたる歟。盆九は晩稻を豪奪して、玄關より出てゆく折、俺憶りなくかへり來て、闇きに迷ふて擊刀に、晩稻を害しゝのみならず、俺身も反て盆九の爲に、必死の深痍を負ふたりし、緣故を原れば、色情利慾兩ながら、猿馬狂ひし俺昨非にて、君に仕て忠ならず、親に仕て孝ならず、友には信なく、子に慈なき、果は故鄉に住侘て、他鄉の鬼に做るまでに、這禍害にあふみ野を、露の命の置き所、慾に惑へば、身に闇き夜に、人の爭ふ財嚢の金を、搔攫ひつゝ幸あり、と愛歡びし罪科を、思へば盆九朱之介

等の、竊盜無慙の惡行と、相距ること遠からず、五十歩百歩といはまくのみ。倘他等をのみ惡とし憎まば、鄙語に云、豕を抱て、臭きを忘るゝ、類に似たり、と今やうやくに、悟り得ぬるも遲からずや。といふ事毎に、息吻きあへず、實に必死と見えたりける。這段文倘多ければ、又下回に、解分るを聞ねかし。

第四十四囘

因果覿面囊金故主に復る
宿縁不空孤孀舊家に寓る

阿夏の老苧は吾足齋の、舊惡懺悔の顚末を、听くに惑ひは晴ながら、霽ぬ涙の夜の雨、袖のみ濡れて術なきを、思ひ復して、喃咱伕、今はじめて知る金子の事、然あるべしとは思ひもかけず、只朱之介をのみ誠難て、枸神の手實を引裂棄しは、心裡恥しく侍るかし。是に就きても痛しきは、親の刄に身を果したる、晩稲は素より行狀に、兎毛ばかりも疵はなき、心操さへ縹致さへ、美し過ぎて陽炎の、命短くあらずや、と思ひ過しは親の愚癡、富も榮ん壻がねを、神に佛に願言の、果は歎きの杜となる、實子よりもいとをしさの、千百十寸穗の繁薄、招く甲斐なき魂招ひ、かへらずなりし別路は、親の因果の子に報ふ、例ありともいかなれば、親さへ子さへ同じ夜に、脊の垂氷の劍太刀、身を殺しぬる哀しさよ。といへど答へは亡骸を、搖動して繰かへす、倭文の苧環今茲に、輪々て因果覿面。昔阿夏が卜問し、彼神卜の讖文に、子而

非子非親是親、とありしは晩稻朱之介等の、上ならずや、と思ひ惑ふ、無明の醉のまだ醒ぬ、婦女子心にとり亂しては、外看忘れし諄言を、津問屋主僕は慰難て、愀然たる其が中に、深壙に屈せぬ吾足齋は、頭を拾げ眼を睜りて、やよや老耄、愚癡をないひそ。俺隱慝の報ひを思へば、晩稻の横死も歎くに由なし。然るにても往る六月某の夜に、途に財嚢を爭ひし、彼兩箇の少年は、何等の人にてありつらん。倘命あり時ありて、迭に名告逢ふ日のあらば、俺這首級を授んに、朝を俟たで消てゆく、露の玉の緒絶なん折に、稍本然の善にしも、返る懺悔は我ながら、無益にこそ。とばかりに、吻く息さへに苦しげなるを、桼六聞つゝ遽しく、盆九郎に掛たる索の、端を柱に結び止めて、找みよりつゝ吾足齋に、うち向ひてさていふやう、はじめて候辛踏生、斯いふ我は浪華より、大江杜四郎成勝に相從ふて、武者修行の爲這地に來つる、峯張桼六郎通能是なり。只今和老の懺悔を聞くに、彼夜一百九十五金の、財嚢を奪も復さんとて、連りに挑み爭ふたる、其一人は我桼六にて、件の財嚢を捉られじとて、後方遙に投遣りたる、其一人は別人ならず、和老の渾家阿夏刀自の、實子なりと聞えたる、末朱之介晴賢なり。とばかりにして言を盡さずは、猶疑しく思はれん、苦痛を忍びて听ねかし。件の一義は箇樣箇樣、云々の情由ありとて、落葉の媼が朱之介の、爲に慈善の事の顚末、又彼一百九十五兩の、

金子の來歴をはじめにて、柒六の兄、十三屋九四郎の義俠の事、當日朱之介が東路へ、追放せらるゝを憐みて、柒六をもて金五兩を、贈らせんとて追せし事、この宵十三屋の櫛店にて、落葉の媼の悲泣の折、朱之介がかへり來て、裏面へは入らで竊聞しつゝ、其頭に措れし財囊の金を、偸拿て走るをり、柒六も亦かへり來て、朱之介の不義の爲體を、既に窺知りたれば、跡を跟つゝ畷路にて、朱之介と力戰して、投懲し蹂躙りて、九四郎の取らせよと、いひし金五兩を投與へて、財囊を索拿抗て、十三屋へもてかへりて、落葉の媼に渡ししに、孰か知るべき財囊の內なる、二裹の金は金ならで、兩箇の小石なりければ、人々疑惑せざるもなく、就中我疎忽を、いひ解よしのあることなければ、兄九四郎の贖ふて、其內中なる金百兩を、落葉の媼に返ししかば、後安きに似たれども、其疑ひは我もかも、今に解よしなかりしに、原來彼折財囊の金を、奪ふて小石を入易しは、延明和老でありしよな。といはれて驚く吾足齋、寔に然なりと哉み出つゝ老苧に向ひて、喃阿夏の老苧とやらん、俺又柒六の舌に代りて、驚かすべき一話あり。和女郎の前夫と聞えし、末松木偶介の實女、乙柚の小夏は、年九歲の秋、磨鍼嶺の賊難に、千仞の深谷へ投降されて、死すべかりしを神佛の、冥助にやよりたりけん、俺爲には外祖

父なる、峯張九四藏に救ひ拿られて、其名を乙藝と喚更られ、成長なる後九四郎と、夫婦に成りて今も猶、住吉の里の宿所に在り。折に觸れては父木偶介と、和女郎の事さへいひ出て、いとなつかし、とてうち歎きにき。其孝順を知るべきのみ。况落葉は、木偶介に、離別せられて再嫁らず、和女郎を怨る心なきは、世に稀なるべき貞女ならずや。其母女兒の孝貞實義を、天道憐み給ひけん、近曾住吉の十三屋にて、母女再會の歡びあり。それには異なる和女郎の薄命、所生の獨子朱之介は、性獍惡なれば孝ならず、反て二箇の螟蛉女、小夏と云晩稻と云、性美しく孝順なるも、一箇は逆路に生別して、年歷ぬれども、再會によしなく、一箇はまた陸奥より、養父母に從ふて、這地に來つる甲斐もなく、親の刃に命を隕せり。現に善惡應報の、遲きあり速きあり。速きは彼身に報ふべく、遲きは子孫に報はぬはなし。天理彰々、誣べからず、恐るべし／＼。と說れて老苧は羞慙みて、默然たること半晌許、纔に貌を更めて、原來小夏は恙なく、花洛に遠からぬ、浪華の月の十三屋に、在りと聞くこそ嬉しけれ。浮世が儘になるならば、恥を忍びて見まくほし。そも許されぬ者ならば、切て其壻の刀禰に、逢ふよし欲得とうち托る、聲聞えけん庭の樹下に、立在たりける一箇の旅客、忽地に聲を被て、然な不樂給ひそ阿夏女郎、俺今對面すべけれ。といひつゝ檐廊にうち登りて、軈て坐席に拶み入れば、人咸驚

き怪みたる、亓が中に四郎柒六は、訝りながら其人を、見れば是別人ならず、十三屋九四郎なり。閨衣の儘に細帯して、逆旅中刀を佩たりける。思ひがけなき對面なれば、こはいかにとばかりに、遽しく席を讓を、九四郎急に推禁めて、和子はいよ〳〵恙まさずや、柒六も出かししな。高島主には禮稟さんを、須臾宥免を蒙りて、先急ぐべき事こそあれ。といひつゝ老苧にうち向ひて、喃阿夏の老苧刀自とやらん、目今和女郎のいはれたる、小夏の乙藝の良人なる、姓は峯張、屋號は十三、浪華で俠者一頭なる、九四郎は卽俺なり。大江腋子に急要あれば、京の旅舍を涉獵盡して、這近江路にと聞えしかば、迹を追つゝ今日未後に、這里の隣りの津問屋を宿にしつ。扠城內の消息を問撈るに、大江峯張兩少年は、城內なる高島主許止宿の事、幷に衆少年の試擊の事、和女郎の實子朱之介の事、和女郎の玆に在する事まで、知る人ありて告しかば、明日は夙めて這那を、訪はばやと思ひつゝ、長途の疲勞を憩へて在りしに、思ひがけなき今宵の恩劇。其名ばかりは豫知る、和女郎の上を心許なく、思へばうちも措れずして、宿の主人の尻に跟きて、自餘の客人共侶に、庭門まで來にけれど、內に入らんはさすがにて、那里に立て在りし程、吾足老の懺悔の條々、又朱之介の惡事の顚末、這盆九郎とやらんの事までも、心ともなく聞知りたり。就中感じ思ふは、辛踏生の懺悔なり。人臨終に舊惡を、よく懺悔しぬ

る者は、五逆十惡の罪戻も、都て消滅せざることなく、必成佛すべしといふ、佛說は然事ながら、懺悔のみして、或は偸み、或は人の東西を借て、返さずして命終らば、彼身に益ありといふとも、是其人に損あり。然ては眞の成佛とすべからず。就て我那里の樹下に在りし時、月明によりて見て知りぬ、那檐廊の柱に吊りて、正に一箇の財囊あり。我憶ふに、那財囊は、朱之介が偸み拿て、庭より出て逃去る時、憶はず柱の肬銕などに、件の財囊を掛止られて、心ともなく手を放ちけん、立戻りて拿る遑なければ、那身は疾く逃亡て、財囊は柱に遺りしならん。俺這推量的中して、辛踏生の懺悔虛言なくば、財囊中にあるべき金の、一百九十五兩なる歟、不足したる歟知らねども、其當初を推時は、這春大和の上市なる、落葉の刀自が朱之介に、沙金と唐布を買せんとて、齎したる金子なれば、辛踏生先非を勸解て、本主なる落葉の刀自に、其金子餘波なく返しなば、是ぞ眞の懺悔にて、幸にして盜賊の、惡名を削らるべし。這議甚麼。と譚ずるを、吾足齋も聞とりにけん、頭を擡げ眼を開きて、九四郎を見て片手を抗て、戰れつゝうち拜みて、適れ愛たき裁判なる哉。幸に那財囊の金は、朱之介の手に渡らで、捉遺されしは歡びなる。やよや老苧、疾々。といふに老苧は應をしても、了得に羞て立難るを、津問屋集三こゝろ得て、身を起しつゝ檐廊に、出て件の財囊を拿る時、猶庭の樹下に、立在たる男女二

三名在り。集三是を透し見て、客人達其首は寒からん、母屋に登らせ給ひね。と呼被て先其財嚢の金を、九四郎に呈すれば、九四郎敢自由にせず、开が儘老苧に渡させて、云々と宣示せば、老苧は辭ふことを得ず、件の財嚢を解拔きて、内なる圓金を拿出すに、紙に封じて二裹あり。其一裹は圓金百枚、又一裹は九十五枚あり。九四郎是を得と見て、又吾足齋に向ひていふやう、辛踏生、俺云云と論ずるとも、强て和老を窘めて、金を返せといふにはあらず。和郎の意衷甚麼ぞや。と問ふを吾足齋聞あへず、いかでかは然ることあらん、返却は己が情願なり。宜しく計ひ給ひね。といふに九四郎頷きて、件の圓金二裹を、拿て財嚢に歛る折から、庭の方より吆して、入り來る男女二三名あり。阿夏の老苧は訝りながら、誰也と問ひつゝ見かへれば、是則別人ならず、福富村なる阿鍵小忠二、又九四郎の乾兒なる、四摠等まで出て來つ。主客亦這問答に、憶はず時を移す程に、星の光りも彌寒き、曉天にぞなりにける。爾程に末朱之介晴賢は、今宵脱路を失ひて、只得涸井に身を躱しつ、透もあらば逃去らんと、悄地に念じてありけるに、其頭の庭の樹下に、人二三名立在て、久しくなるまで出てゆかねば、いよ〳〵頭を出すによしなく、心ともなく母屋なる、主客の問答を洩聞くに、盆九郎は杜四郎枈六等に搦捕れし事、晩稻の横死、吾足齋は、深痍を負たる懺悔の條々、思ひがけなき九四郎さへ、樹下よ

り立出て、圍坐に入りて議論の趣、意表に出ざる事もなく、又彼財嚢にありける金は、往る夏の夜吾足齋が、奪ふて小石の換玉を、柴六に抓せたる、神出鬼沒の機關を、今やうやくに曉得て、天魔を欺く歹人も、且驚き且呆れて、醉るが如く醒るが如く、惘然としてありける程に、長き冬の夜時移りて、早曉天になりしかば、心彌安からず、天も明ば見出されて、俺も亦盆九の如く、搦捕られて牽れやせん。いかにすべき、と思雖て、頭を出しつ又隱れつ、木偶の拮槹するに似て、苦心限りもなかりしに、彼樹下にありける人の、やうやく出て、母屋に入るを、月明にて竊に見れば、はじめに立出しは九四郎にて、其後なるは阿鍵小忠二、浪華の四攙等なりければ、朱之介は又驚きて、舌を吐き頭を掉つゝ、猶も四下を窺ふに、庭には人のあらずなりて、既に便を得てければ、井桁に閃りと手を掛て、潛び出つゝ塀裏なる、松を階子に攀登りて、塀を踰まくしぬる程に、柴六忽く佶と見て、那朱之介が。と叫びも果ず、刀を引提て檐廊へ、出るを見かへる朱之介は、袖に准備の席工鉞を、拿る手尖く丁と擊つ、然しも修練の銑鋧に、柴六噪がず身を反して、刀の柄に受留たる、程しもあらず朱之介は、身を跳らして外面へ、忽地撐と飛下りて、往方も知らずなりけるを、柴六は猶追んとて、背門投て出まくするを、九四郎急に喚禁めて、已ねく〳〵、开は要なし。人の歎きもあるべきに、搦捕て何にせん。といへば

杜四郎も倶にいふやう、現窮寇は逐ふべからず。彼が偸み得ざりける、財嚢の金は茲に在り。そを追ふこと歟。と諫むれば、柒六僅に點頭て、故の席にかへりて居り。當下九四郎は、石見介にうち向ひて、高島主俺身總角なりし比より、久しく打絶たりけるに、斯荒々しき爲體にて、物稟さんは無禮なれども、諮まうしたき一義あり。這金一百九十五兩は、目今聞れし情由なれば、吾足齋の手より受拿て、落葉の媼に返すとも、けしうはあらぬ事ながら、一旦偸み拿られしより、早五个月を歷たりしに、這義を守へ告訴もせで、我私に和睦せば、後の聞えも影護くて、快らざる所あり。今訴ん歟、訟ざらん歟、這義を教給ひね。と問ふを石見介聞あへず、否、告訴の事は然るべからず。辛踏みづから新にして、罪を謝して返す金子なれば、不正不良の財にあらず。然るを愸に、守の憲斷に被る時は、事むづかしくなるのみならず、吾足齋は後々まで、盜賊の罪免るべからず。鄙言にいへる事あり、藂るに過て花を散し、磨くに過て玉を碎く。鯁直も亦時に由るべし、這義を思ひ給はずや。と說れて九四郎再議に及ばず、更に老苧にうち向ひて、喃阿夏刀自、寔に和女郎の薄命なる、今より孤獨の人とならば、何人歟よく養ん。昔俺荊婦小夏の乙藝が、受し養育の恩を思へば、今這金子の半分を折きて、贈らまほしき事ながら、いかにせん這金は、俺金ならぬを自由にせば、彼微生高が醯を乞れて、


銑鋧を飛して朱之介命を免る
九四郎
おいそ
おうた


朱之介
ふく六
小忠二

其隣なる醯を乞ふて、人に與たりといふに似たるべし。他の物もて己を飾る、似而非仁義は俺要せず。這義は俺亦主張あり、異日又復談ずべし。といはれて老婆は踧然たる、頭を拾げて答るやう、昔小夏の五歳の比より、九歳になる秋の比まで、五稔母と喚れても、親甲斐もなく倒に、彼には河原揮ぎをさせて、養れし日の多かりしに、養育の恩云々と、宣するこそ恥しけれ。と勸解を九四郎推禁めて、無益の口誼に天は明なん、俺は旅宿へ退るべし。和子と柒六には要事あれども、這里にて罄すべきにあらねば、明日旁館へ推參せん。自餘の人達心を屬て、いかで主人夫婦の爲に、商量敵になり給ひね。と告別しつ財嚢の金を、拿て懷へ楚と挾めて、四摠を俱して遽しく、津問屋へかへり去りしかば、石見介も卒退んとて、杜四郎等をいそがしつ、刀を衝立て身を起せば、柒六は盆九郎に、掛たる索を拿緊て、俱に玄關より出去る時、集三主僕は主人に代りて、門内までぞ送りける。渚處に高島の若黨奴隷は、常に異なる主のかへさの、最遲ければうちも措れず、眞夜中より迎に出て、東西となく索托つゝ、料らずも今、辛踏の、門前を過る程に、主僕迭に挑燈の、花號を早く見出して、走り集ひつ云云と、告もしつ言も示して、石見介は盜兒盆九を、作當等に牽せつゝ、四郎柒六共侶に、城内なる宿所にかへりゆく程に、鴉の茂林を離るゝ聲して、天は耿々と明にけり。然る程に、辛踏の宿所には、

多容やうやく立去りて、是より暇ありければ、集三主僕小忠二さへ、倶に老苧を資けつゝ、先晩稲の亡骸を、小室に臥しめて、枕屏風を建るも果敢なし。又吾足齋は衰果て、湯薬も吮に降らねば、幵が儘蒲團を布儲けて、小襀をうち被するのみ術もなし。當下老苧は阿鍵小忠二を、上坐に請迎へて、火桶に炭を接つゝいふやう、別れまつりしより年許多、音耗絶て侍りしは、俺身陸奥へ伴れて、後夫に從へばなり。然るを亦故ありて、去歳の冬より這地に來て、まだ住熟ぬ宿なれば、知らせまつるに暇なく、本意にもあらず侍りしに、おん身は又何等の故に、這頭に逗留し給ふやらん。況今宵の凶變を、蚤くも知られて訪れまつるは、有がたきまで忝き、再會にこそ侍るなれ。嚮には多容にうち紛れて、何宣せしやらん、逆上せてのみありしかば、聞漏しぬる鈍ましさよ。無禮を饒し給ひね。と勸解れば阿鍵は嗟嘆して、故にし事を思惟れば、世は夢ならずといふ者なし。奴家が今の爲體は、珠刀禰に聞れしならん。然るを亦思ひがけなく、隱田の事により、有司達より御下知あり。猛可に奴と小忠二を、召よせさせ給ひしかば、福富村の店舗は、措名と丁太郎に任用して、四五日前に這地に來つ、津問屋を宿にしてあるなれば、昨日おん身が背門の方へ、出給ひしを見出して、ものいはゞやと思ひしかども、珠刀禰も同居す、と小忠二のいふにより、まだ訪もせで在りけるに、胸の潰れし夜中の凶變、

うちも措れず主人の後に、跟きて來にける甲斐もなく、かゝる歎きを見ることの、うれはしさよと涙嚼む、脆き女子の袖の雨、外の時雨も寒げなる、小忠二も共にいふやう、珠刀禰は何といはれしやらん、嚮に那子に訪れし後、幾程もなく惡瘡の、病惱を豫知りながら、斷りいふて出し遣しは、黃金の岳父船積氏へ、憚るよしのあればなり。珠刀禰の放蕩無賴は、敵手になる者ならねども、然ればとて舊熟識の、おん身の落魄に行遭ながら、何でふ難面くものせんや。錢帛こそ心にまかさね、故翁太夫次の在さずとて、隔るとな思ひ給ひそ。と慰められて又袖濡す、老苧は瞼を推拭ふて、俺子のみかは良人まで、人ならぬ不軌の顚末を、知られしだにも面なきに、昔熟識と思召す、御好意こそ有がたけれ。といふ間に窓よりしらみて、鴉の聲しければ、津問屋主僕は這凶變を、疾里正に告んとて、庭門より出てゆきしかば、阿鍵小忠二は亓が儘に、阿夏の老苧を慰めて、撿使の來ぬるを俟なるべし。爾程に里正故老五保等は、津問屋集三の告るにより、吾足齋の宿所に來て、老苧のいふ所を聞定め、軈て一紙の訴狀を相捧げて、城内なる有司に聞えあげしかば、是日未牌ばかりに、實撿使到來して、吾足齋と其妻老苧の、稟す所を聽定め、且晩稲の亡骸を展撿して、口狀一通を筆錄す。但し吾足齋は深痍にて、既に命危ふければ、其妻老苧と隣人、津問屋集三等を相俱して、城内にかへり來つ、頭人

一口鬼大夫安倍に、事云々と告しかば、軈て老苧集三等を、局内に召よせて、鬼大夫みづから鞫問す。爾るに辛踏吾足齋に、深痍を負せたりける、盗兒盆九郎は、昨宵大江杜四郎等に搦捕れしを、高島石見介の訴により、既に獄牢に繋れたれば、鬼大夫隨卽夥兵に課て、盆九郎を牽出させて、事の虚實を栲問するに、盆九郎が悪事の條々、嚮に大江杜四郎の刀子を、偸し事を始にて、昨日吾足齋の乾兒なる、末朱之介に謀合されて、更闌て、俱に吾足齋の宿所に潛入りし事、朱之介は親の金子を、偸み拿まく欲して果さず、早く逃亡し事、又盆九郎は、吾足齋の螟蛉女、晩稻を豪奪して、走り去らまくしぬる折、吾足齋かへり來て、謬て晩稻を殘害し、反て盆九郎に、脇腹を刺れて仆れし事、其隙に盆九郎は、逃て門外へ出し折、石見介の客なりと聞えたる、大江杜四郎、峯張柒六郎等に、搦捕れたりといふ、首伏分明なりければ、鬼大夫則讞斷すらく、今盆九郎の招了に據るに、吾足齋に罪なしといへども、其乾兒たる、朱之介を、走らせたるは、等閑に似たり。但し吾足齋は深痍にて、命危ふしといへば、津問屋集三里正等、女房老苧を相資けて、朱之介の往方を渉獵て將て參るべしと宣示して、是日の廳は果にけり。然ば老苧は、里正故老津問屋集三等と共に、退りて宿所にかへり來ぬれば、是日の留守を憑れたる、福富小忠二阿鍵等は、遽しく立迎て、事云云と告るを聞くに、吾足齋は仙丹の、

奇效も玆に竭にけん、嚮に老苧等が出てゆきし後、幾程もなく面色變りて、忽然と息絶たりといふ。豫期したる事ながら、老苧は孤猻の林に離れ、賓鴈の對を喪ひし心地して、今さらにせん術を知らず。扨あるべきにあらざれば、里正故老等は、又公問所へ走參りて、吾足齋の死しけるよしを訴稟すに、重て實撿使を下すに及れず、女兒晩稲の亡骸と共侶に、隨意安置くべしと命ぜらる。是により小忠二集三等相資けて、吾足晩稲父女の柩を、程遠からぬ山院へ送遣して、當夜茶毘の烟と做しつ、纔に二塊の土饅頭に、表識の墓石を貽すめり。識者吾足齋を評すらく、寧成の浮薄なる、彼身辛踏无四郎たりし時、親に仕へて孝ならず、君に仕へて忠ならず、周防へ使節を奉りながら、色を貪り慾を恣にして、阿夏母子を相携へて、歸洛しぬるのみならず、其子を棄、其母を倶して、舊里信夫にかへるに及びて、父の憂に値ながら、敢戚る色もなく、淫酒の驕奢に財用足らねば、人の孤女を養とりて、又其色を衒まく欲して、をさをさ詭詐を行ふに及びて、事敗れ追放せられて、近江に流寓しぬる時、女兒晩稲の悪瘡の、良薬を徵る折、人の爭ふ金を偸みて、石を其財嚢に入易しは、遠謀あるに似たれども、罪其石より重きを知らず、古語所云、兩虎肉を爭ふ時、狐其虚に乗るといふ者是なり。其後妻の子なりける、朱之介の手より栒神を得て、晩稲の悪瘡癒たれども、約を變じて朱之介に、其價の

百金を取せず、老苧が手實を破るに及びて、是より後安しと思へり。是故に災害蕭牆の内より起りて、罪なき晩稻は命を隕し、彼身は盜兒盆九郎に、刺れて命終る時、其隱慝を懺悔しぬるは、抑又遲からずや。世に權威ある奸佞者の、忠臣を寃げ、善人を屠、或は山豪海賊の、人を殺すこと草の如く、財貨を奪ふて飽ことなきを、人見て惡ならずといふ者なし。單辛踏吾足の如き、うち見は然る惡虐なし、其心術を推時は、狼賊狗盜と是一般。こゝをもて天公饒さず、竟に滅族の祟あり。世にこの境界に迷ふ者、比々として皆是なり。并が中に晩稻の如きは、浮薄の親に從ひながら、其心親に似ず、多賀志賀介政賢と、婚姻の氷人ありしより、いよゝ閨門を固くして、朱之介の挑を容れず、よく養父母に相仕へて、毫も愆あることなきに、反て非命に早く逝きしは、善惡應報、無差別に似たれども、然にあらず、善男善女も、其君父不仁不義なる時は、共に禍を免れず、便是蓬の中に生出ぬる、麻の直きも芟人の、鎌兒を免れ得ざるが如し。遮莫其死後に至りては、人其善を相稱、其節操を嘆唱す。死して惡名を貽者と、雲壤の差あり。古語にいへらく、虎は死して皮を留め、人は死して名を留む。名に二あり、善と惡とのみ。愼ずばあるべからず、とぞいひける。この言早く流布しければ、志賀介傳へ聞て、悄地に父政朝に告ていふやう、吾足の女兒晩稻の如きは、親にも兄にも似ざるものなり。其故

は箇樣々々、と件の批評を證据にす。政朝是をうち聞て、感嘆幾淺からず、他が命運薄かると、其苦節を憐みて、彼山院へ多く布施して、晩稻の爲に經を讀せて、悄地に追薦の志なぞ致しける。閒休話題。爾程に十三屋九四郎は、彼夜艾辛踏の宿所にて、四郎粲六に對面の後第三日に至りて、彼主僕の旅宿せる、高島生を訪まく思ひて、湯浴し結髪させて、且衣裳を整て、四摠に些の土產を齎して、旅宿なり津間屋を出てゆかまくする程に、忽地高島の奴隷索ね來て、主の消息を呈閱す、是則石見介が、九四郎を請迎る使なりければ、九四郎隨即其使を案內にして、四摠を俱して、高島の宿所に來にければ、彼家の老僕出向へて、客房に請待し、主人は猛可に君所へ召れて、方僅出仕して候へども、必程なく歸宅すべし。先和子達に對面あるべうもやとて、杜四郎等が常に居る、彼一室に案內して、肴茶の禮細やかなり。四摠も客房に呼登されて、九四郎が主人に贈る、土產幾種を、老僕某に渡しなどす。當下杜四郎粲六は、遽しく九四郎を、上座に請薦めて、寒暖を舒、恙なきを祝し祝されて、然而前夜の盜兒萬九郎は、石見介計ひて、有司に牽渡しゝかば、軈て禁獄せられし事、是により大江家傳の刀子を、とり復しける事の顚末、又國守佐々木殿、杜四郎粲六郎を懇望のあまり、云々の美祿を食せて、家臣に做さまく欲し給ふを、固く辭ひまつりし上は、速に立去るべきを、彼刀子の故をもて、逗留

今に及ぶといふ、密話を九四郎うち聞て、其は已巳き事なれども、既に仕を辭ひながら、猶其城内に逗留せば、人の譏誚もあるべき歟。事の宜きにあらざれば、彼盆九郎の罪定りて、一件都著落せば、早く立去り給へかし。咱等這回、和君等の迹を追ふて、這頭へ來ぬるは別義にあらず。來春は、亦講伙計に誘引て、嚴島なる辨財天に、參詣すべう思ふなり。然ば治比に立よりて、大人弘元をいふの安否を訪まく欲す。四郎腋子はこの折をもて、大人と兩舍兄音就基綱をいふに自筆の消息をまゐらせて、添ふに花押印鑑をもてし給はゞ、異日浮浪の俊俊に相逢ふて、薦めて治比へ紹介して、彼地へ遣し給ふとも、大人と舍兄達と、和君の手迹をいまだ認らず、花押正印だも知らで在さば、必疑ひ思はれて、事の障りになりぬべし。這義を告稟さんとて、遠きを厭はで來ぬるなり。柒六も爾こゝろ得て、呈書をもて前惠を、謝し奉らずばあるべからず。咱等は猶二三日の程は、津間屋に止宿せん、宜く書翰を整へて、那首へ遣し給へかし。曩に知られし情由なれば、いぬる比乙藝には、六市を從はせて、大和の上市へ遣しぬ、落葉の刀自を慰んとてなり。然ば住吉の櫛店は、六市の小母夫なる、世話介夫婦を召とりて、他等に預け置なれば、那首の事は後安かり。我身は刀自落葉をいふの請ふに儘せて、明年の比、彼地に到りて、杣木の家事を資ん歟、いまだ思ひ定めねども、異日の便宜に由るべきのみ。豫もいひ

し事ながら、和君等は倘弱冠にて、萬里の逆旅に光陰を送らば、去向は都敵地なり。笑の中にも刃あり、飯の中にも鍼なきにあらず。鞘に刀子を失ひしも、敵地を忘れて怠慢の隙ありし故なるべし。然れば小心を宗として、才藝に誇るべからず。其己に勝れるを、憎むは小人の心なり。和君等承知の事ならんを、九四郎なんどが博士態たる、意見は孔子に語道に似たれど、鄙語にいふ外視八目、離婁の明も其背を、みづから見がたきをもて悟るべし。柰六もよく記臆して、主僕迭に足らざるを補はゞ、いよ〳〵後安かるべし。這義をな忘れ給ひそといふ、教訓叮嚀なりければ、柰六はいふもさらなり、杜四郎歡び承て、其議に據らずといふ者なく、猶閑談に及ぶ程に、以前の老僕出て來て、九四郎等に告るやう、主人歸宅仕りぬ。和子達も共倶に、誘這方へと先に立て、在奥たる一室に、案内をしぬる程に、杜四郎柰六も、九四郎の後方に立て、儲の席に迨る時、石見介出迎へて、九四郎等を客座に請ふて、迭の口誼言訖れば、若黨煎茶を薦めなどす。當下九四郎のいふやう、前夜は不慮の事により、殊に鄙陋の爲體にて、卒爾に拜見仕りし後、今日しも芳館に伺候せんとて、旅宿を出まくしぬる折、御使を給はりて、拜門遲滯の罪を得たり。况又杜四郎柰六等が、舊縁の義に仗りて、貴所に投宿したりしより、淹留三四十日に及ぶ事、在下までも歡び思ふ、幸是に優す者なし。といふを石見介聞

あへず、否とよ我身少かりし時、峯張先生に負笈して、教育の恩淺からざりしに、一たび紈袴に繋れしより、疎濶本意に背きしに、這回兩才子に訪れしかば、了得に昔偲れて、師恩萬分の一に答ふべき、折を得たりと思ふものから、微祿欵待に匱しくて、汗顔の外候はず。況和殿に訪れんとは、思ひがけなき幸なり。いかで薄酒を薦めばや、と思ふて請迎へしに、猛に出仕の故をもて、意外の無禮に及びしといふ。言いまだ訖らずして、又巻を續ぐに至れり。自餘は下回に解なん。

第四十五回　竟見を示して俠者先途を奬す　前愆を箴て頭陀得度を許す

登時石見介好純は、九四郎に打向ひて、晤譚いまだ央に至らず、年十六七なる兩箇の少女、俗に腰下婢と歟喚做す者、銚子酒盃をもて出たり。次に搊殺、又其次に、羹䍙、炙魚なんど、種々の酒菜を、九四郎竝に、杜四郎柒六等に薦めまくす。主客の口誼稍訖りて、酒盃一巡りに屆る時、石見介がいふやう、嚮には多端にうち紛れて、言後れ候ひき。思ひがけなく種々の、土產を投恵せられし事、歡び是に優す者なし。千謝萬謝も猶足らず。然るを僅に一獻の、饗應は心にず。知らるゝ如く當國は、野味あれども海鮮なし、只是湖水の鯽膾、瀬田蜆の羹のみ。この他若狹の鹽小鯛、或は小鰕鰻鱺の如き、魚肉に富る浪華人には、野人の献芹ならんかし。況是等の婢女をもて、酌にさへ侍らするは、兵士の交りに、似げなしとや思れん。なれども這里は出居の間にて、武骨なる若黨を、用るに宜しからず。這折をもて拙荊も、いかで御目に掛

らまく欲す、無禮を許し給へかし。といふを九四郎聞あへず、开は亦痛却仕りぬ。昔は昔、今はしも、俺身住吉の町人なるに、猶同輩の義を以、分に過ぎたる御欵待は、一期の榮といはまくのみ。倘杜四郎等に要事ありて、追ふて這地に迨らずば、拜見得がたかるべきに、離合時あり、千里も合璧、幸甚しく候。といへば四郎粂六も共にいふやう、當所に杖を駐めし日より、親族にも優す主翁の深切、物不自由なる事もなし。かゝる旅宿のあるべしや。といふを石見介推禁めて、否とよ、和君等に主しぬるは、先師をいふ九四藏の恩を報はんとてなり、況俺身少かりし時、听漏しぬる師說ありしを、這回兩才子に就きてこそ、疑ひは稍氷解したれ。かゝれば亦俺爲に、兩才子は一字の師なり。非如一年三个月、宿したればとていかにして、嚔るべうも候はず。といふを九四郎感嘆して、現下問に恥ざる者は、其學至ざる所なし。主翁は君子の人なる哉。就て謝し奉る、曩には衆少年の試撃の折、四郎粂六等も、其員外に召よせられて、武藝御覽の幸のみならず、牽出物賜りて、剩御家臣になされんとて、守の御意ありけるに、他等は武者修行の故をもて、推辭まつりしとぞいふなる。旣に仕を辭ひながら、逗留玆に久きは、云々の故なりとも、罪得がましき所爲にこそ候へ。宜く計ひ給ひねかし。と憑めば石見介點頭て、然なり、兩才子も始より、去向をいそがざるにあらねども、彼刀子の故をもて、意外に淹

留せられたり。今は盗兒盆九郎の、一件果るを俟るゝのみ、遠からずして吉左右あらん。この義はこゝろ休かるべし。といふ間に奥の方なる、襖戸を推開きて、石見介の妻出て來つ、良人の後方に坐を占るを、石見介見かへりて、九四郎に告ていふやう、十三屋主、こは拙荆長江なり、一面を願ふのみ。といふに九四郎遽しく、形を改め額衝向へて、寒暖を舒無異を祝し、且杜四郎等の止宿の事、今は亦美酒佳殽の饗應の歡びを、云云と演しかば、長江はやをら膝を找めて、額衝受て且いふやう、昔の事は知らず侍れど、良人の話説に豫聞く、兩柱の刀禰達に、訪れまつりし甲斐もなく、只宿しぬるのみなるに、淺からず聞え給ふは、心裡恥しく侍るなる。浪華は百里の遠きにあらねど、迭に年來疎かりし、おん身さへ好風吹きてや、一席に見參は、得がたき賓ざねなるに、田舍料理を嫌れずは、こよなき幸に侍るかし。いかで過させ給へとて、盃を薦め殽を裝添て、欵待叮寧なりければ、九四郎杜四郎楽六も、屢謝して且うち譚ふ程に、長江のいふやう、聞くに浪華の哥々さま九四郎をいふは辨財天信仰にて、折々安藝の嚴島へ、詣出させ給ふにあらずや。愚息高島硯吉郎玄純は、倘總角にて侍れども、遊學の爲周防なる、所親許遺して、去歳より山口鸛峯の、城内に侍るなる。嚴島詣の折などに、彼地を過り給ふ日もあらば、いかで訪給ひねかし。然らば這地の無異も聞えて、さぞな歡び侍るべし。

といふを九四郎うち聞て、开はこゝろ得候へども、己安藝嚴島へ、詣しは只一度のみ。明年も亦参ばや、と思はざるにあらねども、多くは是水路にて、周防を過り候はず。なれども便宜の折もあらば、必拜見仕らん。といふに石見介も笑しげに、开は辱く候なり。拙郎は素是駑才にて、大江峯張の兩才子に、及ぶべくも候はねど、萬に一和殿に訪れて、教諭を受る日もあらば、必裨益多かるべし。といふ間に入相の、鐘鎗々と聞えしかば、九四郎は盃を、辭ひてかへり去まくす。然れども石見介いまだ許さず、先夕饌を薦んとて、又碗飯の欵待あり。四郎柒六も相容にて、飽て十二分ならぬはなし。是より先に作當四摠には、客房にて酒飯の欵待あり。老僕某甲盃を、薦めて酔を盡したり。既にして九四郎は、主人夫婦に別れを告て、立去らまくしぬる時、石見介は豫准備の、藥籠三箇許、折敷に載たるを拿出して、先其一箇を、九四郎に贈りていふやう、十三屋主、這仙丹は、前夜既に知られし如く、我家相傳の神藥にて、金瘡に卽效あり。只死を起すのみならず、幻術ある敵と戰ふ時、是を一匙口に含て、吹て其敵の面を打ば、眼眩み手脚攤て、其妖術行れず、立地に伏誅すべし。或は又老妖變化の者、其隱顯無邊無量にして、弓箭刀劍をもて制しがたかるも、這仙丹を酒に雜へて、薦めてよく酔すれば、其妖敗れずといふ者なし。昔唐山胡元の時、胡人妖術をもて、人に禍害する者多かり。

猫鬼の類卽是なり。時に濟世道人と喚做したる、一箇の神仙這仙丹を、患者に施して、妖邪を對治ししといへり。其己に勝利ある者、彼螢火鎚柄丸に百倍す。當時我遠祖は、冠守るつくしにあり。一稔商舶に俱せられて、元國に到し日、彼神仙に邂逅して、這藥方を受しより、歸朝の後子孫に傳へて、もて家の祕方とす。是より以降家督たる者、一世に一度是を煉ぬ。其製藥容易からず、齋する者一百日、火を改めて別室にあり。朝夕妄想を斷除きて、天地に祈りて是を成せり。縱親族たりといふとも、深信なき者には、是を與へず。又心術行狀、正しからざる者にも與へず。多くは祕していはざれば、人是を知る者稀なり。遮莫和殿等三賢才は、我先師の骨肉にて、世の豪傑と覺ゆるに、這折をもて分與へずは、非除仙丹ありといふとも、又何人の爲に藏めん。大江峯張兩才子には、異日袂を分つ折、贈らまく思ひしかども、よき折なれば進らする。這義をこゝろ得給へかし。といひつゝ又兩箇の藥籠を、拿て杜四郎と渠六に、遞與せば各受戴きて、歡び面に見れたる。开が中に九四郎は、石見介に謝していふやう、聞くが如きは這仙丹は、病苦を救ふのみならず、是軍陣に大益あり。九四郎なんどが身單に、藏めて祕藥に做さんより、治比の大人に晉上せば、躬方の爲に大利あるべし。最忝く候。と應へて懷に夾れば、杜四郎渠六も共にいふやう、今にはじめぬ主翁の恩貺、今日の團坐に干る

すら、得がたかるべき歡びなるに、世に未曾有の仙丹は、價千金萬金なる哉。目今報ひ奉るに、物なきを憾とす。年歷て安藝へ還るの日、賢息硯吉郎猶周防にいまさば、必那里に立よりて、一臂の勞に代るべし。情願この外候はず。といふに石見も妻長江も、倶に本意ある面色にて、又茶を薦めなどするを、九四郎は謝して受ず、主人夫婦にうち向ひて、在下は大後日の比、正に立去らまく欲す。重て見參かたかるべし。失敬宥恕を願まつる。といひ果て身を起せば、杜四郎と粢六は、手燭を秉て後先に、立て玄關まで送る程に、石見介も客房に、出て袂を分ちける。當下四揔は挑燈を、老僕に借得て外面に在り。今九四郎の出るを見て、先に立つゝ城門を出るに、夜艾なれども石見介が、豫番士に告たりけん、障りもあらで共侶に、當晩亥中の比及に、津問屋にかへり來て、主僕枕に就きにける。其次の日に杜四郎は、粢六と倶に、治比の親胞兄弟に進らすべき、書翰を相整て、共に津問屋に赴きて、九四郎に對面しつ、其書を渡して云云と、昨日の餘談に及ぶ程に、九四郎がいふやう、高島主の深切に、就きて我亦思惟るに、辛踏の鬼妻阿夏の老苧は、我妻乙嬰の繼母にて、五稔養育の恩なきにあらず。然るを他は幸なくて、良人に後れ剩、螟蛉女を亡ひたれば、よるべもあらず倣れるなるべし。前夜既にとり復したる、彼金一百九十五兩は、落葉の刀自の要金なれども、和君達にも知られし如

く、其内中百兩は、我柒六の爲に償ふて、落葉の刀自に返したる、其返金五十兩は、木玄和倘に借用したり。又五十兩は、我九四郎が、治比の大人より賜りたる、恩祿なれば我物なり。通ては二百兩なるを、五兩は當初朱之介が、路費に使ひ亡ひしと敗いへば、我拿るべきは四十五兩のみ。今又是に五兩增て、其五十兩をもて、阿夏の老苧に贈りなば、彼身の一生涯を、養ふよすがになりもやせん。是則乙藝の爲に、報恩の一義なり。殘る一百五十兩は百兩を落葉の刀自へ、五十兩を木玄和倘に、返す時は損益なし。世に大丈夫たる者は、一飯の惠にも必報ひ、睚眦の怨も必報ふ。我この心は、乙藝の本意にて、乙藝の心は、落葉の刀自の、慈善にも稱ふべし。這義誰何と談ずれば、杜四郎と柒六は、听つゝ倶に感じて已まず、爾るべしと應しかば、又九四郎のいふやう、是等の事に證人なくは、後の爲に宜しからず。柒六もゆくべしとて、准備の金子を懷にしつ、旅中刀を腰に跨て、倶して彼宿所に赴きしかば、迹には杜四郎と四摠のみ、或は故鄕の光景を尋問ひ、或は當城内にありし、衆少年の試撃の爲體を、いひも出聞もして、思はず時を移す程に、九四郎は柒六を將て、隣れる老苧の宿所より、いそしくかへり來にければ、杜四郎は席を讓りて、那里の首尾を諮問ふに、九四郎がいふやう、己老苧に面談して、意衷を示して齎したる、五十金を贈りしかば、阿夏の老苧は膽を潰して、云云

と辭ひしを、我亦理りを述、言を盡して、屢論して已ざりけるに、彼小忠二と阿鍵とやらんも、いぬる日の隨、那里に在り、我いふよしをうち聞て、感嘆の聲を得斷たず、倶に老孥を諭していふやう、九四郎主は仁義の人なり。怨に報ふに德をもてす、といへるは是等の事なるべし。然るを推辭むことかは、といはれて老孥は感淚を、拭ひも果ず件の金を、受戴きつゝうち泣けり。登時又小忠二は、老孥に代りて、金子受納の、手實一通を書寫して、加印して咱等に呈閲す。阿鍵も倶に老孥の爲に、歡びを陳しかば、我又老孥にうち向ひて、こはいはでもの事ながら、喪ひ易きは錢財なり。和女郎今より其五十金をもて、口を餬ふに足らずして、饑渴に及ぶ事もあらば、住吉まれ大和まれ、乙蘂を尋ねて來給ひね。和女郎の前夫なる、木偶介叟は乙蘂の父なり。其後和女郎は夫を重ねし、繼母なれども乙蘂の爲に、親といふ字は倒られず、落葉の刀自もしかぞかし。本性慈善の人なれば、何でふ同居を厭ふべき。必な介意し給ひそ、と慰めつ別れを告けて、幵が儘かへり來つるなり。と告れば亦柒六も、阿夏の老孥が辭ひかねて、困じたりける爲體を、說示して亦いふやう、憶ふに彼小忠二は、老孥の資助に成る者ならん、性老實に見ゆめれば、彼身は是より安かるべし。といふに四郎も四揔さへ、世に亦得がたき九四郎の、義俠をいよ〳〵感じける。姑且して九四郎は、杜四郎等にうち向ひて、己這地の所要

は果しぬ。明日は夙めて立去りて、住吉の宿所へ還らまく欲す。願ふは和子等一日も早く、他郷へ去りて、修行し給へ。旅宿に年を累るとも、三稔に一番かへり來て、親胞兄弟の安否を訪ふも、人の子たる方ならずや。克身を愛して病厄を、防ざれば事成らず。又只無異を祈るのみ。こは和子の上のみならず、柒六もよく思ふべし。といふに四郎も柒六も、一義に及ばず受歡びて、开は亦火急の別れに倣りぬ。今宵は玆に止宿して、明日は夙めて路程、二三里なりとも送るべし。といふを九四郎聞あへず、そは亦要なき事なりかし。和君達も旅客なるに、送迎は折によるべし。古語にいはずや、送君千里須一別、假令幾里送るとも、別れはおなじ心なるべし。這里にて袂を分たんのみ。といふ間に客店主人、津問屋集三は、手親銚子酒盃をもて出て、九四郎等に薦めていふやう、いぬる夜隣家の凶變以來、各位の人に異なる、御氣質さへ推量られて、感心の外候はず。然るを亦程もなく、今宵涯のおん宿と、承り候に、殿原さへ來ませしかば、心ばかりの村酒一酌、御歸路を祝しまつる而已。といひつゝ盃を薦る程に、炊妾がもて來ぬる、酒菜は枯たる乾年魚も心は清き蓮根の、糸の手に引く糸鰑、結乾瓢炙鷄卵、捥茄子の鹽漬も、現一口にはいひがたき、人の誠に九四郎は、よき折なりと歡びて、四摠も倶に呼集合、四郎柒六甲乙となく、玆に僅に送別の、盃を果す程に、冬の日なれば短くて、下晡に

なりしかば、九四郎は杜四郎等を、いそがし立て且いふやう、和子達はやくかへの去りて、高島主へ昨日の謝義を、宜しく言傳給ひてよ。柒六は我爲に、昨夜借たる高島の、挑燈をもてゆきて、老僕に謝して返せかし。暮果なば城内へ、出入容易るべからず、疾還らずや。と促せば、杜四郎も柒六も、告別さへ言語急迫、治比の一義いへばさらなり、乙蘂刀自にも、木玄師父にも、宜く言傳給ひね。といひ果て身を起す時、四捴がやをら差出す、彼挑燈を柒六は、受拿りつ引提て、杜四郎に倶して出てゆくを、九四郎幷に四捴さへ、客店主人集三も、店前なる馬繋柱の、邊に立て目送りけり。然れば十三屋九四郎は、其詰朝四捴を倶して、早旦に津間屋を立去りつ、家路を投ていそぎしを、老苧小忠二等はいまだ知らず。是日未の左側に、阿夏の老苧は九四郎に、昨日の恩惠を謝せんとて、果子一折櫃と、佳茶一嚢を齎して、庭門傳に津間屋に赴きて、九四郎を尋るに、宿の女房出迎へて、彼客人は今朝夙に、立去り給ひぬと告げしかば、老苧は望を失ひて、悔しく思へど今さらに、せん術もなきものから、然しも浮薄の本性なれば、毫も脱落らぬ面色にて、否、彼人には然せる要なし、いぬる夜は不慮の事にて、集三主にいといたう、御劬勞をかけまつりし、報ひといはんは恥かしけれど、いかで受させ給ひね。といひつゝ件の果子と茶を、渡せば女房苦笑して、こは思ひがけもなき、御心配りに預り侍り。鄙語

にいふ、餘り物には福こそあらめ。と受戴けば、老芋は他さへ欺難て、曉得られけりと思ふのみ、是將いよ〱悔しきを、然氣も見せず宿所にかへりて、小忠二阿鍵に云々と、告れば小忠二眉を顰めて、默然たる事半晌許、只九四郎の立去りしを、知らねば告別もせで、遺憾とぞ呟きける。九四郎四摠等の事、この下に話なし。然る程に觀音寺の城內なる、市井の預り一口鬼大夫安倍は、盜兒盆九郎の事に就きて、枸杞村の村長故老、幷に三池邨なる宿六等を召よせて、他が素生を質問ふに、原是盆九郎は、枸杞村の莊客留守七の獨子にて、二親身故りし後、放蕩無賴做ざることなく、近曾借財の爲に、相傳の田圃はさらなり、居宅も人に沽却して、竟に無宿に做りし事、この故に小父宿六は、數四教訓の詞を盡し、時々折檻の拳を抗るといへども、盆九郎毫も怕れず、反て窮鼠猫を咬の勢あれば、宿六只得勘當して、寄著候はずといひけり。爾後一口鬼大夫は、日每に盆九郎を、獄舍より牽出させて、其積惡を責問ふに、盆九郎は當初、大江杜四郎の刀子を偸拿り、其後末朱之介と共侶に、吾足齋の宿所に潛入りて、彼家の螟蛉女、晩稻を掻攫て出去る折、吾足齋に撞見して、彼身に深痍を負せしより、竟に死に至りしのみならず、或は人の妻妾を姦淫し、或は人の小孃を勾引して、人肉經紀に賣渡しゝ事も、幾番歟ありといへり。招了既に分明なれば、鬼大夫則高頼主に聞え上て、次の日盆九郎を、

申明亭へ牽出させて、死刑にぞ行ひける。是日鬼大夫は、枸杞村の長、幷に宿六、又吾足齋の鬼妻老萼、幷に津問屋集三、里正故老等を召よせて、宣示すらく、盗兒盆九郎の事、云々の積惡あれば、既に死刑に處せられたり、皆這旨を存ずべし。但し同惡の罪人、末朱之介は、今に往方知れずといへども、吾足齋身故りたれば、里正故老等、代りて他を見出しなば、搦捕て將て參るべし。等閑になせそ。と掟らる。是日又鬼大夫は、當藩の兵頭、高島石見介の老僕某甲を召よせて、宣示す事前の如く、且いふやう、盆九郎の罪定りて、既に死刑に行れし上は、其許に止宿の旅客、大江杜四郎峯張來六郎等に、又問ふべき事もなし。今よりの後行も、止も、彼人々の隨意なるべし。這義を主人に傳へよ。と掟て事皆落許しけり。是より纔に二三日を歷て、阿鍵小忠二の隱田の事、他等が稟品證据ありて、守の疑を解に足るとて、歸村の事を命ぜらる。其故は、件の隱田は、素より阿鍵の化粧料にて、大夫次の遺田にあらず。こゝをもて曩に彼家滅亡のをり、籍立を免かれて、沒官せられざりしなり。是等の公事も鬼大夫奉りて、著落の日、阿鍵小忠二、福富の村長等を召よせて、宣示す所なり。然ればこそあれ、阿鍵小忠二は、始て怡悦の眉を開きて、福富村へかへり去らまくするに、阿夏の老萼が身單にて、所寓なきを憐みて、將てゆかんといふにより、老萼は借地を、集三に返して、諸家伙家作、夜物な

どの不用なるを售て、十八九金を得たり。嚮に九四郎の贈りたる、五十金と共に、七十金ばかりの貯祿あれば、いかで是をもて、生涯の計を做さばやとて、其内中六十金を、小忠二に預けてぞ、福富村へ伴はる。是よりして、阿夏の老亭は、彼酒肆に歇りて居り。措名の爲に朝夕の、薪炊の資助に做れるのみ。今年も既に尾になりて、一日雪の痛く降ける嚥昏に、年齢六十ばかりなる一箇の行僧、福富の店前に立在て、念佛し一宿を乞けり。阿鍵は昔年良人大夫五が、出てかへらずなりしより、其日を則命日として、香華を嚋などしけるに、今日も其日に値りしかば、軈て件の行僧を喚入れて、脚を濯せなどしつゝ、軈て納戸に案内して、火桶を與へ、茶を薦るに、行僧は右邊なる、家廟を見かへりて、且廻向しぬる程に、措名老亭は遽しく、茶粥を煮て薦めけり。當下件の行僧は、阿鍵老亭をつら〳〵と見つゝ頻に嗟嘆して、其過去を談ずる事、素より相識者の如く、宛掌を指に似たれば、阿鍵老亭は胸を潰して、先其法名を諮るに、行僧答て、我名は幻泡と喚做したり。年來大和の六田川に在り。如々來禪師に從事して、不二法門の妙要を得たれば、行脚して這地に到れり。和孃等生來薄命なれども、然しも佛緣なきにあらず。時いまだ至らざる故に、火宅の煩惱を免れざりき。我今不可思議の法語あり、倶に聽聞すべしとて、人の世の果敢なき、無常迅速の驚き易く、悟りがたき義を說

諦し、菩提正覺の入安くして、得がたき旨を和解し示すに、其言婦幼にも、通ぜずといふ者なければ、阿鍵はさらなり、阿夏の老嬬は、年來の凡慮俗情を、立地に洗除れて、深信膽に銘じしかば、倶に十念を受しより、女僧に倣らまく思ひ起して、隨卽這義を希ふに、阿鍵も同意あり、先大夫五の生死存亡を、問ふて知らまく欲するに、幻泡法師頭を掉て、天機は毫も漏すべからず、後にみづから知るよしあらん。其良人亡命して、十年を歷て還らずは、其妻尼に倣るとても、孰歟是を疎忽とせん。剃髮の事は饒すべし、後の離合は示しがたし。といふに老嬬も朱之介の、後の禍福を問難て、倶に得度を願しかば、幻泡法師點頭て、今宵は旣に更闌たり。明日剃髮し給へとて、儲の臥簟に案内を請ふて、軈て枕に就きにけり。かくて其詰朝、小忠二猎名は、阿鍵老嬬の剃髮の義を聞知りて、倶に肚裏に思ふやう、阿夏の老嬬は、左まれ右まれ、我刀自阿鍵をは、郞君子大夫五の、存亡いまだ安定ならぬに、剃髮は早からずや、といふにいはれぬ時誼なれば、度外に措て疑はず。先客僧に齋を果して、阿鍵老嬬の爲にしも、剃刀盥の准備をしぬる程に、件の兩箇の婦人等は、倶に衣裳を整へて、家廟の下に居り。當下幻泡法師は、網編の筬に藏めたる、袈裟法衣を出し被て、先佛樻なる本尊佛を、戴足膜拜し畢りて、阿鍵老嬬に、髻を解披せて、各其雲鬟を、八箇に紈て、爲に經を讀み、偈を唱つゝ、剃

刀を拿抗て、剃て圓頂の優婆姨に做しつ。則阿鍵の法名を、如幻と命け、阿夏の老苧の法名を、如泡とす。隨即十念を相授て、度牒を寫して取すれば、阿鍵老苧は額衝て、導師を禮拜したりける。當下幻泡法師諭して道く、女人は其性嫉妬なきはなし、這故に成佛しかたし。こゝをもて儒教にも、女の嫉妬なきは、百拙を掩ふといへり。爾るに法華經提婆品に、八歳の龍女成佛の事あり。是時に方りて、龍女摩尼寶珠をもて、釋尊に奉獻す。這個寶珠は、則龍女の神魂なり。釋尊是を受給ふ時は、龍女の成佛知るべきのみ。非如女人の僻るも、心を佛に做さば做してん、只其工夫の至らざるなり。昔當厩の中乘尼、平將門の女、如藏の如き、女人成佛の徵と做すべし。汝等今より佛經を讀習ひて、其經文を解し得ぬるまで、許多の歲月を、積ざれば得べからず。只日每に佛名を、十萬遍相唱て、且其間に、涅槃經四句の偈を唫誦して、倶に成佛を樂ふべし。浮世は諸行無常なり、佛は寂滅を樂とす。人各命終る時の、經營に遑なければ、惡を做すに所なし。是則寂滅爲樂なり。然れども心靜ならざれば、漫に外物に誘引れて、一大事を忘るゝに至れり。この故に佛門の徒を、名づけて禪定門といふ。禪は靜なり、定も靜なり、汝等靜坐默識して、禪定尼たらん時、年五十に至りなば、倶に諸國を行脚して、靈山靈地に詣る每に、佛を拜みて懺悔せば、良人の存亡を知る時あり、其子の禍福を


この段の本文ハ
第十三丁ふ見えす
如幻如泡尼
草庵同居の
登古呂


みよげん
みよぞう

悟る日もあらん、努懈るべからずといふ、教化叮嚀なりければ、如幻如泡の歡びはさらなり、側聞する小忠二措名、心なき小厮丁太郎まで、渴仰隨喜せざるはなく、坐に涕をうちかみけり。教化既に果しかば、幻泡法師は袈裟法衣を、故の如く笈に藏めて、告別して去らまくするを、如幻如泡は推禁めて、准備の布施二包を、盆に載て薦れば、幻泡退けて敢受ず、且いふやう、捨は只是有漏の緣、出家は乞食して世を渡る者なり。金銀錢財は、出家人に大毒物とす。布施は昨宵の宿にて足れり、暇まうす。と身を起して、草鞋穿締め、笈を背にし、笠を携き錫杖を衝鳴して、雪の細道物ともせで、往方も知らず、出てゆきけり。其後本村の長某甲が、阿鍵老竿の剃髪を聞知りて、そを訪んとて來にける折、幻泡法師の事を聞て、駭嘆じて、且いふやう、いぬる日人の噂に聞ぬ。近曾彼大和なる、六田川の如々來禪師は、這近江路に、行脚し給ふに、光りを包み名を埋めて、一切凡夫に知らせ給はず、但佛緣ある家にのみ、一宿を乞給ふといへり。恐らく其幻泡法師は、如々來禪師にあらずや。といふに如幻如泡はさらなり、小忠二措名もうち驚きて、始て悟る値遇の緣、倶に深信彌增けり。然ば今茲は果敢なく暮て、其次の春二三月の時候、阿鍵の如幻は、小忠二に商量しつ、本宅の背門の方に、宜き坦地あるをもて、其里に草の庵を締びて、如泡と同居の室とし定めて、酒肆は名殘なく、小忠二夫婦に取せけり。

この折又老苧の如泡は、郷に小忠二に預けたる、彼六十金をもて、良田良圃を購求めて、年毎の衣食の料とす。猶且如幻は隱田あれば、俱に乞食するに及ばで、只旦暮に、香を燒き花を折て、佛に仕るの外他事もなく、如幻は黃金の上を掛念せず、如泡は朱之介の事を思はで、世は倒に安しといひけり。こは是後の話なり。案下某生再說。爾程に大江杜四郎成勝、峯張粂六郎通能は、彼盜兒盆九郎の事果て、進退自由になりしかば、先や這地を立去りて、猶北國へ赴んとて、主人夫婦に別れを告て、更に起行の用意を做す程に、月屬親く交參たる、長橋倭太郎、象船算彌、多賀志賀介なんど、この他も同籍の少年幾名歟、早くこの義を聞知りて、詣來て別れを惜ざるはなく、或は餞別にとて、東西を贈るもありしかど、四郎粂六は、逆路の煩ひなればとて、謝して多くは受ざりける。开が中に曾根見五郎平宗立は、近江鯽魚の一夜鮨、一小桶を齎し來て、杜四郎粂六に告ていふやう、兩才子明日は立去り給ふよし、寡君既に聞召れて、惜ませ給ふ事大かたならず。今は禁るとも、得留らじ。こは要なき物ながら、贈りて予が志を致せとて、內々の義を以、微臣を使に立られたり。一夜鮨は、春夏の間にこそ、人の愛る者なるに、今は冬の中氣にて、時節相應しからねども、實に當國の名物なり、是喫るべうもや。と口狀特に爽然に、演て件の鮨桶を、渡せば杜四郎受戴きて、こは思ひがけもなき、

恩賜こそ面目なれ。桀六郎と共俱に、程なく拜味仕らん、この義宜く御執成しを。といへば桀六も額衝き承て、賴みまつるとぞ答へける。既にして五郎平は、猶留別の詞を盡して、且再會を契りつゝ、伴當を將てかへり去りけり。浩處に石見介好純は、今朝城に出仕の後、目今退りぬと聞えしかば、杜四郎桀六は、方僅守より賜りたる、一夜鮨の事を告て、其鮨桶を見せけるに、石見介歡びて、那は各位を惜ませ給ふ、守の仁愛なるべけれ。然れども今日は、我先人の忌日なれば、一家兒皆精進なり。明日其餘味を拜すべし。和君等は今日ならで、明日は他鄉へ立去るなれば、目今嘗み給へとて、急に若黨を呼よせて、重封緘したる鮨桶の、蓋をうち開かせて、鮨幾箇歟兩箇の碟子に裝分て、手製の濁酒一壜と、盃箸をとり添て、他等の小舍に遣しけり。杜四郎と桀六は、素より鮨を嗜ねども、然しも貴人の賜ものなるに、主人の好意も默止がたければ、各其鮨一箇をたうべて、濁酒も多く得飮ます、うち相譚ふてありし程、俱に心地常ならず、猛可に胸張り腹痛して、腸斷離るゝばかりなれば、俱に得堪ず輾轉て、苦艱いふべうもあらざりける。其聲奥へや聞えけん、石見介走り來つ、這爲體に、胆を潰して、連りに人を呼立れば、長江はさらなり侍婢等、老僕若黨まで走り來て、藥よ水よと噪ぐのみ、計の出る所を知らず。當下石見介思ふやう、這兩才子の病症は、必是食傷ならん。我家

其理は脾胃を傷らるゝ者なれば、食傷も亦毒の爲に、金瘡にのみ卽效あれども、の仙丹は、

杜四郎と柰六の口中に沃ぎ入るゝに、是一なるべし。用ひて見ばや、と尋思をしつゝ、彼仙丹を水に解て、

とばかりにして卽效なけれど、倶に四肢厥冷して、九死一生と見ゆるものから、藥はよく吮に降りぬ。

病人等は、煩悶の聲稍定りて、猶幸に家に藏めたる、一角を細末にして、是をも多く用ふる程に、

奴隷を醫師許走らせて、急に招きよせまくするに、臥簟に抱き入れられけり。旣にして日は暮しかど石見介は、

らず。其途近きにあらざれば、早の所要に立べくもあを得たりける。左右する程に、杜四郎柰六は、當晩丑三刻時候に、甚しく吐瀉してより、死なざること

藥を調進したれども、其詰朝彼醫師來診して、這少年達の病症は、中寒より出たる食傷なりとて、

杜四郞と柰六は、謝して其藥を飮まず、且いふやう、最初彼仙丹と一角

微りせば、己等は必死なん。縱卽效あらずとも、他藥を用ふべからずとて、猶前劑に從ひけり、倶に思ふよしあればなり。其次の日石見介は、昨日の飯鮨を取出て見るに、飯の色酷く變

りて、訝しき事涯りもなきを、敢亦言には出さず、其鮨は遺もなく、手づから庭の土中に埋めて、悄地に後の病厄を禳ひけり。然る程に同藩の少年等、及彼曾根見五郎平まで、大江峯張の

大病を聞知りて、日每に訪來て云云と、安危を知らまくせらるゝも、倒に厭煩かるべし。這病

厄に年暮て、明れば享祿四年になりぬ。這春正月の季に至りて、杜四郎朶六が、俱に大病瘥り果て、氣力本復してければ、主人夫婦に再生の、恩を謝し別れを告て、立去らまく欲するに、石見介のいふやう、和君等大病の後、幾程もなく、餘寒を犯して遠く走らば、身を愛せざる者に似たり。先一兩日近郊に杖を曳きて、步固をして後に、障もなくば其折に、趨行しぬるも遲きにあらじ。といはるゝよしの理りなれば、杜四郎朶六は、漫行をしぬる程に、又料らざる小厄あり。この故に杜四郎は、肩に淺痍を負ふに至れる、其事の光景は、繡像を前に出すのみ、又卷を更て、且下回に、解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓第四版附言

人生れて五七歳、鳩車竹馬の始より、年三五に至るまで、遊戯娯樂の外に嗜慾なし。賢となく不肖となく、二十にして嗜慾多かり。爾れども其好む所同じからず。遐に唐山の故事を思ふに、黄帝は衞生を好み、堯舜は仁義を好み、桀紂は不仁を好み、顏回は學を好み、宰予は晝寢を好み、莊周は寓言を好み、淮南王は豆腐を好み、蔡邕は瘡痂を喫ふことを好み、杜預は左傳を好み、陶淵明は菊を好み、陶弘景は松風を好み、李白杜子美は詩を好み、羅貫中は俗語小說を好むが如き、枚擧るに遑あらず。是よりして下、和漢の世俗、其嗜慾甚しきは、敗れを取らずといふ者なし。蓋淫を貪り酒を好みて、飽ことなきは命を破り、驕奢を好みて禮なきと、貨財を積て散さゞるは、禍その家を破る者あり。只この弊のみならず、賤くして貴きを犯すことを好む者は、必辜あり。愚にして用ひられんことを好む者は、屢譏らる。或は外物を飾ることを好み、入るを料らずして出す者は、其財用足らずして、窮鬼の祟あり。好みて思慮を費す者は、覺ずして命を縮め、好みて戰ふ者は疵を蒙り、好みて游者は溺るゝことあり。或は人の惡をいふことを好み、或は不學にして先達を譏りて、彼名を賣まくしぬる者は、是小人の好む所、君

子の悪む所なり。皆是好む所の甚しきに至りては、破敗なきことを得ざるべし。この故に大人君子は、好憎なきを宜しとす。人其好みを知る時は、下たる者是に由て、其機を攬ずといふことなし。愼ずばあるべからず、況士庶人の貧賤なるをや。嗜慾好憎の甚しきは、利ありといふとも終に害あり。世に人の父母たる者、初其子に教るに、情を拆き慾を禁るを、第一義と做すべき而已。譬ば予が如き、素より美食を嗜まず、美衣を好まず、富貴を羨まず、貧賤をも侮らず、好む所は讀書筆研、夜をもて日に繼ぐ者五六十年、人の師となることを好まず、この故に悄地に戯墨を事として、世の蒙昧を醒さまく欲す。其著編りて大小三百餘種、是が爲に日夜眼氣を使ふ者、五十餘年の久きに至りて、瞳子年々に衰耗して、子夏と憂を同じくす。是に加るに、疝痛痰飲身に逼りて、坐臥も亦安からず。是より以來好む所を排斥して、獨坐靜默、木偶に異ならず、其好みの過ぎたるを、後悔何ぞ及ぶべき。是將天乎、命なる哉。かくの如くなる者三四年、一日書肆文溪堂、詣來て、亦哄誘して、前集のいまだ果さざるを、續せて刊刻せまく欲す。予も亦些の技なくては、みづから老を養ふに足らず。且春日秋夕の、長々しきを獨かも寢て、果報を俟べくもあらねば、屢婦幼に字を教え、代書を課せて稿を起すに、婦幼は文字に疎ければ、其一句一行毎に、教授叮寧反復すれども、動すれば閊僻め、思ひ違て左に右に、

甚しき誤字あれども、吾隻字だも見ることを得ず、只讀せてうち聞くに、傍訓をのみ讀故に、其訛謬を知るによしなし。剏又淨書筆畊の手に、謬らるゝも多かれど、校訂も亦婦幼に任せて、書肆の責を塞ぐ者、玉石童子訓卽是のみ。古より和漢の文人、不幸にして失明の後、著述ある者を聞かず。然るを吾のみ強てすなれば、止ることを知らずとて、譏るもあらん、笑ふもあるべし。又同好の諸君子は、予がこの苦樂を憐ぶもあり。いよ〳〵奇として愛るも多かり。誤寫は具眼の知る所、今さら正すに及ばねども、發版の後問考て、稍其誤字を知るもあり。或は交遊の指摘によりて、驚かされしも尠からぬを、抄錄する者左の如し。

〔第一版〕巻の一上六丁左四行大皇子|子は國の誤寫なり 同行|貌|貌は邈の誤寫なり 同巻九丁右三行燈行|顚倒なり當に行燈に作るべし 同巻十四丁左四行侍りにきとと|下のとは衍なり 同巻十八丁左六行一|串|ことやはひとやの誤刀なり 同巻十八丁左九行易|違|當に易緯に作るべし ○巻の一下二十六丁右一行|粥|粥は粥の誤寫なり ○巻の二上二丁右三行蚺|蛇|蚺蛇は蛇の誤寫なり ○巻の三上七丁左六行|礮面|礮は礮の誤寫なり 是までは發版の後補刻したるなり。

〔第二版〕巻の三下五丁左三行|容子|容は容の誤寫なり ○巻の四下二十三丁左十行毛髮傍訓のかみのけかみかけたり 同巻二十九丁右

繡像中掃除揚|揚は塲の誤寫なり○卷の五上二丁右十行風盧|盧は爐の誤寫なり同卷三丁左七行月を蠋|蠋當に燭に作るべし○卷の五下一丁左六行遊學|傍訓のいうはゆうの誤寫なり同卷三丁左七行遊藝|いうはゆうの誤寫なり

〔第三版〕卷六の十一七丁左四行御曹子|子は司の誤寫なり同卷十七丁左八行片隻|片隻は隻翅の誤寫なり○卷の十二五丁右一行我遠曾誤寫なり當に|遠祖に作るべし同卷十五丁右八行活却|誤刀なり當に沽却に作るべし○卷の十二丁右三行客扱ひにはせられね|脫字なりせられどれどかくの如し同卷三丁左九行眞術て|術は實の誤寫なり同卷六丁左七行小謠亭|亭は曲の誤寫なり誤甚し同卷十七丁右十行|諫難|陳當に諫に作るべし同卷十七丁左三行縁故原|故の下をの字脫したり○卷の十四十三丁左八行|僅方|方顛倒なり當に方僅に作るべし同卷十六丁左八行戈子|戈欠たり戈かくの如し○卷の十五二丁左八行|吹きてやきの字衍なり同卷五丁左六行睚眦|眦は眦の誤刀なり同卷十一丁左三行|痛欠たり痛かくの如し同卷十五丁右十一行闕冷|闕は厥をよしとす同卷十七丁左十行|聽ねかし誤寫なり當に聽に作るべし○卷の十一廿丁左八行|約速は束の誤寫なり○卷の十五十二丁右度帳誤寫なり當に度牒に作るべし。

是他精細家の活眼をもて見られなば猶あるべし。抑書肆の發兌に性急なる、初校果ぬれば、二校三校を後にして、摺せて製本し、其間に二校三校を承ぬるもあれば、版は補刻しても、製本は誤寫の儘にて、世に見はるゝもあるべし。この擧歲の暮なれば、かくなん拈り出しける。

風葉塵埃のこゝろを、

いとへどもいづこもおなじ塵の世に春を隣の煤拂ひ哉

弘化二年乙巳歳梢念五

四谷隱士識

續編 卷之十六

第四十六回

好純實を撈る暴巨椋の狂態
主僕貌を改る旅宿中の初髻

再說大江杜四郞成勝、峯張柒六郞通能は、病厄稍瘥りて、他鄕へ去まく欲するに、主人石見介好純が、猶阽みていふよしあれば、先試步の爲にとて、主僕割籠餉を腰にして、早旦より近郊に逍遙す。この日は枸杞村福富の方へとてゆく程に、折から二月の初旬にて、目に美しき梅の花、單葉は散て、千葉は猶、香にこそ馨へ、路傍の、樹芽若草春めきて、右も左も叢麥の、圃より升る翔鶬、藪鶯も外ならぬ、調子は高き里神樂、今日しも初午なりければ、稻荷祭祀も天離る、鄙にはあれど千仭劍、神を齋きの注連幟、其村每に賑しき、人の往還も常に倍す、里の總角うち群て、飽ぬ大鼓の音さへに、初雷歟、とおもほゆる。杜四郞と柒六は、東となく西となく、思ひの隨に見盡して、長き春の日斂く時候、枸杞村までかへり來にける程に、後れたりける柒六は、杜四郞を喚かけて、やよ和子一霎時止り給へ、己脫落し事こそあれ。方僅

憩ひし後の村なる、彼茶店に菅笠と、割籠さへ措遺れにき。走りかへりて拿もて來てん。郷に里人に聞し事あり、這頭より觀音寺の城へ捷徑ありといへり。汝を又人によく問ふて、徐にゆかせ給へかし。といふを杜四郎うち聞て、笠のみならば棄るとも、惜むに足らぬものながら、割籠は今朝主人の取出て、借されたるを爭何はせん、戻りて拿るもよかゝなん。其捷徑の有ならば、栞を貽して其方へいなん。疾々せよ。といそがするを、柒六は聞も得果ず、程なく遂就きまつらんず、いでくといひつゝも、故來し路へ驀地に、走りて見えずなりにけり。爾る程に杜四郎成勝は、彼捷徑を問はばやとて、ゆくく四下を見かへるに、這頭は一條の畷路にて、左右に最多かる拘杞の、彌生に生繁るのみ、憩ふべき茶店もなく、前面より來る人にも逢ねば、思難つゝ猶ゆく程に、と見れば一箇の田婦あり。年齡は三十許にもやあるべからん、脣厚く、身材高く肥脂みて、酒肥滿といふ者に似たり。身には栲の廣袖衣一ばかり被て、裾高に褚折りつ、白き二布の端を顯したるが、這頭の拘杞を芟採りて、薪に做すにやあらむずらん、彼身は芝生に坐を占て、連りに鎌を硎てをり。當下杜四郎は、件の田婦を呼かけて、卒爾ながら言問ん。這里より觀音寺の城へゆくに、捷徑のあるならずや、そを知りたらば聞まほし。といふを田婦見かへりて、噫こゝろも得ぬ。其聲音にて猜するに、他鄉の人にぞあらんずらん。

作麼那里より來ましたる。觀音寺の城内に、相識やいまする。と問復されて、然ばとよ、我は攝津國の旅客にて、大江杜四郎成勝と喚るゝ者なり。近曾遊歷して這地に來つ、觀音寺の城内なる、高島生に由緣あれば、去歲の秋より那里に在り。今日は這頭に遊び過して、旣に日影の敧きたれば、こゝろ只管いそがれて、捷徑あらばゆかまく欲す。いかで詳に教えよかし。と說れて田婦含笑て、原來耍ある刀禰なるに、疑ふて何を歟祕さん。問せ給ふ捷徑は、猶眞直に二町ばかり、行せ給はば、右の方に、最老たる榎樹あり、其里より路を右に取りて、十町有餘ゆかせ給はば、左右へ別るゝ徑路あり。其里より路を左りに取りて、ゆくこと又十町ばかりにて、彼城下に屆り給はん。左右をな違へ給ひそ。と指さし示して誨れば、杜四郎歡びて、幵はこゝろ得たり、しからんには、汝に猶賴むべき事あり。我と一路の一少年、後れて這里へ來ぬるあらん。其面影は箇樣々々、打扮は如此なり。其少年の過るを見ば、汝亟く呼留めて、又捷徑を敎示して、我爲に言傳せよ。一樹の蔭も他生の緣、いかで〳〵。と諄かへすを、田婦聞つゝ點頭て、其義もこゝろ得侍りたり、疾々ゆかせ給ひね。と應て又鎌を硏てをり。是により杜四郎は、ゆくこと二町あまりにして、果して右方に榎樹あり。こゝなるべし、と思ひしかば、鼻紙を長く引裂て、其下枝に締吊て、もて柰六の爲に栞とす。他今かへり來るやとて、猶立在こと

半晌許、俟ば又生憎に、日影いよ〳〵敧きしかば、幾まで賊かくて在るべき、程遠からず遂着ぬらん、と思捨つゝ右の徑路を、ゆくこといまだ二町に過ぎず、跡跟來ぬる件の田婦、利鎌を袖に隱し持て、竊歩しつゝ近づきて、聲をもかけず背より、揮閃めかす彼鎌を、杜四郎の肩尖へ、打かけて曳く刃の光に、杜四郎は咄嗟とばかりに、身を淪したる修鍊の剽捷、二たび打入む鎌の柄と、倶に利手を拿禁て、耶と引被ぎて投しかば、田婦は杜四郎の、頭顱の上をうち越て、筋斗りつ、二三間、前向へ撻と倒れける。當下杜四郎成勝は、思ひがけなき遠冤家を、見れば是別人ならず、曩に捷徑を誨たる、彼田婦なりければ、且訝り且怒に得堪ず、罵責る聲も急迫、這奴何等の怨ありて、我を狙撃まくするや。意ふに剪徑を事とせる、賊婦にこそありつらめ。疾首伏して綁縛の、索を受よ。と敦圉たる、其間に田婦は、身を起し來て落しゝ鎌を、搔拿りつ、身を構へて、狹視哮る聲高やかに、外聞悪き烏滸をないひそ。左ても右ても活てはかへさぬ、我冤家なれば覺期の爲に、意衷を示さん、死天三途の、話柄に听ねかし。我身は枸杞村に名もしるき、棄木の巨椋鬼妻と喚做されて、親族もなく子もあらず。二三年前つ比より、墨烏の盆九郎と狎染て、連理の枕、比翼鳶、夜の衾は陜くとも、廣き世界に二人となき、郎は無慙や去歲の冬、儞が爲に搦捕れて、終に頭を刎られしたり、と人傳に聞し其日より、

憤胸に盈て、いかで怨を復さんず、と思はざるにあらねども、冤家は只其名をのみ聞て、いまだ其面を認らず、況彼身は城内に、在りとしいへば近づきて、撃ことたえて便なさに、憂かりける日を過しゝに、今日料らずも捷徑を、問し儞が聲音の、浪華人に似たるをもて、我亦思ふよしあれば、言を設て問試しに、漫に名告儞が命運、既に盡ぬる時至りて、我情人の讐敵なる、儞が面を認しより、憔るこゝろを推鎭めて、這横路へ誑入れしは、其細頸を芟伐て、世に亡人に手向んず、と思ふこゝろを知らずや。といはせも果ず杜四郎は、呵々とうち笑ひて、愚なり、巨楳とやらん。彼盆九郎は罪人なり、我家傳の刀子を、竊拿りたるのみならず、人を害して積悪あれば、終に死刑に行はれしに、搦捕しを咎にして、我を怨むるは甚麼ぞや。膽魂は女に似げなき、勇あるに似たれども、理義に闇きは匹婦の本性、物に狂はゞ後悔あらん。早く惑ひを醒さずや。と諭すを聞かず眼を睜りて、汗は卑怯なり、命や惜き。盆九に罪のあらばあれ、彼人搦捕れずば、何でふ首を喪ふべき。只我怨は儞に在り、似而非頑童奴覺期をせよ。と罵狂ふ匹婦の獍勇、五日の月と晃かす、利鎌を間なくうち振りて、搔んと找むを杜四郎は、右に反し左に外して、兩三番疲勞しつ、利鎌を丁と打落す、拳の冴は雲間の電光、額を撲地と打悩せば、巨楳は吐嗟と瞑眩きて、怯むを得たりと兩手を捉りて、背へ楚と揉抗て、登

し蒐りつ、三尺帶もて、結扎て四下を見かへるに、臂近なる老樹の杉に、羅りし藤蔓ありければ、右手を伸しつ曳よせて、罵狂ふ棄木の巨楳を、曳摺よせて老樹の幹へ、團々纏にぞしたりける。この段の綉像、前板第四十五。回の編左にはやく出したり浩處に峯張来六郎通能は、彼忘れたる菅笠と、割籠を肩に引かけて、遽しくかへり來つ、杜四郎の遺したる、栞あれば惑ひもせず、こよなりけり、と後影を、遙に見つゝ走著て、やよ和子、只今かへりにき。といひつゝ又愕然と、驚く事大かたならず。やよ和子御身の肩尖より、鮮血多く流れたり。手疵を負せ給ひし歟。と問ふにはじめて心づく、杜四郎もうち驚きて、原來この悪棍婦の、鎌に鈍くも身を傷られし歟、現我ながら由斷は大敵、其故は箇様々々。と巨楳に捷徑を問ひし始より、彼が狼籍の事の顚末、已ことを得ず拉ぎて、那里の老樹に繋ぎ禁たる、其事の終まで、詞急迫く解示せば、来六いよく怒に堪ず、爾らば是寛すまじき、彼奴も盗兒の支黨なるに、などて斫棄給はざる。いで那頤劈きて息の緒斷ん。と敦圉猛く、走蒐らまくしてけるを、杜四郎推禁めて、其は大人氣なし敵手に足らぬ、狂女を殺して何にせん。先我手疵に仙丹を、塗て宿所へいそぐべし。といふに来六有理と應て、其偏袒を推脱せて、腰に吊たる藥籠より、彼仙丹を拿出して、杜四郎の瘡口へ、多く布塗らして、鼻紙を裂て蓋にしつ、罵狂ふ棄木の巨楳を見かへりもせず

うち連立て、觀音寺の宿所へいそぐに、先度に懲て捷徑を求めず、故の畷路に立かへりて、直急ぎに走るものから、杜四郎の鎌瘡は、彼仙丹を用ひしより、其血立地に止りて、敢又疼痛を覺ず。この日點燭時候に、高島の宿りに還るに及びて、瘡口なごりなく閉て、衣の障るを知らず。是よりの後、一兩日を歷ぬる隨に、その金瘡皆愈て、迹だに見えずなりにける。然ればこの兩少年は、仙丹神奇の徑經を、悄地に感じあへりける。閒話休題。爾程に大江杜四郎、峰張渠六郎は、當晚夕飯果て後、主人石見介にうち向ひて、今日目擊したる郊外の、春色風景を、云云といひ出て、うち譚ふ語次に、彼枸杞村なる棄木の巨樸の狼籍の爲體を、漏すことなく告しかば、石見介驚きて、开は安からぬ事なりき。其奴國家の法度を知らず、善惡邪正に暗かるは、取るよしもなき狂女なりとも、捨置かば又何なる、殃危を釀せん歟、是も亦知るべからず。夫千丈の隄の頽るゝも、蟻の穴より起るといへり。小火倘滅さずもあらば、後の煽煽をいかにせん。先その消息を聞定めて、又せん術もありぬべし。咱等に任給ひね。と答て夜話は果にけり。その次の日に石見介は、心利たる若黨に、意衷を云々と宣示して、悄地に枸杞村へ遣しゝに、件の若黨黃昏時候にかへり來つ、隨即石見介に報るやう、小人今朝枸杞村に赴きて、巨樸が事の顚末を搜りしに、他は彼村なる、韭容某甲の妻なりし時より、酒を貪り賭泉

に耽りて、人に忌るゝ毒婦なりしに、其良人身故りしより、彼身貧しくなる隨に、奸計を宗としつ、村人些の失あれば、其家に跟入て、多く錢を取らせざれば、敢去らず。生平に酒肆に赴きて、醉ざれば敢かへらず。然ばとて其價を、還さゞる日の多かれば、酒杜氏等は困果て、沽らじといへば、怒狂ふて、升を擲ち吸口をうち拂ふ、狼籍涯りなきものから、然しも女流の事なれば、敵手に做さんはさすがにて、打懲すことを要せず。坊賈の悲しさは、只經紀の坊に、做さじと思へば賺寛解て、反て酒を贈り、錢を取らせて、告訴する者あることなければ、亘楳はます／＼忌憚らず、不義の利をのみ欲する程に、同氣相求めたる、墨烏盆九郎と密通してより、迭に其惡を資けて、人の憂ひに做ること多かり。有斯し程に盆九郎は、積惡竟に發覺れて、大江主に搦捕れ、既に死刑に行はれしかば、亘楳は愛惜のやる方なくやありけん、うち歎きてありける比、人の爲に哄誘されて、歹智計をや馮られしけん、大江主を仇とし罵りて、いかで怨を復さんとて、物狂はしく做る日もありしに、昨日何人の所爲にやありけん、長畷の横小路にて、亘楳を結扭て老樹の幹へ、緊しく括り置れし折、相識一箇の里人の、こゝろともなく過るあり。亘楳は是を喚留めて、只管拯ひを求めしかば、其人佛心をもて、敢亦疑はず、彼身を結扭し藤蔓も、長手拭も解捨て、ゆくこといまだ一町に過ぎず、亘楳は亂心したりけん、其頭

にありける鎌搔拏りて、追携りつゝ其里人の、肩尖より背まで、ばらりずんと斫仆せば、窮所の深傷に一霎時も得堪ず、丌が儘撲と平張ける。巨棋は是を悔もせず、血に塗れたる鎌うち振て、狂ひ罵りゆく程に、途に逢ける里人の、老幼男女甲乙となく、身を傷らるゝ者多かりければ、血氣壯なる村人毎、素破事あり、と起り立て、朸桿棒引提々々、走り集ふ者數十名、巨棋を中に捉稠て、八方より撲つ程に、羅刹を欺く狂婦なれども、いかにして支ゆべき、腕を折かれ頭碎けて、腦髓出てぞ死でける。既にして事私に、治るべきにあらざれば、村長故老驚きて、事の邪正を問訂し、地方の莊官查甲に訴て、實撿使を請ふといふ、人東西に走り違ひて、罵り噪ぎ候。と言詳に演しかば、石見介又驚きて、先若黨を勞ひつ、丌が隨に退せて、然而杜四郎と柒六に、巨棋が横死の爲體を、聞つる隨に宣示せば、兩少年等は眉を顰めて、嘆息の外なかりける。姑且して杜四郎のいふやう、巨棋の如きは賊婦なれども、我其職にあらざれば、搦捕ることを要せず、只懲さまく思ひしに、虎狼野心の癖なれば、怨もなき里の男女に、多く痍を負せし歟、天罰竟に免れず、莊客們に敺殺されしは、寔に自業自得にこそ。といふを石見介うち聞て、然ればとよ、その事なれ。和君は巨棋を懲さんとて、彼身を結拑給ひしを、村人等は知らずといへども、事の讞斷果るをまたで、他鄉へ立去給ひなば、後に其事を知る人


巨椋乱酔して尻掛酒屋を鬧せ
小もの
おれめ


さと人
さと人
酒とうじ

ありて、云云と評する折、逃たりとやいはるべからん。不本意にはあるべけれども、ゆくも止るも皆時なり、この義を思ひ給はずや。といふに杜四郎は然なり。と答て、事の障をうちわぶる、嗟嘆に長き春の日を、消し難つゝありけるほどに、三月も既に盡る時候、巨樑の一件果たりといふ、風聲仄に聞えけり。登時高島石見介は、杜四郎と柒六に告るやう、彼巨樑の横死の事に就きて、枸杞村人の稟すよし、其證據あるをもて、巨樑を毆殺たる壯佼等は、疎忽の失を宥められて、皆赦に遇ぬと聞えたり。其故は彼巨樑に、身を傷られたる村の男女は、幸にして死に至らず、皆その金瘡愈たれども、はじめ彼横小路にて、背を斫られし莊客某甲は卽死したれば救ふによしなし。有斯れば巨樑は里人の、諸手に死なで在とても、其罪解屍人を免るべからず。況他が年來の毒惡、是時に遠く聞えて、その照驗分明なれば、則守の御沙汰として、形の如くに行はれにき。然れば枸杞村人は、蠱毒を禳ひし心地すとて、置酒して祝ふも少からねど、老て心弱き村人は、後又巨樑の惡靈の、祟を做すことあらん歟とて、講を結び、錢を集めて、彼亡骸を葬りつ、爲に五輪石塔婆を建立して、追薦の讀經叮寧にものせんとて、商量最中なりといふ、この義も人の噂に聞ぬ。彼首尾かくの如くなれば、和君達に障りなし。今日よりして那里まれ、發足は隨意なれども、己猶思ふよしあり、大江主は十七歲、峰張生は十九な

らずや。爾るを猶總角の儘にて、萬里の逆路に赴き給はゞ、胸安からざる所あり。故何となればゝ人少年と見る時は、思ひ侮るも是あるべく、或は龍陽鷄姦の、惑ひを做す小人の、是なしとすべからず。是によりて此を思へば、早く額髮を剃除きて、男に成るにしくことなし。倘我意見に從ひ給はゞ、明日は黃道吉日なり、好純不肖にして、其人にあらねども、故の峰張先生の弟子なれば、舊好親族の思ひを做せり。幸に嫌れずば、いかで烏帽子をまゐらせまく欲す。この義誰何。と談ずれば、粂六はいふもさらなり、杜四郎異義もなく、歡びて答るやう、教諭誠に其理あり、我們貌を革るに、親にも兄にも告ずして、自恣なるは、實に非禮に似たれども、旅にしあれば許されやせん。最辱く候。と謝すれば亦粂六も、倶に歡びのこゝろを演て、猶も餘談に及びしかば、石見介は、兩少年の、溫潤にして怜利さの、今にはじめぬ事ながら、いふ甲斐ありと思ふにぞ、先その准備をいそぎたる。次の日大江峰張の、初髻の祝壽あり。石見介是をものして、理髮烏帽子親を兼帶す。この日杜四郎と粂六の、額髮を剃除くに、石見介は、僅に剃刀を當たるのみにて、その技にこゝろ得たる、老僕若黨立代りて、剃もしつ、結髮果て、鏡を與へて見せなどす。石見介長江まで、出て前に居り、後に立て、その似つかはしきを好といふめり。是よりして杜四郎粂六は、倶に其小名の、四郎粂六をもて自稱せず、各

その實名の、成勝通能とのみ唱へける。斯而この主僕は、倶に衣裳を整へて、當城内に遷し祀られ給ふ、多賀の神社に詣んとて、高島の若黨を、案内にしつゝ立出て、拜み果てかへり來ぬれば、壽酒饗饌の儲あり。この義も石見介が心を用ひて、爲に祝壽を做せるなり。然ればこの賀席に、敢他人を交へず、成勝通能を上座に推居て、高島夫婦相伴たり。その餘一家兒なる、老僕若黨奴婢等までに、物喫せ酒飲せて、終日歡びを盡しけり。石見介の師恩を思ふ、誠意の篤かるは、十三屋九四郎に、劣るべうもあらざれば、成勝と通能は、千謝萬謝も猶足らずとて、感悦涯りなきものから、斯而在るべきにあらざれば、明日は這地を立去らんとて、主人夫婦に別れを告るに、石見介諾て、和君達去歲よりして、屢事の障りありて、淹留今に及びしかば、心いそぎのせらるゝならん、發足は隨意なるべし。但し這里より若狹、もしくは越路などへ、赴くに二路あり。故官道は要害の爲、前後に新關を置られて、當家の士卒にあらざるより、敢往還を許されず。この便路を除くの外、陸は峨々たる山路にて、沙礫最多かれば、土人綽號して、碌々越と呼做したり。其嶮岨艱難を嫌ふ者は、琵琶湖の畔に立出て、水路をゆくも多かるべし。そは便宜に似たれども、動もすれば風候して、日を累るもなきにあらねば、近きも反て遠きがごとし。這二路を擇み給へといふ。成勝早の尋思に及ばず、通能と商量する

に、慭に水路を欲して、湖水の畔に赴かば、親しかりける衆少年の、水送の爲にとて、出來ぬるもありぬべし、然らば路次の煩なり。碌々越をゆくべしとて、この意を以答へしかば、石見介點頭て、爾らば鄉導の爲に、若黨奴隷をまゐらすべし。といふを成勝聞あへず、いかでかは其義に及ん、我們は旅より旅に、光陰を送る者なるに、非如一驛半日なりとも、伴當などは用なし。と推辭ば通能も倶にいふやう、寧明日の起行は、人に知られざらまく欲す。伴當なきこそよかめれ。といふに石見介は强難て、竟に其意に任せつゝ、菅笠手拭鼻紙なんど、草鞋に至るまで、主僕の爲に心を屬て、只管餘波を惜むのみ。この時成勝通能は、逗留の程、新製の、衣裳は逆旅に要なしとて、去歳より老實にものしたる、老僕若黨に皆取らせて、雨衣をのみ携ゆくめり。この宵は高島の妻長江さへ、良人と倶に團坐に入りて、云云と話慰るに、周防にありける獨子の硯吉郎の事をしも、思ひ出いひ出て、堪ずや涕をうち噬けり。現子を思ふ親ごころ、誰もかくこそあるべけれ、といはねど然しも身にぞ知る、成勝と通能は、慰難て惆然たる。折から四月の初旬にて、短夜なれば辭退きて、倶に枕に就きしより、幾程もなく呼覺さる、主僕早飯を果し、割籠を腰にして、倶に身輕に打扮つ、主人夫婦に告別して、烏の茂林を離るゝ時候、遽しく立出れば、石見介長江はさらなり、奴婢等も都て別を惜みて、門傍に立て

目送りけり。當下石見介好純は、妻の長江を見かへりて、我今番こそやうやくに、師恩に報ひ得たるが如し。世に人の親たる者、大江峰張主僕の如き、兒子あらば何をか憂ひん。實に彼家の麒麟兒なる哉、羨むべし〳〵。と連りに嘆賞したりける。爾程に大江杜四郎成勝、峰張柴六郎通能は、觀音寺の一二の城門を、障りもあらず出離れて、ゆくこといまだ十町に足らず、こころともなく見かへれば、幾の程に歟跟きて來にけん、高島の若黨奴隷が、後方に立て禮を做す、思ひがけなき事なれば、成勝と通能は、訝りながら步を駐めて、先其故を詰るに、件の若黨答ていふやう、御鄕導の事はしも、固く辭はせ給ひしかども、主人は左右に安心せず、山を踰果給ふまで、倶しまつれと吩咐られて、まゐり候なりと告るを、成勝通能うち聞て、現彼人の信義に篤かる、かくまで心を用ひられしに、遣り返さんは無禮なるべし、と思へば倶に勞ふて、丹が隨に將てゆく程に、その路一里許にして、早く山脚に來にけるに、其頭に茶店おりければ、權且茲に憩んとて、成勝通能作當まで、凳に尻をうち掛て、共に山茶を喫程に、通能は、茶博士にうち向ひて、碌々越の路程、嶮岨遠近を問ひけるに、茶博士答て、然候、素この山路は官道ならねど、曩に守の御制度として、故道を塞がれしより、若狹越前などへゆく旅客の、をさ〳〵過る事になりにき。又這山を七鹿山と喚做したるも、碌々越といふことも、皆國人の

訛りなり。素この山には名なき故に、無名山といひけるを、七鹿山と書改め、又この山路に、六六三十六町の嶮岨あれば、六々越と名づけしを、碌々越に作るにやあらん。皆是儒士の傅會ならん、と物識人は呟くも候ひき。又この山の半腹より、美濃路へ出る捷徑あり、そは只樵夫の通ふのみ、旅客はゆかず候。と言正首に說示すを、成勝も側聞して、然らば去向は心易かり、嶮岨は三十六町のみ、鄕導は實に要なし。謝して他等を返さんとて、通能と共侶に、高島の若黨奴隷を叮寧に勞ふて、返さまく欲するに、這高島の若黨は、勾津字六と喚做して、性老實なる者なれば、敢其義に從はず、奴隷は名を可平といふ、こも愚直人なるをもて、いかにして還るべき、遽しく跫を外して、跪きつゝ倶にいふやう、豫知らせ給ふ如く、主人石見介は、賞罰正しく候へば、縱令辭せ給ふとも、等閑にして玆よりかへらば、罪免るべくも候はず。御歎しく候とも、いかで今宵の御宿まで、御伴をこそ願しけれ、いかで〱。と諄かへす、言果べうもあらざれば、成勝も通能も、困じて又いふよしもなく、然らばその意に任せんとて、茶博士に茶代を還して、山路の爲に玆にて賣る、竹杖四竿買拿りつ、各是を衝立て、碌々越を臨てゆく程に、はじめは其路嶮しからず、俗に云爪頭陟にて、聊も艱苦を覺ず、向上れば、靑壁嵯峨として、綠樹森々、夏尙寒く、直下せば碧潭窅渺として、靑苔蒸々、水又遠かり。或は嵒

躑躅の韓紅なる、分けゆく人を染做して、朱に交り辰砂に臥すも、かくやと思ふ、最興あり。或は波流花の眞白なる、時ならぬ雪のまだ消ずや、燈に代夜學に耽りし、むかしを忍ぶ、心切なり、春の青山何時出にけん、今日初聲の杜鵑、四月の天の薄曇に、二四八としも珍しき、目さへ耳さへ暇なく、飽ぬ眺望は一霎時の程にて、既に嶺に滋ては、宛屏風を建たる如く、路陝くして沙礫多かり。實に碌々越の名空しからず、一歩毎に小心せざれば、礫鱗に戴られて、忽地千仞の谷にや墜ん。成勝と通能は、迭に氣を勵して、杖をちからに辛くして、登る者十八九町、やうやく嶺に至りては、最平坦にて路廣く、左右に生茂りたる、夏樹叢の間に、土地の小社ありけり。旅客の茲にして、幣帛ぬる爲なるべし。彼字六と可平は、嶮岨にや疲れにけん、後れていまだ來ざりしかば、這方の主僕はそを俟んとて、小社の下檀に尻を掛て、倶に憩ふて在りし程に、前面に高き夏草を、踏披きつゝ突然と、走り出來る兩箇の暴野猪、倶に矢傷を負ふたる歟、威勢猛く成勝等を、蒐んと我めば、成勝通能、吽嗟と左右へ避別れて、寄らば刺んと疾視たり。この段倘文多ければ、又下回に、解分るを聽ねかし。

第四十七回

七鹿山の厄に四少年禍福を異にす
千仞の谷の中に神靈新奇を出現す

重說。大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能は、無名山 又七鹿山ともいふ の巓にて、後れて來ぬる若黨奴隷、字六可平等を俟んとて、土地の茅社の頭に、權且憩ひ居る程に、突然として暴來ぬる、正に兩箇の矢傷野猪、其形容犢に等しくて、駈んと狂ふ勁猛に、當るべくもあらざれば、吁嗟と左右へ別避て、寄らば刺んと身構たる、程しもあらず前向なる、繁き樹立の蔭よりして、瞟と射出だす二條の、獵箭に野猪は甲乙共に、竆所を篦深く射串れて、四足を張てぞ斃れける。當下成勝通能は、思ひがけなき光景に、是はいかに、とばかりに、其方を佶とうち見たる、件の樹蔭に兩箇の武士あり。倶に吟ずる聲朗に、

　鼯鼠は木ぬれもとむと足曳の山の幸雄に逢ひにけるかも 萬葉集卷の三にあり

やよや兩才子訝り給ふな。我們前より這里に在り、出て意衷を告んず。と呼はりつ、徐やかに、

立顯れつゝ近づき來ぬるを、と見れば是別人ならず、佐々木家の近習なりける、長橋倭太郎勢泰、象船算彌知量なり。是怎生打扮ぞ、但見身には韃肚甲手脛衣、長總垂たる鎖衣の上に、段段筋の夾衣の、裳短なるを被下しつ、腰には苛物作の兩刀を跨へて、背に駝做す鷲の羽の、獵箭も亦是一對にて、各重籐の弓に、關弦張たるを挾み、頭に戴く綾蘭笠、重裡なる戰鞋の、締附の紐も夏挽の、麻より直き鯁義心烈、奈須の篠原獵銷したる、那三介にあらざりせば、富士の御狩に寃家を撃たる、曾我兄弟の後身歟、と思ふ可の兩少年、這山中に躱ひて、有斯る資助になりけるを、神ならぬ身の知るよしもなき、成勝と通能は、疑の霧いまだ霽ねば、共侶に聲をかけて、思ひきや兩賢契、這里にて對面すべしとは、故こそあらめ、いかにぞや。と問へば勢泰知量は、含笑ながら倶にいふやう、いはで已べき事ならぬ、祕密の話說是あれども、世に憚りの關はなき、人迹稀なる山路なりとて、這頭は樵夫旅客の、過る者なしとすべからず、這方へ來ませ。と先に立ちて、件の茅社の背なる、樹下に退きつ、各株に尻を掛たる、幷が中に成勝通能は、勢泰等にうち向ひて、料らず野猪を射て斃されし、歡びを演まくするを、知量急に推禁めて、やよ兩哥々、目今火急の密話あり。他談は要なし、先所給へ。といへば勢泰聲を低めて、和君等いまだ悟らずや、我們今朝より這里に在りて、和君等の過るを俟しは、野

猪を射るべき爲ならず。守の密意を受まつりて、人に知らせず御身等を、遠箭にかけん爲なりき。といふに呆るゝ成勝通能、憶ずも面を注して、沈吟ずること半晌許、思難つゝ倶にいふやう、言疑ふにあらねども、我們犯せる罪あらず。然るを亦何等の故に、悄地に誅せ、と宣はせし、守の御意こそこゝろ得られね。矧又御身等は、君命を承ながら、我們を射て仆さで、反て兩箇の暴野猪を、箭頭にかけしは甚麽ぞや。と詰れば勢泰四下を見かへり、然ればとよ、其事なれ。約莫這回の殃危は、一朝のことにあらず。去歳の九月十五日に、衆少年の試撃の折、御身等兩箇の弓馬槍法、彼末朱之介に十倍せる、本事を我君賞感のあまり、高祿をもて當家に留めて、いかで家臣に倣さんとて、みづから懇命ありし時、御身等固く辭ひまつりて、留るべくもあらざりければ、守はやうやく思絕て、重て御沙汰なかりしに、近習第一の嬖臣なる、曾根見五郎平宗玄は、能を忌、才を娟み、己に優れるを歡ばざる、奸佞利口の癖なれば、悄地に守に稟すらく、彼大江杜四郎、峰張柒六兩少年は、必是隣國の、間者にこそ候はめ。其故は、君今他等に大祿を食しめて、留めまく欲し給ふを、固く辭ひまつりしは、心に一物あればなり。目今悄地に斬て棄て、禍根を斷給はずば、御後悔もや候はん、と眞實て吅き稟せば、守は半信半疑して、沈吟じつゝ宣ふやう、汝の先見、故なきにあらねど、いまだ正しき照据を得ずし

て、叨に他等を誅しなば、石見介も怨むべく、州民竝て我疎忽を、譏るもあらば、隣國の、爲にしも笑れん。誅戮の事は急ぐべからず、この義は汝に任んず。他等猶この地にあらば、陽には親しく交りて、密々に心を屬よ、他等果して隣國の、間者てふ照據あらば、其折にこそ誅すべけれ。よくせよかし、と課すれば、宗玄は忻然と、承りてぞ退出たる。是等の秘密を始より、知れるは咱等と算彌のみ。といへば知量其語を次て、然る程に和君等は、刀子紛失の故をもて、逗留久くなる隨に、又彼曾根見宗玄は、我們と共侶に、高島許交加て、和殿等の隙を窺ふに、證据とすべきよしもなく、發足近きにありと聞えしかば、他其言の錯へるを、朽惜くや思ひけん、君命と詭りて、時ならぬ鮓を贈りしは、毒を飼しにぞあらむずらん。然ればにや和殿等は、食傷の病厄あり、命も危ふかりけるに、幸にして死に至らず、當春療り果しかば、宗玄は猶懲ずまに、獍婦巨楳の手を借て、大江主を結果けんと、拙く計較よしありて、彼枸杞村の巨楳には、悄地に多く錢を取せて、哄誘したりければ、巨楳は是に勢憑きて、大江主を寃家とし怨みて、狙撃まく欲ししに、曾根見が拙策行れず、巨楳は反て狂亂して、許多人に傷けしかば、彼身は當日枸杞村なる、莊客們に撃殺され、和殿等は異なる事なく、倶に初誓の祝義を果して、他郷へ立去り給ふといふ、其義を早く聞知りたる、宗玄彌媢く思ひて、猶

敵の間者に、彼杜四郎尜六は、去歳の冬、久くなるまで立去らず、その折毎に、君の御懇命を辭ひながら、地理要害を擄ん爲なり。内應のこゝは、彼奴等は、夜々城外へ立出しは、然らば石見介も隣國へ、疑ひなし。然る故に、杜四郎の刀子紛失に假托て、と悄地に臣に告る者あり。石見介も、出て案内に立にき、屢近郊へ立出て、ろある歟、是も亦知るべからず。かくて今玆の春に至りて、杜四郎尜六は、故もなく莊客毎に、物を多く取すると聞えたり。是も亦所以あるべし。爾るに昨日臣が腹心の者、越前よりかへり來て、那里の消息を告るにより、思合せ候へば、彼杜四郎尜六は、朝倉家の近習にて、其性怜利きのみならず、武藝も人に勝れたれば、倶に間者に立られて、當國に來て八九箇月、御方の強弱地理難易を、密々に擄者なり。然ればこそあれ彼奴等は、明日當國を立去りて、越前へゆくといへり、ゆくにはあらず還るなり。倘這時を喪ひて、彼等を放ち遣り給はゞ、後大なる患を做さん。彼等が封疆を出ざる間に、弓箭に勝れし近臣に、課て途に埋伏させて、射て捕せ給はずは、御後悔もや候はん、この義を思召れずや、と呫き稟す便佞利口に、守は竟に說惑されて、驚き給ふこと大かたならず。汝の忠告其意を得たり、何人を討手に遣すべきとて、その人を擇み給ふ程に、憶ずも彼餘殃、遂に我身に及びにき。と告れば勢泰

も倶にいふやう、彼宗玄が非義の伎倆を、よく知れるは稀ならんに、咱等と算彈は始より、彼か肺肝を撈り得たるは、亦是故ある事なりかし。曾根見は浮薄の小人なり、能を忌才を媢み、人を損ふべき者なれども、彼か女兒なる窓井の方は、守の年來愛給ふ、隨一の嬖妾なれば、宗玄も亦出頭して、言聽れずといふ者なし。こゝをもて始より、彼が和殿等兩才子の、人に勝れしを忌嫌ふ、其機を早く猜ししかば、後竟に禍害を、釀することもあらん歟、と思へば算彈と謀合して、陽には彼と同意の如く、萬事隔なくものせしかば、宗玄やうやく心寛して、機密を呫く折もあれば、その大畧を知るに足れども、毒殺の事、巨櫟の事は、只我們が推量のみ、正可に聞たる事ならぬに、其を和殿等に云々と、呫き告んはさすがにて、こゝろ苦しく思ひしに、幸に免れ給ひしは、寔に自他の歡びなり。然るを昨日は思ひがけなく、我君の御意として、臣と算彈を閑室に、召よせて課するよしあり、且宣ふやう、聞くに彼大江杜四郎、峯張来六郎は、明日の旦開に當所を去りて、越前へ還るといへり。彼等は朝倉の間者にて、當國の強弱を、撈るべき爲なり、と正可に告る者あれば、搦捕せて誅するとも、けしうはあらぬ事ながら、然しては又隣國に、怨を結ぶに似て妙ならず、只其去向に埋伏して、射て殺すにしくはなし。彼等は七鹿山をうち踰て、越路へ還る、と慥に聞ぬ。彼山には木立多かり、一人是を守る時は、

萬夫も拱みがたしといふ、蜀の棧道にこそ及ざらめ、進退不便の切所多かり。汝等其頭に埋伏して、彼等が來ぬるを俟ならば、是究竟の地方なるべし。目今この義を課せん者、汝等兩箇を除くの外、又ありとしもおもほえず。勉めよや、懋めよや、と亦他事もなく仰ける。思ひがけなきことなれば、算彌も俱に胸を潰して、答稟さん所を知らず、彼宗玄が誣言なる、いはでもしるき事ながら、和殿等は、我小父なる、石見介の師とし憑し、峯張叟の外孫なり、二郎なりとは己等も、豫聞知る所にて、出處來歷分明なれば、この義を具に聞え上て、諫奉らばや、と思ひしかども、守は既に佞人に、說惑はされ給ひたる、痼疾膏肓に入りし上は、良藥諫言兩ながら、いかにして聽るべき。況我們は弱冠なり、身の程をしも揣らずして、虛實を稟解んとて、反て不測の罪を得ば、事に益なきのみならず、必亦別人に、課せて和殿等を射させ給はん、只然氣なく承まつりて、悄地に救ふにしくことあらじ、と立地に深念しつ、遞く算彌に目を注せて、事情を得させつゝ、俱に額衝て稟すやう、御諚かしこうも承り候ひぬ。彼杜四郎朶六郎等の、事の虛實は知らず候へども、何でふ尊意に背くべき、明日倘鏃に衂らずば、徒に還り候はじ、この義御心安かるべし、と齊一應稟ししかば、我君欣然と頷き給ひて、然もこそあらめ、人もや知らん。疾々立ね、といそがし給へば、軈て御前を退出にき。といふ言葉の

數繁き、露の情は一對なる、知量も亦嗟歎して、事の難義に我們は、密談しても蒼柴の、こゝろばかりにて益あらず。非如君命なればとて、罪もなく怨もなき、良友知音の和殿等を、射て殺すべき弓箭はなし。所詮彼山に俟著て、密議を告て救ふにしかじ、と稍商量を果しつゝ、今朝より這頭に俟たる甲斐に、料らずも矢傷野猪、二頭を射て斃しゝは、昨日守に誓ひ稟しゝ、正に鏃に衂の義に、稱ふを一奇といはまくのみ。嘗聞く、この山には、老たる大鹿七頭あり。こゝをもて土人、無名山の和訓によりて、七鹿山に作るもあらん、鹿をしと唱るよしは、兎道の鹿飛の例に由るのみ。其鹿は人を害せず、又這山に暴野猪多かり、丼は究めて怕るべし、と豫聞しに違ざりき、と解を勢秦推禁めて、他談は要なし、時もや移らん。やよ大江主峰張生、蚤く這山を下り果て、討手の征箭を免れ給へや。よとく〳〵。といそがしたる、鬼神不測の一椿事に、成勝と通能は、聞く事毎に駭嘆じて、呆るゝ者半晌許、愀然として倶にいふやう、身に覺なき枉津日は、何等の神の祟ぞや。倘和君達徹りせば、我們兩箇の白骨は、豺狼にしも喫殘されて、這頭の草を肥さんのみ。咋は文武の詞友たり、今は命の親とも、仰ぐに猶餘りある、洪恩德義は千萬言もて、謝するとも盡すべからず。願ふは異日再會して、報恩の時を俟んのみ。今は餘談に暇なし、然らば教に從ふて、早く這山をうち踰て、他領へ走らば安かりて

ん。猶心許なきは、御身等の上なりかし。非除鏃に衂りしとても、己等の首を得捕らで、徒に還りまゐり給はゞ、罪得がましき所爲ならずや。と主僕齊一阽問ふを、勢泰知量聞あへず、其義も豫商量したり。我們這里よりかへりまゐりて、反命しまつらんをり、首級は甚麼、と問給はゞ、然ゝ候、杜四郎と柒六は、岨路傳ひに來にける折、射て仆し候へば、彼身は怺へず、幾百丈なる、谷底へ滾落にき、この故に他等兩箇の、首は得捕らず候へども、必や嵒に碎けて、骨も續かずなりにけん、別に仔細は候はず、と稟さば障りなかるべし。是等のことに掛念せで、とく／＼影を躱し給へ、やよ疾々。といそがする、人の誠に成勝通能、盡ぬ詞も火急の別路、共侶に身を起す折から、後に繁き樹立の蔭より、咄と揚ける鬨聲、谺に响きて、夥しく、山も頽るゝ可なれば、勢泰知量、成勝通能、倶に吽嗟と驚きて、其方を仡と見かへれば、顯れ出來る緝捕の頭人、是則別人ならず、曾根見五郎平宗玄なり。頭には鐵粉磨に、鐵輪打せし、戰笠を戴きたる、身には勒肚戰外套、朱韐の兩刀苛めしく、縹纁純子の野袴を、鷗尻に穿做しつ、山路の嶮岨に豢熟たる、望月の暴駒に、鑣子を掛て腴にうち跨り、手には角弓三羽の征箭、握り持たる左右に從ふ、其隊の雜兵三十餘名、彼字六と可平を、緊しく結扭りつ牽居て、惴雄の壯佼每、十手捕繩捍棒叉殳、各手々に打振々々、前後の路を立塞ぎて、漏さじとてぞ捕卷たる。


殺伐を恣ふして
奸佞四賢士を
搦捕まく


ありかく
みちよし

當下宗玄聲高やかに、やをれ反賊勢泰知量、若們君命を承ながら、敵方に內應して、機密を洩す事もやあらん、と豫思ひしよしもあれば、我又守に聞え上て、隊兵多く假し給はり、迹を跟つゝ陟り來にける、路に石見介が若黨字六と、奴隷可平を生捕りて、其來歷を責問ひしに、我推量に多く違はず、杜四郎柒六が、逃脚の疾きはさらなり、若們もこの山に、必在んと思ひしかば、嶮岨を厭はず急ぎ來て、那里の茂林の樹蔭より、其爲體を張ひしに、若們果して貳あり、射て捕るべき其兩敵と、幾の程に歟通同して、密談數刻に及びしを、反逆ならずと孰歟いふべき。天罰今は脫るゝ路なし、杜四郎柒六と、倶に馬前に跪きて、繩を受よ。と呼はれば、勢泰知量怒に得堪ず、弓箭搔拿り疾視て、君を惑はす奸惡人、賢を憎み才を媢みて、舌の劍に人を損ふ、當家の蠱毒、不忠の本性、人皆是を知るといへども、或は祿の爲に口を鉗み、或は其職にあらざれば、守に訴るによしなくて、今這時に及べるは、其身の僥幸ならんに、雜兵さへに斷催し來て、君を非道に陷れまく、欲するはいかにぞや。大江冢張兩才子は、高嶋生に舊緣ある、出處來歷正しきを、敵の間者といひ做したる、その罪死刑に當るを知らずや。今はしも緩しがたかり、君の爲に奸を鋤く、勢泰知量が忠義の手はじめ、今その頭を擊落さん。开里な退そ。といはせも果ず、宗玄眼を瞋して、やをれ兵毎、腮嚼せな。網裏なる四箇の罪人

漏すな、搦捕らずや。と劇しき下知にその隊の雜兵、承りぬ。と應も果ず、倶に十手を閃めかして、組んと找むを勢泰知量、持たる弓にて撃仆し、敲き伏つゝ挑みたる、然しも劇しき爭に、成勝と通能は、料らざりける再度の窮阨、今宗玄を見て怨に堪ねど、一言半句の問答に、違あるべき時宜ならねば、群立競ふ雜兵を、當るに儘せて投逬す、白打の精妙向ふに前なく、輒路を開せて、透もあらば宗玄に、組んと思ふ程しもあらせず、曾根見は馬上に、弓に箭刺ふて、克彎固めて瞟と射る。箭局狂ふて一箇の雜兵、項を射られて仆れける。既にして宗玄は、一の箭を射損ねて、反て躬方を傷りしかば、心慌て第二の箭を、刺んとしぬる程に、長橋倭太郎勢泰は、競ふ緝捕の雜兵を、中るに儘して撃散せば、衆只噎叫ぶのみ、重て蒐る者もなし。其間に勢泰は、弓箭を取て瞟と射る。那時遲し、這時速し、寃錯はず宗玄は、左の肩尖篦深く射られて、弓箭を捨つゝ仰反て、馬より撻と墜しかば、是にぞ駭く緝捕の衆兵、右往左往き亂噪ぐを、威勢剛たる大江峰張、象船知量共侶に、敵の捍棒曳手繰り、息をも艱れず撃惱せば、衆兵いよ〳〵度を失ふて、或は深谷に滾落て、死活も知らずなるもあり、その他は山脚へ崩を衝て、落て身を傷るも多かり。开が中に猶幸に、辛く命を免れて、當日城内へ還りしは、五六名に過ずといふ、この事後に聞えけり。是より先に勢泰は、曾根見宗玄を射て落して、起

んと蠢く程しもあらせず、趕蒐りつ頭髻を抓て、地上に楚と推伏て、怒れる聲高やかに、やをれ宗玄、若が奸惡、今復數まへいふに及ばず。大江峰張雨才子は、其名這里へも聞えたる、古人峰張先生の親族にて、高島主に由緣あり、出處來歷分明なるに、敵の間者といひ做して、守を惑し奉る、其罪死刑に當れども、彼儘にして在るならば、猶幸に免れんに、我們をしも疑ふて、みづから跡を跟て來て、搦捕まく欲しぬる、奸曲既に極れり。我們素より不忠を存ぜず、大江峰張雨才子を、救ふは守の御愆を、悄地に補奉る、是則忠なり義なり。然れども事の敗に及びて、亦今さらにせん術なし。祿を棄、命を棄て、君の爲に奸を鋤く、勢泰か鯁義の刀尖、思知るや。と罵り責て、腰なる短刀拔出しつ、宗玄の項より、吭を掛て閃然と刺す、刀尖土中に入るまでに、鮮血潑と濆りて、并が儘息は絕にけり。浩處に象船算彌、大江峰張雨主僕は、逃る絹捕の衆兵を、追捨てかへり來つ、今この事の爲體に、主僕吐嗟と驚きて、走近づく聲もひとしく、やよ惴りしな、長橋生。宗玄奸唐なりといへども、亦是守の使ならずや。そを我們の故をもて、卒爾に撃果しては、御身等も罪免れがたけん。この義甚麼。と悔問ふを、知量急に推禁めて、爾思るゝは理りなれども、愚意も長橋と異ならず。宗玄守の御使なりとも、行ふ所は正路にあらず。然るを今撃果さずば、彼が爲に征せらて、俱に惡人の

手に死なん。こは已ことを得ざる而已。といふ間に勢泰は、刃の鮮血を推拭ふて、开頭に牽居置れたる、高島の若黨、勾津字六と、奴隷可平の索を斫棄て、嘆息しつゝ却いふやう、汝等薀く、城内へ走りかへりて、我等が爲に小父に告よ。今日算彌と共侶に、大江峰張を射て殺さず、反て悄地に拯ひしは、亦是君の御愆を、補ひまつる爲なれども、其事竟に合期せず、曾根見宗玄に跟られて、多勢を敵手に血戰しつゝ、射て宗玄を殪しゝは、只是一時の怒に儘して、私の怨に報ふにあらず。宗玄は佞人なり、守を惑し奉る、奸虐既に極れり。今他をしも撃ずもあらば、孰の時に惡を除ん。我と算彌が本意なれども、君の仰に由るにあらねば、倶に罪を免れがたかり。この故に自殺して、身はこの山の土になりてん。算彌も同じ意なるべし。我と算彌は幸あらで、父母早く世を去りて、胞兄弟もなく親族寡し。年來小父に後見せられて、成長たるのみならず、兵法武藝何くれとなく、教を承し甲斐もあらで、小父さへ連累せられん歟、と思へばなき身の後までも、心苦しき涯りなれども、今はしもせん術なし。この意を備に傳よかし。といひつゝ又短刀をもて、鬢の毛を剪拿りて、そを鼻紙に卷籠て、卒とて渡せば知量も、嗟嘆に堪ず倶にいふやう、我も亦幼稚き時より、高嶋大人に教育せられて、今日に至りしに、其報恩の折もなく、忠義の本意も空となる、身の薄命を爭何せん。汝等宿所へ疾かへりて、高

嶋大人に言傳せよ。といひつゝ小指を二三ッ分許、噬斫りつ流るゝ鮮血と、倶に懐紙に裹て、是を字六に遞與して、又いふやう、汝我們兩箇の爲に、大人に言傳致すとも、照據なくば疑れん。長橋の鬢の毛も、又我小指も肉身なれば、末期の像見と思はるべし。約莫今日の禍事は、汝等の知る所、亦今さらにいふにしも及ばず。こゝろ得たる歟。と說示しつゝ、腰に吊たる藥籠より、高嶋家傳の仙丹を、撮出しつ、小指の疵に、塗れば其血止りて、疼痛もあらず做れるが像し。當下長橋勢泰は、成勝通能にうち向ひて、兩才子是までの、志は竭たり、疾く他鄉へ走り給へ。我們主君の御爲に、今奸惡を除くといへども、更に違命の罪を怕れて、倶に他鄉に亡命せば、忠も不忠といはれんのみ。既に覺悟は極めたり。暇稟す。といひも得果ず、程遠からぬ千仭の谷へ、投るが像く身を墜せば、知量も亦後れじとて、倶に深谷へ陷りける。是にぞ驚く成勝通能、又字六も可平も、吐嗟とばかり呆れ惑ふて、立て見、居て見指覗く、底最闇き千仭の谷へ、落たる人を譬れば、索の絕たる吊桶に似たり、孰かよく是を拯はん。唯彌陀佛彌陀佛、と唱名の外なかりける。そが中に成勝通能は、惆然として嗟歎に勝ず、姑且して倶にいふやう、義なる哉長橋象船、倘少年にして烈氏の風あり。善に與する事、水の低きに就くが如く、惡を憎む事、頭の蜂を拂ふに似たり。難に臨みて苟も辭せず、身を殺していよ〳〵忠

なり、在昔唐山漢楚の時、彼韓信に路を誨し、蘆中人の義俠といふとも、豈這兩義士に及んや。惜むべし〱。といひつゝ字六等を見かへりて、通能先いひけるやう、汝等這里に在りても益なし。疾城内に還りゆきて、高島主に注進せよ。言後れて告ずもあらば、彼人是非の境に惑ふて、連係の罪を免れがたけん。とく〱ゆきね。と急せば、成勝も倶にいふやう、長橋象船の今日の所行は、忠義の爲といひながら、原是我們の死を救ふにあり。然るを彼兩義士は、身を殺して潔き、終をしも示されしに、我們主僕は倶に得死なで、這儘他鄕へ走りなば、信義兩ながら、缺るに似たれど、いかにせん、舊里には、親もあり、胞兄弟あり。孝は百行の本にして、亦唯是より重きはなし。今交遊の爲にのみ、死生を隨意做しがたきは、實に是等の故なるを、高島主には知られやせん、いかでこの義を傳よかし。といはれて字六可平は、額を衝つゝ答るやう、御意承り候ひぬ。嚮に後れて來ぬる程、曾根見主に撞見して、情意もいはせず搦捕せて、這頭へ牽れたる時は、生たる心地せざりしに、各位に救れて、歡ぶ甲斐も愁に、曾根見主さへ衆兵さへ、撃果されて臍、長橋象船兩郎君は、這里の溪水に身を投給ふ、是等の事の大變を、早く主人に告ずもあらば、後難測がたかるべし、とは思ひ候へども、各位の御先途を、見果ずして退りなば、主人の本意に違に似たり。進退谷り候ひぬ。といへば亦可平も、

汝等は長橋象船の、遺言をしも憑れしに、一霎時も這里に猶豫することかは。我們の上はこゝろ安かれ、山を下りて他郷へ走らん。疾いなずや。と焦燥ば、字六可不辭ふに由なく、拱手をしつゝ身を起して、しからんには是非に及ばず、御意に從ひ奉らん。おん別れこそ惜けれ。といへば通能聲苛立て、汗はこゝろ得たり、疾ゆきね。ゆきね〳〵と惜立れば、字六可不應をしつゝ、故來し山路へ下りゆく、背影の見えずなるまで、這方の主僕は目送果て、憶ず嗟歎したりける。姑且して成勝は、通能と談ずるやう、長橋象船兩義士は、我們の死を救ひしより、彼身を潔くせんとて、倶に溪谷に身を投しに、其亡骸だも見ることなく、這儘にして山を下らば、通能沈情義兩ながら恥ざらんや。能ぬまでも底を探りて、索ねて見ずや。誰何ぞや。といへば通能吟じて、然なり、古語に、孝子は巖墻の下に不立といへり。親胞兄弟の爲にしも、身に大事を帶ながら、交遊一時の義の爲に、危きを忘るゝは、好しからぬ所爲なれども、宜ふ所宜に所以あり。藤蔓などに携りて、下らるゝ便宜もあらん歟、底の深さを揣りて見てん、卒とばかりに共侶に、岨の頭に立寄る折から、怪むべし、谷底より、白雲忽焉と起立て、這方へ靡くと見る程に、犢兒に等き大鹿二頭、四月の今もまだ解ぬ、角に各人を掛て、跳騰りつ突然と、いで

來ぬると見る隨に、主僕の間に掛たる兩箇を、振捨つ、驀地に、土地の茅社の邊へ、ゆく歟と思へば搔消如く、忽地見えずなりにける。然ば成勝通能は、目今這奇異神妙に、吐嗟とばかり驚き避けて、眼を定めて佗と見れば、彼大鹿の角に掛りて、深き谷底より登り來ぬる、其人は是別人ならず、長橋倭太郎勢泰と、象船算彌知量なれば、這方の主僕は怡悅に堪ず、こは〳〵甚麽。と立よりて、扶起さまく欲するに、勢泰も知量も、倶に溪水に濡れもせず、身には些の疵もなけれど、既に息絶たれば、成勝と通能は、撲傷の氣絕ならんと猜して、倶に師傳の覺ある、白打の活を入れしかば、其術に答る勢泰知量、云とばかりに息出て、忽地我に還りつゝ共侶に身を起して、先四下を得と見つ、又成勝と通能を、見つゝ齊一胆を潰して、抑玆は那里ぞや。我們兩箇は千仭の谷へ、落て死せりと思ひしに、夢歟現歟。然るにても、大江峰張兩賢兄に、救れたる歟こゝろ得ね。と倶に訝る聲細やかに、猶つら〳〵と見かへれば、成勝通能含笑て、やよや長橋象船主、心地正可になりたる歟。和殿等俠義心烈もて、身を溪谷に放下しゝ時、留る暇なかりしかば、うち歎くのみ、術もなく、高島よりおこされし、兩箇の伴當字六と、可平には身の暇を取らせて、疾く宿所へ返遣し、却我們は、和殿等の、生死も知らず、亡骸を、見も果ずして开が儘に、他鄉へいなんはさすがにて、非除千仭の溪底なりとも、下らるゝ

便宜得欲、と思ふ折から箇樣々々、如此々々の奇異ありて、谷の中より立昇る、白雲と共侶に、犢兒に等き大鹿二頭、和殿等を角にうち掛て、谷より閃りと跳出て、主等を玆に振捨て、搔消如く見えずなりにき。恁る神助のあればこそ、我們兩箇は手脚を勞せず、和殿等輙くかへり來て、且再生の歡びあり。憶ふに和殿等人に勝れし、鯁義心烈を憐給ふ、土地善神の擁護なる歟、七鹿山の名虚しからずといはまし。寔に芽出たし〱。と迭代りに語を紹て、言詳に說示せば、勢泰知量聞果て、はじめて夢の覺たる如く、いまだ答る所を知らず。權且して共侶に、跪きつゝ土地の、茅社の方にうち向ひて、合掌默禱念じ果て、却勢泰がいふやう、我們命運いまだ竭ず、神と人とに帮助られて、死なざることを得たれども、這儲城内に還り參らば、忠も不忠と誣られて、縛首をや刎られん。然ればとて今日の事實を、具に訴稟さずば、俺小父さへ疑れて、連累の罪を免れがたけん。進退惟谷りぬ。といへば知量も沈吟じて、我們かの折溪底の、嵒に碎けて命終らば、今の憂苦はなからんに、慭に神の祐けによりて、生て甲斐なき身の薄命、事の難義はいふまでもあらねど、事實を訴稟さんとて、阿容々々とかへり參らば、漫に死地に就んのみ、孰歟思慮ある者といはん。高嶋大人のことはしも、我們が爲に疑るゝとも、彼字六可平が、稟すよしをもていひ釋れなば、連係せらるべくもあらず。そを女々

しく云云と、千遍思ふとも、今は甲斐なし、只速に他郷へ避て、時の至るを俟んのみ。といへば勢泰點頭て、开は理ある言ながら、我們は世間廣からず。當國を除くの外、他郷に親族知己の友なし。那里を投て身を措んや。といふを成勝うち聞て、兩賢兄難を避て、他郷に時を俟んとならば、安藝の治比に赴き給へ。我父大江弘元は、物數ならぬ小名なれども、善に與し、賢を需めて、一藝ある者としいへば、養ずといふ者なし。且我兄少輔太郎音就、二郎基綱も、父に劣らぬ志、ありとし豫聞知りぬ。已治比へ紹介せば、歡びて留められん。他處を索ることかは。といへば道能も倶にいふやう、事の便宜はそれのみならで、俺兄十三屋九四郎は、浪速に名たゝる俠者にて、善に與して死をだも辭せず、生平に弱を助け强を拗ぐ、下高者で候へば、和君等先那里に赴きて、我兄の帮助を借りて、水路を安藝へ渡り給はゞ、路の費を省くべし。なれども九四郎は、當春安藝へ赴くべし、と豫いはれし事もあれば、和君等其時に後れて、九四郎家に在らずとも、乾兒六市四摠あり、开が單は必在らん。彼等も亦然る者なれば、事宜く相計ふべし。この義に任せ給へかし。といはれて歡ぶ勢泰知量、憶ず倶に額を拊て、开は幸甚し。いかで教に憑らまく欲す。然りとて這里にて長詮議して、再度の追隊の來ぬるに逢はゞ、後悔其里に達がたけん。先這山を下りてこそ。といふに主僕は諾なひて、卒とて倶

に身を起しつゝ、土地の茅社の御前に、跪きつゝ合掌して、去向の無異をぞ祈りける。

第四十八回

僞兵を率て健宗好純を襲ふ
醉夢を驚して良臣玉石を辨ず

前回いまだ磬さゞりける、七鹿山の段末を、復說、大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能は、二度の窮阨を相脫れて、長橋倭太郎勢泰、象船算彌知量等と、倶に土地善神を默禱し果て、退きて談ずるやう、我們是より越路に走らば、再度の追隊逼來て、難義に及ぶ事もやあらん。早く路を取替て、美濃尾張の方にゆかば、必後安かるべし。と呟く成勝と共侶に、通能も亦いふやう、曩に這山脚の茶博士の、不問自語に聞知りぬ。この山より美濃へ出る、捷徑のあるならずや。和君等それを知りたる歟。と問れて勢泰知量は、應難つゝ沈吟じて、否、我們も這山を、前より過りしことなければ、其義はいまだ聞知らず。這里歟那里歟、とばかりに、思難つゝありける程に、奇なる哉兩箇の大鹿、土地の茅社の頭より、忽然と出て來つ、敢亦人を怕れず、這少年等の先に立て、徐々として行も得やらず、屢後方を見かへり〳〵、我を導く者に似たれ

ば、成勝亟く意衷に悟りて、自餘の三人に叫くやう、彼は正しく神鹿にて、今我們の爲にしも、郷導を做すにやあらん。といへば通能勢泰知量、共侶に歡び見て、寔に然なり、然なるべし。嚮には谷雲の奇異ありて、愿云勢泰知量の、必死を救ひしも彼鹿ならん。疑ずして從ひゆかば、便宜を得ることなからずやとて、倶に鹿のゆくに任すれば、鹿は成勝通能等の、初來にける山脚の方に、下りゆく程十八九町、左に幽けき細路あり。鹿は路を左に取て、この細路に入りしかば、成勝通能勢泰知量、玆なりけり、と皆こゝろ得て、丌が儘從ひゆく程に、實に是鳥路熊徑、樹木森然と枝を交えて、瓢形の日光に疎く、荆棘離々と伏累りて、人の脚を捉らまくす。實に是一步運ぶも安からず。然ればとて已べきにあらねば、倶に辛くして、從ひゆく程に、終日にして饑渴を覺ず。是日申牌過る左側に、果して、一村落に來にけり。當下件の兩箇の鹿は、いつの程に歟在らずなりて、敢亦見ることなければ、扨は、とばかり少年等は、ます〳〵神の祐を感じて、倶に踵を旋らして、故來し路を再拜す。姑且して長橋勢泰は、象船知量に向ひていふやう、鹿の里近き山に在る者は、秋田圃を損ふ故に、人射て捉るは利益あり。或は又獵者の、野ともいはず山ともいはず、猪まれ鹿まれ射て殺す、丌は第一の殺生なれども、生活ならば爭何はせん。單その人ならぬ者、一時の興を取らんとて、人の爲に憂を做さゞる、禽獸を射

て捉るは、寔に無益の殺生なりき。初己もこの義を思はず、紈袴の暇ある折は、畢竟郊外に獵消して、鹿を射て身の樂に、做したることもあるものを、今日は料らず神鹿に、必死の厄を救れて、この活路さへ敎らる。こは我們が果報にあらず、大江峰張兩賢兄の、人に勝れし忠信孝義の、餘慶あること疑ひなしとて、倶に後悔したりける。作者曰、本集第三板卷の六の十一の端像に、長橋象船兩少年が、鹿を刺まくする圖出たり。そはこの段、勢泰知量が、後悔の心操を、早く寫し出しのみ。こゝにいふ神鹿にはあらず、看官その用意を思ふべし。浩處に、一箇の莊客、前面より來にければ、通能急に呼留めて、この里の名を問ふに、莊客答て、這里は昔より世にしるき、美濃と近江の境なる、宿物語の里なり。といひ捨て走去けり。是により成勝等は、這村稍盡處に最寂たる、客店に宿を需るに、勢泰と知量は、程遠からぬ鄕士の子兒の、漫に出て憶ずも、獵消したりといひ做しつ。又成勝通能は、彼等と相識旅客にて、憶ずも前程、行逢しと說瞞しかば、一路人の相應しからぬも、逆旅主人等は疑はず。然ば四箇の少年は、この寂寞たる宿を得て、外に合宿の旅客なければ、纔にこゝろを安くしつ、倶に湯浴し夕膳を果す程に、長き四月の天ながら、既にして日は暮けり。當下成勝通能は、孤燈の下に座を占て、治比と住吉へ贈るべき、紹介の書翰をものして、倶に勒肚の財嚢より、圓金各五兩を出して、件の書翰共侶に、是を勢泰知量に與へていふやう、和殿等周防へ赴くに、盤纏なくばあるべからず。こ

は些少に候へども、路の資にし給へ。といふを勢泰知量は、聞も訖らず推戻して、其は思ひがけもなき、我們も亦懐に、此の貯蓄なきにあらず。嚮に君命とはいひながら、難義の討手を承て、倶に宿所を出る時、倘夙念の隨にならで、歸城しがたき事もあらば、金銀こそ第一の、たのもし人なるべけれと、豫思ひしよしもあれば、有ん涯りを掻攫ひて、懐にしたるなり。是見給へ。といひつゝも、倶に懐を掻撈て、拿出して見する金、此彼等しく十餘兩あり。成勝通能是を見て、這少年等の遠慮あるを、一霎時感歎したりける。其が中に成勝は、又勢泰等に向ひていふやう、和殿等遠き思はかりありて、近き憂を資るまでに、各盤纏に足といふとも、周防にゆきて逗留の程、財用竭なば不便ならん。我們は父兄の恩惠によりて、一二三稔の盤纏あり。薄義なれどもこの十金を、枉て納め給へといふ。その言の切なるに、通能も云云と、連りに薦めて已ざれば、勢泰と知量は、困じて倶に辭ふに由なく、其五金を受納めて、殘る五金をかへしていふやう、芳意默止がたければ、教に從ひ奉る、這五金にて物足れり。高恩徳義は千萬言もて、謝するとも盡しがたかり。餘財は納め給へとて、亦受べくもあらざれば、成勝と通能は、強辭て多辯せず、各金子を拿納めて、猶も餘談に及ぶ程に、勢泰と知量は、當國美濃より尾張に出で、伊勢路を過りて捷徑を、索めて住吉に迫んといふ。亦成勝と通能は、是

より岐岨路に杖を薦めて、東國に遊歴すべしとて、迭に去向を定め果て、倶に枕に就きしかど、然しも餘波の惜まれて、睡らんとするにいもねられず。勢泰と知量は、捨し命を又さらに、神の祐に甦されても、猶端なき世を不樂て、己が往方を思ふにも、親に等しき高島の、高き恩を空にして、倘連累の罪にしも、誣らるゝ事あらん歟、と思ふ心をいへばえに、いはねば胸の苦しきに、嚮に劇しき戰ひの、撲傷にやありつらん、勢泰も知量も、腕痛みて堪がたければ、倶に師傳の仙丹を、唾に解て塗するに、其疼痛拭ふがごとく、立地に愈てけり。誠なる哉、高島祖傳の仙丹は、同藩の朋輩たりとも、敢佻々しく是を授けず。この故にその妙藥を、聞知る者すら稀なるに、勢泰は、石見介の、侄なるを、いへばさらなり、知量は弟子にて、其心操衆に、勝れて老實なる故に、好純早くこの兩少年に、彼仙丹を授けたり。こゝをもて知量は、嚮に小指を噬斫し時、血さへ痛を覺ずなりしは、彼仙丹の卽功にぞありける。閒話休題。然る程に、成勝通能、勢泰知量は、夏の天早く明る時候、遽しく起出て、朝飯を果す程に、勢泰と知量は、被籠の鎖衫、甲手脛盾を脫袪て、行囊にせまく欲するに、幸に成勝通能の、袱に餘りありじかば、そを借て包などす。この他雨衣脚衣菅笠は、路次にて買拿んとて、各准備整ひしかば、通能則勢泰と共侶に、逆旅主人を召よせて、房錢を還す程に、宿の炊婢がもて來ぬる、

晝の儲の裹飯を、各手に〳〵受拿りて、袂にしつゝ立出て、草鞋穿締、うち連立て、ゆくこといまだ遠からず、尾張に赴く岐路あり。建し傍示に分明なれば、皆共侶に歩を駐めて、迭に再會を契るのみ。世は定なき雲水の、西と東へ別の口誼も、言語寡く惟々戀憐たる、袂を玆に分ちけり。案下某生再說。彼日觀音寺の城内なる、高島石見介好純の、西郭の宿所には、今朝しも大江峯張兩主僕の、越路へとて辭去りし時、石見介は他等が爲に、去歲の秋より預り置たる、君侯恩賜の兩種なる、沙金白布の韓櫃を、兩個の奴隷に舁せつゝ、早く本館に出仕して、曾根見五郎平宗玄に、對面せまく欲するに、宗玄は恙ありて、出仕せずと聞えしかば、只得自餘の近習を請ふて、則告稟すらく、守には豫知召されし、臣が宿所に寓居の旅客、大江杜四郎成勝、峯張柒六郎通能は、今朝しも越路へ赴くとて、倶に立去候ひき。就きて去歲の秋九月十五日に、彼等へ恩賜の二種は、最忝く受まつるものから、旅にしあれば携て、他鄕へは赴きがたかり。異日かへり參るまでとて、貽し置候ひき。然れども彼等が再來ぬるは、多く歲月をや經ぬべからん、その折まで彼二種を、寶庫に藏め措まく欲す、所以に持參仕りぬ。この義を聞え上給はせ。といふに近習はこゝろ得て、軈奧へぞ赴きける。爾る程に石見介は、尙その席に居り、二たび近習の出て來ぬるを、俟こと約莫半晌許。やうやくにして件の近習は、

單奥より出て來つ、石見介に向ひていふやう、和殿の稟されし、事の趣きを、則守に聞え上しに、守の御氣色宜しからず、且宣ふやう、彼大江杜四郎、峰張桀六郎の事はしも、我始より、石見介に命ずらく、彼等他鄕へ立去をり、其前日に告よといひしを、石見介は、何と聞たるやらん。立去りて後に告るは、抑亦等閑ならずや。況去歳の秋、彼少年等に、賜し御物を、自由に儘し貽置ば、他等が當城内に在りし時、聞え上て御旨を、伺奉るべき該なるに、そも亦他等が去りし後、押てかへし納まくす。其不敬甚し。給と云恰といひ、石見介の臆念、こゝろ得がたし。早く宿所に退て、後の御沙汰を俟べき者なり。又彼杜四郎桀六は、我賜ものを用なしとて、貽置たらんには、今亦孰に與ふべき。近習等目錄に合し受取て、遺なく有司に遞與べし、と仰られ候ひき。と告るを石見介謹み承て、且答稟すやう、御諚畏うも承り候ひぬ。但杜四郎桀六が、今朝發足の一條は、昨日曾根見五郎平に、云々と報しかば、既御聞に入りつらん、と思ひしに似ず、等閑の、おん咎を承まつりて、殆迷惑仕りぬ。又杜四郎桀六が、彼御物を貽し置んとて、臣等に意衷を告げ候ひしは、僅に昨宵の事なれば、稟上るに遑なく、目今に暨べるなり。聊も等閑にて、遲の罪を忘れたるに候はず。然ればとて身の失を、飾りて陳じ稟すにあらず。和殿この義をこゝろ得て、倘又御沙汰あらんをり、術よく稟し給ひね

かし。といひ果て身を起しつゝ、舁し來れる韓櫃を、件の席に舁よせて、目錄と共侶に、彼沙金白布を、一箇々々に出す程に、自餘の近習も出て來つ、好純に會釋して、始の近習を帮助つつ、東西皆受取果しかば、石見介は兩箇の奴隷に、空櫃をのみ舁せてぞ、驛宿所にかへり來て、妻の長江に云々と、君所の首尾を呫き示せば、長江は額を揮しつゝ、後の御沙汰は左やあらん、右やあらんと思ふのみ、慰難て立まくするを、好純急に喚禁めて、本月はいはでもしるき、我母大人の祥月にて、今日は忌辰に丁り給へば、墓參りすべかるに、思ひがけなき障りいで來て、守の御氣色宜からねば、漫に外へ出がたかり。渾家代りて參詣せよ。そも猶外目脈はしければ、轎子こそよかゝめれ。伴には老僕を遣さん。疾々といそがせば、長江は異議なく退きて、身裝さへ時を移さず、衣裳を整へなどする程に、旣に亭午になりしかば、主僕遽しく晝饌を、果して後門より出てゆく。長江の伴當には、老僕某甲と、纔に一箇の腰下婢而已、兩個の奴隷に轎子を、舁せて香華院へいそぎけり。爾程に高島の宿所には、主の女房を始にて、男女多く出盡して、留守には一兩個なる、婢妾等のみ侍りたり。石見介は徒然に堪ず、嚮には思ひがけもなく、守の御不審を承まつりしは、そも曾根見宗丞の、讒なる歟、と猜しても、言に出さねば胆向ふ、心鬱々と樂まず、風暖かき四月の天も、秋歟とぞ思ふ身の憂患を遣難て只

獨坐居。若葉に暗き夏樹立、庭の筧の音絶て、盆池に浮む紅鯉すら、人に狎ては人をしも、怕ぬ者をいかなれば、君臣朋友心隔、世の亂れこそ如意ならね、と獨語ても訪ふ人ぞなき、長き日銷し今日ばかり、常より長しと思ひたる。是日晡時ばかりに、慌しく來る者あり。と見れば是別人ならず、今朝未明に吩咐て、大江峰張主僕の爲に、跟綵に伴せよとて、越路の方へ遣したる、若黨勾津字六と、奴隷可平にぞありける。人に打擲せられし歟、頭髪亂れ衣も破れて、面色も亦平ならず。倶に惴たる聲音にて、悄地に報稟すべき、一大事こそ候なれ。といふに石見介驚きながら、先四下を見かへりて、且その所以を諮れば、字六のいふやう、嚮には大爺の仰のまに〱、小人等大江峰張兩客人に、倶して七鹿山を踰るをり、思ひがけなく小人等は、曾根見主に生拘れ、巓の方に牽れしより、說盡されぬ禍鬼起りて、事大變に及びたる、首をいへば箇樣々々、尾は亦如此々々なりとて、長橋倭太郎勢泰と、象船算彌知量が、君命により彼山にて、大江峰張兩主僕を、射て捕るべきを射まく欲せず、悄地に機密を告る折から、又彼曾根見宗玄が、隊兵多く從へて、山路迥に登り來て、既に闚窺たりしより、長橋象船兩少年も、逆心ありと罵りて、隊勢を進め捕稠て、搦捕まくしてければ、四箇の少年怒に得堪ず、多勢を敵手に戰ふ程に、曾根見は兵勢始に似ず、長橋倭太郎勢泰に、窮所を射られて命を喪ひ、隊の

雜兵は散々に、死活も知らずなりし事、爾後長橋象船は、意衷を遺なく說盡して、君の仰に違ふといへども、罪なき兩才子を殺さゞるは、只是守の御愆を、補ひまつる爲なるに、宗玄が奸虐なる、逼りて玆に及びし上は、宿念竟に畫餅になりて、今さらかへるに家もなく、立去るに路もなし。是までなり、とばかりに、長橋象船共侶に、千仭の谷へ身を投て、骸も得見えずなりし事、その折大江峰張のいひつることの顚末まで、可平も共侶に、其漏れたるを補ひて、相報る者半晌許。言果て字六は、彼折勢泰知量が、死後の照据にとて渡したる、彼鬢の毛と小指の端を、懷より搔撈出して、开が儘主にぞまゐらせける。却この段の條々は、近く前回に見えたれば、看官承知の事なれども、今亦こゝに其崖略を、敢いはざることを得ず。是等を作者の雞肋筆とやいはまし。閒話休題。當下石見介好純は、今字六可平等が、報るを遺なく聞果て、愀然として嗟歎に堪ず。叉きたる手を解きて、先勢泰の鬢の毛と、知量の小指の端を、見つゝ傍に閣きて、思ひきや、倭太郎算彌は、忠義の宿意を果し得ず、身を溪水に淪んとは。宗玄既に擊れたりとも、その隊兵等の免れかへりて、告訴する者さぞあらん。曾根見は當家の嬖臣にて、且弟伍六郎健宗あり。それにも優たる窓井の方あり。我今他等に先だちて、大江峰張の出處來歷、幷に倭太郎算彌等の、心烈自殺の趣きを、疾く訴稟さずは、彼等が爲に誣られ

て、我さへ守の御疑ひを、承まつる事もあらん、とは思へどもいかにせん、嚮には思ひがけもなく、守の御不審により籠居て、後の御沙汰を俟折なれば、叨に御館へ參りがたかり。老臣多賀政朝主と、一口鬼大夫は、倶に忠義の本性にて、我と心知りなれば、疾くこの義を告知らせて、彼帮助を借るにあらずば、後悔其首に達がたからん。字六は我爲に、多賀主へ走りゆきて、七鹿山の顚末を、見聞し如く悄地に告よ。又可平は一口へ、使して其いふ所、字六と同じかるべし。いで〳〵と臂近なる、料紙硯を曳よせて、墨磨流す走書、筆の秋毛も牡鹿の角の、束の間にして密書二通を、寫し果つゝ甲乙共に、分ち封じて書筒兩箇へ、藏めて卒とて取らすれば、字六と可平は、應をしつゝ膝を找めて、各件の書筒を、受取りつ遽しく、外面投て出にけり。爾程に石見介は、心の憂遣るかたもなき、勢泰知量兩義烈の、彼死を惜むに餘りある、大江峰張兩主僕の、往方甚麼、と想像る、四月の天の薄雲り、越かた遠き牡鵑、幽に渡る聲聞けば、不如歸と鳴と歎いへど、妻の長江は生憎に、まだ香華院よりかへり來ず、俟とはなしに日は落て、黃昏近くなりし時候、人や來つらん、玄關の、方に呼門聲すなり。石見介是を聞て、折惡く老僕若黨、奴隸まで皆出盡して、客を迎る人あらず。然ればとて婢女每を、執接には出しがたかり。我のみならで、誰かはある、と單語つゝ、應をしつゝ、矮屛風に掛たりける、袴

を穿つ遽しく、中刀を腰にして、走出つゝ玄關なる、障子を斜辣哩と曳開れば、思ひがけなき緝捕の雜兵、御諚ぞふ。と呼はりて、左右齊一組んと挑むを、石見介は、こは甚麼、と驚きながら身を諭して、脚を窠ふて右ひだりへ、一丈餘り投退れば、續て競ふ衆兵を、右に左に受駐て、息をも艱れず投伏々々、怒に堪ざる聲高やかに、若等は是何人にて、事の仔細を告も知らせず、侍品たる者に、索を被る法やある。猶狼籍に及びなば、弁が儘にして還さんや。と敦圉猛く疾視たる、武術修練の本事に懲けん、緝捕の雜兵十名ばかり、只躊々と嘵くのみ、重て蒐る者もなし。當下門外に留在たる、蓋一箇の少年あり。年の齢は十八九にて、眼圓に栗の皮めく、面に似げなき額髮は、角駛とぞ思ふ黄牛の、行縢ならぬ野袴の、下短なる戰外套、苛物作の兩刀は、問でもしるき緝捕の頭人、曾根見五郎平宗玄の、弟と人に知られたる、伍六健宗茲にあり。と名告も果ず挑み入る、手に九尺柄の鈎鎗を、挾みつゝ睨へて、やをれ好純、無禮なせそ。若が家に寓居の旅客、大江杜四郎峰張渠六は、素是敵の間者にて、越路へかへると聞えしかば、我君他等の討手にとて、若が侄なる、長橋勢泰と、弟子象船知量に、仰付られたりけるに、勢泰も知量も、反て敵に内應して、七鹿山の樹下なる、外觀稀なる地方にて、杜四郎渠六等と、密談に及ぶをり、我兄宗玄其機を猜して、悄地に守に請まつり、隊兵多く從へて、

迹を跟つゝ彼山にて、搦捕まく欲ししに、我兄は幸なくて、惜や敵の流箭に、命空くなりしより、隊兵毎は頭なき、蛇より脆く殺散されて、走りて當城にかへりし者、方僅訴稟すにより、事分明に知られたり。我身遊倅なるものから、兄の怨を復さん爲に、再度の討手を請まつりて、隊兵さへに借し給はり、四箇の逆徒を追撃すべき、今其事の創業に、若も同じ不義反逆、又我爲には冤家の半隻、一家の奴們一箇も漏さず、鏖にせん爲に、うち向ひしを知らざるや。項を伸して、誅戮の、刃を受よ。といはせも果ず、好純呵々と冷笑ひて、言烏滸しき討手呼はり。彼大江峰張は、出處來歴分明にて、當初浪華に名もしるき、峰張通世の兒孫なるを、當家の故老は、知れるもあらん。又倭太郎算彌等は、倶に忠義の本性にて、罪なき主僕を殺すに忍びず、悄地に守の御愆を、補まく欲ししに、若が兄宗玄は、善に禍し悪を恣にせる、奸虐非道の癖なれば、雜兵さへに駈催して、彼山に逼り來て、反て命を失ひしは、自業自得にあらざるや。然れども倭太郎算彌等は、守の仰に依らずして、宗玄竝にその隊兵さへ、撃果したりけるを、みづから責て一霎時もあらず、倶に千仞の谷底へ、身を投捨て亡にき、と注進の者ありて、蚤く這里へは聞えたり。それのみならで、いかにぞや、當家に人の多かるに、健宗若は遊倅にて、まだ仕へざる身にしあるに、兄宗玄に習へる歟、雜兵さへ哄誘し來て、當


石見处好純
單身衆兵を防ぐ
鬼太夫
僞兵
僞兵


石見介
偽兵
偽兵
偽兵

家の故老を撃まくす、罪反逆に異ならず。倘速に退かずは、搦捕て御館へ牽ん。後悔すな。と罵れば、健宗怒て、左右を見かへり、兵毎那奴に腮嗒せな、搦捕ずや、絹伏ずや。と聲苛立て勵ませども、雜兵等は、好純の、始の本事に鬼胎を抱きて、應するのみ、逡巡して、又找む者あることなければ、健宗焦燥て持たる鎗の、鞘を瓦辣哩と振落して、晃めかしつゝ石見介を、刺んと連りに術を盡せども、好純敵物ともせず、右に左に遣違して、鎗の蛭巻丁と拿る、修練神速、無雙の剽輕。健宗は奪られじと、力を涯に曳く程に、石見介は手も見せず、鎗の鋒頭を拔拿りて、後方遙に投捨れば、健宗慌て、こは朽惜や。とその柄を棄て、抓蒐るを、好純噪がかず左手に受て、宛狗兒を滾す似く、項髮拿て揉仆すを、起んと盪く程しもあらせず、登蒐りつ組布て、生捕まく欲すれども、不用意にして捕繩なければ、連りに聲を震立て、婢女毎は奧にや在る、やよ疾、索をもて來ずや。と叫べば亦健宗も、最苦しげなる聲立て、兵毎我を救はずや、見てをること歟と怨ずれば、雜兵等はこの一句に、恥を知る者兩三名、應と答て走蒐りて、推仆さんとて鬩くを、好純些もよせつけず、猶健宗を膝の下に、組布ながら左右の手を、揮しつゝ雜兵を、或は中躬、簞ひ投、いよ／＼白打の術を盡せば、又找む者なきものから、組布れたる健宗は、聊甘ぎを得てければ、腰なる短刀拔出して、好純の太股を、刃尖深く偶然と刺

す。好純痛痍に撓ねども、身單にして多かる敵に、勝を取ることかたければ、只得中刀拔閃めかして、亦復近づく雜兵を、殺拂ひ打散して、かへす刃を健宗の、右の腕に衝立れば、健宗は呀と叫びて、反返すべき膂力もなく、簀子をかけて縫れにけん、流るゝ鮮血共侶に、握持たる短刀の、柄を放ちて弱りしを、雜兵等は猶救んとて、競ひ蒐れる程しもあらず、突然として外面より、走り來る一箇の武士あり。後方に續く伴當等が、黃昏過ぎたる手挑灯、十手捕繩持るもありて、主從都て十餘名、高島の宿所なる、玄關陝し、と稠入りけり。丌が中に件の武士は、持る十手をうち振て、健宗の隊の雜兵を、撻懲しつゝ聲高やかに、若等は是野武士組なる、游兵にあらざる歟、先度に懲ず健宗に、哄誘されてや狼籍非法、今はしも饒しがたかり。這亂虐を鎭ん爲に、一口鬼大夫安陪が、みづから來つるを知らざるや。と名告に驚く雜兵等は、吐嗟とばかり身を縮まして、一團にぞなりにける。其間に石見介は、健宗の腕に衝立たる、刃を拔かず、柄に携りて、身を起しつゝ徐やかに、二三尺の程退きて、痛痍を敢物ともせず、鬼大夫にうち向ひて、よき折からに安倍主。嚮に家僕可平をもて、告ける一義を聞れし歟。と問へば鬼大夫、然ばとよ、七鹿山の凶變は、曾根見五郎平に從ふて、彼山に赴きたる、野武士の游兵等がかへり來て、訴稟すによりて知るものから、彼をり長橋倭太郎と、象船算彌の自殺の事

は、まだ聞も得ずありけるに、和殿も亦逸早く、使札をもて告げおこされし、事の實を得てければ、先多賀殿に面談して、非如夜を犯すとも、館へ聞え上てん、と思ふ折から人ありて、曾根見伍六健宗が、兄の怨を復さんとて、游兵等を哄誘へて、和殿を襲ひ撃まくす、と告るにうち驚きて、その非義を鎭ん爲に、隊兵を將て來にけるに、果して亂妨茲に及びて、和殿痛痍を負給ひしは、驚き思ふ所なり。伍六は素是遊俘にて、まだ仕へざる身をかへり見ず、仇ならぬ人をしも、仇とし怨みて恣に、守の游兵を從へて、事殺伐に及びしは、罪反逆に等しかるべし。兵毎早く門戸を閉て、健宗に從ひ來つる、游兵等を逃すことなく、數珠繫にして牽居よ。いで〳〵。といひつゝも、健宗の腕に衝立たる、石見介の中刀を、やをら拔拿りつ、血を拭ふて、主に返せば、石見介は、开が儘鞘に斂る程に、健宗は疼痛を忍びて、身を起しつゝ逃まくするを、鬼大夫透さず掖捉へて、袂にしたる捕繩もて、匝々纏にぞ結扭りける。當下石見介好純は、鬼大夫が公道なる、早速の計ひを歡び謝して、且健宗が亂虐なる、事の顚末箇樣箇樣、と詞急迫しく報る折から、妻の長江は香華院より、只今かへり來にければ、這禍事を聞知りて、老僕腰下婢奴隷まで、留守せし兩箇の婢妾等はさらなり、皆玄關に走り出て、安否を問つゝ勸れば、又彼奴隷可平は、鬼大夫に從ふて、既に立かへりしより、おそる〳〵玄關に、登

りて主を目戍て居り。石見介は列々と、那方這方を見かへりて、こは漫なり、婢女每、長江も亦こゝろつきなし。好純淺瘡を負ふたりとて、婦女子們に介抱せられば、こよなき恥辱なるを知らずや。老僕等もしかぞかし、奴隷每と共侶に、退りて奥と後門を、守るこそ緊要なれ。疾疾立ね。と叱らるゝ、婢妾們と共侶に、老僕奴隷も唯々とばかりに、只得奥へぞ退りける。开が中に長江のみ、良人に向ひて喃我夫、其瘡竅所にあらずとも、捨措給はゞゆゝしかりなん。この禍事を聞しより、奴家先仙丹を、拿出て玆に在り。是もて療治し給はずや。といひつゝ壺をとり扛れば、石見介領きて、开は當要のものなるを、言に紛れて忘れたり。一口主饒し給へ。いで〳〵といひつゝも、顏を皺めつ脚を伸して、穿たる袴を褰れば、安倍長江可平まで、ここに創めて其刺瘡を、見つゝ眉根を顰たる、長江はいとゞ痛まし、と思ふこゝろを鬼にして、壺なる丹藥拿出て、良人に飲せて裏股なる、瘡に布く者數回。懐にしたりける、白麻の汗巾を、探り出しつ兩箇に裂て、結合せて件の瘡に、纏つゝ楚と結留れば、今にはじめぬ藥の卽功、石見介は立地に、疼痛を覺ずなりにけん、袴の下を延しつゝ、やをら膝を折布けば、長江の歡びいふもさらなり、鬼大夫幾感歎して、豫聞たる高島の、仙丹奇效、神妙なる哉。主人起居に障りなくば、轎子にうち乘て、咱等と倶に御館へ參りて、七鹿山の一條を、遄く訴へ給

はずば、恐く婦言行れて、彼罪戻をいひ解きがたけん。いはでもしろきことながら、曾根見宗玄健宗は、窓井の方の弟なるを、敵手に取ては剛物なるべし。古語に言ずや、先にすれば人を征し、後るゝ時は征せらる。苦痛を忍びて出訴あらば、年來曾根見に媚たりける、小人們の膽を冷さん。這議甚麽。と眞實立て、こゝろつくれば、石見介は、聞つゝ莞爾とうち笑て、そは然あるべきことながら、臣等今朝出仕のをり、箇樣々々の事ありて、守の御氣色宜からず。宿所に退りて後の御沙汰を、俟よと仰出されたれば、他出を憚る折なるに、縱非常の訴なりとも、みづから參らば倒に、罪得がましき所以ならずや。といふを鬼大夫聞あへず、其義は障りあるべからず。這回和殿の訴にて、守の御疑ひ氷解して、曾根見宗玄健宗の、奸虐早く知られなば、和殿推參し給ふとも、その御咎めあるべからず。安倍同道仕らん。準備を急ぎ給ひね。と諭せば石見介再議に及ばず、しからば芳意に任んず。やゝや長江は奥へ退りて、我兩刀と衣裳を出しね。衣脫更ん。と中刀を、衝立て身を起すを、鬼大夫急に推禁めて、仙丹卽功ありとても、目今運動し給はゞ、異日平愈の障にならん。こゝにて脫更給へかし。といふ間に妻の長江は、藥の壺を携て、いそしく奥へ退りける。程しもあらず腰下婢等は、長江と俱に主の兩刀、夾衣麻の裃廣蓋に、載て玄關にもて來る程に、老僕は今日長江が乘たる、轎子の背

門にありしを、兩箇の奴隷に出させて、舁せて玄關に立集ふ、挑灯その他の東西までも、准備に脱落なかりける。既にして腰下婢等は、長江と倶に主を扶けて、衣を被まくしぬる程に、忽地外面に人ありて、連りに門を敲くにぞ、老僕奴隷等訝りて、誰やと問へば、其人答て、否厭しき者にはあらず。多賀典膳政朝なり。と名告に驚く好純安倍、思ひがけなし多賀主歟。疾々内へ入れまゐらせよ。といふに老僕はこゝろ得て、外面にうち向ひて、多賀大人に稟侍る、主人屏居の折なるに、一口主に搦捕れたる、罪人等も候へば、略義御免。といひつゝも、角門を颯と開けば、政朝はさもこそ、と應て軈て挟入る、前後に從ふ伴當等が、照す挑灯暗からぬ、道を守れる家臣に、いふこと都て聽れたる、高島の若黨字六も、倶せられてかへり來つ、衆皆内に入果れば、老僕は軈角門を、閉て背門の方に退きつ、一口の伙兵每は、健宗竝に游兵を、一團に牽居て、跪居て政朝を迎へけり。當下石見介鬼大夫は、遽しく席を讓りて、夜陰の來臨を勞らへば、政朝是を聞あへず、否故意來ぬるにあらず。日今出仕のかへさにて、貴所の門前を過るにより、悄地に面談せまほしくて、驚かしまゐらせしに、一口生も這處にて、面會は便宜なり。然ども這里は端近なれば、閑談に宜しからず。といふに石見介こゝろ得て、忽地聲高やかに、奴婢等を召て、客房に、燭臺を出さしつ、卒とばかりに稍身を起して、案内をすれ

ば政朝は、鬼大夫に會釋して、倶に客房に赴けば、看茶の禮、事果て、政朝膝を找めつゝ、石見介に向ひていふやう、嚮には御家僕字六をもて、七鹿山の凶變を、告おこされしにうち驚きて、證人なれば字六をも、倶して速に出仕のをり、七鹿山より逃かへりたる、游兵等の訴あり。そのいふ所大概は違はず、但長橋象船の、自殺を他等は知らざる而已。是により當番の、有司に先示談して、臣等則君侯に、見參を請まつりて、件の事の趣きを、備に聞え上しかば、君侯うち驚き給ひて、我昨日倭太郎算彌に、仰て彼杜四郎と、柒六を射て捕れとて、悄地に路次に出し遣りたる、その事は錯はねども、五郎平が隊兵を將て、迹を跟つゝ追逼りて、反て敗れを取りしといふ、其義は思ひがけなき事なり。他等が迭に行ふ所、孰を忠、孰を不忠と、いまさら分別しがたきは、他等三名その折に、命を隕したればなり。この義甚麼。と問給ひしかば、臣等答へ稟すやう、最憚りある事ながら、君は只曾根見宗玄の、讒を信させ給ひて、彼大江杜四郎、峰張柒六郎等を疑ひ給ひて、敵の間者なるべし、と思食たる故に、有斯異變のいで來候。はじめ臣等も彼疑ひの、なきにしも候はず。近會誰いふとはなく、彼大江峰張兩主僕は、朝倉家の間者にて、當家の隙を窺ふといふ、流言耳に入りしかば、臣等悄地に思ふやう、彼大江峰張は、當初浪華に名もしるき、峰張九四藏の兒孫にて、高島石見介に由緣あるよしは、我

も聞知る所なり。そが出處は錯はねども、今は北地に相仕へて、間者になりたる歟、その義はいまだ知るべからず。要こそあれ、と尋思をしつゝ、その折腹心の者をもて、悄地に浪華へ遣して、彼來歷を搜らせしに、其者今日かへり來て、那里の便宜を告るやう、小可浪華に赴きて、彼來歷を穿鑿しに、大江峰張兩主僕を、知れる者少からず。彼少年等は七月の時候まで、住吉の里近き、孟林寺に寓居の事、八月に至りて武者修行の爲、倶に住吉を立去りて、一霎時京師に旅宿をしつゝ、近江の方に赴きしといふ、風聲這里へも聞えたりといへり。その言疑ふべくもあらざれば、更に孟林寺を敲くに及ばず、則里の故老等に、證書一通を、寫せて罷り候ひきとて、臣等に見せたる者玆にあり。是御覽ぜよ、と懷より、取出て呈閲してければ、君侯列列樹して、愀然として宣ふやう、我思淺くして、宗玄の誣言を曉らず、可惜忠義の倭太郎算彌を、非命に殺しゝ不便さよ。然るにても杜四郎桀六は、我を怨て、ゆく郷毎に、不明不仁の君なりとて、必人に說示しやせん、恥しさよ、とばかりに、御嘆息の外なかりしを、臣等慰め稟すやう、彼杜四郎桀六は、溫潤にして學術あれば、寡言謹愼の本性もて、人の惡をいふべくも候はず。その義は御心安かるべし、と諭し稟せば頷き給ひて、去歲の九月彼少年等に、我取らせたる二種を、他等は受て、實は受ず。當所を立去る今日に及びて、石見介をもて返納し

は、我菲德を厭へばならんに、そを曉らずして云云と、石見介を詰りしは、我ながら鈍ましかりき、と御後悔の色見えて、又宣ふやう、今日は既に黄昏たり、明日は夙めて正聽にて、訴人等を召集合て、言の虛實を詮義せん。それよりも猶急ぐべきは、今より彼七鹿山へ、實撿使を遣して、宗玄以下の亡骸を、各其宅眷に執措せよ。この餘の事は云々、と仰示させ給ふ折から、窓井の方の使介なるべし、奧より一箇の女の童が、君侯の身邊へまゐりて、何事やらん耳き稟しつ、軈奧へ退りしといふ。この密話猶多ければ、是より卷を更めて、又下回に解ん。

續編　巻之十九

第四十九回

野上驛に惡僕惡主を賺す
立合阪に仁人孝女を憐ぶ

却說多賀典膳政朝は、高島一口の兩主容に、今日君邊の事云々、と悄地に告て又いふやう、我君不明に在ねども、古語にいはずや、蕙蘭繁らまくすれば、秋風是を破り、良月明ならまくすれば、浮雲是を掩ふ。いかにせん、内に窓井の方の狐媚ありて、外に曾根見の便佞あり。君威を借て、私情を行ひ、賢良を誣て、不忠とす。こゝをもて、危殃蕭牆の中にしも、起らざることを得ず。然るを猶幸に、長橋象船の忠あり義あり、宗玄頭顱を喪ひしより、君臣無明の醉醒て、玉石亮然ならまくす。臣この折を得て竊やかに、諷諫の詞を罄し稟しかば、我君御後悔の色見えて、明日は夙めて正廳に、訴人等を召集合て、邪正を判斷すべしとて、仰合されたりければ、軈御前を退出つゝ、宿所へいそぐ路の程、這里にも亦事ありとて、罵走る下司ありしを、呼留めて問試るに、其事詳ならねども、曾根見健宗の事云々、とその大略を知

るに足る、非理奸虐の緝捕ならんを、其が儘いなんはさすがにて、立より見れば、果して事あり。主人危ふかりけんに、我より先に一口の、資助によりて歹人毎は、矢庭に搦捕れにけん、實に公私の幸なり。所以こそありけめ、いかにぞや。と問れて奸純、然ン候。嚮に曾根見佐六健宗が、隊兵多く從へ來て、我奸純を理不盡に、搦捕まくしけるをり、一家兒なる奴婢毎は、荆妻に從ふて、香華院へ赴きつ、然らぬは使介に充られて、左右に扶助なきものから、我身單もて彼徒を、中るに儘せて投伏々々、當人曾根見健宗を、矢庭に膝に組布しに、曾根見の雜兵懲ずまに、蒐るを防ぐ其が程に、健宗短刀引拔きて、我太股を刺ししかば、反復されじ、と思ふばかりに、腰刀をもて健宗の、利手を簀子へ縫留たる、折もよく一口の、資助によりて歹人毎は、遺なく搦捕れたり。有恁し程に荆婦も、老僕若黨奴隷まで、皆かへり來て便宜を得たれば、先家傳の仙丹をもて、我身の金瘡を療治しつ、鬼大夫主の薦めによりて、敢刀瘡を厭ふことなく、目今衣裳を更めて、出訴せまく思ふ折から、計らず貴老に問れまつりて、彼君邊の祕事さへ、承りぬる一期の歡び、是に優す者候はずとて、一五一十を說示せば、鬼大夫も亦恭しく、政朝にうち向ひて、在下遖く茲に來て、健宗等を搦捕たる、首は箇樣々々なりとて、石見介が可平をもて、七鹿山の一椿事を、遖く告おこされし事、又宗玄の、隊兵等の、彼

山より免れ來て、訴の事の趣、叉伍六健宗が、兄の伙兵を哄誘して、當主人を襲ふといふ、風聲により時を移さず、躬は禮服の儘にして、伙兵を俱して走り來ぬるといふ、其事の尾まで、繁きを芟て告げしかば、政朝は聞く言毎に、嘆唱の聲を斷たず、欣然として且いふやう、高島主身單にて、多勢の敵を防ぎ得たる、本事は今さらいふにしも及ばねど、脛に深痍を負ながら、組伏たる健宗を走らせず、且家傳の仙丹をもて、其痍に即效ありて、起居かくの如く自由なるは、世に未曾有といひつべし。然りけれども、鬼大夫主、和殿の援助あらざりせば、主人危ふかりけんに、善には必善報あり、惡には必惡報あり。天理彰々たり、誣べからず。彼曾根見宗玄が、七鹿山の顚末は、君命を承たるにあらず。他詐詭を行ふて、殺伐を宗としたる、其罪免れがたかるに、況其弟健宗が、僞緝捕の一條は、忽緒にすべからず。一口生は亙人每を、徑に御館へ牽もて參りて、彼弟兄の奸惡を、聞え上られん事勿論なるべし。主人は猶よく金瘡將息して、明日は夙めて兩家僕、字六可平とやらんを從へて、正廳へ參り給ひね。委曲は其折々々。といひつゝ刀を引よせて、告別して身を起せば、鬼大夫も共侶にとて、後に跟つゝ立出て、却隊兵に、健宗以下の、罪人を牽せつゝ、出て高島の門前にて、政朝と東西に、別れて君所へいそぎけり。是よりの後、高島の宿所には、長江老僕等奴婢までも、方僅主客の問答

を竊聞て、曾根見健宗の狼籍の、其崖略をこゝろ得たれば、更に其義を問ふに及ばず、只その刀瘡を勦るのみ。幵が中に字六可平は、多賀一口に使したる、返命を報る程に、夜ははや初更になれるなるべし。然れば石見介好純は、危ふかるべき刺瘡なれども、窮所にあらねば思ふに似ず、況仙丹奇特の即效、一夜の間になごりなく、乾きて過半愈しかば、天明て君所へ參るに及びて、敢筏轎を用ひず、跫然として步よりゆきしを、人咸駭歎したりける。爾程に其詰朝、佐々木彈正大弼高賴主老黨有司を從へて、正廳に出坐ありしかば、家臣多賀典膳政朝、市井司、一口鬼大夫安倍等奉りて、訴人高島石見介好純以下、曾根見五郎平宗玄の殘兵と、罪人曾根見伍六郎健宗等を、局の內に召集合て、事の邪正を判斷す。是より先に、昨日七鹿山へ、實撿使に遣されたる、有司かへり來て、彼山の爲體を、報稟すを聞給ふに、訴人等の稟す趣と異ならず。宗玄以下、當坐に命を殞しし者の亡骸は、豺狼などに啖れたるもあり、或は山脚へ滾落て、半死半生なるは、扶けて馱にうち乘て、夫役に舁せてかへり來つ。この他長橋倭太郞勢泰、象船算彌知量等、彼身千仭の谷に落て、死活を知らずと聞えしは、其亡骸を索ぬるに、術なく候とぞ稟しける。間話休題。當下高島石見介は、家僕字六可平が、稟す趣を照据として、七鹿山の條々を、寫しし一通を呈閱す、鬼大夫是を受取て、聲高やかに讀訖れ

ば、政朝やをら膝を拔めて、階下に侍る宗玄の、殘兵等にうち向ひて、汝等その頭人たる、宗玄の倶してゆくとも、彼山に到りては、長橋倭太郎、象船算彌の、問答によりて大略は、事の邪正を知りたらんに、叨に四箇の善少年等を、搦捕らまく欲せし故に、毛を吹きて疵を求めしにあらずや。この義甚麼。と譴問へば、殘兵等は蹴然と、頭を低て答る者なし。丌が中に、一箇の老兵あり、姑且して陳ずるやう、小可等性愚にて、理非に闇く、事に敏らず。宗玄のいふ所、便是守の御諚にこそ、と思ひにければ善惡邪正を、訂問ふ暇もあらず、長橋象船、いへばさらなり、大江峰張と歟いふ少年をも、搦捕らまく欲したる、後悔臍を噬ども甲斐なし。只恩免を願ふのみ。といへばその餘の殘兵も、異口同容にぞ陳じける。當下多賀政朝は、局の内に牽居られたる、罪人等を召よせて、やをれ曾根見伍六郎健宗、大膽不敵の狼籍は、今さらに亦いふにしも及ばねど、その兄宗玄の隊兵さへ、漫に一味同意させて、怨まじき冤を倡て、當家二三の兵頭たる、高島好純を襲ひ撃まくしたる、抑狂人の沙汰にして、大僻不赦の罪人なり。然ても今亦いふよしあるや、いかにぞや。と譴らるゝ。健宗僅に頭を擡げて、丌は御諚で候へども、我們事の虛實を悟らず、兄の冤家を擊得ざりける、遺恨遣るかたなき故に、亦只高島好純も、鄰國に內應したる、逆賊なりと思錯へて、兄宗玄の隊兵の、遺りて玆に在りけるを、相

譚ひつ引倶して、襲ひ撃まく欲したる、短慮を後悔しぬるのみ。身の錯誤とはいひながら、素是忠義の爲なるを、いかで亮査あれかし。といへばその隊の雜兵も、いかで〱。とばかりに、悲請ふて已ざりしを、政朝聞つゝ冷笑ひて、其義いよ〱こゝろ得がたし。只傳聞を實として、その職にあらざるに、重臣を撃まくしたる、罪を脫るゝよしあらんや。爾るを猶その非を飾りて、忠義といふは究めて烏滸なり。理に闇かるは、愚物の本性、倘始より如右思はゞ、などて訴稟さゞる。みづから恣なるは、是狼籍にあらずや。と言語急迫しく責懲せば、健宗等は默然と、又頓陳ずることを得ず、稍其罪に服しけり。當下多賀政朝は、上座に向ひ額を衝て、言如此々々、と聞え上て、是非の憲斷を乞まつれば、高頼霎時沈吟じて、高島石見介が告訴の條々、其照据分明なれば、今さらに疑ふべからず。素より罪是なき者なり。又曾根見五郎平宗立は、誑佯を行ひて、殺伐を擅にしたる、その罪輕きにあらねども、彼身は既に七鹿山にて、長橋倭太郎、象船算彌等に撃れし上は、今亦罪を正すに及ばず。其秩祿を召放ちて、宅券を他が親族に預け措べし。就きて倭太郎算彌等は、心術忠義の爲なりとも、我近臣を殺戮したる、其罪なしとすべからず。然れども彼等は彼山にて、既に自殺の聞えあれば、當に所帶を沒官して、墓碑を建ることを許すべからず。又曾根見宗立に從ふて、七鹿山に赴きたる、彼隊の走卒

等も、疎忽の罪ありといへども、曩に宗玄に隷られて、彼手に従ふ身にしあれば、善悪共に其頭人の、随意せずばあるべからず。是をもて、罪一等を相宥て、今よりの後夫役に做して、間なく時なく使ふべし。就中曾根見伍六郎健宗は、其罪饒されがたきものから、猶頑童にて大人にあらず。翊亦彼身痛痍を負ぬといへば、その従兵と共侶に、姑且獄舎に繋ぎ在せて、其痍平愈したらん時、左にも右にも行ひてん。爾るにても、今高島好純の訴訟に依るに、彼大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能は、出處正しき者なるに、我思ひ愆ちて、倭太郎算彌を討手として、悄地に彼山に遣しゝを、千番悔ども及びがたかり。典膳石見介等この意を得て、異口他等が往方を知らば、いかでこの義を傳へよかし。と課せて軈身を起しつゝ、一二の近習を従へて、徐に奥へ退り給へば、是日の廳は果にけり。爾程に窓井の方は、兩箇の弟、宗玄健宗が、正なき事を做出ししより、宗玄は七鹿山にて、戦歿の聞えあり、剩伍六健宗は、兄宗玄にも彌増せる、狼籍の罪免るゝ方なく、軈死刑に處せられんといふ、人の噂を生憎に、洩聞しより、胸潰れて、淺ましくも哀しさの、遣端なければ左に右に、君邊に人なきをり／＼、悄地にこの義をうち歎きて、弟健宗の爲にしも、恩赦の制定を乞稟すものから、高頼爾ばかり色に溺るゝ、闇君にあらざれば、嚮に多賀政朝の、諫言を聽しより、既に昨非を知りたれば、婦言を容じ、

と念ずる而已。然ばとて楊大眞の、馬塊に夢の覺しにあらねば、事の術よく慰めて、いかにもして健宗を、赦免せばや、と思ふ程に、約莫二十日有餘を歴て、彼身の金瘡餘波もなく、痊り果しと聞えし比、有一日多賀政朝は、同僚なりける、麻井鷲毛の老黨と、共侶に出仕して、高頼主に稟すやう、曾根見伍六郎健宗の事、禁獄久しく倣り候ひぬ。疾く首を刎させて、士民に示し給はずは、亂臣賊子法度を紊りて、君父を凌ぐに至るべからん。法度は君の立る所、君先是を破りて後に、民其法度を破らざるはなし。在昔孔子の魯國に相たる、纔に一箇の少正卯を誅して隣國境を犯さず、國治り民泰かりしといふよしは、君の知召す所、いかで勸善懲惡の、御制度をこそ願しけれ。と憚る色もなく稟しゝかば、高頼勃然と眼を睜りて、亓はいはるゝ迄もなし。我も亦始より、思はざるにあらねども、彼曾根見健宗は、尚乳臭き頑童なり。世に男子たる者の、年十八九に至るとも、いまだ額髮を剃除かねば、是を女子に擬へて、罪ありても刑を加へず、是今の世の通法なり。こゝをもて健宗を、追放せばや、と思ふなり。汝等この義をこゝろ得よ。と諭貌なる似而非仁義を、政朝推返して、又稟すらく、御諚畏う候へども、健宗少年なるをもて、死罪一等を宥免給はゞ、長橋倭太郎、象船算彌も、亦額髮ある者にて、倶に少年なりけるに、君の御意に從ひまつらで、驕臣曾根見宗立を、撃捕りしを罪なひて、彼

自殺を憐み給はず、他等が後を立べからず、墓石だも饒さず、と掟給ひしを思ひまつれば、健宗勢泰長倭太郎橋知量象船算彌も、皆相似たる少年なれども、一人は驕慢、二人は忠義、善悪邪正分明ならんに、賞罰同じからずもあらば、國民竝て訝りて、最屓の御制度とや稟すべからん。是臣等が君の御爲に、恐れ思ふ所にこそ。と理りを演て諫しかば、高頼聞つゝ羞たる色あり。權且して仰するやう、典膳の意見寔に所以あり。我彼勢泰知量の事を忘れたり。因て今亦是を思ふに、健宗の狼籍は、兄宗玄の枉死の故にて、勢泰知量の亂妨は、善に與して奸を鋤く、義烈といはゞ、いはれもせん。因て今又再斷すらく、勢泰と知量は、我密意を用ひずして、近臣曾根見宗玄を、撃果しぬる罪戾は、鮮少にあらねども、行ふ所忠義に似たり。他等猶世にあらば、その罪を相宥めて、召返すよしもあらんを、自殺の上は是非に及ばず。親族の子に相應しき、者しもあらば願稟して、家を續するともけしうはあらず。況墓石を建るをや。由緣の者の隨意たるべし。然れば曾根見健宗の、犯しゝ罪もこの義に準じて、死刑を宥めて追放すべし。この旨をもて封内なる、士民に隈なく知らせよ。と重て掟給ひしを、麻井鷲毛の兩老黨、額衝き承て稟すやう、世に有がたき御仁政、耄と悼とは罪ありとも、刑を加えずといふ本文の、曲禮に見えたるは、年八十と七歳の小兒をいふ而已。然るを健宗勢泰知量等は、猶少年の故をもて、

慈恩愷地なる時は、曾根見の幸をいへばさらなり、勢泰と知昔は、君恩枯骨に及ぶといはまし。最辱く候。と應まつれば政朝も、面を起す心地して、共侶に稟すやう、仰承り候ひぬ。曾根見健宗恩赦の上は、他に一味同意したる、宗玄の隊の殘兵等も、放免せらるべうもや。と問ふを高頼主聞あへず、丌は勿論の事なりかし。この義を以下知せよ。といそがし給へば三老黨は、再議に及ばず言承して、うち連立てぞ退出ける。然れば多賀政朝は、是日一口鬼大夫に、件の下知を傳へしかば、鬼大夫則奉りて、猛可に罪人曾根見健宗と、同惡の罪人十餘名を、獄舍より牽出させて、憲斷慈恩如此々々、と嚴に言示して、皆追放にぞ行ひける。誠なる哉、この年來、窓井の方に所縁を求め、曾根見五郎平宗玄に、媚て知られまく欲したる、多慾浮薄の佞人等は、寒心せずといふ者なく、誰識るにあらねども、皆謹愼を旨として、武藝を勵み、文學に立交りて、みづから新にしたりしかば、佐々木の家風改りて、軍威巾夏に振ひけり。この擧、忠臣多賀政朝の計る所、蓋力ありといはまし。閒話休題。爾程に窓井の方は、屢使君にうち歎きて、舍弟曾根見健宗の、死刑を救ひ得たれども、一霎時も留め置れずして、是日追放の聞えありしかば、丌が去向を資助んとて、腹心の内人なりける、基床唐二と喚做す者に、機密を呭きこゝろ得させて、健宗に贈遣すべき、金一百兩と、短刀一口、衣

一襲を齎して、他が迹をぞ逐せける。健宗はいまだこの義を知らず、同惡の殘兵等と共侶に、一口の隊兵に追立られて、城の郊外東のかた、二三里可なる申明亭にて、並て笞放にせられしかば、只蠕子房を破りし像く、或は西或は東、己が隨意なりもてゆきて、迹には單健宗のみ、惆然として立在たる、折から日景は敧けども、身は牢衣のみにして、今より後の盤纏に做すべき、鏢一文だもあることなければ、いかにせまし、と思難て、有斯時には憑氣なき、同惡人等の己が自恣、立別れゆく背影を、怨しげに目送り果て、うち呟きてありし程、前面よりして來る者有けり。是則別人ならず、窓井の方に憑れて、密使に立られたる、彼臺床唐二なり。近づく隨に聲を低めて、伍六主恙在ずや。這囘和君の不造化は、悔思ふのみ、是非に及ばず。然れども猶辛に、よき姉君の在する甲斐に、首を續れしのみならず、悄地に去向を資んとて、咱等を使におこされたり。やよ這方へと先に立て、倶に樹蔭に退きて、背にしたる袱裹を、遽しく解下して、懷より一包の、金子を拿出て遞與ししかば、健宗は死出三途にて、六道能化の地藏菩薩の、引接に逢ふ心地せる、その歡び大かたならず。滿面笑れて幾遍となく、先唐二を勞ひて、軈其金子を數まへ見るに、正に是圓金五十枚ありけり。窓井の方の贈りしは、一百兩なりけるを、唐二が不良の猛意もて、其半分を掠拿りて、五十金は他が懷にあり。健

宗いまだ是を知らず。件の金子を受戴きて、故の如くに紙に包みて、犢鼻褌に結著て、袱裹を開き見るに、廼短刀一口と、仁田山紬の夾衣二領ばかりに、帯と汗衫と、脛衣鼻紙さへあり。其鼻紙の間には、窓井の方の密書ありしを、唐二は素より是を知らず。健宗は心ともなく、衣を脱更んとするをりに、件の密書の顯れ出しを、健宗早く拿揚て、封皮を折きて讀見るに、上野なる小母君に、まゐらせよとある其一通も、巻入て奥にあり。健宗は讀果て、巻返しつゝ其書二通を、先懐へ推容て、勃然たる聲高やかに、やをれ唐二さな欺きそ。我姉よりおこされし、金は一百兩ならんを、蚤く半分を推隱して、知らず貌する胆の太さよ。其手は喫はず、疾出せ。といはれて唐二は驚としながら、毫も怯まず冷笑ひて、那は何をいはるゝやらん。彼方ざまより受拿りて、はる〴〵這里へもて來し金子は、その五十兩より外になし。といはせも果ず疾視へて、默れ、盗兒論より證據、我女兒の密書茲にあり。といひつゝ懐より拿出て、是听ね。この短刀は上野なる、小父君の紀念ぞかし。夾衣もとり添て、黄金百兩まゐらする、と寫示されしを知らざるや。かくまで正しき照はなきに、爭へばとて饒さんや。詩も語も没らず疾出しね。と最も緊しく譴られて、唐二は口を開き得ず。それは。とばかり辟易して、逃まくするを背より、短刀晃りと引拔きて、潑せ被たる刃の精鋭、唐二は右の肩尖より、乜九の命ま

で斫下られて、一聲苦と叫びも果ず、仰反仆れて死ゝでけり。當下一箇の賤男子あり、年齢は二十に足らず、面白く月額黒く、身材低く骨立なるが、こも今日這里にて、追放されし、其一人とは問はでもしるき、牢衣の裳端折て、東の方よりかへり來つ、健宗の後方に立て、事の光景を覘ひ得て、驚きもせず找み近づき、腰に挾みし手拭をもて健宗が血刀の、鍔下より刀尖まで、佐と押拭ふ丈夫の魂。健宗も亦爾る者なれば、訝りながら聲をも被けず、思ひの儘に拭はせて、刃を鞘に納れば、件の賤男子含笑て、やよ怪み給ふな郎君、嚮に追放せられし折、ものまうさまく思ひしかども、追立の伙兵達に、憚りあれば、衆人と、倶に這頭を立去りて、幾程もなくかへり來つ、先途の御伴に立ばや、と思ふ孤忠は一人當千。那里までも召れよ。といふを健宗見かへりて、何人なるらん、と思ひしに、我兄宗玄の鞋奴、小雪太了得に健氣にこそ。といはれて小雪太、然ゝ候、我身は彼日七鹿山にて、辛く命を免れて、走りかへりて注進したる、其折亦郎君の、高島石見を撃まくし給ふ、大事の御伴に立ながら、その甲斐もなく事敗れて、主僕殘兵甲乙となく、一口の隊に搦捕られて、倶に獄舍に繫れしに、命運いまだ竭ずやありけん、主はさらなり、己等まで、恩赦の制度に尾鰭振り、轍の鮒魚の江に還る、洪福は猶ありながら、錢なければいかにして、投す方にしもゆかれんや、と思ひしに似ず姉君より、齎し給ひ


唐二を害して伍六郎小雪太を伴ふ
此の段第十一頁に見えたり
とう二


小せう太

し、黄金菊の、花さへ香さへ嗅著て、おん怡悅を想像る、彼脚なくしてよく走り、翅なくして飛といふ、賴母兒を獲給へば、小可さへに心强かり。寔に芽出たき事にこそ。と祝せば健宗點頭て、原來事皆知られにけん、今さら祕すべくもあらず。那唐二奴が大胆なる、女兒より咱等に賜りし、金子は一百兩なるを、那奴が半分著服しながら、賴陳じて已ざれば、怒に乘して結果けたる、那懷にはものせられし、五十金のありもやせん。搜りて見よ。といそがせば、小雪太は有理々々。と應をしつゝ立よりて、臺床唐二の亡骸を、探りて見れば腹に纏たる、長財嚢あるを掖出すに、果して五十金の重みあり。是なるべし。と指出すを、健宗やをら受拿りて、裏面なる圓金を拿出つゝ、數ふれば是も亦、五十兩あり、疑ふべからず。我東西得つ、と懷へ、楚と挾めて、やよ小雪太、我は女兒より贈來されし、衣あれば宜しけれども、汝は其牢衣にて、今宵の宿には就きがたけん。那奴の身纏剝拿りて、幵を被更て作せずや。亦只其衣のみならず、那奴が兩刀に所用あり。大刀は我挿副にせん、中刀は汝腰にせよ。這頭は人步稀にして、既に黄昏近けれども、外目の關は料りがたかり。那里に見ゆる十字堂にて、身裝して宿りを求めん。疾ものせずや、疾々。といふに小雪太こゝろ得て、唐二の大刀を健宗に、遞與して其中刀を、己が腰にぞさしてゆく、去向はいまだ定めねども、小倉博多は路遠き、帶さへ

衣さへ剝拿りて、推圍めつゝ肱腋に抱きて、卒とばかりに惡主僕が、一霎時四下を見かへり見かへり、二三町東なる、十字堂に赴きて、倶に衣を脫更るに、小雪太がもて來ぬる、唐二の衣は肩尖より、背まで斫裂たる、裏には鮮血塗れしを、この儘にして被ていなば、宿の男女に怪められん、いかにせまし、と思難て、心ともなく其頭を見るに、折から四月の下澣なれば、園垣の下に花開亂し、蔓茨多くあり。小雪太は是究竟、とその刺を折拿りて、破れし衣を表布ばかり、緘合つゝ倶に手迅く、身裝を整へて、脫捨たる牢衣は、こも亦賣らば些ばかりの、錢になるべきものなりといふ、健宗の指揮をまたず、小雪太既にその意あり。軈兩箇の牢衣を、唐二のもて來たる袱に、推裹みつゝ背に駝ふて、行李の像くに作爲たる、主僕いそしく立出て、ゆくことといまだ遠からず、既にして日の暮しかば、途にて蕉火を買とりて、猶も連りに走りつゝ、當晚亥中の比及に、无名村にて宿を求めて、倶に枕に就きにける。其次の日未明より、酷く雨ふりしかば、主僕は物怪の福なりとて、件の客店に逗留す。是日小雪太は、宿の炊妾に、針を借り糸を求めて、刀迹ある唐二の衣を、手自綴りなどしつゝ、血に染たる裡衣汗衫を、悄地に洗果してぞ、身の皮好とうち笑ける。爾程に、伍六健宗は、逆旅主人に誂へて、本村に在りといふ。篦頭兒を召よせて、彼身はさらなり、小雪太にも、月額を剃せ結髮させて、旨く

旅客に成濟したる、意祝の爲なりとは、言に出さねどこゝろ驕りて、亦復逆旅主人に課せて、酒殽を、買するに、圓金一枚投與へて、歌妓あるや。と詰るに、這里には侍る者なしといはれて、猶飽ぬ心地したる、主僕只得相酌に、終日醉を盡す程に、間なく時なく使るゝ、宿婢は困じけん、喚べども後には出て來ず、身邊に人在らずなりし時、小雪太は聲を低めて、やよ郎君、御身盤纏に富給ふとも、今より投てゆく方なくは、廻國せんも妙ならず。這義甚麽。と詰問ふを、健宗は聞あへず、其頭に脱落あるべきや、汝にはまだ告ざれば、心許なく思はれけん。上野國甘樂郡、部領の莊に我小母あり、その小母の獨子なる、鏑野郡司は豪家にて、半郡三莊の主なれば、必那里へいねといふ、我女兒の指揮にて、隨即小母公へ贈るゝ、紹介の書翰玆に在り。勿論鏑野郡司はさらなり、小母といへども路遠ければ、いまだ對面せざるものから、這回我女兒の賜りたる、この短刀は上野なる、小母夫の世を去りし時、像見なりとて贈られたる、一口なれば見せまゐらせよ、疑るゝことなかるべし、と教示されし筆の跡、拙なからぬを豫より、小母公は認りて在すれば、憑ばかり正しき證據はなし。我身那里に落就かば、郡司に乞ふて汝をば、侍品に做し得させん。何等の爲に廻國せんや。といはれて小雪太喜悦に勝ず、亓は亦妙なり、最愛たし。然らば壽きまゐらせん、今一度過し給ひね。と酬つ盞るゝ蚍蜉の、

間なきまでに酒盃の、果は迭に醉臥て、日の暮るゝをも知らざりける。其次の日は天快晴れて、薄暑路をゆくに宜しければ、曾根見健宗は其詰朝、小雪太を將て旅店を出て、上野へとて赴くに、素よりいそがぬ旅なれば、路の次の好も歹きも、神社佛閣、名所舊迹、有とし聞けば立よりて、要なき脚を費す程に、長き日ながら三四日を經て、稍美濃路に入りしより、是日野上の驛まで來にけり。在昔這頭は遐邇人に知られたる、然しも風流の藪澤なりけん、名娼名妓なきにあらず。當時野上の花子の詞に、

夏果る扇と秋の白露といづれか先におきふしの床

實は壬生忠峯の歌にて、下の句聊たがへり。朗詠集及新古今集に見えたり

又平大臣宗盛の愛妓なりける、池田の熊野が母親の、病痾を看とらんとて、身の暇を乞稟しゝに、宗盛饒し給はねば、

いかにせん都の春も惜けれどなれしあづまの花や散るらん

とよみて故鄕へ還されける、其事のよしは物に見えて、且能樂の謠曲にも、作られたれば世俗知るめり。かくて星移り、物換りて、昔には似るべくもなき、享祿天文の比に至りては、無下に寂たる驛路なめれど、猶當初の餘波にて、驛娼土妓はありとぞいふなる。閒話休題。健宗野上を過る折、日景は倘高けれども、小雪太に薦められて、礬蟬屋と喚做したる、客店に杖を

駐めしより、驛娼多く召よせて、謌せもしつ、舞せもして、他郷に流浪ふ身を省ず。健宗も小雪太も、年尙二十に足らざりける、惡少年の癖なれば、遙けき旅宿に在ながら、酒色の爲に現なく、盤纏の費を物とも思はず、逗留四五日に及ぶ程に、健宗は夜となく日となく、酒に耽り色に溺れて、醉ふて臥房に入りしより、朝寢して日の昇るを知らず。俺留茲に日を累ねて、第五日といふ夜分、健宗は殊さらに、泥の如くに醉臥て、喚べども絕て覺ざれば、解語の花に抱かれて、軈枕に就きにける。有斯けれども小雪太は、腹に計較よしあれば、當晩は疲る事ありとて、辭して驛娼を伴はず、酒醼稍果し時、次の間に退きて、衾兒うち被ぎて獨宿したれど、小夜深るまで毫も睡らず、主の宿息を覘ふたる、丑三時候に起て來つ、健宗が枕方の、蒲團の下に祕措きたる、金子はさらなり、鼻紙嚢も、竊み拿りつゝ財嚢と共に、先懷に楚と挾めて、臥簟の屛風に掛たりける、健宗の夾衣と、帶さへ悄地に掖下して、行李に包み荷作りて、又兩刀をも漏すことなく、竊みて腰に挿まくするに、己が中刀と倶に三口になれば、短刀をば肌膚挿にして、背の方へ隱して帶つ、菅笠脚袢草鞋まで、遺なく都て搔攫ひて、行李包を搭駝つつ、亦兩刀を腰に帶て、簷廊なる雨戶一枚を、推開つ下立て、其庭門より潛出て、東を投て走りしを、折から短夜なりけるに、健宗も其敵妓も、醉ふたる睡端なれば、夢にも是を知らざり

ける。爾程に小雪太は、連りに路を走りつゝ、三四里來ぬらんと思ふ程に、明六の鐘の音聞えて、星の光も薄くなる時候、前面より來ぬる一箇の大漢奴あり。廣袖なる襤褸衣被て、手拭もて頰罩したる、面色凄じかりけるを、小雪太は透見て、怪有なる奴かな、と思ふのみ、路陜ければ避るに由なく、行違ふ時那大漢奴は、脚を飛して小雪太の、腋肚を撲地と蹉る。蹉られて何かは躊るべき、小雪太は苦と叫びも果ず、身を輾して仆れけり。當下件の大漢奴は、小雪太の懐を、搔撈りつ、財嚢なる、金子を速手抓み出して、懐にしつ、四下を見かへり、亦兩刀を奪略て、己が腰に佩做しつ、袱包は开が隨に、奪ふて背駝へど能ことなく、衣を剝んとしつるをり、馬の鈴の音近く聞えて、這方へ來べう思ふめる、大漢奴は驚慌て、剝も得果ず岐路へ、走りてあらずなりにけり。話分兩頭。于茲復大江杜四郎成勝、峯張柒六郎通能は、曩に江濃の境にて、長橋象船の兩少年に別れしより、ゆき〳〵て水篶芟る、信濃路を過る程に、岐岨は通能の父なりける、九四藏通世の舊里にて、今も木曾生の居城あれども、既に許多の歲月を歷て、故舊親族、鬼籍に入りぬ、訪ふとも相識あることなし。遮莫故香華院には、我先祖の墓なからずやとて、豫聞しを心當に、其山院に詣て、成勝と共侶に、住持の法師に對面しつ、由緒を告げ、宿意を演て、峯張生の先靈の爲に、永年不朽の墓所料を寄進して、且追薦の

讀經さへ誂ける、其布施も亦淺からねば、住持の法師歡承て、茶を薦め齋を儲て、この主僕を欵待しつ、件の法莚果るまでとて、只管留めて已ざれば、成勝も通能も、去向をいそぐ旅ならねば、四五日這里に逗留の程、住持は這兩主僕の、武者修行すと聞知りて、有一日語次に、成勝等に對ひていふやう、各位は弱冠なるに、武者修行の爲諸國を、遊歷し給ふにあらずや。野衲嘗聞けることあり、上野甘樂郡なる、最手拔手の兩村は、昔より力士を出せり。鎌倉將軍家賴朝の時、秩父重忠と角力して、項骨を折られて死にける、長居腹鑿などいふ力士は彼村より出たるにやあらん。その餘波なる歟、今も角力白打はさらなり、をさ〳〵武藝を好む者、是ありとぞいふなる。ゆきて試給はずや。といひけり。是により成勝通能は、上野甘樂に赴きける路程、立合阪と喚做したる地方にて、憶ずも逆旅に惱る、孝女と其父に邂逅の話說あり。繡像を茲に出すものから、楮數涯あれば盡しがたかり。其文猶多きをもて、又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二十

第五十回

一金一藥盲龜浮木に遇ふ
押繪扁を告て成勝通能を行る

前回いまだ罄さゞりける、大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能は、岐岨の山院に逗留の程、住持の話説にはじめて聞知る、上野甘樂にありといふ、最手拔手の兩村に、武藝に長たる者多からば、ゆきて見ばやと思ひつゝ、遂に住持に別れを告げて、東を投てゆく程に、山又山なる鄙にしも、勝景勝地なきにあらねば、岐岨の棧梯踏見しより、現世渡の易からぬ、身の危きも思合され、筑摩の川の音にのみ、聞し淺隈に起つ煙、後に見做して夜に宿り、日に又步む路の程、川中島なる善光寺、上下の諏訪、いへばさらなり、再遊料りがたければ、神社佛閣漏す曲なく、山路の嶮岨を物ともせず、素より急がぬ旅なるに、日長き四月の時候なれば、疲れて憩ひ、饑て食ふ、三宿五宿、日を累ねつゝ、上野甘樂に届りし日、或は茶店、馬奴轎夫等に、最手拔手の兩村は、那里ぞと問試るに、絕て是を知る者なく、然る村は名をだにも、まだ聞知らず。

と答る而已、是にぞ成勝通能は、分つゝ來にける岐岨山里の、雲にも似たる疑ひの、霧の籬笆に立つ心地して、聞違へし歟、爾らずは、誨えし法師の虛談歟、と思惑ひつ其宵の程、逆旅主人を召よせて、又彼村の事を問ふに、主人は一霎時沈吟じて、那は聞錯へ給ひしならん。約莫この甘樂一郡に、最手拔手など喚做したる、村落はあることなし。こゝろ得がたく候。といふに成勝通能は、いよ〳〵望を失ひて、思難つゝ惆然たる、折から當晚合宿なる、一箇の客僧隣房に在り、件の問答を洩聞にけん、うち咳きつゝ、饒し給へ。といひつゝ間の隔障を、やをら半分推開きて、成勝等に向ひていふやう、言卒爾にて無禮なれども、各位の尋給ふ、最手拔手の兩村は、部領の莊のことなるべし。部領といふも異名にて、其舊の名は白猪なり。各位も承知ならん、在昔公家一統の御時は、相撲の節會行れて、當年の秋毎に、諸國の力士を徵れしかば、其御使に立らるゝを、部領使と倡たり。當初は上毛なる、白猪の鄉も公家御領にて、部領使に充らるゝ、官人達の知所も、其頭にこそありつらめ。是によりて白猪の異名を、部領の莊と喚做したり。然れば又その枝村に、最手拔手の名を負せしは、好事の者の所爲にやあらん、亦是部領に傅會せし而已。昔相撲に、最手拔手の稱呼ありしは、今の大關、關脇の類なれども、白猪に所云最手拔手は、全く其義にあらずかし。彼首は必秋每に、穗屋を作りて稻に

寄る、猪鹿を逐ふ故に、其地に字して穂手といひけり。又蕎麥は、信濃に劣らず、挽抜に宜しければ、抜手と字したるのみ。皆是正しき名にあらねば、近鄕の者なりとも、是を知れるは稀なるべし。然るを和君等、其地の字をのみ、覺て人に問給へば、尋詫給ひしも、故なきにあらずや。今より後は白猪とも、部領ともいふて尋給へ、相違あるべうも候はず。と言叮嚀に說示せば、成勝通能歡承て、倶に膝の挫むを覺ず。聞果て成勝は、件の客僧に謝していふやう、我們遠く他鄕に來て、然る故よしを知らざれば、只徒に人に問ふて、尋る里に得ゆかずは、人の爲に笑るべく、生涯悔しかりなんに、和尚は一字の師なる哉。最忝く候。といへば通能も倶にいふやう、件の莊には武士ならぬ、莊客樵夫に至るまで、角力白打を能するも、武藝に長たるも多からずや。と問ふを客僧聞あへず、今戰國の習俗にて、里の總角牛打童も、をさをさ武藝を嗜るあり、豈只部領の莊のみならんや。其は拙僧の知る事ならず。那里へゆきて問給はゞ、必分明なるべし。といふを成勝もうち聞て、共侶に謝していふやう、敎諭大略こゝろ得侍り。部領の莊へは路程、這里より幾里あるべきや。と問へば客僧、然ればとよ、七里に足らず、六里には遠かり。荒芽山を右方に瞻て、田文の茂林より畷路を、十數町ゆき給はゞ、問はでも白猪に届るべし。といひつゝ今突鳴す、遠寺の鐘を僂へて、却も夜の短かさよ、既に初

更になりにたり。憶はず多辯に時を移しぬ。寢まり給へ。と隔襖を、故の如くに曳閉て、那が儘臥簟に入るなるべし。この折までも立難て、傍聞せし逆旅主人は、耳新なる珍說を、こゝろ得貌に含笑て、辭して奥へぞ退りける。當下杜四郎成勝は、通能に吽くやう、現訛をもて訛を傳ふ、鄕談野語の解易からぬは、今に創ぬことながら、今宵那客僧に逢ざりせば、孰に憑りて白猪に到らん。歡ぶべし〳〵。といへば通能點頭て、是にて思合すれば、嚮に岐岨にて那作持が、最手抜手の兩村は、在昔秩父重忠と、角紙の勝負を試ける、長居腹撃の事をしも、いひしは無稽の臆說ならん。といふに成勝、然ればとよ、我も亦始より、信がたくこそ思ひたれ。餘談は要なし、夜や深んとて、倶に枕に就きしより、明日の去向の遠からねば、天明て後に起出しに、彼合宿なる客僧は、我より先に立去りにけん、寂として音もせず、宿の婢妾が羞めぬる、其早飯を果しつゝ、主僕書餉の割盒さへ、受とりつ身裝して、宿りを出て共侶に、白猪を投てゆく程に、聞しにも似ず遠く覺て、是日未下刻、田文の茂林の頭なる、畷路を過る程に、褊小なる岡の下に、人多く聚合たるあり、何に歟あらんと訝りて、主僕倶に立よりて、立稠たる衆人の、背より覗看るに、岡の半腹に淺き横洞あり、洞の前に莚を布きて、年五十許なる一箇の瘠者、頭には敗たる淺葱の投頭巾を戴きて、梼の故衣を被たるが、手に見も熟れぬ樂器を

執て、太平記を諳讀しつゝ、最もをかしう搔鳴したる、身邊に一箇の少女あり、瞽者の女兒なるべし、年は二八あまりにて、顏色の美しき、春の初花、秋の月の、都にも稀なるべく、況有愆る田舍には、寫畫にだも見がたかるべき、泥の中なる玉にしあれば、朝の原の冬枯に、一花咲る瞿麥の、霜に惱める風情にて、秋ならなくに世に棄られし、敗扇を指出しつゝ、群集の右より左より、袖乞するを哀れとは、見もし思ふもなきにやあらん、衆人竝て面を背けて、鐚一文だもとらせざりしを、成勝と通能は、こゝろ得がたく思ひつゝ、急に腰なる錢囊を、探りて錢四五十を、與まく欲すれども、前なる稠人に隔られて、それすら自由を得ざりしかば、人皆散て後にこそ、と思ふ成勝は通能に、目を注しつゝ退きて、前面なる樹下に、出茶屋あれば立よりて、倶に凳兒に尻を掛て、媼が汲もて出しぬる、一碗の篩茶を飲ながら、成勝は件の媼に、白猪の路を問ふ序に、前面にて袖乞しぬる、瞽者の上を諮るに、媼答て、他等は素是流浪人にて、故鄕は那里歟知らず侍れど、親子二人で玆に來つ、那里の洞に起臥しぬれど、少女は稀なる孝行者にて、親を敬ふ事、大賓に對ふが如く、父親いまだ喫ざれば、敢喫べず、父親いまだ睡らざれば、敢枕に就かず。立ときは手を挾扶け、臥ときは其脚腰を按摩しつ、稍熟睡しぬるを見れば、悄地に己が衣を脫て、親に被けて身の寒きを歎はず。是等は媼が朝夕に、見てよ

く知る所に侍り。この餘は人傳に聞侍るに、那瞽者が女兒を倶して、這地に旅宿しぬる比は、兩眼明亮なりけるに、人の爲に痛く撻れて、左右の眼を打潰され、剩前臑を打折して、廢人になりしのみならず、其折盤纏を亡ひて、せん術のなき隨に、女兒と倶に玆に來つ、千劒破神の代の、穴居と歟いふ宿に似て、親はさらなり、可惜、女兒を洞に起臥さするは、薄情や熊の後身歟、薄命人に侍るめり。といふを成勝うち聞て、丌は苦々しき事なりき。親の打擲せられしは、甚なる罪か知らねども、聞が如きは少女の孝行、孰歟憐思はざるべき。然るを今群集の衆人が、他に屢乞れても、鐚一文だも取する者なく、各々面を背けしは、是いかなる心ぞや。と再度問れて、然ればとよ、丌はいひがたき情由侍り。といひつゝ吹筒拿抗て、茶鑵の下に煙立つ、蒼柴の火を吹てをり。通能も件の話說を、聞つゝ成勝に向ひていふやう、世には不平の事多かれども、人の性は皆善なるに、然る孝女を見つゝ知りつゝ、縱些の情由ありとても、泣て憐ぶ者なきは、こゝろ得がたきことにこそ。といへば成勝然なり。と應へて、倶に嘆息したりける。浩りし程に前面なる、衆人は皆立去りて、其頭に人あらずなりしかば、乞食少女は父に向ひて、今日も亦幸なくて、物覩るゝ人のあることなければ、さぞな饑させ給ひけめ。いかにせまし。とうち不娛を、瞽者は聞あへず、否、また然ばかり欲しからず。知らぬ他鄕に吽

吟ひ來ぬる、我身は左まれ右もあれ、久後憑しかりぬべき、梢弱草の汝にすら、艱苦に一口を過させ難るは、恥亦是より甚しきはなし。目さへ脚さへ尩弱にせられし、我命根の難面さよ。疾死ねかし、と思ふものから、我身あらずは孰か亦、汝の資助になる者あらんや、と思ひかへして磐蟬の、生甲斐もなき命さへ、猶惜るゝは。とばかりに、流るゝ涙を押拭へば、少女はよよとうち泣て、心弱きことな宣ひそ。世に七轉八起といふ、常言のあるならずや。冬の枯木の雪霜に、撓る枝を折られても、花開く春に逢ふ時あり。今の辛苦を後竟に、昔語に做す折の、なからずやは。と慰る、親子の中の涙川、ながらへ難ても恩愛に、深き心ぞ知られける。折から部領の方よりして、團子〳〵、と聲高やかに、擔櫃を背に駝做しつ、招牌幟を衝立〳〵、來にける團子經紀兒を、少女は急に喚駐めて、やよ經紀兒達、阿團一串欲けれど、恥しながら今玆に、阿足は三錢のみぞかし、二錢は明日まで貸給ひね。といふを經紀兒聞あへず、噫旨き言いはるゝよ。五文の團子を三文に、賣らば明日よりいかにして、我妻我子を養ふべき。况和女親子には、或方さまより吩咐られて、何まれ賣れぬ情由あれども、倘金一分出しなば、內緒で一串賣もせん。その一分金なからんには、今の商量には乘がたかり。笑止〳〵。と欺きて、ゆかまくするを、やよ喃。と少女は二たび喚駐めて、只其團子一串の、價を一分といはるゝは、

寳しからず聞ゆれども、非除貳朱まれ壹分まれ、親の饑には易がたかり。今其財あるならば、露宿してやは日を送るべき。なれども賣じといはるゝを、理なく買んといふにはあらず。何をがな。と沈吟じて、喃小父よ、見らるゝ如く質として、預くる東西のあることなければ、我黒髪をまゐらせん、といひつゝ傍を見かへりて、莚に包みし短刀を、搭出しつ引拔て、頭髻を剪まくしてけるを、瞽者は驚慌て、やよや等ね。と喚かけて、搔撈り寄つゝ拿留て、鼻に塞りし聲苦しげに、やよ糸よ。今にはじめぬ汝の孝行。親の爲とて一串の、團子に換て黒髪を、剪まくするは世間に、儔稀なる所爲なれども、生死流轉は天なり命なり。汝に形貌を變させては、異日尙彼索る人に、環會ふ日のありとても、何をもて分說せんや。先その刃を放ちてよ。然らずは我身先死なん、と禁る親も禁めらるゝ、女兒も俱に淚さへ、とゞめかねてぞ袖濡らす、外の時雨を哀れとは、知らず貌なる經紀兒は、逃るが像く立去りて、忽地見えずなりにけり。この時までも成勝通能は、俱に茶店に憩ひて居り、件の事の光景を、見るに得堪ず、遽しく、茶錢幾文賍嫗に還して、走り出つゝ少女に向ひて、成勝先いひけるやう、世に稀なるべき汝の孝順、感ずるに猶餘りあり。我們兩箇も旅客にて、那里の茶店に憩て在り。汝等父女の艱難を、見過しがたくて來ぬるなり。といへば通能其語を次て、我們兩箇は晝の程、路にて河漏をたう

べしかば、盒子は故の儘にて在り。卒々是を取せんず。爹々に羞めて其身の饑餓をも、愈しね。猶も餘談あり。といひつゝ兩箇の盒子を拿出て、遞與せば少女は遽しく、刃を斂め推隱して、找みよりつゝ件の盒子を、左右の手に受戴きて、那里の方ざま僉知らず侍れど、思ひがけなき御好意、幾の程に歟忘れ侍らん。喃爹々、那二柱の刀禰達の、飯二盒子を賜りぬ。禮を稟させ給ひね。と告れば瞽者は涙を斂めて、开は辱き事にこそ。這頭なる里人の、心術は鬼に似て、物の哀を知らずやありけん、立より集ふは多けれど、物艱るゝはなかりしに、菩薩にも優すおん功德、南無阿彌陀佛。と念じつゝ。額衝拜む开が程に、通能は茶店に還りて、一土瓶の茶を買もて來つ、汝等是もて飯をたうべよ。卒とて遞與せは成勝も、腰に吊たる湯飲の椀を、拿出て是をも少女に取らせて、倶に茶店に退けば、媼は興疎き面色にて、刀禰達功德は然ることながら、慈悲は反て寃家となる、事なからずや。と呟きけり。爾程に乞食少女は、盒子の飯を椀に移して、先父に薦むるに、よく給侍して禮を亂さず。父親喫べ果て後、彼身も僅に箸を抗て、二日の饑餓を愈すなるべし。當下成勝通能は、茶店より是を見て、感嘆しつゝ出て來ぬれば、乞食父女子は云云、と歡びを演て已ざりしを、成勝急に推禁めて、瞽者に向ひていふやう、我等前より汝等の、言と行ひを見て思ふに、昔は由緒ある人なるべし、何等の故に落魄た

るにあらざるや。其も所以あらん、いかにぞや。と問れて瞽者は嗟嘆に堪ず、愀然として答るやう、既に知られまつりし上は、今さら祕すべうも候はず。小人が舊里は、寇守梁石の盡處にて、武辨の家に仕しに、現亂世の悲しさは、幸なし事のみ累りて、三世相恩の主君を亡ひ、妻さへ早く世を去りて、住果べうもあらざれば、契りし人を索んとて、當時は倘稚かりける、這個獨女子を倶して、故鄕を迷出しより、廻國既に年來を經て、今玆這春當國なる、部領の莊を過る折、小人持病の疝積起りて、一歩も運びがたければ、只得其頭の客店に宿投りて、將息に日を過す程に、人ありて我女兒を、如此々々の方ざまの、妾にまゐらせよとて、只管媒妁せられしかども、开は小人が情願ならず。非如饑渴に逼るをり、富貴の家の徵めなりとも、いかにして我女兒を、妾にすべくもあらねば、この義を以最難面、答へて從はざりければ、媒妁人もうち腹立て、角口果しなく、遂に誣たる言品傳て、那里に逗留することを饒さず。小人も亦堪難て、病痾搓果ねども、然らば宿りを更んとて、女兒を倶して立去りつ、ゆくこといまだ遠からず、折から日暮の事なるに、追蒐來ぬる暴雄四五名、媒妁人の乾兒ならずは、郡司殿の奴隷ならん。那盜兒を逃すな、と諸聲に叫りて、近づく儘に捉惆て、拳を抗て打擲す。狼籍杇

惜かりけれども、敵手は多勢、身は單にて、病痾瘥果されば、防ぐに由なくうち悩されて、兩眼片脚痛痍に得堪ず、死活も知らで仆れたる、事の悤劇に懐なる、盤纏の財嚢いへばさら也、行李さへに奪略られて、歹人毎は在らずなりにき。然れども猶幸に、拙女は恙あらずして、捉漏されでうち泣く而已。其頭は人家稀なれば、誰とて勦る者もなく、我身は孤獨の旅客なれば、訴ふべき便著もあらず。姑且して息出たれども、疼痛に勝ぬ目は見えず、片脚は折けてせんかたなきを、拙女に扶掖れつゝ、當晩這里まで來にけれど、猶驛路に遠ければ、只得這洞穴に露宿して、一宿二宿と明すのみ、盤纏あらずなりたれば、父女子が被たる二領の衣を、各一領沽却して、日毎の飯に充るものから、それすら久しく支ゆべきにあらねば、見給ふ如く袖乞しても、這頭も部領の采邑なればや、絶て憐ぶ者もなく、偶過る旅客の、投銀るゝ一錢をもて、父女の饑餓を凌ぐに足らねば、現瓠形の日も月も、我上は照し給はずや、と世を不樂、人を怨るまでに、うち歎きてのみありけるに、倘年弱き刀禰達の、慈恩は父母に異ならず。南無阿彌陀佛。と念ずれば、女兒も涙嗒みて、嘆息の外なかりける。然れば成勝と通能は、憂苦話說をうち聞て、倶に嗟嘆の聲を得たゝず。姑且して成勝は、又瞽者に向ひていふやう、思ふに倍たる汝等の患難、道を守りて禍鬼に、遇へるは過世の業報歟。天監疎なるに似たれど、

禍福は糾ふ纏の如し。今こそあれ、後々は、憂を復して喜に、做す幸もありぬべし。我に奇妙の仙丹あり、約莫刀瘡にて死したるも、いまだ三日を經ざる者に、是をはやく用ふれば、甦生せずといふことなし。況命に恙なきをや。其瘡汚穢を拭ふが如く、卽效あらずといふ者なし。こは我所親の家傳にて、世に未曾有の妙丹なれば、千金にも代ることなく、親族たりともその心、正しからざるには敢授けず。祕藏恁地なれども、世に稀なるべき息女の孝順、感心のあまり其仙丹を、目今汝に分與ん。しかはあれども其撲傷は、三四日以前の事とは見えず、二三十日歷たらんには、卽效心許なけれども、然りとて經驗あらざらんや。いで／＼。といひつゝも、腰に吊たる藥籠より、彼仙丹を拿出せば、通能も遽しく、懷を搔撈りて、出す圓金一枚を、成勝左手に受取て、彼仙丹をうち載て、卒とて少女に與れば、夢歟、とばかり驚くまでに、少女の悅びいふべうもあらず、幾番となく受戴きて、やよや爹さま瞰せ。那二柱の方さまが、御藥のみ歟、圓やかなる、御金さへ賜りぬ。禮を稟させ給ひね。といひつゝ親の手を拿りて、件の圓金を探らすれば、瞽者は呆るゝまでに、怡悅に堪ず、額衝て、淚と共に謝していふやう、仁人君子の心操は、天の覆ひ地の載るが如く、通て親疎なしといふ、經籍史傳に見ゆる而已。今戰國の人心、小は大に倂せられ、弱は強に征せらる、仁義忠孝、地を拂て、殘忍

ならぬは罕なるに、恁る君子に値遇しまつれる、幸是に優者なし。然はさりながら千金にも、代じとて祕藏し給ふ、仙丹のみ歟、一圓金を、添て施し賜ればとて、故なく受んは心にず、然ばとて愚意を演て、惠を破らば是無禮也。いかにせまし。と沈吟じつゝ、女兒を喚て云々、といへば少女はこゝろ得て、襁に隱しゝ短刀を、出して親の手に渡せば、瞽者は傍に措て、又成勝等に向ひていふやう、小人愚直の性なれば、嗟來の食にあらずとも、都非分の利を樂はず、なれどもこの仙丹をもて、身の撲傷に卽效あらば、受まつらずはあるべからず。丌も這圓金なき時は、父女が日毎の饑餓に充て、寬に養生致がたかり。この故に已ことを得ず、恩賜の二種を受納せる、酬といはんは無禮なれども、這短刀をまゐらせてん。最恥かしき言ながら、小人武弁の子孫にて、累世一國守に仕たりしに、不幸にして其家亡びて、世にも人にも棄られたる、今日に至るまで、這短刀は我君の、夫人の紀念なるをもて、祕藏年來を歷ぬる甲斐に、いぬる旦歹人等に打擲せられしをり、盤纏も行李も失たるに、幸にしてこの一刀は、畧遺されて今猶あり。唐山の太阿龍泉、我朝の鵜丸蒔鳩に、及ぶべくもあらざれど、朝櫻の二字銘あり、燒刃の馨美しく、露を帶たる朝櫻に、似たりといはんも、由なきにあらず。是まゐらせよ。と女兒に遞與すを、成勝ヤヤと喚禁めて、丌は亦要なき口誼なり。我は孝女を賞せんとて、些

の資助を做せる而已、報を受ん爲ならんや。盲人汝の清廉は、人の及ばぬ所なれども、然では我本意に違へり。开を云云といはれなば、我寸志も空となりなん。この義をよくも思はずや。と聲高やかに怨ずるにぞ、通能も亦云云、と倶に諭して已ざれば、少女はさらなり、瞽者は、困じて頭を低てをり、又いふよしもなかりけり。當下通能は、猶瞽者を慰めて、且いふやう、我前より見る所、こゝろ得がたく思ふよしあり。汝の搔鳴したる那樂器は、何と喚做す物やらん、まだ見も熟れねば問へるのみ。といふを瞽者うち聞て、然なり、那樂器は、這頭に稀にて、其名を渾不似と喚做したり。嘗聞く、唐山漢の王昭君が、匈奴に遣嫁せられし時、馬上に琵琶を抱きてゆきぬ。然れば彼國に在りし程、琵琶をのみ弄びて、みづから慰めたりければ、戎狄每是を見て、琵琶を製出ししを、王昭君に見せければ、昭君見つゝうち笑ひて、こは渾不レ似、といひしより、命けて渾不似と喚做したり。其形狀、琉球國なる、蛇皮線に似て同じからず、胴は革を用ひずして、薄版をもて張做したり。棹は最太やかにて、海老尾は琵琶に似たり。是に四絃をかけて、搔鳴す者卽是なり。爾後千百十數年を歷て、この土に舶來しけるにや、小人陸奥に旅宿しぬる比、市に是を閱しゝことあり、他國にてはいまだ見ず。故き浮世畫に、失明法師が、這渾不似を搭駝たる圖あり、閱する者其渾不似たるを知らず、只四弦なるを訝るの

み。明人の詩に、渾不似と沒奈何を對しょあり。沒奈何は飲酒磁器にて、受たる酒を半分飲ざれば、忽地に漏者也。作者曰、已嘗渾不似沒奈何考一編あり。玄同放言再著のをり、載ばやと思ひしに、累年多事にうち紛れて、老耄今に至りしかば、竟に本意を遂がたかり。只腹稿のみにして、この身と共に、亡なんことの惜ければ、浮たる册子の編中ながら、假托してもて略記するのみ。爾るにこの春三月より、小人部領の客店に逗留して、病痾を療養しぬるをり、こゝろともなく這渾不似の、柱に掛てありしを見出して、逆旅主人に問試しに、主人答て、こは己が所藏にあらず、或人に賴れたる、賣物にて候へども、久しく賣れず候、といひけり。小人倘古の癖あるに、價直も亦廉なれば、漫に是を買拿りて、旅宿の徒然を慰しに、媒妁兒の口舌起りて、猛可に那里を立去るをり、渾不似は我女兒の、携て出けるに、途に歹人等の亂妨にて、最も難義に暨しかども、渾不似には目を懸られず、破られもせでありければ、竟に玆まで携來つ。姨棄山の月ならで、慰めかねたる衆人に、錢を乞ぬる便著になりしを、今さら思へば惡因緣、過世怪しく候。と其傳來を說諦す、辯論備なりければ、成勝はいふもさらなり、通能殆感嘆して、盲人汝は博識なるかな。我憶ずも學問したり。と譽れば瞽者苦笑して、御身も渾不似を愛給ふ歟、もてゆき給へまゐらすべし。といふを通能聞あへず、否、我も旅客なれば、些の重荷も厭しきに、音曲は素より嗜まず、そを貰ふて何にせん。と辭ふを成勝喚禁めて、峰張雜譚せずもあれ。やよや少女よ其仙丹を、蚤く爹々

に薦めずや。开を用るに口傳あり、先その藥を三に分ちて、其一箇を爹々に飲せよ。又一箇をば爹々の兩眼へ、幾番となく絞入れて、額の塡にも塗らすべし。遺る一箇は脚の痛處に、隈なく布きて、紙もて掩ひね。縱卽効あらずとも、汝の孝順、爹々の老實、神明佛陀の冥助にて、驗なくはあるべからず。いふべきことは是までなり、卒退んとて通能を、いそがしつ共に別れを告れば、瞽者は少女と共に、泫然として額衝て、徳を感じ恩を謝し、惜む別は一樹の陰、一河の流淺からぬ、心汲見る成勝と、通能も亦見かへり〳〵、部領の莊へぞいそぎける。却說成勝通能は、立合阪にて憶りなく、時を移したりければ、日景の敧くを仰ぎ瞻て、脚の運びをいそがしつゝ、ゆくこと約莫十餘町、部領の郡司の邸宅へは、程遠からずと豫聞く、白猪の坊に來にける程に、天俄頃に結陰て、颯と降そゝぐ驟雨に、追れて連りに走りつゝ、前面を遍に見亘せば、彼坊の入處に、乾淨たる茅屋あり、柴門ながら庭贌とおぼしき、松檜の梢見えたり。那里は是草庵なる歟、坊賈の屋にはあらじ、と思ふ間もなく近づく隨に、その門内へ突然と、走入りつゝ呼門に、裏面には二八ばかりなる少女の、身材高く肥たるが、顏色も醜からず、太織の夾衣の、轎夫袖なるに、黑繻子の帶、幅廣きを後に結び、染纐纈の襷して、苧桶に臂を持しつゝ、單打睡てありけるに、思はず成勝等に喚覺されて、愕然として頭を擡げて、佶と見か

へりつゝ誰やと問ふ。當下通能は、菅笠引提て找み入りて、少女に向ひて告るやう、我們は旅客なり。今日しも這頭を過る程に、急雨に追れて推參したり。折から下晡にて、暮るゝに程もあらざるべし。今宵の宿を投めまく欲す。いかで許させ給へかし。と乞ふを少女は聞あへず、开は易かるべきことながら、我家は客店に侍らず、況主人は外に出て、幾還らん歟知らず侍れば、御宿は諾ひがたかり。遮莫雨の霽るゝまで、笠舍りせんとならば、憇はせ給へ、けしうはあらず。意ふに久しからずして、必や霽侍らん。といふを成勝もうち聞て、开は歡ばしき事にこそ。饒し給へ。と會釋して、通能と共侶に、框に尻をうち掛れば、少女は火桶の火を吹起して、茶を溫めつ兩箇の茶碗に、移して盆にうち載て、卒とて成勝等に薦むれば、通能も共侶に、謝して其茶を喫ながら、頭を旋して四下を見るに、嚮に庭歟と思ひたる、東のかたは樹林あるのみ、其頭は都空地にて、築立たる土苞あり。又其邊に小舍あり、開放ちたる窓の內には、木刀捍棒稽古槍を、多く板壁に掛たる見ゆ。成勝も倶に是を見て、言に出ねど這屋主人は、角觝白打の師なる者歟、武藝も兼て教るならん、と猜して通能に囁けば、通能屢點頭て、岐岨にて聞たる彼住持の、夜話さへ茲に思ひ合して、逢まく欲とぞ囁きける。當下少女は門內なる、兩箇の米苞を見出して、噫彼擔夫の心鈍さよ。嚮に誂たる精米を、もて來にけるは宜しけれど


此處の本文


みちよし

も、背門より庖厨へ入れはせで、那首に置事やある、我身もこゝろ屬ざりき。細雨なれども濡れにけん、漫なりしと獨語て、身を起しつゝ簷廊より、出て木履を狹穿て、彼門內なる兩箇の苞に、兩手を掛て最輕げに、引提て庖厨のかたにゆきしを、成勝と通能は、見つゝ齊一膽を潰して、悄地に感嘆したりける。姑且して件の少女は、丌がまゝ奥より出て來つ、故處に座を占れば、通能は少女に向ひて、驚思ふ御身の筋力、世に有がたき事にこそ。といふを少女は聞あへず、奴家に何等の膂力あらん、那苞は籾にて侍り。と答て苧を續てなり。當下成勝がいふやう、和女郎の謙遜、深し、芳し。今日は兩箇の奇事あり、嚮に立合阪を過る時、箇樣々々の乞食を見たり、一箇は五十有餘の男子にて、兩眼潰れて脚折けたり。一箇は二八許なる少女なりき。聞くに他等は親子にて、他鄕より來て旅宿の程、人の需に應ぜざりける、祟嚴しく宿所を追れて、剩其中途にて、歹人等に追撃せられて、盤纏も行李も掻攫はれ、彼身は面部隻脚を、破られしより失明になりぬ、腰さへ立ねば已ことを得ず、立合阪なる洞穴中に、露宿して、往還の人の、憐愍を乞ふといへり。爾るに丌が女兒は孝順にて、人の及ぬ事多かれども、其頭の里人は憐まず、饑渇に逼りぬと聞えしかば、己等是を見聞くに得堪ず、則圓金一枚と、祕藏の仙丹を取せたり。丌を今和女郎の多力なるに。對するにあらねども、皆是奇事ならぬは

なし。といへば通能も倶にいふやう、只憎むべき者は、彼孝女を媒妁して、事のならぬを怨しといふ歹人こそ罪重けれ。他同惡を相譚ふて、孝女の親を打擲させて、疵を負せたるのみならず、盤纏も行李も奪略せて、愉快と思へる歟、是强盗に異ならぬを、戒る國守はなきや、世の亂こそ是非なけれ。と聲高やかに論ずるを、宿の少女は傍痛げに、目を注せつゝ禁れども、通能等は心もつかで、猶云云と論じけり。當上奥より突然と、出來る一箇の壯佼あり。年は十八九なるべし、身材高く肥たるは、漢の董卓にや似たるべからん。尙額髮あれば、問でも知るき小角觝なるべし。二尺七八寸なる、苛物造の、一刀を跨へて、ものをもいはず成勝と、通能を尻目にかけて、障子推開簷廊なる、傘引提て出てゆきけり。當下少女は成勝と、通能に向ひていふやう、御身等情由を知り給はねば、要なき事をいひ出て、禍を釀し給へり。やよ蚤く立去りて、外に宿りを求め給へ。といふに成勝通能は、うち驚きて故を問ふに、少女答て、然ばとよ、彼旅客の少女子を、媒妁せまく欲しゝは、則奴家が伯兄にて、角觝の綽號を、韓錦椛二郎と喚做したる、這里の主人で侍るかし。又今外面へ出てゆきしは、奴家が第二の舍兄にて、こも角觝には奈良櫻八重作と喚做したり。然るを御身等知り給はねば、奴家が伯兄を云云と、誚り給ひしを洩聞て、怒に堪ねば伯兄に告て、懲さん爲に遽しく、出てゆきしに疑ひな

し。といへば成勝點頭て、开は亦物怪の幸なり。我們主人に面談して、理義を演て説諭なば、竟に思ひ復されて、彼孝女と其親の、資助にならるゝ事もあらん。といふを少女は推禁めて、否とよ奴家が兩箇の舍兄は、性急にして人さまの、教諭を聞くべくもあらざれば、いまだ一話を交ずして、鬪諍に及びなば、後悔其首に逹がたけん。且御身等は、只傳聞により給へば、事の錯るも侍るめり。彼旅客に痍を負して、盤纏も行李も奪略しは、虛詐歟實事歟知らず侍れど、开を論じなば時もや移らん。疾々ゆかせ給へかし。と辭ふを通能聞あへず、世に獰勇の者ありとも、理義に勝べき方はなし。今さら何の恐怖あらん。只這里に居て主人の還るを、俟て面談するにはしかじ。と慌るを成勝推禁めて、开は只匹夫の勇ならずや。孝女父子のことはしも、憐ぶに堪たれども、我に干渉る事ならぬに、好みて人と爭ふて、危きを忘るゝは、大丈夫にあらずかし。十三屋の豫より、警しを忘るべからず、卒ゆくべし。といそがせば、少女も是をうち聞て、御身等茲を去り給ふとも、白猪の坊に宿投り給はば、猶安からず危ふかりなん。茲を出て右なる岐路を、十町許ゆき給はゞ、前面に一條の小川あり、川を渉せば新部領にて、客店も侍るめり。其首に宿り給へかし。と言語急迫しく説示せば、成勝通能歡承て、和女郎は多力のみならず、心操も多く得がたし。芳名を聞かまほし、名告せ給へ。と請問へば、少女

答て、數ならねども、奴家は押繪と喚れ侍り。御身等はいかにぞや。と問復されて成勝通能、姓名を告り好意を謝して、菅笠引提て出出れば、雨既に歇て、雲いまだ斂らず。是時黃昏なりければ、幾程もなく日は暮たり。是日は四月十四日にて、月の出べき時候ながら、天は曇りて朦朧なる、路を連に急ぐものから、短夜なれば初更の時候に、件の河原に來て見れば、船は前面の岸に在り、呼ども〳〵艄公の、應なければ焦燥のみ、只得一霎時立佇程に、後方遙に人許多、追蒐來ぬる蕉火の、光り幽に見えにけり。此は是甚なる人ぞや、开は亦卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓 第五版 贅言

魏文曹丕嘗いへることあり。曰、文章は經邦の大業也。こは經籍史傳の、萬世に裨益あるを道而已。曹丕は漢賊也、遮莫其言は取るべく、其人は惡むべし。是よりして下、記事に虚實あり、時文に雅俗あり。其事實ならざれば、傳るに足らず、その文雅ならざれば、見るに足らず。然れども實事は新奇ならず、雅文は俗に通ぜず。是小說傳奇の由出る所なり。蓋稗史物の本の言たるや、浮誕詭譎、風を追ひ影を捕る、其甘きこと飴蜜の如し。是をもて雅客となく塵俗となく、愛玩して夜をもて日に續者間是あり。但恐らく、其閲する者に裨益なし。さりけれども、其書を作る者に二あり。學問廣博和漢を貫通し、萬卷の書を見破りて、奇文大筆雅俗を交え、其才羅貫紫氏に讓らず、且善惡順逆を辨明し、世態人情を了解して、克蒙昧を醒すあり。閲する者覺ずして、獎善の域に迨る時は、田夫山妻、村童野翁の、讀書を嗜ざる者の爲に、是迷津の一筏にて、小補なしとすべからず。其餘の兀籍、理義に暗く、善惡順逆に詳ならずして、宣淫導慾、漫に時好に媚るが如きは、獨學軽才、己を知ざる者の、短筆に倣す所、閲する者に裨益なし。そを擇取て愛玩しぬるを、具眼の看官といひつべし。或は菽麥を知らざる者、其書の

醜美を擇に由なく、唯新しきを愛ぬるも、猶書肆の得意とす。或は手にだも拿ことなく、時好に稱ふを娼むの故歟。只是兒戲の册子なりとて、巧拙十把一縢に、爪彈して嘲るもあらん。开は好憎に因所、閲せずして是非をいふ而已。吾其是を如何せんや、と論辯机をうち鳴せば、怪むべし鼻梁、長くなる者五六寸、左右の腋に翼生出て、日に三度夜に三度、盃水俄頃に火になりつ、臍にて阿茶を沸すと思へば、愕然として夢覺けり。こは一老先生の夜話なるを、本集稍稿成る隨に、錄してもて頤を解く。

弘化三年菊秋霜降前三日、亦復婦幼に代書を課て、奈良漬瓜の糟に醉たる、本編の作者醉中に題す。

第五十一囘

部領河原に兄弟與主僕戰ふ
白猪の居宅に縱二郎夜客を饌す

却說。大江杜四郎成勝、峯張柒六郎通能は、部領の鄕の驟雨に、逐れて遮雨しけるをり、勇婦押繪の忠告にて、思ひがけなき禍鬼の、今宵那里に起るべき、事の情を聞知りて、吖を怕るゝにあらねども、外の怨を我からに、心も知らぬ疎人等と、爭ふべくもあらざれば、倶に那里を立去りて、勇婦の敎し言の隨意、その甲夜の間に新部領の、這方の河邊に來にけるに、船は前面の岸に在りて、艄公を呼べとも答へず、いかにすべき、と思難て、一霎時吖頭に立在程に、後方に繁き夏草の、一叢深き吖が中に、晃々として光り見えけり。通能是を見出して、成勝に向ひていふやう、那見給はずや草葉隱に、光るは螢兒に似たれども、今は四月の中浣なるに、彼虫の出べくもあらず、何に歟あらん。と訝れば、成勝も遽しく、頭を囘し熟相て、いはるゝ如く彼光りは、宛螢兒に似たれども、時猶早きのみならず、動かざれば猜するに、彼草叢の裏

にこそ、朽たる株のあるならめ。夏の夜雨の霽たるをり、路傍なる朽木はさらなり、海鰕盤の甲なども、よく光りを發つことあり。又怪むに足る者かは。といふ詞いまだ訖らず、と見れば部領の方よりして、這方を投て人許多、走り來にける蕉火の、光りは爰に問はでも知るき、彼韓錦縦二郎、奈良櫻八重作が、外ながら聞知りたる、大江主僕を媢く思ひて、事の怨を復さんとて、弟子約莫八九名を、駈催しつ追蒐來ぬる、各腰に長脇刀、手に〳〵棒を挾みて、路の夏草踏開き、彼逃すな。といふ聲も、程遠からず聞えけり。登時成勝通能は、毫も噪ぐ氣色なく、成勝先譚るやう、他等は必韓錦、奈良櫻と駄いふ疎人等が、怨むまじき怨を倡て、弟子さへに多く將て、吾等を追蒐來つるならん。勝ても負ても無益なる、爭ひを好ねども、前面へ渡す船なければ、中一中て懲さずは、何をもて路を開ん。准備をせずや。といそがせば、通能聞つゝ點頭て、然なり、他等は多勢なり。奇を出して打散さずは、全勝を得がたからん。和君は猶こゝに在して、近づく敵を逆へ給へ。吾等は箇様々々にすべし。といふを成勝うち聞て、そは究竟の便直なり。然りとて敵を征するに、刃をもてすべからず、何を欲得。と見かへれば、水際に植たる船棹ありけり。是よかンなん。と抜拿るを、通能も手傳ふて、脚踏掛て兩箇に折るに、其棹八九尺あり、且さばかり太かねらば、手合の棒二條を得たり。成勝は其一條の、棒

を衝立て河邊に在り。當下通能は、水際の卵石四五箇を、擇拿つゝ袂に斂めて、殘れる棒を携へて、三四十間後方なる、小高き處に生茂る、雛松の中に身を潛して、近づく敵を俟程に、散動めき來ぬる追隊の衆人、眞先に找む一箇の壯佼、是則別人ならず、椛二郎の家弟と聞えし、奈良櫻八重作なり。腰には苛物作なる、一刀を跨へて、左手に捍棒右手には蕉火、杪高に振照し、小力士毎を從へて、走り近づく河の邊に、杜四郎成勝が、單立在しを透し見て、敵手の猴子は那首に居り。彼逃すな。と罵りて、走蒐らまくする程に、俟設たる通能が、丁と打出す投石の冴に、一箇の小力士片頰を撲れて、叶嗟と一聲叫びも果ず、身を飜して叢の、彼光りある頭へぞ、地响打して仆れける、卻舍に下なる彼朽木は、碎けて潑こ散亂しつゝ、頭顱の上に降懸る、光りに驚く追隊の衆人、呀とばかりに慌惑ひて、走退まくする程に、通能透さず打出す、投石に亦復兩三名、撲れて撻と轉輾べば、いよ〳〵耆散る朽木の光りに、孰か疑ひ怕れざるべき、幻術ならん、と思ひしかば、ます〳〵怯えて立脚もなく、起つ滾びつ逃走れば、八重作も意はずに、逃る躬方に誘引れて、故來し方へ百步許、引退きつゝ後方を見かへり、脚を住めて聲高やかに、衆人然のみ怕なせそ。敵手は纔に兩箇に過ぎず。返せ〳〵。と喚はれども、早程遠く逃走る、小力士毎は耳にも被ず、返すべくもあらざれば、八重作いよ〳〵うち腹立て、好


縦二郎八重作
追ふて
成勝通能と
力戦す


みちよし
やへ作
かみ二郎

蕉火投棄て、捍棒兩手に勢悍く、取て還しつ成勝を、撃んと找めば通能も、雛松の陰より跳出て、後走に走來つ、日今弟八重作が、通能と戰ふを、見れども幇助るに暇なければ、成勝を撃んとて、準備の捍棒斜に引提て、怒罵る聲高く、烏滸人、先度の怨を知るや。我韓錦縱二郎が、一棒を受試よ。と詈も果さず棒取直して、撃んと找めば成勝も、棒もて丁と受流し、受駐めつゝ聲ふり立て、韓錦とやら疎忽なせそ。俺は和主と知る人ならぬに、怨を受るよしあらんや。といはせも果ず眼を瞋し、怨なしといはさんや。田文の洞なる乞食父女は、我們までに懲ん、と思ふ情由あるをもて、鄕黨にこゝろ得させて、鐚一文だも拿せざりしに、若等旅客なりとても、俺名も亦彼情由も、人の噂に聞知りつらんに、事を好る慈悲三昧、乞食父女に藥を與へ、金さへ拿せて俺鼻を、挫まく欲せしは、怨なしと孰敢いふべき。早く勝負を決せずや。と敎閙暴く棒振揚て、睨哮るを成勝は、聞つゝ阿容たる色もなく、汝は亦聞えぬ怨言なり。咱等は故是旅客にて、今日はじめてこの地方を、過ればいまだ和郞を知らず。只彼田文の少女子の、世に稀なるべき孝順を、見過しがたくて、我祕藏せる、藥と倶に憂を分ちて、金さへ一枚取せしを、娼

く思ふは田舎兒の、胸最陜き所爲ならずや。といふをば聞ぬ樅二郎は、怒れる面色朱を沃ぎて、唔たり小猴子奴、息の根止ん。と棒閃めかして、擊を透さず成勝は、受流しつゝ丁々、と挑爭ふ修練精妙、迭の本事劣らず優さず、然しも虎彪の威力に、空ゆく雲もこゝろありてや、月出て光明に、水に宿れる影淸く、四下に戰ぐ草葉まで、見えざる隈はなかりけり。爾程に通能は、八重作と棒を交へて、戰ふこと七八十合、武藝に富るこの壯佼に、八重作竟に敵し得ず、持たる棒を反飛されて、剰へ左の肩尖を、下高に打れしかば、心慌て遽しく、帶たる刃を引拔て、這を先途と戰ふたる。當下河原の兩敵は、鬪戰闌干做りし程、樅二郎は何思ひけん、隙を覘ひ引外して、一丈ばかり退きて、喘を禁め聲を被て、やよや旅客手を住めよ。儂この年來幾名となく、武藝をもて名を賣る猛者等と、角力白打、槍棒擊劍、其優劣を試しに、いまだ和殿の如きを見ず。世の英雄と覺ゆれば、和睦して意衷を盡さん。等ね等ね。と制めつゝ、急に後方を見かへりて、やよや八重作、其客人も、由なき技に身をな傷りそ。怒と俱に手を解きて、這方へ來ませ、いふよしあり。和睦々々と喚りけり。然れば奈良櫻八重作は、峯張通能に打惱されて、腕衰へ肩さへ疼めば、持たる刃を打落されじ、とおもふばかりに氣を奨して、嚙叫びて戰ふ程に、今憶はずも兄樅二郎が、云々と喚るを、聞得て竦く身を跳せて、菰の外へ退

きて、旅客彼を聞たる歟。和殿も和睦に同意ならば、俺豈しうねく祟んや。といふに通能微笑て、そは勿論のことなりかし。咱等は素より怨なし、和睦は迭の幸なるべし。先その刃を斂めずや。といはれて八重作羞たる色あり、急に刃を鞘に斂めて、一禮すれば通能も、棒を投棄禮を復して、倶に汀渚に赴きて、通能は成勝の、後方に立て由斷せず、亦八重作は樅二郎の、後方近くぞ侍りける。當下杜四郎成勝は、樅二郎にうち向ひて、思ふに倍たる和殿の武藝、一豪傑といひつべし。然るを猛可に和睦せられて、倶に交りを結ぶに至らば、歡び是に優す者なし。我姓名は云々なり、亦是なる一人は、主僕といへども叔侄なる、峰張通能是なり。と告れば亦通能も、找み出つゝ對面す。樅二郎是を見て、和君等年尙二十に足らじ、と見ゆる風俗主には似げもなく、武藝に富たるのみならず、和貌の京様て、言語應對君子の風あり。咱等胞兄弟の武骨なる、田舍兒の類にあらず。然るを猶思はずに、惴りて闘撃に做すことあらば、後悔何ぞ及ぶべき。然るを恩怨地を易て、其罪をしも饒されしは、一期の幸といひつべし、八重作も這里へ出て、陪話稟さずや。といそがせば、八重作は阿と答て、にじりよりつゝ兩主僕に、歡びを演ていふやう、刀禰們は幻術ある歟、襟には陰火を散されて、我黨の勢力を、折き給ひたればこそ、躬方の奴們驚き惑ひて、逃走りたる故に、和睦は早に整ひたれ。怎生なる術ぞ聞ま

くほし。と問ふを通能うち笑ひて、否とよ、彼は叢の、裏にありける朽木の所爲なり。その故は箇樣〱。と有つる儘に說示せば、八重作は呆るゝまでに、羞て又いふよしもなし。樅二郎是をうち聞て、感嘆しつゝ且いふやう、世の常言に、疑心暗鬼を生ずといへり。我弟子等の日屬に似げなく、朽木の光りに胸を潰して、逃亡たるも一奇なり。意ふに幵は刀禰們を、守らせ給ふ神明佛陀の、冥助にこそありつらめ。然らずは各腕を拱く、我弟子等のいかにして、爾ばかりの事に怕んや。それに就きても刀禰們の、凡人ならぬを知るに足れり。八重作は爾思はずや。といふに八重作、然なり。と應へて、倶に嘆唱したりしを、成勝急に推禁めて、過分の褒美は、當りがたかり。我意ふに、和殿胞兄弟は、武勇に勝れしのみならず、理義にも闇からざるべきに、怎生なれば田文なる、孝女と慈父を飽までに、むごくせられしはこゝろ得がたし。といはれて樅二郎嗟嘆に堪ず、幵は種々の情由あれども、一朝には說盡しがたかり。いかで爰より杖を返して、薮屋に明し給ひね。この夜と共に意衷を盡さん。卒給へ。といふをりから、忽地部領の方よりして、囂々と噪しく、嚮に逃たる小力士等が、手に〱棒を携へて、齊一かへし來つるなり。樅二郎是を見かへりて、又奴們が懲ずまに、鬪諍果ての棒三昧、今さら集ふは無益なり。八重作は疾ゆきて、和睦のよしを告知らして、各宿所へかへし遣りね。忝く立

ね。といそがせば、八重作は答も果ず、身を起しつゝ驀地に、走りゆきつゝ如此々々と、和睦のよしを報にけん、散動は軈て鎭りて、うち笑ふ聲聞えけり。爾程に大江主僕は、韓錦弟兄の、最懇切に誘引を、否といはんはさすがにて、且歡び且謝して、うち連立てゆく程に、一町あまり那方には、小力士每が棒を伏て、左右二行に羅列れつ、相迎へて倶にいふやう、師家鄕には不覺の挊き、面目もなく候なれ。なれども和睦整ひて、かばかり芽出たき事はなし。客人達も饒し給ひね。いかで〳〵。と諸聲に、勸解るを樅二郎推禁めて、那はこゝろ得たり。若們は、宿所にかへりて明日又來よ。そが中に、見越松と鶴脛は、我宿所に立よりて、事の由を抑絵に告て、饗應の准備をさせよ。夜分なり、猛可のことなれば、酒菜は豆腐のみにて好。こゝろ得たる歟、疾ゆきね。走れ〳〵。と追立れば、件の兩箇の小力士は、應をしつゝ身を起して、部領を投ていそぎけり。然ればこの餘の小力士等は、そが儘主客の後方に立て、ゆくこといまだ遠からず、左右に岐路ある處にて、樅二弟兄、大江主僕に、告別しつ各々、宿所へとてぞ退りける。是よりの後主客四名、うち相譚つゝかへり來る、韓錦が白猪の宿所なる、抑絵は兩箇の小力士等が、報る歡びに胸は安堵て、然はとて軈て他等にも、手傳せつゝ夕饌の、儲も亥中の事なれば、何せんすべも東西足らぬ、酒溫めつ客房に、燭臺出して候程に、樅二郎と八重作は、

大江主僕に案内をしつゝ、かへり來にける跫响に、見越松時八と、鶴脛奈我四郎は、走出つゝ片折戸を、早く開きて迎ふれば、成勝と能通は、禮を囘しつ主人に引れて、客房に赴きて、迭の辭讓に口誼果て、賓主の席定る程に、押繪はいそしく四箇の茶碗に、汲拿る煎茶を盆に乘して、もて出て薦めなどす。登時成勝通能は、恭しく押繪に向ひて、纔には不慮の驟雨にて、一霎時檐下を苟且ながら、言の惠の歡びを、演るを押繪は聞あへず、應をしつゝ遽しく、立て庖湢へ退りしを、大江主僕は目送りて、主人弟兄に告ていふやう、纔には如此々々の事により、料らずも令妹の、多力に駭嘆しつるなり。今戰國の世なりとも、婦女子には似げなきまでに、憑しくこそ候なれ。と譽るを樅二郎聞果ず、否、我們胞兄弟女弟さへ、些の筋力なきにあらねど、女子の多力は鄙語にいふ、只是貨財の持腐しにて、施す所あるべくもあらず。漫に人にな知らせそ、と豫警め候ひしに、忘れたりけん、鈍ましさよ。と呟く程に時八と、奈我四郎は酒盃銚子、羹の椀を廣蓋にうち載て、もて出て主客に配りなどす。この餘の酒菜は、蕗筍のみ、外には物もなかりけり。當下主客の口誼あり、樅二郎は笑しげに、大江主、峰張主、今よりして莫逆の、交りを結ぶべき、眞の中直りにて候へば、俗禮にこそ從ふべけれ。この義を饒し給ひね。といひつゝ四箇の盃を、分ちて兩箇は大江主僕へ、兩箇は其身と八重作の、前に置せて、

皆共侶に、受ぬる酒を喫乾して、投せば投るゝ和睦の盃、憂を分ちて辭することなく、苦樂を倶にすべしとぞ、誓訖れば時八も、奈我四郎も倶に祝壽す。是よりの後主人弟兄は、又盃を改めて、大江主僕に薦るものから、成勝も通能も、然ばかり酒を嗜ねば、縱二郎は時八をもて、押繪に告て夕膳を、急ぐまに〳〵時を移さず、早もて出す夕飯に、海なき鄉の手料理は、只時の間を合物、炙鷄卵に乾魚の、兩三種肴添て、茶漬の碗の錦手も、色細かなる欵待に、成勝と通能は、歡びを演箸を抗て、倶に夜飯を過す程に、押繪は二たび出て來て、今宵の疎略を陪話などしつゝ、屢飯を裝添て、最叮寧に欵待す程に、縱二郎と八重作は、件の兩箇の小力士にも、酒盃を取せ醉を盡して、小夜の更るを知らざりけり。既にして成勝通能は、主人弟兄押繪等に、饗應の歡びを、演て酒盃を辭ひしかば、縱二郎も強難て、件の兩箇の小力士に、盃盤を斂めさせて、亦只煎茶をいそぐのみ。時八と奈我四郎は、共に庖湢へ退りしかば、成勝は折を得て、縱二郎に譚ずるやう、喃韓錦主、深夜の長譚、無心に似たれど、今さらうちも置がたきは、田文の孝女父女の事なり。聞くに和殿は人の爲に、彼少女を媒妁して、妾に做れといはれしを、父女は反てうち腹立て、從ふべくもあらざれば、和殿も亦怒に得堪ず、當所に旅宿を饒されねば、只得宿所を立去るをり、又一伙の疎人等に、追撃せられて、盤纏も行李も、奪

略れしにあらずや。といへば通能も俱にいふやう、然ればこそあれ少女の親は、兩眼片脚を傷られて、廢人になりしのみならず、田文の洞に露宿して、袖乞難て饑に迫るを、和殿は猶飽ずやありけん、鄕黨を箴めて、錢まれ米まれ施す事を、饒ざりしはいかにぞや。と詰るを成勝推禁めて、意ふに人の性は善なるに、孰か哀を知らざるべき。況俠氣あらん者、弱きを助る心なく、己が隨意せざればとて、然までにしうねくものせられしは、疑ふべく從ふべからず。いかで今より怨を解きて、彼等父女を憐愍給はゞ、交遊の爲にいひ甲斐あり。この義を思ひ給はずや。と左右齊一諫れば、樅二郎は嗟嘆に堪ず、踧然として答るやう、敎諭寔に其理あり。そを思はぬにあらねども、始よりして彼父女の、爲に謀りしを聽れねば、反て怨冤となるまでに、飽まで懲して後にこそ、彼等は先非を悔もせめ、と思慮し我失錯を、今稍知るは遲かりき。幸にして交遊の諫言、耳に串き臈に入て、既に昨非を知る上は、肝膽を吐意衷を盡して、詳にせずばあるべからず、言多くとも聞給へ。我父は築石の人氏、間貫佐用六故世となん喚れたる、原是南朝の餘類なる、三世相恩の主君に仕へて、左も右もしてありけるに、昔に異なる世のたゞずまひに、幸なし事のみ多かりけん、我身弟兄稚き時、潛に故鄕を立去りて、京に一稔浪華に三稔、僑居して後に、竟に這地に流來つ、擊劍白打を人に敎て、年來を歷ぬる程に、遐

邇人に名を知られて、富にあらねど貧しくもあらず、三飡餘ありけるも、只一炊の夢と覺て、二親ながら身故りしより、又五稔の春秋を歷たり。我身不肖にあなれども、十八九歲の始より、親の家業を承嗣て、擊劍白打角觝まで、這頭の鄉の壯佼等に、師と仰れて己が自恣、いへば聽れ行へば用ひらる。然ればとて惡事を做さず、善に與して人の爲に、骨を折らずといふことなければ、或は借財の債、夫婦の口舌、親子の不和、何くれとなく人の爲に、憑まれて說和るを、身の務と做せるのみ。只年の秋毎に、弟子等を相倶して、鎌倉に赴きて、鶴岡の社頭にて、角觝を興行しぬるの外は、させる生活なきものから、親の時購求めし、田圃あれば饑もせず、因て綽號を、韓錦樅二郎と喚做さるゝは、只是角觝の上にいふのみ、我身に原の姓名あり、間貫佐用二郎望洋是なり。又是なる八重作は、原名佐之七次世なれども、都て這頭の里人は、只樅二郎八重作と喚ぶのみ、この義を知れるは幾稀なり。爾るに今年の春三月の時候、本郡の主、鏑野郡司範的大人、有一日我樅二郎を招きよせて、悄地に謂ひ給ふやう、屬日某の客店に、逗留しぬる一箇の旅客あり、そが女兒は這頭に稀なる、花なりけりとて告る者あり。是により、咱等潛行しぬるをり、幵とはなしに間窺しに、窶れたれども野の花の、反て目に美しく、村酒の人をして、醉しむる趣あり。知らるゝ如く我青年、二十の上を三四に過ぎず。曩に妻を娶り

しかども、産後に母さへ子さへ亡て、今尚獨居なれば、いかで彼旅宿の少女を、妾にせまく欲す、給銀支度料などは、何ばかりにても厭しからず。然ればとて我威勢をもて、行ふべき事ならねば、悄地に和郎を憑むなり。有右ることには才闌て、成得ずといふことなし、と人もいひ我も思へば、任用せんず、よくせよかし。尚このこと整はずは、孰かは和郎を佞者といはん。こゝろ得たる歟、と眞實て、牽出物して酒盃を薦められ、晤譚細やかなりければ、己肚裏に思ふやう、領主の所望は情慾にて、然る媒妁は、我本意にあらず、とは思へどもいかにせん、曩に我弟八重作が、酔ふて人と闘諍して、敵手に深痍を負せしをり、郡司殿の好意にて、その事輒く平ぎたる、彼恩なしとすべからず。矧又這刀禰は、武を嗜み力士を愛して、我身も時々召るゝに、今憑るゝ一條を、つれもなく推辭稟さば、情義兩ながら缺るに似て、必や怨られん。只受引にしくことあらじ、と思ひ復して答るやう、御意承り候ひぬ。遮莫男子同士の立入ならば、敵手の強き弱きを嫌はず、思ひの儘に説伏て、御意の如くにすべけれども、然る媒妁には疎にて、虔婆に劣るべき、難義の役に候へども、憑ませ給ふ祕事なれば、且相譚ふて後にこそ、成ると成らぬを稟し上ん。然るを今いかにして、このおん物を受まつらんや。若強て給はらば、決して御意に從ひがたし、と推辭を主は聞あへず、そは左も右ものことながら、和郎

を俠者と思はずは、いといひがたき祕事を、打出して憑まんや。成らば勿論、成らずとも、よく成し得てこそ俠者なれ。たのむ〳〵、と拜まぬまでに、其言慇懃なりければ、困じて再度の尋思に及ばず、應するのみ興醒て、退りて宿所へかへり來て、件の事の趣を、八重作に告て意見を問ふに、八重作も亦その事を、歡ぶにあらねども、領主の徵は默止がたけん、先その父女によしを告て、誘へて見給ひね、といふにいよ〳〵意決して、次の日件の旅宿に赴きて、少女の父某甲に、來意を告て對面しつ、領主所望の一條を、悄やかに說示して、少女の爲に給事を、只管に勸めしかども、父女は受引氣色なく、然る義は望しからずとのみ、答へて執も合ざりしを、猶懲ずに日を累ね、步を運びて幾回となく、媒妁せまく欲したる、果は口舌の風濤起りて、少女の親は怒に得堪ず、我身を酷く罵りて、非禮不遜の事多かれば、我も亦怒に任して、撻懲さまく思ひしかども、敵手は孤獨の旅客なるに、拳を中んは大人氣なし、と思ひ復して逆旅主人を、權し促して件の父女を、立去して逗留を許さず。然れども彼旅客は、強情にて悔もせず、這里のみに宿なからんや、と呟きながら女兒を倶して、田文のかたへ出てゆきにき。有右その次の日に、時八等が來て告るを聞くに、昨日逐れたる彼旅客は、宿所を出て遠くもあらぬ、乾淨たる地方にて歹人等に跟られて、打擲せられしのみならず、行李も盤纏も褫ひにき

と其頭の人は皆いふめり、いまだ聞知り給はずや、といふに今さら快からず、彼旅客の撻悩されしは、みづから招きし殃危にて、自業自得といひつべし。なれどもその折行李と盤纏を、實に喪ひたらんには、我を疑ふ者もあらん。我衆弟子を首にて、這一郷の壯佼等を、集合て虛實を糺さんず、と答てその次の日に、弟子等はいふもさらなり、郷黨遺もなく、招きよせつゝ穿鑿りしに、然る正无事をしたる者、一人もあることなしとて、各倶に神水を、啜りて齊一誓ひしかは、後安きに似たれども、我本意ならぬ媒妁して、見る影もなき旅客に、詈辱られて後を取しは、是まで絕てなき所、今よりの後郷黨に、我を侮る者もあらん。いかにすべき、と思難て、腹立しくて在りし程、又弟子等の告るを聞くに、彼旅客は歹人等に、目さへ脚さへ傷られて、せん術やなかりけん、女兒と倶に田文なる、淺洞に露宿して、往還の人に袖乞しぬるを、我も見たり彼も見たり、といふ者日毎に多かりければ、我復肚裏に思ふやう、聞くが如きは件の父女が、ます〳〵困窮至極せば、竟に志を改て、人を賴みて我に勸解なん。我言品だに達つならば、その折にこそ錢まれ衣まれ、施して資にならん。他等が饑るを俟つべき而已、と尋思をしつゝこの郷なる、老幼男女を戒めて、孰にもあれ田文の洞なる、乞食父女に鐚壹文でも、施す者は我怨冤なり、と弟子等をもていはせしかば、人僉怕れて違ふ者なし。有

右二十日ばかり歷ぬる程に、嚮に我居る里の酒肆に、八重作が尋來て、御身等の事如此々々、と告知らして且いふやう、件の兩箇の青年兒は、旅客なりといふめれど、雨衣の外持る物なし。意ふに彼奴等は隣郡なる、鄉士の兒子などにやあらん。弁は左まれ右もあれ、大哥を酷く罵りて、强盜にしも似たるべし、といひしを聞つゝ知らず貌して、懲しも得せずあるならば、何をもて俠者といはれん。疾出給へ、といそがしたる、折から我と共侶に、酒喫居たる奈我四郞、時八以下の弟子等に、聞れんことの朽惜ければ、我勃然と怒に堪ず、そは安からぬ事なりき。衆皆立ね、と身を起して、走出ける短慮の本性、其酒肆より程遠からぬ、時八が宿所に立よりて、身固しつ皆共侶に、捍棒蕉火引提々々、出ても怨寃の往方を知らねば、四下の里人に問試るに、武士とおぼしき兩箇の青年兒、うち連立て黃昏時候に、新部領の方にゆきにき、と正可に報る者あれば、然らばいそげ、といふ程に、よしを早くも傳聞て、後走なる小力士と、甲乙共に十餘名、彼河原まで追蒐しに、奇異朽木の光明に怯えし、小力士毎は憑に足らず、我們弟兄兩賢兒と、創て棒を交へずは、復敝屋に光臨あらんや。料らざりける幸なれども、只彼田文の洞なる父女を、執念深も苦めしは、皆是己が僻事歟、僻事ならぬ歟、非を飾るに似て、面正しくもなきことながら、いはずば孰歟理非を判ん。愚意は事の始より、彼旅客父女の爲に、䜭

かれとては謀らねども、事の成らざるのみならで、竟に讐敵の思ひを做せるは、實に已ことを得ざるの所以なり。この義を察し給ひね。と唧言がましき長談脩話に、心は同じ八重作も、倶に嘆息したりける。當下成勝通能は、列々と聞果て、成勝先答るやう、今はじめて知る主人の任俠。善惡倶に憑れたる、言を易じと思はれしは、勇あるに似たれども、咱等が思ふよしはしからず。最憚ある言ながら、且試に打出さん歟。といふを縦二郎聞あへず、开は庶幾ふ所なり。既に交遊の義を結れしに、何等の介意あるべきや。いかで教を承まく欲す。いかで〳〵。と請問へば、成勝は傍なる、扇を颯と推開きて、是これを見給ひね。扇に蟹目の總括あり、人に一心の主神あり。人各志なきことを得ず。古語にいはずや、志士は溝壑に縊るゝを忘れず、勇士は其元を喪ふを忘れず。語は老列の二書及孟子にも見えたり。宜なる哉、匹夫も志を奪ふべからず。意ふに田文の旅客は、廉士なり、孝女なり。假令千金の利をもて誘ふとも、豈阿容々と人の爲に、妾になる者ならんや。然るを和殿はよくも思はで、勇あり膂力あるに乘して、威勢をもて逼りしは、抑愆にあらずや。といひつゝ傍を見かへれば、通能も倶にいふやう、彼父女の薄命なる、宿所を逐れしその曛昏に、歹人等に撻惱されて、盤纏の金を喪ひしは、和殿の所爲にあらずといへども、起原は和殿より出たり。春秋左氏傳を按るに、晉の

董狐が筆を染て、趙盾君を弑せり、と書しゝに似たるべし。然るを和殿は猶悟らで、彼等父女が饑るに及びて、其志を改めて、從ん歟とて侯れしは、己を知りて人を知らざる、淺慮といはんは無禮なれども、犯し諫て用ひられずば、袖を拂て去んのみ。只彼父女を贔屓にあらず、理をもていへば右の如し。辱しむるとな思ひ給ひそ。と諭せば成勝、然なり。と應て、峰張の意見も愚意におなじ。人に俠者と仰れて、世情に貫通したらん、和殿に向ひて云云と、博士態たる諫言は、鄙語にいふ釋迦に説經、孔子に語道の類なれども、交遊の爲に一言の、信を盡して裨益あらば、自他の幸甚しからん。意ふに領主の懇望は、只是色を好むに過ぎず。和殿等承たる恩ありとも、別に報恩の折もあるべし。先度の媒妁成就せずとも、彼かたざまに背くにあらねば、願ふは田文の志士孝女と、和睦して彼困窮を、憐愍て帮助にしも、做り給ひなば先非を補ふ、是第一の捷徑なり。何かは恥る事あらん。然れば孔聖の敎にも、過て改るに憚る事勿れ、といへり。惑ひを覺し給ひね。と理り切たる主僕の金言、傍聞する八重作まで、背に汗を流すまで、骨に徹膽に銘じて、後悔臍を噬るのみ。況その兄樅二郎は、夜讌の酒と共侶に、無明の醉さへ頓に醒て、昨日の我を恨るまでに、頭を低手を叉き、默然として眠るが如く、時の移るを知らざりけり。この段いまだ盡さねども、又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

第五十二回

大江峰張逐ふて松煙齋に說く
文武和合して故人故人を知る

復說韓錦樅二郎は、大江峰張兩主僕の、道理を盡し是非を論ずる、言よく諫られしかば、はじめて无明の醉醒て、慚愧後悔大かたならず、聽果貌を改めて、兩主僕に謝していふやう、在下性愚魯にて、必然の理義に暗く、をさ〳〵匹夫の勇を負て、彼旅客は孝女なり、廉士ならんを思ひもかけず、飽まで虐げ苦しめしは、今さら臍を噬までに、千たび悔とも及びがたかり。然るを刀禰們幸ひに、いよ〳〵博愛の誠意をもて、金言玉語を惜み給はず、鍼砭懇切ならざりせば、いかにして我舊癖を、立地に刈除れて、昨非を知るに至んや。天も明ば田文にゆきて、彼父女にうち勸解て、倶しかへり來て家に留めん。願ふは二君子詞を添て、術よく寛解給へかし。といへば八重作も額を衝きて、愚意も家兄に異ならず、殆後悔仕りぬ。我們弟兄武をのみ好みて、學の窻に疎ければ、見ぬ世の聖を師とし得ず、理非曲直に惑ふの故に、兄は弟を誡めず、

弟は兄を諫ることなく、倶に愆を累ねしを、悟らざりしぞ面なけれ。いかで恩免あれかし。と等しく陪話て已ざりしを、成勝徐に推禁めて、賢弟兄先非を悔て、今より善に與し給はゞ、歡び是に優ものなし。古の人いへることあり、三人醉ふて溺るゝ時は、敢是を拯ふ者なし。其内中一人醉はざれば、醉ふたる二人を助拯ふて、共侶に死に至らず。最憚あることながら、和殿弟兄弟子達まで、其行ひの道理に差ふを、曉りて諫る者なかりしは、三人醉ふて溺るゝ者と、似たりといはんは無禮なるべし。といへば通能も共侶に、後の短慮を警て、和談の歡びを演る程に、夏の夜蚤く明初て、牕の隙より朗つゝ、軒端近く鳴亘る、鴉の聲聞えしかば、樅二郎驚き見かへりて、短夜とはいひながら、美談佳境に入る隨に、客人達に睡らせもせで、鈍や一宵を過したり。といふ間に八重作は、遽しく身を起して、其頭の板戸を推開れば、時八と奈我四郎は、共侶に出て來つ、樅二郎等にうち向ひて、昨夕は刀禰們の諫言を、蔭ながら聞知りて、深く感心仕りぬ。伙計の毎にも傳へなば、皆大人しくなり侍らん。既に浴桶に水汲入れて、早く燒つけたりければ、程よく沸り候ひぬ。客人達も湯浴して、且早飯を果して後に、優に睡らせ給へかし。といふに主僕は膝を找めて、言叮寧に勞ふ程に、押締が薦る淨手の湯桶に、養齒と鹽をとり添し、盆は殘の月ならで、影さへ見ゆる花漆の、花あり實ある款待に、成勝と通

能は、歡びを演且謝して、軈て簷廊に出しかば、樅二郎は押繪に向ひて、汝も疲勞て睡かるべけれど、先早飯をいそぎねかし。既に知るゝ情由なれば、今朝しも咱等は刀禰們を、請ふて立合阪へゆかまく欲す。早飯の外に晝餉の割盒を、五七口品准備せよ。時八と奈我四郎は、通宵にて睡からん。煮炙の事は四鄰なる、家々達を傭ふて手傳せよ。といふに押繪はこゝろ得て、應をしつゝ退けば、時八等も是をうち聞て、否とよ、人を傭ふは要なし。孰とて睡りし者なきに、我們兩箇のみならんや。火をも燒くべし水をも汲てん。奈我四立ね。といそがするを、樅二郎推禁めて、鶴脛には所用あり。早飯を果しなば、汝は蚤く人馬會所へゆきて、田文まで往還すべき、旅轎二挺を誂へて、巳の比及におこせといひね。彼父女を乘ん爲なり。いで〳〵。といひつゝも、そが儘奥へ退けば、是より先に八重作は、退りて漱ぎなどしつゝ、大江主僕に茶を薦め、其後早飯を薦るに、押繪と倶に給侍し果て、更に浴室へ案内をしけり。是より後も其度毎に、主客の謙遜、辭讓の禮節、迭の口誼さぞあらんを、言省て備にせず。看官宜く猜すべし。左右する程に、巳の時近くなりしかば、樅二郎は身裝して、單奥より出て來て、成勝通能に談ずるやう、在下は田文にゆきて、彼旅客父女を迎へまく欲す。なれども和君等先だちて橋を亘し給はらでは、他等のこゝろ解がたけん。昨宵よりの疲勞あらんを、請ふは無心に似た

れども、峰張主那里まで、共侶にゆき給はずや。といふを成勝もうち聞て、夏の夜睡眠を貪るは、各無事の時にあるべし。非如一夕睡ずとも、人我意見を信容て、良善の域に赴きぬるに、我のみ居つゝ俟よしあらんや。峰張は然も思はぬ歟。といふに通能、然なり。と應て、誰とて留る者なければ、樅二郎は强難て、且感じ且謝して、八重作を喚ていふやう、刀禰們は咱等が爲に、田文へゆかんと宣はすれば、汝も伴に立べきなり。就て亦所用あり、耳をおこせ。と引よせて、囁き果て亦いふやう、其東西遫く整ひなば、汝搭駝ふて那里へ追著け。疾せよかし。と吩咐れば、八重作はこゝろ得果て、退りて衣を脫更て、背門より出てゆきにけり。是時天日いよ〳〵昇りて、巳の時の鐘、鎬々と聞ゆる程に、這驛の人馬會所より、四箇の轎夫二挺の旅轎を、舁もて來つゝ呼門けり。當下樅二郎は、出て轎夫等を勞ふて、去向をこゝろ得さする程に、時八と奈我四郎は、准備の盒子を兩袱に、裹しをもて出て、搭駝ふて伴に立まくす。樅二郎是を見て、時八等を喚びていふやう、既に二挺の篭轎あるに、汝等伴に立は要なし、宿所へ退りて疲勞を醫しね。我身みづから那里へゆくは、田文の父女に後悔の、誠意を示さん爲にて、面正しくもなき事なるに、伴當連て何にせん。盒子は篭轎に載てゆきてん。已ね〳〵。と制れば、時八と奈我四郎は、只得其意に隨ふて、二裹なる件の盒子を、容轎に分ち容れて、

且成勝通能の爲にとて、今朝准備しける草履二雙を、出して脫沓石の上に直し措程に、押繪も奧より出て來て、大江主僕を勞へば、樅二郎は亦押繪に、留守のこゝろを得させつゝ、屢熟睡を誡めて、卒とばかりに身を起せば、成勝と通能は、押繪時八奈我四郎等に、疲勞を慰め且謝して、樅二郎と共侶に、轎夫每を相從へて、庭門より出てゆく程に、奈我四郎時八は、門前まで送出て、別れて各宿所に退りぬ。是日留守には押繪の外に、今朝早天より傭れたる、比鄰の家々等も在るなるべし。爾程に韓錦樅二郎は、成勝通能と共侶に、ゆくこと約莫十餘町、立合阪の洞に來て見れば、那父女は何地ゆきけん、聞しにも似ず在ることなければ、大江主僕も訝りて、思難つゝ幷が前面なる、茶店に聽て立よりて、通能は先媼に向ひて、云々と問試るに、媼は笑つゝ答ていふやう、原來御身等二柱は、昨日彼瞽父女に、東西多く拿せ給ひし、旅客達にてありけるよ。韓錦主も聞給へ。尋給ふ彼瞽者は、這刀禰們の惠せ給ひし、仙丹と歟いふ妙藥の、卽效にもやありつらん、一夜の間に彼撲傷の、なごりなく皆愈しのみならず、打潰されしといふ兩眼は、撲れざりける始より、其明亮なること鏡の像く、攤たる脚さへ疼痛を覺ず、都て瘥り果けるを、今朝目覺し後親も少女も、知り得て驚奇感嘆したる、その悅びはいふべうも侍らず。昨日刀禰達の立去り給ひし、其方を只顧伏拜みて、父女は姑且商量しつゝ、媼

が茶店に出て來て、別を告て云々、と件の事の趣を、說示されしその折に、といひつゝ渾不似をとり出て、是覵せ、この樂器は、今よりの後逆路に要なし。萬にひとつ咱們父女を、憐思ふ人ありて、去方を問るゝ折しもあらば、是を照据に彼恩德を、說示らせ給へかし。然ることなくは御身の隨意、賣て錢に換るとも、沽れずは摧きて茶を烹るとも、左にも右にも做し給へ。恨らくは彼刀禰達に、是等のよしを告まつりて、報恩謝義の一語だも、演得ざるこそ本意ならね。然らば、とばかりいひ捨て、うち連立て杖をだに、忘れていそしく立去りしは、さばかり久しきことには侍らず、巳の時過ぎたる時候なりき。と告るに呆るゝ縦二郎は、いまだ答る所を知らず。當下成勝通能は、聞果て倶にいふやう、原來昨日施したる、神藥即效愆たず、彼旅客の不治の痍、一夜の間に瘥果しは、孝女と慈父の正心誠意を、憐み給ふ神明佛陀の、冥助にこそありつらめ。そは歡ふべき事ながら、和談既に整ひて、倶に尋て來しかひもなく、昨日の儘にて逢ずならば、彼人の爲に謀りたる、千萬言も皆空なり。といひつゝ倶に傍なる、発兒に尻をうち掛れば、縦二郎もその前面なる、発兒に倚て却いふやう、聞くが如きは和君達の、仙丹神妙未曾有なり。縦彼旅客の、眼明に脚疾なるとも、這地方を立去りしは、巳の時過ぎての事ならば。といひつゝ日影を瞻仰て、まだ一時に過ぎざらんに、必遠くはゆくべからず。

卒給へ、追蒐てん。と惴るを成勝推禁めて、そは勿論の事ながら、和殿は一身肥滿て、技と力に勝れても、反て路をゆくに遲かり、權且這里に俟給へ。我們主僕路の程、一二里追ふて得逢ずは、开里よりかへり來つべきなり。といへば通能も倶にいふやう、遇ふと遇ざるは天なり命なり、力を用ひて其甲斐なくは、幾人ゆくとも益やはある。篌轎をも遺し置くこそよけれ。といひつゝ這茶店にて賣る、草鞋二雙を買とりて、手ばやく其緒を締に串きて、主僕等しく草履を棄て、件の草鞋を穿く折から、奈良櫻八重作は、袱裹を背にして、來ぬる面色惱しげなるを、縱二郎早く見出して、八重作など遲かりし、障れる事のありて歟。と問ふ間に八重作は、やうやく茶店に辿り著きて、縱二郎に報るやう、吩咐給ひし故衣は、倘巳の時ばかりの物ありしを、三四箇帶さへ買拿りて、來ぬる路にて撲瘡發りて、最堪がたきを辛くして、來しかば遲くなりたるなり。といひつゝ主僕に會釋して、発兒の端に尻を掛れば、縱二郎は嗟嘆して、成勝等に對ひていふやう、在下今日彼旅客父女を、迎へて宿所へ相伴ふをり、他等が衣の敗れ垢つきて、鬱悒からんをそが儘に、倶していなんはさすがにて、准備せばや、と思ふものから、咱等弟兄女弟さへ、身材大きやかなれば、その衣をもて他等父女に、貸して被せなば世話にいふ、猫兒を袋に裝れたる像く、彼身に稱ふべくもあらねば、今朝八重作にこゝろ得させて、故

衣店にて衣三四箇を、買せて目今もて來にけれど、そも亦十日の菊に似て、空になりぬる鈍ましさよ。と喞言がましくうち拕れば、成勝も通能も、云云と慰めて、和殿他等父女の爲に、然までにこゝろを用ひられしは、我們さへに歡びおもへり。今は無益に似たれども、そも亦後に用ある歟、なき歟はいまだ知るべからず。就て八重作哥々の暴疾は、撲瘡のみ歟心許なし。心地は甚麼。と諮れば、八重作は袱裹を、解下しつゝ答るやう、最恥しき事ながら、昨宵部領川の上にて、峰張主の一棒を、受損ねける撲瘡に侍り。今朝までは然ばかりに、疼痛を覺ざりけるに、方僅來ぬる中途より、漸々に腫充て、堪がたくこそ候なれ。と告るに通能驚きて、そは亦不慮の事なりき。然とても彼仙丹は、今も尙我腰に在り、用ひなば、必卽效あらん。先その棒瘡を見せ給へ。といふに八重作面を皺めて、衣領甘けて右の肩を、袒ぎて示すを見るに、現腫充て毬の像く、その色は紫の、灰後れたるに似たりしかば、疼痛さこそと想像、成勝は眉を顰めて、昨は不慮の兩敵たり、今は同志の友人なるに、殘る痍こそ是非なけれ。といへば樅二郞も鷲愕ひて、是に就きても峰張主の、槍棒修練の至妙を知る。八重作が爲にしも、好修行にこそ候なれ。といふ間に通能は、彼仙丹をとり出て、八重作の棒瘡に、隈もなく塗らして、鼻紙をもて蓋をしつ、扶けて袒を斂させて、誘とばかりに成勝を、いそがし立て出まくすれば、

縦二郎も立出て、咱等弟兄も共侶に、必ゆくべき該なれども、いはるゝ如く我歩疾からず、八重作は恙あるを、了得に見捨がたければ、本意なくこそ候なれ。といふ間に成勝通能は、應も果ず歩に信して、聞つる方を心當に、彼父女をぞ追ふたりける。縦二郎是を目送果て、轎夫等に向ひていふやう、汝等も聞知る情由なるに、玆にて俟は歟しかるべし。亭午に程もあるまじきに、先その盒子を拿出て、宜く腹を繕ふて、彼刀禰們を追ふてゆきね。若彼父女に得逢はずは、刀禰達兩箇をうち乘て、かへり來るともけしうはあらず。こゝろ得てよ。と說諭せば、轎夫毎は異議に及ばず、箯轎より盒子をとり出て、兩箇を縦二郎等の身邊へ閣き、四箇をば 各うち開きて、爐に茶を乞ひ箸をとりて、早くもたうべ竭しつゝ、殘る盒子と共侶に、故の如くに袱に、裹みて箯轎に斂れば、縦二郎は八重作の、もて來し袱裹を開き見て、包て轎夫等に示すやう、此は是彼旅客父女に、被せまく思ふ衣物にて、帶もあり汗衫もあり、是をも箯轎へ納てゆきね。その餘の事は如此々々なりとて、去向を叮嚀に指示せば、轎夫毎はこゝろ得て、軈て二挺の空轎を、擡起しつ大江主僕の、去向を投てぞいそぎける。姑且して縦二郎は、茶店の爐に向ひていふやう、彼旅客父女が、置土產にとて汝に拿らせし、その渾不似と貺いふ樂器を、這頭に置んは妙ならず。我に賣ずや、買まく欲す。汝夕さりかへるをり、我宿所へもて來




韓錦と留て主僕旅客を逐ふ
茶店の場

よかし。多少は知らねどその價ぞ。といひつゝ懐を搔捞て、拿出す一方金を、卒とて遞與せば茶店の媼は、呆れ惑ふて左右なく受ず、滿面笑れて、斑に脫たる、板齒の涯顯して、高嗤して且いふやう、噫物體なの價直三昧、方僅話しまうしゝ如く、彼旅客が荷になるとて、貽し置れし東西なるに、錢賜りて何にせん。況然る御金をや。思ひがけなきことなりきとて、辭ふを縱二郎推返して、亓はいはるゝことながら、今日は終日この店を、借て所要を辨ずれば、その茶錢をしも兼たるなり。手を出しね。と掖寄て、件の方金を拿らすれば、媼は困じて辭ふによしなく、幾囘となく戴きて、腰に著たる匾囊の、口を開きつ聢と斂めて、更に茶を煮て薦る程に、八重作はものも得いはず、凭柱に身を倚て、打盹て在りけるに、豁然として覺たる像く、腕を捺り身を起して、縱二郎に向ひていふやう、家兄最奇なりけり。我身の撲疳早に愈て、浮腫はさらなり疼痛を覺ず、正に是彼仙丹の、卽效なる事疑ひなし。といふに縱二郎歡びて、初我彼旅客の、目さへ脚さへ破られし、其大疵の一夜の間に、彼仙丹の卽效にて、擦り果しといふ一奇談を、疑ふとにはあらねども、こゝろ得がたく思ひしに、今の奇效は是目前。現未曾有の神藥なるかな。汝恙もあらずなりしに、弟兄這里にて、彼人人を、居つゝ俟んはいよ〳〵無禮なり。嚮に彼刀禰們の、我脚の速からねばとて、故意這里に遺されしは、脚の遲速に由るにはあらじ、

いまだ彼父女を寛解ずして、我身も倶に追ゆかば、慭に事の障りに、なりもやせんと豫より、思慮れしにぞあらむずらん。然れども汝は格別なり。晝餉を喫て疾邁きね。といふに八重作有理と應て、傍にありける一箇の盒子を、引よせつゝうち開きて、心と共に長からぬ、箸拿抗て喫程に、媼が汲もて薦めぬる、熱茶の茶碗拿外して、指を焦しつ噫熱や。と手を振り口に哺ませて、汲更さする湯に水を、さして往方は定めねども、人を追ふ身は膽向ふ、心頻にいそがれて、鄙語にいふ六藝の、外に早喰早走り、物皆囫圇呑に盡したる、盒子を其首に措あへず、ちよといて來てん。といふより早く、出て連りに走けり。是よりの後縱二郎は、詞敵に做すよしもなき、媼と對ひて坐る程に、去向の首尾は甚麽ぞや、彼刀禰們が折もよく、追著たる歟とばかりに、立て見居て見物思ふ、心了得に昨夕より、疲勞なきにあらざれば、外の見る目も芟りあへず、磯浦傳ひ漕船の、楫にはあらぬ肱枕、横臥しより寢とも知らず、晴たる天に似げもなき、鼾睡の雷霆轟くまでに、久しく熟睡したりける。有右し程に日は攲きて、未牌の中浣過る時候、外面より來る者あり。縱二郎は其跫响に、愕然と驚覺て、と見れば來ぬるは別人ならず、峰張通能なりければ、こは賢君子早かりき。餘人はいかに來まする歟。と問ひつゝ軈て發兒を譲りて、茶店の媼を促しつゝ、煎茶を薦めて勞へば、通能は含笑ながら、聲を低めて答る

やう、韓錦主歡び給へ、去向の首尾は亙からず。嚮にこの茶店を出しより、我們主僕足に信して、彼父女を逐ふ程に、約莫二里有餘にして、字を孤禽と喚做したる、一村落に飯店あり。件の父女は其店舖にて、晝餉を喫てありけるを、己逸早く見出しける、その歡びはいふべうもあらず。主共侶に找入りて、名名をすれば彼父女は、箸を禁めつ得と見て、慌惑ひて発見より、滾が像く地上に伏て、三拜四拜も尙足らず、幾回となく額を衝て、感謝に堪ず且いふやう、兩恩人上に在す。小人過世福あらで、曩には禍鬼身に黄縁りて、這兩眼を打潰され、この向脛を折かれしより、日凭衢の磯に漂泊ひ、脚なき蟹の澤邊に惱る、進退旣に谷りて、父女袖乞になるまでに、殆饑渇に迫りし折から、菩薩に彌増兩君子の、過らせ給ふに邂逅して、世に未曾有の仙丹を、多く施し給はりしより、卽效神速失たず、是覽せ兩眼隻脚も、故の如くに痊果て自由を得てけるのみならず、昨日賜りし金さへあれば、蚤く那首を立去りて、餘毒を避まく思ふものから、兩君子の洪恩德義を、仰げば須彌も猶低く、伏て思へば四海も、猶淺かりなん歡びを、亦稟すべきよしもなく、那儘にして其後の、安否も得問はずなりゆきぬるを、こゝろ苦しく思ひしのみ。投て往方は定めねども、今日は女兒を扶掖て、方纔這里まで來にけるに、料らざりける兩君子も、亦這路を過らせ給ふ賦。得がたかるべき再會は、夢賦現賦夢ならば、

覺ずもあれ、と諄復す、親はさらなり少女子も、感涙袖を絞るまでに、受し恩惠を云云と、罄ぬ詞の露ならで、淸き心ぞ知られたる。我們主僕聞果て、且慰めて答るやう、己等兩箇茲まで來ぬるは、汝父女を追んとてなり。叟の痍瘡の早に愈て、今朝父女共侶に、那里を立去り給ひしよしは、茶店の媪に聞知りて、遺し置れし渾不似さへ、見るに餘波の惜まれて、いかで面談せま欲しく、思ふよしさへあるものを、空にはせじと那里にて、聞つる去向を心當に、跡を慕ふて來つるなり。と告るに歡ぶ件の父女は、亦只感謝の外あらず、且敬ひ且畏みて、左右なくは身を起さゞりしを、我們主僕屢請ふて、先其晝餉を果さしつ、却共侶に片隅なる、発兒に徙り額を交へて、密談數刻に及びたる、その要緊の條々は、いはでもしるき事ながら、昨宵部領河原の顚末を首にて、和殿弟兄先非を悔て、我們主僕を媒人にて、いかで件の旅の父女と、和睦の酒盃を饒されなば、白猪の宿所に迎執て、扶助にならんと誓ひたる、誠心誠意の崖略を、主僕迭代りに傳示して、只管和睦を薦めしかば、父女は耳を敧けて、聞果て謝していふやう、世にも人にも捨られて、袖乞にまでなりにたる、我們父女を人がましく、思食たればこそ、昨宵も夜通今日も亦、三里の路を遠しとせで、玉趾を枉させ給ひしは、親にも彌增大慈善、好が上にも好れとて、敎諭させ給ひぬるに、何でふ推辭まつるべき。聞くが如きは彼韓錦が、一語

の下に昨非を知りて、恩怨悉く地を易しも、亦兩君の徳に由るのみ。人既に本然の、善に復りて和睦を請ふに、猶疑ふてゆかずもあらば、鄙語にいふ羹に、懲て齏を吹くが如けん。左にも右にも君等の隨意、宜く憑み奉る、と言語雄々しく答るをりから、和殿のおこし給ひぬる、彼轎夫等が空轎を、舁つゝ件の店頭を、過るを脘子成勝ないふの見出して、一聲ヤヤと喚被れば、轎夫毎は驚きながら、見かへりつ歡びて、原來茲に在ましにけり。幸あり幸あり、といひつゝも、一箇の轎夫找入りて、我們主僕に告るやう、旅客達を迎へよとて、韓錦主に吩咐られて、刀禰們の御跡を、慕ふていそぎ來つるなり。就て刀禰們の晝餉の盒子も、又客人にまゐらせよとある、衣物も袱に、包みて筱轎の裡にあり。先御腹を繕ふて、出させ給へ。と說諭れば、其餘三箇の轎夫は、額と胸に流るゝ汗を、拭ひもあへず筱轎の戸を、開きて盒子と袱裹を、拿出て咱等に渡すにぞ、大江脘子も云云と、轎夫等を勞ふて、先彼等にも餐兒を分ちて、酒飲せなどしつゝ、却件の父女に向ひて、和殿の心を用ひられたる、事の趣云々、と告てその衣をも被すべく、筱轎に乘とて薦めしに、件の父女は從はず、父親且答るやう、我們孤獨の旅客なるに、兩君子の徳義によりて、恥を雪るのみならず、咋の寃家は今の知己に、ならるゝは世に稀なる、幸ひにて候に、彼人贈給はればとて、いまだ和睦の禮にも及ばず、この衣を被てその轎子に、

乘て這里へかゆかるべき。兩君子の御示教に、悖るは無禮にて非義に似たれど、この義ばかりは饒させ給へ。我身病後にあなれども、路を走りて疲勞を覺ず、便是仙丹の、經驗にこそ候はめ。いかで〳〵。とばかりに、受引くべくもあらざりける。かゝる折から八重作舍弟の、撲損早に愈たりとて、跡を慕ふて來にければ、我們驚て呼入れて、和睦成就の顚末を、云々と告示すに、舍弟は聞つゝ歡びに堪ず、先仙丹の奇效を謝して、玆に創彼父女と、和睦莫逆の口誼を演て、和殿は今朝より彼茶店に、俟るゝよしを告知らせて、齎したる彼衣を、件の父女に被せまくするに、彼旅客は猶辭ふて、在下子路の勇なけれども、衣の敝れたるを耻とせず。只不義の富を欲して、名利の奴に傚らんことを耻とす。强情に似て候へども、只この隨にてあらんこそ、胸最安く候なれ、といふを腋子は猶諭して、和殿の心の淸かるは、夜光の玉にも殊ふべし。なれども亦己を枉て、人の意見に從ふを、溫良の君子とこそいはめ。既に和睦は整ひしに、彼人の贈物を受ずもあらば、心の隔あるに似て、橋を渡しし我們さへ、倒に面伏にて、快らざる所あり。この義を思ひ給はずや、と說れて亦旅客は默然として、辭するに由なく、やうやくにして答るやう、敎諭寔に其理あり。然らば其衣を借まつりて、父女の身の皮を繕ふべし。轎子の義は從ひがたし、といふに腋子も己等も、开を亦强んはさすがにて、商量竟に整ひしかば、

我們主僕は盒子を開きて、物欲かりし腹を繕ひ、亦旅客父女にも、薦めて二たび箸を弁せて、餘れる盒子は八重作舎弟と、轎夫等に盡させて、倶に出まくしぬる程に、吶等はこの義を逸早く、和殿に告も知らせんとて、走りてかへり來つるなり。彼旅客は思ふに増たる、清白の浪士なり。其姓名を問試みしに、原是筑石の人氏にて、鷺森松煙齋と號するといへり。其性手迹を好みしかば、髫歳の昔より、弘法大師の法帖を、學こと年を歷て、聊筆意を得たりしのみ、人の師になることを好まず。故ありて十稔近く、諸國を偏歷しぬる隨に、其書を需る人あれば、其潤筆を得て、父と女兒の、盤纏に充る者なりとぞ。和殿この義を知りたる歟。と問れて樅二郎は、怡悦に堪ず、含笑ながら、頭を掻て、通能に謝していふやう、在下性愚にて、暴漫の罪多かりしに、倘兩君子の扱引ならずは、彼人の怨早に解て、今この田地に至んや。彼旅客の性名は、曩に聞かざるにあらねども、媚譚の事氷炭合ねば、果は迭に怨を累ねて、田文の乞食と罵しのみ、松煙齋と號するよしは、忘れて思ひも出ざりき。實に恥べきことにこそ。と答る詞も訖らぬ折から、見越松時八と、鶴脛奈我四郎は、韓錦弟兄の、かへさの遲きを俟不樂て、心許なくや思ひけん、迎への爲に來にければ、樅二郎は喚近づけて、和睦の首尾を告知らせ、時八は疾我宿所へ、ゆきて押絡に傳示して、客人達を饗饌の、用意をいそがしね。ゆきね〳〵。

浩處に八重作は白猪を投てぞ走りける。兄楓二郎に報るやう、松煙と彼篭輪成勝等に先だちて、單慌しくかへり來つ、先通能に會釋して、大江主が誘へて、少女をばやうやくに、强情にして歩行より來ぬれど、乘て、目今其首まで倶せられたり。和順の對面に、茲は中途の事ながら、酒なくはあるべからずとて、そも亦大江主の相計ひて、菰禽の飯店にて、酒殽を沽拿りて、殘る空轎にうち載て、そをしも齎し給ひにき。なれども這里は腰掛茶屋にて、發兒の外に坐席なし。この故に少女をば、そが儘にして猶篭輪に、在らするもよかゝなん、この義をいへと大江主に、吩咐られて候なり。と告るを楓二郎うち聞て、开は亦意外の造化なり。遺る隈なき刀禰們の、指揮を孰が推辭べき。奈我四郎は、八重作と倶に、彼人々を出迎へよ。いで〳〵。といひつゝも、衣領搔合せ身繕ひして、出て松煙齋等を俟程に、通能も共侶に、店前に立て在り。程しもあらず成勝は、彼少女子の篭輪を先に立して、松煙齋を倶して來ぬる、後方に從ふ八重作奈我四、意氣揚々たる开が中に、松煙齋の打扮は、都て昨日の窶れたるに似ず、縹緗織なる仁田山紬の夾衣の、尙巳の時ばかりなるを被て、烏羅の外套綺羅やかに、彼朝櫻と歟いふ短刀を腰にしたる、人品骨相鄙からず、實に是文人にて、昔は某甲殿に仕たる、刀筆の吏にもやありつらん、と見

ゆる面部の拳痍は、一夜の間に皆愈て、その迹纔に遺りしのみ。茶店の媼さへ是を見て、舌を吐き胆を潰して、奇なり奇なり。と稱贊す。當下縦二郎と通能は、左右に別れ相迎へて、引て茶店に請入るゝに、少女は篗轎に乘たる儘にて、猶いまだ出さず、壯夫等の團坐する、この陜莚に少女子を、交ふべくもあらざれば、成勝この義をこゝろ得させて、形の如くに相計たり。然ればこの茶店は、松の粒樹を柱にして、竹を横たへて桁にしたる、葭簀天井の外に物もなく、只奥まりたる所には、壤を三尺ばかり裝上て、簷廊の像くにしたるに、故たる間道の華席を、纔に三枚布きたるあり。大江主僕はこの長席に、松煙縦二郎等を請登る程に、八重作と奈我四郎は茶店の媼に手傳ふて、酒を盪め酒菜を出すに、盃だにもあることなければ、茶碗を茶托にうち載て、もて出たるもいとをかし。當下成勝通能は、倶に壽の詞を演ていふやう、兩賢兄我們不肖にして、事聽れずといふ者なく、和睦の歡びを盡すに及びて、いかにせん、己等も亦旅客なれば、席を開くに所なし。この故に古語に云、一樹の陰に相坐して、一河の流れを汲せまく欲す。いかで海容あれかし。といひつゝ兩箇の茶碗を分ちて左右に措て薦れば、縦二郎と松煙齋は、倶に茶碗を受戴きて、謝して且縦二郎がいへらく、在下性愚にて、人を知るに維疎く、短慮淺智の癖なれば、廉士孝女を虐げたる、其罪萬死に當れるを、幸ひにして大江峯張

兩君子の幇助によりて、主の怨を解れしは、歡び是に優す者なし。願ふは今日より刎頸の、交を許されなば、憂を分ち樂を共にして、身を終るまで違ふことなかるべし。倘この誓に背きなば、身は天雷に撃摧れて、來世は永劫奈落に淪ん。急々如律令、と誓畢れば、松煙齋も俱に誓ひて、今や怨敵骨肉に等しく、魯衞の好みを結れたる、歡びを演る時、峯張通能こゝろ得て、酒を移しゝ土瓶を把りて、左右一齊酌易す、和睦の式禮事終れば、少女は篭轎の戸を開きて、出まくするに草履なければ、そが隨にして樅二郎等に、向ひて額を衝禮を做す、その擧動の大人備たるを、人僉ヤヤと感稱す。开が中に松煙齋は、樅二郎にうち向ひて、嚮には己等父女の爲に、美衣二領贈り給ひし、それすら當りがたかるに、況轎子をもて迎へられたる、抑何等の結構ぞ。芳恩謝するに詞なし。最辱く候。といふを樅二郎聞あへず、否とよ曩には歹人等に、行李さへ奪畧れ給ひしといふ、當時人の噂に聞くのみ、我知る事にあらねども、心に快ざる所あり、切て然ばかりの衣なりとも、償ずはあるべからず、と思ふばかりの寸志にこそ。といはれて松煙齋は感謝に堪ず、成勝と通能も、主客の廉直任俠を、稱て云云と嘆れば、八重作と奈我四郎は、亦改めて松煙齋に、名告をしつゝ和睦の祝壽、その歡びも餘りある、茶碗拾ふて轎夫等にまで、殘れる樽を盡させて、媼さへ漏れぬ茶碗酒、御馳走さまや、と夕陽剌す、

大江主僕に謝していふやう、當時縱二郎は、皆薄醉になりにけり。既に日影は斜にて、下晡になりたるに、誘給へ、葭簀の目さへちらつきて、兩君子の御庇にて、今又一箇の良友を得たり。昨夜は不睡の疲勞にて、さこそ懶くをはすらめ。と松煙主共侶に、宿所へ請ふて夕餉を薦ん。いふを主僕は聞あへず、その義は歎ふに足らねども、茲は長譚の園にあらず、皆立給はずや。といそがせば、松煙齋も辭ふによしなく、左にも右にも諸君子の、隨意從ひ奉らん、饒し給へ。と身を起せば、八重作は轎夫等に、こゝろ得させて松煙齋をも、筳轎に乘まく欲するに、松煙齋は推辭て乘らず、只得少女の乘たる筳轎を、先に立しつ空轎には、物なき盒子と空榻を、乘せて後方に舁せたる、那が中に通能は、茶店の媼を勞ふて、茶價を拿らせまく欲するに、媼は決して受納せず、その義は嚮に韓錦主の、金壹分賜りたるだに、過分の茶價に侍るものを、今亦何を歎受まつらんや。と推辭ば亦縱二郎も、禁めて些も費させず、手を掖立て出にけり。當下成勝通能は、西の方を膽仰て、倘暮るゝは程あるべきに、己等は用文の地藏へ、詣で迹よりゆかんといふ、事情を云々、と縱二郎に告しかば、然らば八重作まれ奈我四郎まれ、案内の爲に從へとて、彼等兩箇に吩咐るを、成勝と通能は、遠くもあらぬ程なるに、郷導兒は要なしとて、蚤くも路を横ぎりて、地藏堂を投ていそぎけり。爾程に韓錦縱二郎は、弟八重作共侶

に、松煙齋父女に相俱して、白猪の宿所へかへり來ぬる、其路三四町になりし時、奈我四郎は先へ走りて、押繪に右と告るなるべし。然ればこの日留守したる、見越松時八は、厨挊き事果し折、主の還ると聞えしかば、鶴脛奈我四郎と、俱に折戸口まで出迎へたる、其敬禮大かたならず。當下樅二郎は、轎夫等にこゝろ得させて、少女の籠轎を开が儘に、簷廊に舁よせさすれば、押繪は蚤く出て來つ、其戸をやをら推開きて、手を拿りて坐席に請待す。是日少女の打扮は、思ふにも似ず鄙ならぬ、絳梅織なる、陸尺袖の夾衣に、緋の縐の汗衫裙長く、端磨たる金襴の帶、玉梓に締做せる、年紀は二八可にて、桃花の脣、臥蠶の眉、有斯る縣はいふにしも足らず、春の花の京都にも、秋の月の浪速にも、儔多からずと見ゆるものから、闕たる所はまだ浴せず、然しも長かる雲鬟は、故の儘にて梳らず、只草手束なりけるは、磨き遺せる鏡の塵歟、玉に疵ある心地す、と思はぬ者なんなかりける。當下八重作奈我四郎は、轎夫等を背門の方に呼入れて茶を飲せ、足を取らせて返し遣りける。是より先に坐席なる、樅二郎は松煙齋を、上坐に請薦めたる、迭の謙遜稍果て、賓主の席定りしかば、押繪は二たび出て來つ、松煙父女に茶を薦め、果子を薦めて和睦の歡び、言叮寧なる名對面に、松煙齋は席を避て、思ひがけなく今宵より、主せらるゝ歡びを、陳れば少女は親の後方より、おそる〳〵膝を拱めて、樅二郎及

押繪等に、衣さへ籠轎さへ惠れたる、饗應の淺からぬ、過世怪しき身の幸を、謝するも言語寡にて、初々しくのみ見えけるを、押繪はさこそ、と慰めて、兄縱二郎に向ひていふやう、昨今は日の長き、涯りなればまだ暮ねども、客人達は物ほしき、時候にこそおはすめれ。夕饌をやまゐらすべき。といへば縱二郎頷きて、それよかゝなん、出しね。といふを松煙齋推禁めて、否、己等のみならば、方僅田文の茶店にて、沙量にはあれど酒菜さへ、飽までたうべ侍りしかば、夕餉はいまだ欲からず。況大江峯張の、まだかへり來まさぬに、そを俟ずして己等のみ、物賜らば無禮也非義也。只うち捨て閣せ給へ。と辭ふを縱二郎強離て、爾らば貴意に任すべし。令愛も介意なく、先果子なりともたうべ給へ。押繪那茶は冷つらん、汲易てまゐらせずや。といふに押繪は應をしつゝ、茶碗拾ふて漆盆に、載ていそしく立にけり。是よりの後縱二郎は、松煙齋と對坐して、四表八表の言の次に、大江峯張の德を稱え、己が短慮淺計を、後悔の外なかりしかば、松煙齋慰めて、其義は和殿のみならず、吾等も一時の怒に乘して、不測の禍を釀したる、年に似げなき愆なるも、世は塞翁が馬なるかな、冤家は反て知己となる、一富一賤、交情異なる、損益兩友我に在り。その志合ざれば、肝膽も胡越の如く、其志同ければ、千里も合壁に似たるべし。果敢なき者は心にこそ。といはれて縱二郎咨嗟に堪ず、貴老は

正に學問あり、多文多識のみならず、心操の方正なる、已等が企及ぶべきにあらず。就て諮奉る貴老は素是筑石の人にて、這年來手跡をもて、諸國を遊歴し給ふにあらずや。因て思ふに其稱號鷺森松煙齋と歟喚做さるゝは故あることにて、昔は由緒ある名家の末歟。とばかりにして我上を、詳に告げずもあらば、何をもて疑ひを解れん。既に斯莫逆の、交を結れぬる上は、今さら匿すべくもあらず。我本貫も筑石にて、父は間貫佐用六郎故世と喚れて、一諸侯の舊臣なりしに、故ありて流浪しつ、我身髫歳なりし比、二親に携られて、同胞倶にこの地に來つ。その後父母世を去りて、我身の便著なき隨に、武藝をもて口を餬ひしより、地方の人綽號して、韓錦縱二郎と喚做したり、そは只角觝の上にいふのみ。本姓は間貫氏にて、佐用二郎望洋是也。弟兄怎なる因果也けん弟も亦角觝を好めば、奈良櫻と喚れ、八重作と名告ども、實は佐之七次世是なり。又我弟のみならず、見らるゝ如く女弟押繪も、身材高くして、些の膂力あり、皆只勇を好むのみ、心術怜悧からざれは、牆に鬩ぐの僻事なきも、外其侮りを防ぐに足らず。這回我身の愆も、短慮淺智の做す所、恥しくこそ候なれ。と喞言がましく聲潸して、告るに驚く松煙齋は、憶はず兩手を拍鳴して、奇なる哉奇也けり。原來和殿弟兄は、我爲に故朋輩なる、間貫佐用六故世叟の、兒達にてありけるよ。知らぬ事とて昨日まで、路上の人と見しのみならず、一旦怨を

結びしは、迭に千慮の一失と、いふとも孰歟諸なふべき、後悔その詮なきことながら、料らずも今和睦して、名告會しは宿因の、いまだ盡ざる所にて、是切てもの幸なりき。といふに少女も胸を潰して、奇遇を感嘆したりける。この段文尚多ければ、又下回に、分解るを聽ねかし。

續編 卷之二十三

第五十三回

季彦孤忠東西に履歷す
範的奸惡縱二郎を寛す

登時韓錦の間貫佐用二郎は、松煙齋と問答の語次に、他は己が亡父親、佐用六故世の故朋輩なりしを、玆にはじめて聞知りて、疑の霧いまだ霽ねば、思はずも膝を找めて、先生何といはるゝやらん、貴老は我先大人佐用六故の、故朋輩ならんには、我身髫歳なりし比、二親の夜話に、然者ありと傳へ聞たる、肥後の菊地家の一忠臣、防守筑四郎季彦叟の、倣れる果にはあらざるや。と訝り問はれて、然ばとよ、我身和殿の父大人と、倶に舊里に世を潛たる、其比和殿等弟兄は、尚幼彌かりしかば、今は迭に面忘れて、いはねば、知らず知るよしもなく、一旦怨を結びしより、和睦の今料らずも、言の玆に及べるは、是舊緣の盡ざる所、素懷を遂るに似たれども、故世主世に在さねば、故りにしことを孰に歟語ん。切てもの心遣りに、我年來の宿念を、和殿に告まく思へども、憚りの關、壁に耳、そを思はずはあるべからず。といふを佐用二郎聞

あへず、其義ならば配慮は要なし。我一家兒なるは、弟佐之七八重作といふと女弟のみ。角觝の弟子奈我四時八は、今尙庖湢にあるべけれども、他等も都腹心なり、洩聞とてもけしうはあらず。いかで〱。と請問へば、松煙齋の筑四郎は、四下を見かへり聲を低めて、然らば意衷を盡すべし、言多くとも聞給へ。在昔南朝の殘燼なりける、我舊君菊池肥後太郎武俊朝臣、武勇は父祖に彌增たる、孤忠義烈のこゝろもて、興復の夙望已時なく、肥後の阿蘇山の敗城に、義旗を揚給ひしかば、當時足利家より討隊の頭人、防長豐筑數州の守、大内左京權大夫義興主、數萬騎に將として、うち向ふと聞えしをり、躬方は素より小勢にて、外に援の兵なければ、敵の猛威に聆怯して、落ゆく者のみ多かりける。然ばこそあれ武俊主は、勝負を未然に量りしより、一箇も躬方を擊せじとて、有一夜風雨の暗きに紛れて、士卒と共に城を棄て、往方も知らずなり給へば、寄隊は手も濡さずして、全勝の利を得ぬるに似たれど、然ればとてさせる功なければ、義興怒を移しにけん、人の諫を聽ずして、彼阿蘇沼の蛇穴を燔て、軈て凱陣したりける。此は是永正六年己巳の春二月の事にして、二十餘年の昔になりぬ。それよりして世はいよいよ亂れて、京師は戰馬に荒るゝまで、東西の海、風波噪ぎて、國民安からざる幵が中に、武俊君の夫人にてをはしましける、小芳宜の方と聞えしを、阿蘇の山里に潛せまつりて、給事しぬ

る者は、我筑四郎季彦夫婦と、和殿の二親只是のみ。倶に馬を飼薪を樵、或は潮を汲み貝を拾ひて、辛き浮世を不樂しらに、小芳宜の方に仕まつりて、武俊主の御往方を、悄々地に索まつれど、生死存亡を知るよしもなく、只憂かりける光陰のみ、立こと早く十稔を歴にける、永正十五年の秋の時候、和殿の父大人故世叟、有一日咱等に譚ずるやう、屬日人の噂に聞くに、舊君太郎武俊君は、阿蘇山落城の初より、東國の方に世を避給ひて、近會身故り給ひしとも聞え、或は猶存命て、をはしますともいへり。虛實詳ならねども、這里にて額をうち合て、徒に物を思はんより、咱等は宅眷を携て、京浪速いへばさら也、關の東を巡歷りて、我君の御所在を、索奉らばやと思ふ也。然すれば和殿夫婦のみにて、小芳宜の方に給事して、衣食其餘の東西までも、調達しまつらんことは、いよ〳〵太義なるべけれども、光陰に關守あることなければ、壯年の今思ひたゞで、氣力と倶に脚腰さへ、衰へぬる老後に至らば、千里の逆路を欲するとも、いかにして克せんや。この義を何と思ひ給ふ、と問れて己答るやう、行も住るも忠義の外なし。和殿は遠くこの地を去て、彼御所在を索ね奉り、咱等夫婦は留りて、夫人に仕へまつらんこそ、いはるゝ如く便宜ならめ。但老少不定也、命の長短料りがたかり、一たび袂を分ちしより、迭に本意を遂ずして、後れ先だつ露の命の、他鄉に終ることあらば、兒

子等は幼仯し、親の契りし其人を、知らず知られずなりもせば、忠心義膽埋れて、子孫の世には知らざるべし、倶に紀を貽さん歟。といふに故世主感佩して、其義寔に爾るべし、紀は手跡に優す者なし。和殿は素より能書也、何まれ一筆貽し給へ、と乞れて辭ふべきにあらねば、軈て其意に任しつゝ、短册一枚とり出して、墨摺流し筆を染て、

遠つ人松浦佐用媛都祕戀に領巾麾りしより負へる山の名

と萬葉集なる古歌を寫しつ、その短册を兩箇に裁て、上の方を佐用六叟に授け、下の方を我懐に、斂めて且いへらく、今よりの後年を歷ても、再會の時を得がたくは、今日の契りを兒孫に告げて、各この短册半分を、授けて當時の照据にさせん。和殿の家子佐用二朖子は、稍東西を知る童蒙也。況我獨女なる、捘手は纔に五歲になりぬ。憑しからぬ者なれども、幸ひにして共侶に、本性尙古の志あらば、後の裨益になりもやせん、といふに佐用六叟諸感じて、然らば亦所望あり、我家子佐用二郎と、和殿の令愛捘手童女と、目今親の心もて、結髮の夫婦に倣さば、年久しく逢ふよしなくとも、親の契りを忘れずして、迭に所在を尋索めて、後竟に妹と夫の、緣しを結ぶこともやあらん。この義誰何、と談ぜらる。己是をうち聞て、頭を掉りつゝ答るやう、廾も由なきにあらねども、我思ふ義は爾らず。男女迭に稚きより、結髮の夫

婦といふは、富貴舊家の上にこそあるべけれ、和殿と我は日陰の花にて、兒子も一所不住なるに、今婚姻を定るとも、生涯環會ずもあらば、倶に徒に節義を守りて、娶らず嫁らであるべきや。縱年闌て、環會日のありとても、約莫男女の情縁は、稚き時と同じからず、迭に成人るに及びて、外に增花あるに至らば、倶に厭しく思ふべし。然る時は親をも怨る、其害ありて其利なし。是に因てこれを思へば、婚姻の事は議すべからず、といふに佐用六叟再議に及ばず、いはるゝ趣皆理あり。然らば自然に任せんとて、密談既に果しかば、當晩佐用六叟は、夫婦小芳宜の方の御前にまゐりて、主君の御所在を索まく欲しぬる、臆念を告稟して、身の暇を乞まつりしかば、小芳宜の方は禁めかねて、餘波を惜ませ給ふのみ。是時までも猶些の、御貯祿ありければ、則餞別にとて、黃白幾枚歟賜りつ、彼身の暇を拿らせ給へば、佐用六叟は拜謝して、逆路の准備も密々に、其年の八月下旬に、宅眷を遺なく携て、東を投てぞ立去りける。是よりの後彼君に、仕へまつる者とては、我們夫婦のみなれば、艱苦八入に彌增て、心細くもありし程、小芳宜の方は年來の、御煩襟蘊りてや、その次の年の春の時候より、長き病痾に臥給ひて、鍼灸藥餌の驗なく、竟に神去り給ひしかば、我們夫婦の哀悼悲泣は、亦いふべうもあらずかし。却あるべきにあらざれば、御亡骸は潛やかに、程遠からぬ山院に、埋葬し奉れども、世に憚

の多かれば、只その御墓表には、望夫石の三言を勒して、菩提を弔ひ奉る程に、幸なしごとのみうち續きて、我妻音矢はその年の冬、持病の癪聚身に迫りて、黄なる泉に歸りしかば、命難面き我身のみ、春の雁の對を喪ひ、孤孫の枝に離しに異ならず、松の操も甲斐なきまでに、只呉竹の世を不樂て、慰る者とては、稚き女兒のみなれば、左さま右さま思惟るに、今は仕る君もなし、茲にて艱苦を凌んより、小芳宜の方と我妻音矢の、小祥忌を果しなば、我も間貫佐用六の志に效ひてぞ、我君の御所在を、索巡るにしくことあらじ、と竟に深念を定めしかば、當年纔に七歳になりける、女兒撥手を携て、啓行しぬる時、佐用六叟とは路を易て、先西の九箇國を、遺もなく偏歷しつゝ、南海四國に杖を曳に、日を重年を累ることを厭はず、這里に三月那里に半年、我書を需る人の爲に、逗留してその潤筆を、盤纏に充ずといふことなく、三四稔を歷ぬるまで、欲する所は我君の、御所在を涉獵れども、それとしるべき便なければ、更に東に赴きて、佐用六叟に環も會はど、商量敵になりもやせん、と思ふばかりに京師浪速に、旅宿しぬれど他も亦、何處に在るや知るよしなければ、遂に越路に杖を曳きて、越中越後いへばさら也、加賀能登佐渡へも推渡りて、身の久後はえぞ知らぬ、出羽陸奧の盡處までも、漏す隈なき長旅に、又四五稔を歷ぬる程に、女兒撥手は年闌て、既に二八になる隨に、教されども縫

刺の技、草書も拙なからず、書讀むことさへ好みしかば、逗留の程人に借りて、源氏宇津保竹採なんど、假字文章にもこゝろを得たり。然りとて浮たる本性ならず、第一親に孝順にて、容止も亦醜からねば、ゆく里毎に娶らまく、欲するもありしかど、我いかにして承引べき。或は亦逆路には、護摩の灰、人肉經紀など呼做されて、他鄕より來ぬる婦女子を、勾引しぬる盜兒あれば、そを守るをのみ勤にしたる、然らでも羇旅は憂きものなるに、姥捨山の月ならで、只挼手にのみ慰められて、去歳より信濃の山里に在り、今茲は上毛武藏より、常陸下總安房上總まで、尙我君の御隱宅を、索奉らまく思ひつゝ、三月の時候に那里を去りて、料らずもこの白猪の驛路を、過るその日に持病發りて、逗留の程和殿の爲に、挼手を媒妁せられしより、迭に怨を結びつゝ、果は和睦の今に至りて、倶に素生を解諦せば、豈憶んや和殿は是、昔契りし我故朋輩、間貫佐用六故世叟の、冢子佐用二であらんとは。其二親は世にまさで、我本意空になるに似たれど、親に優すべき弟兄に、名告逢しは尙憑もしく、歡びにこそ。といふ。過去來の長談脩話に、韓錦の佐用二郎は、胸を潰しつ且羞て、額の汗を拭ひもあへず、赧然たる頭を擡げて、嗟嘆に堪ず答るやう、思ひきや防守先生、貴老の忠義は我亡父に、十倍したる憂苦艱難、今はじめて聞くからに、我身を羞殺せられんとは。抑我親佐用六故世は、昔年肥後を辭

去りて、京に一稔浪速に一稔、僑居して舊君の、所在を索奉りしに、寔も便を得ざりしかば、然らば東國に赴んとて、猶亦宅眷を携て、この地に來つゝ料らず聞くに、故の領主部領の郡領武彦主は、肥後の菊池と同族にて、數世の遠祖の時、東西に別れたりければ、世の人是を知者稀なり。然れば菊池武俊主は、昔永正六年の春の時候、阿蘇山の城沒落の後、一二の近習を從へて、この地に潛びていましゝに、時運竟に至らずして、それより纔に三稔の後、永正八年の夏の時候、那身時疫に犯されて、命卒しくなり給ひしかば、兩箇の近習は殉腹切て同枕に伏したりける。然ば當時由緣の者あり、彼主從の亡骸を、這白猪の驛盡處なる、阿甦禪院に密葬して、南忠主僕之墓といふ、六言を鐫做して、墓表にしたりといふ、其墳墓は今も猶、彼禪院の後の山にあり。先生ゆきて見給はゞ、紛れあるべうもあらずかし。是よりの後十稔を歷て、我二親は兒子を將て、この地に旅宿しつるなり、憶りなく彼祕事を、聞知ることを得てければ、其御先途に逢ざりしを、悔恨めどもせん術なし。切て舊君終焉の、この地に杖を駐めてこそ、兒子等が爲に我生涯の謀を做すべけれとて、則玆に居宅をトて、武藝を人に敎えつゝ、身の生活にしてけるに、今戰國の習俗にて、里の總角牛打つ童も、武藝を嗜ざる者あることなければ、その業大く行れて、富にあらねど貧しくもあらず、世は倒に安かりき、と思ふにも似ず我

父は、這地に杖を住めしより、五稔といふ春三月の時候、嗜める酒に身を損れて、吐血して世を去りぬ。既に其終に臨て、我佐用二郎を枕方に、招きよせつゝ遺言の條々、曩に肥後に在りし時、同僚なりける、防守氏と共侶に、武俊主の夫人なる、小芳宜の方に仕へまつりし、その事の首より、この地に來つる尾まで、絶なんとする息の下に、其崖略を說示して、且いへらく、我身この地に住著し其比より、いかで舊里阿蘇山なる、防守筑四郎に消息して、舊君太郎武俊主は、この地に早逝し給ひにきと聞えたる、彼上の實說を、詳に告ばや、と思はざるにあらねども、いかにせん肥後の舊里は、其路二百十數里の、山と海とに隔絶す、況亂世の不自由なる脚力郵書の便著なし。非如鴻便ありとても、世にも人にも憚りぬる、一大事なる我祕書を、人傳には遣しがたかり。汝このこゝろを得て、財用餘りある日もあらば、いかで故鄉へ赴きて、彼方ざまを訪まつりて、防守夫婦に我宿念を、云々と告よかし。遮莫汝が親に携られて、阿蘇の山里を去りにし比は、尚髫歳にてありしかば、年闌て防守叟に、名告逢まくしぬるとも、既に迭に面忘れて、疑るゝ事もあらん。其再會の照据には、我身袂を分つをり、筑四郎が書し古歌の短册あり。其短册を兩箇に裁て、その半分は我方に、藏めて今尚茲にあり。是を汝に渡すべし、護身嚢に祕措きて、異日の用に達よかし。其半分は筑四郎が、必や祕藏するならん。か

ばかり正しき符契なければ、再會の折是を取出て、他に見せなば疑はざるべし。この餘の事は云々、と貴老の令愛接手童女を、我等が爲に結髮の、約束せまく欲しゝに、貴老は敢承引ず、理りを演て推辭給ひし、その言の顚末まで、霜の朝に鳴く虫よりも、細れる聲を勵して、告示す者半晌許、其甲夜の間に呼吸絕にき。我身の不幸は是のみならで、母親も亦その次の年、癰てふ瘡の背に出きて、病こといまだ久しからず、軈て空しくなりにけり。四月八日を忌日とす。二親共に阿魅寺なる、舊君の墳墓の、頭にぞ葬りける。我身不肖におなれども、是よりの後志を勵して、親の箕裘を承嗣て、武事力藝をもて人の師に、做り得て敢家聲を貶さず、俠を磨き氣を使ふて、後れを攬らじとのみ思ひしは、只是血氣の惑ひなりき。先彼符契を見せまつらん。といひつゝ肌膚囊を搔撈りて、彼短册の半分を、拿出して引伸す程に、親の身邊に側聞せる、接手は亟くこゝろ得て、項に掛たる護身囊の、括を開きつその短册の、半分を出しつゝ、袂を掖きて親に遞與せば、李彥やをら受とりて、膝を找めて此彼兩箇の、その短册をうち合せて、見もし見らるゝ稀代の符契、佐用二郞が藏めしは、其短册の上の方にて、遠つ人松浦領巾麾りしより、と二行に讀れ、松煙齋の防守筑四郞季彥が出せるは、其短册の下の方にて、佐用媛都麻戀に、負へる山の名、と亦是二行に讀れたる、是を合して吟ずれば、

遠つ人松浦佐用媛都靡戀に領巾麾りしより負へる山の名と連續したる名歌の高調、そを寫しゝも能書にて、同筆同紙に疑ひなければ、韓錦の佐用二郎は、又縱に見つ横に見つ、奇也奇なり。と駭嘆の外に詞はなかりける。當下防守季彥は、その短册を故の如く、分ちて斂め斂めさせて、愀然たる貌を改め、佐用二郎にうち向ひて、適候韓錦、和殿の孝義、虛しからねばこそ、相別れてより十二年、親の貽しゝ符契の短册、料らず相合事を得たれ。かくいはゞ何とやらん、人を羨むに似たれども、大凡は人の命運に、遲速あり厚薄あり。和殿の爹々故世叟は、主君を索ねまつらんとて、小芳宜の方に辭稟しつ、宅眷を遺なく携て、故鄕を去りて草枕、旅に在ること久しからず、料らずもこの地に來て、舊君太郎武俊主の、世に在さゞりしを撈得て、其墳墓さへ見ることを得たり、是その時運の速きにあらずや。剏又兒子三名あり、兩箇は則男兒にて、親の家業を繼に足れり。其心術も推て知るべし。我身は他と同じからず、初故鄕に在りし時、小芳宜の方に仕まつりし、忠信節義の甲斐なきまでに、彼君御命長からで、世を去り給ひて幾程もなく、我妻音矢も逝きしより、かへらぬ黃泉の客になりぬ。跡に遺るは幼少かりし、這個の女の子捘手のみ、外に資る男兒なければ、形なき身の遣る方なく、いかで主君の御隱宅を、索ね奉らばやと思ひつゝ、當日纔に七歲にな

りける、女兒掖手を携て、萬里の逆路に赴きしより、今に至りて八九年、憂苦艱難は、いふまでもあらず、是年今月這地に於て、主君は既に世になき人の、數にしも入り給ひしを、只人傳に聞るのみ。思ひし事は畫餅に做りて、父女法師にならんのみ、是命運の薄きにあらずや。初我、和殿の爹々に別るゝ時、再會の符契に代て、その短册に寫したる、萬葉集の彼古歌は、間貫佐用六といひ、防守筑四といふ、迭の姓名に寓れるのみ、深き意味あることならざりしを、今さら思へば以あるに似たり。何とならば、小芳宜の方の御憂死は、在昔松浦佐用媛が、良人大伴挾手彥を、戀慕のあまり、領巾麾りて、死して石に做りにきといふ、古俗の口碑に伯仲すべし。然ればにや彼御墓表に、望夫石の三言を、勒しゝは自然に似たり。況臣季彥等は、鰥にして稚き女兒を、逆路に伴ふ辛苦の折々、故妻戀しと思はぬ時なく、女兒掖手が孝順なる、母を慕ふて泣ぬ日は稀なり。皆是逝てかへらぬ船の、跡なきを見て腸を、斷ばかりなる追慕憂哀今昔人情同一致なる、抑亦奇ならずや。と過去來を諄復す、親の歎きに掖手さへ、堪難て鼻うちかまれ、心も倶に暮近き、入相の鐘鎬々たる、點燭時候になりにけり。當下韓錦の佐用二郎は、松煙齋季彥の、述懷を聞く間に、いよ〳〵恥て擡難たる、頭を擧ていひけるやう、忠なる哉防守先生、貴老の行ひ終始錯はず、苦中の苦を喫しても、其志移らざりしは、和漢古

昔の精忠義烈、彼賢哲にも恥ざるべし。是に就きても朽惜く、いひかひなきは我親也。我身彼子として、亡父の非を云云、と論ずべきにあらねども、今公道をもていふときは、其行ひ正しからず、是を貴老に比れば、雲と壌との差別あり。蓋我父佐用六は、舊里に在りし時、主君の夫人小芳宜の方を、ふり捨て見かへらず、爾後這地に旅宿して、舊君逝去の實説を、聞くといへども殉死もせず。追腹斫たる彼兩箇の、近臣に及びがたくは、切て頭を剃圓めて、彼御菩提を弔ふべきに、然る志あることなく、是より家を營みて、兒孫相續長久の、計に暇なかりしは、薄忠薄義といひつべし。當時我身は童年にて、親の由來を備に知らねば、諫ざりしを憾とす。非如今親の爲に、其非を飾りて說瞞るとも、人をばよく欺くべく、寧天をば欺くべからず。後の世に是を知る者あらば、筆に載て必論ぜん。悲しい哉、我身は親にだも及ばで、忠もなく孝もなし。前の日亡父の友に邂逅しながら、出處來歷、實名假名を、問も訂さでいかにぞや、威勢ある人の爲に、其女兒を妾にとて、媒妁したるを聽れねば、怒りて飽まで祟りたる、慢侮の罪は和睦の今、千言萬語をもて勸解るとも、鄙語にいふ屁放て後に、尻を含るに異ならぬ、我身の臭氣を思はずは、恥を知らざる者といはれん。知らぬ以前はすべもなし、今に至りて防守主、其身の孤忠、少女の孝順、言詳に聞知る上は、我身の罪こそ最重けれ。縱先生

佛意をもて、我罪戾を饒し給ふとも、我何等の面目ありて、世にも人にも交參べき。是よりして弟子等も、疎みて從ふ者なくは、只胡盧に倣らんのみ。已なん〳〵。とばかりに、傍に措ける長中刀を、拿る手も遽く引拔きて、肚を斫まくしてければ、季彥驚き推禁めて、こは何事ぞ、狂亂しつる歟。先その刃を放ちてよ。と詞急迫しく諫れば、捘手も倶に驚きながら、父の後方に引添ふたり。然ればとて佐用二郎は、止るべくもあらざれば、思ひ切たる聲震はして、防守主禁め給ふな。今我自殺は親の爲に、不忠の罪を贖ふべく、我僻事の遣方なさに、身を潔くせんと思へば也。其首退ずや。と敦圉たる、猛威止るべくもあらざれば、次の間に竊聞したる、奈良櫻の佐之七と、押繪も倶に胸を潰して、手燭を乘りつゝ走り出て、やよ等給へ。と左右より、抓著抱縮めて、刃を奪取まくすれども、佐用二郎は毫も撓まず。やをれ八重作禁るな。押繪も要なし怪我するな。と左手と脚を擲して、寄るを突退揮拂ふ、必死の覺期に八重作押繪は、力足らざるにあらねども、左右なく刃を奪難て、只爭ふのみ鎖めあへず、せん術なくぞ見えにける。爾程に、大江杜四郎成勝、峰張柴六郎通能は、嚮に田文の茂林邊にて、地藏堂へ詣んとて、一路人なる鷺森松煙齋父女と、主人樅二郎等に一霎時別れて、彼佛堂に赴きつ、拜みて其頭を看匝りつゝ、黃昏近くなる隨に、いそぎて倶にかへり來て、韓錦の庭門より、我

み入らまくしぬるをり、主人韓錦の佐用二郎は、松煙齋の防守筑四郎と、晤譚最細やかにて、迭に說つ說示さるゝ、彼舊里の事小芳宜の方の事、又短册の符契の事、菊池武俊の病死の事、又佐用二郎の父、間貫佐用六の薄義曲直、筑四郎季彦夫婦の、孤忠義膽の事の顚末、都蘊會話の、最中にてありければ、そを驚かさんはさすがにて、倶に小柴籬笆の蔭に立在て、言の果るを俟程に、聞くとはなしに彼條々を、聞得て嘆賞感激に堪ず、猶开が儘にありけるに、主人韓錦の佐用二郎は、義理に迫り先非に羞て、自殺せんとて狂ひしを、松煙齋はいふもさらなり、八重作押繪等禁れども、止るべくもあらざれば、大江主僕は悕難て、立顯れつゝ母屋に入りて、諫制る兩聲烈しく、韓錦主狂ひなせそ。我們方僅かへり來て、憶ずも彼祕事を、洩聞て感心の外あらず。よりて議すべきことこそあれ。みづから血氣の勇を負みて、匹夫匹婦の溝瀆に、縊るゝに傚らへる歟。といはれて驚く佐用二郎は、憶はず拳を緩めしかば、通能透さず衝と寄て、刃を奪ふて八重作に、遞與せば押繪は鞘を拾ふて、斂めて开が儘携て、走りて奧へぞ退りける。然れば時八奈我四郎は、這時までも出後れて、次の間に潛みて居り、迭に呀き頷きて、裳を端折兩袖褰げて、螽の像く突然と、走出つゝ聲高やかに、大事を知たる大江峰張、覺悟をせよ。と叫びも果ず、左右一齊組んと競ふを、成勝と通能は、驚きながら毫も噪がず、倶

に身を反し空を擊して、脚を飛して撲地と蹴る、修練一對白打の精妙、時八と奈我四郎は、吐嗟と一聲叫びもあへず、身を轉して簷廊へ、仰反仆れて平張けり。當下主僕は佗と睨へて、噫疎忽なり、兩箇の力士等。我們料らず彼密話を、洩聞くとても交遊の、義に背き利に惑ふて、豈告訴する者ならんや。人を知らざる烏滸人かな。と兩聲高く窘れば、佐用二郎と八重作は、呆れて笑ひを忍びつゝ、時八等を叱懲して、爲に主僕に勸解しかば、成勝と通能は、含唉ながら坐を占て、しかいはるれば安堵たり、今の擬勢は戲れならん。といふ間に時八奈我四郎は、身を起し頭を敲きて、疎忽の罪を勸解にけり。是時既に日の暮しかば、八重作は時八等を、立しつ夜の儲をせんとて、倶に庖廚へ退る程に、押繪は行燈引提來て、四下を照しつ且主僕に、無異の歡びを舒るにぞ、成勝と通能も、押繪等を勞ふて、更に縱二郎に向ひていふやう、韓錦主、和殿の一義は、我們明日まで預るべし。追りて休息し給はずや。といはれて佐用二郎羞たる色あり、膝組直して答るやう、在下自殺を欲しゝは、實に短慮に似たれども、防守叟の孤忠を聞ては、親の爲身の爲に、いひ解べき詞なし。然れども自殺を允されずは、この年來の俠を捨て、桑門にならんのみ。といふを筑四郎推禁めて、そも亦血氣の惑ひならん、和郎は舊君（武俊をいふ）に仕へしにあらず、彼君既に世を去り給はゞ、孰が爲にか忠義を盡さん。只世と共に推

移りて、身を保つをこそ孝とはいはめ。この義を思ひ給はずや。と説れて佐用二郎沈吟じて、點頭つゝ答るやう、諸君の意見感服せり。然らば亦情願あり、我乳名の佐用二郎は、父佐用六の俗稱を、取られたるにぞあらむずらん。なれども古昔の松浦佐用媛は、良人大伴挾手彦が、新羅征伐の將軍として、水路を彼國に赴くをり、佐用媛痛く戀慕ふて、死に至りしといふ貞女也。文字こそ異なれ咱等父子も、庿字は卽間貫にて、佐用六佐用二と喚做せども、忠もなく貞もなし。然るを彼名に摸擬せんは、恥を知らざる者に似たり。この故に氏を棄て、猶幾までも韓錦樅二郎といはれんこそ、後安くあるべけれ。我弟八重作も、この意に傚ふて、間貫佐之七の、舊名を告ることなく、只奈良櫻八重作、と喚れんこそ、相應しからめ。この義甚麼。と談ずれば、衆皆好と稱えたる。开が中に成勝は、聞つゝ屢點頭て、以ある哉主人の用心、在昔孔子は盜泉を飮まず、曾子は勝母の里に入らずといふ、故事には表裏にて、恥て貞女の姓名を、避るは新奇といひつべし。是に就きても防守叟、賢老多年の精忠義膽、和漢の先哲時彦といふとも、よく及ぶ者稀なるべし。只舊君に見參の、素懷空しくなりしのみ、外に聞くだに痛しく、遺憾さのさぞかし。と慰められて筑四郎、撈手も俱に泫然と、坐に涙咽みたる、折から八重作時八奈我四、手繰に運ぶ夕饌を、佐用二の樅二郎見かへりて、現鈍ましかりき。事に

紛れて、夕飯遅滞に及びしかば、さぞ物欲しくおはすらめ、疎菜なれどもうち寛ぎて食給へ。押給も出て給侍をせずや。といふに衆皆相謝して、儲の饌に就く程に、樅二郎は一霎時とて、辭して奥へぞ退りける。有右夕饌果しかば、四箇の客は時八等に、案内せられて迭代に、浴室に入りて浴する程に、既に初更は過ぬべし、昨宵は多く不睡にて、主客の疲勞一入なれば、押給は奈我四郎等に指揮して、偏に臥簟を儲しかば、各 枕に就きにける。其詰朝筑四郎季彦は、早飯を果すと軈て、單阿甦寺に詣て、舊君菊池武俊の墳墓に拜謁して、香華を賻けて廻向の程、思ひし事を諄復す、懐舊の涙に堪ず。這日當寺の住持を訪ふに、卽出て對面せらる。聞くに當寺の先住は、素是肥後の人氏にて、在俗の日菊池生に舊縁あり、武俊阿蘇山を沒落の後、この寺に來て潜居しけるも、是等の由縁あれば也。然れば現住閑廐和尚は、卽先住の徒弟にて、尙古の老實人なりければ、季彦一話を交へしより、迭に捨がたきこゝろあり。是より後も季彦は、父女この地に逗留の程、日毎に阿甦寺へ詣るを、彼身の務にしたりける。閒話休題。韓錦樅二郎は、季彦捘手等を相迎へて、宿所に留めし次の日に、些の酒肉を調理して、大江主僕共侶に、酒盃を遣匝して、いよ／＼交遊の義を、固うせまく思ふ程に、韓錦の弟子等は、早く彼顚末を傳聞て、故人珍客逗留の、歡びを表するとて、東西を贈るも多かりける。其が中に聞

僻めて、韓錦が彼少女を、娶りしとて、その壽祝を、致す者さへありしかば、縦二郎うち笑ひて、そは傳聞の錯誤なり、我は妻を娶りしことあらず、その壽祝は要なしとて、推辭て敢受ざれども、猶生憎に賀する者、日毎に間斷あることなければ、憶ずも日を費して、四月も下旬になりにけり。當下韓錦縦二郎は、單肚裏に思ふやう、曩には我謬て、郡司殿に憑れて、彼少女を妾に、媒妁せまく欲しよに、その事成るべくもあらざれば、怒に乘して祟たる、彼條の崖略は、殿も聞知りておはするならん。然るを恩怨地を易て、和睦したるのみならず、彼父女を我家に、留め在らする今に至りて、その故よしを云々と、殿に告稟さずは、我身必怨られん。只明々地に稟すにしかじ、と尋思をしつゝ八重作押繪等、大江峰張にも意裹を示して、事の利害を問ひけるに、孰とて異議する者もなく、然るべし。と應しかば、縦二郎こゝろ決して、次の日の早旦より、梳髪させ衣裳を整へて、當郡の領主なりける、鏑野郡司範的の、館に單赴きて、隨即拜見を乞けるに、俟こと約半晌許、遂に喚入れて對面せらる。是時範的の左右には、最苛めしき兩箇の近習、縦二郎を尻目にかけて、只是等のみ侍りたり。然れば韓錦縦二郎は、範的に見參して、寒暖を舒無異を祝して、彼一義を告まくするに、範的はその言の果るを俟たず、勃然たる聲震立て、縦二郎近く我みね。汝は憑み甲斐なき者なり。我日屬より汝をも

て、懷刀子と思へばこそ、曩には最いひがたき、ことをしもうち出して、彼媒妁を委ねたれ。然れども汝が力にて、その事成らずはさて已なん、爾るを何ぞや彼少女を、竊地に宿所に引入れて、娶りて相愛するは、言語同斷といひつべし。其事風聞隱れなきに、我は知らずと思ふやらん。今さら何の面目ありて、詣來て虎威を犯さまくするや。取るよしもなき尷尬兒なりき。といはれて縱二郎阿容たる色なく、頭を擡げて答るやう、那は御諚で候へども、小可何等の故をもて、彼少女を娶るべき。知らざる者の推量をもて、然る風聞を做すにやあらん。抑事の著實は、箇樣々々に候とて、初縱二郎が怒に乘して、彼父女を逐し時、彼等は刁人に跟られて、行李も盤纏も喪ひしこと、立合阪に露宿の事、その崖略を演說して、且いふやう、その比彼父女を憐ぶ者あり、小可を非分として、寬解て和睦を執結するに及びて、彼等が素生を問考るに、思はざりけり彼少女の親は、我父佐用六の故友にて、昔故鄕に在りし時、莫逆無二のよしも知られ、又彼少女は稚き時、結髮の良人あり、相別しより往方を知らねば、そが所在を索んとて、廻國しぬる者なれば、有繫にうちも措がたさに、姑且我家に止宿を許して、盤纏を取らせてその投す方に、出し遣らまく思ひ候のみ。彼等が御意に從はで、艱苦をだに厭はざりしは、素より彼少女子に、結髮の良人あれば也。この義を稟し上んとて、推參仕り候ひき。とい

はせも果ず範的は、呵々と冷笑ひて、口は横に裂たりとて、いへばよくいはるゝものかな。非除子貢の辯舌をもて、火を水にいひ做すとも、孰かそれを實言と聞くべき。公達たる事ならば、虚實を正すべけれども、始をいへば我も亦、面正しくもなきことなれば、這回は枉て饒しもせん。以後を信と愼みね。といふに件の兩箇の近習は、共侶に額を衝て、今にはじめぬ寛仁御大度、他が頭を續れしは、こよなき御恩に候。と執合すれば範的は、然もこそあらめと頷きつゝ、椛二郎にうち向ひて、やをれ韓錦、汝はいまだ知らざる歟、他等は我股肱にて、鬼薊苛三屆簗、鍼持隈八刺高と喚做して、武藝筋力一人當千、倶に一方の旗頭に、做すとも要ある者なれば、扇谷殿朝興をいふに傭れて、年來河踰の城に在り。昨今其役果しかば、倶にかへり來て、又咱等に扈從す。やよ相識になりねかし。といはれて苛三隈八は、其方に膝を推向て、豫聞えし韓錦、和郎再生の御恩報じに、一術我們に敎ずや。と誇るを範的うち聞て、幵は一段興あるべし。この夏の日のいと長きに、手を空しくやは鎖すべき。我等一覽せまく欲す。やよとく〳〵。と促せども、椛二郎は從はず、莞爾と笑つゝ答るやう、御諚承り候へども、勝負は時の郤舍にて、弱きも強きに勝ことあり、怨を結ぶ媒なれば、御敵手は望しからず。況所挾這御坐席にて、擊劍角觝は不便なり。猶又折も候はん、今日は允させ給へかし。といはせも果ず範的は、眼を


力藝と著して
韓錦酷く苛こ三
隈八を懲を
くま八



睜り聲苛立て、そは鄙怯也和郎には似げなし。他等兩箇を見貶して、敵手に足らずと思へる歟。最烏滸なり。と怨ずれば、樅二郎辭するによしなく、しからんには是非に及ばず。何まれ仰付られよ。といふを苛三うち聞て、坐席の試撃は種々あり。遮莫腕推枕曳は、小兒の戯に似たるべし。只坐角力こそしかるべけれ。といふに隈八も我み出て、鬼薊且等ね。我們は兩箇にて、韓錦は身單なり。然ればとて他一箇に、二人蒐りは勝ても恥なり。年齢役なれば鬼薊、和殿揉一揉給へ。咱等は行司を仕ん。この義甚麼。と啓すれば、範的聞つゝうち笑て、隈八が言寔に理あり。はやくせずや。といそがして、軈て席を改れば、苛三と樅二郎は、程よき處に退きて、迭に袖を褰身を構へ、膝を合して組まくす。當下鍬持隈八は、扇を颯と推啓き、その身を斜に隻膝立て、間を隔る角觝の作法、一霎時呼吸を覘ふて、ヤと曳く扇と共侶に、苛三は岌より蒐りて、疾く利手を捉らまくするを、樅二郎は毫も透さず、振拂ひ遣違して、推つ推れつ疲勞を俟ば、苛三は紏れるが像く、眼眩みて術なげなるを、樅二郎は程こそよけれ、と猿臂を伸し項上抓て、弱腰磤と撲惱す、力士の剽捷、暴狻猊の、毬を弄ぶに異ならず。苛三は吐嗟とばかり、三間あまり投捷されて、彼身は庭の卷石に、額を拓し血を流して、死活も知らず仆れしかば、倶に驚く鍬持隈八、見るに得堪ず韓錦を、撃んと惱る身を起す時、取る手も疾く腰

刀を、抜まくするを樅二郎は、居つゝ腕を捍して、臂を禁めて刃を抜せず、怯むを得たり、と向脛拂て、仆るゝ所を突飛せば、何かは一霎時も溜べき、隈八も亦庭面へ、身を放下されて苛三が、仆れし上に伏累りて、起も得遣らず蠢きけり。然る程に範的は、今這事の光景に、舌を吐き直と呆れて、面赧やかに酔るが像く、只憤恨胸に盈て、ものいふべくもあらざりしを、樅二郎はさもこそ、と思ふこゝろを色には出さず、衽掻合して恭しく、範的にうち向ひて、御所望實に默止がたくて、酷く無禮を仕りぬ。既に御用の果たれば、身の暇を給はるべし。異日見參仕らめ。と告別しつ身を起して、後門を投て退出けり。是時郡司が家の、若黨小廝幾名歟、彼居角觝の勝負を見んとて、次の間にうち集合て、障子に唾して穴を穿ち、覗觀る者多かりしに、思ふにも似ず與醒て、呆惑ふてありしかば、今樅二郎が出てゆくを、見るといへども送りもせず、他が在らずなりし時、衆皆慌忙きつゝ、齊一庭に走下て、仆れし苛三隈八を、扶起しつ勦りて、肩に引被て出にけり。是なん鏑野範的が、韓錦樅二郎に怨を累ねて、遣る方もなくやありけん、後竟に奸計をもて、彼身を辜に陷れぬる、是其事の原なりけり。畢竟苛三隈八が、韓錦に投懲されて、後の話說甚麼ぞや、幵は又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二十四

第五十四回

渾不似を辨じて防守宿を移す
小雪太名を竊て巧に惡を資く

却說韓錦樅二郎は、當日鏑野郡司範的の、第よりかへり來にければ、季彦八重作等出迎へて、那里の首尾を請問ふに、樅二郎答て、その義に就きては、話說多かり。大江峯張兩君子の、意見をも聞くべしとて、軈て閑室に招き集へて、嚮に鏑野範的が、樅二郎に對面のをり、他がいひつることの顚末、竝に鬼薊苛三、鍼持隈八の爲體、且坐角力のことまでも、遺なく告て亦いふやう、彼刀禰は左に右に、挼手少女のことに就きて、人の虛談を信容けん、咱等を疑ふ心あり。なれども、件の一條は、情慾の遺恨のみ、公達たる事ならねば、陽には明々地にいはれねども、肚裏は料りがたかり。然るを倘思はずに、挼手少女を我家に、この儘留め在らせんは、後安からざる所あり。この義甚麼と譚ずるを、季彦聞つゝ答ていふやう、現彼人の腹黑き、始をもて今を思ふに、我們父女の事に就きて、主人に祟りあらせなば、後悔玆に達がたけん。只

速に去んのみ。といふを八重作推禁めて、翁然のみな惴り給ひそ。鏑野殿の疑ひは、我兒の美女を娶りしなんど、あらぬ事をいひもて徇しゝ、人の虚談を信容たる、惑ひにこそありつらめ。そは素よりなき事なれば、いひ解ずとも疑ひの、霧は一霎時の程にして、必霽る時あらん。然ばかり怕るゝことかは。といふを季彥推返して、賢弟の言は、己を知りて、人を知らざるに庶からずや。今の世の人心、錦の袱に毒石を、裹るも是多かり。彼人本意を遂ざれば、猜く思ふて我女兒を、奪略まく欲せん歟、是も亦知るべからず。亓を思はずに假の宿を、惜みて身さへ人をしも、危くせんは思慮なきに似たり。只速に去んのみ。といへば成勝、然也と應へて、防守主の遠慮寔に故あり。實に去らまく思ひ給はゞ、我舊里へ赴き給へ。安藝の治比は路遠けれども、翁の故郷も西の天、肥後の阿蘇へも便路也。といへば通能も倶にいふやう、亦只治比のみならず、津國住吉の邊には、我兒十三屋九四郎の櫛舖あり。先那里まで赴き給はゞ、然ばかりの資助はあらん。といふを樅二郎うち聞て、そも皆便宜なるべけれども、今は病後の老先生に、脚小をしも作はせて、遠く出し遣るべくもあらず。當國妙義山の麓路に、和田十郎正忠と喚做したる、一箇の鄉士あり。在昔南朝の北畠明徵入道、彼山に隱れ給ひしより、廼山の名に呼しを、後に妙義に改めたり。彼正忠は楠氏の一族、其大父の時にやありけん、明徵

法師に從ひて、當國に移住しより、今猶那里の鄉士たり。家に兵法七書を傳へて、よく其奥義を極めたれども、諸家の招きに應ずることなく、淸貧をもて樂とせり。小可妙義榛名へ詣る毎に、必那里を宿にして、一たび交りを結しより、俱に斷金の契あり。先生遠く思慮りて、令愛と共侶に、宿りを換まく思ひ給はゞ、いかで那里へ赴き給へ。鄕導には我弟、八重作をまゐらすべし。この義に任せ給へかし。といはれて季彦沈吟じて、舊君世を去り給ひては、憑しからぬ世間に、難面きものは命にて、猶人さまの阨會に、なりぬる上は進退を、己が隨意擇むは要なし。左にも右にも計せ給へ。といふに樅二郎歡びて、這里と那里は同國なれども、鏑野殿の釆地ならねば、是安身の一にて、絕ず安否を訪んも易かり。畢竟這里に置まゐらするに、殊なるべくもあらずかし。といひ慰むれば成勝も、含笑ながら通能と、面を注して倶にいふやう、爾らんには我們も、妙義榛名へ參詣がてら、その和田生を訪まく欲す。俱に紹介を願ふ而已、といふに樅二郎苦笑して、兩君子には障りもなきに、などてや忝くふり捨て、俱にいなんといはるゝやらん。いと本意なし。と呟くを、季彦然こそと慰めて、一議既に定る上は、捘手をも召よせて、こゝろ得させ候はん。捘手捘手と呼よする、聲より先に應をしぬる、捘手は既に次の間に居り、こゝろ得貌に出て來ぬるを、季彦猶も喚近づけて、儞那里に在たらば、衆議の趣

を聞つらん。明日は宿りを易まく欲す。そも皆主人の好意によれり。宜く禮を稟しね。といふに接手は應をしつゝ、縦二郎等にうち向ひて、その歡びを演る程に、抑給は渾不似を携て、納戸の方より出て來つ、兄縦二郎に向ひていふやう、いぬる日おん身が立合阪より、賓客達を伴ふて、かへり來ましょその折に、彼轎夫等が茶店の媼に、憑れたりとてこの樂器を、空轎にうち載て、もて來てよしを云々、と告て奴家に遞與しょかども、その折は事繁くて、おん身に告るに暇なければ、そが儲架棚へ藏め置しを、うち忘れたる鈍ましさよ。然るを方僅この團坐の、商量を洩聞しより、同胞にしも異ならぬ、接手少女を留めかねたる、餘波を惜む心から、この樂器のことをしも、思ひ出てもてまゐりにき。今日に及びし等閑の、罪を饒させ給ひね。といひつゝ遞與す渾不似を、縦二郎受拿りて、こは急ぐべき物ならねども、今日まで咱等に告ざりしは、念入過たる等閑ならずや。以後を吃と愼みね。と叱りつ呵々とうち笑ひて、嚙防守先生、おん身いぬる日立合阪にて、這渾不似と歟いふ樂器を、彼茶店に貽置て、立去り給ひし开が迹にて、咱等云々と聞知りて、世に珍しき這渾不似は、おん身の所藏なりけるを、這那人の認りたらんに、其頭にうち棄措れなば、おん身のみかは我恥也、と思ひにければ茶店の媼に、然ばかりの錢を拿らせて、とり復してもて來にき、亦復旅宿の慰種に、做し給はずや。と說示

しつゝ、指出す渾不似を、季彦やをら受拿りて、幵は又思ひかけざりき、主人の用心謝するに堪たり。這渾不似はいぬる比、我身この驛の客店に逗留のをり、料らずも見出して、購求めたりしより、禍鬼父女の身に釁縁りて、終に這渾不似をもて、袖乞しぬるまでになりしを、後に思へば名詮自性、この渾不似を和訓に讀ば、即すべてにざる也。はじめ我是をもて、然しも旅宿の徒然を、慰めばや、と思ひける、初一念には渾不似。亦只この事のみならで、はじめ彼媒妁兒を、只憎しとのみ思ひたる、初一念には渾不似、再會のをり問考ふれば、其人は我故朋輩、間貫叟の豢子にて、親族にも優す資助に遇へり。然れば又、我は稚き女兒を將て、故鄕を惑ひ出しより、八九稔を歷ぬるまで、只舊君の御隱宅を、索ね巡りし忠心の、移らざるには渾不似、玆に逝去の迹に來て、其墳墓を拜するのみ。身の遣る方のなくなりしを、主人の節義に慰められて、猶逗留してふりにし事を、語盡さばやと思ひたる、迭の誠心には渾不似、亦料らざる障り出來て、他所に宿りを換るに至れり。猶數まへなばこの外にも、渾不似の事多くあらん。是等を思へば這樂器は、凶多くして吉寡し。そを思はずに弄ばゝ、恥を知らざる者とやいはれん。只うち折て棄んのみ。といひつゝそが儘擲遣るを、樅二郎は左右なく拿らず、感嘆しつゝ且いふやう、先生の意見理なれども、約莫事の齟齬しぬるは時運にして、この樂器

の故にはあらず。なれども渾不似といふ名を憎み給はゞ、こは阿蘇禪院の、彼後の山に瘞めて、仁義忠孝四絃の、表を後に遺しなば、先生父女の忠孝はさら也、大江峰張の仁と義と、かくいふ望洋等に至るまで、その志亡親に、渾不似の義をしも、是に由て此を思はゞ、百稔の後といふとも、必知音あるべからん。咱等に任せ給ひね。と説諭しつゝ渾不似を、やをら曳よせ拿抗て、押絵是よく藏め措ね。といひつゝ渡せばこゝろを得たる、押絵は袖に抱きつゝ、軈て納戸へ退りける。然ばこの後一郷の、擾亂對治しぬるに及びて、樅二郎は彼渾不似を、いひつる如く阿蘇寺へ、瘞めて四絃七言の、表を石に遺しける。こは是後の話説也。却説杜四郎成勝は、通能と共侶に、件の問答をうち聞て、好と稱て且いふやう、防守叟の辯論も、亦主人の主張も、各其本居あり、只本居なき者は、我們主僕の去向のみ。前にも既にいひけらし、明日は夙めて防守主等と、共に妙義へゆかまく欲す。この義を饒し給ひね。といはれて樅二郎歎ばず、沈吟じつゝ答ていふやう、兩賢兄いかなれば、早く去まく欲し給ふぞ。切て一年五六月、教を受まく思ひしに、そは情なし。と怨ずれば、成勝笑つゝ諭していふやう、否とよ去向を急ぐにあらず。彼和田生の人と成りを、聞得てよく是を思ふに、其も一人物にぞあらんずらむ、早く對面せまく欲す。其頭の所要を果しなば、かへり來るともけしうはあらず。明日を澁りの

別れならんや。怨らるゝことかは。と解れて樅二郎笑しげに、爾らんには安堵たり。就きて亦情願あり。兩賢兄の仙丹は、効驗己も知る所、いかで少許賜らば、白打角力の上に就きて、未然の怪我を防ぐべし。いかで〳〵。と乞求れば、季彥と八重作も、共侶に稱賛して、彼仙丹の神妙なる、己等が身に取りて、起死再生といひつべし。角力白打を嗜者、貯祿て身を放さずば、人を救ひ己を救ふ、神佛の擁護にも、優て憑しかりぬべし。と譽れば樅二郎然なりと答て、己彼仙丹を、聊なりとも得たらんには、不斷この身を放つことなく、角力の場に涖日は、裸體の準備に最小なる、貝に移して髻の裏に、藏めてもて急用に充ん。兩賢兄饒し給はずや。と乞れて成勝通能は、異議なく倶に答ていふやう、この仙丹はいぬる比より、身にも人にも施したれば、今は多からずなりぬれども、莫逆知己の主人の爲に、いかでかは惜むべき。日今分ちてまゐらせん、といひつゝ各腰を探りて、彼藥籠をとり出せば、樅二郎は歡びに堪ず、遽しく身を起して、袋戶架を開き見るに、黑漆にして小形なる、一箇の香盒ありければ、是よかゝなんと、拿出て、大江峰張の分ち與ふる、彼仙丹を受得ぬる、歡び氣色に見れて、千謝萬謝も猶足らぬ、這兩主僕の仁術を、連りに稱て已ざりける。然ればこの後樅二郎は、其仙丹を身に放さず、事ありて他へ出る日は、必最小なる貝に移しつ、是を頭髻の裏に藏めて、人には絕て知

らせざりけり。閒話休題。蓋季彥揆手等の、猛可に宿りを移すよしは、未然の危殃を禦ぐ爲なれば、一日も早きを好とすべしとて、成勝と通能が、只管に薦る隨意、樅二郞は彼父女子の爲に、雨衣脚袢笠草鞋まで、準備せずといふものなく、且那里に宿留の程、盤纏なども宜くものして、八重作をもて送らせけり。然ればその次の日の且未明に、成勝通能も一路人にて、皆共侶に立出る程に、季彥揆手は主人胞兄弟に、歡びを演恩義を謝して、盡ぬ詞の井が中に、押繪は揆手と別を惜みて、今よりの後秋冬の、衣はそのをり〳〵に、必贈りまゐらすべしとて、いと叮嚀に契るも果敢なし。素よりこの送別を、祕して人に告ざりければ、生平に來ぬる四隣の家々等すら、日を經ぬるまで知らざりけり。案下某生重說。曾根見伍六郞健宗の奴隷小雪太は、往る四月下浣の時候、美濃國野上の驛にて、主の伍六健宗が、遊興の爲に逗留の程、彼身は酷く醉臥して、覺べくもあらぬ其夜丈、彼九十餘金はさらなり。衣物兩刀鼻紙囊、宏井の方の健宗に、贈りたりける短刀まで、遺もなく竊拿て、遂電して走る程に、天は明なんとしぬる時候、一箇の大漢に撞見して、蹴られて氣絕したりける、そのことの光景は、前版第四十九回の、十五頁に出たれば、看官承知の事ならんを、今又具にすべくもあらず。然る程に小雪太は、其頭を過る馬奴に、呼活られて忽然と、我に復りて四下を見るに、彼大漢は逃亡けん、腰

に帶たる兩刀はさらなり、懷にしたる財嚢の金も、搭駝ふたりける袱包も、奪畧られてあるこ

となければ、且呆れ且憂悶えて、後悔玆に達よしもなく、頭を低れ手を叉き、忙然たること半

晌許、いまだ計の出る所を知らず。なれども猶幸ひに、身に著たる夾衣一許と、帶と汗衫

は剝畧られず。又彼短刀は、始腰に餘るの故に、懷刺にしたりしかば、是等も畧殘されて、

故の儘にてあり。是に聊慰めて、猶畧殘されし物やあるとて、身を起しつゝ其頭を渉獵るに、

後方五六間許なる夏草の中に、彼鼻紙嚢捨てあり。我物得つ、と拿抗見るに、這裏にも小出の

金、二三分はありけるに、开は女才なく奪略けん、只彼窓井の方の、上野なる姨前に贈る、一

封の書翰ありければ、天の與とうち戴きて、蚤く懷に挾めつゝ、地方の人にや怪められん、

追隊の蒐る事もやあらん、と思へば捷徑を討めてぞ、東を投て走る程に、彼鼻紙嚢を售などし

て、錢四五百を得てければ、敢亦饑もせず。當晩宿りを投めし客店にて、逆旅主人にいひ哄へ

て、日屬己が被たりける。臺床唐二の夾衣と、汗衫さへ沽却して、些の盤纏のいで來しかば、

又膽太くも計較あり、毒を喫はゞ碟子まで、と世話にもいへばいかで我、上野白猪に赴きて、

彼鏑野の大刀自親子を、旨く哄して盤纏の金を、甘乞出して他鄕へ走らば、我生涯は安かるべ

し、嗚呼爾なり、と肚裏に、惡念いよ〳〵已時なく、是より連りに路次をいそぎて、ゆくこと


假かなめ


本編作者自題

只一日ならず、四月も纔になりし時候、鏑野郡司範的の、第宅に早く索ね來て、却執接の青侍に就きていふやう、己は當家の外戚にて、事ありて近江なる、觀音寺より來ぬる者なり。大刀自御前は恙まさずや、いかで拜見せまく欲す。このよし稟し給ひね。といふに青侍こゝろ得て、そが儘奧へ退りしを、俟こと約莫半晌許、這回は亦其人易りて、一箇の老僕出て來つ、小雪太を左見右見て、和殿近江の觀音寺より來ぬるとばかりいはれては、こゝろ得がたくこそ候へ。姓名來歷詳に、聞へと御前の仰なり。吾等に稟し聞けられよ。といはれて小雪太阿容たる色なく。然ン候在下は、大刀自御前の姪なりける、曾根見五郎平宗玄の弟にて、伍六郎健宗是なり。當家の親族なるものから、路遠ければ一たびも、いまだ對面致さねども、名告まうせば立地に、おん疑ひは解ぬべし。況我女兄窓井の方の、寄まゐらする青翰玆に在り。その他正しき證据あれども、人傳には遞與がたかり。在下今恥を忍びて、身單にして來ぬるよしは、言一朝に盡すべくもあらず。悄地に對面を願ふのみ。といふに老僕はこゝろ得果て、然らばいはるゝ趣を、備に御前に聞え上ん。姑且俟せ給ひね。と應て應て奧へ退りて、又遽しく出て來つ、小雪太にうち向ひて、和殿の稟さるゝ趣を、主君御母子に聞え上しに、對面せんと宣ふなり。卒這方へと先に立て、庖湢門より案内をしつゝ、二間賦三間隔たる、褊室に倶してゆ

きしかば、當家の老母大刀自は、其子範的と共侶に、既に上坐に居り。小雪太が來ぬるを見て、贋物なりとは夢にも知らず、色白くして優像なる、十六七の青年兒なれば、毫も疑ふこゝろなく、是へ〳〵。と招き寄すれば、小雪太は阿とばかりに、遙に膝行頓首して、頭を抬げ得ざりしを、老僕がやよ疾那方へ。と連りに請ふて已ざれば、小雪太はやうやくに、にじり入りつゝ席に就きて、大刀自親子を三拜しつ、寒暖を陳、恙なきを祝すれば、大刀自は涙漣て、誠に思ひがけざりき、今日伍六郎に訪れんとは。曾根見は觀音寺殿の權臣にて、女兒の窓井共侶に、主君の覺淺からず、秩祿も亦匱しからず、と豫聞しには似るべくもなき、いと窶々しき身單にて、來ぬるは必故あらん。少年輩の習俗にて、淺妻船の淺ましき、戀にその身を果せし歟。祕さず告よ、甚麽ぞや。と問れて小雪太羞介に、蹴然として答るやう、否、然る浮たることにはあらず。主人公も聞召れよ。扨も本月初旬、意外の禍鬼起りしより、兄宗玄は七鹿山にて、同士撃して陣歿したり。在下も亦冤屈の罪にて、久しく獄舎に繋れしを、僅に女兒の資助を得て、追放せられ候ひき。首をいへば箇樣々々、尾は亦如此々々なりとて、長橋象船兩近習の事、大江峰張主僕の事、高嶋石見介の事までも、宗玄健宗の身に於て、有つる始末に虛實を交へて、說訖りて又いふやう、兄宗玄の陣歿は、貳ごころある奴們を、芟除まく欲したる、忠義なれど

も高嶋等に、いひ掠られてその事聞えず、竟に非分にせられしかば、在下いよ〳〵怨に堪ず、いかで高嶋石見介を、撃て彼冤を、解まく思ひしも身單にて、外に援の兵なければ、却て敵に搦捕れて、又誣られて亂妨の、罪最重しと定められ、竟に追放せられたり。皆是老黨多賀典膳と一口鬼大夫等が、石見介に荷擔したる、贔屓の沙汰に成るものから、我君不明にして曉給はず、我女兒諫諭稟せど、其甲斐なきを爭何はせん。然れば我身近江を去るをり、女兒窓井の密使をもて、衣裳短刀些ばかりの、盤纏を贈賜りしかば、辛くして只一個、今日しも這里へ來ぬることを得たり。先はや是を御覽ぜよ。といひつゝ窓井の書翰一通と、彼短刀を兩手に捧て、膝を找めて呈閲しぬれば、範的はいふもさらなり、大刀自は聞くこと毎に、或は怒り或は哀む、嘆息の聲を得たゝず。先其書翰の封皮を折きて、讀見ること二三遍、又短刀を拿抗て、現この一刀は、曩に我良人の身故り給ひし時、姪の窓井に紀念にとて、贈遺しける物なれば、然しも意を用ひられけん、かばかり正しき据照はなし。且窓井には、いまだ對面せざれども、年毎に雁の翅に、寄られし書翰今も猶、藏めて文匣の裏に在り。我よく認れる手跡なれば、いよゝ疑ひを解くに足れり。是見給へ。とて其二種を、遞與せば範的得と見て、寔に妳々の宣ふ如し。聞くが如きは高賴の、賞罰錯亂笑ふに堪たり。古語にいはずや、良禽は樹を擇て

栖み、賢者は君を擇て仕ふ。爾る闇君に仕ずなりしは、伍六和殿の幸ひなり。宗玄の陣歿は、今さら惜めどもその甲斐なし。健宗に訪れしは、一臂の資を得たるが如し。我に弟兄あることなければ、今日より小弟と思はなん。幾までも茲に居て、我を資よ。左もなくば、良主を擇て仕させん。奶々然は思さずや。といひ慰れば大刀自は、笑つゝ屢點頭て、そは歡しき事になん。侄は猶子の如し、といふよしありと歟聞ぬれば、いかで歟憎う思ふべき。然るを這身の皮では、一家兒なる、老黨奴婢まで、相眡て侮るべし。宜しく計ひ給ひね。といふに範的應をしつゝ、掌鳴して納婢を召て、事云々と吩咐れば、納婢はこゝろ得退きて、程しもあらず夾衣と、外套袴と兩刀を、廣蓋に載てもて來にければ、範的は是を見て、小雪太に向ひていふやう、和殿は長途の疲勞もあるべし。先客房に退きて、宜しく衣裳を更めて、隨意休息し給へかし。といふに小雪太意外の歡び、手の舞足の踏む所を知らず。その賜ものを受戴きて、退んとしぬる時、範的は又納婢にいふやう、若等はいまだ知らざるべし。他は近江より訪來ぬる、我弟に等しき者なり。婢每にもいひ次て、等閑にな歎待しそ。既に東西欲しき時候なるべし、庖丁兒に吩咐て、夕饌の儲をいそぎね。先客房に案内をせずや。といふに納婢はこゝろ得果て、又廣蓋を兩手に拿りて、案内をすれば小雪太は、鏑野親子を三拜しつゝ、歡びを演恵を謝

して、そが隨引れて退りける。爾後又範昀は、老僕某甲を召よせて、曾根見がこと云々、といひ知らせて亦いふやう、他は我弟品なれば、苛三隈八等はさらなり、奴婢等にも傳示して、無禮の欵待すべからず。といと嚴に吩咐しかば、衆皆怕れて小雪太を、主君の如く敬ひけり。

爾程に小雪太は、この夕、鏑野が客房にて、二の饌添ふたる酒飯に飽て、且浴室に案内をせられ、浴し果て程もなく、萌出るばかりなる、綠葱の蚊帳に單宿る、絳麻裏の夏衾さへ、まだ巳の時は過ねども、亥中の鐘の聞ゆるまで、近習等に陪堂せられたる、欵待十二分なりければ、肚裏に思ふやう、我微妙じくも謀り得て、深念に彌增大極上々、無類無量の造化なれども、倘眞の伍號が、迹より玆に來るならば、忽地馬脚を相出されて、我上にこそ做らむずらめ。其頭の障りなき閒に、いかで大刀自を賺し誘へて、思ひの隨に盤纏の金を、ねだり出すは安かるべけれど、逗留いまだ幾日もあらぬに、然ることをいふべくもあらず、主人親子の機を攪て、いふ事每に聽れずは、思ふ局へは入るべからず。非除伍號が、迹よりして來るならば來よ、我は先入にして主位に在り。他奴に腮を唶せざる、せん術はいくらもあらん。さのみ怕るゝ事かは、と豫の伎倆を胸に歛めて、最正首にものせしかば、範昀は次の日より、小雪太を喚近づけて、近江の事を問試み、或は四表八表の、話說させて是を聞くに、小雪太素より口才あり、智計も

有介に聞えしかば、範的漫に愛歡びて、いと憑しく思ひけり。左右する程に、端午の佳節になりぬ。この日は朝より午過るまで、鏑野の家例にて、種々の祝儀あり。既にしてその事果たる、未の時候より範的は、菖蒲酒を酌んとて、南向の小書院に居り。小雪太を上客にて、鬼薊苛三屈簗、鍼持隈八刺高等を侍らせて、酒盃をずん流す程に、主從齊一笑局に入りて、千秋萬秋とぞ祝しける。开が中に範的は、單猛可に嘆息しつゝ、一聲呀と叫びしかば、小雪太等うち驚きて、その故を請問ふに、範的は額を押て、愀然として答ていふやう、我已がたき遺恨あり。なれども我威勢をもて、怨を報ふによしなきは、其事情慾に起ればなり。この故に鬱憤の、遣る方なくて色にも出けん、憶ず嘆息しぬるなり、といふに小雪太點頭て、何事やらんと思ひ候ひしに、然ばかりの義に御心を、苦しめ給ふは大人氣なし。非如領主の威勢もて、報ひがたき怨なりとも、計策を旋らさば、情慾も亦憚る事なく、公道を借て拉ぐに、何でふ手の隙沒るべきや。その情由仰聞られよ。といはれて範的笑介に、そは憑しき事なりき。なれども我口親、うち出さんは面伏なり。苛三と隈八は、始よりして彼顛末を、都承知の者なるに、我爲に說示さずや。といふに苛三と隈八は、應をしつゝ共侶に、小雪太に告ていふやう、近江の郎君聞召れよ。當主君の遺恨の條々、箇樣々々に候とて、始鏑野範的が、旅宿の處女捼手を脅嚇て、韓

錦樅二郎を媒妁にて、妾にせまく欲ししに、其事竟に成らざれば、樅二郎も堪ずやありけん、件の父女を追けるに、爾後脆く和睦して、悄地に宿所に引入れて、己が妻にしたりといふ、風聲ありし事までも、呫き告て又いふやう、韓錦奴には己等も、坐角力の遺恨あれば、媢きこといふべうもあらず。いぬる日腹心の奴隷をもて、他奴が宿所を捜せしに、捘手をば那里へ歟、遣したる歟躱せし歟、今は那里に居らずといへり。殿の遺恨は只是のみ。と告れば範的も聲を低めて、韓錦が家の食客は、捘手父女のみならず、大江峰張と歟喚做したる、遊歷兒等も逗留したれど、既に他郷へ立去りけん。昨今は見えずと聞ゆ。その大江峰張は、健宗和殿の怨ある彼武者修行の兩少年、主僕にはあらざるや。と問へば小雪太眼を睜りて、そは違ひなし違ひなし。他奴等この地に在るならば、兄の怨を復さんに、我聞く事の遲くして、其義に及びがたかるは、他奴等が幸ひなり。开は左まれ右もあれ、主人公の怨敵は、多寡の知れたる市人ならば、手擒にせんも易かるべし。と誇るを範的推禁めて、然ないひそ曾根見生。彼韓錦は聞ゆる猛者にて、武藝膽勇無雙の勍敵、公事にあらざるより、阿容々々と手を束ねて、擒にせらるゝ者ならんや。侮る時は愆あらん。といへば小雪太冷笑ひて、虎狼の猛かるも、獵戸の儲措く、陷井に陷る時は、阿容々々として死を俟のみ。然れば彼韓錦とやらん、萬夫無當の猛者なりとも、

計をもて倒しなば、手に唾して首を斬べし。其計略は箇樣々々、と說示す事半晌許、說果て又いふやう、其猴兒に使ふには、よくその人を擇むべし。約莫這頭の里人に、認れたるは宜しからず。又機に臨み變に應ずる、才なきは宜しからず。老實ならで事に熟たる、人を得てこそ行ふべけれ。と鼻蠢めかして說誇れば、苛三隈八はいふもさらなり、範的只管感激して、掌丁とうち拍し、奇るな哉妙なりけり。我爲の諸葛孔明、楠正成に伯仲すべき、計こそ微妙けれ。それにて只今思ひ出たり。いぬる日我奴隷每の、所以ありて搦捕たる、白日鳶十六郎といふ盜兒あり。他はこの年來、美濃信濃路を徘徊して、暴掙を旨としつ、この地へ新參の聞えあり。爾るに我奴隷等さへ、接手父女を憎がりて、他等が客店を追るゝをり、聞得て迹を追蒐ゆきて、その夕闇に紛れつゝ、接手が親を曳捉へて、酷く撻懲す程に、件の白日鳶十六郎は、其捫擇に紛れてぞ、接手が親の行笈と盤纏を、掻攫て逃走れば、奴隷等は驚き怒りて、接手父子をうち捨て、其盜兒を追しかど、その夜は及ばざりけるを、前日竟に搦捕しかば、軈て牽もてかへり來て、事云々と訴るにより、我正廳に立出て、件の盜兒十六郎を、緊しく拷問致させけるに、盜兒なること疑ひなければ、軈て獄舍に繫せたり。因て我家の奴隷每には、猶彼手に遺りたる、臟物の種々を、當坐の賞祿に取らせにき。是によりて今思ふに、彼十六郎の罪を饒して、誘ふ

に利をもてせば、我爲に猴兒に倣りて、件の祕事をよくすべし。他より外に其人なし。といふに小雪太點頭て、そは究竟の役者なり。術よく謀せ給ひねとて、其期の事まで意を屬れば、苛三も隈八さへ、共に感服したりける。這時日は敧きて、晡昏近くなりしかば、範的は是までなりとて、侍婢等を召よせて、盃盤を執斂めさする程に、苛三と隈八は、壽を陳恩を謝して、退まくしてけるを、範的急に喚留めて、若等外に退るならば、獄吏に下知を傳へて、罪人白目鳶十六郎を、內庭へ牽入れさせよ。ゆきね〳〵。といそがせば、苛三等は阿と應て、隈八と共侶に、外面投て退出けり。然れば又範的は、件の事の准備の爲に、單後堂へ退きて、錦嚢に容たる短刀と、腰刀と麻衣を、手親携て出て來つ、故の席に坐を占て、又小雪太とうち譚ふ程に、入相の鐘高く聞えて、折戶口なる楊柳の梢に、五日の月仄に見えて、吹風涼しくなりし時候、獄吏は十六郎に、捕索綁て牽もて來つ、檐廊の下に推居て、事云々と聞え上れば、範的見つゝ點頭て、獄吏に向ひていふやう、我其十六郎に所要あり。若は先退きね。後に知るよしあるべきぞ。といふに獄吏はこゝろ得て、捕索の端を傍なる、松の幹に繫留て、辭してそが儘退りけり。當下鏑野範的は、小雪太に手燭を秉せて、端近く出る程に、小雪太は灯光にて、件の盜兒十六郎を、こゝろともなく熟々相るに、凄しげなる大漢にて、襲に彼美濃路にて、我身

を酷く蹴仆して、物餘波なく奪たる、略大漢によく肖たれば、訝りながら左さま右さま、又よく見れば吮にありける、便毒の迹までも、實に其奴なりければ、こは什麽、とばかりに、呆れて口を鉗て居り。十六郎も亦眼敏く、小雪太を瞻仰て、舌を肚き胆を潰して、こころ得がたく思ふのみ。迭に問ふべき時宜ならねば、黄蘗を舐りし啞子の如く、或は樓遑の遊戲に似て、一句も出ず默然たり。有右べしとは知るよしもなき、範的は悠然と、十六郎にうち向ひて、やをれ盗兒承れ、若が積悪の最多なる、律に於て免すことなく、首を刎べき奴なれども、我に一大事の所要あり。若この義をよく倣し果さば、彼罪を免すのみならず、賞祿は乞ふに依べきなり。勉て其義をよくするや。と問れて十六郎笑介に、そは何事歟知らず候へども、命を助け給はらば、縱火を踏み水に沒とも、做し得ずしてやは已ん。仰付させ給ひねかし。と應をすれば範的は、然もこそあらめ、と頷きて、我祕事は別義にあらず。といひつゝ四下を見かへりて、聲を低めて又いふやう、我に一箇の怨敵あり。そは這郷に名も知るき、韓錦楤二郎是なり。いかで他奴を陷れて、怨を復さまく思ふ事久し。故に若に課るなり。若這短刀をもて箇樣々々に揣りなば、彼奴は必弥に入るべし。既にして楤二郎は、搦捕れにきと聞ゆるとも、若は猶市に在りて、便を求め夜に紛れて、韓錦が一家兒の奴們を、一箇も漏さず刺殺しね。そ

が中に挨手と喚做す、二八可の美女あらば、其奴をのみ殺さずして、搔攫てかへり來るならば搾了十二分といひつべし。然るを若做しがたしとて、身を脫しを幸にして、風を滄ふて逐電せば、樹を伐り草を芟盡しても、索出して八劊にせん。心を定めて應をせよ、と呀々說示せば、十六郎は含笑ながら、頭を抬て答るやう、御諚承り候ひぬ。そは皆己がよくする所、御心安く思召れよ。盜兒にも信義あり、倘僞りて逃隱なば、强盜冥利に盡ぬべし。今宵先片端より、埒を開候はん。吉左右を俟給ひねかし。といふに範的歡びて、然らば索を饒してん。健宗解ね。といそがせば、小雪太は阿と應て、庭下駄穿つゝ下立て、十六郎が綁索を、立地に解捨れば、十六郎は腕を捺りて、跪居て旨を伺ふにぞ、範的は短刀を、十六郎に遞與していふやう、這短刀は樅二郎を、謀るべき一種なり。遮莫事を行ふに、其牢獄衣にては、不便にこそあらんずらめ。因て這麻衣と、腰刀を取するなり。この刀をもて彼奴們を、漏す隈なく結果けよ。とばかりにして錢なくば、市中の徘徊不自由ならん。その麻衣の袂には、鼻紙に包みたる、圓金一枚容てあり。こゝろ得たる歟と脫落なき、指揮に十六郎笑片向て、件の三種を兩手に受て、打戴打戴、謝恩百拜、媚るに遑なく、早立去らまくしてけるを、範的一霎時と推禁めて、旣に日は暮たるに、符契なくば後門なりとも、出入輒かるべからず。とこゝろつくれば十六郎は、毫も

擬議せず含笑て、否、壁を毀ち塀を踰るは、己が年來得たる所、猫兒をも欺く手段あり、出入符契を何にせん。只この儘に五六日、身の暇を給はるべし。と應て軈て庭門より、蚤くも出てゆきにけり。祕策既に果しかば、範的は是等のよしを、奶々に告て歡せんとて、軈て後堂へ退りしかば、小雪太は客房に退きて、單熟々思ふやう、那盗兒十六郎は、我身の冤家でありけるに、知らぬ事とはいひながら、愁に郡司殿に、彼謀を薦めしより、彼奴は罪を饒されて、反て一脚屬られしは、盗に糧を齎し、讐に刃を貸よりも、猶愚魯なる所爲なりき。悔しき事をしてけり、と臍を噬めどもその甲斐なければ、更に又思ふやう、離合は前より料がたかり、彼美濃路にて撞見したる、剪徑にすら今玆にて、不測に再會しぬる上は、伍號と又玆にて、撞見する折もあらん歟。其頭の障りなき間に、早く他鄕へ走るにしかじ、と尋思をしつゝ次の日より、大刀自に壁訴訟する毎に、武者修行に假托て、盤纏一百金を乞しかど、大刀自いかでか許すべき。儞は智惠あり才覺あり、幾までも玆に居て、我兒の補助になりねかし。爾る時は範的も、必歹くは酬ふべからず。武者修行することかは。と禁めて聽べくもあらざれば、小雪太は困じ果て、悄地に胸をぞ苦しめける。不題韓錦樅二郎は、いぬる日防守父母と、大江主僕を出遣りて、詞敵あらずなりしより、心左右に樂しからねば、武藝の指南も懈り克にて、侯ば

又生憎に、八重作もまだ妙義よりかへり來ず。四月は果て薄暑彌增、五月五日になりにけり。この日は見越松時八の、冢子の初幟の壽祝に、置酒饗饌の儲ありとて、師の韓錦を請待せしかば、縱二郎は已ことを得ず、未下刻よりして、他が宿所へ赴きつ、押繪は單留守して在り。既にして日は暮て、初更は過ぬらんと思ふ時候、外面に咳きして、苛めしげなる大漢、折戸を押つゝ拺み入りて、大哥は宿所に在する歟。と問ふを押繪は見かへりて、否、家兄は他へゆきぬ、かへさの程は料りがたかり。用事あらば明日亦來ませ。といふをば聽かで大漢は、訛たる聲をふり立て、然らば是を屆けまゐらす。嚮に大哥に逢し時、こは大切なる物なれば、和郎我宿所へもてゆきて、我女弟に信と遞與しね、と賴れたればもて來にけり。といひつゝやをら投出すは、短刀にぞあらむずらん、錦の嚢に入れたるなり。押繪は見つゝ訝りて、そは然ることもあるべけれど、家兄の留守にいかにして、奴家が受とるべくもあらず。明日出更してもて來給へ。といへば應をしながらも、身を閃めかして出てゆくを、押繪は透さず、追攜りて、やよや俟ね。と呼留れども、折から皁闇なれば、那地ゆきけん影だに見えず、竟にいひかひあることなければ、押繪は單吃きつゝ、門の戸鎖て兄のかへさを、今歟〳〵と俟程に、夜は猶深て子二時候、縱二郎は裝れたる、酒の醉いまだ醒ねば、踉蹌つゝかへり來にけるを、押繪は聽て

扶入れて、却大漢の事云々と、告て短刀を見せまくするに、樅二郎はよくも見ず、そを今急に見する事かは。我は水を飲まく欲す。汲もて來よ。といそがせば、押繪は只得指燭して、庖湢へとて立程に、樅二郎は俟間もなく、肱を枕に醉臥て、鼾の聲のみ高かりける。是より後は、亦下回に解ん。看官先右の綉像を閲せば、其大槩を知らんかし。

第五十五回

鏑箭の短刀暗に縱二郎を陷る
兩箇の健宗血を對決場に濺ぐ

却說韓錦縱二郎は、次の日巳の左側に、稍睡覺て、軈て里の浴室に赴きつ、浴し果てかへり來て、晝飯を果す程に、押繪は昨宵の事の趣、彼大漢がいひつるよしを、告てもて來し短刀を、見すれば縱二郎訝りて、我は人に誂て、かゝる物をおこししことなし。然ることあらば昨宵にも、などて早く告ざるぞ。と叱るを押繪はうち笑ひて、否、昨宵かへり來ますと軈て、告て這短刀を、見せまゐらせたりけれども、そを今告る事かはとて、よくも得聞かで只水を、求め給へばいふ甲斐なくて、奴家が庖湢にゆきし程、おん身は既に肫滾て、雖呼々々覺給はねば、只得其處に蚊屋を垂て、奴家は納戸に宿り侍り。這短刀の事はしも、奴家も心にかゝるから、今朝も亦幾回歟、呼覺したりけれども、應のみして方僅まで、覺給はねば術なかりき。そを奴家が科にして、叱り給ふ事かは。と解諭すそが程に、縱二郎は遽しく、箸を斂め膳を退けて、拿

抗る錦の嚢の、長紐を解囘して、拿出し見れば思ふに違ず、九寸五分の短刀にて、鞘兒は白金の鏑箭なりければ、愕然と驚くまでに、且怕れ且怪みて、そが儘押給に見せていふやう、昨宵這短刀をもて來ぬるは、何人に歟ありけん猜し得ざれど、是這鞘の鏑箭は、當領主の家の花號なれば、鏑野殿の重寶なる歟、いまだ知るべからねども、出處不定の物なるを、一霎時も留め置べきにあらず。我一旬は愼みて、多くは酒を過さざりしに、昨宵は時八等に强られて、憶ず酩酊したりしより、いはれし事を覺ぬまでに、今朝も亦貪睡くて、今に及びしを爭何せん。疾里長に告知らせて、領主に訴稟んのみ。倘亦昨宵の大漢が、來ることあらばいひ誘へて、留めて我還るを俟ね。いでいで。といひつゝも、軈て衣裳を改むれば、押給が探て指出す、兩刀腰に帶做て、彼短刀を携へつゝ、遽しく出てゆくを、目送る押給も胸安からねば、やよ疾ゆきてかへらせ給へ。やよ喃々。といふ聲も、日影も屆く亭午時候、縦二郎は應をしつゝ、菅笠翳して走去けり。然る程に韓錦縦二郎は、是日里長許赴きて、面談せまく欲るに、折から他は宿所に在らず。今朝新部領へ赴きたり、俟給ふともかへさの程は、はかりがたし。といはるゝに、心只管焦燥のみ。非如長を將てまゐらずとも、鏑野殿には這年來、面識れたる我なるに、身單なりとも早きを好とす、誰歟越訴といふべきや。と尋思をしつゝ退きて、郡司の館を投てゆく、

淺澤隄の頭にて、前面より來ぬる緝捕の頭人、是則別人ならず、郡司が家の權豪なる、鬼薊苛三屈梁なり。憶はず行逢彼一人を、韓錦なりと見てしより、彼逃すな。といふ聲と、倶に群立緝捕の雜兵、御諚ざふと呼はりて、手々に十手を打振々々、推捕籠れば椛二郎は、驚きながら些も噪がず。こは何事に候ぞ。在下犯せる罪あらず。といはせも果ず苛三屈梁、歩み近づきうち向ひて、やをれ韓錦、和郎が罪のありなしは、我知る所にあらねども、疾召捕て參れとある、相公の御諚を承りて、伙兵を倶して來にけるに、いまだ宿所へ届るに及ばで、玆にて逢しは妙なるかな。いふよしあらば公問廳へ、參りてこそ。といそがせば、椛二郎冷笑ひて、在下今身に當て、召捕るゝ覺なし。反て訴稟すべき一義あり。因て里長許赴きしに、他は今宿所に在らねば、我のみなりとも參んとて、いそぎて玆まで來にけるなり。卒給へ共侶に。といはせも果ず苛三は、眼を睜り、聲苛立て、そは勿論の事なるべし。卒疾々々。といそがして、伙兵に前後を守らせつ、倶して公問廳へとていそがせける。かくて鬼薊苛三は、從ふ伙兵等と共侶に、韓錦椛二郎を、郡司の館に倶して來つ、問注廳へとて誘引に、局の内闇かりければ、椛二郎は訝りて、找みかねてありける程、障子の内に聲高く、やよ韓錦韓錦。と呼は正しく範的ならん、と思ふ椛二郎は阿と應て、找み寄まくしてけるに、局の内に布備たる、沙礫の中に

鈎索あり、憶はず脚を縢れて、忽地撞と顚びしかば、鬼薊が伏兵はさらなり、垂たる幕の陰よりも、俟設けたる雑兵等、咄と嚷きて幾名歟、走出つゝ折累りて、起んと掙扎縦二郎の、手を捉へ脚を押へて、索を掛まくしてけるに、縦二郎は猶寄立じとて、臥つゝ手脚を掙かして、一霎時は挑みたりけれども、其頭に準備したりける、九尺階子を投掛られて、壓木に掛て動さねば、力及ばで結加れけり。しかれども縦二郎は、單怨に堪ざれば、連りに罵狂ひしを、背三は猶怕れて、幾十斤なる桎を、掛て伏兵に守らせつ、韓錦の轉びし時、捨たる短刀を拿揚て、彼が帯たる兩刀と、倶に廳の檐廊へ、竝置つゝ意氣揚々と、豫仰付られたる、盗兒韓錦縦二郎を、搦捕候ひき。このよし人々稟し給へ。と聲高やかに喚はりけり。登時有司等こゝろ得て、颯と開く障子の内を、と見れば廳の上坐に、鏑野郡司範的は、縹緞に家の花號染做したる、信濃織なる麻衣に、長袴を穿下しつ、小刀を腰に帯て、手に中啓の扇子を採りて、立たる案を引寄つゝ、端然として坐したりける。左右に從ふ有司の毎、鍼持隈八刺高を首にて、老たるあり弱きあり。幵が中に隈八は、額を衝身を起來て、彼短刀を拿抗て、主君に呈閲してければ、範的やをら受拿て、囊を解せて見る程に、背三は遽しく、檐廊に升來て、主君に告稟すらく、嚮に御意を承まつりて、臣等伏兵を從へて、盗兒縦二郎を搦捕んとて、他が宿所に赴く程に、

折よく途にて行逢ひつ、見るに彼奴が竊拿たる、鏑箭の短刀を、懐中に祕持たれば、搦捕まく思ひしかども、彼奴は聞えたる猛者なり、捕逃す事なからずや、と思ひかへして暴立ず、そが儘倶してかへり來て、當廳なる局の內へ、誑引入れ力を勠して、稍召捕て候なり。と言誇貌に聞え上れば、繩拿の伙兵等は、樅二郎を牽立て、檐の下にぞ推居ける。範的是をうち聞て、案を搔遣りつゝ、樅二郎を疾視て、やをれ盜兒思知るや。這鏑箭の短刀は、千金にも換がたき、我家の什物なるに、嚮に爾が我館へ、來ぬる比より紛失して、久しく索れどもあることなければ、原來竊る者ありけん、と思ひとりつゝ堪能なる、周易者流に占問ひしに、正可に爾が所爲なり、と報るによりて訝りながら、人はうち見によらぬ者にて、現然る事もありけん歟、と人もいへば苛三等に、課せてその身を召捕せしに、果して這短刀を、懐にしたりといへば、問はでも知るき竊盜の罪科、左ても右ても逃るゝ方なし。速に首伏せば、呵責の笞を寛すべし。早くいはずやいかにぞや。と敦圉猛く譴問ふを、樅二郎は怕るゝ色なく、聲高やうに答るやう、そは宣ふことながら、然る誣を誰かは承ん。その故は如此々々なり、箇樣々々のこと候とて、昨宵樅二郎が家に在らざりし時、見も知らぬ大漢が件の短刀をもて來にける、その事の首より、女弟押繪が告たる趣、樅二郎は歸宅の後、稍聞知たる顚末を、具に陳て又いふやう、小可事の

怪きを、知らざるにあらねども、今朝は宿酒の醒ありて、遲く起出たりければ、告訴延引せしものから、然ればとてうちも閣ず、今日しも午の貝吹時候、件の短刀を携て、里長許赴きしに、彼も亦外に出て、在宿せずと聞えしかば、時の後れんことの惜くて、身單なりとも御館へまゐりて、訴稟さまく思ひつゝ、急ぎて來ぬる路の程、淺澤隄の頭にて、御家臣鬼劔生に逢しより、事の玆に及べるのみ。憶ふに我等を惡む者、不測の罪に陷さんとて、謀りたるにぞ候はん。といはせも果ず範的は、眼を瞋し聲苛立て、默れ盗兒勇悍し、と世話にもいふは這奴が事なり。照据を取られてせん方なさに、見も知らぬ大漢が、この短刀をもて來にき、と巧に額陳るとも、其大漢を生拘て、共侶に牽もて來ずは、孰歟實事と思んや。這奴緊しく責懲さずは、必招了すべからず。苛三早く笞を中よ。と烈しき下知に屆梁等、承りぬ。と應つゝ、檐廊より走下て、伏兵に下知を傳へてぞ、韓錦を推伏て、笞を中まくしぬれども、縱二郎は身を反して、敢其杖を受ず、連りに冤を叫ぶのみ、事果べくもあらざれば、隈八も見るに得堪ず、請ふて等しく下立て、苛三と共侶に、伏兵等を罵奬まして、稍縱二郎を推伏させて、中る笞は先度の怨、彼坐角力の輸腹を、今愈すぞといはぬばかりに、烈しき呵責は幾百杖歟、數も涯も那麻興美の、腕の骨の續くまで、透もあらせず撻せしかば、憐むべし縱二郎は、皮破れ鮮血流

れて、息絶なんとしてければ、範的笞を休めさせて、其奴素より強情なれば、早には首伏すべからず。異日又復拷問せん。そが儘獄舎に係ぐべし。といふに苛三隈八は、應をしつゝ伙兵等に、下知を傳へて樅二郎に、水を飲せなどせしかば、姑且して樅二郎は、我に復りて嗟嘆に堪す、苛三等を見かへりて、若們は是斗筲の小人、いふかひあるべきにあらねども、奸佞の善者を誣て、不測の罪に陷す者、和漢今昔尠からず。彼文王は羑里に囚れ、孔子は陳蔡に苦しめらる。遮莫盜賊の惡名を、負せられたりといふことを聞かず。我は是淸白の勇士なり、一日も元を喪ふことを忘れず。今這呵責の苦痛に怕れて、知らざることをありとし言んや、只冤に死んのみ。などて笞を止めたる、猶撻ずや。といそがすを、苛三等は聞ぬ態して、這奴熱にや浮されけん。疾牽立よ。といそがせば、伙兵等は阿と應て、いなじと角ふ樅二郎を、辛くして推立しつゝ、前後左右をうち守りて、やうやく獄舎へ將てゆきけり。爾る程に樅二郎は、冤屈の厄に囚れて、是より單獄舎に居り。かゝるべしとは豫より、人しも知るや白眞弓、張緊し心弛みてや、背に受たる杖瘡、當晩甚しく痛出て、心地死ぬべく覺しかば、忽地に思ふやう、曩に我仙丹を、大江峯張に乞得しより、外に出る折は貝に移して、髻の裡に斂めたり。然るを今日冤の、笞に酷く撻れし折も、猶幸にして髻は、斷離れずして故の儘なれば、彼仙丹は必あ

らん。今倘是を用ひずは、孰の時を俟んや、と肚に問肚に答て、軈て頭髻の裏を探るに、果して彼貝出しかば、うち戴きつゝ蓋を開きて、拯みて聊嘗試るに、心地立的に、清爽になりゆく程に、氣力も倶に本復して、背の疼痛も覺ずなりぬ。這仙丹の卽效神妙、今さら驚く可なれば、且歡び且感嘆して、猶其半分を掌へ、乘て唾をもて解寬めて、指に染つゝ背の疵に、屆限り幾番敷、塗らする者半晌許。指の屆ぬ處へは、藥汁おのづから流傳ふて、療治に隈やなかりけん、其杖瘡一夜の間に、餘波もあらず皆愈て、痕だに見えずなりにけり。かゝるべしとは知よしもなき、範的はその次の日に、苛三等を召よせて、韓錦奴はいかになりけん。笞の苦痛に堪ずして、昨宵死にたるにぞあらんずらん。といふを苛三聞あへず、否、今朝ゆきて見候ひしに、縱二郎は故の儘にて、氣力毫も衰へず、杖瘡は皆愈て、痕だにあらずなり候ひぬ。怪有なる事に候はずや。と告るに範的呆果て、そは訝しき事にこそ、我みづから撿すべし。疾牽出せ。といそかせば、苛三は再義に及ばず、軈て獄卒に下知を傳へて、縱二郎に裸せ、且重索を緊しく掛て、局の內に牽入れば、範的は廳の檐廊に、立つゝ熟々是を相に、果して苛三が告しに違ず、縱二郎は爽然たる、面色生平に異ならず、杖瘡もあることなければ、郡司主僕を罵るのみ、威勢いよ〳〵猛かりければ、範的直と呆惑ふて、是日は笞の數を增て、殊に緊く撻せしか

ども、樅二郎は今日牽出さるゝ時、悄地に仙丹を背に塗りて、口中にも哺みしかば、笞を受ても疼痛を覺ず、皮肉の破るゝ事もなければ、只冤を叫ぶのみ、呵責その甲斐あることなければ、苛三等はいふもさらなり、範的は又せん術を知らず。這奴于吉左慈の如き、妙なる幻術ある者歟。倘愆て走らせなば、ゆゝしき大事なるべしとて、是より後は拷問せず、二重牢に籠在らせて、驗者に課せて厭勝の、祕符を獄門に貼せなどして、由縁の者の願ふとも、飯を獄舍へ餽ることを饒さず、只獄卒の數を增て、夜となく日となく守らせしかば、樅二郎は幸ひに、呵責の笞を逸れて、安全として日を送りけり。休題、是時韓錦の宿所には、昨日樅二郎が彼短刀を携て、里長へとて出てゆきしより、久しくなるまでかへり來ざれば、押繪は單胸安からず、いかに〳〵、と俟程に、長き夏の日攲きて、下晡になりし時候、外面に跫然と、脚音するはそれにはあらで、時八と奈我四郎と、うち連立て走り來つ、押繪を片隅に招きよせて、樅二郎が禁獄せられし、事の趣云々と、方僅聞しとて告しかば、押繪は驚き且憂ひて、原來彼短刀の、祟にこそありつらめ。其故は箇樣々々、如此々々の事ありけりとて、昨宵一箇の大漢が、彼短刀をもて來にける、その事の始より、嚮に樅二郎は、件の義を里長に、告て訴稟んとて、彼短刀を携へて、出てゆきけることまでも、詞急迫く說示せば、時八と奈我四郎は、聞つゝ嗟嘆

しぬるのみ、計の出る所を知らず。當下押給は又いふやう、折ろく大江主僕は、防守叟等と共侶に、妙義へとて立去り給ひしより、仲兄なる八重作さへまだかへり來ざれば、何せん術も奴家が身單、智計を借るべき所由もなし。怎いかにせん。とばかりに、困じて額を病すれば、時八と奈我四郎は、憶はず膝を打鳴らして、开にて思合すれば、我師を怨る者ありて、謀りて罪に陷んとて、彼禍害を賣たるならん。とは思へども我們は、世話にいふ下司の計にて、非如一年三箇月、考たりとも休に似たれば、長詮議してあらんより、八重作哥々を呼かへらして、商量するにしくことあらじ。然ればとて我們兩箇が、倶に妙義へゆくならば、留守の安危も心許なし。奈我四ゆかずや、我ゆくべき歟。といふ時八を推禁めて、奈我四郎がいふやう、否、妙義へは我ゆきてん。時八和ぬしは里長刀禰と、よく商量を整へて、明日より獄舍へ飯を餽る、准備こそ緊要ならめ。今日は既に暮るゝに近かり、咱等は明日未明より、單妙義へ赴きて、八重作哥を相倶して、大後日は必かへり來つべし。妖々は今より消息を、書寫めて渡し給へ。咱等は宿所へ走りかへりて、點燭時候に又來てん。いで〳〵といひつゝも、身を起さまくする程に、里長は四隣なる、屋主等を相伴ふて、呼門高く訪來つゝ、軈て母屋にうち升りて、押給等に向ひていふやう、韓錦主の不慮の災難、這里へも早く聞えしならん。嚮に御領主樣よりおん下知

目今縱二郎の罪如此々々なれば、則仰渡さるゝやう、咱等と故老達を召よせさせて、あり、禁獄しつるなり。他が贓罪輕からねば、由緣の者の願ふとも、飯を獄舍へ餽ることを饒さず。縱二郎が宿所をば、五保等迭代に、日夜よく守るべし。縱二郎の弟八重作は、四五日旅に在りと聞いへば、歸宅の日に訟稟しね。その餘同宿の男女あらば、留めて一箇も散すべからず。この義を佗と守りね、と掟させ給ひにき。因て今來ぬる時、這人々にも商量したり。女流一箇の宿なれば、男子の夜番は憚りあり、夜分は家々衆をおこすべし。いふまでにはあらねども、時八奈我四相資て、八重作哥々を呼かへす、脚力をいそぎね。といへば四隣の亭主等も、共に口詭を舒訖りて、又出直して來つべしとて、齊一立ば里長も、共侶にとて退りけり。是より後は韓錦の、武藝角觝の弟子等、訪つゝ來つゝ甲夜過るまで、混雜涯なかりける。浩りし程に、鶴脛奈我四郎は、當晚押繪に消息を受拿て、宿所に退りて遽しく、行裝を整て、その詰朝未明より、妙義を投て立出けり。案下再說。爾る程に假健宗小雪太は、曩に範的に薦めたる、彼奸計行れて、手剛かるべき縱二郎は、脆く獄舍に係れしより、是を一箇の功にして、盤纏を乞ばやと思ひつゝ、大刀自にも範的にも、又武者修行の願ひをいひ出て、路費一百兩を乞ふものから、主人母子は諾はず、倶に禁ること前の如く、放遣べくもあらざれば、小雪太はいよ

いよ困じて、この上は是非に及ばず、折を覘ひ有財を、竊拿て走らばや、と腹に尋思をしぬるのみ、いまだ便を得ざりける。人の嗜慾の同じからねど、不義の情願相似たる、鍋野郡司範的は、いぬる日盗兒十六郎に、機密を課たりしより、彼短刀の一條は、立地に事成て、憎しと思ふ樅二郎を、輙く陷れたれども、その餘の事はいまだ聞えず、口惜思忘れぬ、少女挨手はいかになりけん。十六郎はまだその便りを得ずや。今日までも信なきは、他力及ばずとて、逃て他鄕へ走りしにあらずや。這里にてものを思んより、我みづから立出て、巷街の風聞をも捞るべく、挨手の所在を穿鑿ばや、と尋思をしたる其次の日に、馬上優に打扮て、鐵持隈八刺高と腹心の若黨三四名と、雜兵奴隷を從へて、皐月雨霽し亭午の時候、部領の里を東西となく、うち巡り撿儘に、潛行の編笠も、深き思ひを人知らぬ、淺澤隄を過る程に、沼の水際の燕子花、時知り貌に咲出たる、その紫の朱をしも、奪可の長視にあなれば、範的一霎時馬を駐めて、水を飼せてありけるに、這塘隄なる松陰より、忽焉として一箇の乞兒、出て馬前に跪きて、稟上べき事こそ候へ。いかで聞召れよ。といふに訝る範的主僕は、こは何事ぞ、とばかりに齊一佗と見かへれば、十六七歳なる少年にて、海松の如くに亂れたる、額髮の鼻まで垂しを、掻抗る隨に又よく見れば、日黒みたる面貌、兇惡の者に似て、身には袴の破れたる、汗衫の外に被物

なく、繩をもて帶としつ、沙柄杓を腰にして、蜈蚣の像くに穿敗たる、草鞋の底拔て、身に引添たる菅笠は、風の芭蕉歟蟢罔に似たるに、世に劍御祓と唱ふめる、伊勢皇大神宮の大麻を挿夾みて、背に稾苞を駝たりける。實に怪しき訴人にあなれば、範的馬の鑣面を、軈て其方へ推向て、刺高仔細を諮よ。と下知に從ふ鍼持隈八、找出つゝ件の乞兒に、打向ひ佗と睨へて、儞は原是那里の者ぞ。何等の故に膽太くも、守に直訴仕るや。願あらば疾稟せ。といはれて乞兒は羞たる色あり。やうやくにして答るやう、然ン候、今さらに、名告稟すは面伏なれども、小可は近江なる、觀音寺殿の權臣なりける、曾根見五郎平宗玄の弟にて、曾根見伍六郎健宗是なり。鏑野殿のおん爲には、從母昆弟なるものから、路遠ければ一たびも、いまだ見參せざれども、我名ばかりは知れつらん。然るを斯窶果て、當所に呻吟來にけるは、原是仔細あることにて、この身に貪緣禍鬼の、祟りせん方なければなり。なれども其義を始より、告まつらんは言の多くて、一朝には罄しがたかり。いかで御館へ俱し給はゞ、肝膽を吐き祕密を明して、おん疑ひを解つべし。いかでく〵。と庶幾ふを、範的聞つゝ冷笑ひて、噫最鈍き尷尬兒かな。刺高等も知る如く、その伍六健宗は、いぬる日既に我館に來て、今も猶宿所に在り。離魂病ならざる者、何ぞ兩箇の健宗あらんや。贋物なるを知るべきのみ。といふを乞兒はうち聞て、又隈

八に打向ひて、今の御諚はこゝろ得がたかり。世に同姓同名の者、これなきにあらねども、觀音寺の城内にて、曾根見伍六健宗と喚れしは、我外に亦あるべくも候はず。然るを名を竊み主を欺きて、御庇に寓まく欲するあらば、狐狸の所爲なる歟、然らずは我上を知りたる者、榮利の爲に先だちて、謀りて紛來ぬるならん。所詮其奴と對決させて、聽せ給はゞ立地に、玉石分明ならんのみ。といはせも果ず範的は、眼を睜り聲苛立て、卉は勿論の事なりかし。刺高其奴に腰縄掛て、牽もて來よといそがして、そが儘馬を騎かへせば、隈八は雜兵等に、下知を傳へつ健宗の、腰に掛たる緝捕索、端拿緊て情なく、牽せて倶に從ひけり。恁而郡司範的は、是日宿所にかへると聽て、先母の大刀自に、ありける今日の奇事を、箇様々々と叫告て、いそしく衣裳を改めつゝ、有司二三名を從へて、遽く問注廳へ出る程に、鍼持隈八刺高は、雜兵等と共侶に、腰縄掛たる乞兒健宗を、局の内へ牽入れて、椽廓近く推居たる。當下範的佗と見て、やをれ乞兒、頭を擡よ。いはでも知るきことながら、我母刀自の侄なりける、觀音寺の伍六健宗は、曩に訪來て我家に在り。然るを儞も伍六郎、健宗と名告れども、正しき照據あることなし。且前に來つる健宗は、其女兄窓井の消息あり、卉が齎したる、鏑箭の短刀あり。况實の健宗たる者、其身不測の罪ありて、近江を追放せられたりとも、乞兒になるまで零落て、這頭を徘徊

すべくもあらず。縱令呻吟來ぬるとも、我家を訪はせで、我外に出るを覘ふて、中途に愁訴しぬる事、給と云恰と云、疑ふべく信ずべからず。淺き伎倆の顚末を、招了致せ甚麼ぞや。と聲高やかに詰れども、健宗阿容たる色もなく、丌は宣ふことながら、相公は只其一を知りて、いまだその二を知り給はず。目今宣ふ事の趣によりて、咱等は既に曉得たり。その健宗と僞名告て、御館に逗留しぬる者は、我兄五郎平宗立の故の鞋奴、小雪太と喚倣したる、惡物にこそ候はめ。その故は箇樣々々、如此々々の事候とて、今玆四月下浣、健宗死罪を宥免られて、近江を追放せられし折、女兒窓井の密使をもて、衣裳短刀金一百兩と、小母御前へ寄まるらする、消息一封を贈られし事、是により健宗は、這地を投て來ぬる程に、召倶したる鞋奴、小雪太に哄誘されて、美濃の野上に杖を駐め、色に迷ひ酒に浮れて、逗留してありける程、有一宵件の小雪太は、健宗が醉臥たるを覘ふて、且その衣裳兩刀と、盤纏の九十餘金はさらなり、女兒窓井の消息を藏めたる、鼻紙囊に至るまで、竊拿りて逐電したる、その事の顚末を、陳果て亦いふやう、彼時右の造化なれば、跡に殘るは我身のみ。土妓娼婦の洞房錢を、逆旅主人に債られて、さらにせん術あることなければ、身に著たる夾衣、帶も汗衫も剝拿られて、赤裸にて追出されたる、其折の朽惜しさ、又いふべくも候はず。浩る折にも邂逅に、祐る神のあればにや、

件の客店に老母あり。纔に他が好意にて、この敗たる袴の汗衫を被よとて悄地に與しかば、僅に肌膚を掩ふのみ。是より後は里人の、門に立て糧を乞ひ、路ゆく客の袖に携りて、一錢の施を、乞へども與るゝは最稀にて、邪慳の杖に追拂れ、晝は饑て路に喘き、夜は亦露宿を常にして、星を戴き草に臥し、露にそぼち雨に濡て、逆旅に苦しき日を送る、艱難譬るに物もなく、本月の初旬に、當所に辿り來にけれども、今さらかゝる身のざまにて、御館へ推參すべくもあらねば、部領の里に又日を送りて、悄地に便宜を候けるに、今日しも相公の潛行の、風聞早く聞えしかば、是なるべしと思ひつゝ、身は淺ましき淺澤の、つゝみかねたる一期の苦辛、恥を忍びて御馬前に、愁訴の本意を遂たれども、女兒窓井のおこしたる、彼短刀さへ消息さへ、小雪太奴に竊去られて、正しき照据あることなければ、推て見參しぬるとも、疑るることなからずや、と思ひ難て候ひき。この義を察し給へかし。と喞言がましく陳ずれば、範的聞つゝ沈吟じて、半信半疑の霧まだ霽ねば、呵々とうち笑ひて、乞兒、儞が陳ずる所、さもありぬべく聞ゆれども、機變に閑て詭譎を、巧に做す者世に多かり。今一介の照据もなきに、其いふ所を實として、漫に眞僞を執失んや。寧眞の健宗を、呼出して目に物見せん。その折言を易るな。といはれて健宗毫も擬議せず、开は希ふ所なり。早く對決させ給ひね。

と答る間に範的は、一箇の有司を見かへりて、健宗召。といそがせば、阿といらへつゝ立にけり。然る程に、假健宗小雪太は、武者修行に假托て、大刀自にも範的にも、盤纏の百金を乞けるに、其言聽るべくもあらざれば、この上は是非に及ず、主人母子の藏措く、納戸金を竊拿て、走るにしかじ、と尋思をしつゝ、悄地に便宜を覘ふ程に、是日範的は、市中撿覽の爲にとて、從者多く從へて、既に出たれば宿所に在らず。大刀自は午睡して、四下に人のあることなければ、小雪太は折を得たり、と軈て納戸に潛入りて、小簞笥に藏めたる、金五十兩を竊拿りて、懷に啶と夾め、己が子舍に退きて、肚裏に思ふやう、這金にてはまだ足らねども、多貪は破敗の基なれば、今宵這頭に火を放ちて、事の紛れに脱去らばや、と單計較程もなく、範的有司を使として、問注廳へとて召せにければ、小雪太は訝りながら、推辭べきにあらざれば、忙しく袴を穿きて、中刀を腰にしつ、脩刀を引提て來にければ、範的は是へ〳〵。と軈て側に招寄て、却いふやう、咱等嚮に、市中を巡覽してけるに、淺澤隄の頭にて、一箇の少年乞兒あり、他みづから近江なる、曾根見伍六郎健宗と名告て、愁訴しぬるよしあれども、其爲體怪しければ、腰纏を掛させて、牽せて方僅かへり來つ。既に緊しく詢問しけるに、隨即他が陳ずる所、首は箇様々々なり、尾は又如此々々なり。有恁ば眞僞惑亂して、我疑ひを解に由なし。和殿彼

奴を知りたる歟。と問れて小雪太吐嗟とばかりに、胸に鍼刺心地すれども、毫も色には見はさず、呵々と冷笑ひて、其奴は曩に美濃路まで、我召倶したる鞋奴、小雪太と喚做たる奴ならん。他も觀音寺の城内に在りし時、我兄宗立の緣坐にて、久しく獄舍に繫れて、倶に追放せられしかば、咱等佛心をもて、艱苦の中に召倶して、美濃路まで來にけるに、彼奴は恩を仇にして、多くもあらぬ我盤纏を、竊拿りて逐電したり。然ればその天罰にて、乞兒になるまで零落て、這頭へ呻吟來にける儘に、我身は相公の御庇に依しを、聞知りたる歟、知らざる歟、そは左まれ右もあれ、咱等は女兄の自筆の消息、彼短刀さへ齎したれば、問でも眞僞は分明なるに、人迷しに我名を竊みて、又仇せまく欲するは。憎むべしく。畢竟狂人の沙汰なれば、取るに足らざる事にこそ。尊公御意にな懸られそ。と誠しやかに說誘れば、範的聞つゝ點頭て、いはるゝ趣寔に故あり。然らば目今對決して、人の惑ひを解ねかし。卒とくく。といそがせば、小雪太は已ことを得ず、承り候ひぬ。と應て刀を引提て、徐に廳の檐廊に、出て健宗を佐と見て、這惡僕が膽太し。我に對ひて猶佯るや。といはせも果ず健宗は、眼を瞋し齒を切りて、頽稀なる賊僕小雪太、儞は美濃の野上にて、我を裸體に做までに、物皆竊みて逐電しながら、飽ずや猶且我名を竊みて、早先立て茲に來て、小母御前親子を惑して、竊地に榮利を謀るとも、

我出來つれば脱るゝ路なし。儞が事の照据にしたる、我女兒の消息と、彼短刀は美濃路にて、儞が竊みし物なるに、這頭に知る人あることなければ、我をさへ誣まくするや。といはせも果ず小雪太は、呵々と冷笑て、默れ惡僕舌長し。炭をもて雪と做とも、我は件の證据あり、儞は毫も證据なし。その詭佯を知るべきのみ。といへば健宗聲高やかに、證据は儞が竊たる、彼短刀と消息なり。といふを小雪太推禁めて、我齎したる彼二種の、儞が證据になるべきや。烏滸なる言を。と打笑へば、健宗いよ〳〵性起て、連りに罵哮るのみ、爭ひ果べくもあらざれば、鍼持隈八找出て、雙方を禁めていふやう、兩箇の健宗鎭り候へ。迭に虛實を爭ふとも、彼身近江に在りし時より、その面影を認りたる者、這頭に一人もあることなければ、鄙語に云水潑論にて、孰歟よく是を辨ぜん。縱照据はあらずとも、文武の本事なからずや。といはれて健宗沈吟じて、助言寔に其理あり。开にて目今思ひ出たり、彼假健宗小雪太は、素より是無筆にて、假名文だにも讀ことを要せず。曾根見は觀音寺の權臣なりしに、その弟たる健宗が、無筆なるべくも候はず。今試に紙筆を、授けて何まれ書せ給へ。といはれて小雪太驚として、それを儞に傚んや。先我武藝を見知らせん。覺期をせよ。と敦圉猛く、身を跳せて櫓廊より、投るが像く飛下りて、刀を拔て斫んとするを、健宗透さず身を反して、鍔上楚と拿留て、捫放さまく


大とも
つのまと
有司


真偽惑乱
健宗健宗と争ふ
有司

してければ、小雪太は拿せじ、と迭に角ふ郤舍にて、健宗が腰纏の、忽地弗と斷離れしかば、健宗進退自由を得て、捉たる隨に毫も緩めず、左の拳を揮して、眉間を礑と撲しかば、小雪太は呀とばかりに、脆く刀を捫拿れて、又中刀を拔まくしぬる、那時遲し這時速し、健宗は箭聲をかけて、振晃めかす刃の電光、天罰覿面小雪太は、首を撲地と撃落されて、軀も倶に仆れけり。思ひがけなき光景に、驚噪ぐ隈八有司等、彼逃すな。と罵散動めけば、倶に驚く雜兵毎、群立蒐りて前後より、稍健宗を組禁て、刃を奪ふて犇々と、押えて索を掛にける。當下範的怒りに得堪ず、勃然たる聲震立て、噫狼籍なる尷尬兒かな。對決いまだ分明ならぬに、機に臨み刃を奪ふて、叨に敵手を斫殺ししは、贋物なること疑ひなし。疾目前へ牽出しね、我みづから手撃にして、死したる健宗の怨を雪ん。早くせずや、と焦燥ける。折から部領の大刀自は、件の兩箇の健宗の對決の事云々、と方僮人傳に聞しより、心許なくや思ひけん、悄地に問注廳へ出て來つ、屏風の陰に躱ひて、竊聞して在りしかば、今範的が健宗を、手撃にせんとて敦圉くを、喚禁め喚よせて、聲を低めて却いふやう、おん身はいまだ思はずや。彼乙兒の進止、武藝の本事さへあるを思へば、贋物とのみ定めがたかり。倘眞の健宗ならば、戮して悔とも及んや。姑且獄舍に繋置て、近江へ使介を遣し給へ。窓井に就て健宗の、相貌音聲身材まで、詳に

知られなば、兩箇の健宗孰は眞、孰は贋と分明ならん。惴るは要なき事にこそ。といはれて範的うち頷きて、妳々の教訓誠に爾なり。鬼薊苛三が隊の雜兵に、飛禽疾四郎、稻妻齒四郎と喚做す者あり、彼等は神行の達者にて、百里を六日に往還すといへり。近江へ火急の脚力には、究竟の兵毎なれば、明日は未明に起行せん。窓井へ遣す消息を、ものし給へ。といそがせば、大刀自は有理と應て、軈て後堂へぞ退りける。是により範的は、出て隈八等に下知するやう、我復思ふよしあれば、彼乞兒奴を權且助けて、後に亦せん術あり。緊しく獄舍に繫ぐべし。といふに隈八こゝろ得て、下知を雜兵等に傳つゝ、健宗を牽立させて、獄舍へとてぞ遣しける。然る程に範的は、鬼苛薊三を召よせて、近江へ火急の使の事、如此々々と吩咐て、却自餘の雜兵に、假健宗の亡骸を、某甲寺へ送れとて、執斂めさせけるに、其亡骸の懷より、圓金五十兩出しかば、範的又復訝りて、件の金を幷が儘に、みづから後堂へもてゆきて、母の大刀自に告げしかば、大刀自も亦驚怪みて、原來健宗武者修行の願稱ざるを怨める故に、丏らぬ技を做したる歟。他素より五十金の、貯祿あるべきにあらずとて、軈て納婢に吩咐て、財用簞笥を開かせ見るに、納戸なる小簞笥に納られたる、金五十兩あらずなりしといへば、大刀自も範的も、はじめの愛敬失果て、假健宗を憎しと思へど、無明の醉のまだ醒果ねば、かくても眞僞を

定得ず、只近江より窓井の回翰の、來ぬるを俟にしかじとて、そが儘に日を送りけり。畢竟樅二郎と伍六健宗と、善惡邪正異なれども、其窮阨は相似たる、後の安危甚麼ぞや。开は下回に、解分るを聽ねかし。

新局玉石童子訓 第六版 小序

長夏の竹林老鶯鳴く、秀色見ることを得ざれども、清風枕に暢へり。主人午睡稍久して方に覺、欠伸して頭を擡れば、客あり、既に來訪して、枕邊に在り。即問て曰、和漢の文人、多聞博識なる者、經籍史傳をもて人に敎ずして、稗史物の本を著して、もて虛名を高うしぬるあり。其好所、益なきにあらずや。主人答て曰、經學の人に益ある、素より其所也、然れども克勤學者稀也。稗史物の本の如きは、書を讀ことを好ざる者も、歡で是を讀。是をもて諭易し。客呵々と冷笑て曰、主翁の言違へり、稗史物の本は、寓言にして實なし。何の敎歟是あらん。曰しからず、是を作る者に深淺あり。淺きは名利を旨として、漫に時好に媚る而已。吾其敎の有無を知らず。深きは則其學問、螢雪の餘力をもて、偶這個の筆すさみあり。其書他と相似て意匠同からず。克看者は、是を大筆とす。大筆の作る所、博く譬を取て、もて蒙昧を醒すに在り。孔聖是を仁に近とす。蓋諫に五諫あり、諷諫を第一とす。忠臣孝子良友の、君父を諫其友を諫るに、專彼非を擧て犯時は、よく聽るゝ者あることなし。甚きに至りては、比干伍子胥の如き、身を殺して功なく益なし。其國亡びて、忠臣の名あり。這故に克諫る者は、犯して怒

に觸んことを懼る。是をもて譬を取りて、擬へてもて悟らしむ。其言毫も耳に逆はず、猶良藥にして、口に苦からざるが如し。因て命づけて諷諫と云。彼大筆の、稗史物の本を作れるも、亦是に似たるあり。或は故事に假託し、古人の姓名を借用して、もて善惡應報の理を詳にす。博く譬を取るにあらずや。是敎ずして諭すに庶く、實ならずして其こゝろ實也。老莊の虛無寓言、浮屠家の所謂善功方便、悟る者に裨益あり。其然らずや、然らずや。客猶諾なはざる色あり。主人其負じ心あるを見て、又枕を曳よせて、陽睡して復共に言はず。折から文溪堂の使來て、這編の序を乞ども、其稿いまだ成らず。然るを吾家の路孀等、叨に前條を聞書して、序に代てもて取せつと云、烏滸なる哉。

弘化四年丁未夏五月念五　　曲亭老逸

第五十六回

押給勇を奮て十六郎を生拘る
兄妹奇功を奏して進で虎穴に臨む

復說。曾根見伍六郎健宗は、料らずも怨ある、惡僕小雪太を擊果して、其憤りを洩すものから、範的と大刀自は、かくても惑醒ざれば、开が儘健宗を禁獄して、當日近江へ遣したる、兩個の走卒、齒四郎と疾四郎が、かへり來ぬるを俟程に、健宗は鏑野母子が、鈍くも猶疑ふて、其冤を解よしなければ、或は罵り或は呟く、怨訴は背の癬に似て、手さへ口さへ那方ざまに、屆くべきにあらざれば、やうやくに思絕て、逃去らばや、と思ふ而已、身は籠の鳥檻の獸に、似たる牢舍に起臥しぬれば、いまだ便を得ざりけり。爾程に韓錦樅二郎は、他より前に牢舍に在り。始よりして健宗と、一緒には置れねども、獄舍は素より一棟にて、間に格子の隔ある而已、迭に面を認りしより、同病は相憐み、同氣相求るにあらねども、獄卒の間あるをりは、迭にものいひ、ものいはれて、其冤屈を聞知りしかば、健宗は樅二郎を、破獄の帮助に倣さばや、

と腹に計較よしあれば、不問話説も密々に、己が姓名出處來歷、及悪僕小雪太の事はさらなり、鏑野母子が頑愚にて、玉と石とを擇むに及で、這冤に遇せぬる、一五一十を叫き示せば、樅二郎は豫より、大江峰張兩主僕の、話説に聞知たる、他は近江の觀音寺なる、曾根見伍六健宗なりき、と思へばうち驚きながら、猶さらぬ面色して、言の術よく應するのみ、成勝と通能の事などは告も知らせず、毫もこゝろを饒さねば、健宗は慰難て、己が機密を告るによしなく、單胸をぞ苦めける。しかはあれども猶幸なるは、樅二郎も健宗も、禁獄の今にして、敢亦牽出されて、呵責の笞を中られざれば、必故ある事なるべし、と思ひながらも健宗は、猶も屈せぬ無敵の本性、折々獄卒等にうち向ひて、若們我によく仕へよ。我は大刀自の侍にして、範的とは從母昆弟なり。今こそ不測の殃危にて、絏縲られて獄舍にあれども、郡司母子の疑解て、那愆を知るに至らば、悔てこの身を召上して、欵待親族の思ひを做れん。人の命は老幼不定、範的はまだ男子あらで、那身夭折するならば、當家の家督は我ならで、孰か承繼者あらん。この義をいまだ知らざるや。と髯搔揃て説誇れば、獄卒等は皆憎がりて、冷笑ふもあり堪難て、背三四撻懲すもあり。丌が中に亦、樅二郎を憐愍て、折に觸ては云云、と問慰る者もありけり。現樅二郎と健宗は、善悪邪正異なれども、俱にその罪にあらずして、各獄舍にあるものか

ら、鬼畜に似たる獄卒すら、樅二郎を憐みて、皆健宗を憎めるは、善惡自然の道理にて、人の性の善なる所、しかあるべき事ながら、健宗の這回の罪は、後に解るゝよしありとも、樅二郎の繰紕は、饒さるゝをりなかるべし、と思はぬ者なんなかりける。案下重說、這時樅二郎が白猪の宿所には、女弟押繪はいぬる日に、仲兄八重作等に、今番の禍鬼を告て、喚返さんとて、鶴脛奈我四郎を、妙義の和田正忠許遣ししに、徒に日を經ぬる而已、他だにかへり來ざりしかば、いかに〳〵、と思難て、この義を里長に告知せ、又見越松時八を、招きよせて問試るに、時八も眉を顰めて、然ばとよその事なれ。妙義は其路遠くもあらぬに、奈我四郎がゆきしより、早三四日になりぬれども、今將信あることなきは、必是故あるべし、と思ふのみにて猶日を過さば、轍の鯽魚より危ふかるべき。我師樅二郎は呵責の笞に堪で、命果敢なくなることあらば、後悔何ぞ及ぶべき。おん身にも知られし如く、鴨脚短平は、鶴脛の弟子にて、最老實なる壯佼なれば、今朝しも他にこゝろ得させて、又妙義へとて遣したり。縱那里に障ありて、八重作哥も奈我四さへ、今猶かへり來がたくとも、明日は必音耗あらん。それよりも猶慨しきは、我師の禁獄せられし始より、飯を獄舍へ餽ることすら、禁めて饒させ給はねば、我師の安危を問ふべくもあらねど、里長刀禰を誘へて、悄地に風の便を聞くに、我師ははじめ兩三度、呵責

の笞に撻懲されて、苦痛いふべくもあらざりしに、其杖傷一夜の間に、餘波もあらず愈しかば、幻術にもや、と疑れけん、その後は牽出されて、責懲さるゝことなければ、彼身は倒々に最安くて、恙あらず、と聞えたり、さのみな思ひ屈給ひそ。と囁告る人の誠に、押繪は僅に慰められて、原來大兄の杖傷の、一夜の間に痊けるは、那折までも身に附られたる、仙丹不測の卽效ならん、と思ひながらも明々地に、言に出すべき時宜ならねば、聞つゝ屢頷くのみ、纔に眉を開きける。この日も暮て次の日も、亦其次の日も妙義より、短平すらかへり來ず。押繪はさらなり時八も、をり〳〵訪來て便なきを、且呆れ且訝る而已。鄙語に云、木乃伊採の、木乃伊にもやなりけん、と噂をしても影刺さぬ、五月の天の厚雲、晴ぬ思ひに胸安からぬ、押繪は單留守の宿、晝は四隣の人々にうち守られ、夜は亦其家々女兒等に、戍せられつゝ明すなる。开も里長の掟にて、這宵は五保、甲某乙某の女房四名許と、天目屋礫助と喚做したる、磁器經紀の女兒に、其名を長良といふ、二八ばかりなる少女も相番にて、韓錦許集合來ぬれば、押繪は他等を勞ふて、蚊斷火盤も馳走の一種、茶を煮て羞めなどしたる、开が中に彼天目屋の女兒長良は、その容止醜からぬに、心艶めく癖なればや、白粉許多厚化粧して、京染の浴衣、緋太織の帯掛したる、時の流行にあらざるなければ、自餘の家々等はうち笑ひて、茄子圃に只一箇

なる、冬瓜なりき。と言めきて、笑ひを攪も短夜の、四表八表話説深初て、二更との鐘の聞えしより、多辯も言語寡く倣りて、弱きはさらなり、老たるも、皆船を漕小動の、磯の見るめも閉られて、打睡ざる者あることなければ、蚊遣の煙り絶果て、刺す蚊は桃の潰し如く、打ば鮮血に身を染て、斫られし夢をや結ぶらん、と思ふ押繪は傍痛さに、先門の戸を楚と鎖て、行燈引提て片隅へ、直しつ燈心搔立て、却納戸より廣やかなる、一張の幮を出し來て、幵が儘座席に垂しかど、衆女子は我にもあらねば、守する押繪に守せられて、有斯べしとは知るよしもなく、鼾に人を驚すまで、肱枕して臥たれば、押繪は刺す蚊を拂難て、こゝろともなく其幮に、潛入りつゝ脚方に在り。詞敵のあらずなりては、耳に氣の憑く蚊の叫び、蚤に刺さるゝ夏の夜の貪睡なければ寢とはなしに、憶ず一霎時目睡けり。爾程に、盜兒白日蔦十六郎は、曩に鏑野郡司範的に、邪慾の機密を承しより、那鏑箭の短刀をもて、韓錦椛二郎を、無實の罪に陷れ、尙且他が一家事なる、男女遺なく鏖にして、單彼相公の戀詫給ふ、梭手とやらんいふ少女を、搔攫ひつゝ將てゆきて、悄地に相公に進せなば、約束錯へず賞財は、百も二百も得がたからず。さりとて疎忽に手を下さば、毛を吹て疵をや求めん。先や那里の光景を、克覘果さずば、いかで便宜を知るよしあらん、と尋思をしつゝ韓錦の、禁獄せられし其次の日より、

夜毎に潛びて彼家の、門に立背門より張ふに、女子毎は五六名、集合て在らざる宵はなけれど、是ぞ彼棱手と喚做す、美女なるべし、と思ふばかりの、少女は絶て見ることなければ、悄地に望を失ふて、猶も夜を累る程に、這宵押繪を戍しぬる、五保の家々毎が、天目屋の女兒長良を、調戯つ其名を屢喚ぶを、十六郎は物の隙より、洩聞つ覘看るに、鄙語に云夜視遠眺にて、長良が面色艶きたるに、其被物さへ今樣にて、鄙に稀なる美女とや見てけん、且其名の長良と喚るるを、撥手としも聞愆ちて、是なりけり、と思ひぬる、十六郎は匿笑して、猶も其頭に躱て在り。小夜の深るを俟程に、夏の夜なれば短くて、子二刻時候になりしかば、婦女們は皆睡けん、鼾の聲のみ高やかにて、或は石臼を挽く如く、或は擂盆を拓に似て、咳きだにもする者なければ、十六郎は折こそよけれ、と庖湢の方に赴きて、入るべき隙を求るに、其頭に三尺の紙窓あり。玆よかンなんと手を掛て、その竹格子を破棄るに、敢毫も音たてず。素より墻を乗穴隙を鑽に、自由を得たる盗兒の、本事は今さらいふべくもあらず。其首より閃りと潛入りて、搔撈悄やかに、件の座席に入りて見るに、這里には在明の燈火あれば、擇擘に做すも易かり。況四五箇の婦女們は、垂たる幮の内にあれば、嚢の物を取るよりも、かたくはあらぬ技なりき、と思ふ十六郎は幮の内を、透見て又思へらく、這衆牝を結果けて、後に少女を掻攫なば、

背安きに似たれども、倘愆て緊要の、貨物に痍を負せなば、後悔何ぞ及ぶべき。先那按手を抓出して、布嚢を銜せ、兩手を綁りて、次の間に退け在らせて、しかして後に婦女等を、鏖に做すならば、櫃共侶に玉を摧く、悔あらずして妙なるべし、と尋思をしつゝ幮の下を、擡起して衝と入りて、臥なる長良の胸前を、搔抓み曳寄れば、驚覺て吐嗟と叫ぶを、聲立させず布嚢を、銜せて肱腋に楚と抱きて、出んとしける程もあらず、押繪は蚤く睡覺て、刺す行燈の灯光にて、盗兒入りぬと見てければ、毫も噪ず腕を伸して、既に半身幮より出ける、十六郎が左の踵を、楚と抓みて聲高やかに、皆さま起ね。盗兒入りぬ。と喚に驚く十六郎は、兩膝衝て憶ずも、抱きし長良を投退て、捉られし踵を蹴放々々、身を揉反して腰なる刃を、拔んとしける那時遲し、押繪は速く衝とよせて、其手を捉りて捩投に、簀子も拔けよと投しかば、十六郎は云とばかりに、身を空ざまに筋斗りて、臀杵搗て平張時、腰なる刃は空走して、鞘のみ帶にぞ遺りける。這物响に驚覺ける、四箇の家々等は膽を潰して、叫んとするに齒も合ず、亦只物の怕しさに、一團に身を縮して、異口同音に南無阿彌陀佛、彌陀佛彌陀佛、彌陀佛。と唱る聲も霜夜の虫に、似たる刺裳が露の間も、生たる心地せざりける。有斯し程に十六郎は、女子と思侮りし、押繪が剽捷向ふに前なく、身は只弄丸に取るゝ像く、投伏られても猶懲ずまに、


金花石葉
美ふしく且
萬夫の勇あり


かし名
とろ弁
をさら

他も亦覺ある、暴雄なれば且羞て、疼痛を忍身を起來て、刃を拿るに違なければ、疾視咾る聲も尖く、這饕鞆繪奴、我由斷して、跌きたれば輾びもしたれ。今番は饒さず、覺期をせよ。と罵りながら拳を揚て、打倒さんと嵩より蒐るを、押繪は噪ず身を反して、その手を丁と拿禁て、左を刺て引組だり。十六郎は色黑く、骨逞しき大漢にて、赭塗の金剛神に異ならず、押繪は二八の少女にて、花の容顏雪の肌膚、立雙ては節瘤松に、集白鷺に彷彿たれども、天の生做す勇婦の本性、矧亦この日來、兩箇の家兄の大刀筋さへ、角觝白打も看倣ふて、筋力は素より、義秀親衡にも、敵するに足る一期の本事を、なべての人は知らざりしに、この時はじめて著して、角ふ腕の搾きに、十六郎何でふ勝よしあらんや。面赭やかに力を裒めて、推仆さまく欲すれども、阪に車を遣如く、押繪は毫も身を動さず。推ね推ね、と含笑ながら、思ひの隨に疲らせば、十六郎は絆るが如く、腕衰息吻あへず、泥に醉ふたる鯽魚に似て、眼眩みて術なさに、引外して逃まくするに、押繪は捉たる手を緩めず。程こそよけれと其機を揣りて、ヤと聲被て又投しかば、十六郎は阿とばかりに、柱に頭顱を打傷られて、瞑眩きけん起も得ず。當下押繪は柱に掛たる、麻索一條解下して、起んと盪く十六郎を、起しも果ず兩手を綁りて、突と牽立て檐廊なる、眞中柱へ推附て、團々纏にぞしたりける。爾程に、五保の家々等長良さへ、思ひがけ

且驚き呆れて、共に押繪を勞ふ程に、長良は口に銜られたる、布嚢を左右して、掖出しつゝ云々と、原來ありつる事の趣を、告て腮を撫摩れば、家々等は創めて盗兒の、欲するよしを曉得て、彼奴は人の小孃を、勾引しもしつ奪略る、惡棍に疑なし。然ればこそあれ長良小女の、よろづ艶めく夜化粧の、單花やぎたる故に、擇採にやせられけん。危ふかりき。とうち笑へば、押繪はやよ。と推禁めて、おん身等はまだ知らざる所あり。奴家熟々這奴を相に、他はいぬる宵家兒の留守に、彼短刀をもて來つゝ、大兒を罪に陷れける、癖惡兒に克肖たり。その折は甲夜闇にて、認るまでにあらねども、彼吭に大きなる、舊瘡の迹あるを覺たり。這奴の吭にも舊瘡あり。况身材の最高かる、聲音のよく似たれば、問はでも知るき彼夜艾の、癖惡兒なるに疑なし。いでいで。といひつゝも、嚮に十六郎が鞚走したる、刃をやをら拿揚て、引提て佇と立向ひて、やをれ癖惡兒、曩に彼短刀を、もて來て這首へ投入れて、我大兒を罪なはしたる、間諜兒は爾ならん。开は何人に憑れたる。又啻その事のみならず、今宵這頭へ潛入りて、睡轉たる那少女を、搔抓みて出まくしけるは、必是所以あるべし。彼謀計を謀たる、其人の姓名はさらなり、その身の出處來歷まで、綽号實名漏すことなく、有つる隨に招了せば、呵責の苦痛を饒

すべし。然るを頼陳る歟、祕して不の字をいふならば、爪を剝し指を斫墜し、筋を斷骨を拗ぎても、招了させでやは已ん。疾うち出しね。いはずや。と引提し刃の尖を、十六郎が面前に、衝出し晃かして、刀背もて百會を打敲く、生平に似げなき少女の膽勇、儔罕なる光景に、十六郎は怕惑ふて、眼を睜り舌を掉ひ、只阿唯々々、とばかりに、應するのみ、左右なくいはず。況長良も家々毎も、彌呆るゝ押繪の勇悍、彼身に鬼神の憑給ひし歟、然ずは天狗の所爲なる歟、と思へば然しも憑しく、又只恐怖も一入にて、皆忙然と目戍てをり。姑且して十六郎は、眼を開き嗟嘆して、沙礫の中にも黄金あり、飯の內にも針あるを、察る者は豫も知ん。かゝる少女の大勇多力は、指の神巫でも看通しの、法印なりともいかにして、いまだ本事を見ざる者、前より是を知るよしあらんや。鼠兒と思悔りて、於乙に擒見て拉れしは、我不覺にして不覺にあらず。かくまで幸なき今宵の造化、既に擒にせられし上は、何もかも打出して、告るは易き事ながら、然しも女の子の敵手にせられて、首伏せんは榮なき技なり。郡司の御館へ牽もて遣りね、那里へ參らば備に知らん。と澁るを押繪は聞あへず、そを今爾に傚んや。這里にて首伏榮なくは、是もていはせん。いはずや。と刀の鉗擊丁々と、攤るゝまでに撻懲せば、十六郎は苦痛に堪ず、聲戰して、やよ等ね。助りがたき命なりとも、今這苦痛は堪がたかり。然

らば事皆招了せん。且く息を吻せてよ。といふに押絵は刃を斂めて、然らば疾いへ甚麽ぞや。と問詰られて十六郎は、憑によしなく如此々々、と喚做されたる盗兒にて、はじめ美濃路にありし事、近曾この地に流來て、鏑野郡司の奴隷等が、旅行父女を採籠て、亂打にしける折、その行李を竊略て、蚤くも其首を逃去りしに、異日件の奴隷等に、搦捕られ、廳に牽れて、久しく獄舎にありし事まで、招丁して亦いふやう、地獄も佛なきにあらず。いぬる日思ひがけなくも、我身は庭に牽出されて、鏑野殿の云々と、憑ませ給ふ機密は二个條。この身の罪を饒されて、彼短刀を授られ、この夏衣さへ圓金一枚、賜りしかば辭去りて、形の如くに計ひつ、此の屋主人韓錦を、旨く陷れたれども、餘の一條は暴搾にて、這里なる男女を皆殺にして、捘手と喚做す一箇の美人を、生捕りて將てまゐらば、賞祿は乞ふに依んとある、相公の密意は大吉利市、事皆術よく做し果さん、と思へば夜毎に潛來て、裏面の容子を張ひしに、婦女子のみにて男子は見えず。开が中に二八ばかりの、少女も一箇なきにあらねど、其名を押絵と呼るれば相公の悄地に欲し給ふ、捘手ならぬを曉得て、猶も便宜を覘ふ程に、今宵は一箇の増花あり。身のざまの艶めきて、容止も醜からず。其名を呼を洩聞くに、宛捘手といふに似たれば、他なるべし、と思ひつゝ、更闌人定りて、庵溷の窓より潛入て、見れば垂たる幮の内に、皆肱枕し

て睡りて在り。先彼捘手を曳出して、後に自餘の婦女等を、鏖にしつべし、と尋思をしつゝ帷中に、潛入りつゝ那少女を、曳出さまくせし程に、鈍や和女郎に脚を捉れて、剰慘く拈られしは、竊盜冥加に竭たるならん、早く御館へ牽ずや。と去向をいそぐは範的の、必や法度を枉て、術よく首を續るゝならん、と悄地に負み思へばなり。押絵は事の趣を、聞つゝ憶はず駭嘆じて、原來この夏四月の時候、防守翁を打擲して、目さへ脚さへ傷りしは、鏑野殿の奴隷の所爲にて、其折箒篭を搔攫しは、白日蔫爾でありけるよ。犴のみならず今宵亦、捘手長良の語路相似たるを、よくも思はで淺慮に、聞錯しは笑ふべし。といひつゝ驀て臂近なる、硯箱を曳よせて、其頭にありける鼻紙に、十六郎が招了の、事の條々漏隈なく、猶幾番も問質しつゝ、書與し稍寫果て、僅に筆を閣く程に、阿甦寺の鐘鎬々、と早丑三になりにけり。浩る折から外面に、人幾名歟來ぬるあり。忽地聲を震立て、妖々よ、疾く起出給へ。八重作哥を將て來れり。疾開ずや。と呼門ふを、問はでも知るき鶴脛、奈我四郎なるべし、と思ふ押絵の應をまたず、家々等は齊一應と答へて、身を起す者一兩名。遽しく鎖を外して、先とばかりに戸を推開れば各草鞋を脱捨て、找入る者別人ならず、八重作次世を首にて、大江杜四郎成勝、峯張柒六通能等と倶に、鶴脛奈我四郎、鴨脚短平ら、相從ふてかへり來つ。奈我四郎は引提たる、挑灯弗

と吹滅程に、押繪はいそしく立迎へて、家兄かへらせ給ひしか。大江主峰張主も、よき折からにこそ侍れ。脚力を二度までまゐらせしに、思ふにも似ず遲かりしは、必故ある事なるべし。といふ間に八重作は、大江主僕を客坐に拯めて、檐廊の中柱に、綁著られたる十六郎を、歛目に懸つゝ坐を占れば、奈我四郎と短平は、背駝し裹を解下し、手拭をもて脚を拭ふて、倶に八重作の後方に居り。當下八重作は押繪に向ひて、驚思ふ大兄の災難恨くは聞く事の、遲かりければ時日後れて、通宵走りてかへり來にける、我のみならず、大江峯張、兩君子の遐棄給はで、倶に杖を囘されたれば、心づよく思ひねかし。といへば成勝通能も、膝を拯めつ押繪に向ひて、不慮の憂患を云云、と彼一語此一語、奈我四郎と短平は、使に立し彼折に、人々は和田許在らで、尋托つゝ日を過したる、事の始末は箇樣々々、如此々々なりき、と告る程に、四箇の家々等は長良と共に、火盤に炭を吹起して、茶を煮復して拯めなどす。然れば奈良櫻八重作の、迎に立ける鶴脛、鴨脚等に得逢ずなりて、今宵やうやくかへり來にける、其顚末を原るに、八重作はいぬる比、大江主僕と共侶に、季彥父女を送るとて、和田正忠許赴きて、逗留いまだ久しからず、折から北武藏なる某の山に、野猪躬猲ありと聞えしかば、大江主僕はそを見て來んとて、主人に告げて出まくす。是により八重作も、季彥さへ共にゆかんとて、只管去向をいそ

ぎしかば、主人和田十郎正忠も、我郷導に立んとて、猛可に路次の准備をしつゝ、主客甲乙倶に五名、伴當二名許從へて、彼山投て出てゆきける。その次の日に奈我四郎は、正忠許尋來て、主の女房と掾手等に、事云云と聞知りて、亓が儘居つゝ俟べくもあらねば、その詰朝辭去りて、狩座投ていそぐ程に、最慌しき折なれば、その山の名を聞愆て、路異なれば早に得逢ず。爾後鴨脚短平も、再度の使に立られて、正忠許赴くをり只直走りに走る程に、脚の爪を蹴放しつ、正忠許辿り就ける。その夜猛に腫痛て、進退自由ならざれば、鶴脛を追蒐て、倶に彼山にゆくべくもあらず。左右する程に、八重作主客五名は、兩三日彼山に在り。倶に射獵を見盡して、伴當を將て妙義なる、宿所へかへり來ぬる程に、鶴脛奈我四郎は、路次に迷ふて日を過しつゝ、這時やうやく行遭ふて、歡びもしつ且恥て、白猪の異變を告しかば、八重作はいふもさらなり、成勝通能、季彦正忠、孰歟驚患ひざるべき。奈我四郎を相倶して、その次の日の晡昏に、宿所へかへり來にける程に、短平が脚の指の、跌痛稍愈しかば、和田の宿所を辭去りて、又彼狩座を投ていそぎける、路程いまだ遠からず、八重作等が彼山より、かへり來ぬるに逢しかば、押絹が單俟不樂たる、白猪の消息を告知らせ、且見越松時八の、口狀を傳へなどして、鶴脛と共侶に、八重作等に相倶して、這宵かへり來にけるなり。押絹は件の顚末を、茲にはじ

めて聞知りて、日屬の疑惑稍解て、却今宵料らずも、一箇の盜兒を生拘て、敺きてその來歷を、聞知りしより、我大兄を救出すべき、便宜をこそ得たるなれ。其故は如此々々なりとて、件の白日鳶十六郎を、敺きて招了の一五一十、曩に防守叟を打擲しけるは、鏑野殿の奴隷の所爲にて、その折箏箞を竊略しは、件の盜兒十六郎にて、彼相公の密意に依り、撥手少女を畧奪り、自餘の男女を遺もなく、鏖にせまく欲しける、撥手長良の名の錯誤さへ、他が招了の條々を、方僅寫著たりとて、其書を八重作等に見ずるにぞ、自餘の家々等も長良さへ、今宵はじめて知押繪の力藝、武勇は在昔の勇士にも、劣らざるべき挊きを、只管稱て已ざりける。是をうち聞く奈良櫻、八重作の歡びはさら也、成勝通能、奈我四短平、智あるも智なきも笑片向て、我們かへり來ぬる時、那暴雄が中柱に、繫れたるを見出して、故ありぬべく思ひしかども、人我言の多かりければ、そを問ふ暇なかりしに、驚思ふ押繪少女の、武勇によりて女子們の、死を免れしのみならず、韓錦を救拿るべき、照人を獲てけるは、一大功といひつべし。天も明ば里長に、告て領主に告訴せん。噫芽出たし。と衆譽の、こゝろ詞も異ならぬ、主客齊一散動きけり。有斯し程に短夜の、早曉天になりしかば、家々等は薪水を賫んとて、立て庖湢に赴く程に、八重作押繪は大江主僕の、路次の疲を慰めんとて、次の間に伴ひつ。奈我四郎と短平は、猶舊室

に在りて、十六郎をぞうち守りける。登時杜四郎成勝は、八重作押給等に叫くやう、聞くが如きは那十六郎は、韓錦主を救拿るべき、證人たる事勿論なれども、素是郡司の間諜兒にて、彼謀計に依る者なれば、彼首へ牽もてゆくとても、言を易て僞るべき歟、是も亦知るべからず。况郡司の奸虐なる、火をもて水に做す事あらば、訟一朝には定りがたけん。然らば和殿兄妹の外、訟訴人の多きを好とす。この義を思ひ給はずや。といへば通能も共にいふやう、曩に防守叟も和田生も、這地の異變を聞知りしをり、その驚駭大かたならず、坐つゝ物を思はんより、己等も推續きて、白豬へいなんといはれしかば、通宵路を走らずとも、久しからずして必來つべし。遮莫主兄妹の、告訴の爲に彼廳へ、十六郎を牽もてゆきし時、件の兩翁の來臨せば、不便にこそあらむずらめ。といふに八重作有理と應て、然らば奈我四郎まれ短平まれ、天明て後に路次まで出して、防守和田の兩翁に、有つる事の趣を、告げてこゝろを得させん歟。と相謂ふ間に天は明て、鴉の屢鳴く聲すれば、奈我四郎と短平が、開く前後の板戸の音も、生平よりは最勇しく、家々等は既に炊果たる、朝飯の饌建して、押給共倶長良さへ、もて出て主客に薦むる、混雜涯なかりける。左右する程に五月霽の、朝日出て、風猶涼き、辰牌ばかりに、天目屋礫助等の五保は、代りて家々等に睡らせんとて、各々出て來つ。又見越松時八は、この日

韓錦の家の戍する、里長五保等の食料にとて、握飯煮染物さへ、二三重なる漆櫃に斂めしを、乾兒の小力士に搭駝して、韓錦許來ぬる程に、里長も亦彼宅の、安否を撿輪の爲にとて、みづから出て來にければ、料らず衆皆集合てぞ、八重作等に對面しつ、昨宵押繪が武勇の挵き、盜兒白日鳶十六郎を、生拘しより、韓錦の、冤屈の罪を、解よしあるを、聞つゝ竝て膽を潰して、皆相賀して喋々たり。开が中に里長は、八重作等と共侶に、檐廊の邊に出て、綁られたる十六郎に、其招了を二たび問ふに、十六郎は弱果て、敢て僞ることを得ず、そのいふ所はじめの如く、既に押繪が寫著たる、條々に異ならねば、里長は然もこそとて、軈て一室に退きて、八重作等に相譚つゝ、訴狀をものしなどする程に、憶はずも時を移して、亭午の候時になりしかば、時八は押繪に告げて、齎したる握飯煮染物を、里長五保等に薦果て、その殘れるを、十六郎に喫するに、綁りたる肱手を饒さず、飯も菜も箸に串きて、他が飽まで飼けるを、見る者笑はぬはなかりけり。是より先に鴨脚短平は、八重作に吩咐られて、防守和田を迎んとて、其路次までゆきけるに、この時いまだかへり來ず。そを俟べきにあらざれば、大江主僕八重作押繪は、時八奈我四郎等と共侶に、晝飯を果し、衣裳を整へて、郡司の館へとて出てゆくに、里長竝に礫助は、長良の事あれば、倶に御館へまゐるべし。自餘の五保等は、留守せよとて、時八と奈

我四郎に、盗兒十六郎を牽立させて、彼館投て赴くに、訴訟人は都て六名、成勝と通能は笠深く戴きて、如雲如月にぞ従ひける。作者曰、前板第三十三回、孟林寺の段に、大江杜四郎と、峯張柒六が、兩兒の盗兒、狸毛吹五郎、低杭駝鳥太を生拘しより、料らず疑獄の照據を得て、乙藝六市四捴はさら也、朱之介さへ救出されしと、この段、押繪が盗兒、白日鳥十六郎を生拘しより、料らずも冤の、證を得て、其兄樅二郎の冤獄を啓かまくすると、事の趣小しく相似て、大に異なり。そを何とならば、駝鳥太吹五は、三好職善の間諜兒にあらず。且非義の義を知る者なり。况木工頭職善は、奸虐邪慾の酷吏にあらず、只其才足らざる故に、疑獄を久しく悟ざりき、是を鏑野郡司範的に比れば、雲壤との差あり。範的の行ふ所、邪慾に出て、盗兒をもて、韓錦を陥れたると、日を同くして語るべからず。かゝる奇對は水滸傳にもなきにあらず。好看る者は作者の自注を、俟たすして、自知らん。畢竟八重作押繪の訟に、十六郎を牽もてゆきて、範的の奸詐を折く、後の吉凶甚麽ぞや。そは下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二十七

第五十七回

虐政迫て勇男女四牢を鬨す
阿甦寺に諸俊傑舊主に謁す

却說奈良櫻八重作次世は、女弟押繪と共侶に、盜兒白日鳶十六郎を、時八奈我四郎に牽せつゝ、里長と五保なる、礫助に相倶して、この日未牌左側に、當郡の領主なる、鏑野郡司範的の、部領の館に來にければ、里長則先に立て、腰を屈めつ門卒等に、訴訟人のよしを告げて、找入りつゝ案內知たる、聞文廳の這方なる、問注所へ赴きて、事云々と聞上て、准備の日錄を呈すれば、執接の青士こゝろ得て、猶云云と問訂しつ。若們は例の如く、其盜兒をうち守りて、廳の局の內に集居よ。程なく御沙汰あるべきぞ。といふに里長額衝承て、退りて八重作押繪等に、告げて皆共侶に、廳の局に赴く程に、最苛しき伙兵四五名、麻衣の四天に、肱甲脛衣して、腰に兩刀を跨へたるが、或は十手、捍棒を握持て、突然と出て來つ。訴訟人等を疾視て、卒とて廳の角門を、開きて件の衆人を、局の內に呼入れて、共に非常を守りて在り。爾程に鏑野郡司

雖に盜兒は、來ぬる盜兒は、牽もて來ぬる盜兒は、彼等が既に生拘て、ゃがて其目錄にて知られしか、先母親大刀自に告知ば、主僕額を合しつ、閑室に召よせて、鍼持隈八刺高を、鬼薊耑三屆築、腹心の家隷なる、鬼薊耑三屆築、腹心の家隷なる、密譚に時を移しけり。とは知るよしもなき八重作押繪は、件の人々と共侶に、十六郎をうち守りて、久しく局の內に在り、郡司の出るを俟程に、長き夏の日欹きて、窓より暢ふ風ぞ凉き、下晡になりし時候、相公の出させ給ふぞ。と奧の方に呼はる聲して、有司を先に立せつつ、悠然として立出るを、と見れば範的にはあらずして、鬼薊耑三屆築なり。生平よりは最尊大に、端近く座を占て、八重作等を佗と見て、やをれ訴訟兒等承れ。我君みづから出させ給ひて、告訴の事の趣を、聽せ給ふべけれども、日今猛可に恙をはせば、今日の御沙汰に及ばれず。若們が牽もてまゐりし、その尷尬者を伙兵に遞與して、退りて異日の御沙汰を俟ね。といふを八重作聞あへず、吾は本意なきことに侍り。這盜兒白日蔦十六郎は、曩に彼鏑箭と喚いふ短刀を、白猪の宿所に投入れて、我兒樅二郎を、無實の罪に、陷れたる、歹人なる事、他が招了にて發覺れたり。はじめは僞りとも知らざりしに、昨宵這奴が潛來て、長良と喚做す同宿の、

少女を奪略まくせしをり、玆に侍る我女弟、押繪が單搦捕て、撻懲しつゝ責問しに、他が招了右の如し。そのをりから己等は、他郷よりかへり來て、事云々と聞くにより、うちも閣べき者ならねば、里長に告げ女弟を幇助て、出訴して罪なかりける、兄樅二郎を償まく欲す。訴狀に具なり。この義を仰上られて、樅二郎を獄舍より、饒出し給はらば、十六郎を交易に、伙兵達に遞與もせん。然もなくばいかにして、大事の照兒を捨置て、豈阿容々々と退んや。といはせも果ず苛三は、眼を瞋し聲苛立て、這奴極めて大膽なり。彼身は武士の浪人なりとも、聞文廳へまゐりながら、繩拿の下司までも、腰に刀を帶たるは、逆心あるにぞあらむずらん。然ればこそ若們が、牽もて來ぬるその盜兒は、白日鳶十六郎と喚做して、做ざることなき歹人なれば、近曾御掟により搦捕らせて、獄舍に繫置れしに、いぬる夜悄地に脫去りて、その往方知れざれば、物色して密々に、索らるゝを知らざるや。憶ふに其白日鳶は、素より韓錦が隊下の歹人にて、受たる恩の多ければ、他が禁獄に代らんとて、若們に諜合して、故意牽れて來ぬるならん。然らずば二八ばかりなる、優少女に拄られて、搦捕らるべくもあらず。その佯詐を知るべきのみ。遮莫其虛實を、今拷問の御沙汰なく、饒して幵が儘返し給ふは、十二分の好造化ならんに、己が儘なる無法の亂言、守を守とし怕れずば、若們も白日鳶と、共に獄舍に繫ん歟。

寔に烏滸なる白物かな。と權威に誇る非法の高聲。只目前の道理を枉て、主の惡事を塗隱す、被たる刷毛目の麻衣も、淺き伎倆ぞ透融る、言果べくもあらざれば、八重作時八奈我四郎、皆慍憤胸に滿て、睨詰たる幵が中に、押繪はいとゞ怨に堪ず、柳眉を反立星眼も、沃朱までに苛三を、一霎時うち見て却いふやう、相公の出させ給ひなば、稟すべきこと多かれども、這白日鳶の招了にて、左にも右にも御僻事の、免れ給ふ方なければ、猛に病著に假托て、同窮なる狐に等しき、有司達に搊せ給ふ、御胸中こそ知られたれ。權威に募り理を非に枉て、十重も二十重も推襲まで、惡事を祕させ給ふとも、天知る地知る、人知る我知る、この白日鳶の招了を、傳聞く者語續ば、只この甘羅一郡の、良賤士民のみならず、他鄕の民まで竟には知らん。やよ家兄、今日は千萬いふとも加比なし。十六郞を牽もてかへりて、異日の御沙汰を俟んのみ。といふに八重作嗟嘆に堪ず、押繪が意見寔に爾なり。この生拘十六郞は、我兄と交易に、なさるるまではいかにして、有司達に渡さんや。卒退るべしといひつゝも、この時までも懷にしたりける、訴狀を拿出て、廳の檐廊に閣て、卒とばかりに皆共侶に、十六郞を牽立て、外面投て出まくす。現八重作押繪のいふ所、正に是鏑野士僕の、惡事を攻る鍼砭にて、轉しがたき當然の、道理に苛三有司等さへ、呆れて口を鉗みて在り。既にして八重作押繪は、時八と奈我四郎

に、白日蔦を牽立させて、局の樞戸推開きつゝ、出まくしける程しもあらず、苛三等の背の方に、建たる屛風の蔭よりして、丁と打出す銑鋧に、十六郎は背の窮所を、梢缺までに串れて、潑と濆る鮮血と共に、一聲呀と叫びも果ず、仰反仆れて死でけり。是にぞ驚く八重作押繪、鏑野時八奈我四共侶に、後方を佐と見かへれば、件の屛風を推開きて、顯出るは別人ならず、郡司範的なり。蒼色の麻衣に、小刀を腰にしつ。長袴の裙提返して、上座に立駐り、四下に响く聲震立て、やをれ屈簗、最手緩し。我那里にてうち聞くに、八重作等の訴訟は、取るよしもなき詭譎なり。牽もて來ぬる十六郎は、樅二郎の支黨にて、曩に獄舍を脱出て、往方知ざりし罪人なるに、饒して返す事やある。我この故に撃留たり。矧又押繪とやらんは、女子に似げなき大膽不敬、領主の廳にて憚りもなく、我身主僕を罵るに、同穴なる狐をもてす。今是をしも忍べくは、何事を歟忍ばざらん。一箇も漏さず搦捕りね。最手緩し。と敦圉たる、下知に苛三有司等さへ、阿と額衝きたる頭を擡て、兵每御掟ぞ其奴等を、打仆して皆綁ずや。と劇しく傳ふる諸聲に、局の內に侍りたる、雜兵四五名、阿と應て、身を起しつゝ閃かす、或は十手捍棒、透もあらせず稠籠て、搦捕ん、と犇めきたり。事の敗れに里長等、毀物なる礫助は、さらに生たる心地せず、咱等も側杖打れやせん。と怕惑ひつ逸早く、角門より逃出て、外面投

て走りけり。當下八重作押繪はさらなり、奈我四郎さへ時八さへ、事急にして一言一語の、問答に遑なければ、倶に必死の覺期を究めて、敢亦毫も擬議せず、雜兵等の十手の下を、搔潛つゝ曳抓みて、虀粉に做れ、と投伏々々、局の板壁に掛たりける、赤樫の六尺棒を、手に〳〵取りて打振々々、範的主僕を撃んと拔めば、背三并に有司等は、驚き噪ぎ立塞りて、共に刀を拔翳しつゝ、一霎時は防ぎ戰ふものから、死を究めたる勇男勇女に、勝べくもあらざれば、或は刃を打落され、或は腕を折れて、堪ずや共に逃走れば、範的は勝負を俟たず、慌忙き悚離て、遄くも奧へ退きしより、手にあふ者はあらずなりたる、八重作は勢に、乘して奧へうち入りて、累る怨を雪んず、と惴るを押繪は推禁めて、やよ家兄、开は危し。我們纔に四名にて、奧まで入らば手捕にせられん。竟に免れがたくとも、大兄を救出してこそ、但死を倶にすべきのみ。といふに八重作時八奈我四、寔に然なり。と應へつゝ、椽廊の邊なる、石の浄手盤に附られたる、柄杓に水を汲拿て、倶に咽喉を潤して、外面投て走出れば、既に鳩る加勢の雜兵、甲乙都て十餘名、迯さじ遣じ、と推稠蘢るを、八重作等は物ともせず、逆進みつ棒閃かして、息をも猥れず戰ふたり。爾程に、大江峰張兩主僕は、今日の讞斷凶多くして、吉寡からん、と思ひしかば、嚮に八重作等に推續きて、門内に紛れ入りて、問注所の這方なる、小籬笆の裏に

立躱て、彼身の安危を知らまくするに、夏の日旣に西に淪みて、黄昏近くなりし時候、聞文廳の局の方に、人の罵り噪ぐ聲して、走出來る里長を、成勝背より掖留めて、問得て玆にはじめて知る、八重作押繪の訴訟は、思ふにも似ず破敗に及びし、事の難義に驚れて、うち入りて援ん歟、出て來ぬるを俟べき歟、と思難つゝ身を固めて、猶も便宜を覘ふ程に、八重作押繪時八奈我四、皆大亂髪ならぬはなく、局の内より走出ける、撞見頭に加勢の雜兵、突然と集來て、搦捕ん、と犇めきたる、背後の方より成勝通能、顯出る聲高やかに、白猪の兄妹こゝろ强かれ、我們旣に玆に在り。いで〳〵路を啓んず。と呼りつ共侶に、刀を晃りと引拔て、驚き見かへる雜兵を、右と左へ斫仆す。今這兩箇の援兵、時に取ては百騎千騎に、等しき八重作押繪等の、勇氣はじめに一倍して、得たりや應と前後より、透もあらせず撃散せば、雜兵等は辟易して、半死半生ならぬもなく、纔に命を免れしは、脚に任して逃走るを、八重作押繪、奈我四時八、成勝通能共侶に、猶逃さじ、と追程に、聞文所を相距者、六七十間にして、土牆あり。甍を多く疊籠たる、這處に獄舍ありけり。件の六名の勇男女は、料らず玆に來にければ、獄卒等驚見て、狼籍兒こそ出來にけれ。罪人をな奪れそ。と呼はりつ六七名、各棒を携へて、走出つゝ八重作等を、撃仆さんとて群立蒐れど、八重作等はいかにして、一歩も退くべき。押繪

も豫懐に、したる短刀を拔持て、當るに任して斫仆す。況大江峰張の、刃尖に向ふ者、首と軀と相別れて、仆れざるはなかりける。然れば八重作奈我四時八、共に屠龍の術を盡せば、然しも猛かる獄卒七名、死活は知らず仆れけり。浩りし程に、韓錦樅二郎は、單這首の獄舍に在り、事の仔細は知るよしなけれど、まだ暮果ぬ薄明りに、格子の內より透し見れば、今獄卒等を斫仆したる、其人々は我弟妹と、友人弟子ならぬもなければ、うち驚き亦歡びて、やよや八重作、押繪等にあらずや。我樅二郎は玆に在り。救へ、すくへと呼はるにぞ、衆皆齊一見かへりて、應と答る八重作時八、奈我四郎も共侶に、獄舍の格子に手を掛て、毀開かまく欲すれども、方三寸なる堅木をもて、造立たる格子戶なるに、八重作奈我四時八は、身に受たる淺痍あれ ばや、倶に力を勠しても、早に開くべくもあらざりしを、押繪は見つゝ喚禁めて、家兒、爾しては時もや移らん。退き給へせん術あり、といひつゝ兩袖卷揚る、其首に建置たる圓柱あり。大きなる鈅打たるは、罪人を責る時、是に繋ぐ爲なるべし。押繪は件の圓柱に、兩手を掛つつ、ヤといふて、最も如易に曳拔くに、其長四尺に過ず。是よかゝなん。と拿直して、找みよりつゝ獄舍の格子を、力に信して礮と衝く、嚮と共に摧破れて、出入自由に做りしかば、樅二郎は且感じ、且歡びて獄舍より、身を斜にして脫出るを、八重作等は相迎へて、斫仆したる獄

卒等の、腰なる刀を分捕して、樅二郎に渡し、押繪にも、長き一刀を授けつゝ、却何里より脱去んとて、倶に四下を見かへる程に、成勝と通能は、人より先に見出しにけん、獄卒小舍の簷に掛たる、丈餘ばかりの竹階子を、拿下し來つ土牆の、便宜の所に建掛れば、衆皆是に便を得て、攀登る者都て七名、樅二郎を首にて、八重作押繪、成勝通能、時八奈我四等辛くして、外面に下立に、宛畫る猿猴の、水月を撈るが如く、迭に腕を蔓にして、携りて輒く下る程に、蚤きは己が肩階子を、假して幇助になるもありけり。幵が中に成勝通能は、皆下立ける後に、徐に階子を登り來て、やをら階子を曳抗て、下立つ塹に投掛て、皆共侶に渡しけり。然しも修錬の剽捷を、皆目覺く思ひけり。這頭は鏑野範的の、後門前に程遠からぬ、諸人通行の官道なれば、龍潭虎口を稍脱れて、後安きに似たれども、いまだ去向を定得ず。左ても右ても白猪の宿所に、かへるべきにあらざれば、直に妙義へ走ん歟といふ、商量いまだ央に至らず、前後の門を開せて、追蒐出來る緝捕の頭人、西の方より鍼持隈八、東の方より蒐薊苛三、騎馬の打扮一容にて、陣笠兩刀苛しく、隊兵合て五六十名、挑燈蕉火白晝の如く、照す火光に透見て、叛逆人等は那里に在り。脱しなせそ。と呼はりて、東西齊一稠籠る。然れば再度の大厄難に、免れがたかる樅二郎、八重作押繪、成勝通能、時八奈我四郎に至るまで、敢又戰爭を好まず、

倶に刃の折れるまで、殺散し撃退けて、皐雲の甲夜闇に、紛れて倶に走んず。といひ合さねど勇士の本性、手に〳〵刀を引拔て、西と東に別れつゝ、競ふ緝捕の雜兵を、中るに儘せて殺拂へども、他は大勢、躬方は七人、寡をもて衆に敵しがたかる、勢同じからざれば、斫ども刺ども輒くは、路を啓くによしなくて、奈我四郎と時八は、竟に刃を打落されて、搦捕るゝ程しもあらず、白豬の坊の方よりして、忽焉として走り來ぬる、俠客力士二三十名、或は竹槍長柄の鎌、或は朸連枷なンどを、挾みたる开が中に、頭人なるべし、兩箇の武士あり。芭蕉布の野袴に、信濃麻の戰袍をうちはふり、腰に兩刀を跨へて、毬像なる挑燈の、細柄を袴板に挿み、手に一尺有餘なる、鐵扇をぞ采たりける。當下件の兩箇の武士は、近づく隨に聲高く、やよや韓錦の黨、こゝろ安かれ。既に援兵來れり。斯云者を何人と賍する、當國妙義山下の人氏、和田十郎橘正忠、其子小十郎正義等玆に在り。衆皆找め。と駈立る、聲共侶に惴雄の、壯佼甲乙十五六名、數ならねども鴨脚短平もあるものを。と名告被け先を爭ふて、短兵急に攻立れば、憶はず是に氣を得たる、韓錦等の男女五名、枯たる苗に雨降沃ぐ、轍の鯽鮒の水に逢ふ、威力はじめに同からず、得たりや應と開き合して、奮撃突戰手を盡せば、緝捕の衆兵亂噪ぎて、歩列踉蹌になる隨に、正忠の後陣の壯佼、是も亦十四五名、先に進みし躬方を援けて、

三七二十一に撃散す。然程に和田の冢男、小十郎正義は、今茲二八の少年なれども、武藝胆勇、一人當千、故にし筑石の御曹司と、紀平治太夫を兼たるにや、連りに礫を投かけて、瞬く間に緝捕の兵を、打仆す者五六名。其拳に逆ふ者、免れがたく見えしかば、苛三も隈八も、鬼胎を抱き馬乗放て、躬方を盾に倣す折から、忽地城館の塀裏より、長柄の挑燈を刺出し、勇士なるべし兩箇ばかり、踏續臺に陟りけん、半身を顯して、慌たる聲高やかに、喃緝捕の人々にものいはん。鬼薊主鍼持主、方僅御館に異變あり。大刀自御前の召るゝぞや。其逆黨は打散して、やよや疾參りねかし。と呼はる聲を聞しより、苛三隈八、いへばさらなり、衆兵竝て慌噪ぎて、更に戰ふこゝろなく、素破事こそ出來たれ。退や〱。と叫びつゝ、門内投て入らまくするを、正忠正義、其隊の力士等、大江峯張韓錦、男女の兄妹透もあらせず、狻猊をもて群る虎を、馳走らするに髣髴たる、威勢孰敢當るべき。或は斫れて仆るゝあり。或は撃れて平張あり、或は塹迆に滾び落て、半死半生なるもあれども、是を扶る者さへなければ、搦捕たる時八奈我四を、八重作押繪にとり復されて、咄と頽れて逃走る、其隊に先だつ苛三隈八、騎たる馬を敵に奪れて、前門まで逃て來つ、開よ〱。と呼はりて、角門より稠入りける、二隊の雜兵六十餘名、多くは撃れて逃かへる者、三十名には過ざりける。當下正忠成勝等は、躬方を制めて逃る

を追せず。痍負兒を扶助させて、白豬の方に退くに、當晩の分捕少からず。雲珠鞍置たる馬二頭、大刀副刀、十手捍棒に至りては、數るに遑なかるべし。有右而正忠正義は、勝鬨三たび揚させて、列を正しつ白豬の坊まで、皆共侶に退く程に、約莫這頭の坊賈等は、今宵の忽劇を耳驚しけん、各門の戸を鎖て、寂寥として音もせず。幵が中に這坊盡處に、野蔬の市場あり。朝市の建每に、近邊の壯客等が、もて來ぬる瓜茄子、其餘何まれ菜蔬の類を、其問丸が受拿て、一霎時積措く菰屋ありけり。人住屋にあらざれば、席薦などは布も儲ず、夜は莚戸を垂たるのみ、素より守人のなければ、和田正忠は先に立て、權且這里に憩んとて、妙義より將て來ぬる、一箇の從者に吩咐て、其莚戸を卷抗さすれば、成勝通能縱二郎、八重作押繪を首にて、時八奈我四郎短平等、這餘加勢の力士と共に、甲乙都て三十餘名、皆共侶に立よりて、各意衷を盡さまくす。當下成勝通能は、今宵痍負し者の爲に、腰なる仙丹を拿出すに、金痍兒は十餘餘なるに、今は藥の多からねば、短平等にこゝろ得させて、其頭に在ける桶の水もて、仙丹を解きゆるめて、八重作押繪、時八奈我四郎、其餘も刀瘡に塗らしつ、且その藥水を飲するに、淺瘡なるは即效あり、深痍も是より二三日の程に、皆愈ざるはなかりけり。爾程に縱二郎は、必死の獄舍を拯ひ出されて、憶ずも籠の鳥の、舊巣に還る心地すれども、いまだその所以を知

らざれば、こゝろ得がたく思ひしに、この時押繪八重作等が、事如此々々と告るにより、昨宵押繪が生拘し、盜兒十六郎の招道にて、告訴の便宜を得たりしに、範的主僕の奸虐なる、そを詐僞として聞容れず、範的反て銑鋧を、飛して、十六郎を殺ししより、事の破敗に及びしかば、胞兄弟一緒に死なばや、と思定めし破獄の顚末、又成勝通能は、昨宵八重作に相俱して、妙義よりかへり來て、今日も亦八重作押繪等の、資助に做りし事までも、縱二郎は聞果て、感嘆しつゝ却いふやう、我女弟なりとて譽にあらねど、昨宵押繪微りせば、孰歟彼盜兒を、捕へて我身の冤を解んや。況大江峯張兩君子は、交友知音の爲にしも、其身の安危を擇ずして、彼折助劍せられずは、八重作押繪、時八奈我四郎、猛しといふともいかにして、獄卒までも斫盡して、我縱二郎を救出さんや。實に感ずるに餘りあり。夫百足の虫の、死して仆れざる者は、扶助多きによりてなり、持べき者は弟妹なり、知己良友の信にこそ。と只顧感嘆したりしを、側聞する正忠父子、以下の力士等共侶に、寔に然なりと應けり。當下八重作は、押繪と共に、正忠父子に謝していふやう、己等が死を辭せずして、屢大敵と戰ひしは、素より兄の爲なれば、今さらにいふにしも足らず。貴老は他鄕の人なるに、己等に推續きて、到來せられしのみならず、這地の力士を駈催して、彼門前にて、追隊の多勢を、擊退け給ひしは、神出鬼沒の妙手段。彼

折援兵なくば、我們は大刀をれて、竟に虜にならむずらん。料らざりける幸ひなりき。といへば亦成勝通能、樅二郎以下の毎、奈我四郎時八も、共に稱て已ざりしを、正忠は聞あへず、否其義にも亦故あり。奈良櫻主の知られし如く、大江峰張共侶に、彼山獵を見てかへるさに、韓錦の事云々と、不慮の窮阨を聞しより、有繫に胸の安からねば、防守主に相倶して、和主達に推續き、白猪にいなん、と議する程に、孩兒小十郎正義も、ゆかまくほしといふにより、他と從者一名を將て、防守と共に主僕四名、連りに路次をいそぎつゝ、今日午過る時候なるべし、既に白猪に遠からぬ、田文の茂林の那方にて、豫相識、鴨脚短平の來ぬるに逢ぬ。聞くに昨宵押繪少女の、白日鳶と歟いふ盜兒を、生拘しといふ一奇譚に、驚きもしつ今さらに、歡ばしさも一入にて、いよ〳〵路次をいそぎつゝ、白猪の宿所に來にけるに、五保のみ留守して在り。和殿兄妹大江主僕は、里長等に相倶して、兩箇の弟子時八奈我四に、白日鳶を牽せつゝ、郡司の御館へとて出てゆきしは、亭午の時候なりきといふ、事詳に知られしかば、喜悅意表に出るものから、又克思へば何とやらん、心許なきよしもあれば、防守叟と商量しつ、主なき宿にて俟んより、彼門前まで赴きて、韓錦等を迎んとて、鴨脚を案内にして、我們父子防守叟、從者さへ相倶して、彼門前まで來にけるに、那里には憩ふべき、茶店などあることなし。爾るを

久しく立在なば、怪めらるゝ事もやあらん、と思へば軈て退きて、便宜の茶店にて俟程に、韓錦の弟子も、亦弟子ならざるも、早く風聲を聞知りけん、恩を感じ、威風を慕ふ、壯佼約莫二三十名、漸々に集ひ來つ、今日韓錦の赦にあふを、俟得て相迎んとて、共に茶店に憩て在り。是により我們は、その衆人にものいはれ、ものいふ隨に問試るに、皆是俠客力士にて、我毎に相似たる、同憂の志、是なきもあらざれば、迭に憑しき思ひあり。是により短平に、云々ところ得させて、韓錦の厄解けて、告訴の人々と共侶に、出て來ぬるを見るならば、走りかへりて告よとて、彼門前に跟蹤しに、久しくなるまでかへり來ず。既にして沒輪刺す、下晡になりし時候、短平が走來て、己等に告るやう、方僅五保の礫助が、大く怕れし面色にて、彼館より走出しを、追蒐つ曳駐めて、告訴の首尾を諮るに、礫助叟は息吻あへず、然ればとよ其事なれ。郡司の相公の暴虐倣す、證据人なる白日鳶に、ものもいはせず銑鋧もて、結果けて贓奈良櫻兄妹を、搦捕せまくせられたる、禍鬼二たび起りしかば、里長刀禰さへ我身さへ、側杖打れて連累に、做りもやせん、と怕惑ふて、辛くも走出たりき、と告げも得果ず振放ちて、飛が似くに逃去りにき、と告るに驚く我們と、共に散動く力士の毎。素破事こそ出來たれ、郡司なりとて法度を枉る、暴戻に孰歟從ふべき。其義ならばせん術あり。徑に彼館に推よせて、門

戸を破り、塀を毀ちても、打入りて目に物見せん。早く准備をせよかし、と罵りつ共に退きて、時を移さず竹槍桿棒、連枷なンどを引提來ぬる、其間に防守叟は、我正忠に叫くやう、譬へば那牡佼等の資助によりて韓錦を、拯ひ出す幸ありとも、再度の追隊を防ぐべき、脚溜の要害なくは、思慮淺きに似たり。愚按ずるに、阿甦寺の住持閑廂知尙は、素是出家人なれども、善に與し惡を憚、志ある者に似たり。況先住の老和尙は、俗姓肥後の人にして、菊地に舊緣ありと敷聞にき。嚮に已屢參詣して、疎からずなりしより、迭に知己の思ひあり。今彼寺に走ゆきて、閑廂和尙に相譚はゞ、拒まで集會の義を許さるべし。吶等は文墨を技として、且年旣に老たれば、戰の場に臨みて、堅を摧き銳を辟く、壯佼們に及ぶべくもあらず。然れば身に相應しき、火急の使介に立べからん。この義誰何、と談ぜらる。弁も緊要の事なれば、爾るべし、と應へつゝ、翁を彼寺に遣したり。浩りし程に躬方の衆人、二たび集ひ來にける折から、鏑野の館の方に、人夥叫ぶ聲、手に取る如く聞えしかば、衆人齊一驚き立て、那里の安危心許なし。疾打出よ後れなせそ、と罵りつ器械々々を、引提て走りゆかまくするを、吶等一霎時と推禁めて、各位は勇あり義あり、筋力飽まで悍しといふとも、いまだ軍陣に熟ずもあらば、必勝の利を得がたかるべし。我は妙義の山里なる、和田十郎正忠なり。楠公より相傳の、兵法

陣列武藝まで、人に教るをもて家業にすなれば、我名を傳へ聞れしもあらん。尙少年にあなれども、拙郎正義もこゝに在り。我軍配に從んや、といふに衆皆異議もなく、丌は希ふ所なり、教を承まく欲すといふ。因て即坐に隊配を定めて、三十餘人を二隊に分ちて、則先鋒の頭人は、小十郎正義をもてす。後陣は正忠將として、去向僅に三四町を、只一跨に走りゆきて、見れば果して和殿胞兄弟、大江峯張共侶に、彼門前にて衆兵と、鎬を削る血戰の、最中にてありければ、些も猶豫せず多勢の敵を、撃靡け殺散して、本意の如く和殿等を、救ひ得てこそ候なれ。と躬方の來歷、加勢の始末を、言詳に告げしかば、八重作はいふもさらなり、共にうち聞く樅二郎、成勝通能、押繪時八、奈我四郎等に至るまで、感謝に堪ず承服して、多く得がたし。とぞ稱ける。丌が中に樅二郎は、恭しく謝していふやう、我身不肖にあなれども、幸ひにして諸君子の、資助によりて萬死を出て、一生を得たりける、悅び是に優す者なし。爾らば玆を退きて、共に去向を卜むべし。就て時八奈我四郎等は、各宅眷あるなるに、うち捨置かば搦捕られん。走りかへりて妻をも子をも、倶して阿甦寺に來よかし。といへば正忠も共にいふやう、只この毎のみならず、今宵加勢の人々も、妻子ある者多かるべし。蚤く宿所にかへりゆきて、資財伙器を取斂め、宅眷を倶して阿甦寺に、來會勿論なるべし。といふを衆皆聞あへず、

然ればとて我們附驥の幸ありて、義烈の隊に容られたれば、妻子を見かへるに遑なけれども、共棄殺にせば、計の足らざるに似たり。暫時身の暇を給はるべし。と應へて軈て時八等と、共に宿所に退る者、十二三名には過ざりけり。开が中に短平は、孤獨なれども鶺鴒の、撍助になるべき者なればとて、縱二郎が指揮して、他をも共に遣しける。當下和田正忠は、妙義なる妻と撈手等に、この地の異變を告知らせて、こゝろ得させずはあるべからずとて、倶して來ぬる一箇の從者に、言如此々々と吩咐て、些の路費を取せつゝ、通衍路を走れとて、妙義の宿所に返しけり。左右する程に、夜は初更になりぬれども、二たび緝捕の衆兵の追蒐來ずなりけるは、亦是故ある事なれども、併此義士等の、幸ひにして今はしも、心に被る隙もなければ、早く阿甦寺に造んとて、市場の菰屋を立出て、列を正せるその每は、和田十郎正忠父子、韓錦縱二郎褄鯉望洋、其弟奈良櫻八重作次世、その女弟多力の押綸、浪速の旅客、大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能を首にて、其隊の力士二十餘名、分捕の馬二頭を牽せて、雲斂りて隈もなき、月を燭に整々と、件の梵刹に近づく程に、遠望の爲に出されたる、道人走りかへりて、季彥等に報にけり。當下松煙齋防守筑四郎季彥は、靑法師等と共侶に、三門まで出迎へて、來ぬる人々に對面しつ、引て客殿に赴く程に、力士等は件の馬を、道人に預け且株を飼せて、軈て

次の間に集合けり。爾程に閑廂和尚は、沙彌道人等に吩咐たる、豫准備の白粥をもて、來會の衆人に、薦めて疲勞を慰めらる。是に至て季彥は、嚮に躬方の苦戰の一條、且全勝の爲體を、聞得て歡びいふべうもあらず、共に去向を商量しぬるに、這客殿は南面にて、夜風程よく吹入るれば、蚤さへ蚊さへあること稀なり。然れば這席なる人々は、有繫に疲なきにあらねば、或は柱に背を倚かけ、或は肱を枕にして、憶ず眠を催す折から、當山の住持閑廂和尚は、蟬の羽より薄き法衣の袖に、持る拂子は雪の柳の、風に靡くに髣髴たる、童顏仙骨殊勝にて、一箇の行童に手燭を秉せ、又一箇の美少年と、年五十有餘なる、一箇の法師を從へて、方丈より出て來にければ、義士等は驚き身を起して、席を讓りて請待す、其坐稍定りて、和尚は義士等に初對面の、口誼最叮嚀にて、却いふやう、和殿等今宵の搟きは、季彥叟の告ぐるにより、聞得て殆驚き思へり。公道をもて是非を論ぜば、其地方に居て領主に叛く、罪反逆に等しかるべし、开は凡庸の褒貶にて、鏑野氏は必討べし。故何とならば、範的の暴虐なる、奸詐をもて人を欺き、威權をもて民を虐げ、貪れども飽ことなく、富といへども足ることを知らず、荒淫にして人の妻妾を犯し、性惡にして善人を憎めり。是をもてその下風に立、其祿を食者、共に主の惡を資て、民の蠱毒にならざるはなし。又只この事のみならで、範的の父郡司範射は、故の郡


誰知忠義在緇衣
利劍當自佛手出
和尚
魚丸
入道



領、部領朝臣武茂の家老なりき。武茂本性柔弱にて、彼身多病なりければ、一郡の政事を、皆範射に任用せし程に、其權おのづから下に移りて、武茂はあれどもなきが如し。然れば範射の人となり、人を欺く才ありて、民に與るに私恩をもてし、民の欲せざる事は、作りて君命と倡たり。是をもて一郡の民、皆範射を德として、武茂を怨る者多かり。矧又範射の妻大刀自は、內訴の義さへ允されて、常に奧まで出入すなれば、武茂に淫酒を薦め、剩讒言して、夫婦の中を裂に至る。かくの如くなる事年ありて、既に隣國に聞えしかば、範射竟に扇谷朝興主に密訴して、武茂自立の志あり。是をもて甲斐國なる、武田氏に謀合して、兩管領を攻まく欲す。臣範射面を犯して、屢諫れども其甲斐なく、反て比干の胸を裂んとす、事既に急なり。故に已ことを得ず、忠告仕り候、と寔しやかに告げしかば、朝興驚き且怒りて、日ならず逞兵三千をもて、部領の館を攻擊するに、範射內應したりしかば、一郡瓦の如くに解けて、防ぎ戰ふ者もなく、纔に忠義を知る者は、主君武茂と共に腹斫て、敵に首を奪れぬはなし。然ればこの亂軍に、武茂の內室はさらなり、二箇の郎君魁孺后孺一族郎黨數を盡して、這里那里にて皆擊れて、免るゝ者なかりけり。既にして範射は、思ひの隨に主を仆して、扇谷に媚ざることなく、いかで這回の勸賞に、當郡の新司たらまく欲す、と只管に乞稟ししかば、朝興則

その義を饒して、京師へ使をまゐらせて、室町殿に告稟すにより、範射は願の隨意、新郡司にぞ補られける。是に至りて部領氏の、子孫絶たるに似たれども、尙幸ひに武茂に仕へたる、垣衣と喚做す妾の腹に、武茂の落胤あり。懷胎八月に及べるを、武茂いまだ亡ざる時、範射悄地に大刀自と、計りて垣衣を人知れず、殺さまく欲せしに、垣衣の兄なる、杵臼七郎程榮と喚做す者、早く其機を猜しけん、有一夜垣衣を竊出して、往方も知らずなりにけり。其程榮は別人ならず。迺拙僧の從弟なる、この法師にて候ぞや。是より後の事共は、この沙彌こそよく知りたれ。愚僧に代りて諸君子に、志願を告げて乞ずや。といはれて杵臼入道は、應をしつゝ膝を找めて、義士等に向ひて却いふやう、目今師父の告げられしごとく、野衲彼折垣衣に俱して、他鄕に走らまく欲するに、脚小を携て、闇路を辿らば幾程もなく、追隊の兵に逼られて、搦捕るゝ事もあらん。世の常言に、燈臺は、下暗しとしもいふなれば、權且この地に躱居て、追隊の奴們を出拔てこそ、徐に他鄕に赴くべけれ。阿蘇寺の住持閑廂和尙は、師檀の好あるをもて、豫意衷を呫き告げて、憑稟たりければ、一霎時那里を隱處に、做すにはしかじ、と尋思をしつゝ、當晚垣衣を伴ふて、當山に潛來つ、師父に憑稟ししかば、一議に及ばず許容あり。猶も外看を避ん爲に、我身はさらなり垣衣さへ、悄地に頭髮を剃毀させて、我法名を趙心と賜り、垣

衣を周晉と命けらる。是よりの後二三十日、當寺の窖藏に身を潛して、彼毒氣を避る程に、追捕の沙汰も聞えずなりぬ。是に於垣衣と共に、男女の頭陀に打扮て、隨卽師父の紹介により、信濃なる川中島より程遠からぬ、窪寺に赴きつ。その門前に菴を締びて、世を潛びてありける程に、垣衣の女僧周晉は、安らかに產の紐を解て、武茂朝臣の遺腹なる、郞君生れ給ひにけり。兄妹本意ある歡びなれども、憂苦艱難いふべうもあらず。莊子に所云轍の鮒の、泥に吻くに似たるをもて、郞君の乳名を、轍魚丸と名づけまゐらせ、又或ときは和訓の隨に、和達魚丸とぞ喚做しける。有恁し程に、鏑野郡司範射は、弑逆の後僅に三稔、不義の富貴に誇しに、逆謀の天罰なるべし、他が最愛の扈從なりける、某乙と喚做す美少年、主を怨る事やありけん、有一宵範射の睡首を劃て、彼身も自殺したりといふ、世の風聲に聞えたり。こは料らざる幸ひにて、最も愉快の事なれども、範射の獨子範的は、當時總角なりけるを、母親大刀自後見して、政ごちたりければ、一郡の民叛く者なし、己者は猶蹐りて、間を覘ふ便なかりき。爾れども魚丸君は、稍成長り給ふ隨に、其性最伶利くて、骨相も鄙ならず。をさ／＼手習讀書を好みて、武藝も亦密々に、其貯意なきにあらず。今茲は年稍十あまり、七にぞ做り給ふ。然れば興復の志、身に漆するまでに、孝義兩ながら淺からねども、人に告ぐべきことならねば、絕て羽翼を得が

たかりしに、思ひきや諸君子の、我爲ならずも範的を、深く怨るよしありて、對治の軍議あらんとは。こは我主僕の洪福なり。やよ郎君、年來の宿望を、告げてこの諸君子の、補助を憑み給はずや。といへば魚丸恭しく、義士等に向ひ禮を正して、我身不肖にあなれども、倘幸ひに各位の、武勇を借て賊臣を、討滅して舊領に、立かへる日のあるならば、亓は諸君子の賜ものなり。母周晉は窪寺なる、草庵に留守して在り。是等のよしを聞知らば、さぞな歡び候はん。いかで〳〵。とばかりに、感涙坐に唶て、亦他事もなく見えしかば、衆皆感激せざるものなく、玆に創てその一奇譚を、聞得て歡びも大かたならず。亓が中に八重作押繪は、大江主僕と共にいふやう、我們郡司の非法に堪ねば、命を免れん爲にのみ、已ことを得ず囚牢を破りて、絹捕の士卒を擊走せしを、快とは思はざりしに、魚丸君の奉爲に、後の戰ひを做す時は、義兵にして忠孝の名あり。孰歟叛逆といふべきや。といへば樅二郎頷きて、我等は他鄕の流寓兒にて、武茂亡び給ひし比は、我身總角なるをもて、然りとは聞も知らざりき。範射父子の奸惡なる、小莽操といはまくのみ。憎し〳〵。と怨ずれば、衆皆然こそ。と應つゝ、共に嘆息したりける。當下成勝通能は、趙心法師を熟視て、成勝先問ていふやう、事卒爾には似たれども、御坊は先月某の夜分、信濃路なる客店にて、己等の爲に、部領の莊の、名の錯誤を云々、

と解示し給ひたる、行僧にあらざるや。といはれて趙心驚きながら、大江主僕を熟視て、原來其夜の旅客は、和君達にてありけるよ。この地は己等の故郷なれども、今も外看を憚れば、立かへり來ずなりけるに、今茲は先君武茂朝臣の、十七回忌なるをもて、其義を師父に告んとて、悄地に當寺に參詣しける、かへさにて候ひき。恁而昨日はその年忌の、本日に丁らせ給へば、魚丸君に倶しまつりて、又當山に潛來つ、法莚供養を果されしかば、明日は信濃へ還らん、と思ひにけるに、思ひきや、今宵諸豪傑に邂逅して、事の便宜を得つべしとは、鬼神不測の妙契なる歟。と只管感嘆したりける。この段いまだ盡さねば、又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二十八

第五十八回

一炊の榮華健宗郡縣を受く
分兵の計略正忠飛鳥を放つ

登時杜四郎成勝は、杵臼入道趙心と、奇遇を感じて且いふやう、事の前より知りがたき、譬ば御坊と己等の如し。彼信濃路にて苟且に、ものいひしをりいかにして、今宵の再會を思んや。最憑しく候。といへば通能も共にいふやう、我們他鄕の旅客なれども、緣あればこそ這君の、資助になるも奇からずや。義を見てせざるは勇なきなり。諸賢と倶に一臂の力を、盡さでや候べき。と慰められて趙心は、魚丸と共侶に、歡承て謝していふやう、主君は尙少年なれば、左にも右にも諸君子の、隨意計せ給へかし。世を潛爲なりとも、我身は既に佛門に、入りて許多の年を歷たるに、共に軍陣に立交りて、殺戮を事とせば、相應しからで佛意に背ん。他力は彌陀の本願なり。只諸君子の合力を、仰ぎまつるにこそといふ。折から土圭の轔る音して、當山にて撞出す、丑三の鐘響くにぞ、閑廂和尙は衆人に、うち向ひつゝ辭していふやう、夜は大く

深たるに、諸賢姑且休ひ給へ。見らるゝ如く當山は、四壁都て堅固にて、石を雜へて築立たれば、敵を防に便あらん。且今は麥の熟秋にて、苅採たる新麥多かり、數百口の夫食に足るべし。この他何まれ承らん。必な介意し給ひそ。と最叮寧に慰めて、卒とばかりに魚丸を、いそがし立て共侶に、奥なる便室に退きしかば、趙心法師は、道人等を、門前に出し在らせて、寄隊の有無を知らせんとて、こも亦辭して退りけり。然れば成勝通能、正忠正義、季彥等いふもさらなり、八重作押繪は昨宵より、不睡の疲勞なきにあらねば、樅二郎と共侶に、片隅に退きて、睡るともなく假寢の、疲勞は同じ次の間なる、壯佼等に至るまで、借ても足らぬ筥枕、肱さへ枉て、短夜の、明るも知らで皆共侶に、一霎時熟睡をしたりける。かくてその詰朝、鶴脛奈我四郎、見越松時八は、鴨脚短平と共侶に、各宅眷を携て、阿甦寺に尋來つ、又昨宵野蔬物の市場より、宿所へとて別去りたる、躬方の壯佼十餘名も、各宅眷を由緣ある、隣郡他鄉へ遣して、且同志の每幾十名歟、倶して阿甦寺に集合にけり。然れば押繪はこの時までも、男子の中に只單、打交りて在らん事の、相應しからず思ひしに、時八と奈我四郎が、妻子を倶して來ぬるに及びて、寺僧に乞ふて小舍室を、借得て其女房等とのみ、共に起臥したりける。爾程にその詰朝、正忠季彥、成勝通能、望洋樅二郎次世作八重等は、倶に防戰の准備を做すに、心利たる

二三箇の里の壯佼に、鏑野の館の動靜を、見て來よとて遣しつ。又當郡の衆人に、魚丸出世の事の顚末、鏑野範射範的の、弑逆の罪を數へし、告文を多く書寫しつ、こも亦躬方の里人、十數名に吩咐て、其告文を路傍なる、堂社の柱、樹木の幹などに貼せて、をさ〳〵忠義の志ある、良民を招きしかば、於是はじめて舊主武茂に、遺腹あるよしを聞知る者、皆歡びて疑はず。且年來範的の、貪りて飽ことなき、非法に疲勞し折なれば、皆義に从らざる者もなく、徵めざれども豪農富商は、各魚丸の躬方と倡て、或は軍要金を調達し、或は兵粮を贈るも少からず。矧亦俠客力士、田夫農民の壯なる者、聞傳へ語續ぎて、漸次に阿甦寺に走集る程に、義旗を揚し始より、僅に五六日にして、軍兵三百四五十名になりにけり。是により、正忠季彥趙心は、樅二郎八重作等と相謀りて、急に戎衣を買求め、弓箭鎗棒何くれとなく、軍馬の備整へども、範的はいかにしけん、先度の敗北に懲たる歟、只門戶を閉橋を曳て、敵を防ぐの備を做すのみ、寄來つべしとは見えずといふ、嚮に遣しける間諜兒の、かへり來て告るにより、惴雄の壯佼等は、爾らば急に推寄て、攻潰さんとて勇しを、正忠制めていまだ饒さず。却成勝季彥等に商量するやう、範的既に我黨の、魚丸君を相佐けて、當山に籠しを、知らざることはあるまじきに、今日までも推寄來ざるは、必是故あるべし。この義を何と思ひ給ふ。と問れて成勝沈吟じ

て、开は已等も疑ひ思へり、然ればとて、居つゝ敵の寄るを俟たば、兵粮をのみ費して、計なき者に似たり。といふを樅二郎もうち聞て、膝を找めて譚るやう、在下熟々範的の、人となりを推量るに、外剛くして內柔弱也。譬ば鰕の甲あるも、反て腸寡きが如し。こゝをもて、勇あるに似て實は勇なく、智あるが如きも只邪智のみ。然ばこそあれ先度に懲て、寄來ざるにもや候はん。今こそ魚丸の御爲に、義兵を起す時宜にはなりたれ。緣故を推時は、單我身を救んとて、諸君子死力を盡されたれば、明日の先鋒は人に讓らず、我們兄妹押繪と共に、三名にこそ候べけれ。といへば、和田小十郎正義も、找み出つゝ倶にいふやう、倘少年なる身をかへり見ず、斯いはば烏滸なるべけれど、明日の先鋒は我身をも、必加らるべけれ。と憤るを正忠聞あへず、孩兒开は過當ならん。押繪少女の武勇なる、汝の及所にあらず。先鋒は兄妹二名にて足らん。といへば樅二郎は傍なる、八重作を見かへりて、汝等もよく思ひね、正義賤子の投石の精妙、明日の先鋒に加らるゝを、厭ふべくもあらずかし。といふに八重作然なりと應て、共に嘆唱したりける。當下成勝は、正忠に向ひていふやう、驚思ふ令郎の投石は、昔の紀平治に、伯仲すといひつべし。就て已疑ひあり、保元物語に見れたる、八郎爲朝の從兵に、三町礫の紀平治あり、然るを世俗は訛りて、八町礫といふ者多かり。彼紀平治の投石の精妙、よく

三町を徹すとも、八町は甚しからずや。先生必考あらん、聞まくほしく候。といへば通能も共にいふやう、その義は己も豫より、疑思ふ所なり。先生必明辨あるべし。いかでいかで。と請問ば、正忠聞つゝ點頭て、否、咱等なりとて始より、考得たるにあらねども、三町礫を謬て、八町礫といふ者は、素是雜劇の杜撰なれども、世俗は保元物語に、三町礫とあるを知らで、只見る所の雜劇によりて、八町礫と覺たり。この故に近來の物の本には、故意八町礫と寫たるあり。世俗の覺易きが爲也。爾れども後の物の本に、八町と唱るは、昔の紀平治ならざるよしを、諦す作者の用心にて、訛るといへども事に害なし。且八は偶數の終なり、八の下に十あれども、十は一に通ふをもて、八を大數とす。譬ば八雲八重垣の如し。然れば彼紀平治が、投石は技藝の極なれば、訛りと知りつゝ訛りに從ふ、反て作者の深意あり、是を杜撰といふべからず。开を穿鑿て云云と、論る者は、金弧玉絃、假をもて眞と做せるのみ、作者の本意にあらざるべし。と言詳に說諭せば、成勝通能、いへばさら也、衆皆好と相稱て、倶に感佩したりける。浩處に時八と奈我四郎は、外面よりかへり來て、樅二郎等に報るやう、方僅三門の邊にて、一箇の尷尬兒を生拘にき。撻懲しつゝ責問しに、他は郡司の間諜兒にて、彼館の事を知るに足る、意外の新奇も是多かり。この庭上に牽よせてん、みづから聞せ給はず

や。といふに衆皆相歡びて、开は料らざる幸ひなり。疾々。といそがせば、時八と奈我四郎は、應をしつゝ共侶に、又外面へ退りけり。當下韓錦縦二郎は、正忠正義、季彦道心、成勝道能八重作と共に、端近く挵み出て、件の生拘兒を俟程に、姑且して時八と奈我四郎は、生拘たる敵の間諜兒を、一箇の小力士に牽せ來て、檐廊の下に推居て、杖を抗て生拘の、背三四撻惱しつゝ、やをれ尷尬兒、郡司の館の事の越、漏す隈なく聞え上よ。是でもいはずや、いはずや。と只管に撻懲せども、生拘兒は苦痛を忍て、いふべくもあらざりしを、趙心法師は呵責を制めて、膝を挵めつ生拘兒に、うち向ひて却いふやう、やよやその男子、正可に聽ね。魚丸君上にいます、汝速に首伏せば、命乞して得さすべし。汝は我を認ずとも、大刀自母子は知りてぞあらん。我は則部領の舊臣、杵臼七郎程榮入道趙心是なり。鏑野範射範的母子は、共に弑逆の賊臣なれば、罪饒すべき者ならねども、汝には舊怨もなし。魚丸君の御爲に、那里の容子を告げ稟さば、毒物變じて藥餌に做る、其功なしとせず。然らば目今露の命を、助けらるゝのみならず、必恩賞あるべきぞ。慝さず稟せいかにぞや。と問れて件の生拘兒は、嗟嘆に堪ず陳じていふやう、原來聖僧は昨今、人傳にその名聞えし、杵臼主にてありけるよ。小可は數にも足らぬ、鏑野殿の御内人、名は如此々々と喚做さるゝ、侍品にて候也。當所の容子を見てまゐれとて、

祕密使を命ぜられ、形貌を窶し覘ひよりて、御躬方の雜兵に、紛入らまく欲せしに、命運全からずして、今この田地に至る上は、何を欺隱稟すべき。徐に聞召れよとて、鏑野の館の光景、有つる事の趣を、具に招伏したりける。話分兩頭。爾程に曾根見伍六郎健宗は、曩に奈良櫻八重作、多力の押繪が鏑野の館にて事ありし折、大江峰張主僕と共に、獄卒等を殺散して、獄舍を破り韓錦を、救出しつ土墻を、うち踰て出る程に、健宗は驚怕れて、獄舍の隅に躱て在り。既にして八重作等が、縱二郎を伴ふて、外面に脫去りし時、その獄舍同じからねば、健宗は后に跟て、出べくもあらざりしに、押繪が彼圓柱をもて、隣の牢を破りしをり、その響にて間なる、格子も共に甘ぎて、料らず便を得てければ、健宗は力に信して、件の格子を推開きつゝ、身を斜にして縱二郎の、出ける獄舍の破れより、潛出つゝ四下を見るに、死活は知らず血に塗れて、仆れし獄卒二三名あり。こも奇貨と含笑て、其が中にて衣物の、宜きを剝拿つ、遺たる刃も漏すことなく、鞘に斂め腰に帶て、脫去らまく欲せしに、外面には搦捕の衆兵、縱二郎等を捕籠て、挑戰ふ聲すれば、健宗は驚怕れて、今さらに塀を乘て、脫去るべくもあらず、人もや來る、とそが儘に、剝拿りし彼衣を、うち套り身裝して、却那里より脫去らん、と思難たる黃昏時、薄暗きに紛れてぞ、憶はずもこの館の、書院の庭の頭に來にける。と見れば

庭門なる片折戸は、いまだ鎖さでありければ、胆太くも找入りて、樹杜の陰に立潛びつゝ、肚裏に思ふやう、我今茲を逃去るとも、鐚一文の盤纏なければ、復只乞食に做らんのみ。今宵奧まで潛入りて、些の盤纏をものしてこそ、脫去りたる甲斐はあれ。鳴呼爾也、と不敵の本性猶も便宜を覘ふ程に、這頭には守人もなく、日は暮果て奧の方に、狼籍兒を逃すな。といふ聲幽に聞えしかば、健宗は驚として、素破我上歟、と轟く胸を、推鎮めつゝ又よく聞くに、狼籍兒といはれしは、獄舍を破りし彼男女、樅二郎等の事なるを、早くも悟りて彌喋がず、屢四下を見かへりて、樹陰を出て書院より、奧の方に潛入るに、衿る者もあらざれば、折こそよけれ、と二三間、蹐て出居の方まで來つ。是より先は後堂なるべし、人音間近く聞ゆるにぞ、且彫里に躱隱居て、小夜の深るを俟べき歟、と思雖つゝ身は半壁の、壁に附てぞ物陰を、求めて一霎時立在ける。爾程に、鏑野郡司範的は、思ふにも似ず八重作押絵の、死力を盡せし大刀風に、敢敵する者もなく、剰兩個の助劍ありて、樅二郎を奪拿り、共に外面に逃去りしを、鐵椎隈八鬼劍苛三等、透さず伏兵を驅立て、東西より緝籠たる、後門前にて戰ふ程に、賊徒に加勢の衆兵あり、洪波の如く推寄來て、其戰を援しかば、苛三隈八猛しといへども、左右なく勝を攬ことかたくて、勝負はいまだ知られずといふ、往進櫓の齒を挽僳く、言詳に聞えしかば、範的

足に胸を潰して、母親大刀自に告げ知らせ、我蚤く韓錦奴を、殺さばこの悔なからんに、鄙語にいふ蟻の塔より、隄崩るゝ今にして、倘彼奴等を捕逃さば、世の胡慮にならん而已。速に加勢の兵を、出遣るにしくことなし。甲もゆきね、乙もゆきね、と最も劇く下知しても、左右に胸は休はず、起て見居て見單悶えて、掌鳴らし聲高やかに、連りに近習を喚立れども、忽劇しき折なれば、絕て答る者もなし。範的いよ〳〵焦燥て、かゝる折には內外の、守りこそ緊要なるに、次の間には誰も居ずや。最烏滸也。と呟きて、手親吊燭を引提つゝ、猶も近習を喚ながら、次の間の方に出る程に、出居の壁に身を潛したる、健宗を見出して、迭に驚く主客の勢、盜兒入りぬ。誰歟ある、兵每まゐれ。と呼せも果ず、健宗は一期の浮沈と、心慌て腰なる刀を、拔手も見せず範的の、引提し燈燭斫落して、かへす刀に脇を、柄も徹れと偶然と刺す。刺れて範的苦とばかりに、身を仰反して仆るゝ處を、乘し掛りつ胸前を、又一刀刺しかば、三魂蚤く天に復り、六魄旣に地に落て、黃泉の旅客になりにけり。範的今憶なく、外從母弟なる、曾根見健宗の爲に刺れて、かゝる枉死を致せるは、是併其父範射の、弑逆の餘殃にて、天の允さぬ所なるべし、と世の人後に評しける。閒休話題。當下宵勤の近習等は、件の物响にうち驚きて、指燭を乘りつゝ次の間より、走來る者兩三名、この光景に胆を潰して、手の舞足

の踏所を知らず、原來尶尬兒逃すな。と異口同音に呼はりて、共に刀を拔翳しつゝ、推稠籠て撃んと競へば、健宗竟に脱るゝ路なく、血刀をもて受流し、右に中り左に拄て、命を涯りに戰ふたり。浩處に奥の方より、猝然と出來る者あり、是則別人ならず、範的の母大刀自なり。右手に一條の獨眉刀を挾み、奥隷の老黨なりける、牝島番太守實に、燈燭を秉せ先に立しつ、この他有司三四名を、前後左右に從へて、目今戰ふ此彼の、刃に憚る色もなく、間近く立住り、彼制めよ。と下知すれば、有司等早く聲を被て、自他の人々鬪戰を休よ。この義御前の御意なるぞ。其尶尬兒も承れ。共に刃を斂めずや。と喚りつ刀の鞘を、間へ丁と衝入れて、推隔つつ禁れば、近習等はいふもさらなり、健宗も訝りて、こゝろ得がたく思ふのみ、今の必死を僥さるゝ、婦人の仁歟、然もなくは、由斷させて搦捕る、便直なる歟、と疑ひの、霧ならなくに五月雨の、霽ぬ思ひをいへばえに、嵓をも砕く勢ひの、倶に折けて阿容々々と、卒とばかりに共侶に、刃を解きつ、身を退けて、开が儘左右に蹝居たり。當下大刀自は、一箇の有司に持せたる、發兒に尻をうち掛て、衆人に向ひていふやう、驚思ふ範的の、横死を蚤く闕窺怕れて、我に告げける婢毎あれば、うち驚きつ其尶尬兒を、蚤く搦捕せんとて、折から身邊に侍りたる、守實幷に有司等を、從へつ走出て、見れば我兒範的を、害したる其尶尬兒は、いぬる日我も外

ながら、認りたる彼乞兒なり。他は實の健宗なりとて、爭ひたれども照据なければ、开が儘獄舍に入置しに、今日しも樅二郎と共侶に、獄舍を破り脫出て、這頭に紛入たるは、範的を深く怨みて、擊果さん爲なる歟。开は左まれ右もあれ、曩に近江の觀音寺へ、遣したる兩箇の脚力、稻妻齒四郎、飛鳥疾四郎が、今日晡時の比かへり來て、反命しぬるにより、我姪窓井の贈來したる、回翰を開見るに、他が弟伍六郎健宗の、相貌はいふもさらなり、身長聲音疤瘡の迹まで、最も備に注したり。是によりてこれを觀れば、那乞兒こそ我猶子なる、曾根見伍六郎健宗にて、初名を竊み人を欺きて、我館に逗留したる健宗は、小雪太と歟喚做したる、惡僕なりしを稍悟りて、後悔臍を噬るのみ。折から範的は、出て公問廳に在りければ、いまだ報るに及ざりしに、猛可に樅二郎の事起りて、內外捫擇する故に、健宗を獄舍より、饒し出しもせざりしに、殺伐かくの如くなるは、意外の凶變、言語同斷、非如我猶子なればとて、一郡の主を害したる、罪は千曳の石より重かり。千番大赦の日にあふとも、赦されがたき罪人なれども、亦よく思へば是を赦して、用ふべきよしなきにあらず。玆に侍る有司近習等はさらなり、這祕事は守實も、いまだ知らでぞあらむずらん。健宗も正可に聽ね。昔我身少かりし時、範射主の妻になりしより、十稔歷まで有身ざりしに、年齡三十に餘りし時、創て孕事ありて、分娩しゝは女

の子にて、しかも死胎でありければ、勞して功なく最惜かり。その比範射主の妾に、鶯兒と喚做したるも、我身と同月に有身りて、又同日に産の紐を解きて、分娩しゝは男兒なれども、殊さらの難産にて、母は當坐に身故りつ、生れし御兒は恙なし、と早くも告る者ありければ、妬きこといふべうもあらず、悄地に其子を執易て、我生し兒といひ做さば、夫婦の中も堅固にて、後々までも安かりなん、と思慮りつ腹心なる、女房にこゝろ得させ、穩婆にも黄白多く、取らせてその兒を入易させて、鶯兒の生たりしは、女の兒にて母も子も、當坐に身故りにき、といはせしかば、我伕は旨く欺れて、开は惜むべき事ながら、嫡妻腹なるは男兒にて、母さへ恙あることなければ、是に增たる幸やある。賀すべし〳〵。と笑悅びて、五日百日の壽祝も、美を盡さずといふ者なく、掌の珠挿頭の花と、愛慈み給ふさへ、實を推せば妾腹にて、我背肉にあらねども、我兒と思へば憎うもあらず。其兒は無病壯健にて、稍成長りし比、範射世を去り給ひしかば、親の箕裘を承興て、二世の郡司に做りにたる、鏑野範的即是なり。然れども範的の心術、母に孝ある者にあらず、只色に耽り酒に溺れて、人の譏を思はざる、白物なるを何爭はせん。彼身今横死して、興べき兒子あることなし。この故に我猶子、伍六健宗を養ふて、當家の家督に做すときは、疎きを棄て親きを執る、骨肉家の柱にならば、我安身の寃とや

いはまし。衆皆この義を存ぜよ。と最厳に言示せば、守實有司近習等は、驚惑ひ額を衝て、唯唯とばかりに一言半句も、不の字を敢いふ者なく、御女儀に稀なる御計ひ、左にも右にも仰の隨意、承り候はん。噫芽出たしとぞ稱ける。亓が中に健宗は、窮阨喜樂地を易たる、不測の僥倖に、滿面笑れて大刀自を、伏拜みつゝ答るやう、小生獄舍を破らねども、彼韓錦の黨の、狼籍により料らずも、出入自由になりしかば、いかで直訴をせばやと思ひて、玆まで推參してけるに、範的主に撞見して、心慌し意外の殺伐、こよなき罪を釀せしに、小母君の大慈大悲は、菩薩にも優す洪恩德義、我身の罪を饒されて、當家の養嗣に做されなば、養母君には孝を盡し、家を修め民を撫て、地を增境を啓くべし。猶御慈愛を願ふといふ、然しも雄々しき誓言に、大刀自はうち頷きて、爾らんには近習每、健宗を奥に案内して、沐浴はいふに及ず、衣裳をも疾更めさせて、今日より主君と敬ふべし。又有司等は外に出て、苛三隈八等を召返して、遺なくこの旨を告知らせよ。彼韓錦の黨の、幾名暴逆を做すとても、多寡の知れたる烏合の奴們、今日皆搦捕らずとも、健宗みづから打向はゞ、朝日に霜の解るが像く、立地に誅伏せん。又守實は、有司等と共に、範的の亡骸をとり修めて、安葬の準備をいそぎね。勿論外樣の兵衛には、範的猛可に亂心して、故なく自殺し給ひしかば、當家の親族、伍六郎健宗主を、家督に立給ふ

といはゞ、孰歟不の字をいふ者あらんや。這館はいはでも知るき、白猪の城の内にあなれば、郭の四門の出入を禁めよ。卒とばかりに身を起しつゝ、一箇の近習を從へて、軈て後堂へぞ退りける。然る程に鬼薊苛三、鍼持隈八は、許多の伙兵を從へて、這時館の門前に在り、韓錦の黨に、戰負て術もなく、防難つゝありけるに、折もよく大刀自の、下知して急に召かへしゝかば、雜兵二三十名を折れながら、辛く門内に逃入りしに、敵は丌が儘退きて、攻撃んともせざりしかば、軈て大刀自に見參して、事の術よくいひ做しつ。範的暴に死去の事、幷に大刀自の猶子、曾根見伍六健宗を、養嗣にせらるゝといふよしを、人より後に聞知りて、呆れて口を鉗むのみ。勢かくの如くなれば、只阿容々々と承服して、健宗を主とし敬ひ、事皆彼意に依ざるなく、其次の日の早旦より、老黨有司等と評議して、封内なる士庶人に、範的の死去、健宗の家督の事を徇知らして、更に稅斂を重し、法度を出す者、幾十條。爾後範的の內葬を、執行ひなどする程に、部領魚丸の事稍聞えて、彼黨の告文を、呈閱する者ありしかば、健宗則其告文を、大刀自に見せて意見を問ふに、大刀自もうち驚きて、現然者あらん。昔武茂主の嬖妾に、垣衣と喚做したるあり。他既に有身りて、帶する程に做りしかば、我伕は是を躊惱思ひて、早く彼奴を結果けて、後安くせばやとて、間を覘ひ給ひしに、垣衣の兄なる杵臼程榮、其

機をや猜しけん、垣衣を倶して逐電しつ、往方も知らずなりしかば、追捕徒に日を過して、索ね出さでありけるに、殘燼二たび燃まくす。韓錦の反賊等、彼遺腹子を執立て、假に義兵と唱るを、當郡の民欺れて、走集る者多からば、征伐容易かるべからず。玆にも軍兵を催促して、賊徒に勢の馮ぬ間に、對治せずはあるべからず。今さら猶豫する事かは。と敦圄悍く言示せば、健宗ころゝ驚きて、應をしつゝ退きて、有司等に下知しつゝ、夜も日も分ず軍兵を、催促緊しかりければ、近郷の莊客等の、舊主を慕しく思ふもあれども、勝負を未然に料難て、其催促に從ふ者、一千餘名に及びけり。是により健宗は、大刀自と商量して、苛三限八に旨を示し、嚮に近江へ脚力を課て、觀音寺へ遣しける、兩箇の走卒、稻妻齒四郎、飛鳥疾四郎の功を譽させて、共に侍品に推升し、猶亦祕密使とす。是をもて齒四郎疾四郎は、阿甦寺に潛ゆきて、賊徒の虚實を見て來よといふ、健宗の密意を承て、共に形貌を窶つゝ、紛入らまく欲しゝに、敵に毫も由斷なければ、疾四郎は三門前にて、見越松時八等に生拘れ、衆義士の目前に牽居られて、鞫問緊しかりければ、疾四郎は祕すに由なく、鏑野の館の凶變を、一事も漏さず首伏す。是により正忠成勝以下の義士等は、郡司範的の横死の事、及曾根見伍六健宗を、養嗣にせられし事までも、言詳に聞知りて、駭嘆せずといふ者なく、時八等さへ敵の虚實を、聞知ること

を得さりしかば、軍神の血祭に、早く這疾四郎の、首を刎給へとて、只管に薦しかども、正忠敢是を允さず。人各其主の爲にす。他命だも惜まずして、敵中に入らまくしけるは、忠あり義ありといひつべし。我仇也とて是を戮さば、忠義の方を斷ならずや。といへば季彦點頭て、和田主の意見寔に故あり。世に碁象棋を嗜む者、高手は敵の棋子を獲て、もて敵を攻る故に、必勝ずといふことなし、沙手は爾らず、偶敵の棋子を獲ても、是を己が有として、使ふ方を知らざれば、摠敗軍に至るまで、握殺して竟に益なし。因て思ふに、這疾四郎は敵の棋子也今是を獲て使ふときは、必我資にならん、握殺すことかは、といふを樅二郎うち聞て、兩翁の教諭感服せり。然らば他を檻に籠て、異日の用を俟つべき歟。と問ふを正忠聞あへず、いかでかは然る事をせん、只時八等に預けあらせて、異日の用に充んのみ。と諭せば成勝、然也、と應て敵の虚實を知る上は、明日は夙めて推寄て、攻一攻て彼強弱を、試すはあるべからず。といへば通能も倶にいふやう、那里は素より土城にて、堺固からず、塹淺かり。いぬる日韓錦を救得て、共に脱去りしをり、那容害は知られたり、攻るにかたき事はあらじ。と惴るを成勝推禁めて、約莫這回の軍配は、和田主に任用して、彼進退に依るこそよけれ。といへば季彦も共にいふやう、先にする時は人を征し、後るゝ時は征せらる。居つゝ敵を俟つなら

ば、鉦鼓不斷の選佛場を、修羅の巷に做さんのみ。豈我黨の本意ならんや。そも和田主の意衷にあらん。といふを正忠うち聞て、諸賢の意見愚意に稱へり。先間諜兒をもて、猶亦敵の容害を、揣りて後に推寄てん。我憶ふに、敵は一千餘の精兵あり。我義兵は二三百に過ぎず。寡をもて衆に敵するには、伏兵にしくものなし。這里より那里に赴く、中途に、便宜の茂林はあらずや。と問へば八重作找み出て、是より那館に赴くに、路程十八九町にして、犬掛と喚做したる、小松原の左右には、小山ありて、松柏多く生茂れり。伏兵を用るに、便宜にこそあらむずらめ。といへば正忠含笑て、爾らんには城攻より、野戰に利はあらむずらん。といひつゝ趙心法師にうち向ひて、御坊も既に聞れし如く、今日の評議を魚丸君に、聞え上給ひねかし。といふに趙心異議もなく、そはこゝろ得候也。聞くが如きは範射範的、倶にその死然を得ず。父は召仕ふ男童に殺され、子は亦從母弟に刺れたり。天網恢々疎にして漏さず。皆弑逆の惡報と、いはざることを得ざるべし。况其汚穢たる家を嗣ぐ、健宗の終る所、日を僂て俟べきのみ。いで〳〵といひつゝも、身を起さまくしぬる程に、魚丸は閑廂和尚と、共に徐に出て來つ、義士等に向ひて謝していふやう、諸賢評議の條々は、我次の間に在りて聞得たり。我身の不幸を顧れば、世に立べくもあらざりしに、料らず諸賢の資助を得て、久後までも憑しき、歡び是

に優す者なし。といへば閑葊和尙も共にいふやう、魚丸の實母、周晉比丘尼の上に就きて、告べき由のなきにあらねど、憚りあれば後にこそいはめ。この義を猜し給ひてよ。といふに義士等は額衝承て、この日の軍議は果にけり。恁而その夜分より、五月雨の餘波にて、大雨連りに降沃ぎて、三四日霽間なかりしかば、義士等は出陣の准備整ひながら、こゝろならずも霽間を俟て、徒に日を過しけり。既にして六月の、初旬になりしかば、雨霽て溽暑彌增す隨に、義士等は都て甲冑を用ひず、只勒肚に甲手脛衣して、部領の館を攻まくす。かゝる折から時八は、慌たる面色して、正忠等に告るやう、預けられたる生拘兒、飛鳥疾四郎は、日夜人を緣在らせて、外に出ることを饒さゞりしに、昨宵些の隙やありけん、逃去りてこそ候なれ。丌は己等が愆なるを、いはで已べきことならねば、告まつるにこそ。と云。正忠是をうち聞て、然もこそあらめ、うち捨閣ね。他既に逃去りたらば、我計成ぬべし。といふを成勝訝りて、悄地に所以を詰れば、正忠笑つゝ聲を低めて、君が才もてまだ悟らずや。欲する所は敵の兵を、分ちて輒く破らん爲のみ。疾四郎既に逃かへりて、我軍議を聞たる隨に、彼伏兵の事をしも、健宗に告知らせなば、健宗聞て期に臨みて、兵を分ちて我伏兵を、擊果さまく欲するならん。爾るときは手に唾して、健宗を擒にすべし。正義と奈良櫻は、各三十箇の雜兵を將て、彼犬掛なる

茂林に埋伏して、敵撃蒐らば逃走りて、遠く是を誘引べし。又押繪少女は、三十箇の雜兵を將て、彼茂林の那方なる、水田の中に下立て、田の草を拔く賤婦に、打扮て敵を欺きて、健宗敗走る時、遮て是を撃ば、必しも功あらん。其餘は又如此々々なりとて、隊配り既に定りければ衆皆異議する者もなし。亓が中に、小十郎正義と、八重作次世は喜ばず、共に正忠に向ひていふやう、非如詭計なりとも、敵を見て逃走らんことは、勇士の恥る所なり。己等は先鋒をこそ、望ましく候なれ。と辭ふを正忠聞あへず、頭を左右にうち掉て、亓は亦自由の至りなり。約莫今番の鬪戰は、韓錦を救ふの故に、追隊を防ぐ爲のみならず、當郡舊主の孤兒を、相憐むの故にして、善に與して惡を討、義兵の二字を忘れし歟。然れば僞て逃るとも、始終の勝こそ全功なれ。そを云云といはるゝは、只名聞を思ふに似たり。最烏滸なり。と窘れば、正義と八重作は、言の道理に承服して、又いふよしもなかりけり。恁而正義八重作押繪等は、其夜丑三の比及に、腰兵粮の准備しつ、各隊兵を從へて、犬掛を投て出てゆきけり。夏の夜なれば短くて、幾程もなく明初て、既に朝日の昇る時候、和田十郎正忠は、杜四郎成勝と共侶隊兵に、二百四五十名を將て、馬上優に進發す。そが中に、防守筑四郎季彦と、杵臼程榮入道趙心は、魚丸を守護の爲、老兵四五十名を禁在せて、亓が儘阿甦寺に在り。この朝魚丸は、季彦趙心を相

俱して、則躬方の出陣を、三門までぞ送りける。案下某生重說、爾程に曾根見伍六郎健宗は、小母大刀自の制度として、猛可に郡司に推登されて、隨意ならずといふ者なけれど、思ふ所は、韓錦の徒の、故の郡領武茂の孤兒なる、和達魚丸を數立て、阿蘇寺に籠ぬと聞えしかば、そを征伐の爲に、軍兵多く驅集め、亦鍼持隈八、鬼薊苛三に課て、兵法武藝に勝たる、浮浪人を招きよするに、甲斐越後の浮浪人、武者修行の爲遊歷して、近鄕に在りと聞えたる、竹木虎狼二、牛鬼黑九郎、蛇塚眞武四郎、和十六牡丹五、舘内也刀齋端高など、喚做したる賽猛者等、皆十八盤の武藝を克すとて、共に需に應じ、祿に愛て、健宗にぞ仕へける。是より先に健宗は、敵の虛實を知らまく欲して、稻妻齒四郎、飛鳥疾四郎を、阿蘇寺の方に遣ししに、それより二三日にして、齒四郎一箇かへり來つ、却健宗に報るやう、臣等疾四郎と共倶に、形貌を竄し潛寄て、彼山院に、紛入らまく欲しゝに、敵に毫も油斷なければ、猶も潛て在りし程、鈍や飛鳥疾四郎は、敵の爲に見出されて、搦捕れ候ひき。この義を告げまつらんとて、走りかへり候也。といふに健宗眉根を顰めて、そは安からぬ事にこそあれ。疾四郎賊徒の呵責に堪で、這方の虛實を口走らば、征伐輒かるべからず。疾推寄て踏潰さんず。と敦圉悍く罵りて、苛三隈八等に下知しつゝ、出陣の准備をいそぐ程に、其黃昏より雨降て、三四日歇間なかりしかば、思

はずも五月を過して、天霽て暑熱彌増隨に、明日出陣と定めたる、その宵飛鳥疾四郎は、阿甦寺より逃かへり來て、健宗に報るやう、臣等幸あらずして、賊徒の爲に搦捕れ、彼頭人等の團坐せる、客殿近く牽居られて、料らずも彼黨の、軍議を遺なく聞得たり。开は箇樣々々なり如此々々に候とて、和田正忠の謀る所、野軍を利ありとして、犬掛の茂林に伏兵を、在らせて敵陣を敗んといふ、その緈の趣を、具に告て又いふやう、今阿甦寺に集合ぬる、賊徒は三百餘名に過ず、开が頭人は八九名在り。和田十郎正忠、と大江杜四郎成勝を軍師とす。この他峰張柒六郎通能、和田小十郎正義、韓錦縱二郎望洋、奈良櫻八重作次世、其女弟多力の押繪等在り。又見越松時八、鶴脛奈我四郎、鴨脚短平など、喚做したる小力士あれども、皆是二の町三の町なれば、數ふべくも候はず。又兩箇の老武者在り、防守筑四郎季彥、杵臼入道趙心是なり。共に魚丸の傅にて、只米錢を掌る而已。臣等既に擒にせられて、頭顱を刎らるべかりしに、法師們の憐愍て、命乞するにより、老兵等に預けられて、一日二日と過す程に、昨宵聊隙を得て、脫去り候ひき。と眞語虛談うち雜て、事の術よく演說す。健宗是をうち聞て、原來杜四郎柒六等も、那隊にありけるよ。他等は近江に在りし時、我兄の冤家なれば、必首を斬梟て、怨を雪ん事遠かるべからず。爾るにても、曩に我、齒四郎と疾四郎に、課て敵地に遣しゝに、齒四郎

疾四郎脱還して敵の計策を密告す


たけちよ
くま八
ひら三

は那里より、かへり來しのみ、寸功なし。又疾四郎は賊徒の爲に、捕挵れて反て功あり。異日賞祿は乞ふに依らん。既に賊徒の計策を、聞知る上は我も亦、隊兵を分て其伏兵を、駈出させて賊徒の膽を、拉ぎて鏖にせん。然とて軈て、苛三隈八、新參の兵毎まで、皆悉召集合て、明日の隊配を定るに、鬼薊苛三を先鋒の頭人にして、蛇塚眞武四郎、和十六牡丹五を副とす。又竹木虎狼二、牛鬼黑九郎は、各雜兵二百名を將て、犬掛の茂林なる敵の伏兵を、駈出して撃捕るべし。その時賊徒は噪亂ん、我先鋒の頭人等、其機を揣りて逃るを撃ば、全勝全功疑ひなし。孰にもあれ明日の鬪戰に、彼杜四郎と柒六を、撃捕者は第一番の、大功といひつべし。其餘の備は如此々々也とて、館内也刀齋を後陣に在らせて、飛鳥疾四郎、稻妻齒四郎を副とす。又健宗は鍼持隈八を從へて、本陣に將たるべし。この他牝島番太は、有司等と共侶に、母御前に從ふて、鏑野の館に留守すべしとて、既に隊分を定めらる。健宗に相從ふ、軍兵一千三百餘名、其詰朝辰の左側に、先陣後陣陸續として、阿蘇寺を投て進發す。有斯し程に、折もよく、和田大江の義兵二三百名、宛謀合せし如く、兩軍犬掛の茂林邊にて、間近く寄あふたり。義兵は纔に二三百名。是を健宗の千三百名に比れば、三分一に足らざれども、智勇の豪傑ならぬもなければ、整々として毫も亂ず、兩軍鬨聲を揚、箭を射出して、既に鎗を容まくす。朝

風に翩翻たる、兩軍の旗の手は、東に靡き西に流れて、勇ましからずといふ者なし。是併莊子に見えたる、蝸牛の角の上にありといふ、蠻觸二國の鬪戰に、異ならざるべき小迫合にて、識に足らずと思ふもあらんを、又克思はゞ其死を爭ふ、一進一退同一致にて、大國小郡、忠不忠、勇怯好拙なしとせず。十室邑にも忠信あり、何ぞ其地の小大をもて論ぜんや。後人歌あり、もて證とす。

あらそひは治れる世のかたつぶり角にもわたせ兩國の橋

畢竟魚丸の義兵と、大刀自健宗の逆黨と、玆にはじめて鋒を交る、この日の勝負甚麼ぞや、开は又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之二十九

第五十九回

陣中に巽二を召ぶ枉津の禍事
池水に餘毒を洗ふ賤婦の正論

復說。和田大江の義兵二百四五十名、犬掛の茂林邊にて、健宗の一軍千三百餘名と、端なくも寄逢ふたり。既にして近づく隨に、迭に攻鼓を鳴し、箭を射出して、鎗を合する程こそあれ、健宗の先鋒の頭人、鬼薊苛三屆梁、竝に蛇塚眞武四郎、和十六牡丹五等、隊兵を進め岌より蒐るを、是日義兵の先鋒の頭人、韓錦樅二郎は、左右に備る奈我四時八、百餘箇の精兵を、拵る衆聲高やかに、弑逆無道の郡司の黨、天罰既に時至りて、範的橫死したりしを、猶も怕るゝ心なく、冤家に從ふ烏滸人等、頭を竝べて刃を受よ。と罵りつ鎗を拈りて、人なき境に入る如く多勢を敵手に戰ふたり。浩し程に、健宗の遊軍なる、竹木虎狼二、牛鬼黑九郎は、豫承たる軍配あれば、敢先陣の勝負に管はず、各隊兵二百を將て、別れて左右の茂林中に咄と噇て打入打入、只是敵の伏兵を、駈出さんとて東西齊一、備を亂して競蒐るを、俟儲たるこの隊の頭人、

右の茂林には和田小十郎、左の茂林には奈良櫻八重作、隊兵纔に三十名と、共に樹間に立顯れて、且戰ひ且走れば、虎狼二も黑九郎も、思ふに似ざる敵の伏兵の、多からぬを見て些も擬議せず、那擊留よと、呼はりて、透もあらせず追ふたりける。登時義兵の兩頭人、正忠と成勝は、計略其圖に當るを見て、時分は今ぞ、疾擊亂せ。と麾揮立る程しもあらず、峰張柴六郎通能は、其隊の遊兵五六十名を、進めて鬪戰闌干なる、韓錦を相助けて、鎗輪々と打振々々、敵二三名刺殺して、四下を拂ふ奮擊突戰、孰歟よく是に向ん。苛三眞武四牡丹五は、怺難つゝ衆兵と、共侶に亂噪ぐを、得たりや應、と通能望洋、透もあらせぬ虎彪の勢ひ、群たる羊を逐ふ如く、中るに任せて殺仆せば、苛三等はいよ〳〵慌て、崩を衝て思はずも、健宗の本陣へ、象棋倒に仆れかゝれば、共に亂るゝその隊の周章、健宗刺高、こはいかに、と開合する暇もなく、等く混雜したりしかば、後陣の頭人也刀齋は、齒四郎疾四郎を左右に備て、入替て前なる敵を、擊拂んとて進む程に、後方に發る鬨の聲、是則別人ならず、豫ぞ計りし勇婦押給は、被箍の鏁衣甲手脛盾、鋲打たる顱纒して、腰に苛物造の大刀を跨へ、手に八角の堅木の棒の、筋鋲打たるを挾みて、三十名の勇兵を、左右に備前に立して、突然として擊て蒐れば、いよ〳〵驚く健宗屆簗、既に備を亂したる、也刀齋も合期せず、纔に兩隊を引分て、前後の敵を防げども、勝誇

りたる義兵の刀尖、鎌もて草を芟如く、勁風木葉を拂ふに似たれば、始には似ぬ健宗の、千三百の軍兵は、或は逃失或は撃れて、摠敗軍になりにける。爾る程に、左右の茂林なる、奈良櫻八重作次世、和田小十郎正義は、共に敵を誘引て、程よき處に踏駐り、正義は腰に吊たる、嚢の小石を探拿て、追蒐來ぬる虎狼二の、面を臨て撲地と打つ、修煉錯ず虎狼二は、眉間を酷撃破られて、一聲呀と叫びも果ず、馬より撻と墜しかば、其隊の雜兵驚慌て、肩に引被逃走るを、正義は猶逃さじとて、三十名の隊兵を、進めて連りに追たりける。又奈良櫻八重作は、敵の頭人牛鬼黑九郎と、鎗を交へて戰ふ程に、樵者なるべし一箇の賤夫、忽然と出て來つ、牛鬼の隊の後の方より、訛たる聲を震立て、やよ、殿們はまだ知らずや。竹木主はいふもさら也、館も敗軍し給ひて、摠潰になりにたり。などてや這首をうち捨て、行て救ひ給はざる。やよ喃喃。と呼立る、聲に驚く黑九郎、半信半疑の心後れて、闘戰に親まず、其隊亂て見えしかば、八重作得たり、と隊兵を、間なく進めて撃散せば、彌噪ぐ敵の衆兵、支難たる其が程に、後方に繫き夏草の、中より兵火燃出て、折から吹來る風のまに〳〵、其頭なる樹枝に、煽々と燃遷りて、還るべき路なきに似たれば、黑九郎も隊の雜兵等も、胆を潰しつ慌噪ぎて、退んとすれば煙に包れ、進んとすれば前に敵あり、火に燒れ鎗に刺れて、小鬢を焦し、血に塗れ、逃後れた

る雜兵は、鋒を倒し悲乞ふて、降人に成るも多かり。开が中に黑九郎は、稍一方を殺開きて、馬を飛して逃まくしけるを、八重作透さず遮留めて、鎗に縫する股の深疵に、黑九郎は苦とばかりに、馬より撐と滾落るを、奈良櫻の隊兵等、走蒐りつ犇々と、押えて索を被にけり。授這折の鬪戰に、看官心づきなきことあり、方僅樵者が茲に來て、黑九郎等に健宗の、摠敗軍を報けるも、亦夏草に火を放ちしも、皆正忠の計略にて、豫よりこの便直あり、悄地に奈良櫻を資けしなり。閒話休題。然れば亦健宗は、前後の敵に攻撃れて、這隊も既に敗れしかば、孰歟よく敵を拄ん、猛きは名のみ鬼薊、鍼持蛇塚和十六、度を失はざる者もなく、主共倶に活路を、索めて命を免れたる、开が中に、館内也刀齋端高は、僅に恥を知る者なりけん、その隊の小頭飛鳥疾四郎、稻妻齒四郎等を罵勵して、殿しつゝ退てゆく。當下峰張通能は、鎗挾み佗と見て、天晴敵やといふ隨に、透もあらせず名告被て、鎗拿直す程しもあらず、也刀齋は乘たる馬の、鑣面を遶して、閃めかす鎗の尖頭を、通能丁と受流して、人交もせず戰ふ程に、齒四郎と疾四郎は、也刀齋を相援けて、左右齊一大刀拔翳して、共に通能を撃んとす。通能是を物ともせず、三人を敵手に鎗の手亂れす、精神滋加りて、鬪戰いまだ久しからず、韓錦樅二郎は、見越松時八と、共倶に走來つ、通能の左右より、競ふて蒐る勢に、疾四郎と齒四郎は、克

じとや思ひけん、引外して逃まくするを、通能透さず鎗晃かして、疾四郎の胸前を、背へかけて禺然と刺す。其間に齒四郎は、路横ぎりて逃走るを、樅二郎追蒐て、見かへる所を殺仆し、後れて來ぬる時八に、其首をぞ捕せける。有斯し程に也刀齋は、思ふに增たる通能等の、本事に怕れ舌を掉ひて、今疾四郎齒四郎の、擊るゝ間に馬を返して、逃て去向に又敵あり、此は是何人なるぞ、問でも知るき押繪なり。今也刀齋が馬を走らして、逃去るを樹蔭より、逸早く見出して、走出つゝ、ヤと聲かけて、彼八角の棒をもて、也刀齋の乘たる馬の、前脚を薙しかば、いかにして堪るべき、人馬等しく撻と輾ぶを、起も立ず亦棒をもて、也刀齋の肩尖を、下高に撻しかば、半身斜になるまでに、弱りてそが儘平臥けり。浩處に、奈我四郎短平等走來て、起んと蠢く也刀齋を、綁りて軈て牽立けり。當下通能樅二郎等は、逃るを追ふて茲に來つ、也刀齋は既にして、押繪が棒に撻惱されて、生拘れしを見て歡びに堪ず、今日の敵兵多かる中に、這奴のみ些ばかり、骨あるに似たりしを、女子の爲に軍功の、一番牌を落されたり。といへば樅二郎も、然なり。と應て、共に笑局に入りにけり。是時敵は皆逃去りて、一人もあらずなりしかば、和田大江の兩將は、勝鬨三たび揚させて、雜兵多く遣しつ、犬掛の茂林邊なる、兵火を餘波なくうち滅せて、軈て其頭に屯しつ、味方の軍功を問攷ふる程に、奈良櫻八重作が生拘

りたる、敵の頭人牛鬼黒九郎を首にて、和田小十郎は、生拘竹木虎狼二を牽せ來つ、押給も亦、館内也刀齋を、隊の雜兵に牽せ來て、共に是日の功を報けり。この他柒六通能と、韓錦樅一郎の、撃捕る所の稻妻齒四郎、飛鳥疾四郎の首級毎を、實撿にぞ入れにける。亦只是等のみならず、敵の士卒の名あるも名なきも、是日降人になりし者、四五百名の多きに至れり。正忠成勝是を撿して、功ある者を譽ていふやう、隊は今日の鬪戰を、心許なく思ひしに、寡きをもて衆きに勝しは、各位の武勇に憑り。然れども賞罰は、己等が克する所にあらず。魚丸腋子に告稟して、賞祿は異日の沙汰にあらん。猶幸ひなるは、躬方に些の金猪兒あるのみ、戰歿の者あることなし。然るにてもこの飛鳥疾四郎、稻妻齒四郎は、素是範的に仕たる、足卒也と賦聞えしに、初は大刀自母子の爲に、近江へ火急の使を果して、反て健宗の爲に忠あり。其後又疾四郎は、健宗の密意に依り、阿蘇寺なる我隊に、紛れ入らまくせしをりに、時八等に搦捕れしを、辛くして脫去りしは、這方の虛實を健宗に、報知らせんとてなるべし。有斯ばその做す所、惡を資る者なれども、然りとて恩義を知らざるにあらず、是をもて今日の敗軍に、也刀齋に從ふて、齒四郎疾四郎共侶に、殿りして陣歿したり。彼逃脚の蚤かりし、苛三隈八に比れば、沙礫の中なる小粒銀と、いふとも過たりとすべからず。然にあらずや。と理を推て、迭代りに解示

す、褒貶細やかなりければ、是をうち聞く樅二郎、八重作押繪奈我四郎、時八短平等に至るまで、耳新なる心地して、共に感嘆したりける。這時熖暑稍去て、下晡になりしかば、和田大江の兩將は、諸隊を合せて、一箇も散さず、列を正して齊々と、生捕兒と降人等を、牽せて阿蘇寺へかへりゆく、軍裝の物々しきを、見んとて里人莊客等、老弱男女幾名歟、路傍門邊に集つゝ、過り果るまで目送りて、皆憑しく思ひけり。案下重說。伍六郎健宗は、思ふにも似ざる敗軍に、辛く命を免れて、鍼持隈八鬼薊苛三等、以下の頭人共侶に、鏑野の館に逃かへりて、塹の橋を曳せ、四門を鎖、續きて寄來る敵を防ぐ、准備に他事なかりしに、敵はしうねく追も來ず、皆退去りぬと聞えしかば、僅にこゝろを安くしつ、苛三隈八等の頭人に、士卒の存亡を尋るに、始千三百と聞えたる、軍兵過半折れて、四五百名の外を出ず。それすら多く深痍を負ふて、今さら役に達べき者は、三百名に足らずといへば、健宗いよ〳〵氣を屈して、亦いかにとも術なきに、心連に焦燥隨に、然もなきことに怒を移して、近習童匽從等を叱懲し、又有司等が阿容々々、と做すことなきを責罵る、氣色凄じかりければ、是日の留守に預りたる、牝島番太守實すら、慰難て有司等と、共に奔走しぬる而已。しかはあれども健宗は、了得に今日の敗軍を、恥て大刀自に對面せず、大刀自も亦健宗の、敗軍を聞しより、單一室に屏居て、

出給はずと告る者あれば、健宗は倒に、是を物怪の幸なりと思ふ、身さへ心の疲勞しかば、この夜は侍婢等に肩癖を拈らせ、脚腰を摩せなどして、明るも覺ず熟睡しける。その曉より雨降沃きて、終日晴間なかりしかば幸ひに敵は寄來ず、味方も亦うち出て、攻べき威勢あることなければ、健宗は小書院に在り。苛三隈八、牡丹五眞武四郎等を召集て、只管軍議を凝せども、頼涯たる一二の頭人、竹木虎狼二、牛鬼黒九郎、舘内也刀齋等は、鈍や敵の爲に擒にせられ、小頭ながら稻妻齒四郎、及飛鳥疾四郎は、共に陣歿の聞えあり。この他も士卒昨日に似ず、最少くなりけるに、憖に推寄て、攻撃給ふは危ふかりなん。只守を固くして、敵を防ぐにしくことあらじ、と異口同樣に諫るにぞ、健宗はいふ甲斐なし、と思ふものから計の、出る所を知らざれば、只得其議に任せつゝ、頭人等を退かすれば、折から雨歇雲霽て、横日刺陰を瞻仰れば、憶ずも時移りて、申牌になりにける。當下健宗は、簷廊に布せたる、蒲席に坐を占て、單庭を長視て在り、鬱々として樂しからざる、心を慰るよしもなく、今より後の闘戰に、只全勝の術も欲得、と思凝ども思難て、惘然としてありける程に、怪むべし一朶の烏雲、中天に著れて、降りて庭の松の梢に、羅聚歟、と相程に、嬋娟たる一箇の天女、身には浮紋ある、純綠衣を被下したる、其打扮唐畫にて見ぬる、西王母に髣髴たり。左右に從ふ兩箇の了鬟あり、衣裳は

官緑を旨として、長柄の翳をぞ執たりける。當下天女は、飄々然と、松の梢を降來て、卷石の上に立在たる、顔は東園の梅櫻の如く、腰は西湖の楊柳に似たり。正に是、天武の帝の御時に、吉野の離宮に天降りて、五節の舞を奏しける、天津少女ならざりせば、楚の襄王を慰めて、朝雲暮雨を詠じたる、巫山の神女にあらずや、と思ふ可の容顔婥約、現人間に得がたき所、譬を取るに物なければ、健宗はじめは胸を潰して、駭怪みけるに似げもなく、心を鎭めて猶相隨に、魂魄既に天外に、飛を覺ず恍惚と、言問もせでありけるを、思ひかへしつ佶と疾視て、四下に響く聲高やかに、妖たりな野狐奴。我敗軍に樂まず、軍旅の工夫に寢食を、忘るゝまでに他事もなき、獨坐幽栖の虚に馮入りて、何事を做さまくするや。然らば本事を見せんず。と罵りながら身を起して、床に建たる弓と箭を、搔拿り孱く立向へば、天女は噪ず微笑て、愚なり健宗、我豈狐狸の妖怪なるべき。當家に舊き由緣ある、枉津神女を知らざるや。むかし汝が養母大刀自の、少かりし時はしも、深心敬禮叮嚀にて、幣帛賻ざる日のなければ、我も亦其諸願を、果し得させざる事なかりしに、彼身孀夫に做りしより、深心祈禱怠りて、見かへりもせずなりしかば、遂に神威も衰へて、荒たる廟社に獨立つ、今に至りて二十餘年、身は蜘蛛網に包れて、月日と共にふり蘊る、塵埃だに拂ふ者なかりしに、和郎が昨日の敗軍に、大刀自大く驚


健宗めくり
あく枉津天
女に拜見を
たけむね


まづつひ
まづは天女
まづつき

憂ひて、軈一室に屛居て、只願我神號を、唱て丹精を凝すまでに、默禱一晝夜に及をもて、我も亦喚起されて、來迎せざることを得ず。世話に所云、神は只、人の信ずるによりて、威を增而已。こゝをもて明日の軍陣に、神通力を施して、和郞の爲に彼剛敵を、鏖にせばやとて、來にけるものを甚麽ぞや、惑ふて狐狸の妖怪と、思れんはこゝろ似ず。袖を拂て去らんのみ。と妙音殊勝の示現の奇特に、健宗疑惑氷解して、且悔且畏みて、弓箭投棄庭面へ、走下りつゝ合掌の、頭を抬げて答るやう、俗眼神女を疑ひまつりて、敬禮の儀を欠のみならず、漫に罵辱しを、後悔何ぞ及ぶべき。願ふは今より愛愍納受の、神德を垂給ひて、我身を守らせ給へかし。權且なりとも庭面に、立せまつらんは最も惶し、誘々。とばかりに、連りに請ふて已ざれば、天女は然こそ、と頷きて、軈て書院にうち登れば、又兩箇の神童女も、從ふて其左右に在り。當下健宗は、連りに掌拍鳴して、茶を進らせよ、果子をとて、諸婢侮を喚立るを、天女は急に推禁めて、否とよ我は火食せず。況月水を免れざる、諸婢侮を何にせん。和郞願しき事あらば、疾告るこそよかゝめれ。といはれて健宗阿とばかりに、額衝承て且いふやう、在下年尙少ければ、兵を學の日久からず、才足らずして卽功を、貪る癖あればにや、昨日の鬪戰利あらずして、賴涯たる頭人三名、竹木虎狼二、牛鬼黑九郞、館内也刀齋は、敵の爲に擒にせられ、又

飛鳥疾四郎、稲妻齒四郎は陣歿したり。さてぞ千三百の士卒、殘少に損はれて、三が一にも足らずなりぬ。有斯ば明日の鬪戰に、いかにして可らんや。と問へば神女は袖搔合せて、善哉善哉、愆を、知る者は愆少し。我既に和主を祐けて、彼剛敵を征る上は、焉兵の多少に由らんや。遮莫敵に生拘れたる、頭人等を惜く思れなば、縱十重二十重なる、死囚牢に籠置るゝとも、我神力を施して、必や救出して、明日の役に充んこと、嚢の物を拿るより易かり。とばかりにして經驗を見せずは、猶疑るゝこともあらん。といひつゝ左右を見かへりて、やよや枉津日、枉通氣よ。汝等は疾かへりゆきて、我神兵等に箇樣々々と、旨を傳へて徇知らせよ。はやくゆきね。といそがせば、枉津日枉通氣兩神童女は、應も果ず身を起して、庭に閃りと出る時、簷廊に倚け措たる、翳を拿りつ衝建て、身を跳せて中夫へ、升ると見えしは現にて、往方も知らずなりしかば、健宗は又更に、驚呆れて瞬もせず、一霎時某方を向上たる、貌を改め天女に向ひて、那兩箇の神女童は、年尙三五に足らざるべきに、思ふに増たる出沒無量、何といはるゝ神やらん。と問ふを天女は聞あへず、否とよ他等は我分身にて、假に其名を呼做して、枉津日枉通氣といへるのみ、素是一體分身なれば、要ある時は是を使ひ、要なければ退けて、その本に復らしむ。譬ば形と影の如し、異神にはあらずかし。と解示す詞いまだ訖ず、但見烏

雲猛可に起りて、疾風颯と電光して、霹靂一聲轟然たる、雲中に是物あり、甲冑たる武者幾百千、手に〳〵弓箭器械を、挾みつゝ降來て、庭面陝しと羅列たり。當下天女は身を起つゝ、簷廊に立出て、集合たる神兵を、列々と見ていふやう、汝達旨を違ずして、早速の到著最よし。明日健宗の鬪戰を、助て敵を鏖にせん。そのをり汝達力を勠して、敵を撃て功を奏せよ。敵は則和田正忠、大江成勝を首にて、峯張通能、和田正義、及韓錦奈良櫻、其女弟押給等に至るまで、心正しく武藝あり、是を倒ん事容易からず。倘克せずは失あらん。汝達明日健宗の出陣の時分を違ず、彼戰場に來會せよ。この義を告示さんとて、さてこそ招き寄たるなれ。ゆきねゆきね。と腮もて示せば、神兵等は阿とばかりに、應も果ず集る雲に、身を包して忽焉と空に升りて失にけり。然れば健宗はこの光景に、いよ〳〵驚きます〳〵呆れて、身を縮してありける程に、天女は徐に席に還りて、又健宗に示すやう、今日敵の寄來ざりしは、雨障りありし故なり。明日は必うち出なん。然れども明日も朝雨ありて、巳の時候よりその雨霽ん。和主その霽るゝを俟て、いそぎて出陣するならば、又犬掛の茂林邊にて、敵軍に撞見べし。其折忌服なき、雜兵六名に、注連繩布遶らしたる、腰輿を舁せて先陣に、交へて敵に薄みなば、我其神座に出顯して、彼剛敵を討滅さん。この義を士卒に告示して、明日戰場に從ふ者各我神號

を、唱て敵を撃ならば、勝ずといふ者あるべからず。その折までは我身要なし、明日復目にこそ掛るべけれ。といひつゝ軈て身を退かして、背後の壁に倚とぞ見えし彼身は壁に滅入て、迹だにあらずなりしかば、健宗は愕然、とはじめて夢の覺たる如く、且怪み且畏みて、壁に對ひて伏拜つゝ、默禱して在ける程に、點燭時候になりしかば、近習等は行燈を、引提て出て來にけるを、健宗は見もかへらず、いそしく後堂に退きて、奶々は那首ぞ。と尋るに、侍婢毎の告るに知りぬ、この時しも大刀自は、一晝夜の祈禱斷食果て、既に一室を立出て、粥を啜りて在りしかば、健宗敢驚さず、その喫果るを俟て、軈て閑室に請迎へて、額を合せ聲を低めて、天女出現の事の趣、示現教諭の神託を、遺もなく告しかば、大刀自耳を攲けて、一たびはうち驚き、一たびは歡びて、奇也〳〵、とばかりに、四下を見遶して答るやう、原來我心願虚しからで、彼御神出現の詫宣ありて、健宗を、祐させ給ひなば、非除百萬騎の大敵也とも、怕るる所なかるべし。我身少かりし時故ありて、一修驗者の薦めに任して、枉津天女を郊外に、祭りて祈らざる日のなかりしに、範射世を去り給ひし後は、又願しきこともなければ、こゝろともなく懈りて、始にも似ずなりける故歟、昨日和殿の敗軍は、神の祟りにあらずや、と思へば悔しく惶さに、軈一室に屛居て、断食祈禱の甲斐ありけん、然る示現を蒙る上は、今さらに疑ふ

べからず、はやく頭人等に徇示して、明日闘戰の准備をいそぎね。何ぞ躊躇ことあらんや。と言語急迫く、解示せば、健宗有理と承歡びて、當晩鬼薊鍼持等の、諸頭人はさら也、老黨有司近習まで、悉皆召集へて、枉津神女出現のこと、其託宣の掲焉なりしを、言詳に告知らせて、明日の出陣は箇様々々、如此々々にせよといふ、指揮細やかなりければ、孰歟歡び勇ざるべき、千秋樂と稱えつゝ、退りて准備に他事もなく、明るを遲しと俟たりける。然る程に、和田大江の義士等は、當日の闘戰思ふに倍て、勝利十二分なるものから、敵驕れることろなく、士卒を率ひて降人と、生拘兒を牽せつゝ、徐に阿蘇寺にかへり來て、金瘡兒を勦り人馬を憩へ、生拘たる敵の頭人、竹木虎狼二、牛鬼黑九郎、館内也刀齋をのみ、緊しく檻に繋げども、降人等は索を饒して、去らんと願ふ者は留めず、仕まく欲する者は、其意に任せたりければ、軍兵多くなりたる上に、東西の野武士浮浪人、遊民に至るまで、其義を感じ德を慕ふて、走鳩る者少からねば、纔に一日二日の程に、著到一千餘名になりにける。事の幸ある是のみならで、魚丸の實母垣衣の女僧周脊は、いぬる日住持閑廓和尙の、趙心季彥等と商量して、老實なる沙彌道人を、信濃へ迎に遣しければ、周脊比丘尼は獾寺より、彼人々に伴れて、昨日來著して、魚丸の子舍に在り、義士等の恩義を感悅して、勝軍を壽祝たる、文多ければ省きて盡さず。在官

宜く猜すべし。閑廂和尚素より思慮あり、周晉比丘尼の幽栖を、倘敵に知られなば、奪捉るゝ事もやあらん、と阽む故に使を遣して、母子全きことを得たる、其事の顚末は、前回の文を照して知るべし。閑話休題。有斯し程に正忠成勝、通能等の義士は、勝軍の次の日に、徑に鏑野に推寄て、討果さんとて議する程に、雨降ければ只得默止つ、その詰旦も雨降たれども、巳の比及に霽しかば、然らばいそげ。といふ隨に、一千餘名を三隊に分ちて、韓錦樅二郎、奈良櫻八重作、和田小十郎を先鋒の頭人として、勇婦抑繪と、見越松時八を後陣とす。又正忠成勝、通能と共に三騎は、鶴脛奈我四郎鴨脚短平等を、左右に從へて、もて三隊に在り。齊々整々として列行程に、馬の足掻を早めしかば、まだ未牌にはならざるに、又是一昨日の戰場なる、犬掛までぞ推出ける。然れば又鏑野伍六郎健宗は、天女の示現に違ふことなく、殘兵三百餘名を從へて、うち出んとしぬる程に、前々日敵に擒にせられし、竹木虎狼二、牛鬼黑九郎、館内也刀齋等三名まで、忽然とかへり來にければ、こはいかに、と訝りて、先其故を詰るに、異口同樣に答るやう、臣等命運全からで、敵の爲に擒にせられ、檻の獸になりしより、免れがたく思ひしに、今朝しも檻の鎖破れて、出入自由になりけるに、をりから守護の雜兵の、隙さへあれば脫出て、四下を見るに身甲あり、大刀さへあれば身に帶て、うち連立て出てゆくを、見れど

も答る者もなく、來るとも覺ず瞬間に、かへり參候ひき。と告るに驚く健宗は、思はず掌うち鳴して、丌は疑ふべくもあらぬ、天女の冥助ならんかし。這里にもかゝる奇事ありとて、枉津天女の條々を、詞短く解示せば、黒九郎也刀齋、虎狼二等は駭嘆じて、神の祐を感悦す。然れば屈簗鍼持等、以下の頭人有司まで、いよゝ憑しく思ひけり。是により健宗は、軈て虎狼二也刀齋、黒九郎等を先鋒に加えて、その身は則苛三隈八、有司近習等を從へて、もて二の隊に在り。隨即天女の教に依て、腰輿を舁して出陣の、路次を連りにいそぐ程に、又只犬掛の茂林邊にて、義兵の先鋒に行逢けり。當下義兵の先鋒の頭人、樅二郎望洋、八重作次世、小十郎正義等は、思ひしより猶小勢なる、敵の先鋒を見て些も擬議せず、鶴脛鴨脚と、共に隊兵を找る程に、又見る敵の頭人等の背に挿たる長幟に、竹木虎狼二と寫したるあり、又牛鬼黒九郎、館内也刀齋といふ、姓名さへ讀れしかば、韓錦弟兄正義等は、訝りつ冷笑ひて、彼奴等はいぬる日の、鬪戰に生拘りて、今も猶阿甦寺なる、檻裏に籠措なるに、いかにして那里に在んや。是も亦健宗の、敵を惑さまく欲しぬる、拙計にぞあらむずらん。名は同くして人異なる歟。非如兩箇の黒九郎、四箇の虎狼二也刀齋ありとも、何ばかりの事やはせん。蒐れ〱。と焦燥折から、又見る敵の陣中より、雜兵纔に五六名、腰輿を徐に擡け出して、先鋒の中央に舁居

たり。椛二郎等は又訝りて、彼はいかに、とばかりに、勢尋思に遑なければ、八重作正義共侶に、烈しく隊兵を拵めたる、那時遅し、這時速し、件の腰輿の内よりして、怪き少女閃き出て、腰輿の上に立顯れ、長なる雲鬢振亂し、手に寶劍を拔翳して、敵に向ひて揮晃かす、刃の光は電光石火、人の目を射る程しもあらず、巽の方より一陣の、怪風咄と下し來て、沙を飛し樹を仆し、屋を損ひ巖を轉す、狂暴名狀すべからず。正に是、九萬里に搏つ彼大鵬も、翅を斂て昇らざるべく、十五日にして返る列御寇も、杖を駐めて乘ざるべし。巽二八虫の暴虐成す、孰歟よく是に當ん。然しも勇し一千の、義兵は面を向るによしなく、人馬齊一吹仆されて、沙礫に打れ樹幹に折れ、或は水田に滚落、或は己が刃に劈れて、死活を知らざる者多かれども、起つ砂煙に天さへ曇りて、曚々朧々となる隨に、親撃るれども、子は是を知らず、主危ふけれども、從者の救ふなし。遮莫健宗の陣中には、毫も風の障あらず、視目も明亮なりければ、先鋒の頭人蛇塚眞武四郎、和十六牡丹五は、竹木虎狼二、牛鬼黒九郎、館内也刀齋等と共侶に、隊兵を分ち逃るを追ふて、敵を擇まず殺仆す、大刀風も亦劇かりければ、義兵は既に風に搏れて、起つだに自由ならざるに、吹入るゝ土沙に眼眩みて、いかにとも術なければ、擊れざる者あること稀なり。然れば一千餘と聞えたる、義兵はいまだ戰ずして、摠敗軍になりにたる、 其が中に、

和田十郎正忠と、大江杜四郎成勝は、跌く馬を乘放ちて、追來る敵を斫拂ふ、苦戰の中に呼かはす、躬方は則奈良櫻八重作、時八短平奈我四郎、乓乒ながら援來つ、且戰ひ且退けども、勍風いまだ歇ざれば、進退自由を得ざりける。然れば又健宗は、天女の帮助に、如意滿足、勝誇たる癖なれば、怨ある杜四郎、柰六等を擊果んとて、苛三隈八、近習の儕、從ふ隊兵を前後に立して、馬を蒐しつ追蒐來て、只今敵を稍殺拂ふて、退んとしぬる成勝正忠等を、犇々と捕籠て、息をも吐れず攻たりける。爾程に、這日も阿甦寺に留守したる、防守松煙齋季彦と、杵臼入道趙心は、思ひがけなき狂風に、躬方の安危いかにぞ、と了得に心許なければ、遺置れし弓手の、軍兵二三百名を從へて、うち出まくしぬる時、閑厠和尙の授たる、避風の神護符を、旗竿の梢に拈著て、开を眞先に推建つゝ、連りに路次をいそぐにも、實に神符の擁護にやよりけん、然ばかり風の障りもなく、十餘町來ぬる程に、果して成勝正忠は、八重作時八奈我四郎、短平と共に纔に六名、健宗の多勢に捕籠られて、鬪戰危く見えしかば、季彥趙心些も擬議せず、新隊を進め箭を飛し、咄と嚾て殺崩せば、健宗の左右なる、近習の壯佼兩三名、竅所を射させて仆れたり。健宗是に舌を掉ひて、はじめにも似ずなりけるに、敵の射る箭に間なければ、鍼持隈八、鬼薊苛三も、或は肱の外を傷れ、或は太股に箭を受しかば、怺へず潑と亂噪ぐを、成

勝正忠八重作等は、枯たる苗の雨に逢ふ、威勢勃然として透もあらせず、時八奈我匹短平等まで、新隊の中に入交りて、敵を撃者少からねば、健宗竟に怺難て、捨鞭鳴して逃走る、主將に劣らぬ苛三隈八、命を惜む心は一致、躬方を盾に逸脚出して、逃るを追撃つ成勝正忠、季彦次世、趙心等の諸頭人は、よき程に追捨て、集ふ躬方を俟て在り。當下成勝正忠等は、季彦趙心にうち向ひて、嚮に敵の陣中に、怪き少女の顯出て、猛に風を起したる、其奇事をいひ出れば、季彦趙心駭嘆じて、那は必妖怪ならん。就て留守にも奇事あり。檻に籠措れし生拘兒、竹木牛鬼、館内なンど聞えたる、敵の頭人三名まで、檻を破りて逃亡たり。那を知る者なかりしは、是も亦妖怪の、所爲にこそあらむずらめ。只幸なるは閑廂師父の、授させ給ひし祕符を、旗竿の梢に貼しょより、猛風遂に鎭りて、和君等を救得たり。是を思へば一旦の、敗軍は是非に及ばず、久後憑しく候はずや。といふに成勝正忠八重作、皆駭然と感激して、それにて思合すれば、嚮に敵の小幟に、彼生拘兒、竹木牛鬼、館内等の姓名見えしを、一切こゝろ得がたかりしに、原來他等は逃亡て、今朝より敵の陣中に、在りけんを知らざりき。と異口同樣に答る折から、風の爲に離散したる、躬方の雜兵二三百名、建たる義兵の旗を見て、漸次に集ひ來にけれども、峯張通能、和田正義、韓錦縱二郎、押縮等は、いかになりけんいまだ見えず、權且

他等を俟程に、日は既に西に淪みて、人皆疲れて且饑たり、健宗二たびかへし來ば、其度は難義ならん。憶ふに韓錦兄妹、和田峰張は、共に命を免れて、既に寺にかへりしならん。疾く退き給ひね。と季彥趙心等のいふにより、成勝正忠八重作等は、只得その議に儘せつゝ、殘兵五六百名を從へて、季彥趙心等と共侶に、阿蘇寺へぞかへりける。爾程に、韓錦樅二郎望洋、和田小十郎正義は、嚮に猛風に吹惱されて、殆難義に及びしをり、疾く袖表を搔投棄て、敵の雜兵にうち交り、一霎時虎口を免れしに、館內也刀齋に見出され、多勢の爲に揷圍れて、免果べうもあらざりしを、樅二郎も正義も、武勇に覺ある者なれば、近づく敵を幾十名歟、斫拂々々、茲を先途と戰ふ程に、敵の頭人、蛇塚眞武四郎、和十六壯丹五等、隊兵を從へ走加はりて、搦捕んと競ふ折から、義士等を援る勇婦在り、是則押絵なり。跟蹌く脚を踏鳴し、群立敵の後より、彼八角の棒をもて、敲き仆し薙拂へば、是にぞ噪ぐ敵の衆兵、開辟くを劃て入る、押絵の援に便を得たる、樅二郎と正義は、共に一方を殺脫て、走らまく思へども、敵は看に餘る多勢なれば、斫ども突ども左右なくは、脫果べうもあらざりける。有斯し程に、峯張柒六郎通能は、嚮に猛風を凌難て、路傍なる夏草の、繁れる中に伏躱れて、憶はず時を移しけるに、忽地人多く、叫ぶ聲して、やうやくに近づくを、曚朧ながら透見れば、韓錦兄妹と、和田小十郎正義

が、敵の多勢を拄つゝ、且鬪戰且退來ぬるなり。通能是を見てしより、奮然と身を起しつ是時までも失はざりける、弓箭拿抗克引て、敵に向て骠と射る、箭局違はず和十六牡丹五は、兜の副緒を、頤かけて射削れて、兜は後ざまに撲と墜、主は鐙を踏外して、馬より撻と落しかば、其隊の從兵驚噪ぎて、走れる馬を牽駐め、牡丹五を扶起さまくす。程しもあらず通能の、射出す二の箭三の箭に、也刀齋眞武四郎さへ、共に薄痍を負しかば、其隊の雜兵辟易して、亂噪ぐを和田正義、樅二郎押繪等は、血刀打振殺拂ふ。通能も亦弓投捨て、大刀拔翳跳出て、雜兵多く斫伏て、和田韓錦押繪等と、倶に圍を殺脫て、直走りに走る程に、猶且追來る敵の頭人、竹木虎狼二、牛鬼黑九郎等、新隊を找めて近づくを、正義亟く見かへりて、腰に吊たる嚢より、一箇の小石を探出して、寗ひを定めて礮と撲つ、投石に牛鬼黑九郎は、片頰を痛くうち傷られて、齒さへ欠けん口中より、血を流しつゝ仰反たり。是にぞ驚く虎狼二と、二隊の從兵胆を冷して、等しく找難たりける。其間に義士勇婦は、又復連りに走る程に、去向に一條の溝川あり、其廣一丈ばかり、素樸二本を投渡して、僅に橋にしたるなり。當下通能正義樅二郎、押繪等は共侶に、向ひへ渡しつその橋を、そが儘亟く曳棄ける。當下虎狼二黑九郎は、隊兵を將て追蒐來ぬれど、既に橋なければ渡し得ず、あれよ〳〵。といふ程に、又正義の打出す、投石に虎狼

二左の眼を、傷られて落馬したりける。こは長追の咎なめり、と思ふ黒九郎さへ口中の、疼痛に堪ねば隊兵に、虎狼二を勦らせ、やうやく馬に扶乘て、皆共侶に退てゆく、見苦しかりける光景なり。然れば峯張和田韓錦、押繪等は是を見て、憶ずも笑ひを忍びて、是より後安ければ、脚に信してゆく程に、猛風は稍和ぎて、天さへ既に晴たれども、いかにして迷ひにけん、ゆけどもゆけども官道に出ず。と見れば去向の茂林の中に、荒たる小社ありければ、權且這里に憩んとて、皆共侶に立よるに、兩扉は開きて在り、裏面には臺座のみにして、神像歟佛像歟、本尊めきたる者はあらず、網代天井は雨漏に染て、且敗たるを、間なく絓たる蜘蛛網は、天幕に似たりける。况板席は桁朽て、印しし狐の足跡多かり。又外面には、石燈籠欹きて、笠石を失ひ、老たる杉の幹に、大きなる釘を幾箇歟打入たるは、妬婦の所爲ならん、と思ふのみにて言問ん、人しなければ義士勇婦は、尻打掛て憩ひて居り。幵が中に、和田正義と樅二郎押繪は、身に受たる金瘡の、五箇所三箇所あらぬもなければ、通能は懷なる、藥籠の仙丹を、些ばかり出し分ちて、三男女の痍に塗らしつ、已も聊嘗試るに、痍は立地に血を止めて、各その疼を覺ず、饑たる腹さへ飽滿して、心地清爽になりしかば、共に敵陣の奇事をいひ出て、嚮に腰輿の上に立出たる、少女は幻術ある者歟、其做す所奇怪ならずや。且前々日の鬪戰に、生拘たる敵の頭

人、黑九郎、也刀齋、虎狼二等三名まで、今日健宗の隊に在りて、我們を撃まくしけるは、怪むべくこゝろ得がたし。といふ。甲一語乙一語、うち譚ふて在りし程、日景稍斂きて、遠寺にて衝鳴す、晡時の鐘聞えしかば、暮ぬ先にと皆立出て、ゆくこといまだ百歩に過ず、と見れば左手の方に、廣やかなる盆池ありて、前面の岸に蓮多く、葉を布花を吐まくす、夕風の最涼きに、這方の岸に一箇の賤婦、敗たる單衣を洗ふあり。通能等は步を住め、件の賤婦を呼かけて、やよや婦人言問ん。我們は軍敗れて、阿甦寺に還る者なり。然るを迷ひて官道に出ず。這地は何と喚做すやらん。と問へは椛二郎も共にいふやう、我は白猪の人氏なれども、いまだ這頭をよくも知らず、方僅憩ひし後方なる、堂舍は酷く荒たりとも、本尊なきはこゝろ得がたし。その故よしも聞まくほし。と問ふ間に賤婦は、單衣を洗果て、絞りて盥にうち納て、被りたる手拭もて、手を拭ひつゝ答るやう、原來刀禰們は、部領の腋子を補佐し給ふ、義士達にてをはするよ。這里よりして阿甦寺へは、一里半許も侍るめり。這地は部領の近郊にて、能與村と喚做したる、村落にて侍るかし。昔は能與院といふ、梵刹の寺料なりけるに、その寺頽廢したりしより、今は漸次に荒果侍り。然れば憩せ給ひし荒社は、昔は能與院の境内にて、時の住持の勸請しける、辨天堂なりけるを。といひつゝ四下を見かへりて、聲を低めて又いふやう、聞せ給ひ

しことはなきや。鏑野殿の母君なる、大刀自御前の少かりし時は、嫉妬心の大かたならねば、範射主の嬖妾はさら也、憎しと思ふ男女を、呪咀もしつ縊死殺させて、愉快とし給ふ程に、抖藪行脚の悪頭陀に、說惑さるゝ事ありて、黒闇天女を祭給ふに、勸請の地の方位は、能與院なる辨天堂こそ、宜しかるべけれと稟すにより、その堂舎を掠奪して、辨才天の尊像を、這池底に推沈め、其回新に造せたる、黒闇天の木像を、軈て那社に推居て、枉津天女と稱せらる。能與院の住持是を歎きて、愁訴屢なるものから、いかにして聽るべき、反て坊料を召放され、剰寺を追れたる、住持の老僧怨に堪ねば、立去ずして縊にけり。然れば沙彌小僧等は、各々離散して、其寺頽破したるなり。かくてその比より大刀自御前は、彼悪頭陀を、枉津天堂の、別當に推登し、彼身も深信懈らで、旦暮に丹精を抽たればや、諸願成就せざることなく、良人範射の主君なる、武茂主をも呪咀しかば、武茂竟に心亂れて、淫酒に耽り、政事に荒み、自滅して其家亡び、家臣鏑野範射に、本領職事を奪はれしは、幷も黒闇天の做す所歟、是を知る者あることなし。經に所云黒闇天は、辨才天の女弟なり。辨才天は、人に福を授け、黒闇天は禍を與ふ。然るを大刀自是を祭りて、隱慝の情願を、果し得ざることなけれども、天神地祇の、忌嫌せ給へばや、範射主は廿羅の郡司に、做り登りて幾程もなく、家臣の爲に枉死した

り。又彼惡頭陀は、身に黴癩の惡疾出來て、全身都て腐爛れて、生ながら白骨に、做りて道路に命終れり。大刀自是に鬼胎を抱きて、枉津堂を棄て祭らず、信る心絶果たれども、範射既に世を去りては、又妬むべきよしもなく、其身郡司の母になりては、又願しきこともなければ、黑闇の枉津を思ひも出ず、忘れて年を歷にけるに、いぬる日健宗主の敗軍に、大刀自大く駭怕れて、枉津天女の擁護に因ずは、寇を滅しがたかるべし、と思ひ起しつ又さらに、黑闇天を祭しかば、黑闇の枉津天女は、舊緣に援れ出顯して、健宗主を助しなり。然ればこそあれ那堂内なる、枉津の木像あらずなりしは、鏑野の館に飛去て、健宗主の爲にしも、猛に風を起しつゝ、今日の軍に勝せしなりき。奴家が言の僞なきは、那里の社頭なる杉の幹に、打たる釘を見ても知り給へ。當初大刀自御前の、黑闇天を祭給ひし由を、妒婦等が聞知りて、丑の時參をしぬる者、咎なき杉に痍を負したり、こも其照据に侍らずや。と言詳に說諭せば、通能聞得て謝していふやう、適愛たき和女郎の才幹、言皆我爲に裨益あり。なれども疑しき事なきにあらず。といへば樅二郎も共にいふやう、聞くが如きは其黑闇天は、人の造りし木像なるに、飛行して健宗の、陣中に在りて風を起んや。この事のみは信がたし。と詰るを賤婦聞あへず、刀禰達曉得給はずや。非情無心の物なりとも、靈あれば做すことあり。嘗唐山の故事を聞侍り

しに、豐山の鐘はおのづから鳴り、魏楡の石はよく言ふといへり。鐘と石とは非常なるに、自鳴り、克言ふは、外より是に憑物ありて、然る奇異を做せるならん。天女の木像の飛去しも、是に由て思ふべし。世にいふ物怪變化は、人の一念の致所、天地をも動すべし。在昔唐山杞梁の妻は、深く良人を哭する故に、城是が爲に陷るといへり。善惡其差ありといへども、世に人の一念ばかり、泯がたき者はなし。又物の憑て靈あるは、衣に移香したる如し。其を除去りがたくとも、藥をもて是を燻さば、その移香立地に、散失て迹なかるべし。刀禰達この理を悟給はゞ、彼妖怪を對治して、敵を滅し給はん事、口を俟ずして知るべきのみ。疑ることかは。と說れて通能樅二郎は、倶に感服したりける。當下正義押繪等も、感嘆しつゝ賤婦に向ひて、驚思ふ和女郎の辯論、いかで其名を聞まほし。抑宿所は那里ぞや。と問へば賤婦頭を掉て、否奴家は名も侍らず、宿所を告て何にせん。早日は暮なんかへらせ給へ。玆より路を南に取て、箇樣々々に行給はゞ、今宵初更の左側に、阿蘇寺に屆給はん。かへらせ給へ。といそがせば、正義押繪は強難て、通能樅二郎共侶に、歡びを演別を告げて、ゆくこといまだ遠からず、倶に後方を見かへれば、今までありける賤婦は、忽地見えずなりにけり。こは昔大刀自が、那池に棄たりといふ、辨才天の化現ならん、と悟りつ齊一合掌して、一霎時祈念を凝しけり。畢竟三

義士一勇婦の、憶はず神の示現を得て、後の話說甚麽ぞや。开は下回に、解分るを聽ねかし。

續編　卷之三十

第六十回

魚丸妖魔を對治して絕たる家を興す
晴賢命を免れて夜三池邨に走る

却說和田十郎正忠、大江杜四郎成勝は、防守筑四郎季彥、杵臼入道趙心と共侶に、奈良櫻八重作次世、見越松時八、鶴脛奈我四郎、鴨脚短平等、以下の殘兵四五百名を相倶して、阿蘇寺にかへり來にければ、魚丸母子閑廂和尙は、共に出迎相勞ひて、引て客殿に團坐しつ。士卒は都て相別れて、一隊每に憩所に居り、或は金瘡を勦り、或は疲たる馬を、洗などするもあるべし。況夕飯の儲置しからねば、饑たる腹を繕ふて、軈て睡に就も多かり。其が中に、正忠成勝八重作時八、奈我四郎短平は、共侶に客殿に居り、魚丸の實母周晉比丘尼と、迭に云々の口誼あり。却今日の鬪戰に、ゆくりなく敵の陣中に、怪しき少女立出て、猛風を起しょかば、戰ずして、敗軍したる、其事の顚末はさら也、折もよく防守杵臼の、援兵によりて萬死を出て、一生を得たりける、その折の崖略を、共侶にいひ出て、告るをうち聞く魚丸母子、閑廂和

尙いへばさら也、外に洩聞く沙彌小僧まで、感嘆せざるはなかりける。有斯し程に日は暮て、夜は初更に近けれども、通能正義樅二郎、押繪等はいかにしけん、いまだかへり來ざりしかば、正忠成勝八重作等、又このことをいひ出て、倘陣歿したらん歟、然らずは風に吹仆されて、身を傷ずや、と思ふのみ、安否を知るに由なければ、時八奈我四短平等は、都して索ん歟とて、慌るを成勝推禁めて、已ねく〳〵幵は益なし。憶ふに通能は懷にしたる仙丹あらん。非如深痍を負ぬとも、自療の即功なからずや。又小十郎韓錦、婦人なれども押繪少女は、共に蓋世の武勇あり、敵の虜になるべくもあらず。今少選俟ならば、必信あるべからん。といふ詞いまだ訖らず、三門に來て敲者あり。時八早く洩聞て、それかあらぬ歟、とばかりに、奈我四郎短平も、共侶に身を起して、出て問まく思ふ程に、峯張來六郎通能、和田小十郎正義、韓錦樅二郎望洋、其女弟押繪等は、既にしてかへり來つ、軈て團坐に入りしかば、正忠成勝八重作等は、その恙なきを相賀して、今日の安危を問まくす。通能等も人々の、無異に歸陣を喜び祝して、却今日の難戰を、迭代に說示す。通能の射藝、正義の投石、望洋押繪の胆略武勇、多勢の敵を殺脫て、敵の頭人兩三名に、淺痍深痍を負せたる、溝川橋の退口より、敵は困じて追ずなりける、事の爲體を首にて、通能正義望洋押繪は、憶ずも路に迷ふて、能與村なる荒社に、一宵時

憩ひて在りし事、且其頭なる池水にて、衣を洗ふ賤婦に、路次を問まく欲ししより、不憶聞得たる、健宗の養母大刀自の、少かりし時嫉妬の事、この故に能與院なる、辨天堂を改めて、黑闇天を祭るをもて、枉津天女と喚做す事、其後深信懈怠の事、這回又大刀自は、健宗の敗軍に、怕れて黑闇の枉津天女を、祀りて斷食しぬるまで、深信祈念を凝しゝかば、彼惡神舊縁に、惹れて健宗を祐助ること、この故に彼荒社なる、枉津の木像飛去て、鏑野の館に在りといふこと、彼賤婦の格言正論、人意の表に出ざる者なく、諭して相別るゝ時、形は見えずなりしこと、然れば昔年大刀自に、棄却せられて件の池に、沈淪られしといふ、辨才天の化現ならんと思ふ事、又能與院頽廢してより、彼村衰微したることまで、聞つる隨に漏す者なく、甲一語、乙一言、語を續足らざるを補ひて、備に告る幵が中に、通能の亦いふやう、憶ふに曩に虜にしたる、敵の頭人竹木虎狼二、牛鬼黑九郎等兩三名、幾の程に敗脱去て、今日健宗の陣中に、在りて我們を撃まくしけるも、亦是枉津の幻術ならん。然ればこそあれ彼陣頭に、顯出し怪き少女の、猛に猛風を起しゝは、枉津天女の化現にて、健宗を資助しなり。此故に躬方の勇士等、捴敗軍になるものから、一箇も陣歿せざりしは、邪は正に勝ずといふ、古語さへ思出られて、久後憑しく候といふ、一五一十の話說に、正忠成勝以下の衆人、側聞しゝ魚丸母子、閑廂和尙に至るまで、

駭嘆せずといふ者なく、共に拍掌感悦して、時今澆漓に曁といへども、鬼神の出沒なきにあらず。其善神は善人に福し、旱魃如惡神は、惡人に幸ひすなるも、自然の義にて怪むに足らず。鄙語にいふ祟る神あれば、資る神のなからずや。と齊一唱嘆したりける。丼が中に正忠は、沈吟じたる額を掎て、聞くが如きは、彼神女の辯論に、物怪變化を、衣に附く、傳染香に、譬られしは、實に是的論也。憶ふに、人死していまだ葬らざる者に、倘猫兒の憑ことあれば、其死人勃然と、身を起して走出るを、禁る者は打仆され、傷つけらるゝも稀には是あり。人其死人を見て猫兒を見ざれば、竝て怪み怕るゝ而已、則是物怪なり。世に物怪といふ者は、不意起るもあれど、多くは人の一念もて、外より惹出す靈ありて、物に憑て奇怪を做すのみ。是によりてこれを思へば、枉津天女の木像の、飛行して怪異を做せるも、この理をもて悟るべし。といふに衆皆感服して、寔に然也。と應ける。當下成勝は、通能正義、韓錦兄妹の、料らず神の示現を得たるを、只管稱えて且いふやう、我們は然る幸もなし。峯張韓錦等も聞ねかし、我身は和田奈良櫻、見越松鶴脛、鴨脚と共に六名、軍敗れて難義のをり、敵の頭人兩三名に、痍を負せたるのみにして、免果べうもあらざりしに、防守杵臼兩叟の、援兵によりて生ることを得たり。老兵の遠慮時に愜ふて、躬方の雜兵東西より、集ふて三四百名を、得たるも兩叟の軍

功なりき。と告るを季彦趙心は、推禁めつゝ膝を找めて、否とよ、彼折風歇て、輒く敵を撃退しは、己等の武勇にあらず、閑廂師父の貸給はりし、靈符を旗竿の梢に附しかば、其感應にぞあらんずらん。といふに成勝正忠は、爾也々々。と應つゝ、倶に閑廂和尙に向ひて、師父の法驗掲焉なる、彼をり怪風鎭りて、大敵を撃退けしは、只是師父の賜なり。有がたきまで忝き、法力を知るに足れり。と謝するを閑廂聞あへず、否とよ、彼禁風の祕符はしも、貧道の手より出すにあらず、二十稔ばかり前つ比、大和なる如々來禪師、東國に行脚のをり、當山に杖を駐めて、辱く一宿ありしかば、貧道則法問の序次をもて、禁風の符を乞稟しにき。その所以は、這地の氣候夏秋毎に風烈くて、五穀を損ふことあれば、檀越及土人の爲に、資助に做さんとてなりけり。如々來師父その志の、切なるを感得し給ひて、其詰朝別に臨みて、禪師則筆を染て、禁風の祕符一枚を、ものして貧道に取せ給ひにき。是よりの後夏秋毎に、風烈き日は件の靈符を、竿の梢に貼しつゝ、三門に出しゝかば、疾風嫗て鎭りて、甘羅一郡のみならず、隣郡他郷に至るまで、田圃に障りあることなし。法驗既にしるければ、今日防守杵臼等の出陣に、風尙烈しかりければ、貸て資助に做したりき。と說れて席上阿とばかりに、感嘆せざる者もなく、如々來禪師の事はしも、人の噂に聞たれども、思ひしよりは新なる、法驗こそ最有が

たけれ、と皆共侶に稱えたり。法譚既に果しかば、周晉比丘尼は膝を找めて、通能正義、韓錦兄妹にうち向ひて、その恙なきを祝して、這回義士等の補助によりて、魚丸を世に出さるべき、その歡びを演るにぞ、通能等も相慰めて、其貞實と年來の、道心堅固を稱賛す。是時既に更闌て、子二刻比になりしかば、正忠と成勝は、閑廂和尙に請ふて道く、夜は深て候に、師父と尼御前は退せ給へ。己等は尙明日の、隊配をこそ定むべけれ。といふに閑廂うち頷きて、幷はこころ得て候なり。周晉も退り給へ。出家人に相應しからぬ、軍議の席に幾まで賦居ん。魚丸は尙這里に侍りて、衆議を聽かば後學になるべし。誘々といそがせば、周晉比丘尼は應をしつゝ、義士等に向ひ、告別して、共に奧へぞ退りける。當下峰張通能は、正忠成勝に讓るやう、曩に神女の喩言に、都て衣裳の傳染香は、藥をもて燻すべし、といはれしを今よく思へば、幷も要ある言に似たり。高島家傳の仙丹は、瘨を痊し骨を繼ぎ、但死を起すのみならず、外道の幻術を行ふ者、或は妖怪變化なりとも、濺被れば立地に、對治すべし、といはれたる、石見介の口傳あり。今幸ひに其仙丹は、己等主僕倶に祕藏す。多く人に施したれども、今尙當用に足りぬべし。然れば明日の鬪戰に、又彼枉津の黑闇天、敵の陣中に顯出なば、這仙丹を濺被て擲ぐにしくことあらじ。と議するを正忠うち聞て、現究竟の神藥なれども、明日も亦野戰にて、

敵と入交るにあらざりせば、濺被るに便なからん歟。非除水彈兒などをもて、彈被まく欲するとも、一箇の敵にあらざれば、他が衆兵に遮られて、そも行ひがたかるべし。この理を思ひ給はずや。と議すれば成勝沈吟じて、开も亦拙策なきにあらず、こは令郎を煩さん。我仙丹を撮小なる、硝子の壺に藏めて、枉津天女に擲たば、壺は則虀粉になりて、仙丹必彼身に塗れん。蓋小十郎主の投石の精妙、在昔の三町礫に伯仲す、百發百中愆べからず。この義を憑奉る。といはれて正義阿容たる色なく、开は左も右ものことながら、拙き己が技藝をもて、克すべしとはいひがたかり。失あらば敵躬方に、笑るゝのみならず、良策忽地畫餅にならん。と辭ふを樅二郎推禁めて、然ないひ給ひそ、外に人なし。謙遜辭讓は、時にこそよらめ。といへば八重作も共にいふやう、成と成らざるは時運に在り。高手の掌より水は漏とも、小十郎主の投石において、陆む所なかるべし。憂る物は硝子の、小壺を日今得がたきのみ。といへば押給も然なり。と應へて、白猪の宿所にあるならば、彌生の雛棚に用ひたる、小なる硝子の、壜も幾歟侍りしかども、开も亦今はいふかひなし。と困じてせん術なげなるを、趙心法師慰めて、諸君子其義は心安かれ。閑廂師父の燒香毎に、用ひ給ひし香盒あり、硝子にして撮小なり。そをいぬる日不憶なく、野衲に賜りたりければ、藏めて行裹の中に在り。今弁出て見せまゐらせ

ん。所用に足らば幸ひならん。といひつゝ己が子舎に退きて、拿出し來ぬる其香盒を、見れば果して硝子にて、高纔に一寸許、上下圓くして握るに堪たり。成勝是を受戴きて、小十郎主、是よからずや。といひつゝ遞與すを正義は、受取つ握り見て、思ひしよりも程よく重かり。是に仙丹を籠給はゞ、擲にいよ〳〵好ん。といひつゝ返せば樅二郎、八重作押繪も得がたき珍器の、卽坐に出しを感嘆す。當下防守季彦は、正忠成勝等に向ひていふやう、仙丹の經驗、疑ふべからずといへども、是に加るに、如々來禪師の靈符をもてせば、玉に金を添るが如く、利益いよ〳〵莫大ならん。なれども對陣の始より、靈符を掲出しなば、枉津天女憚りて、顯出ざる事もあらん。機に臨變に應じて、宜しく計ひ給はずや。といへば正忠點頭て、勇士の大敵と戰ふに、仙丹祕符の冥助をのみ、憑は本意にあらねども、經驗兩ながらしるければ、いはるゝ如くせざらんや。と應て軈て成勝と、共に魚丸に稟すやう、軍議は聽せ給ふが如し。明日は手稠の闘戰に侍れば、君も出陣し給ひて、時運を試給へかし。といはれて魚丸怡悅に堪ず、恭〳〵しく答るやう、我身は乳臭き少年にて、大義を謀るに足らざるに、幸ひにして諸君子に、愛顧せられて明日の闘戰に、主將に倣りて出陣せんは、最猥き所行ながら、順をもて逆を討つ、二戰三戰に至るまで、名を遐邇に知らるゝ上は、死するとも怨なし。又只教に依んのみ。と然

しも雄々しく大人しき、答に趣心笑しげに、爾らば明日は己等も、腕子に從ひ奉らん。短夜なれば出陣の、準備をいそぎ給ひね。と稟すを成勝見かへりて、既に軍議の果たれば、明日の準備こそ緊要ならめ。といへば正忠も亦いふやう、明日は辰の初刻より、未の尾までを良辰とす、日の出る時候の出陣なるべし。衆皆この義をこゝろ得給へ。といふに樅二郎は應をしつゝ、時八等を呼ていふやう、汝等は疾退りて、躬方の士卒に陣觸せよ。其餘の要事は如此々々なり。奈我四短平も疾ゆきね。といはれて三箇の小頭人は、こゝろ得果てぞ退りける。話說分兩頭。

然程に鏑野伍六郎健宗は、枉津天女の冥助によりて、鬪戰十二分の勝を得て、最快く思ふものから、名たたる敵の頭人をば一箇だも撃捕得ず、反て躬方の頭人等は、深痍淺痍を負ぬもなければ、獨飽怒地しつ、躬方の士卒を集合て、降人每を牽せつゝ、鏑野の館にかへり來にける程に、枉津天女は幾間に歟、書院に立て俟て居り。健宗かくと聞知りて、戎衣脫捨衣改めて、養母大刀自と共侶に、慌忙き書院に出て、三拜しつゝ稟すやう、天女の神恩須彌より高く、然しも手剛き怨敵を、一時に撃走せしは、最愉快の造化なれども、遺憾きは敵の頭人、大江杜四郎、峰張柒六等はさら也、名ある賊徒を殺し得ず、反て躬方に金瘡兒多かり。この義迷惑仕りぬ。天女無量の神通力も、只猛風を起すのみにて、敵を殺すに疎なる歟。いかで明日の鬪戰

には、尙神力を施し給ひね。賊徒を遺なく撃果さば、能與村なる荒祠を、葺更て祭奉ん。急急如律令と啓すれば、枉津天女うち笑て、健宗、开はいはるゝ事ながら、約莫今日の闘戰に、名ある敵を撃捕得ず、躬方の頭人淺痍を負しは、我神力の薄きにあらず、信る者の薄き故なり。汝達はじめ諸頭人、泛々の士卒まで、一致して我を念ぜば、必也明日の闘戰には、我亦妙手段を施して、敵の奴們漏す者なく、鏖にすべきなり。倘又深信疎ならば、負たりとても我をな怨そ。彼阿甦寺なる奴們は、その志石の像く、彼身を守る神なきにあらねば、實に容易の敵にあらず。明日は夙めて出陣して、又犬掛にて敵を俟べし。その折我復出顯せん。腰輿をな忘そ。と言詳に宣示せば、健宗唯々と稽首して、神託うけばり奉りぬ。但躬方の頭人は、各其身に金瘡あり、明日の挊き不自由ならん。良藥あらば教給へ。と乞ふを枉津女聞あへず、开は我今宵加持すべし。痍ある者は明るを俟たで、悉皆平愈せん。然ばかり苦勞にすることかは。といはれて健宗喜悦に堪ず。大刀自は始より、水晶の數珠搨鳴して、專唱名祈念して在り、這時纔に頭を擡けで、おそる〱稟すやう、尊神託宣かくの如く、明日は怨敵伏誅せば、己等母子の幸のみならず、當郡士庶の大幸ならん。然る時は我大刀自に、百も二百も、千も二千も、壽命を授け給へかし。いかで〱、と念ずれば、健宗も亦頓首して、我等も所願相に同じ、利益

を仰奉る。と共に戴足禮拜して、やうやく頭を擡れば、今まで有つる枉津天女の、形貌は見えずなりにけり。當下健宗は、例のこととして怪まず、大刀自を先に立して、倶に後堂に退きて、牝島番太守實を召よせて、天女の示現云々、と宣示して又いふやう、明日は旦開に出陣せん。旨を苛三隈八等に、傳へて亟く陣衘せよ。勿論士卒に至るまで、深信竝て懈るべからず、懈る者は必斬ん。この義も隈なく下知すべし。と詞急迫しく吩咐れば、牝島番太は言承して、外面投て退りけり。左右その詰朝、健宗は戎衣して、近習を左右に従へつゝ、玄關に立出て、發兒に尻をうち掛れば、程なく集ふ諸隊の頭人、鍼侍隈八、鬼薊苛三を首にて、蛇塚眞武四郎、和十六牡丹五、竹木虎狼二、牛鬼黒九郎、舘内也刀齋、この他侍品二三十名、雜兵合せて五六百名、馬は口剛きを嫌ず、鎗は柄の長きを厭はず、處陜まで集合たり。然れば身に痍ある者、一夜の間に皆愈て、奔走障なしといへども、开が中に竹木虎狼二は、昨日和田正義の、投石に左の眼を傷られ、鬼薊苛三は、股なる深痍まだ乾ねば、馬に乘がたしと稟すの故に、健宗則件の二人を、留めて牝島番太を代とす。隊配都て昨日の如く、又彼腰輿を先に舁して、犬掛投てぞ打せける。軍裝の目覺きを見て、時彦是を評すらく、健宗漫に妖神を信仰して、三たび犬掛に出陣しぬるは、凶兆にあらざらんや。狗兒は狐狸を征する者也、彼枉津女は、狐

狸の、魅したるにあらずとも、妖怪は狗兒を憚る、和漢の先蹤疑ふべからず。況邪は正に克ず、勝負を未然に知るべしとぞいへりける。間話休題。這時阿蘇寺なる義士等は、軍兵五百餘名を三隊に分て、韓錦縦二郎望洋、和田小十郎正義、先隊の頭人たり。奈良櫻八重作次世を副とす。鶴脛奈我四郎、鴨脚短平等是に從ふ。二の隊は則、大江杜四郎成勝、峰張柒六郎通能頭人たり、勇婦押繪を副とす。見越松時八等是に從ふ。第三の隊は、部領の轍魚丸主將たり。左に防守筑四郎季彦あり、右に杵臼程榮入道趙心あり、和田十郎正忠を後見とす。魚丸這日の打扮は、春葱絨の身甲に、精好の奴袴を張せ、白羅に五彩の練糸をもて、菊花を縫做したる、戰袍をうち被り、金作の大刀に、彪の皮の尻鞘掛たるを、鷗尻に佩たりける。背に駝做す三羽の征箭、手に握持つ重籐の弓、連錢青毛の三歳駒に、雲珠鞍置て優にうち跨り、紫絢深絳の繁總、鈴々たる鑣兒の音、蹋々たる足掻の響、勇しからずといふ者なき、年は二八の美少年、顔は三月の桃花の如く、姿は秋山の丹楓に似たり。正に是幽谷の鶯兒、春を待得て枝に遷り、雪中の寒梅、東風に吹れて、開かまく欲するも、斯やと思ふ可なる。菊地部領の家の花號、十六葉の秋菊を、色妙に染做したる、三流の旌旗、夏の朝風に吹せつゝ、器械執たる數百の從兵、威勢宛虎彪の像く、隊伍齊々整々たり。爾る程に、鏑野の先鋒の頭人、牡丹五黑九郎也刀齋等

は、二百有餘の隊兵を從へて、又彼腰輿を先に舁しつ、這日も又犬掛なる、長畷の邊にて、端なく敵と撞見しけり。當下健宗の頭人等は、共に馬を騎出して、四下に响く聲高やかに、やをれ寺籠りの盜兒每、昨日に懲りず又推出て、虎の髯を曳まくするや。今日は饒さず、覺期をせよ。と罵りつ鎗を拈りて、喚いて蒐れば義兵の頭人、樅二郎、八重作等は怒に堪ず、憎むべし逆徒の廣言、天運既に循環して、主將の出陣を知らざるや。天罰思ひ知らせんず。と詈も果さず二騎相竝んで、衝出す鎗の刃尖を、受流しつゝ相戰ふ。牡丹五黑九郎也刀齋、ヤツタウ〳〵の猛者聲も、早苦しげに聞えしかば、二の隊に在りし蛇塚眞武四郎、鍼持隈八等是を見て、先陣倘敗なば、代りて敵を挫んず、と共に隊兵を拔る程に、健宗も亦阽みて、などて天女は出顯遲きや。今日も亦折を違ず、いかで冥助を垂給へ、と馬上に合掌默禱して、憶はず馬を拔れば、左右に從ふ近習の每、後陣の頭人牝島番太、有司等も共に後れじとて、主の後方に續きける。既にして黑九郎、也刀齋牡丹五は、義士の頭人樅二八重作、奈我四短平等と戰ふ程に、腕衰へ鎗の手亂れて、各淺痍を負ぬもなければ、流るゝ鮮血に身を染て、免れがたく見えたる折から、健宗の陣頭に、扛居たりける腰輿の裏より、一箇の天女閃き出、輿の上に立顯れて、手に拔持たる劍を抗て、揮廻かす程しもあらせず、和田小十郎正義は、躬方の頭人、樅二郎等の、

敵と戰ふを外に見つ、些騎を乘退けて、枉津や出ると張ふたる、那時遲し、這時速し、件の光景を見てしより、馬に拍打れ馳出て、右手に拿たる硝子の、小壺を擲つ修煉の精妙、寃違ず枉津女の、眉間に撲地と打中れば、礫の硝子煞と碎けて、内中に籠たる仙丹の、那身に塗被ると見えし。枉津は一聲叫びも果ず、身を仰反して仆るゝ時、持たる劍は手を離れ、背ざまに怪飛で、後方に馬を立て在りける、健宗の胸頭を、愕然と劈く刃の銳味、怪むべし健宗の、頭は蚤く地上に在り、軀も馬より落にけり。後に人知る、今這時、杵臼入道趙心は、靈符を早く拿出て、鞭の梢に挾みつゝ、敵の方に推向けて、如々來禪師の法號を、唱て冥助を祈ける。靈符仙丹兩ながら、響の物に應る如く、枉津の幻術行はれず、彼が持たる劍にて、健宗首を擊れける、意外の奇特に義兵の一軍、頭人士卒推竝て、感嘆の聲を合しける。是にぞ驚く逆徒の頭人、眞武四牡丹五黑九郎、也刀齋等は戰慄れて、敢戰ふ心なく、引外して逃まくするを、縱二郎八重作等は、逃しも遣らず大喝一聲、突出す鎗の刃尖に、黑九郎牡丹五は、或は胸前或は咽喉を、刺れて馬より落にけり。又也刀齋端高は、奈我四郎短平に、前後より刺挾れて、既に深瘡に堪ざれば、是も敢なく擊れけり。那が中に、隈八と眞武四郎は、蚤くも路を橫ぎりて、逃るを透さず追蒐來ぬる、義兵の頭人勇男女、是則別人ならず、峰張通能と押絡なり。遂し

返せ、と呼かけて、間近く追逼るを、隈八眞武四郎見かへりて、敵は男女二人に過ぎず、猛しといふとも續く兵なし、結果けて徐にいなん。と呟きつ共侶に、馬を其方へ乘返せば、程しもあらせず通能押繪、馬を飛して追蒐來つ、健氣なり鐡持蛇塚、面は豫認たり。其里な退そ。と呼はりて、通能は九尺の短鎗、押繪は八角の棒をもて、撃んと找めば隈八眞武四、物々しや。と大刀拔翳して、鬪戰いまだ十合に至らず、隈八は通能に、持たる刃を反落されて、剩右の肩尖を、下高に刺れしかば、忽地撻と落馬して、一霎時は起も得ざりける。眞武四郎はこの光景に、驚怕れて逃まくするを、押繪は透さず八角の、棒もて天窻を礙と撲つ、勇婦の手裏、迅雷の、墜蒐るに異ならず、眞武四郎は半身を、裂れて馬さへ平張けり。浩處に時八は、後走に來にければ、通能叠く聲をかけて、やよや其奴を縛らずや。といふに時八こゝろ得て、起んと蠢く隈八を、押えて索をかけにけり。然る程に、健宗の後陣の頭人、牝島番太守實は、思ひがけなき凶變に、驚き呆れてわくよしもなく、四五箇の近習と共に、降參降參。と喚はりて、敵に近づき來ぬる程に、奈我四短平立向ひて、雜兵して皆綁せて、數珠繫ぎにぞしたりける。爾る程に、正忠季彦趙心は、魚丸を守護しつゝ、成勝と二隊を合して、馬を早めて來にける程に、通能は時八に、生拘隈八を牽せ來つ、押繪は撲裂たる眞武四郎の首を、合して藤蔓もて縢

しを、實撿に入れなどす。世話に傳へて、蛇を殺すに、克其首を摧ざれば、又生て祟すといへば、不用意也とも押領の勇悍、蛇塚眞武四郎を擊捕に、克其天窗を撲裂しは、寔に其義に稱へりとて、人皆笑局に入りにける。この他韓錦奈良櫻、弟兄の擊捕たる、牡丹五黑九郎の首級、又奈我四郎と短平の、相擊にしたる、也刀齋の首も皆拿出て、共に實撿に入れしかば、魚丸は其功績の、孰も勝れしを譽させらる。就中和田正義の、軍功を第一番とすべし。出沒不測の妖婦枉津を、只一礫に打殪したる、修煉は和漢に儔稀なり。彼亡骸の有や無や、索ねて見ずや。と仰すれば、正義則承りて、隊兵を將て腰輿の邊を、隈なく索果て稟すやう、枉津の仆れし邊には、只健宗の首あるのみ。且故たる木像の三四箇に碎たるあり。又枉津女の持る劍は、長二尺五六寸ならんと思ひし　、その劍はあることなく、九寸五分なる短刀の、其頭に遺てありしかば、鞘さへ拾ふてもてまゐりぬとて、共に取出て見せまゐらすれば、魚丸はいふもさらなり、茲に集ひし諸頭人、駭然たらずといふ者なく、尚疑ひは解ざりける。幵が中に通能は、正義等に向ひていふやう、和殿も大抵覺あるべし。昨日能與の池邊なる、賤婦の說を思ふに、彼荒社に在りと聞えし、黑闇天の木像は、飛去りて鏑野の舘に在り。大刀自母子を資し也。といへば亦樅二郎も、押領と共に短刀を、列々と見ていふやう、這短刀は豫知る、鏑野の什物

にて、鏑箭と名づけたる、傳來は箇様々々、如此々々の聞えあり。始は己是を知らず、範的に誣られて、冤枉の牢に繋れしも、この短刀の故なりき。今は枉津の手に亘りて、三尺の劍と見えしは、亦是枉津の幻術にて、其術敗れて殪るゝ時、短刀は彼手を離れて、怪飛で健宗の、頭顱を撃落しゝは、怪きに過ぎたれども、汝に出て汝に返る、大刀自夫婦母子の悪報、是に至りて知るべき而已。といふに衆皆有理と應て、齊一嗟嘆したりける。既にして健宗の、首實撿果しかば、正忠則魚丸に稟すやう、妖怪對治の軍功は、獨正義のみならず、彼仙丹の奇効に在り。其仙丹をまるらせたる、大江峰張の大功は、正義等の上にあるべし。恩賞は評議の上、異日の御制度に依るべき歟。約莫偶人の障碍を做すこと、異國にも先蹤あり。奇事記にもやありつらん、今は正可に覺ねども、洛陽橋なる石の偶人、夜々化て小兒に做りて、人に戯れしこと見えたり。天朝昔相撲なる、妖地藏も亦、日を同くして語るべし。然れば黑闇天の木像も、其類にこそ候はめ、速に燔棄て、妖氣を絶にしくことなし。又鏑箭の短刀は、既に是不吉の物也、是をも火中に燔爛して、烏有に做さん事勿論に候べし。それよりも倘いそぐべきは、鏑野の館に推寄せて、大刀自をはじめ奴們を、誅して御本意を遂させ給へ。と詞急迫しく促せば、魚丸趙心季彥等、一議に及ばず其議に任せて、黑闇天の敗木像と、鏑箭の短刀は、正義宜しく

奉行ふべし。この他生拘兒と、健宗以下の首每は、時八奈我四郎短平等奉りて、後陣に在りて牽もて來よとて、一の隊二の隊はじめの如く、隊配してぞ推寄らる。有斯し程に、鏑野の城館には、狂津天女の術敗れて、健宗橫死の事までも、逃かへりける雜兵の、告るによりてはじめて知る、大刀自以下留守の頭人、鬼薊苛三、竹木虎狼二、有司等に至るまで、胸を潰しつ怕惑ひて、落支度をするのみなるに、單大刀自は從はず、猶籠城して、擊れし者の、弔軍をしつべしとて、撓むこゝろはなかりしを、苛三虎狼二有司等さへ、倶に諫誘ゆれども、大刀自は些も聽かず、怒罵るのみなれば、主僕忽地不和になりつ、苛三虎狼二有司等は、陽には同意の面色して、大刀自に由斷させて、透を窺ひ金銀を、掻攫ひて逃ばやとて、示合する程しもあらず、魚丸の大軍、數百名、推寄せ來つと聞えしかば、苛三虎狼二等は計較違ひて、せん術のなき隨に、只得大刀自を刺殺して、寄隊に降參すべしとて、不忠の刃を研たりける。旣にして義兵の頭人、和田正義韓錦樅二郎、奈良櫻八重作等は、先鋒の軍兵二三百名を從へて、眞先に找み來つ、鏑野の館を挿稠て、攻潰んとて競ふ程に、忽地前門の塀裏より、竿の頭に括著たる、笠を三四箇出しけり。こは近世兵家の故實にて、降參の照据なれば、正義樅二郎等は、士卒を禁めて敢動かず、後陣へかくと告げしかば、魚丸は諸頭人等と共侶に、隊兵を率て來ぬる程に

逆徒は前門を颯と開きて、士卒僅に二三十名、左右二側に跪居てぞ、則寄隊を迎ける。然れども正義縦二郎等は、倘詭の計に、あらずやと思ふをもて、八重作等と共侶に、士卒を將て找入りて、內外隈なく涉獵しに、伏兵などはあることなく、敵兵多く落亡て、目今遺留る者、四五十名には過ざりけり。然程に魚丸は、左右に趙心季彥を從へて、正忠成勝、通能押繪等と共侶に、馬を前門に騎入れて、玄關にうち登れば、鏑野の有司出迎へて、軈て書院に請待す。然れば寄隊の軍兵は、推續きつゝ稠入りて、四下を警衞せざるもなく、又時八奈我四郎短平は、生拘兒を牽せ來て、倶に書院の庭に在り。當下鬼薊苛三、竹木虎狼二は、一箇の首函を携て、有司四五名と共侶に、檐廊より上り來つ、おそる／＼訴稟すやう、魚丸君上に在す。臣等御武德を怖畏て、降參せまく欲するに、單大刀自は不の字をいふのみ、罵り狂ふて已ざれば、只得首を賜りて、實撿に備侍り。いかでこの勸賞に、命を饒させ給へかし。と啣言がましく願ふにぞ、有司等は當郡の戸帳と、金銀米粟を錄しゝ、大册子を相捧げて、共侶に稟すやう、臣等は大刀自を害したる者に候はず。なれども寸功あらざりせば、免れがたしと思ふをもて、第一番の要緊なる、簿帳を呈閱仕りぬ。いかで宥免あれかし。と弱果て陳ずるを、魚丸聞つゝ左右を見かへり、和田大江の兩兒、意見はいかに。と問れて正忠判ずらく、抑苛三隈八の奸虐な

る、年來範的の惡を資けて、不義の利を欲せざることなく、範的不慮に健宗に、繫果されしを怨とせず、反て冤家に從ふて、又他を資たる、其罪既に極れり。然ればこそあれ天の冥罰、隈八は陣中に生捕れ、苛三は虎狼二と、留守に在りて悔もせず、既に事の急なるを見て、主の養母大刀自を刺殺して、己等の首を續まくす。實に是、鬼薊の鬼畜たる、虎狼二の虎狼たる、恩を思はず義を知らず、五逆十惡の罪人なれば、遄く彼身を八劒にして、亂臣賊子を懲し給へ。兵毎其奴等を牽出して、共に死刑に行はずや。と烈しき下知に苛三虎狼二、驚怕れて逃まくするを、警固の雜兵走蒐りて、曳摺下して結縛しかば、八重作時八撿使に立て、軈て隈八苛三虎狼二を、外面に牽出して、掟の隨に行ひつ、首を實撿に入れしかば、健宗大刀自の首級はさらなり、其隊の頭人牡丹五眞武四郎、黑九郎也刀齋、竝に苛三隈八、虎狼二の首遺もなく、皆串明亭に梟させらる。又黑闇天の木像と、鏑箭の短刀は、正義既に奉りて、共に燔棄て灰も留めず。是より先に降參の有司等と、庭に牽れし番太近習は、苛三虎狼二隈八の、刑戮せらるゝを見も聞もして、顏色都て藍の如く、只平伏て在りけるを、季彥と趙心は、共に佛意もて、魚丸に聞上て、正忠成勝に乞ふ由あり。現殘に克殺を去るは、和漢仁君の善政なれば、正忠成勝は已ことを得ず、件の有司等と牝島番太は、各耳を剕棄て、倶に廢兒に做す

べし。又生捕の近習等は、背を一百鞭撻せて、共に追放すべし。と掟らる。況名もなき雜兵は、皆郊外に追退け、又大刀自に仕たる女房は、各其親里にかへし遣しつ。這日亦魚丸は、趙心法師に返却の靈符を齎して、阿甦寺に遣して、閑廂和尚と、實母周晋比丘尼に、怨敵對治のよしを告知らせ、次の日倉廩を開かせて、窮民を賑し、士卒に物を賜ふこと各差あり。且曩に兵粮軍要金、戎衣器械を調進したる、良農巨商を召よせて、一倍の賞祿ありしかば、皆千歳を唱けり。爾後又魚丸は、防守季彦と、韓錦縱二郎を使として、越後なる長尾景春に、怨敵對治のよしを告げしかば、景春其大功の、速なるを感心のあまり、異日京都將軍に聞上て、爲に恩賞を乞稟すにより、隨即魚丸を部領の郡司に補任して、本領安堵の御敎書を下されけり。是により魚丸は、小名を改めて、部領郡領武魚と稱せらる。然れば今番の歡びは、只是のみにあらず、扇谷朝興も、先非を悔て和睦しつ、武魚と好を結ぶに及びて、武茂の舊領なりける、莊園十餘箇所を返されけり。こは廿羅の外にして、隣郡及信濃に在り。昔年武茂滅亡の時、逆臣範射、媚て朝興に屋贈りしより、扇谷の所領になりしを、其隨返却せられし也。こは孝感の致所歟。武魚は徴ずして、富一倍を領すれば、阿甦寺に坊料を加増して、親同胞並に、菊池武俊夫妻の爲に、追薦の佛事、年毎に間斷あらず。又能興村なる、荒





社を葺更て、且昔歳大刀自に棄られたる、辨才天の木像を、彼池より撈出させて、故の如く是を祭らる。爾後能與院を再興して、堂舍落成の時、寺料も亦舊きに因て、其法燈を續せけり。然れば和田正忠を家臣として、季彥遒心を老黨とす。韓錦樅二郎望洋、和田小十郎正義兵頭たり。奈良櫻八重作次世を近習頭とす。この他見越松時八、鶴脛奈我四郎、鴨脚短平等、受る所の俸祿少からず。翊亦郡領武魚の純孝なる、實母周晉比丘尼の爲に、閑居の室を造出して、老實なる女房と、女童幾名歟隷在らせて、朝夕安否を問ざることなし。釆地隈なく治りしかば、武魚則季彥の女兒、棧手を內室とす。棧手は素より孝女にて、容止も醜からず、且其父季彥の孤忠なる、菊池同族の舊臣なり。又部領氏も、菊池と同姓の好あれば、正忠等料稟して、今合巹の歡びをなせり。這折をもて、成勝通能媒妁して、韓錦の女弟押繪を、和田正義に妻せけり。こは武勇力藝、一對の夫婦なれば、世に復多く得がたき所、人皆是を羨みけり。しかれども正義の父正忠は、素より紈袴を欲せず、職を辭して妙義に還んといふ。又杵臼趙心は桑門也、今さら俗務に預るべくもあらず、身の暇を賜りて、阿蘇寺に閑居すべし。といひしを、武魚一切是を饒さず、我身倘弱冠なるに、忠臣賢者の補佐にあらずは、今戰國の世に立がたかり。枉て留り候へとて放つべくもあらざりける。开が中に成勝通能は、一時遭際の旅客なれ

ども、義に依る所已ことを得ず、悄地に武運を試しのみ、幸ひにして功なりたればとて、告別して去らまくしけるを、武魚捘手韓錦同胞、季彥趙心和田父子、別を惜みて留る程に、享祿は四年にて盡て、紀改りて蒼々たる、天文にぞなりにける。案下某生重說。末朱之介晴賢は、彼夜叉丏人盆九郎を翼にして、乾父吾足齋の宿所に潛入り、吾足が貯たる金子はさらなり、義女弟なる晩稻さへ、搔攫まく欲しょに、其計較齟齬ふて、盆九郎は吾足齋に、痍を負せけるのみにして、其門邊にて成勝通能に搦捕れ、彼身は庭なる乾井に躱れて、晩稻の抂死吾足齋の懺悔の條々、九四郎阿鍵小忠二等の來會の顚末を、心ともなく聞知りつ、外視を窺ひ潛出て、松に樹傳ひ塀を乘て、逃去らまくしける程に、通能に見出されて、席鍼の鉄鋧を、打出しける郤舍にて、蚤く外面に飛下りて、足に信して逃去るものから、素より無類の丏人なれば、いまだ遠くは立去らず、甲夜に來ぬる路傍にて、物の陰に隱措たる、行裹と菅笠を、拿出しつゝ思ふやう、今より周防に赴くに、奶の養たる五兩金にて、盤纏に足るべくもあらず、先や三池郙に赴きて、宿六阿加々を哄誘して、些の盤纏をものせんず、と猛可に計較む奸智の本性、其里より路を横ぎりて、彼郙投ていそぎけり。畢竟朱之介が其詰朝、宿六を哄訪ふて、後の話說甚麼ぞや。开は又卷を更めて、且下回に、解分るを聽ねかし。

近世説美少年録下巻終

大正二年六月十四日印刷
大正二年六月十七日發行

有朋堂文庫
近世說美少年錄下卷（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）



